奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

吉備池廃寺発掘調査報告

― 百済大寺跡の調査 ―

2003
奈良文化財研究所

序

吉備池廃寺の発掘調査報告が完成しました。吉備池は、桜井市吉備にある江戸時代に築造された溜池ですが、その南岸には、二つの大きな土壇が向かい合うように並んでいます。しかし、調査以前には、これらが寺院の金堂と塔にあたるとは、誰も想像さえしていませんでした。ただ、この付近では以前から瓦片が見つかっており、瓦窯跡とする見解や、地名に基づき、吉備氏の氏寺としての吉備寺を想定する説が提示されていました。性格についてははっきりしないものの、遺跡としては周知されていたのです。

奈良盆地には数多くの溜池がありますが、それらは計画的な保全整備がおこなわれています。吉備池でも北岸から護岸工事が進められ、1997年には、それが瓦の集中する部分におよぶこととなりました。そこで、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会が共同で発掘調査をおこなったところ、この遺跡が７世紀の巨大な寺院跡であることが明らかとなりました。吉備池廃寺の発見です。

共同調査は、それから2001年まで５年間にわたって実施し、金堂・塔・回廊・中門・僧房などの遺構を確認しました。一方、これと並行して桜井市教育委員会・桜井市文化財協会が単独でおこなった発掘調査でも、僧房をはじめとする遺構を検出し、寺院周辺の状況が次第に判明しつつあります。そして、関係機関の努力が結実して、吉備池廃寺は2002年３月に国の史跡指定を受け、将来にわたって保存できるようになりました。

調査で明らかになった金堂基壇は間口37m・奥行約25m・高さ約2m、塔基壇は一辺約32m・高さ約2.8mという、当時としては破格の大きさです。とくに塔の平面規模や高さは、新羅の皇龍寺九重塔に比肩するものといえるでしょう。そうした堂塔の規模や、瓦の年代と出土状況などからみて、吉備池廃寺が、639年に創建された「百済大寺」にあたることは確実と思われます。６世紀末に、最初の本格的寺院である飛鳥寺を建立してから半世紀ほどのうちに、このような巨大な仏寺の建設を可能とした技術上の進歩、あるいはそれを必要とし

た政治的・宗教的な理由とは、いったい何だったのでしょうか。

従来、古代の建築については、法隆寺をはじめとする７世紀後半以降の現存建築から、発掘した遺構の上部構造を推定してきました。しかし、吉備池廃寺のような巨大な堂塔の設計には、中小の建物の単純な拡大ではとうてい対応できない要素があったようです。塔に関していえば、私たちはこれまでに、東大寺西塔・藤原京大官大寺塔の発掘資料を得ています。今回、それに吉備池廃寺（百済大寺）塔、さらには最近発掘された平城京大安寺西塔の資料を加え、古代における巨大建築の再吟味が可能となったわけですが、本書は、こうした面においても多くの問題を提起するものとなるでしょう。

なお、このたびは、調査終了後約２年間という短期間のうちに、報告書の出版にこぎつけました。私どもにとって、これは大きな成果です。遺跡の重要性や保存措置の緊急性などの要因も作用したとはいえ、ひとえに発掘担当者ならびに報告書執筆者・編集者の努力の賜といわねばなりません。あわせて、当研究所の事業に対し、側面から惜しみない援助をいただいた奈良県教育委員会・桜井市教育委員会・桜井市文化財協会に、心から御礼申し上げます。

最後に、本報告書を基礎資料として、今後の研究が大きく飛躍することを願うとともに、文化財保護が少しでも前進することを期待いたします。

2003年３月

奈良文化財研究所
所長　**町田　章**

吉備池廃寺発掘調査報告

── 百済大寺跡の調査 ──

目　　次

第Ⅰ章　序　　言 …… 1

1　調査の経緯 …… 1

2　調査組織 …… 3

3　報告書の作成 …… 4

第Ⅱ章　調　　査 …… 6

1　調査地域 …… 6

A　遺跡の位置 …… 6
B　既往の調査 …… 9
C　測　量 …… 11
D　地区割り …… 12

2　調査の概要 …… 14

A　第81−14次調査（金堂） …… 14
B　第89次調査（塔・南面回廊） …… 15
C　第95次調査（南面回廊・西面回廊） …… 16
D　第105次調査（僧房・東面回廊・金堂） …… 17
E　第111次調査（中門・僧房） …… 18
F　桜井市第９次調査（僧房） …… 19
G　桜井市第11次調査（北外周部） …… 20
H　桜井市第12次調査（南外周部） …… 20

3　調査日誌抄 …… 21

A　第81−14次調査 …… 21
B　第89次調査 …… 23
C　第95次調査 …… 25
D　第105次調査 …… 26
E　第111次調査 …… 29
F　桜井市第９次調査 …… 31
G　桜井市第11次調査 …… 32
H　桜井市第12次調査 …… 33

第Ⅲ章　遺　　構 …… 34

1　遺跡の立地と地形 …… 34

2　遺構各説 …… 38

A　金堂SB100とその周辺 …… 38
B　塔SB150とその周辺 …… 46
C　中門SB320とその周辺 …… 51
D　南面回廊SC160とその周辺 …… 53
E　西面回廊SC200とその周辺 …… 57
F　東面回廊SC300とその周辺 …… 61
G　僧房とその周辺 …… 62
H　北外周部の遺構 …… 70
I　南外周部の遺構 …… 72

第Ⅳ章　遺　　物 …… 76

1　瓦　　磚 …… 76

A　軒　瓦 …… 76
B　道具瓦など …… 90
C　丸　瓦 …… 93
D　平　瓦 …… 101

2　土 器 類 …… 122

A　土　器 …… 122
B　埴　輪 …… 138

3　石製品・土製品・金属製品ほか …… 143

A　石製品 …… 143
B　土製品など …… 145
C　金属製品 …… 146
D　木製品 …… 147
E　動・植物遺存体 …… 148

第Ⅴ章　考　　察 …… 149

1　寺名比定とその沿革 …… 149

A　吉備池廃寺と百済大寺 …… 149
B　百済大寺・高市大寺の沿革 …… 150
C　百済大寺の所在 …… 153
D　高市大寺の所在 …… 155

2　伽藍配置の復元 …… 162

A　伽藍の軸線と寺域 …… 162
B　伽藍中心部の復元 …… 165
C　伽藍配置の特質 …… 169
D　残された課題 …… 173

3　堂塔の建築的考察 …… 178

A　建物造営尺の検討 …… 178
B　金　堂 …… 178
C　塔 …… 183
D　中門と回廊 …… 185
E　僧　房 …… 188

4　出土瓦をめぐる諸問題 …… 193

A　創建瓦の系譜と年代 …… 193
B　同笵瓦出土寺院 …… 195
C　出土瓦の量的検討 …… 201
D　安倍寺・額田寺との関係 …… 205
E　その後の吉備池廃寺 …… 213
F　瓦からみた吉備池廃寺と百済大寺 …… 214

5　藤原京条坊と寺地 …… 220

A　藤原京の京域と道路規格 …… 220
B　東西道路の復元 …… 221
C　南北道路の復元 …… 224
D　吉備池廃寺の寺地と条坊 …… 227

第Ⅵ章　結　　語 …… 231

1　遺　　構 …… 231

2　遺　　物 …… 232

3　吉備池廃寺と百済大寺・高市大寺 …… 233

4　今後の課題 …… 234

English Summary …… 237

図　　面

図　　版

図　　面

PLAN			対応図版
1	吉備池廃寺の地形と伽藍復元		
2	平面図の割り付け		
3	金堂とその周辺	第81−14次・第105次東区	PL. 4 ～ 7
4	塔とその周辺	第89次・第95次西区	PL. 8 ～11
5	中門とその周辺	第111次南区	PL. 12～14
6	南面回廊とその周辺	第95次南区・第89次	PL. 15～16
7	西面回廊とその周辺	第95次西区	PL. 17～19
8	東面回廊とその周辺	第105次東区・第81−14次	PL. 20～21
9	僧房とその周辺（1）	第111次北区・桜井市第 9 次	PL. 22～26
10	僧房とその周辺（2）	第105次中央区・池内調査区	PL. 27～29
11	北外周部（1）	第105次西区	PL. 31
12	北外周部（2）・南外周部	桜井市第11次・同第12次	PL. 30・32

図　　版

PL.			
1	遺跡の全景と調査区		集成写真　上が北
2	遺跡の鳥瞰（1）		1．遺跡遠景　北から
			2．遺跡遠景　南から
3	遺跡の鳥瞰（2）		1．遺跡遠景　東から
			2．遺跡遠景　西から
4	金堂とその周辺（1）	第81−14次	1．金堂SB100全景　北から
			2．金堂SB100全景　西から
5	金堂とその周辺（2）	第81−14次	1．金堂SB100全景　西から
			2．金堂基壇北辺　東から

PL.

6	金堂とその周辺（3）	第81−14次	1．金堂基壇の断面　北西から
			2．金堂基壇西南隅　西から
			3．金堂基壇西辺　北から
			4．金堂基壇掘込地業の排水溝　北西から
7	金堂とその周辺（4）	第105次 第81−14次	1．金堂基壇東北隅と基壇外周の溝　北から
			2．金堂基壇東辺と砂利敷（第81-14次）東から
			3．金堂基壇上面（第81-14次）東から
			4．金堂基壇外周の溝の断面　東から
8	塔とその周辺（1）	第89次	1．塔SB150全景　北から
			2．塔SB150全景　右が北
9	塔とその周辺（2）	第89次	1．塔心礎抜取穴　南西から
			2．塔基壇西辺　西から
10	塔とその周辺（3）	第89次	1．塔基壇西半部の断面　南西から
			2．塔基壇南半部の断面　南西から
			3．塔基壇東半部の断面　北から
11	塔とその周辺（4）	第89次	1．塔基壇南辺　東から
			2．塔基壇南方のトレンチ　北から
12	中門とその周辺（1）	第111次	1．調査区全景（手前が中門SB320）南から
			2．中門SB320全景　上が北
13	中門とその周辺（2）	第111次	1．中門SB320全景　西から
			2．三条大路北側溝SD180　西から
14	中門とその周辺（3）	第111次	1．中門SB320全景　南から
			2．中門西辺の雨落溝　北西から
15	南面回廊とその周辺（1）	第95次	1．調査区全景　南から
			2．南面回廊SC160　西から
16	南面回廊とその周辺（2）	第95次 第89次	1．南面回廊南雨落溝と東西塀SA181　東から
			2．南面回廊北雨落溝と建物SB190　東から
			3．南面回廊SC160（第89次）北から
			4．南面回廊北雨落溝と東西塀SA182　西から
17	西面回廊とその周辺（1）	第95次	1．調査区全景　西から
			2．西区全景　上が北
18	西面回廊とその周辺（2）	第95次	1．西面回廊SC200西雨落溝　北から
			2．西面回廊SC200　西から
19	西面回廊とその周辺（3）	第95次	1．斜行溝SD215　西から
			2．斜行溝SD215　南西から
			3．東西溝SD226と東西塀SA227　東から
			4．西南区全景　東から

PL.

20	東面回廊とその周辺（1）	第105次	1．東区全景　東から
			2．東区北トレンチ全景　西から
21	東面回廊とその周辺（2）	第105次	1．東区南トレンチ全景　西から
			2．東面回廊SC300西雨落溝　北から
			3．東面回廊西雨落溝の瓦出土状況　北から
22	僧房とその周辺（1）	第111次	1．調査区全景（手前が僧房SB340）北から
			2．僧房SB340全景　東から
23	僧房とその周辺（2）	第111次	1．僧房SB340　北東から
			2．僧房SB340　西から
24	僧房とその周辺（3）	第111次	1．僧房SB340柱穴断面　西北隅柱　南から
			2．僧房SB340柱穴断面　北側柱西から6　東から
			3．僧房SB340柱穴断面　北側柱東から5　南から
			4．僧房SB340柱穴断面　南側柱西から5　北から
			5．僧房SB340柱穴断面　東北隅柱　西から
			6．僧房SB340柱穴断面　東南隅柱　西から
			7．三条条間路南側溝SD350　東から
25	僧房とその周辺（4）	桜井市第9次	1．僧房SB400全景　北から
			2．僧房SB400全景　東から
26	僧房とその周辺（5）	桜井市第9次	1．僧房SB400　北から
			2．僧房SB400柱穴断面　東北隅柱　東から
			3．僧房SB400柱穴と柱根　北側柱東から6　北から
27	僧房とその周辺（6）	第105次	1．中央区全景　南から
			2．中央区全景　南から
28	僧房とその周辺（7）	第105次	1．僧房SB260　東から
			2．僧房SB260　南西から
29	僧房とその周辺（8）	第105次	1．池内調査区東端トレンチ　東から
			2．池内調査区東端トレンチ断面　北東から
30	北外周部（1）	桜井市第11次	1．調査区全景　上が北
			2．調査区全景　北東から
31	北外周部（2）	桜井市第11次 第105次	1．南北溝SD422と切り通しSX421　北から
			2．掘立柱建物SB423　南東から
			3．桜井市第11次調査区全景　上が北西
			4．竪穴住居SB426　東から
			5．第105次調査西区全景　南から
32	南外周部	桜井市第12次	1．調査区全景　南から
			2．調査区全景　北から
			3．東西溝SD441　南から
			4．東西溝SD441　西から
			5．東西溝SD442　西から

PL.

33　創建軒瓦
34　軒丸瓦（1）
35　軒瓦の同笵資料
36　軒丸瓦（2）
37　軒丸瓦（3）
38　軒平瓦（1）
39　軒平瓦（2）・道具瓦
40　丸　瓦（1）
41　丸　瓦（2）
42　平　瓦（1）
43　平　瓦（2）
44　平　瓦（3）

PL.

45　平　瓦（4）
46　平　瓦（5）
47　平　瓦（6）
48　平　瓦（7）
49　平　瓦（8）
50　平　瓦（9）
51　土　器（1）
52　土　器（2）
53　埴　輪
54　石製品・土製品・金属製品
55　木製品・動物遺存体

表

Tab.

1　吉備池廃寺周辺における既往の発掘調査 …… 9
2　吉備池廃寺の3級基準点・水準点測量成果 …… 11
3　調査次数と大・中地区 …… 13
4　地区割りの起点の座標値 …… 13
5　発掘調査一覧 …… 14
6　遺構番号の対照 …… 19
7　百済大寺・高市大寺の沿革 …… 151
8　検出遺構の位置（1）…… 163
9　遺構の方位の振れ …… 163
10　検出遺構の位置（2）…… 165
11　堂塔の推定座標 …… 165
12　堂塔間の距離 …… 166

Tab.

13　金堂等の基壇規模と縦横比 …… 181
14　回廊の梁行寸法と基壇・雨落溝の関係 …… 186
15　文献史料にみえる僧房の規模 …… 189
16　吉備池廃寺と飛鳥藤原地域の瓦出土量 …… 203
17　安倍寺の軒丸瓦型式別出土点数 …… 209
18　関連条坊座標値一覧表（1）…… 222
19　条坊遺構の関数化 …… 223
20　関連条坊座標値一覧表（2）…… 225
21　吉備池廃寺周辺の条坊道路の推定 …… 227
22　吉備池廃寺四周の条坊復元 …… 227

挿　　図

Fig.

1　飛鳥・藤原京周辺の遺跡 …… 7
2　吉備池廃寺周辺の地形 …… 8
3　吉備池廃寺と周辺の調査区 …… 10
4　吉備池廃寺の調査区と地区割り …… 12
5　第81-14次調査区 …… 21
6　発掘風景（第81-14次）…… 22
7　実測風景（第81-14次）…… 22
8　探査風景（第89次）…… 23
9　第89次調査区 …… 23
10　現地説明会（第89次）…… 24
11　土層転写風景（第89次）…… 24
12　発掘風景（第95次）…… 25
13　第95次調査 南区・西南区 …… 25
14　第95次調査 西区 …… 26
15　第105次調査 西区・中央区・池内調査区 …… 27
16　第105次調査 東区 …… 28
17　現地説明会（第105次） …… 28
18　現地説明会（第105次） …… 28
19　発掘風景（第111次） …… 29
20　第111次調査 南区 …… 29
21　第111次調査 北区 …… 30
22　現地説明会（第111次） …… 30
23　現地説明会（第111次）…… 30
24　撮影風景（第111次） …… 31
25　土層転写風景（第111次）…… 31
26　桜井市第９次調査区 …… 32
27　発掘風景（桜井市第９次）…… 32
28　桜井市第11次調査区 …… 33
29　現地説明会（桜井市第11次）…… 33
30　桜井市第12次調査区 …… 33

Fig.

31　吉備池廃寺周辺地形図 …… 34
32　吉備池廃寺周辺の地形と条里 …… 35
33　吉備池廃寺周辺の旧地形復元 …… 37
34　金堂基壇掘込地業の断面図（基壇西辺）…… 39
35　金堂基壇と外周の溝の断面図（基壇北辺）…… 40
36　掘込地業の排水溝SD102 …… 42
37　金堂基壇東辺の土層図 …… 43
38　金堂基壇掘込地業と吉備池堤防の断面 …… 44
39　塔基壇東辺の断面図（土壇上東トレンチ）…… 46
40　塔基壇南辺の断面図（土壇上中央トレンチ）…… 47
41　塔基壇西辺の断面図（土壇上西トレンチ）…… 48
42　塔の調査区と基壇規模…… 50
43　中門SB320の石組雨落溝 …… 52
44　南面回廊石組雨落溝SD161 …… 54
45　南面回廊SC160付近の土層図と平面図 …… 56
46　西面回廊SC200付近の土層図 …… 58
47　斜行溝SD215・210の断面図 …… 59
48　東面回廊SC300付近の土層図 …… 61
49　吉備池廃寺創建期の整地 …… 63
50　僧房SB340東妻の柱穴断面図 …… 64
51　僧房SB400柱穴断面図 …… 66
52　僧房SB260柱穴断面図 …… 67
53　SD350断面図 …… 67
54　SD441とSD442 …… 72
55　東西溝SD441・442間の土層図 …… 72
56　軒丸瓦Ⅰ型式（１）…… 79

Fig.

57 軒丸瓦Ⅰ型式（2）…… 80
58 瓦厚とカット面長の相関 …… 81
59 軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式 …… 82
60 軒平瓦Ⅰ型式 …… 83
61 軒平瓦Ⅰ型式の狭端部 …… 85
62 軒平瓦Ⅲ型式と軒平瓦の平瓦部 …… 87
63 隅軒平瓦 …… 88
64 創建軒瓦の型式別分布 …… 88
65 面戸瓦・鬼瓦・磚・土管など …… 91
66 熨斗瓦 …… 92
67 丸瓦実測図（1）…… 94
68 丸瓦実測図（2）…… 95
69 丸瓦実測図（3）…… 96
70 丸瓦実測図（4）…… 97
71 丸瓦実測図（5）…… 99
72 平瓦１類実測図（1）…… 102
73 平瓦１類実測図（2）…… 103
74 平瓦１類実測図（3）…… 104
75 平瓦１類拓影（1）…… 105
76 平瓦１類拓影（2）…… 106
77 平瓦１類拓影（3）…… 107
78 平瓦１類拓影（4）…… 108
79 平瓦１類拓影（5）…… 109
80 平瓦１類拓影（6）…… 110
81 平瓦２類Ａ拓影 …… 112
82 平瓦２類Ｂ拓影 …… 113
83 平瓦２類Ｃ拓影 …… 115
84 平瓦３類Ａ･Ｂ拓影 …… 117
85 平瓦４類Ａ･Ｂ拓影 …… 118
86 平瓦５類拓影 …… 119
87 金堂・塔周辺出土土器 …… 123
88 南面回廊周辺出土土器 …… 125
89 西面回廊周辺出土土器 …… 126
90 東面回廊周辺出土土器 …… 127

Fig.

91 僧房周辺整地土等出土土器 …… 129
92 僧房柱穴出土土器 …… 130
93 僧房周辺遺構出土土器 …… 132
94 僧房周辺包含層等出土土器 …… 134
95 北外周部・南外周部出土土器 …… 136
96 特殊遺物など …… 137
97 円筒埴輪 …… 139
98 埴輪の出土地点 …… 140
99 形象埴輪 …… 140
100 石製品・土製品・金属製品 …… 144
101 木製品 …… 148
102 吉備池廃寺・文武朝大官大寺と周辺の寺院 …… 156
103 文武朝大官大寺周辺の条里と小字 ……158
104 検出遺構および堂塔の定点 …… 164
105 伽藍配置復元図 …… 168
106 日本および朝鮮半島の伽藍配置の比較 …… 170
107 法隆寺西院の伽藍配置計画 …… 172
108 ７～８世紀における金堂等の平面規模の比較 …… 179
109 金堂の平面復元案 …… 182
110 古代の塔の平面比較 …… 184
111 飛鳥時代の中門と回廊の比較 …… 187
112 大房・小房の類例 …… 189
113 慶州南山・塔谷第２寺址にある塔の石刻 …… 192
114 吉備池廃寺創建軒瓦拓影 …… 194
115 軒平瓦押し型の傷の比較 …… 198
116 関連遺跡地図 ……200
117 安倍寺出土瓦 ……208
118 藤原京条坊の復元と吉備池廃寺の位置 …… 221
119 吉備池廃寺周辺の条坊復元 …… 228
120 間近に迫る宅地開発 …… 235

吉備池廃寺発掘調査報告

― 百済大寺跡の調査 ―

第Ⅰ章　序　　言

本書は、奈良県桜井市吉備（旧十市郡香久山村大字吉備）の吉備池廃寺において、奈良国立文化財研究所（2001年度以降は奈良文化財研究所、以下同じ）と桜井市教育委員会・桜井市文化財協会が、1996年度から2001年度まで実施した発掘調査成果をとりまとめたものである。

吉備池廃寺は、大和三山のひとつである香具山の山塊から東北東へ約１㎞離れた「吉備池」のほとりに位置する。吉備池は、平坦地の周囲に築堤してつくられた、いわゆる皿池とよばれるたぐいの農業用溜池である。この種の溜池は、大部分が近世初期の築造にかかることが明らかにされており[1)]、吉備池もその例に漏れないだろう。ただ、池堤の北辺は正方位に対して大きく振れ、南辺も屈折するなど、特徴的な形態を示している。また、その位置も、盆地内のほかの溜池の多くが条里地割と密接に結びついているのと異なって、条里と整合せず、十市郡路東二十五条三里二・三・十・十一坪の四坪にまたがる。

吉　備　池

1　調査の経緯

吉備池の東南部を中心として、飛鳥時代の瓦が散布することは、以前から知られていた。そして、先述のような池堤南辺の不自然な形状や、その断面観察に基づき、これを創建時の吉備寺の跡とする見解が、前園実知雄によって提示される[2)]。しかしながら、発掘調査を経ていないこともあって、広く寺院跡としての共通理解を得るまでには至らなかった。

「吉備寺」説

一方、吉備池の西北西約700mには、古くから吉備寺跡に比定されてきた（前園は移転先と考えた）「大臣藪」があるが、それが中世城館であって、寺院の跡ではないことから、吉備寺の存在そのものを疑う説があらわれる。なかでも大脇潔は、「大臣藪」をはじめとする過去の吉備寺比定地の遺構・遺物の検討を通じて、吉備氏の氏寺としての吉備寺の存在を示す徴証は、実際にはほとんどないことを明快に論じた[3)]。

その際に、大きな拠り所の一つとなったのは、香具山北西麓の橿原市木之本町から、吉備池と同笵の瓦が比較的まとまって出土する、という事実であった。これを木之本廃寺と仮称しているが、両者のあいだに強いつながりがあったことは疑いない。そして、吉備池については、寺院跡ではなく、木之本廃寺の瓦を生産した瓦窯跡とみる説が有力となっていたのである。

瓦　窯　説

こうしたなかで、桜井市農林課により、吉備池の北側と西側から進められていた池堤の護岸

工事が、東南部の瓦散布地に迫りつつあった。そこで、まず工事に先立って、どういった遺構が存在するかを確かめるため、1996年度に、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会が共同で発掘調査を実施した（飛鳥藤原第81-14次調査、以下、「飛鳥藤原」を省略）。

発掘調査

その結果、当初の予想とは異なって、巨大な金堂基壇を検出し、この遺跡が瓦窯跡ではなく、飛鳥時代の寺院跡であることが判明する（過去の吉備寺比定地と区別するため、「吉備池廃寺」と命名）。これによって、当該部分の護岸工事は中止され、ひきつづき、伽藍の概要と寺域確認を目的とする計画調査を、2000年度まで実施することになった。以後、1997年度には塔と南面回廊（第89次調査）、1998年度は南面および西面回廊（第95次調査）、1999年度には東面回廊と僧房ほか（第105次調査）、2000年度は中門と僧房の調査（第111次調査）をおこなっている。

各年度の調査では、おもな成果が明らかになった段階で、報道発表と現地説明会を実施し、終了後の整理を経たのちに、『奈良国立文化財研究所年報』（2000年度以降は『奈良文化財研究所紀要』）に概要を報告した。ただし、それらは、あくまで各々の時点での理解であり、現在の解釈とは異なる部分もある。本書をもって、現時点での正式な見解とされたい。

一方、そうした計画調査と並行して、民間の住宅建設等にともなう事前調査も、桜井市教育委員会と桜井市文化財協会の手でおこなわれた。1998年度の僧房（桜井市第９次調査）、2000年度の北外周部（桜井市第11次調査）、2001年度の南外周部（桜井市第12次調査）、2002年度の東外周部（桜井市13次調査）の発掘調査がそれにあたる。このうち、桜井市第11次・第12次調査については、桜井市教育委員会から概要報告が刊行されている[4)]。

なお、吉備池の一帯は、遺跡地図に記載された周知の遺跡（吉備池遺跡）であり[5)]、寺院跡と認識される以前から、奈良県立橿原考古学研究所と桜井市教育委員会・桜井市文化財協会の手で発掘調査がおこなわれてきた。とりわけ、「橋本冠名遺跡」の名で実施された南外周部の調査では、藤原宮期の掘立柱建物などを検出するなど、特筆すべき成果があげられている。これらについては、『奈良県遺跡調査概報』および桜井市教育委員会・桜井市文化財協会発行の発掘調査報告書に概要の報告がある。

国史跡指定

そして、一連の発掘調査成果をうけて、吉備池廃寺は2002年３月に国の史跡に指定された。今後、遺跡のさらなる内容解明のための調査研究とともに、遺跡の公有化と整備・活用に向けての計画がすすめられていくことになろうが、吉備池廃寺の発見にはじまる一連の調査は、ひとつの区切りを迎えたことになる。その意味でも、将来に向けて、現時点までの成果をとりまとめておくことは重要であり、本書の意義もまさにこの点にあると考える。

1）宮本 誠『奈良盆地の水土史』農山漁村文化協会、1994年。
2）前園実知雄「磐余の考古学的環境」『考古学論攷』第６冊、奈良県立橿原考古学研究所、1981年。
3）大脇 潔「吉備寺はなかった－『京内廿四寺』の比定に関連して－」『文化財論叢 Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。
4）桜井市教育委員会『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』2001年。同『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年。
5）奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図』第２分冊、14－Ｂ－24、1971年（1984年と1998年に改訂）。1971・1984年版では遺物包含地、1998年版では集落跡（時代はいずれも縄文後期～古墳）とされている。

2　調査組織

今回報告する調査は、奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部と桜井市教育委員会社会教育課が共同で実施したものと、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会がそれぞれ単独で実施したものとがある。

前者については、「飛鳥藤原第○○次」という飛鳥藤原宮跡発掘調査部の一連の調査次数を使用する。ただし、「飛鳥藤原」は省略する場合がある。一方、後者については、調査主体にかかわらず、「吉備池遺跡第○○次」の呼称が用いられているので、便宜上、「桜井市第○○次」と表記することにした。

以下、各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する（※は研究補佐員、※※は調査補助員）。

奈良国立文化財研究所・桜井市教育委員会の共同調査

調査次数	年 度	所　長	部　長	調査担当者
飛鳥藤原第81-14次	1996	田中　琢	猪熊兼勝	小澤　毅
飛鳥藤原第89次	1997	田中　琢	猪熊兼勝	佐川正敏
飛鳥藤原第95次	1998	町田　章	黒崎　直	西口壽生
飛鳥藤原第105次	1999	町田　章	黒崎　直	小池伸彦
飛鳥藤原第111次	2000	町田　章	黒崎　直	箱崎和久

荒木浩司※、伊藤敬太郎※、井上直夫、小野健吉、加藤貴之※、島田敏男、鈴木恵介※
巽淳一郎、田福　涼※、玉田芳英、千田剛道、寺崎保広、長尾　充、中村一郎、西川雄大※
西村　康、羽鳥幸一※、花谷　浩、播摩尚子※、深澤芳樹、福山比呂美※、松村恵司
水戸部秀樹※、宮川伴子※、村上　隆、毛利光俊彦、安田龍太郎、山下信一郎、渡邉淳子※
奈良国立文化財研究所事務局：櫻井雅樹、吉岡佐和子、木寅貢志、松本　誠、山田昇司
桜井市教育委員会事務局：萩原儀征、清水真一

桜井市文化財協会の調査

調査次数	年 度	理事長	専務理事	調査担当者
桜井市第９次	1998	長谷川明	渡辺実恵	橋本輝彦

桜井市教育委員会の調査

調査次数	年 度	教育長	課　長	調査担当者
桜井市第11次	2000	石井和典	岡田憲三	橋本輝彦
桜井市第12次	2001	石井和典	山添慶司	橋本輝彦

岩﨑大介※※、小川裕子※※、川淵喜通※※、後藤浩之※※、武富智子※※、豊福恵子※※、中村真理※※
安井隆浩※※
事務局：堀尾えい

3　報告書の作成

報告書の作成は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部においておこない、発掘調査終了後の2001年度および2002年度の２年間をあてた。本格的な作業を開始したのは2002年４月以降である。

発掘調査および遺構・史料関係の整理は、遺構調査室と史料調査室が担当し、遺物の整理は、考古第一調査室と考古第二調査室が担当した。また、遺跡の探査は埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室 西村 康、木製品の樹種鑑定は同古環境研究室 光谷拓実がおこなった。石材は同保存修復科学研究室 肥塚隆保、獣骨は同古環境研究室 松井 章の鑑定による。なお、今回は、共同調査での出土遺物に加えて、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会の調査で出土した遺物もあわせて整理できた。両機関の関係者に篤く感謝の意を表したい。

報告書の作成にさいしては、各執筆者が整理した内容を編集者がとりまとめ、調査部全体による討議を経て、最終原稿とした。

１．本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章　序　　言	小澤　毅
第Ⅱ章　調　　査	小澤　毅・橋本輝彦
第Ⅲ章　遺　　構	
1　遺跡の立地と地形	小澤　毅
2　遺構各説	箱崎和久・橋本輝彦
第Ⅳ章　遺　　物	
1　瓦　　磚	
A 軒　瓦　　B 道具瓦など	西川雄大
C 丸　瓦　　D 平　瓦	花谷　浩
2　土器類	
A 土　器	石橋茂登
B 埴　輪	前岡孝彰
3　石製品・土製品・金属製品ほか	小池伸彦
第Ⅴ章　考　　察	
1　寺名比定とその沿革	小澤　毅
2　伽藍配置の復元	箱崎和久
3　堂塔の建築的考察	箱崎和久
4　出土瓦をめぐる諸問題	花谷　浩
5　藤原京条坊と寺地	小澤　毅
第Ⅵ章　結　　語	小澤　毅
English Summary	Walter Edwards（天理大学）

２．遺構・遺物の写真撮影と印刷用原稿の作成は、井上直夫が担当し、中村一郎と岡田 愛が協力した。Ｘ線写真の撮影は村上 隆がおこない、小野澤亮子が補助した。

3．図面・図版・挿図・表の作成は各執筆者が分担してあたり、稲田登志子、乾　陽子、井上富美子、奥村直紀、筧　和也、木瀬智晴、北井　緑、小谷徳彦、阪本美鈴、佐々木聖子、佐々木奈月、嶋岡由美、冨永里菜、野瀬倫子、宮原智美、森田和世の協力を得た。

4．奈良文化財研究所・奈良国立文化財研究所の過去の刊行物に関しては、下記の略称を使用した。機関名についても、以下、奈文研と省略する。

『奈良文化財研究所紀要 2001』　→　『紀要2001』
『奈良国立文化財研究所年報 2000-Ⅰ』　→　『年報 2000-Ⅰ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 Ⅳ』　→　『藤原報告 Ⅳ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』　→　『藤原概報 26』

5．遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす（日本水準原点：H＝24.4140m）。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、吉備池廃寺の発掘調査はすべて日本測地系によっているので、本書の平面座標も日本測地系で表示し、一部、（　）内に世界測地系の数値を示すにとどめた。ちなみに、2000年1月に奈文研が吉備池廃寺に設置した基準点№190～№193を、測地成果2000に基づいて再計算（改算）した結果では、両測地系の差（世界測地系座標値－日本測地系座標値）は、南北方向（X座標）が＋346.48m、東西方向（Y座標）が－261.58mである。つまり、当該地域における日本測地系の座標を世界測地系へ変換するためには、X座標に+346.48m、Y座標に－261.58m加える必要がある（X座標、Y座標ともにマイナスの数値のため、Xの絶対値は減少し、Yの絶対値は増加する）。標高に関しては、実質上変化がない。

6．発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。本書の遺構番号は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設定した地区割り（『藤原概報 24』1994年、133～142頁）の5AD地区における通し番号となっている。

SA（塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）
SG（池）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）

7．藤原京の京域は、岸 俊男による12条×８坊説（１坊＝４町＝約265m四方）を越えて広がることが判明している。南北の京極は未確定だが、東西京極の確認をうけて、本書ではもっとも蓋然性が高いと考える10条×10坊（１坊=16町＝約530m四方）の京域を示した。ただし、混乱を避けるため、条坊の数詞呼称については、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。

8．７世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴとあらわす。詳細については、『藤原報告 Ⅱ』（1978年、92～100頁）を参照されたい。

9．本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。

10．註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。

11．本書の編集は、調査部長 田辺征夫の指導のもとに、小澤 毅がおこなった。

第Ⅱ章　調　　査

1　調査地域

A　遺跡の位置

吉備池廃寺は、奈良盆地の東南端に近い桜井市街の南西のはずれに位置し、古くから信仰の対象となった三輪山の麓からは南西へ約2.7㎞の距離にある。７世紀に宮殿が集中した飛鳥地域からみると、香具山の山塊を隔てた北北東の反対側にあたる（Fig.１）。

奈良盆地の古道

古代の奈良盆地には、横大路という東西道路のほか、東から順に上ツ道、中ツ道、下ツ道という三本の南北道路が、約2.1㎞（大宝令制の４里、令大尺の６尺を１歩とする1000歩）の等間隔で存在した[1)]。横大路は、竹内峠や穴虫峠を越えて西は河内へ、東は伊賀・伊勢へと通じた幹線道路である。一方、中ツ道と下ツ道は、平城山を越えて北は山背へ、南は紀ノ川（吉野川）沿いに吉野や紀伊へと通じていた。

また、横大路以南の上ツ道は、北東から飛鳥へと入る阿倍山田道となり、西進して下ツ道と直交する。その交差点が軽の衢である。また、歌垣の場としても有名な海石榴市の衢は、横大路が山辺の道ないし上ツ道と交差する付近に想定されている。

これらの道路は、『日本書紀』推古21年（613）11月条に「難波より京に至るまでに大道を置く」とみえるように、隋との国交開始ののち、外交使節の来朝を契機として、推古朝に整備された可能性が高い。吉備池廃寺は、横大路と上ツ道（阿倍山田道）の交差点から南西へ約１㎞の至近距離に位置しており、その姿は、当時の横大路や阿倍山田道からもよく望むことができたであろう。

なお、奈良盆地を流れる川は一本に合流して大和川となるが、その上流にあたるこの地域の河川は、本流である初瀬川をはじめとして、いずれも、ほぼ東南東から西北西に向かって流れている。吉備池廃寺は、そのうちの寺川と米川にはさまれた、米川の現流路にほど近い小丘陵に沿って位置する（Fig.２）。

寺川と米川

ちなみに、香具山の東麓を北東へ流れる戒外川は、現在、吉備池廃寺の南西約400mの地点で、米川に合流している。しかし、この付近の米川の現流路は、条里にあわせて正方位に近く付け替えられたことが地形図からも明らかで、当初の合流点は、もう少し北寄りであったものとみられる。また、現合流点の約200m南西には、東と西の丘陵をつなぐ弧状をなした細長い高まりが、長さ270mほどにわたって明瞭に残っている。戒外川をせきとめるための築堤であり、堤の南西にかなりの面積をもつ池がかつて存在したことは間違いない。和田萃が指摘するように[2)]、これが『日本書紀』や『万葉集』にしばしば登場する「磐余池」「磐余市磯池」にあたる可能性は高いだろう[3)]。

磐余池

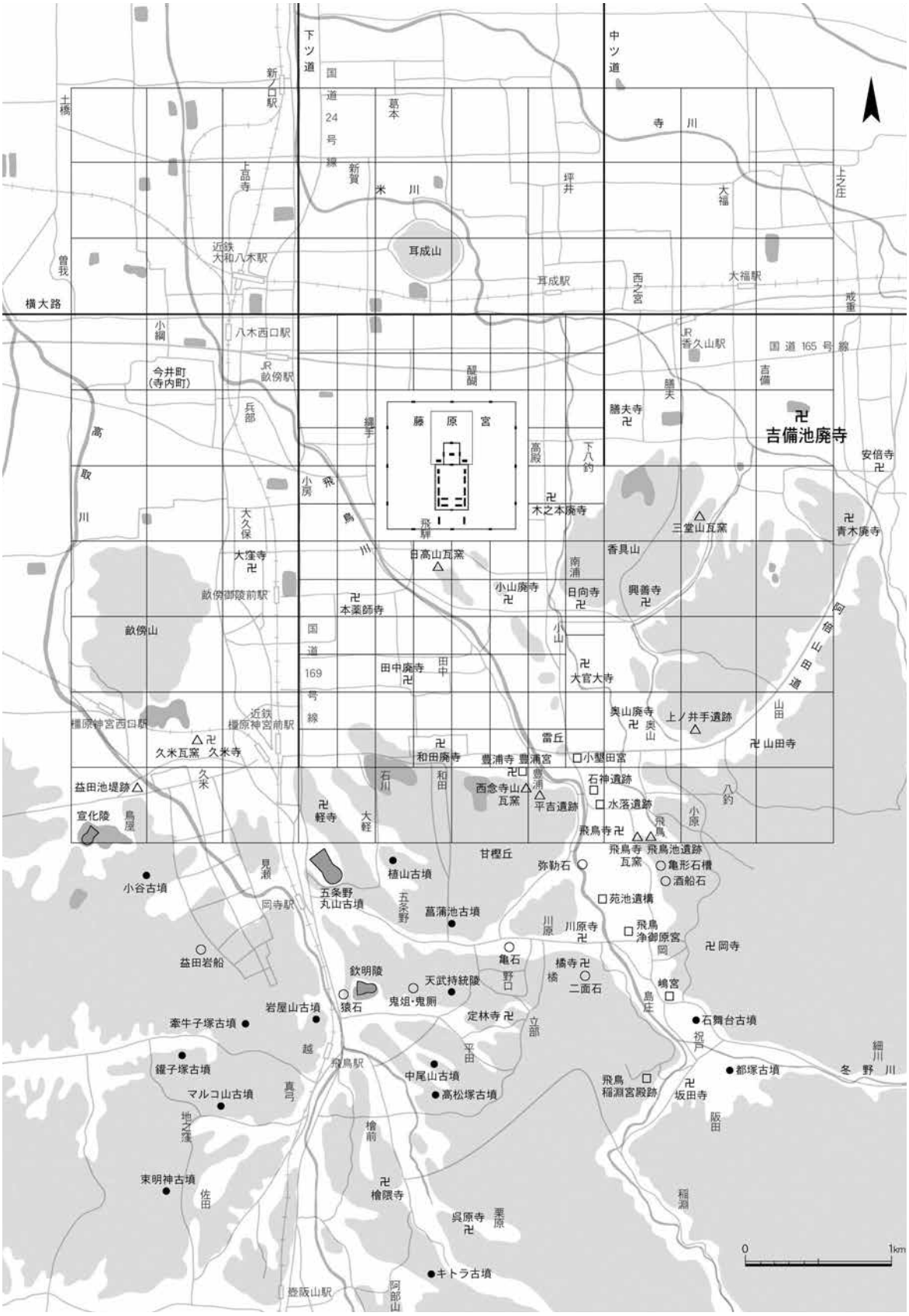


Fig. 1　飛鳥・藤原京周辺の遺跡　1:40000

磐余の諸宮

「磐余」の地名は、今では失われているけれども、５世紀から６世紀にかけて重要な宮地であったことはよく知られている。『日本書紀』には、磐余稚桜宮（神功・履中）、磐余甕栗宮（清寧）、磐余玉穂宮（継体）、磐余池辺双槻宮（用明）の名が見え、『帝王編年記』は、これらの所在をすべて十市郡と記す。ともあれ、「磐余」が磐余池を含む一帯の呼称であることは動かないので、磐余池の位置を上記のように考えた場合、吉備池廃寺は、「磐余」と呼ばれた地域に含まれるか、その北ないし北東に位置することになる。

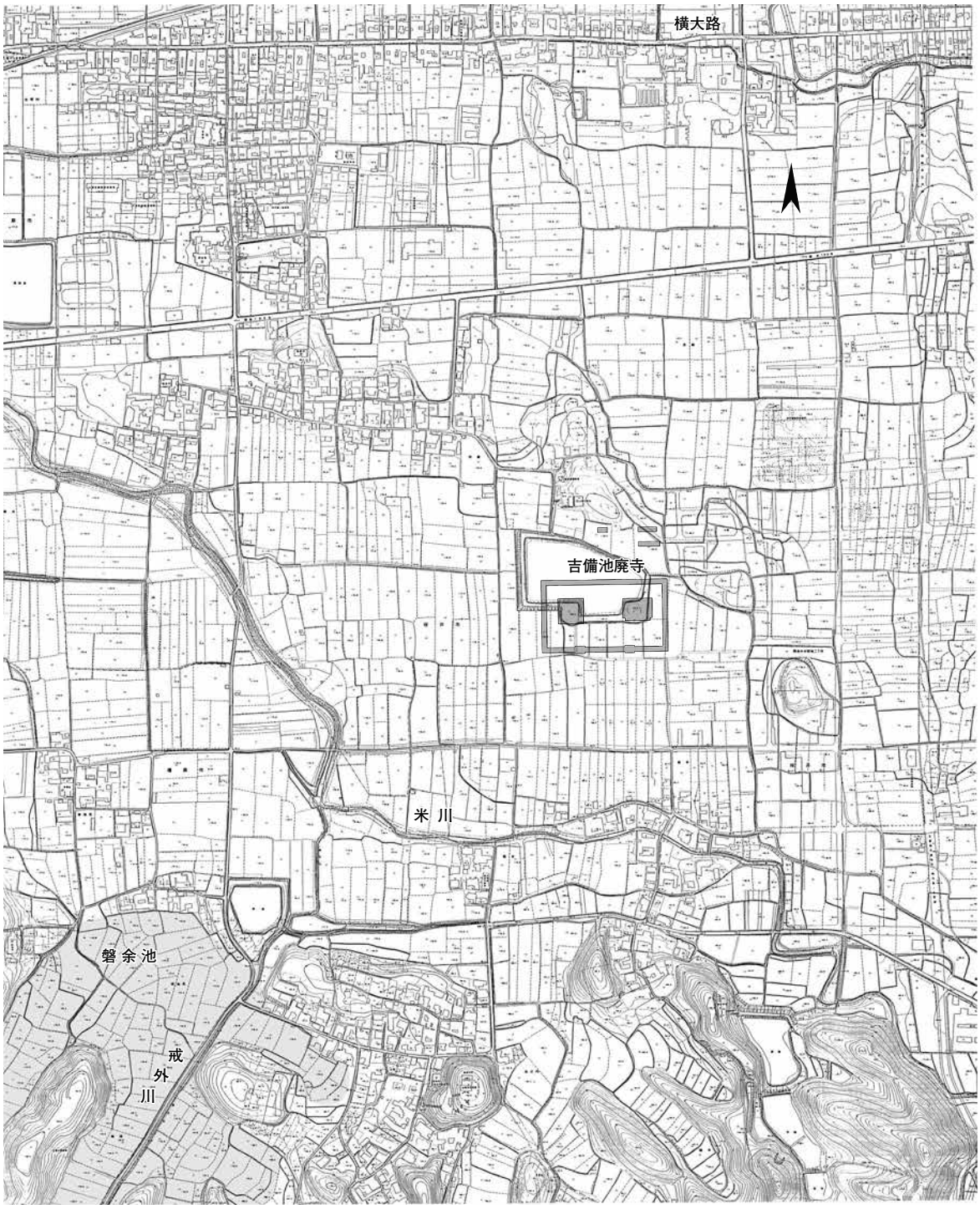


Fig. 2　吉備池廃寺周辺の地形　1:8000

B　既往の調査

ここで、今回報告する調査以前におこなわれた、吉備池廃寺周辺の発掘調査を簡単にふり返っておこう（Fig.3およびTab.1、調査番号は両者に共通）。

まず南外周部では、1984年度に奈良県立橿原考古学研究所が２本の南北トレンチによる調査をおこなっている（1）。このうち東側のトレンチでは、南寄りで７～８世紀の掘立柱建物を検出し、トレンチの北半分がすべて旧河道にあたることを確認した。この旧河道の堆積土には弥生土器が含まれ、包含層からは須恵器・土師器のほか、少量の凝灰岩片が出土している。　**南外周部**

また、1987年度には、桜井市教育委員会が上記の掘立柱建物の部分を拡張して、再度発掘調査をおこなった（3）。その結果、あわせて４棟の掘立柱建物の存在が確認され、建物には、少なくとも２時期にわたる重複があることが明らかとなった。いずれも藤原京関係の建物群と想定されている。さらに、これらの西側の隣接地でも、同年度に桜井市教育委員会が南北トレンチによる調査を実施し、壁面の焼けた方形の土坑などを確認した（2）。このほか、東方の東外周部に近い部分でも、1991年と1997年に桜井市文化財協会が南北トレンチによる調査をおこない、７世紀の瓦を含む東西溝などを検出している（5・8）。

一方、西外周部では、1988年度に桜井市教育委員会が、東西トレンチによる調査をおこなっている（4）。吉備池廃寺の平瓦を含む土坑や素掘溝を検出したが、幅２ｍという狭長なトレンチの制約もあって、顕著な遺構は確認されていない。　**西外周部**

東外周部では、1995年に桜井市文化財協会が、東西および南北方向のトレンチによる調査を　**東外周部**

Tab. 1　吉備池廃寺周辺における既往の発掘調査

番号	調査期間	調査面積	位　置	調査機関	調査原因	文　献
1	1984.11.16～12.17	580㎡	南外周部	橿原考古学研究所	工場建設	1
2	1987.10. 8～10.17	120㎡	南外周部	桜井市教育委員会	工場建設	2
3	1987.10.20～10.30	212㎡	南外周部	桜井市教育委員会	工場建設	3
4	1988.11.21～12.10	250㎡	西外周部	桜井市教育委員会	農道新設	4
5	1991.11. 1～11. 8	45㎡	南外周部	桜井市文化財協会	倉庫建設	5
6	1995.10.16～12.15	440㎡	東外周部	桜井市文化財協会	住宅分譲	6
7	1996. 4. 1～ 4.17	95㎡	北外周部	桜井市文化財協会	道路整備	
8	1997. 7.23～ 8.27	160㎡	南外周部	桜井市文化財協会	住宅分譲	8

文献　1　前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、1985年
2　清水真一「吉備池遺跡柳田地区の調査報告」『吉備池遺跡切田地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会、1988年
3　清水真一「吉備池遺跡冠名地区第２次調査概要」『吉備池遺跡切田地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会、1988年
4　清水真一『吉備池遺跡柿花地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会、1989年
5　清水真一「吉備池遺跡麦田地区の発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書３』（財）桜井市文化財協会、1992年
6　清水真一「吉備池遺跡第６次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1995年度発掘調査報告書１』（財）桜井市文化財協会、1996年
8　清水真一「吉備池遺跡第８次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1997年度発掘調査報告書２』（財）桜井市文化財協会、1998年

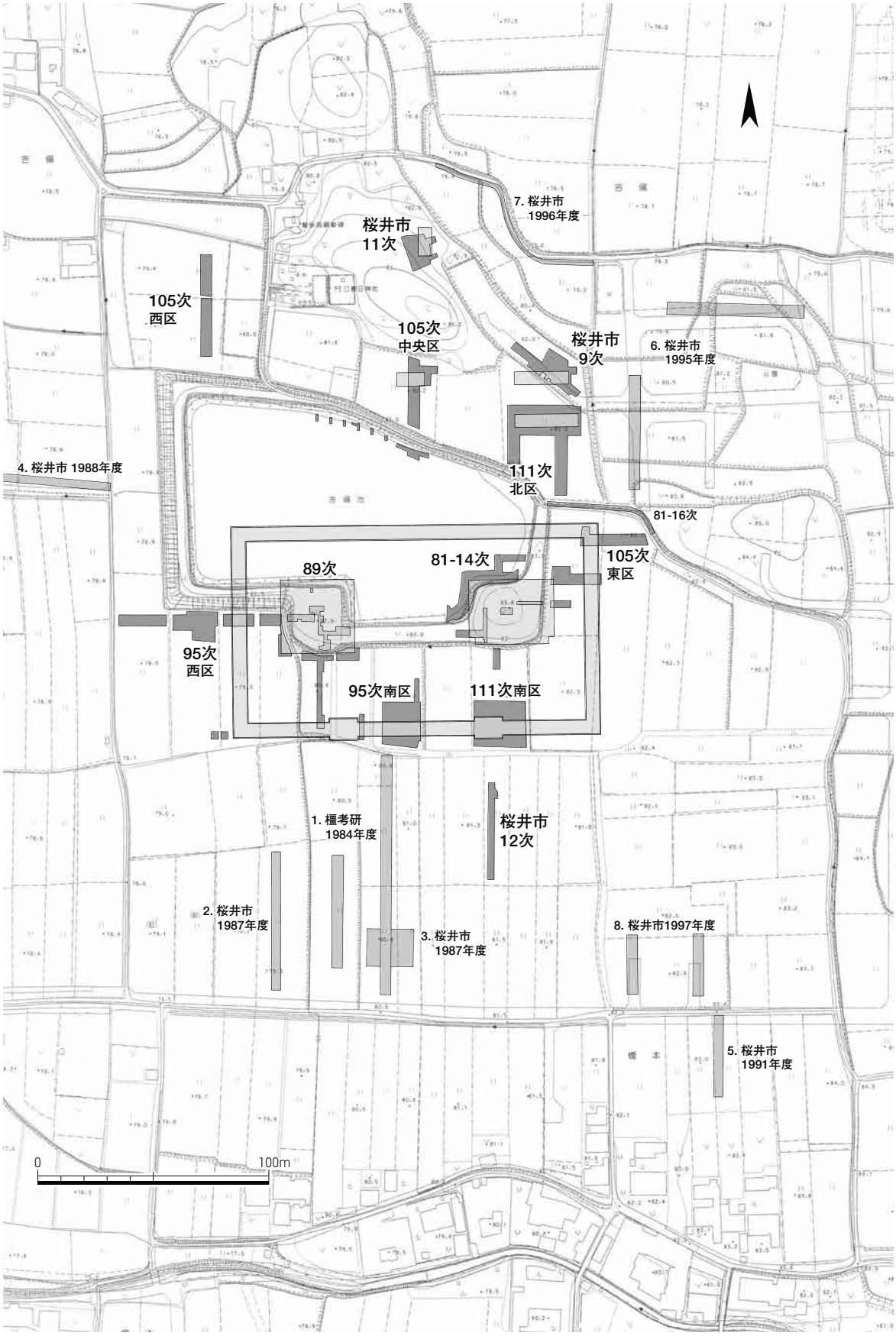


Fig. 3　吉備池廃寺と周辺の調査区　1:2500

実施した（6）。東西トレンチでは、地山をカットして西側に整地土を積んだ状況が明らかとなり、古墳時代の土壙墓１基と土坑数基を検出した。整地土の上面には、拳大の礫敷がところどころに遺存し、整地土中には円筒埴輪が散乱する。また、南北トレンチでは、土坑数基のほか、階段状をなす旧水田の段差を確認した。吉備池廃寺の軒丸瓦のほか、古墳時代から藤原宮期にいたる須恵器・土師器、埴輪などが出土している。

北外周部

なお、北外周部では、1996年に桜井市文化財協会が、道路整備にともなう幅１ｍほどの狭長なトレンチ調査をおこない、柱穴状の穴を数基確認した（7）。吉備池廃寺の軒丸瓦のほか、７世紀代の須恵器・土師器などが出土している。

C　測　量

基準点測量
水準測量

吉備池廃寺の発掘調査（第81-14次調査）を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準測量を実施した。基準点測量は、1980年に奈文研が設置した３級基準点・水準点No.61から、吉備池廃寺を経由して、同じくNo.62へ結合する単路線方式である。路線長2,586.5m、角閉合差14″、水平位置の閉合誤差0.033m、閉合比１/78,300であった。また、水準測量は、No.61からの往復直接水準測量によった。使用した機種は、ライカ社製トータルステーションTC1600およびオートレベルNA828である。なお、第81-14次調査中ならびに第89次・第95次調査においても、必要に応じて、上記の新設点からあらたに基準点を設けている。これらの作業も、すべて結合多角測量または三辺測量により、精度を確認しつつおこなった。

恒久基準点

その後、2000年1月にいたって、吉備池の堤防上に恒久的な３級基準点・水準点No.190～193を設けた。使用した既知点は、基準点測量が三等三角点南山と四等三角点桜井公園および1998年に奈文研が設置した２級基準点No.175、水準測量は建設省の水準固定点５と水準固定点６である。第105次・第111次調査では、これらの新設点を用いて測量を実施している。

また、奈文研と桜井市の共同調査における遺構実測は、上記の基準点から、トータルステーションまたはGPSで調査区内に基準線を設定することにより、作業をおこなった。一方、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会の単独調査は、任意座標による実測作業ののちに、基準点の座標と標高を測り込む方式によっている。実測図の縮尺は、いずれも１/20である。ただし、共同調査では、ヘリコプターからの航空写真撮影のさいに、水平位置と標高を観測した標定点を写し込み、将来的な図化作業が可能なように配慮した。

日本測地系

ちなみに、2002年４月１日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、吉備池廃寺の発掘調査はすべて日本測地系に基づく。そのため、本書の平面座標は日本測地系で表示し、一部、（　）内に世界測地系の数値を示すにとどめた。

Tab. 2　吉備池廃寺の３級基準点・水準点測量成果

点　名	日本測地系		世界測地系		両測地系の差	
	X座標(X_1)	Y座標(Y_1)	X座標(X_2)	Y座標(Y_2)	X_2-X_1	Y_2-Y_1
No.190	-166,123.246	-15,098.233	-165,776.761	-15,359.810	+346.485	-261.577
No.191	-166,168.381	-14,945.128	-165,821.902	-15,206.705	+346.479	-261.577
No.192	-166,225.547	-14,989.087	-165,879.067	-15,250.664	+346.480	-261.577
No.193	-166,209.938	-15,096.711	-165,863.452	-15,358.287	+346.486	-261.576

なお、上記基準点No.190～193については、測地成果2000に基づく再計算（改算）をおこなっているので、それぞれの成果を示しておく（Tab.2）。

D　地区割り

奈文研では、発掘調査の際に、大地区・中地区・小地区からなる地区割りを実施している。

小地区は3m方眼

最小単位となる小地区は、アルファベット1文字と2桁の数字の組合せで表記される、一辺3mの正方形である（中地区の東南角を起点＝A10とし、3mごとに北へB, C, …、西へ11, 12, …とする）。また、中地区は、東西222～228m（小地区74～76区画分）×南北54m（小地区18区画分）の区画で、小地区名の前にアルファベット1文字で表記する。そして、中地区を東西に3列、南北に6列並べた、東西672m×南北324mの区画を大地区としている。大地区名は、先頭から順に、時代を示す数字1桁、遺跡の種別をあらわすアルファベット1文字、遺跡名または位置を示すアルファベット2文字の組合せからなる。

平面直角座標系を基準

もっとも、飛鳥藤原宮跡発掘調査部における地区割りは、当初、条里畦畔を基準としており、対象範囲も飛鳥および岸俊男が復元した藤原京域にとどまっていた。しかし、さまざまな問題が顕在化したため、1994年度からは、平面直角座標系第Ⅵ系（原点：北緯36°東経136°）に基づ

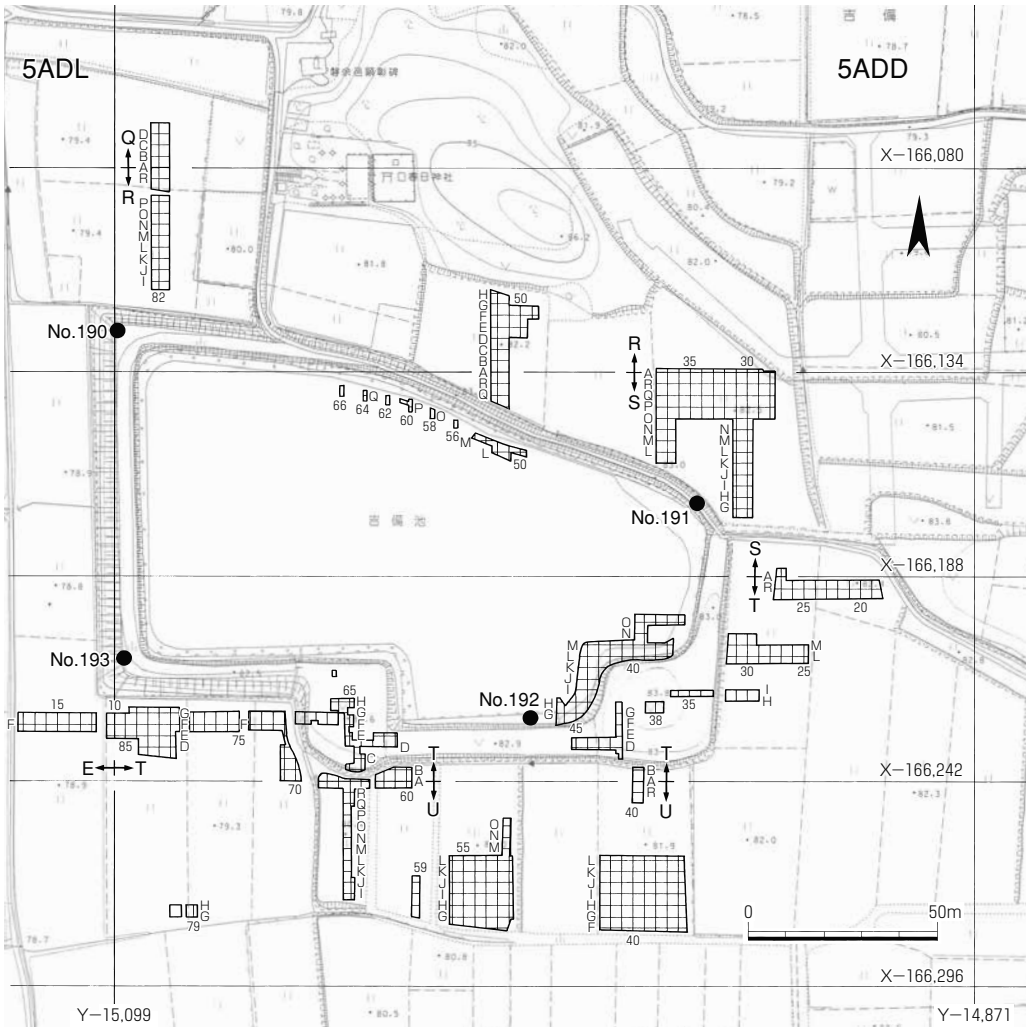


Fig. 4　吉備池廃寺の調査区と地区割り　1:2000

Tab. 3　調査次数と大・中地区

調査次数	大地区	中地区
第81-14次	5ADD	T・U
第89次	5ADD	T・U
第95次	5ADD	T・U
	5ADL	E
第105次	5ADD	Q・R・S・T
第111次	5ADD	R・S・U

Tab. 4　地区割りの起点の座標値

大地区	中･小地区	X座標	Y座標
5ADD	QA10	-166,080.00	-14,871.00
5ADD	RA10	-166,134.00	-14,871.00
5ADD	SA10	-166,188.00	-14,871.00
5ADD	TA10	-166,242.00	-14,871.00
5ADD	UA10	-166,296.00	-14,871.00
5ADL	EA10	-166,242.00	-15,099.00

く地区割りに全面的に移行している。同時に、藤原京域がそれまでの想定を大きく越えて広がるという実態にあわせて、対象範囲も大幅に拡大した。[4)]

本書で扱う吉備池廃寺の調査は、すべて上記の改定以後のものであり、奈文研と桜井市教育委員会の共同調査では、この一元的な地区割りに従って、遺物の取り上げなどをおこなっている（ただし、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会が単独で実施した調査では、こうした方式を採用していない）。

吉備池廃寺の調査区は、ほとんどが大地区の5ADDに含まれ、わずかに第95次調査区の西端の一部が5ADLとなる（Fig.4）。調査次数ごとの大・中地区名（Tab.3）と、座標系との関係を明らかにするために、関連する中地区の東南角の座標を示しておく（Tab.4）。

なお、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の地区割りでは、寺院遺跡に対して、5Bではじまる番号を与えるのが通例である。しかし、吉備池廃寺の場合は、上記の地区割りの改定時に、いまだ寺院跡と認められていなかったうえに、寺院跡と確定したのちも、すぐには寺域を推定しがたい状況にあった。このため、地区割りに関しては、通常の京内に対する扱いを適用することとし、5Aではじまる大地区の名称を使用している。

1）岸 俊男「日本都城制総論」『都城の生態』日本の古代 9、中央公論社、1987年。

2）和田 萃「磐余地方の歴史的研究（磐余の諸宮－磐余池に関連して－）」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県教育委員会、1973年。

3）なお、「磐余」「磐余池」の位置については、これより1.6kmほど北東の、上ツ道と横大路の交差点付近に想定する見解がある（千田 稔『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店、1991年、161～178頁。前田晴人『日本古代の道と衢』吉川弘文館、1996年、2～36頁（初出1979年）。渡里恒信「磐余池と海石榴市」『続日本紀研究』304号、1996年）。しかし、その一帯に池の痕跡はまったく認めることができないし、上ツ道の設定が推古朝以前にどこまで溯るのかも疑問がある（「磐余」の地名自体は『日本書紀』神武即位前紀戊午年9月戊辰条に初出し、「磐余池」についても履中2年11月条に築造記事が見える）。また、論拠とされた近傍の桜井市谷の若桜神社の位置が、城上郡所在とされる同名の延喜式内社の位置を踏襲しているのか、さらにそれが磐余稚桜宮の位置に関わるのかという点も問題となろう。和田の比定地が、現実に古代の大規模な池の痕跡を明瞭に残している以上、それを上回る論拠を有するものとは思われない。

4）奈文研「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」『藤原概報 24』1994年。

2　調査の概要

奈文研と桜井市教育委員会が共同でおこなった吉備池廃寺の学術調査は、1997年１月に開始し、2001年４月に終了した。また、これと一部並行するかたちで、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会が、それぞれ単独で発掘調査を実施している。

はじめに、今回報告する発掘調査について、一覧表を掲げておこう（Tab.５）。以下、次数ごとに調査の概要を述べることにする。

Tab. 5　発掘調査一覧

調査次数	調　査　地　区		調査期間	調査面積
第81-14次	5ADD－T・U	金堂	1997. 1. 8～1997. 3.26	420㎡
第89次	5ADD－T・U	塔・南面回廊	1998. 1. 7～1998. 4.17	351㎡
第95次	5ADD－T・U	南面回廊・西面回廊	1999. 1. 7～1999. 4.22	724㎡
	5ADL－E	西面回廊		
第105次	5ADD－Q・R・S・T	僧房・東面回廊・金堂	2000. 1. 7～2000. 4.11	738㎡
第111次	5ADD－R・S・U	中門・僧房	2001. 1. 9～2001. 4.24	1140㎡
桜井市第９次	5ADD－R	僧房	1998.10. 9～1998.12.11	239㎡
桜井市第11次	5ADD－Q	北外周部	2000.12. 4～2001. 1.12	140㎡
桜井市第12次	5ADE－P	南外周部	2001. 7.11～2001. 7.24	125㎡

A　第81-14次調査

吉備池廃寺の存在をはじめて確認した調査である。この遺跡は、木之本廃寺の瓦を焼成した瓦窯と見る説が有力であったため、基準点測量とそれに基づく地形測量（1：200）を実施したのち、発掘に先立って、瓦片が散布する吉備池南東の土壇周辺の地中レーダー探査と磁気探査を実施した。ところが、予想に反して、瓦窯であることを示す反応はまったくなく、地中レーダー探査では、むしろ基壇らしい反応が得られるという結果となった。

事前探査

つづいて開始した発掘調査でも、やはり生産遺跡であることをうかがわせる兆候はなく、逆に探査成果を裏づけるように、基壇の掘込地業SX101とその西北角が確認される。ここにおいて、本遺跡は瓦窯跡ではなく、飛鳥時代の寺院跡であることが明らかとなった。

そこで、基壇の規模と形状を確かめるために、土壇上と土壇の東、南、西の各辺にトレンチを設定した。その結果、東辺では掘込地業SX101の東端を検出し、掘込地業の東西幅は36mと確定する。また、掘込地業の南端は水路のため確認できなかったが、南北27m以上30m以内におさまることが判明した。ただし、西辺や北辺では、基壇土がこれを越えて広がっている状況が認められるので、基壇はもう一回り大きく、東西37m、南北28mほどの規模になるものと推定される。1000㎡に達するこの規模は、ほぼ同時期の山田寺金堂（皇極２年（643）に建立開始）はもちろん、のちの官寺である川原寺や薬師寺（本薬師寺）の金堂をはるかに凌ぐ。

巨大な金堂基壇を確認

掘込地業SX101の深さは約１mあり、その底面から版築土上面までの高さは、現状で2.5～2.7mに達する。おそらく、本来の基壇は、掘込地業底面から３m以上、地表面から２m以上

の、ひじょうに高いものであっただろう。こうした規模と形状から、これが南面する金堂SB100の基壇であることは間違いないとみられる。ただ、基壇の南西部では、掘込地業の西端が屈折して隅欠き状を呈するが、その理由は明らかでない。

金堂の礎石は現存するものがなく、基壇の外装に関わる痕跡も皆無である。さらに、トレンチ調査のうえ、基壇土の掘り下げをおこなっていないため、礎石据付穴や抜取穴の配置も明らかにできなかった。一方、東辺では、基壇の外側に砂利敷SX103の一部が残っており、当時の舗装を示すものとみられるが、遺存状態は必ずしもよくない。また、基壇の西辺と北辺には、下部に多量の礫を入れた排水用暗渠SD104とSD105がめぐり、掘込地業の西北角からそれへつなげる排水溝SD102が設けられていた。なお、金堂基壇の西側では、少なくとも３時期にわたる掘立柱の掘形と抜取穴を確認している（SB106～109）。

排水用暗渠

金堂の西方には、約50m離れて、やはり方形を呈する土壇が存在する。この２つの土壇は正しく東西に並んでおり、形状とあわせて、いずれも吉備池廃寺の建物基壇であることは疑いない。とすれば、西方土壇は塔基壇とみるのが妥当であり、東に金堂、西に塔を配した伽藍配置を想定することができる。

遺物の大半は瓦であるが、創建時のものに限られ、軒丸瓦は、山田寺にわずかに先行する特徴を備えている。そして、瓦の出土量そのものが少ない点から、短期間のうちに他へ移された可能性が想定される。この軒丸瓦については、以前から舒明11年（639）創立の百済大寺所用とする見解が提示されており、金堂基壇の規模や短期間での移転を考えあわせると（百済大寺は天武２年（673）に高市の地へ移され、高市大寺となる）、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性はきわめて高いとみられる。

百 済 大 寺

発掘調査の記者発表と現地説明会では、以上の調査成果を公表し、これまで所在が確定しなかった幻の百済大寺の発見として、大きな注目を集めることとなった。

B　第89次調査

前年の金堂の発見をうけて、吉備池廃寺の伽藍の範囲および主要堂塔の実態を解明することを目的に、前年度を含む計５年間の学術調査を実施することになった。当調査はその２年目にあたり、塔跡の可能性が高いと目された西方土壇と南面回廊の解明を意図した。

西方土壇は、すでに北側がコンクリート護岸となっている関係もあり、土壇上と土壇の南辺、西辺にトレンチを設定した。南辺のトレンチは南に長く伸ばすとともに、その東側にも南北トレンチを設けて、回廊の確認をねらうこととした。なお、今回も、発掘に先立って地中レーダー探査を実施し、西方土壇は基壇である可能性がきわめて高いという結果を得ている。

まず西方土壇の調査では、ほぼその中央で、東西約６m、南北７m以上の巨大な心礎抜取穴を検出した。深さは現状で約40㎝あり、底には人頭大の根石が多量に遺存している。また、基壇西辺では、版築の途中で、心礎を引き上げるためのスロープの存在を確認することができた。以上の点から、これが予想どおり塔SB150の基壇であることは疑いない。

心礎抜取穴

ただ、金堂のような掘込地業はみられず、塔基壇では、旧地表面に厚さ20～40㎝の整地をおこなった上に、版築による基壇土を積み上げている。基壇規模は、基壇土の残る範囲と推定塔心間の距離から、一辺約30mと復元できる。これは、７世紀のほかの塔にくらべて４倍近い面

塔基壇も特大規模

積であり、並外れた規模といえる。その巨大さと比肩できるものは、奈良時代以前には、百済大寺の後身にあたる大官大寺を除いてほかにない。

なお、旧地表面から現存する基壇土の上面までの高さは約2.3mあり、当初の塔基壇高は2.8mほどと推定される。また、心礎抜取穴の底面と基壇土の関係から、心礎は地下式ではなく、上面が地上に露出する形式であったことが確実である。基壇外装の痕跡や礎石は、金堂同様、まったく残っていなかった。ただし、塔の南方では、小石敷SX155が一部残る部分があり、当初の舗装を示すものとみられる。

回廊の確認

一方、南面回廊SC160は、塔基壇の約30m南にあり、南北の雨落溝にあたる２条の石組みの東西溝を確認した。石組みは、南側の溝SD161がよく遺存するのに対し、北側の溝SD162ではすべて抜き取られている。溝の心々間距離は約６ｍあり、この間が回廊基壇となる。

今回の調査で、金堂と塔を東西に並べた伽藍配置であることが確定するとともに、南面回廊の検出により、少なくともその造営が、ほぼ形をととのえる状態にまで達していたことが明らかとなった。また、塔基壇と心礎抜取穴の巨大さは、そこに大官大寺と同じく九重塔が建っていたことを強く示唆する。古代に九重塔を有していたと記されるのは、百済大寺と大官大寺しかなく、吉備池廃寺が百済大寺である可能性はいっそう高まった。

C　第95次調査

３年目にあたる当調査は、前年の南面回廊の発見をうけて、そこに開く中門を確認するとともに、西面回廊の位置を知ることを目的とした。そのため、南面回廊の金堂と塔の中間地点に主たる調査区（南区）を設定し、塔の西方に東西トレンチを伸ばすこととした（西区）。また、回廊西南角想定位置にも小規模な調査区を設けた（西南区）。

想定位置に中門はない

主調査区（南区）では、予想に反して中門は確認されず、南面回廊SC160とその両側の雨落溝がまっすぐにのびることが判明した。中門は、金堂と塔の中間点南方には存在しなかったことになる。前年と同様、南側の雨落溝SD161は石組みが遺存するのに対し、北側の雨落溝SD162の石組みはすべて抜き取られている。また、それぞれに先行する東西方向の２条の掘立柱列SA181とSA182を検出し、南面回廊造営時の足場と判断した。回廊の基壇幅については約5.6ｍと推定できるが、礎石はまったく遺存せず、痕跡程度ながら、礎石抜取穴に関わるとみられる土質の違う部分を、約３ｍ間隔で確認した（SX185）。

南面回廊の基壇南半、南側の雨落溝と間は、幅３ｍの東西溝SD180によって破壊されている。この溝には、吉備池廃寺の瓦のほか、藤原宮期の遺物が含まれ、その位置とあわせて、三条大路北側溝の可能性が想定される。また、これの北では、藤原宮期の掘立柱建物SB190の西妻を検出した。

塔基壇西方のトレンチ（西区）では、推定塔基壇縁から約23m西で、西面回廊SC200の雨落溝SD201を検出した。遺存状況はよくなく、溝の石組みは残っていない。この西には、西側の雨落溝にかかわるとみられる石の抜取穴SX202があり、両者の間が西面回廊になるものと推定した。西面回廊の規模は、南面回廊と同じとみてよいが、同様に基壇は大きく削平され、回廊基壇上では、礎石の抜取痕跡らしい土質の違いSX203を検出したにとどまる。一方、回廊西南角想定位置（西南区）では、回廊関係の遺構は確認できなかった。

ただし、西面回廊下から西南西に向けて、底に人頭大の礫を詰めた暗渠SD215がのびることを確認した。回廊内の水を排水するための施設と考えられる。よって、少なくともこれが存在する塔基壇から西50mまでは、寺域に含まれるものと判断される。また、その西方24mまでの調査区内にも寺地を限る遺構は存在しないので、西限はさらにその外側となろう。

このほか、藤原京関係の遺構としては、坪内の掘割りないし区画溝と推定される東西溝SD226と、その北岸の塀SA227などを検出した。井戸SE220は近世のものである。

今回の調査では、当初の予想と異なり、中門が金堂と塔の中間点南方になく、変則的な配置をとることが判明した。中門の位置として残された可能性のうち、もっとも有力なのは金堂の前面であろう。なお、西面回廊については、きわめて痕跡的ではあるが、その存在を確認することができた。さらに、藤原宮期の遺構も比較的多く検出され、吉備池廃寺廃絶後の土地利用を示す資料が得られた。

中門は金堂の前面か

D　第105次調査

4年目にあたる当調査は、東面回廊の確認とそれによる回廊東西幅の確定、僧房など寺の北側に想定される施設の確認、北西方向への寺地の広がりの把握を目的とした。

このため、金堂の北東に2本の東西トレンチ（東区）を、金堂と塔の中間点の北方に南北トレンチ（中央区）と吉備池内に7ヵ所の小規模トレンチ（池内調査区）を設けた。また、吉備池の北西には南北トレンチ（西区）を設定した。

まず東区では、東面回廊SC300の西側の雨落溝SD305を検出したほか、金堂SB100の掘込地業SX101の東北角と、その外側をめぐる周溝SD105（北辺）・SD250（東辺）を確認した。SD105とSD250は、下部に人頭大の礫を多数積んだ暗渠である。基壇の掘込地業にともなう排水を目的として開削され、その後は排水暗渠として機能した可能性が高い。この暗渠の外側には、平行して掘立柱塀SA251（東辺）・SA252（北辺）がめぐっている。なお、東面回廊の位置は、平安時代～中世に南北方向の溝SD306となる。

中央区では、金堂と塔の中間点の北方で、掘立柱建物SB260の存在を確認した。梁行2間の東西棟建物である。後述する桜井市第9次調査で検出した僧房とみられる掘立柱建物と北側柱筋を揃えており、伽藍内の位置関係とあわせて、僧房関係の施設とみることができる。なお、このトレンチの北半では平安時代の瓦も一定量出土し、吉備池廃寺の廃絶後も、近くに当該時期の小規模な瓦葺の堂宇が存在したことをうかがわせる。

掘立柱僧房

池内調査区では、北面回廊や講堂そのものの発見にはいたらなかったが、流路ないし低湿地を埋め立てた7世紀中頃の整地土を確認した。この整地土は、東西50mにわたる7カ所の池内トレンチすべてで認められ、さらに西方にのびるものと推定される。

一方、西区では7世紀代の明確な遺構は認められず、奈良時代末以降、中世までの溝や流路を検出したにとどまる。

今回の調査の結果、回廊の東西幅が心々間距離で約158mとなることが明らかとなった。僧房と推定される建物の位置とあわせて、寺地は少なくとも東西180m、南北160m以上の広がりをもつ。また、広汎な範囲に整地をおこなっている状況も判明し、吉備池廃寺の造営が相当に大がかりなものであったことが確かめられた。

広汎な整地

E　第111次調査

当調査は、５年間の学術調査の最終年度にあたり、中門と講堂・北面回廊の解明を目的として、金堂の南方（南区）と、吉備池を越えた北方（北区）に、２ヵ所の調査区を設定した。

中門の確認

南区では、中門SB320を検出した。南面回廊の南北の雨落溝SD161とSD162が建物にあわせて屈折する状況が明らかとなり（SD321とSD322）。この間が中門の基壇となる。ただし、基壇土自体はまったく残らず、礎石の据付痕跡および抜取痕跡も確認できなかった。わずかに、東南隅柱想定位置で、それらに関わる土質の違いが認められるが、きわめて痕跡的である。また、階段の痕跡も確認できなかった。なお、中門の基壇規模は東西12.0m×南北9.8mほどと推定され、３×２間の建物を復元できる。この規模は、飛鳥寺や法隆寺西院の中門にくらべても小さく、しかもその位置は、金堂の正面の中軸線より西へ寄っている。

中門および南面回廊に重複して検出された掘立柱東西塀SA325は、第95次調査で確認したSA182の東への延長にあたる。第95次調査では回廊建設時の足場と推定していたが、中門SB320上を直線的に横断することから、SB190に接続する藤原宮期の塀である可能性が高まった。SA182の南のSA181につながる遺構は、今次調査では確認できなかった。

掘立柱僧房

北区では、11×２間の東西棟掘立柱建物SB340を検出した。僧房と考えてよい。後述する桜井市第９次調査で検出した建物とともに、今までに発見されたなかでは、最古の僧房遺構となる。柱間は、桁行が約2.5m、梁行は約2.7mである。建物の外周には、約1.2m離れて、雨落溝とみられる素掘溝がめぐる。なお、建物の東部は地山が急激に落ち込むため、整地土を積んで柱掘形を掘っているが、この整地土には焼土が含まれていた。

北区では、このほか、掘立柱建物SB345～347と井戸SE355・356・360、東西溝SD350などを検出した。SB345・346は藤原宮期の建物。また、SE355・360とSD350には８世紀中頃、SE356には10世紀頃の遺物が含まれる。

今回の調査で確認した吉備池廃寺の中門は、予想外に小規模なうえに、その位置も金堂の中軸線より西へ偏している。これを合理的に説明しうるのは、塔の南にも、もう一つの中門が存在したとみる仮説だろう。当該部分は、第89次調査の二つのトレンチにはさまれた未発掘地にあたるが、金堂と塔のそれぞれ前面の内寄り（伽藍全体の中軸線寄り）の位置に二つの中門が建つという、異例の配置をとる可能性が想定される。

一方、僧房と推定される掘立柱建物は、桜井市第９次調査での検出建物と南北に並列し、第105次調査の建物とあわせて、かなり規格的な配置がおこなわれたことがうかがえる。そして、

高い完成度

こうした建物が複数存在した事実が判明したことにより、吉備池廃寺の完成度がかなり高く、名実ともに寺院として機能していたことは確実となった。

なお、講堂および北面回廊については手がかりが得られなかったが、北区の南半はかなり削平を受けているので、それらの存在を否定することはできない。むしろ、北区における瓦の出土状況は、付近に瓦葺建物が存在したことを強く示唆しており、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』をはじめとする史料との整合性からも、講堂は存在したと考えるべきだろう。

以上、５年間にわたる吉備池廃寺の発掘調査は、なお多くの課題は残すものの、これが百済大寺にほかならないことを裏づけるものとなった。

F　桜井市第９次調査

分譲住宅の建築にともなう事前調査である。調査地は、吉備池の北東約50m、金堂土壇からは約80m北に位置し、吉備池廃寺の寺域内に含まれるかどうか判然としない地点であった。そのため、調査にあたっては、まず南東～北西に細長いトレンチを設定して遺構の有無を確認し、その後、遺構の状況に応じて拡張をおこなった。

検出した遺構には、飛鳥時代の掘立柱建物SB400、藤原宮期の南北塀SA401・405と東西塀SA406、区画溝SD402・403、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物と土壙墓などがある。

SB400は、北側柱列の柱掘形７基、南側柱列の柱掘形４基を検出した。桁行６間（16.4m）以上、梁行１間（5.4m）の東西棟建物で、妻中央の柱を欠く。建物の東端は確認したが、西へどこまで続くかは明らかでない。柱掘形の規模は飛鳥時代でも最大級である。柱掘形には７世紀中頃の遺物、柱抜取穴には７世紀後半の遺物が含まれており、この建物がある程度の期間存続したようすがうかがえる。性格については、建物の規模や構造、金堂・塔などとの位置関係を考え合わせると、吉備池廃寺に付属する僧房の一部である可能性が高いだろう。とすれば、現在までに確認された最古の僧房遺構ということになる。

また、調査区の東寄りでは、北東の谷側へ向かう落ち込みがあり、整地土で埋め立てていることが判明した。SB400の柱掘形はこの整地土の上から掘り込まれており、それに含まれる遺物の状況とあわせて、建物を建てるさいの整地と判断される。

Tab. 6　遺構番号の対照

本書の遺構番号	桜井市の遺構番号	種　別	調査次数	桜井市文献
SB 400	SH-1001	掘立柱建物	桜井市第９次	文献１
SA 401	SA-1001	掘立柱塀	桜井市第９次	文献１
SD 402	SD-1001	南北溝	桜井市第９次	文献１
SD 403	SD-1004	東西溝	桜井市第９次	文献１
SK 404	SK-1033	土　坑	桜井市第９次	文献１
SB 420	SH-2003	掘立柱建物	桜井市第11次	文献２
SX 421	SX-2001	切り通し	桜井市第11次	文献２
SD 422	SD-2001	南北溝	桜井市第11次	文献２
SB 423	SH-2002	掘立柱建物	桜井市第11次	文献２
SA 424	SA-2001	掘立柱塀	桜井市第11次	文献２
SB 425	SH-2001	掘立柱建物	桜井市第11次	文献２
SB 426	SB-2001	竪穴住居	桜井市第11次	文献２
SD 441	SD-1001	東西溝	桜井市第12次	文献３
SD 442	SD-1002	東西溝	桜井市第12次	文献３
SX 443	SX-1001	ベースの高まり	桜井市第12次	文献３

文献　１　桜井市文化財協会『吉備池廃寺（吉備池遺跡第９次）発掘調査資料』 1998年
２　橋本輝彦「吉備池遺跡第11次発掘調査概要報告」『桜井市 平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第22集、 2001年
３　橋本輝彦「吉備池遺跡第12次発掘調査概要報告」『桜井市 平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第23集、 2002年

G　桜井市第11次調査

吉備池の北約80mの小丘陵上で実施した範囲確認調査。調査地は吉備池廃寺の金堂・塔の中間地点の真北にあたり、それぞれの土壇からの距離は約140mである。第105次調査中央区や桜井市第９次調査区の遺構面より最大約３ｍ高く、寺域全体を見渡せる位置にある。調査では、まず東北東～西南西方向に２本のトレンチを入れ、遺構の状況をみて調査区を拡張した。

検出した遺構は、大きく４時期に区分することができる。このうち、正方位をとる最後の時期の遺構が吉備池廃寺関係のものとみられ、東西方向の切り通しSX421、南北溝SD422、掘立柱建物SB420を確認した。SB420は、桁行３間以上、梁行２間以上の南北棟建物で、柱間はともに2.3m。建物の西側に、幅約3.8mの南北溝SD422をともなう。切り通しSX421は、これらを構築する平坦面をつくるためのものであろう。

吉備池廃寺に先行する遺構としては、まず北で15°ほど東偏する総柱の掘立柱建物SB423とその西の掘立柱塀SA424がある。また、それに先行して、北で約20°西偏する掘立柱建物SB425、さらにそれより古い竪穴住居SB426が存在する。竪穴住居SB426の竈からは、６世紀末～７世紀初めの土器が出土しており、一方、最後の時期の遺構にも藤原宮期に下る遺物は含まれないので、上記の遺構変遷は比較的短い期間におさまるものと推定される。

今回の調査により、吉備池廃寺北方の丘陵上にも、同時期の遺構が展開していることが明らかとなった。寺域の広がりや付属施設の状況を考えるうえで重要な成果といえる。

H　桜井市第12次調査

金堂土壇の約60m南で実施した範囲確認調査である。対象地は南門の候補地の一つだが、大半が米川の旧流路と推定されるため、41×３ｍの南北トレンチを設定して、遺構の有無とその状況を確認することとなった。

調査区は全体に暗灰色粘土の包含層で覆われ、この下が細砂や拳大～人頭大の礫を少量含んだ暗褐色粘土のベースとなる。包含層には７世紀後半（天武朝頃）の遺物が含まれている。

調査区の北半部では、トレンチ北端から約５ｍ南で、河原石を側石とする東西溝SD441、その約15m南で東西溝SD442を検出した。石組みの遺存状況は悪く、SD441で1.7m分を確認したにとどまる。また、SD442では、河原石が溝内に落ち込んだ状態で散らばっていた。両溝間の中ほどには、幅約3.6m、高さ20㎝とわずかではあるが、ベースの高まり（SX442）が認められ、前記の包含層がその上を覆っている。

今回の調査により、伽藍中枢部の南方にも吉備池廃寺の遺構が広がっていることが明らかとなった。検出した溝やその間のベースの高まりは、位置や状況からみて、吉備池廃寺の南門と南北の雨落溝にあたる可能性を想定することもできる。ただ、その場合、SD441とSD442の心々間距離は15.2mあるので、中門の規模（南北の雨落溝心々間距離で約10.4m）をはるかに凌ぐものとなってしまう。調査面積が限られていることもあり、なお検討が必要であろう。

3　調査日誌抄

A　第81-14次調査（金堂）　1997年1月8日～3月26日
（測量等は1996年10月21日より開始）

10.21　吉備池の堤防上に測量基準点を設置し、基準点測量をおこなう。

10.22　水準測量。土地境界杭の座標計測。

11.25～29　地形測量。トータルステーションにより単点の座標を直読し、等高線記入。

1.8　地中レーダー探査と磁気探査をおこない、基壇土らしい反応が得られる。土壇の西と北に調査区を設定する。

1.9　土壇の西辺から発掘開始。地区杭打設。

1.13　土層観察用の畦を残して瓦溜りの掘り下げ。ともに最近の遺物が混じる。調査区西端近くでは、2時期以上の柱掘形の存在を確認した。

1.14　畦の断面の検討から、TJ～TK43の南北方向の土の違いが基壇西辺の掘込地業に関わる可能性が強まる。確認のため、土壇の北西の遺構検出作業をおこない、掘込地業の西北角を検出する。また、そこから北西へ向かう溝の存在も明らかとなり、掘込地業にともなう排水溝と推定した。土壇の形状はこの基壇建物（SB100）に由来するのだろう。ともあれ、この遺跡が瓦窯跡ではなく、寺院跡であることは確実となった。

1.16　掘込地業の西辺に沿って、南北溝がのびることを確認。遺構面は青灰色細砂（地山）ないし、その上にのる暗褐色土である。

1.17　土壇北辺の調査にはいる。基壇土が北側に張り出す状況を確認。

1.20　基壇規模を確認するため、土壇上に南北トレンチと東西トレンチを設定する。

1.23　土壇上南北・東西トレンチの掘削。土壇端まで基壇が広がることが判明する。東西30m以上、南北25m以上の大基壇である。基壇西辺の掘込地業の肩から基壇土上面までの比高は約2.2m。

1.27　堤防に埋め込まれた基壇西端の状況を明らかにするため、TD42～45に東西トレンチを設定。また、TL37南北畦沿いを断ち割り調査し、掘込地業の底を確認する。

1.28　土壇北辺の掘込地業に沿う東西溝の掘り下げ。底に大型の礫を多数落とし込んでおり、埋土は黄褐色粘質土ブロックを多量に含む人為的なもの。TD42～45トレンチの掘削を続行するが、こ

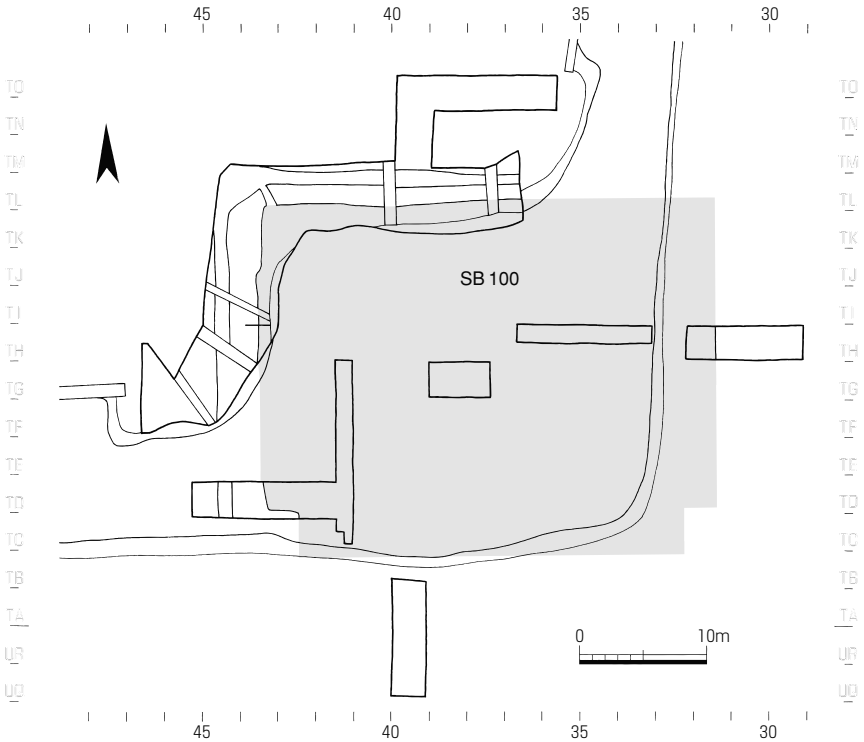


Fig. 5　第81-14次調査区　1:600

の部分でも基壇西辺はかなり削られている模様である。

1.29　TD42～45のトレンチを東に拡張し、南北トレンチとつなげる。

1.30　TD41～45のトレンチ掘り下げ。土壇の南側および、擁壁の迂回措置に向けて土壇北方の池内にもトレンチを設定する。

2.3　土壇北方池内トレンチの掘削開始。

2.4　土壇北方池内トレンチ東端で、柱掘形らしい遺構を検出。底近くのみ残る。掘込地業西北角から北西へのびる溝を一部掘り下げ、掘込地業にともなう排水溝であることを確認する。

2.5　掘込地業排水溝を半截。また、TI43の畦沿いを基壇西辺に直交するかたちで断ち割る。TD41～45トレンチでは、掘込地業の西辺が隅欠き状に屈折することを確認。

2.6　土壇北辺部と池内トレンチの清掃と写真撮影をおこなう。TI43の基壇西辺の断ち割りや西北角の排水溝の断面から、掘込地業の底には多数の礫を入れていることが判明。

2.7　掘込地業西辺に沿う南北溝の掘り下げ。やはり底に多数の礫を入れている。その西では掘立柱柱穴を精査し、3時期にわたることを確認。

2.10　土壇南辺トレンチの掘削にかかる。写真撮影に向けて調査区の清掃開始。

2.12　調査区清掃。降雪のため写真撮影は中止。

2.13　調査区の清掃と写真撮影をおこなう。

2.14　実測用水糸の設置。土壇東辺に東西トレンチを設定し、掘削を開始する。

2.17　遺構実測開始。基壇土は土壇南辺のトレンチまでは広がらず、東西棟建物であることが確定する。金堂とみてほぼ間違いない。

2.18　実測作業。土壇南辺トレンチ掘削。

2.19　実測作業。土壇南辺トレンチの写真撮影。土壇東辺トレンチの掘削を続行する。土壇北方池内トレンチの埋め戻し開始。

2.20　実測作業。土壇東辺トレンチで、基壇土とその東に広がる砂利敷を確認する。

2.21　実測作業。土壇東辺トレンチで掘込地業の東辺を検出し、掘込地業の東西幅は36.2mと判明する。

2.22　土壇東辺トレンチの清掃と写真撮影。

2.25　報道機関によるヘリコプター空撮。

2.26　土壇東および南辺トレンチの実測開始。

2.27　記者発表および地元説明会。実測作業。

2.28　平面図への標高記入。現地説明会準備。

3.1　現地説明会。参加者約1200名。

3.2　平面図のチェックと標高補測。

3.4　土壇南辺トレンチの埋め戻し開始。土壇東辺トレンチほかの土層線引き。

3.5　土壇東辺トレンチほかの土層図作成。基壇東辺はのちに破壊されている。

3.6　土壇東辺トレンチを深掘りし、掘込地業底面を確認する。土層図の作成。

3.7　土壇上中央部のトレンチ掘削と写真撮影。土層図の作成を続行する。

3.10　空撮に向けて調査区の清掃を開始する。土層図作成続行。

3.11　ヘリコプターによる空撮。標定点測量。

3.12　吉備池越しに地上写真を撮影する。掘込地業西北角の排水溝やTD41～45トレンチ掘込地業の断ち割り。土壇東辺トレンチの埋め戻し。

3.13　土壇西方の掘立柱穴の断ち割り。掘込地業西北角の排水溝とともに写真撮影をおこなう。断面実測と平面図への加筆。

3.14　遺構面保護のため調査区全面に川砂を敷く。土壇北辺部調査区とTD41～45トレンチ・土壇上トレンチの埋め戻し開始。

3.17　範囲を広げた地形測量を実施するため、測量基準点を増設し、基準点測量をおこなう。

3.18　擁壁以北の遺構の有無を確めるため、土壇西辺の調査区を一部拡張する。遺構面は完全に削平されている。西方土壇を含む地形測量開始。

3.19　昨日拡張した部分の実測作業。

3.21　基壇西辺の調査区以外の埋め戻し終了。地形測量続行。

3.24　埋め戻し完了。

3.25　畑部分の耕起。機材撤収開始。

3.26　すべての作業を終え、本年度の調査を完了する。

Fig. 6　発掘風景（第81-14次）

Fig. 7　実測風景（第81-14次）

B　第89次調査（塔・南面回廊）　1998年1月7日～4月17日

1.7　金堂西方の土壇とその南で、探査のための測量と調査区の設定をおこなう。
1.9　土壇部分の探査。
1.13　土壇南方の水田部分の探査。
1.19　機材搬入と調査区周辺の草刈り。
1.20　土壇南東の調査区から発掘を開始する。
1.21　土壇南辺の調査区および土壇南方の南北トレンチ（以下、南トレンチ）の掘削。
1.22　土壇南辺の調査区では、明黄褐色の山土の整地土が広がる状況を確認。
1.23　南トレンチを掘り下げる。
1.26　土壇南西の調査区の掘り下げを開始する。南トレンチの掘り下げ。
1.27　土壇南西および西辺の調査区の掘り下げ。
1.28　土壇西辺の調査区では掘込地業の痕跡は認められず、基壇の西端もこの調査区までは達しないことが判明する。
1.29　地区杭打設。南トレンチの東に、東南トレンチを設定する。
2.2　土壇南東および南辺の調査区と東南トレンチで、遺構検出と掘削をおこなう。
2.3　遺構検出ならびに掘削を続行。
2.4　土壇南辺の調査区では、土壇の周囲が次第に削られていった状況が明らかとなる。
2.5　土壇南辺では、ベースとなる暗褐色土が低くなる部分に山土の整地をした状況を確認。
2.6　土壇南東の調査区の土層写真撮影。南トレンチの掘り下げ。
2.9　土壇南東調査区の土層図作成。土壇南西の調査区と南トレンチの遺構掘削。
2.10　土壇南東調査区の土層図完成。土壇西辺および南西の調査区の遺構掘削。
2.12　土壇西辺の調査区と東南トレンチの遺構掘削。写真撮影に向けての清掃。
2.13　土壇周囲の調査区の写真撮影をおこなう。
2.16　土壇上の調査にはいる。土壇の中心から西へ向かうトレンチ（以下、土壇上西トレンチ）の掘削開始。
2.17　土壇上中央から屈折しつつ南へ向かうトレンチ（以下、土壇上中央トレンチ）とそこから東へ向かうトレンチ（土壇上東トレンチ）の掘削開始。基壇土の西側の落ちを出す。土壇南東および

Fig. 8　探査風景（第89次）

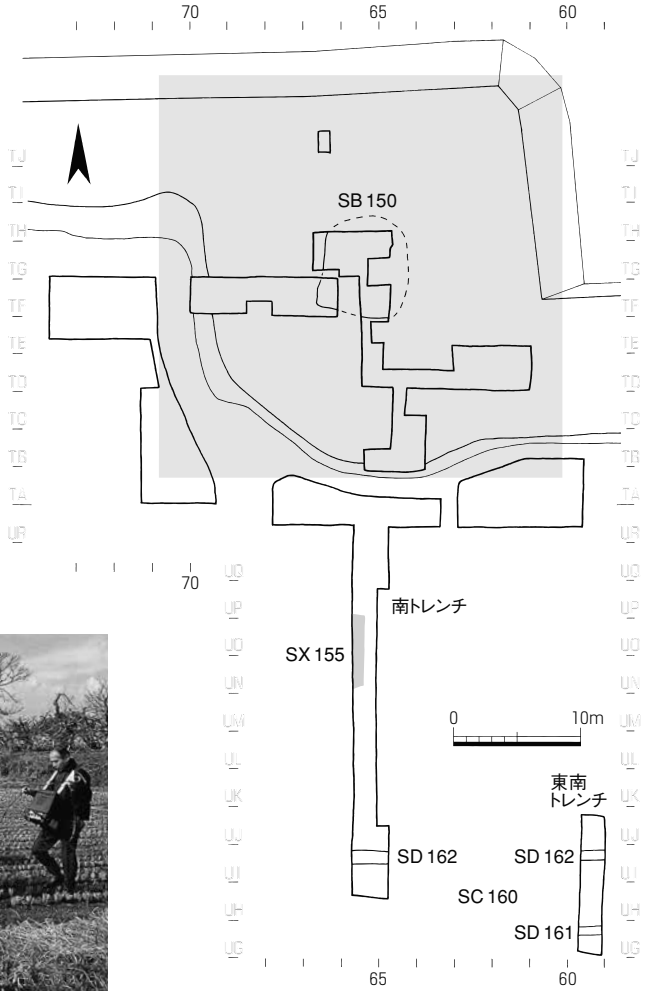


Fig. 9　第89次調査区　1:600

南辺の調査区と東南トレンチの実測。
2.18　基壇版築土には小礫が混じる。色調は上部が赤色系、下部が黄色系。
2.19　土壇上東・西トレンチの掘り下げ。土壇南トレンチの実測。
2.23　土壇上東トレンチを北へ一部拡張する。土壇上西トレンチの断ち割り開始。
2.24　土壇上中央トレンチ南端の断ち割り。基壇北端を探るため、TJ66地区に小調査区を設けるが、基壇土が続くことを確認。
2.25　土壇上西トレンチおよび中央トレンチ南部の断ち割り。
2.26　土壇上東・西トレンチの断ち割り。土壇上中央トレンチの断ち割りでは、南端のTB～TC付近まで版築が確認できる。土壇周囲の調査区の実測終了。
2.27　土壇上西トレンチの断面には、版築の途中でスロープ状を呈していたようすが明瞭に見える。掘込地業が存在しないことも確実となった。土壇中央の心礎想定位置を一部掘り下げ、拳大～半人頭大の礫群を確認する。土壇周囲の調査区の平面図に標高記入。
3.2　土壇中央の心礎想定位置および土壇東・中央トレンチ南端の掘り下げ。
3.3　土壇中央部の掘り下げは、一部版築層に達する。土壇中央トレンチ南端の断ち割り完了。
3.4 土壇上TF64～66では、大きな穴の輪郭がみえる。心礎抜取穴か。土壇中央トレンチ南端の土層線引き。
3.5　土壇中央部の巨大な穴は、塔（SB150）の心礎抜取穴と考えてよい。根石らしい石も認められる。土壇上西トレンチの断ち割りを延長。
3.6　土壇西寄りの版築途中にみられるスロープは、心礎を引き上げるためのもの。土壇上中央トレンチを拡張し、心礎抜取穴の西肩を確認する。
3.7　土壇中央部の土層図作成。
3.9　空撮に向けて調査区の清掃を開始する。
3.10　調査区の清掃。
3.11　ヘリコプターによる空撮と地上写真撮影。記者発表ならびに地元説明会の準備。
3.12　記者発表および地元説明会。
3.13　現地説明会準備。
3.14　現地説明会。参加者約1400名。
3.16　東南トレンチの西壁沿いを断ち割り、UG地区で東西方向の石組溝を検出する（SD161）。南面回廊（SC160）の雨落溝であろう。土壇南東および南辺調査区と南トレンチも壁沿いを断ち割る。南トレンチの北寄りでは小石敷（SX155）を確認。
3.17　土壇上中央トレンチの土層図作成。土壇南東の調査区から埋め戻しを開始する。
3.18　東南トレンチ石組溝と南トレンチ小石敷の写真撮影および実測。
3.19　東南トレンチと南トレンチのUI区で、東西方向の溝と側石の抜取痕跡を確認する（SD162）。南面回廊の北雨落溝にあたり、３日前に検出した石組溝は南雨落溝と判明した。溝の心々間距離は約６ｍである。写真撮影。
3.23　東南・南トレンチの回廊北雨落溝の精査と写真撮影をおこなう。
3.24　南面回廊の発見に関する記者発表。
3.26　埋め戻し続行。土壇上トレンチの平面実測と標高記入。土壇上西トレンチ土層図作成。
3.30　土壇上中央トレンチ南端部の土層剥ぎ取り。土壇上東トレンチの土層図を作成する。
3.31　土壇上東トレンチの断ち割りと西トレンチの土層剥ぎ取りをおこなう。
4.1　土壇上調査区の補測。埋め戻し続行。
4.2　土壇上中央トレンチの土層図作成。土壇上は西トレンチから埋め戻しを開始する。
4.3　土壇上に設けたトレンチの実測作業を完了する。埋め戻し続行。
4.7　土層図のチェック。埋め戻し続行。
4.8　水田部分の調査区埋め戻しが完了する。
4.9　土壇上トレンチの埋め戻し。
4.13　埋め戻し続行。
4.16　埋め戻し完了。機材撤収開始。
4.17　畑部分の耕起。本年度調査を完了する。

Fig. 10　現地説明会（第89次）

Fig. 11　土層転写風景（第89次）

C　第95次調査（南面回廊・西面回廊）　1999年1月7日～4月22日

1.7　機材を搬入し、中門の想定位置である主調査区（南区）から発掘調査を開始する。

1.8　南区の耕土除去（～1.12）。

1.13　東端から床土を除去し、遺構検出開始。

1.14　UG地区で東西溝とその両側の側石が顔を出す。昨年確認した南面回廊SC160の南雨落溝（SD 161）の東への延長にあたる。

1.18　西へ向かって順次床土を除去し、遺構検出作業をおこなう。南区全域に地区杭打設。

1.19　遺構検出を続行する。UN51で土坑（SK 193）を確認。

1.20　金堂と塔の中間点でも回廊の南雨落溝がまっすぐのび、想定位置に中門は存在しないことが明らかとなる。

1.21　西面回廊の確認を先行することとし、塔基壇西方のトレンチ（西区）の発掘にかかる。75～79地区の掘削開始。

1.25　遺構検出作業。TE・TF77 で柱穴を確認（SA204）。

1.26　遺構検出と掘削を続行する。

1.27　80 ～ 85 および10地区の掘削開始。

1.28　上記地区の遺構検出。

1.29　TE83で野井戸とみられる土坑を確認する（SE220）。

2.1　80 ～ 84 地区の調査区を北と東に一部拡張する。

2.2　TE81とTG81で土坑（SK216・217）を検出。これに切られるかたちで、黄色の山土を埋土とする溝（SD215）が西南西にのびる。

2.3　11～18地区の掘削にかかる。

2.4　11～18地区の遺構検出作業。

2.5　EF11～13で東西に並ぶ柱穴を３つ検出する（SA227）。

2.8　11～18地区の遺構検出続行。

2.9　EE11～18の東西溝（SD226）を確認。南区の調査を再開する。

2.10　南区の遺構検出作業。

2.15　西区80～83地区を南に拡張する。EE11～18東西溝に含まれる木片の発掘。

2.16　南区の遺構検出を続行する。西区TE83の野井戸の輪郭確認。EE11～18東西溝の木質遺物を取り上げ。

2.17　南区の遺構検出と西区EE11～18東西溝の木質遺物取り上げ、80～83地区遺構検出。

2.18　南区および西区80～83地区の遺構検出。

2.19　南区の遺構検出続行。西区80～83地区の遺構と84地区以西の黄色山土の広がりを追う。

2.22　南区の西壁沿いに排水溝を掘削する。西区80～85地区の遺構検出続行。

2.23　南区の遺構掘削と西壁の土層線引き。UI地区で、南面回廊北雨落溝および側石抜取痕跡を確認する。またUG・UH地区には、南雨落溝に北接して、それより新しい東西大溝（SD180）がある。南雨落溝の掘り下げ開始。西区は、EE10で西からの東西溝の続きを確認。78地区では砂混じりの南北溝を検出。西面回廊の東雨落溝か。

2.25　南区は、南面回廊南雨落溝の掘り下げと北雨落溝側石の抜取痕跡の検出を続行する。西区84地区以西を一部拡張。回廊西南角想定位置に小調査区（西南区）を設けて掘削開始。

2.26　西区の78地区で、西面回廊（SC200）の雨落溝（SD201）を確認。側石は抜き取られている。西雨落溝は水田畦畔直下と推定。

3.1　南区は南面回廊南雨落溝の掘り下げ。西区EE10の東西溝（SD226）は、ここが東端となる。溝の北側には、EF13からつづく柱穴あり（SA 227）。西南区の遺構検出。

Fig. 12　発掘風景（第95次）

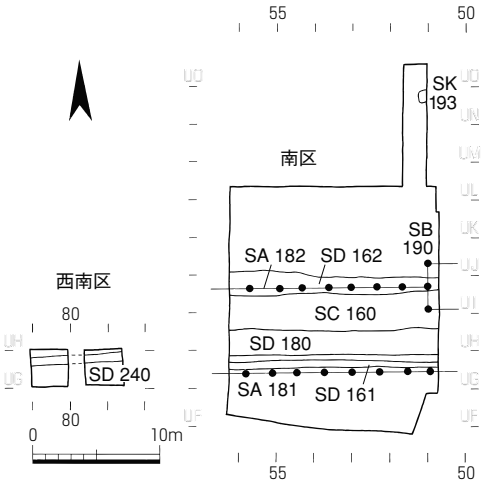


Fig. 13　第95次調査 南区・西南区　1:600

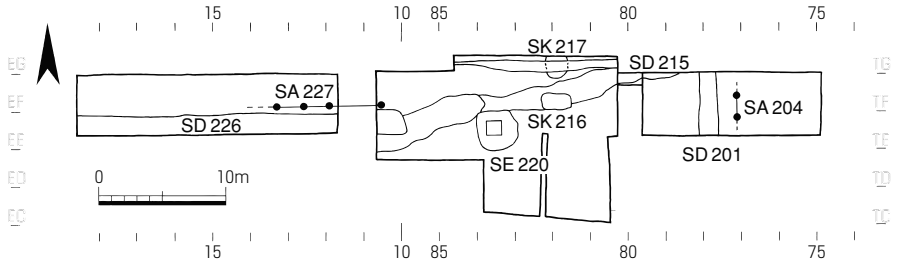


Fig. 14　第95次調査 西区　1:600

3.2　南区および西区の遺構精査。西南区では回廊南雨落にあたる石組溝は確認できない。

3.3　南区東端のUH～UJ地区で南北に並ぶ３基の柱穴を確認（SB190）。西区の清掃。

3.4　南区の遺構精査。西区は、写真撮影と土層図の作成をおこなう。

3.5　南区UG54～55では、回廊南雨落溝の南に接して、東西に並ぶ柱穴状の小穴を確認（SA181）。西区・西南区の写真撮影。

3.8　空撮に向けて、調査区の清掃と標定点の設置作業をおこなう。

3.9　ヘリコプターによる空撮。南区の地上写真撮影。

3.10　西区と西南区から平面実測開始。記者発表および現地説明会の準備にかかる。

3.11　記者発表。平面実測続行。

3.12　南区の細部写真撮影。現地説明会準備。平面実測続行。

3.13　現地説明会。参加者約360名。

3.15　西区EF11～13柱穴（SA227）断ち割り。西区の平面図作成と標高記入、土層図作成。

3.16　西区80～84地区の断ち割り。TF80から西南西へのびる溝（SD215）は、底部に大型の礫、最上部に黄色の山土を入れた一種の地業状を呈する。平面実測続行。

3.17　西区80～84地区の断ち割りを続行する。土層図作成。11地区以西は埋め戻しを開始。平面実測と標高記入続行。

3.18　西区77～84地区の断ち割りと土層図作成。

3.22　西区80～84地区の断ち割り続行。

3.23　西区80～84地区および西南区の断ち割り。

3.24　西区80～84地区の断ち割り、写真撮影。

3.25　断面実測および写真撮影。西区11地区以西と西南区の埋め戻し終了。

3.26　西区80～85および10地区の断ち割り。西面回廊西雨落溝の確認のため、水田畦畔を断ち割って調査する。

3.29　西区畦畔断ち割り部分の写真撮影と実測。石組溝自体は遺存せず、側石の抜き取りらしいくぼみは認められるが、きわめて痕跡的である。

3.30　南区のUG・UH地区東西大溝（SD180）を掘りはじめる。中層に瓦が堆積。西区80～85および10地区の埋め戻しを開始する。

3.31　南区東壁沿いの柱穴を断ち割る。西壁および北壁の土層線引き。

4.1　南区の断ち割りを続行する。UG・UH地区東西大溝の掘削と遺物取り上げ。

4.2　南区南面回廊の南雨落溝の南と北雨落溝に重複して、東西方向に並ぶ小柱穴を確認する（SA 181・182）。平面実測および断ち割り。

4.3　南区の実測作業をおこなう。

4.6　南区の実測を続行。

4.7　UG・UH地区東西大溝の掘削後、南区の埋め戻しを開始する。

4.8　南区の埋め戻し。

4.9　南区の埋め戻しを続行する。

4.12　南区の埋め戻しと西区の水田暗渠復旧。

4.13　西区の水田暗渠復旧と埋め戻し完了。

4.14～21　南区の埋め戻し。

4.22　南区の埋め戻し終了。機材を撤収し、本年度の調査を完了する。

D　第105次調査（僧房・東面回廊・金堂）　2000年1月7日～4月11日

1.7　中央区から掘削を開始する。

1.11　中央区および西区の掘削。

1.12　中央区・西区の掘削と地区杭打設。西区は橙黄褐色の地山面を出す。東区トレンチ設定。

1.13　中央区と西区の掘削および遺構検出作業。

1.14　中央区・西区の遺構検出と遺構掘削をおこなう。中央区では、平安時代の軒平瓦が出土。

1.17　中央区は、RB地区以南の瓦器を含む包含層を掘削する。西区北半部の土層写真撮影。

1.18　中央区RB地区以南の包含層掘削を続行する。西区は瓦器を含む包含層の掘削。

1.19　中央区は遺構掘削にかかる。平安時代の軒

丸瓦出土。西区では、L字状の３条の溝（SD288～290）とそれを切るコの字状の溝（SD285～287）を確認。

1.20　中央区の遺構掘削と西区包含層掘り下げ。

1.24　中央区の遺構検出と掘り下げ。西区の南端付近で自然流路を確認する。

1.25　中央区RB～RF包含層の掘り下げ。西区は、３条の自然流路（SD291～293）を掘削。

1.26　中央区の遺構検出作業。RB～RF間で柱穴を確認する。

1.27　中央区の遺構検出を続行する。東区北トレンチの掘削開始。地山上に粗砂と粘土の互層が堆積する。ある時期の自然流路か。

1.31　中央区はRB地区以北の遺構検出続行。東区北トレンチの25～26地区に瓦礫の堆積あり。

2.1　中央区全体の遺構検出作業。大型の柱穴が見え始める。東区南トレンチの掘削開始。

2.2　中央区のRD・RF地区に南北の側柱列をおく東西棟掘立柱建物（SB260）を検出。柱掘形の一辺1.5～1.8mと大きい。東区の壁削りと排水溝掘削をおこなう。

2.3　池内調査区（東端のトレンチ）の掘削にとりかかる。赤褐色の積み土らしい土層を確認するが、以南は池により削平されている。

2.4　中央区の掘立柱建物部分を拡張する。西区南半の包含層および遺構掘り下げ。

2.7　中央区拡張部分の掘削。池内調査区を東西に細長く拡張する。

2.8　中央区と池内調査区の拡張部分の掘削をおこなう。西区遺構精査。

2.9　中央区の掘立柱建物SB260が東へ１間分のびることが判明し、トレンチを再拡張する。東区北トレンチの掘削。

2.10　中央区の拡張部分と東区北トレンチの掘り下げ。

2.14　中央区拡張部分の掘り下げを続行する。池内調査区の清掃。

2.15　中央区の掘立柱建物の東妻を確認する。西区と池内調査区の写真撮影。

2.16　中央区掘立柱建物の東妻柱を検出する。東区南トレンチの掘り下げ。

2.17　東区南トレンチの掘り下げ。帯金具や軒丸瓦などが出土。

2.18　東区南トレンチの西端近くで、金堂基壇外周をめぐる溝（SD250）を検出する。25地区南北溝（SD306）の掘り下げ。瓦器出土。

2.21　東区南トレンチの西端で金堂基壇の掘込地業を確認。北トレンチは、SD306およびそれから分岐する東西溝（SD307）の掘削。

2.22　東区北トレンチの遺構検出。池内調査区（東端のトレンチ）を断ち割り、地山の落ちこみを確認する。赤褐色の積み土の下から土師器高杯（飛鳥Ⅰ）が出土。

2.23　池内に５m間隔で設定した６ヵ所のトレンチを順次掘削し、写真撮影をおこなう。赤褐色の積み土は中軸線から西へ40m以上のび、基壇土ではなく、整地にかかわるものとみてよい。

2.24　池内調査区の土層図を作成し、埋め戻しを開始する。中央区は写真撮影に向けて清掃。

2.25　中央区写真撮影。東区南トレンチ遺構検出。

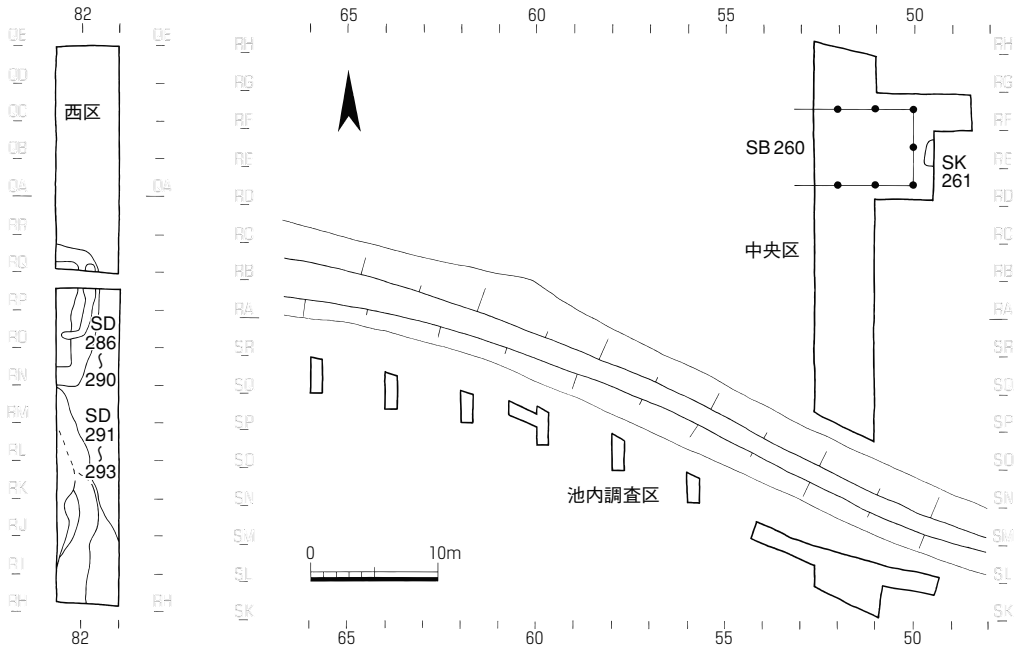


Fig. 15　第105次調査 西区・中央区・池内調査区　1:600

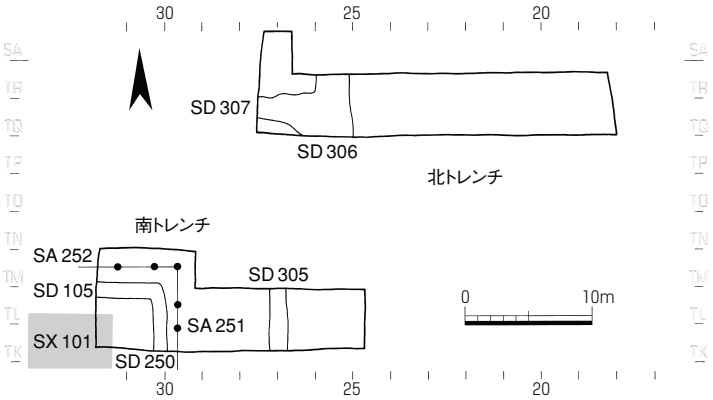


Fig. 16　第105次調査 東区　1:600

2.28　東区南トレンチでは、東面回廊SC300の西雨落溝（SD305）を検出する。池内調査区の埋め戻し終了。

2.29　東区南トレンチの西雨落溝を掘削し、埋土中の瓦を露出させる。

3.1　東区南トレンチの西雨落溝と瓦出土状況を写真撮影。回廊部分を精査するが、礎石の痕跡や足場穴は認められない。西区清掃。

3.2　東区北および南トレンチを拡張する。

3.3　東区北および南トレンチの掘削。東面回廊西雨落溝の土層を再検討し、本来は石組溝であったことを確認する。

3.6　東区北トレンチ写真撮影。南トレンチ拡張部分で、金堂基壇をめぐる溝とそれに沿う柱穴（SA 251・252）を検出する。

3.7　東区南トレンチ西壁の写真撮影と実測。空撮に向けて調査区の清掃をおこなう。

3.8　ヘリコプターによる空撮と東区南トレンチの写真撮影。記者発表準備。

3.9　記者発表および地元説明会。並行して実測用水糸を設置する。

3.10　中央区の平面実測。現地説明会準備。

3.11　現地説明会。参加者約600名。
央区の平面実測。現地説明会準備。

3.13　西区の断ち割り調査と土層図のチェック。

3.14　中央区平面実測完了。西区の埋め戻しを開始する。

3.15　中央区土層図作成。東区平面実測開始。

3.17　中央区掘立柱建物（SB260）柱穴の断ち割り。柱掘形の底に石をおくものあり。

3.21　中央区の断ち割りを続行する。東区の平面実測と標高記入。西区の埋め戻し終了。

3.22　中央区の埋め戻しを開始する。東区の平面実測と標高記入、土層図作成。

3.23　東区南トレンチの金堂基壇周溝を断ち割る。礫が３～４段積み上げられている。北トレンチ標高記入と土層図作成。

3.24　東区南トレンチの柱穴（SA251・252）の断ち割りと実測をおこなう。

3.27　東区南トレンチの金堂基壇周溝断ち割り続行。底面の標高は、第81-14次調査の西北隅部分にくらべて約50㎝高い。

3.28　東区南トレンチ北壁の土層区分。

3.29　東区南トレンチ北壁の土層図作成。

3.30　東区南トレンチの回廊部分の断ち割りと精査をおこなう。

3.31　東区南トレンチ回廊の断ち割り続行。足場穴は確認できない。中央区の埋め戻し終了。

4.3　東区の埋め戻しにかかる。

4.4　機材撤収。

4.5～10　東区の埋め戻し続行。

4.11　水田部分の耕起。本年度の調査完了。

Fig. 17　現地説明会（第105次）

Fig. 18　現地説明会（第105次）

E　第111次調査（中門・僧房）　2001年1月9日～4月24日

1.9　南区の掘削を開始する。
1.10　地区杭の打設。
1.11　南区の掘削。
1.12　掘削続行。
1.15　南区の東北角から南西に向かって、旧流路の砂礫層が堆積する。
1.16　南区の掘削を続行。
1.17　西壁沿い排水溝に玉石がかかる。回廊基壇の南雨落溝か。
1.18　UG42で南北に並ぶ２列の玉石を確認。昨日の玉石が回廊南雨落溝とすれば、それから折れる中門基壇の西雨落溝となる可能性あり。
北壁の土層図作成。
1.19　UH地区で東西溝を検出。第95次調査の藤原宮期の溝SD180の延長にあたる。
1.22　南区北端より素掘小溝の掘り下げと遺構精査を開始。
1.23　UI38～42で、７尺間隔で東西に並ぶ柱穴を確認する（SA325）。足場か。
1.24　UG地区に石の抜取痕跡らしいものあり。中門基壇の南雨落溝か。
1.26　土層線引き。
1.29　南区東壁と西壁の土層図作成。北区の掘削を開始（南北39m×東西５mのトレンチ）。
1.31　南区の精査をおこなうが、依然、中門基壇の北雨落溝は認識できない。UI36～37で、柱列（SA325）の延長を検出する。
2.2　南区西壁の土層図作成。北区の排水溝を掘削し、地区杭を打設する。
2.5　南区南壁の土層図作成。北区掘り下げ。
2.7　南区土層図作成。北区の掘り下げ。
2.8　南区土層図作成。北区掘り下げ続行。
2.9　北区の掘り下げを続行する。
2.13　北区掘り下げ。北壁寄りでは整地土が厚く、地表から地山まで１m以上ある。
2.14　SI地区で東西溝（SD350）を検出。
2.15　北区遺構精査。東西溝SD350を完掘する。奈良時代の遺物が出土。
2.16　北区遺構精査。SN地区以北は、地山が急激に下がり、舌状丘陵の縁辺部にあたる。
2.19　北区の清掃と写真撮影をおこなう。実測用水糸の設置と土層線引き。
2.20　北区の平面図および土層図作成。
2.21　北区の平面図標高記入と土層図作成。SN地区以北の整地土を掘り下げる。
2.22　北区のSP・SR地区で大型の柱穴を確認する（SB340）。北側の隣接地で桜井市文化財協会が発掘した僧房とみられる建物（SB400）とほぼ同規模。北側の柱穴の北と南側の柱穴の南には東西溝が走る。溝には造り替えがある。
2.23　建物の規模を明らかにすべく、東西に大きく拡張した調査区を設定。SQ30柱穴より吉備池廃寺の軒丸瓦出土。SG～SH31では、東西棟掘立柱建物（SB348）の東妻を検出する。
2.24　北区東拡張部分の掘削。
2.26　北区東・西拡張部分の掘削。SO28～29で石敷を検出。
2.27　北区東・西拡張部分の掘削と地区杭打設。
2.28　北区拡張部分の掘削。東拡張部分は柱穴が見えないため、整地土をはずす。
3.1　北区拡張部分の掘削。東拡張部分の整地土下で柱掘形の輪郭をようやく確認する。整地土には土師器高杯（飛鳥Ⅰ）と焼土が含まれる。『大安寺縁起』が伝える火災に関わるか。
3.2　北区の東拡張部分の焼土と高杯の写真撮影。西拡張部分も、整地土上で抜取穴は見えるが、柱掘形は見えない。SQ34～35で別の掘立柱建物（SB345）の柱穴を検出。
3.3　南区の精査。南面回廊の両側の雨落溝が中門部分で屈折することを確認し、３×２間程度の中

Fig. 19　発掘風景（第111次）

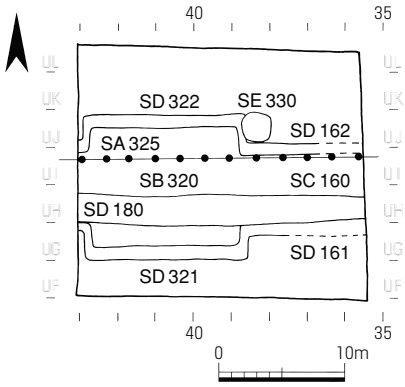


Fig. 20　第111次調査 南区　1:600

門の存在が明らかとなる。回廊の礎石抜取穴らしい土質の違う部分（SX324）も検出。UI地区の東西柱列（SA325）は、第95次調査のSA182の延長にあたるが、中門の北雨落溝ないし側石抜取痕跡の埋土の上から見える。

3.5　南区の中門および回廊の雨落溝の精査を続行する。北区は、西拡張部分の遺構検出。西壁にはSB340の柱掘形がかからない模様。東西10間か。建物の周囲をめぐる溝は上下２層あり。

3.6　南区の中門・回廊北雨落溝の精査。北区西拡張部分の建物外周溝の掘削。建物部分をいったん掘りくぼめて柱掘形を掘り、柱を立てたのちに整地を施しているらしい。

3.7　南区は中門基壇東北角付近の精査と遺構掘削をおこなう。北区も遺構検出を続行。SP32以北に設定した南北畦の土層図を作成する。

3.8　南区は中門東北角付近の雨落溝の精査。南面回廊北雨落溝は削平のためか途中でとぎれ、東壁まで続かない。北区は遺構検出とSB340柱穴の掘り下げ。抜取穴に瓦などが含まれる一方、掘形には炭や焼土が混じり、建築前に近くで火災があったことをうかがわせる。なお、これと埋土の状況を異にするSB345は、４×２間の規模で妻柱をもたない構造となる模様。

3.9　南区の中門北雨落溝を検出する。北区はSB340柱穴の検出と掘り下げ続行。

3.10　南区の南北畦を除去。

3.11　南区の中門・回廊北雨落溝を掘り下げる。中門の礎石痕跡を探すが、見つからない。

3.12　南区は清掃と中門柱想定位置の精査。南側柱筋にそれらしい土質の違いが認められるが、きわめて痕跡的である。北区はSB340柱穴の検出と掘り下げ。西の妻柱を確認する。

3.13　南区写真撮影。北区は東拡張部分を精査し、東壁際でSB340の柱掘形を検出する。柱間は、桁行が約2.5m、梁行は約2.7m。

3.14　北区の東壁際でSB340の東妻柱を検出し、建物規模は11×２間と確定。清掃後、北区の写真撮影をおこなう。

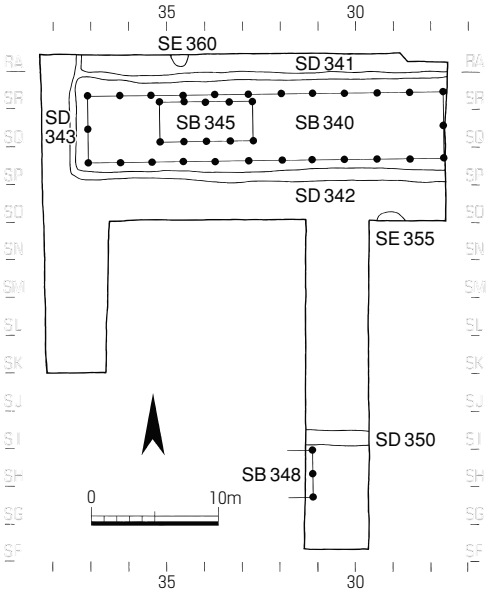


Fig. 21　第111次調査 北区　1:600

3.15　記者発表準備。

3.16　ヘリコプターによる空撮。北区写真撮影（補足）。記者発表と地元説明会。

3.19　調査区の清掃と現地説明会準備。

3.20　現地説明会。参加者約1000名。

3.21　南区と北区の平面実測。

3.22　南区は中門雨落溝の精査と藤原宮期東西溝（SD180）・UJ38大土坑（SE330）の掘り下げ。中門の雨落溝は直角に屈折せず、ややカーブを描く。北区平面実測。

3.23　南区のSD180・SE330の掘削を続行する。北区は平面実測および標高記入。

3.26　南区のSD180・SE330の掘削と清掃。

3.27　南区写真撮影。

3.28　南区の断ち割り調査。あわせて、第95次で検出した東西方向の柱列SA181の延長を精査するが、確認できない。

3.29　南区の断ち割りと図面チェックをおこない、埋め戻しを開始する。北区土層線引き。

3.30　北区の土層線引きと土層図作成。

Fig. 22　現地説明会（第111次）

Fig. 23　現地説明会（第111次）

Fig. 24　撮影風景（第111次）

Fig. 25　土層転写風景（第111次）

4.2　北区土層図作成。

4.3　北区東壁にかかるSB340東南隅柱は、別の先行する柱穴（整地以前のものと判断）を切っているらしい。土層図作成続行。

4.4　北区SO28～29で井戸状の落ち込み（SE355）を確認。2.26に検出した石敷はこれにともなうものだろう。清掃後、写真撮影。SB340柱穴の断ち割りを開始する。

4.5　北区SB340の断ち割りと断面図作成。

4.6　北区の写真撮影と断面図作成。RA34の土坑は井戸か。南区の埋め戻し終了。

4.9　北区のSB340以外の柱穴その他を断ち割る。断面図・土層図作成。図面チェック。

4.10　北区の断ち割りと断面図作成、図面チェック。RA34土坑は曲物を据えた井戸らしい（SE360）。北区の埋め戻しにかかる。

4.11　北区東壁でSB340東北隅柱穴を含めた土層剥ぎ取りをおこなうため、調査区を一部再拡張する。あわせて東壁際を掘り下げ。

4.13　北区SB340東北隅柱穴の平面検出と実測後、断ち割り。かなり深い。

4.16　北区東壁の土層線引きと実測、写真。

4.17　北区東壁の土層剥ぎ取り。平面の補測と図面チェック。

4.18～23　北区の埋め戻し。

4.24　北区埋め戻し終了。機材を撤収し、本年度を含めて５年間にわたる共同調査を完了する。

F　桜井市第９次調査（僧房）　1998年10月9日～12月11日

10.9　調査機材を現地へ搬入し、調査区の設定をおこなう。

10.12　重機で表土を掘削し、遺構面を出す。調査区の東半では遺構が確認されるが、西半は削平のため確認できない。

10.13　遺構面の精査と遺構検出作業。藤原宮期の土器片少量と、吉備池廃寺創建軒丸瓦が１点出土した。並行して素掘小溝や小柱穴の掘削にとりかかる。これらには13世紀以降の瓦器椀の細片が含まれている。

10.14　素掘小溝と中世の小柱穴の掘り下げを続行し、素掘小溝はすべて完掘する。藤原宮期のものとみられる柱穴も数基確認。また、2.3×1.6mと大型の掘立柱掘形を確認したが、あまりの大きさに最初は井戸と考える。

10.19　中世の小柱穴の断面図を作成し、写真を撮って完掘する。継続して藤原宮期の柱穴の掘削。調査区の東端は谷へと落ち込む地形のため、整地土を入れて造成した模様。

10.20　南北溝SD402の掘削を開始する。藤原宮期の遺物が集中して出土。藤原宮期の柱穴群の調査を継続。

10.22　ひきつづき、藤原宮期の柱穴群の調査をおこなう。

10.23　調査区東半を南へ一部拡張し、藤原宮期の柱穴と南北溝SD402の延長を確認する。また、測量用基準杭を打設して、平面実測を開始。あわせて個別遺構の写真撮影をおこなう。

10.26　藤原宮期の柱穴群の掘削を継続する。これらに切られるかたちで、先に井戸と考えたものを含む６基の大型の柱掘形が規則的に並ぶことが明らかとなる。

10.28～29　重機で調査区を北へ拡張するとともに、南側も人力で拡張。さらに５基の大型柱掘形を確認する。これらが東西棟建物SB400としてまとまることが判明。

10.30　拡張部分の中世遺構および藤原宮期の溝と柱穴群の調査をおこなう。測量用基準杭を追加して打設する。

11.2　SB400の柱穴の掘削を開始。柱掘形はいずれも南北方向に長い長方形を呈し、抜取穴の上部は地山に類した土で埋まっている。出土遺物は飛鳥時代に限られており、吉備池廃寺に関連する建物と判断した。寺域内における位置などから、僧

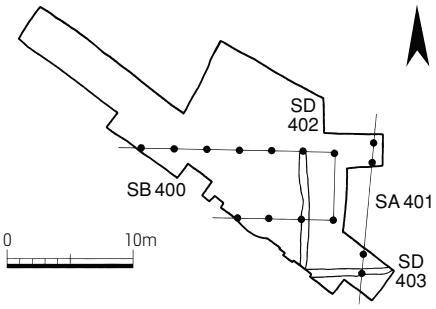


Fig. 26　桜井市第９次調査区　1:600

Fig. 27　発掘風景（桜井市第９次）

房の可能性が推定される。

11.4～10　SB400の柱穴の調査続行。柱はすべて抜き取られているが、遺物はさほど多くない。また、底に径30㎝程度の柱根や柱痕跡を残すものが多い。柱掘形の規模に比べるとやや貧弱か。

11.11　SB400柱穴群の調査を継続する。重機で北側の拡張区を東へ再拡張する。

11.12　大福地内における大藤原京関連遺跡第24次調査のため、作業を一時中断。

11.18～25　調査を再開する。ひきつづきSB400柱穴の掘削をおこない、ほぼ完掘する。

11.26　断ち割り作業ののち、写真撮影へむけて調査区全体の清掃をおこなう。

11.27　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影ならびに地上写真の撮影をおこなう。その後、実測作業。

11.30～12.3　実測作業。

12.4　調査区東側のベースと整地土の断ち割り。掘立柱南北塀SA401を確認する。

12.7　南北塀SA401の調査。実測と写真撮影をおこなう。記者発表にむけて調査区全体を清掃。

12.8　記者発表。

12.9～11　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

G　桜井市第11次調査（北外周部）　2000年12月4日～2001年3月20日

12.4　調査機材を搬入し、東北東～西南西方向に、平行する２本の調査区を設定。北側のトレンチから人力で掘削を開始する。

12.5～7　北側のトレンチの掘削続行。東半部は近世に大きく切り崩されている。

12.8　北側のトレンチの西半部には比較的厚い中世の整地土があり、この下で幅3.8mの溝状の遺構を確認した。南側のトレンチの掘削を開始する。東半部はやはり大きく切り崩されているが、西半部は覆土が浅く、中世の整地土は認められない。地山面で柱穴らしき遺構を確認。

12.11～13　南側のトレンチの掘削続行。

12.14　遺構が多数確認されたため、重機を投入して調査区を拡張することにする。

12.15　重機による調査区の拡張と遺構面の精査をおこなう。柱穴多数と溝・竪穴住居などを検出する。

12.18　柱穴と切り通しSX421、南北溝SD422の掘削を開始する。

12.19　測量用基準杭を打設する。柱穴と切り通しSX421、南北溝SD422の掘削続行。切り通しは完掘する。柱穴は、重複関係から大きく３時期に分けることができる。

12.20～22　ひきつづき柱穴の調査をおこなう。土器片などの出土遺物はすべて藤原宮期より古く、吉備池廃寺に関連する建物を含む。

12.25　柱穴の調査続行。竪穴住居SB426の調査を開始する。

12.26～27　柱穴と竪穴住居SB426の調査。

12.28　柱穴と竪穴住居SB426の調査続行。平面実測を開始する。

1.4　竪穴住居SB426の調査完了。

1.5　柱穴の調査を完了する。

1.9　調査区の清掃後、産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影をおこなう。その後、地上写真の撮影と実測作業。

1.10　実測作業。

1.11　発掘機材撤収。

1.12　実測作業。本日で現地調査は終了。遺構の保存協議のために記者発表や埋め戻しは先送りと

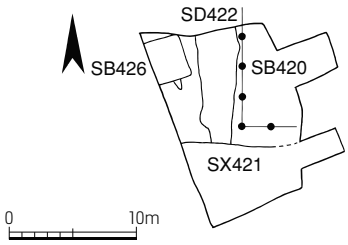


Fig. 28　桜井市第11次調査区　1:600

Fig. 29　現地説明会（桜井市第11次）

なり、調査区の養生をおこなう。

3.14　保存協議の完了により、現地の清掃後、桜井市立埋蔵文化財センターで記者発表。その後、報道機関は現地撮影。

3.20　奈良国立文化財研究所の飛鳥藤原第111次調査と現地説明会を共催する。参加者約1000名。

3.22～24　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

H　桜井市第12次調査（南外周部）　2001年7月11日～2001年7月24日

7.11　機材搬入。重機で盛土を除去し、調査区を設定する。現地表下約1.2mで、遺構面を覆う包含層に達する。

7.12　重機掘削続行。包含層以下は人力で掘り下げ、遺構面を出す。調査区の北寄りでは石組東西溝SD441の石列を検出したが、途中でとぎれている。この石組溝の南には、わずかなベースの高まり（SX443）があり、その部分は包含層が覆っていない。瓦片や土器片が少量出土。

7.13　石組溝SD441の延長を確認するため、調査区を東へ一部拡張する。

7.17　拡張部では溝自体は存在するものの、石は残っていない。調査区南半の包含層を掘り下げる。測量用基準杭を打設し、実測を開始する。

7.18　調査区南半の包含層の掘削完了。湧水が激しく、遺構検出に困難をともなう。

7.19　調査区南半を精査し、東西溝２条を検出する。それぞれ包含層上面とベース面から掘り込んでおり、ベース面より切り込む溝SD442は、溝内に多数の石が落ち込んだ状態で確認された。先に検出した石組溝SD441とともに、建物にともなう雨落溝か。その場合、両者の間のベースの高まり（SX443）は基壇の痕跡となる可能性がある。調査区全体の精査と写真撮影。

7.20　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を予定していたが、機器の不調により延期。実測作業を継続する。

7.21　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影。その後、実測作業に移り、完了。

7.23　機材の撤収と調査区の排水作業。

7.24　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

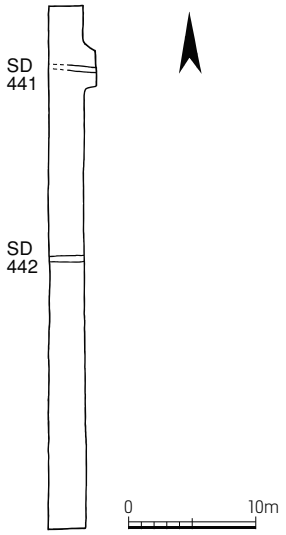


Fig. 30　桜井市第12次調査区　1:600

第Ⅲ章　遺　　構

1　遺跡の立地と地形

地形の概況　吉備池廃寺は、奈良盆地の南東に広がる竜門山地の北西の縁辺部に位置する。竜門山地は、中生代末期頃に形成された花崗閃緑岩および石英閃緑岩を基盤岩とし[1)]、大和川（初瀬川）の支流である寺川および米川の源となっている。竜門山地における両河川の沿岸には開析谷が発達しており、一方、それが盆地に流出する部分にあたる沖積地との境界付近は、これらの浸食を免れた低い丘陵が点在する。

吉備池廃寺の北側に残る高まり（字「高部」）もそのひとつである。吉備池廃寺は、北西～西北西へ流れる寺川と米川にはさまれた部分の米川寄りに位置するが、この小丘陵をとりこみ、その南側に広がる沖積地に伽藍が展開していた。なお、こうした小丘陵は、すでに失われたも

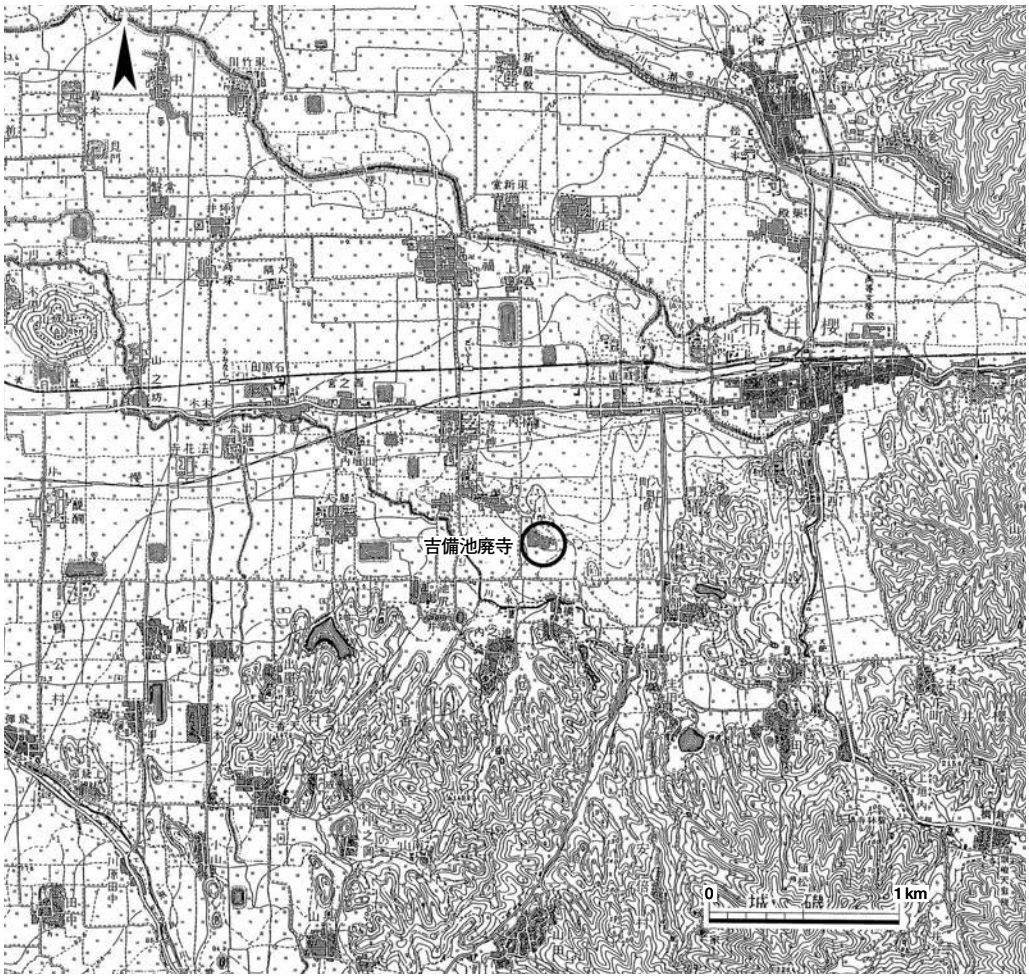


Fig. 31　吉備池廃寺周辺地形図　1:40000（1/25000 地形図「櫻井」(1957年)、「畝傍山」(1950年）に加筆）

のもあるけれども、ほぼ米川の流路の方向に沿って、そこから南東方向へとぎれとぎれに存在した。現在の地形図では確認できないものが多いが、古い地形図には、これらの地形がよく示されている（Fig. 31）。

河川の侵食

上記の小丘陵を浸食した営力は、米川および寺川の分流（桜井市上之宮の南端あたりで寺川の現流路から分岐して、メスリ山古墳の南側を北西方向に下る谷筋）であったと推定される。おそらく、丘陵の南西側は米川、北東側は主として寺川の分流の浸食を受けたのであろう。丘陵北東側の地形が、南西側にくらべて一段低くなっているのは、今と同様に、寺川の下刻作用が米川にくらべて活発であったことによるものとみられる。そうした丘陵北東側の浸食のようすは、丘陵の東側に位置する桜井市第９次調査区の水田や、その下段（北東）に位置する水田の形状と段差からもうかがうことができる。

もっとも、寺域の大部分が丘陵の南方におかれた吉備池廃寺の場合、地形の形成には、寺川よりも米川が大きく関わっていた。ちなみに、吉備池廃寺の寺域は、現在の米川から北へ200ｍほど隔たっているが、「第Ⅱ章１　調査地域」でも述べたように、この流路は、奈良盆地のほぼ全域に条里地割が施工されたのちに付け替えられたものである可能性が高い。近年の調査事

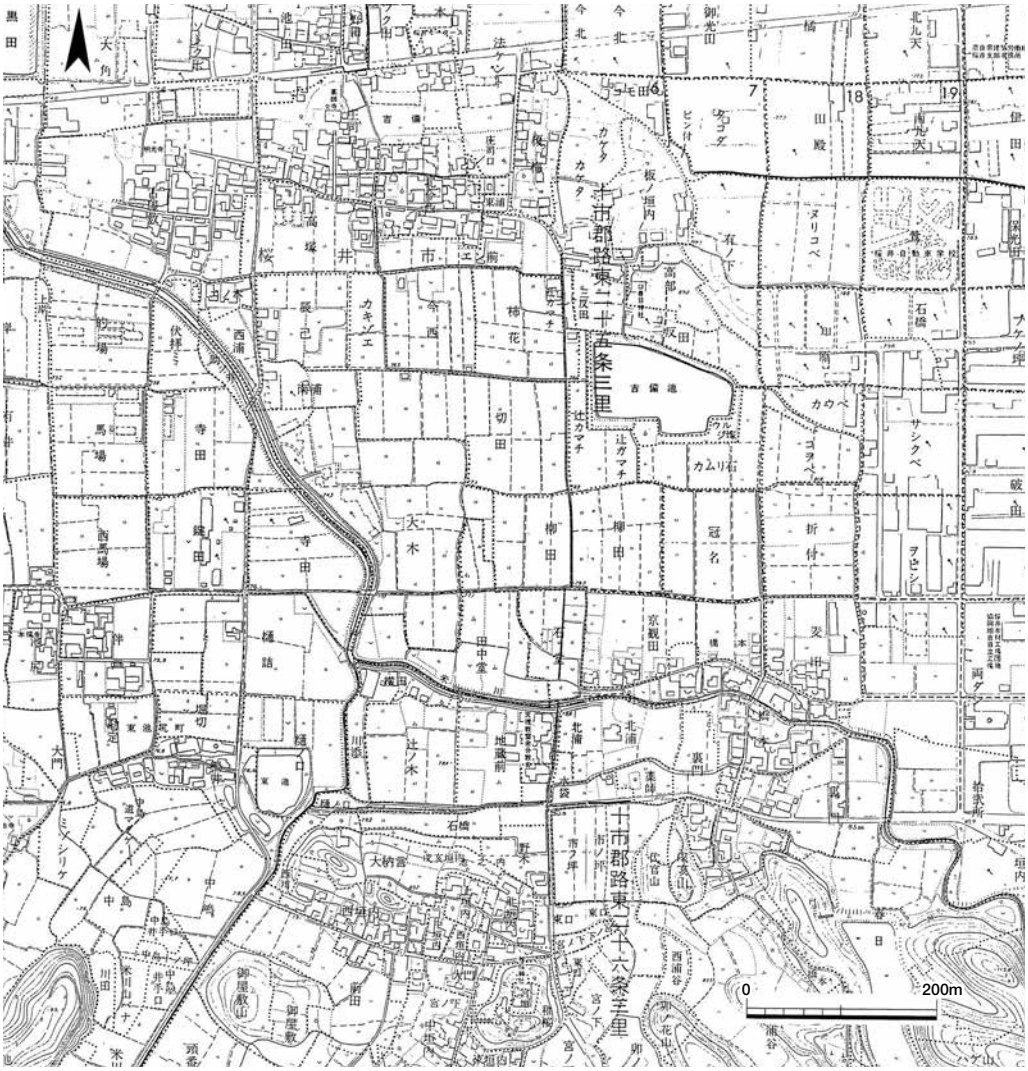


Fig. 32　吉備池廃寺周辺の地形と条里　1:8000（『大和国条里復原図』より）

例によると、そうした条里にあわせるかたちで河道の付け替えがおこなわれたのは、10世紀頃と推定されており[2)]、おそらく、それ以前の米川は、もう少し吉備池廃寺に近い位置を北西方向へと流れていたのであろう。米川の現流路の北岸には、字「石堂」ほかに屈曲した斜行畦畔や水田の段差が残るが、これらは、その痕跡とみることができる（Fig.32）。また、こうした条里の施工によって、本来、緩傾斜面をなしていた吉備池廃寺の一帯は、水田の連続する現在に近い景観へと変化することとなった。

旧河道痕跡

吉備池廃寺の立地　ここで、発掘調査の成果とあわせて、伽藍周辺のもう少し詳細な立地を検討しておくことにしよう（Fig.33）。

まず、上述のように、伽藍の北方には、浸食がおよばなかった基盤岩の残丘があるが、これに近接して設けた第105次調査中央区・西区と東区北トレンチ、第111次調査北区、桜井市第９次調査区では、いずれも花崗岩風化土の地山を確認している。基盤岩を構成する岩石が明瞭なモザイク状をなす部分もあり、基盤岩が原位置で風化したものであることがわかる。本来、この部分は、東南東に残る別の高まりへとつづく一連の丘陵であったことになる。

風化基盤岩

一方、そうした丘陵の南西の縁辺部にあたる第81-14次調査土壇東辺トレンチ、第105次調査の池内調査区と東区南トレンチでは、灰黒色～灰色粘土の堆積を確認している。また、そこから南西にかけての広い範囲では、青灰色ないし暗褐色～黄褐色を呈する微砂～粗砂・砂礫の堆積が認められる。これらは、現在、南方を流れる米川に由来するものであり、金堂や塔をはじめとする主要伽藍の大半は、そうした河川堆積物の上に立地している。

また、発掘調査で確認した自然堆積層上面（地山面）の標高を仔細に検討すると、第81-14次調査の対象とした金堂土壇の南から、第89次調査の対象となった塔土壇および第95次調査西区にかけて、東南東から西北西へ向かう等高線の張り出しがあり、舌状にのびる微高地の存在を知ることができる。これは、先述したように、微砂～粗砂・砂礫の堆積からなるが、これと北方の丘陵との間は、浅い谷状となって上記の灰黒色～灰色粘土が堆積し、反対の南側は、現在の米川の流路に向かってなだらかに傾斜する地形を示している。したがって、この微高地は、米川の旧流路の右岸（北岸）に沿って形成された自然堤防とみてよく、そこから北方の丘陵にかけての間が、狭い後背湿地となっていたものと推定される。一方、微高地の南側は、米川の旧流路に相当することになる。ただし、発掘調査の成果が示すように、この旧流路は、吉備池廃寺創建時には完全に埋没していた。

自然堤防と後背湿地

伽藍造営に伴う地形改変　さて、以上のような地形は、吉備池廃寺の伽藍造営にともなって改変を受ける。それらがもっともよく窺えるのは、第89次調査の塔基壇周辺と第105次調査の池内調査区で確認した整地である。

まず、塔基壇周辺では、旧表土の上に厚さ20～40㎝の明黄褐色の山土による整地がおこなわれ、その上から基壇の版築が開始されている。こうした整地は、金堂基壇では認められないが、これは金堂基壇が丁寧な掘込地業をおこなっていることと無関係ではないだろう。金堂の位置は後背湿地にかかることから、より堅固な掘込地業が必要とされ、塔は、地形的により安定した自然堤防上に位置するため、掘込地業を伴わない整地で充分と考えられたのではないか。

山土の整地

一方、第105次調査の池内調査区では、古墳時代の終わりから飛鳥時代にかけての流路ないし低湿地を灰色～灰黒色粘質土で埋め、さらに赤褐色砂質土と暗灰色～黄灰色砂質土の互層か

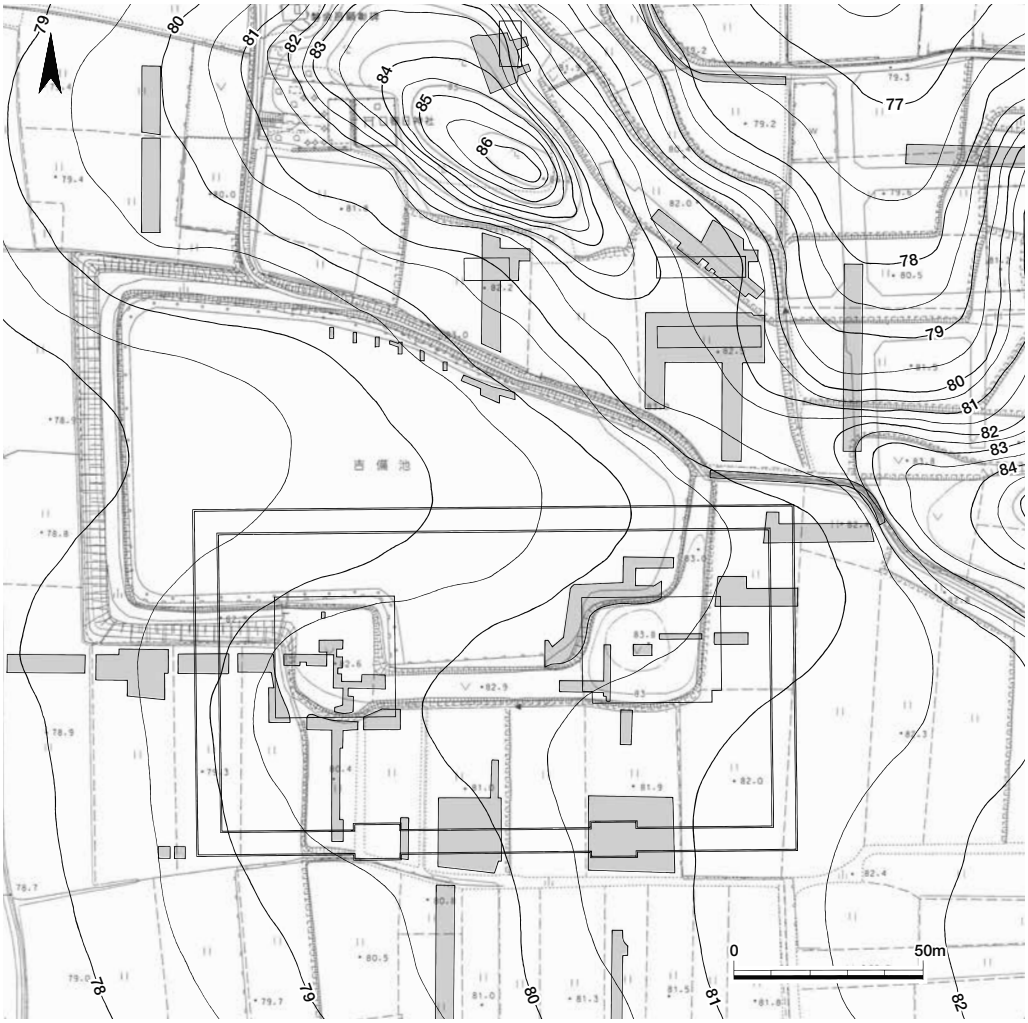


Fig. 33　吉備池廃寺周辺の旧地形復元　1:2000

らなる整地を重ねた状況を確認した。ともに吉備池廃寺の創建にかかわるものと判断してよく、前者の整地土に含まれる飛鳥Ⅰの土器は、その年代の上限を示すものといえる。また、後者の整地土の広がりは東西50m以上に及び、さらに西方へと続いている。小丘陵南辺の後背湿地が、広い範囲にわたって整地された状況がうかがえよう。

以上のほか、切土もおこなわれた。たとえば、伽藍北方に残る小丘陵の南辺は、東西方向に近い直線的な形状を呈しており、人為的に切り崩されたことが明らかである。これ以外にも、同様の残丘が南東方向へ連続していたと考えられるが、その多くも削平を受けたものと推定される。伽藍の造営にさいしては、こうした丘陵を削って平坦面を確保するとともに、その土を用いて谷地形や低湿地を整地する、といった作業がおこなわれたのであろう。吉備池廃寺の整地土や金堂・塔の版築土の主体をなす黄褐色～橙褐色系統の山土は、こうした伽藍近辺の丘陵の切り崩しによって調達されたものとみて誤りないと思う。

丘陵の切土

1）西宮克彦「地質」『桜井市史』下巻、桜井市役所、1979年。堀井甚一郎「地形」『同上』。

2）山川 均「奈良盆地における条里制の展開とその特質」『条里制研究』第9号、条里制研究会、1993年。山川 均「中世集落と耕地開発」『中世集落と灌漑』大和古中近研究会、1999年。

2　遺構各説

A　金堂SB100とその周辺（PLAN 3，PL.4～7）

遺存状況と基本層序　吉備池東南部の池側に張り出した土壇とその周囲で、金堂基壇の掘込地業SX101と版築土を確認した。基壇の縁辺部は削平されているが、掘込地業は、基壇西北部にあたる池底でも明瞭に遺存している。また、土壇の中央部は耕作土が堆積し、その大半は基壇土をすき込むことによって形成された土とみられる。このため、土壇上の礎石やその据え付けおよび抜き取り痕跡、根石などに関しては、調査区が限られたこともあって、明確にしえなかった。一方、土壇東側の水田では、基壇東縁の掘込地業ラインを明瞭に検出しただけでなく、基壇外に広がる砂利敷SX103を検出し、遺存状況は比較的良好である。ただし、基壇外装に関する遺構はどの調査区でも確認できず、またそれにかかわる遺物も出土しなかった。なお、土壇上および土壇の周囲には後代の素掘小溝が掘られており、吉備池の堤坊はこの素掘小溝を埋めた上に築かれている。したがって、吉備池築造以前の段階で、少なくとも基壇西辺は、ほぼ現状のように削られていたらしい。

土壇の周囲は、池内堆積土や耕作土をとり除くと基壇基底部の土層が現れる。基底部の土層は場所によって一定しないが、地山（自然堆積土）である暗青灰色微砂（西辺・南辺）、暗灰褐色～青灰色砂礫（北辺）または灰黒色粘土（東辺）の上に、少量の土器片や有機物を含む暗褐色砂質土がのるのを基本とする。この暗褐色砂質土は人工的な整地によるものではなく、自然に堆積した状態を示し、金堂の基壇土はこれをベースとしている。

なお、西辺では、このベース上に薄く青灰色微砂をおき、北辺では地山を掘り上げた暗灰褐色砂質土ほかの整地土を積んでいる。さらに東辺では、造営時の整地と考えられる灰褐色～黄褐色～暗橙褐色粘質土（厚さ３～20㎝）、砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土（厚さ３～10㎝）がのり、金堂廃絶後の整地層である灰色粘土（厚さ３～15㎝）がその上を覆う。ただし、第105次調査東区における砂利敷SX103の遺存状況は、第81-14次調査にくらべて劣悪であった。砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土上面の標高は、80.8～80.9mである。

基壇上は、耕作土（厚さ50～70㎝）下に基壇土の再堆積である黄橙褐色粘質土（厚さ２～10㎝）が部分的に存在し、その下が基壇版築土である橙褐色砂質土となる。基壇土上面の標高は、確認できる最も高い部分で、82.6mほどである。なお、金堂周辺の調査では、火災の痕跡はいっさい認められない。

火災痕なし

金堂基壇とその掘込地業（PL.6，Fig.34･35･37･38）　金堂基壇の掘込地業SX101は、西北隅を含む北辺西半と西辺北半、西南隅、東辺中央部、東北隅で確認した。いずれも先述したベースとなる暗褐色砂質土もしくは整地土の上面から、若干の法面をもって約0.9～1.1mほど掘り込み、版築による基壇土を積み上げている。これには地山に由来する青灰色微砂も含まれるが、大半は黄灰色～橙褐色の山土である。掘込地業と基壇版築土との間に整地層は介在しないので、掘込地業から基壇版築までは一連の作業工程によるものとみられる。版築の各層の厚さは２～15㎝で５㎝前後のものが多く、掘込地業部分の版築層は、西辺で16層程度を数える。掘込地業

掘込地業と一連の版築

の底から現存基壇上面までの版築層は、北辺で46層ある。また、基壇西辺部の掘込地業では、最下部に径10～20㎝ほどの礫を多数まじえていた。こうした礫は東辺や北辺では確認できなかったが、掘込地業の底における基礎地業とみられる。なお、掘込地業の底面は、確認できる範囲ではほぼ平坦だが、その標高は、東辺が79.9m、西南隅は79.6m、西北隅では79.3mであり、周囲の旧地形と同様、西北部がもっとも低くなる。

掘込地業外の版築

基壇版築土は、基壇の西辺と北辺では掘込地業の範囲を越えて広がっている。これらに関しては、旧地形が低い西辺と北辺にのみ整地土を積み、掘込地業の外側をさらに浅く掘り込んだ可能性も想定されるが、実際には、版築土の下に整地土はほとんど存在しない。整地土を完全に除去したとすれば、整地自体が無意味となるので、上記の版築土は周辺部の掘込地業ではなく、一定の高さをもつ基壇土の一部と理解しておく。なお、掘込地業とそれより上の版築層との境界は、掘込地業の壁面が垂直に近い西辺では明瞭だが（Fig.34）、北辺では掘込地業の上端付近がゆるい法面となるため（Fig.35）、厳密な掘込地業の開始位置は判然としない。

基壇が南に張り出す

一方、土壇西南の東西トレンチでは、掘込地業の西辺がいったん東へ屈折して約2.6mのび、さらになだらかに南に折れている。このトレンチに接続する土壇上南北トレンチの南端部では、掘込地業は確認していないものの、基壇版築土が明らかに土壇外の旧地表面より高く残っており、たんに掘込地業が張り出すのではなく、ある程度の高さをもった基壇が南に張り出していることは確実である。土壇南側のトレンチでは掘込地業を検出していないことから、この張り出しの南北長は最小2.5m、最大5.6mとなる。また、東西幅は、張り出しの西端から最低でも4.3mを確認できる。なお、この基壇の張り出し部分については、遺構保存を第一としたため、断面観察をおこなっていない。反対側の東南隅および南辺全体がどのような形状となるかも不明である。

このように、掘込地業および基壇の一部が張り出すという例はほとんどなく、その解釈が問題となる。階段などによる複雑な出入りをもつ形状や、長方形基壇の隅を欠いた形など、いくつかの案を想定することができるが、まず階段案について検討しよう。

発掘調査によると、階段は地山から削り出すか、基壇本体の版築を終えたのちに継ぎ足す例がほとんどである。したがって、この案では、階段部分を含めた掘込地業をおこなう理由をさ

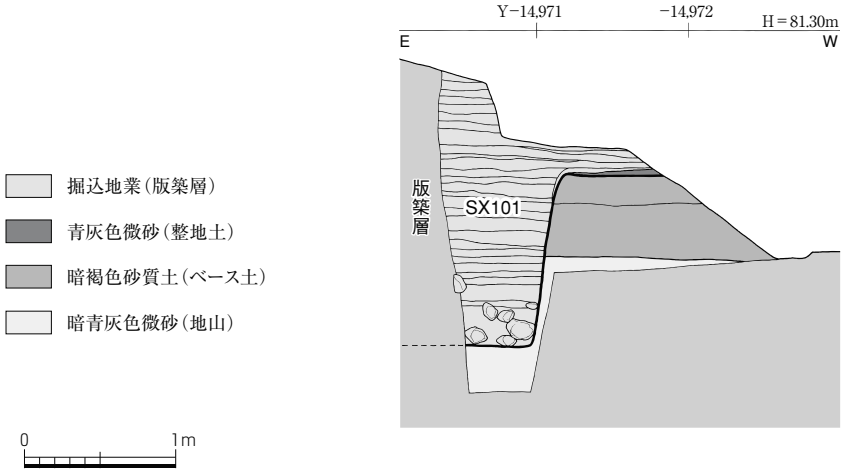


Fig. 34　金堂基壇掘込地業の断面図（基壇西辺）1:50

らに求めなければならないが、そうした必要性は稀薄である[1]。また階段とすれば、南面だけでなく、北面や西面にも同様の施工が必要となろうが、それは認められない。加えて、階段は建物の柱筋とそろえ、対応する建物部分の柱間を扉とするのが一般的である。そして、現存建築および文献史料から柱間装置の知られる古代建築では、中心堂宇の正面端間を扉とする例はごく少ない[2]。ところが、後述するように、吉備池廃寺金堂の場合、基壇端をどこに求めるのか、また建物規模をどの程度に想定するかという問題はあるけれども、この張り出し位置に対応する柱間は、建物の東西両端間以外に見出せないのである。以上の点から、この張り出しは階段にともなうものとは考えにくい。

張り出しは階段でない

一方、隅欠きの基壇と考えた場合、通常の長方形平面とは違った不整形な基壇となるが、これが建物の上部構造によるものとすると、正面に孫廂もしくは向拝をもつか、屋根の隅のみを欠く形態を想定せざるをえない。孫廂をもち、同様に基壇が張り出す例としては、平安後期の毛越寺講堂（岩手県平泉町）があり[3]、また現存する当麻寺本堂（北葛城郡当麻町）は、平安時代初期に、当初の四面廂つき主屋の正面に孫廂を付加している[4]。しかし、後述する出土遺物からも７世紀中葉に創建されたことが確実な吉備池廃寺金堂に孫庇をつけ、そのための掘込地業を施したとは、建築史の観点からも想定しがたい。向拝案についても同様である。さらに、『年中行事絵巻』に見えるような土廂の場合は、基壇下に柱を立てており、そこまで基壇を張り出させてはいない。

孫廂や向拝でもない

ちなみに、たとえ孫廂や向拝案を認めたとしても、建物本体の棟の位置は張り出しを除いた部分で考えて差しつかえなく、張り出しは金堂心の位置とは無関係である。このほか、隅だけを欠くやや複雑な屋根を想定した場合は、正面にあたる南面のみ隅を欠いた理由が不明であり、やはり７世紀の金堂建築には想定しにくい。

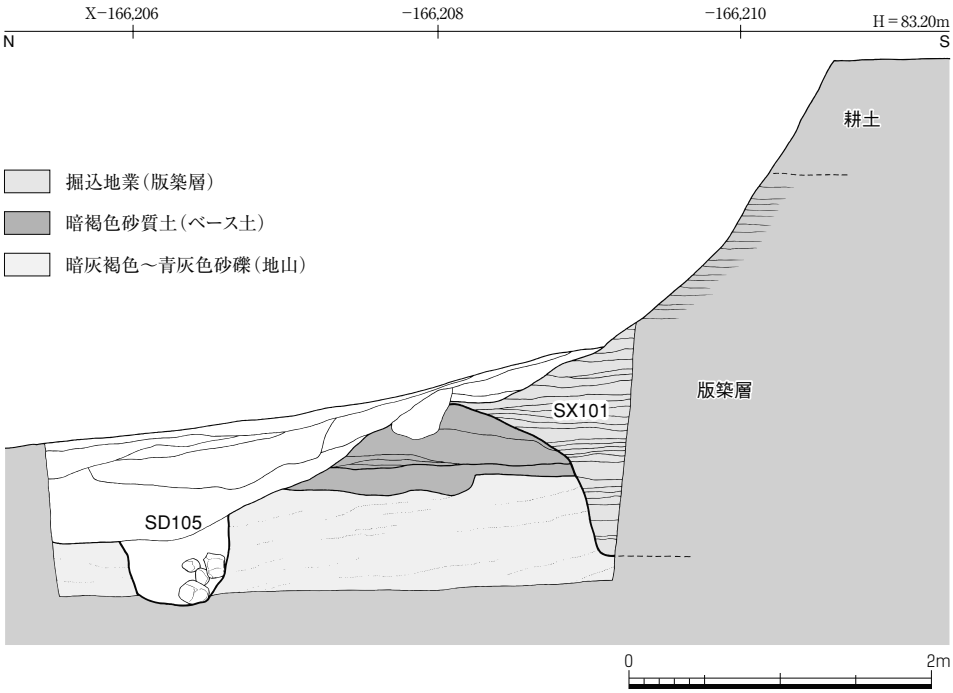


Fig. 35　金堂基壇と外周の溝の断面図（基壇北辺）1:50

以上のように、金堂基壇の張り出しについては、全容は明らかでないものの、階段もしくは基壇の隅欠きとみるには無理がある。そこで、現時点では、長方形基壇の前面に張り出しをもつ形状とみて、この張り出し部分には屋根がかからない、すなわち雨が当たる基壇を想定しておきたい。そして、こうした張り出しを設けた理由は、金堂正面における基壇上面の面積の確保にあったと考える。傍証として、現代の事例ではあるが、平城京薬師寺の再建金堂で、仮設ながらも正面基壇前面に壇を設けている事実を挙げておこう。これは、壁面をもつ裳階柱筋からの基壇の出が小さいためで、裳階の扉を外開きとすることにも関係しているらしい。今のところ、上記以外に、この張り出しを合理的に解釈できる案は見出せていない。

基壇の規模　以上、基壇の掘込地業の範囲は、東西が36.0～36.3m[5]と確定し、南北は、南辺に問題があるものの、建物の上部構造に関係する掘込地業は24.0～24.4mと考えられる[6]。現存する土壇の立ち上がりからみて、基壇の規模が掘込地業の範囲を下回ることはない。

なお、西辺および北辺部で掘込地業の範囲を越えて広がる基壇土（Fig. 34・35）は、後に述べる塔SB150の周囲に広がる整地とは違い、明らかに版築を施している。先述のように、これは掘込地業ではなく、地上に立ちあがる基壇の一部と判断してよい。ただし、東辺はほぼ掘込地業と基壇端の位置を合わせており（Fig. 37）、後述する基壇外周の溝SD104・105・250との間隔からみても、基壇規模が掘込地業の範囲を大きく上回るとは考えられない。現状で確認できる掘込地業外の版築土の広がりは0.6m程度であり、建物の上部構造に関係する基壇の規模は東西37m×南北25mほど、張り出し部を含めた基壇南北長は28mほどとみるのが妥当だろう。この場合、基壇心は、掘込地業心より若干北西方向に寄ることになる[7]。

基壇規模は37×25m

基壇上面は削平されているため、本来の基壇高については知ることができない。基壇上面には礎石の据え付けおよび抜き取りに関する痕跡がほとんどなく[8]、削平されたとみられるが、掘込地業底面から版築土上面までの高さは、現状で2.5～2.7mに達する。礎石の大きさを勘案すれば、本来の基壇は、掘込地業底面から３m以上、地表面からも２m以上の[9]、ひじょうに高いものであったと想像される。

基壇高は2m以上

基壇外装　基壇外装に関しては、加工痕をもつ石材のみならず、凝灰岩片やその粉末さえまったく出土していない[10]。したがって、凝灰岩を用いた通常の壇正積基壇を想定することは困難である[11]。また、掘込地業SX101の底や後述する基壇外周の溝SD104・105・250に詰め込まれたような河原石を用いた乱石積基壇も、基壇の高さと石の大きさを勘案すれば、考えがたいだろう。石積みの基底部がまったく残らない点も不審である。

とすれば、候補となりうるのは、木製の基壇外装である。吉備池廃寺と造営時期が近接する山田寺金堂が切石の壇正積基壇をもつ点と比較して、やや特異な感は否めないが、これ以外に、上記のような痕跡をとどめない基壇外装のありかたは想定しがたいと思う。

木製基壇か

木製の基壇外装とした場合、切石の壇正積基壇の石材を木におきかえたような構造、すなわち地覆材（土台）に束（柱）を立てて、比較的厚い横板材を束のあいだに落とし込む構造を想定することができる[12]。実際、木製の基壇外装をもつ建物は、各地で検出例がある。それらは、今のところ、板材や角材もしくはその痕跡を確認したもの、あるいは基壇の束柱やその掘形を検出したものに限られており[13]、壇正積の木製基壇を検出した例はないけれども、そうした構造は痕跡を残しにくいため、不明なケースも多いと想像される。なお、木製の基壇外装の場合も、

７世紀代の寺院中枢部の建築として、二重基壇を想定することが可能だろう。

ちなみに、縦挽きの鋸がない古代にあっては、素性のよい巨木をくさびで割ることにより得られる厚板は、地覆材や葛材に想定される大型の角材とともに、かなりの貴重品であったはずである。事実、吉備池廃寺とほぼ同時期に造営された皇極朝の飛鳥板蓋宮（643~655）は、高価な厚板で屋根を葺いたことを宮殿の美称としており、天皇（大王）の宮殿にふさわしい材料として尊ばれたことがうかがえる。したがって、当時、石材以上に高貴な仕様として、木材を用いた基壇外装が採用された可能性は充分に想定できよう。[14)]

掘込地業の排水溝 SD102（PL. 6，Fig. 36）　掘込地業の西北隅に掘られた素掘りの溝。西北隅か北西へ2.3mのび、後述する基壇外周の溝（SD104・105）に接続する。幅50～60㎝、検出面からの深さは、掘込地業の肩で約70㎝ある。底面はほぼ水平をなし、掘込地業の底より10～15㎝ほど低い。溝底の標高は79.2mである。掘込地業と同時に施工されたらしく、溝の下部には掘込地業から連続する拳大～人頭大の礫を多く含み、また上部は、掘込地業部分の版築施工後に一時に埋めたてた様相を呈する。掘込地業の内部にたまる水を抜くため、地形的に最も低い場所に設けた排水溝と推定される。

最も低い場所に設置

基壇外周の溝SD104・105・250（PL. 5・7，Fig. 35・37）　掘込地業の外側に平行してめぐる素掘りの溝。基壇西辺の溝をSD104、北辺をSD105、東辺をSD250とする。掘込地業の肩から溝肩の距離は、SD104(西)で2.8m、SD105(北)では1.5～2.2m、SD250(東)は3.4mと異なる。

溝の幅は0.7～1.4mを測り、検出面からの深さは0.5～1.1mで東方が深い。底部には人頭大ほどの自然礫を雑然と積み、黄灰色の粘土を含む灰色～暗灰色の粘質土ないし砂質土で一時に埋め立てている。第81-14次調査では、近世の攪乱により時期を明確にできず、また土壇東側の調査区では砂利敷SX103を保護したため、SD250の延長部を検出できなかった。しかし、第105次調査で、これらが砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土の下に位置すること、埋土中に７世紀前半の土師器杯Ｃなどを含むものの、それより新しい遺物がみられないこと、造営時の整

人為的に埋め立て

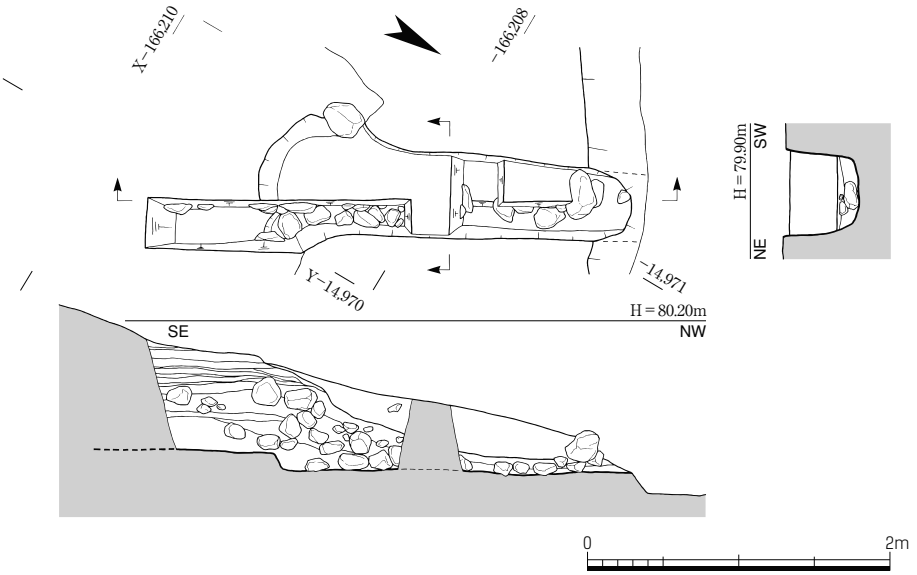


Fig. 36　掘込地業の排水溝SD102　1:50

地に顕著な山土を含む埋土であることが確認され、寺院造営にともなう溝であることが明らかになっている。溝底の標高は、東北隅（SD105とSD250の交点）で79.5m、西北隅（SD104とSD105の交点）で79.0m、西辺南方で80.0mを測り、掘込地業と同様、北西へ向かって低く傾斜する。この西北隅における溝底は、掘込地業の排水溝SD102の底よりも低く、掘込地業内および基壇周囲における水を集め、排水する機能を果たしていたとみてよい。[15]　造営時の溝

なお、こうした溝は基壇の南辺にもめぐっていたと考えられるが、第81−14次調査の土壇南側トレンチでは検出していない。この段階では近世に掘られた礫の廃棄溝と解釈していたこともあり、掘り下げが不充分だった可能性が高い。[16]また、西北隅（SD104とSD105の交点）からさらに西方へ排水する溝の存在が想定されるが、第81−14次調査区外にあたり、詳細は不明である。おそらく、塔基壇の北辺を西流し、後述する第95次調査西区のSD215に接続して、南西方向へ排水したのであろう。　西方へ排水

砂利敷SX103（PL.7，Fig.37）　第81−14次調査の土壇東側のトレンチで検出した径３～５㎝の砂利敷。第105次調査東区では、攪乱のため、礫の疎らな散布を確認したにとどまり、第81−14次でもそのほかのトレンチでは削平されていた。造営時の整地土の上に敷かれ、廃絶後に灰色粘土で覆われている。回廊内の舗装と考えられる。　回廊内舗装

掘立柱列SA251・252（PL.7）　第105次調査東区南トレンチの金堂SB100東北隅で検出した。基壇外周の溝SD105・250の外側に、平行して逆Ｌ字形にめぐる柱穴５基からなる。南北柱列をSA251、東西柱列をSA252とする。

外周の溝肩からの距離は、SA251が0.9～1.2m、SA252が約1.4mを測り、柱間寸法は1.8～3.1mと不揃いである。掘形は一辺が0.6～1.0mの隅丸方形で、ほとんどが金堂SB100の基壇側にのびる抜取穴をもつ。検出面からの深さは45㎝前後、掘形の埋土は黄色の山土を多量に含む粘質土である。SA251南端の柱掘形から拳大の礫や創建瓦を含む瓦の小片、SA251とSA252の交点にあたる隅の柱穴からは、７世紀の土師器杯Ｃが出土した。性格については不明だが、

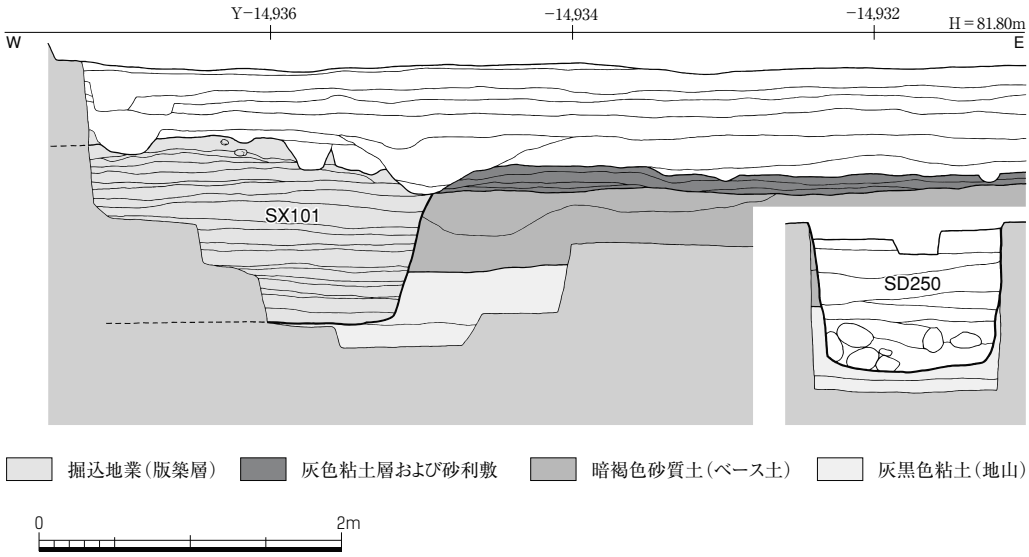


Fig. 37　金堂基壇東辺の土層図　1:50
（第81−14次と第105次の成果を合成）

SD105・250または金堂の基壇や、建物の造営・解体などに関連する遺構と推定される。なお、第81−14次調査では、外周の溝SD104・105の外側は調査区外となる部分が多く、同様の柱列は明瞭なかたちでは検出されていないが、次に述べる金堂土壇西側の柱穴のいくつかも、同じ性格の遺構となるかもしれない。

金堂基壇周囲の掘立柱穴　第81−14次調査の金堂土壇西側の調査区南端部と土壇北側の調査区で検出した掘立柱穴。基壇外周の溝SD104・105よりも外側に位置する。これらは、単体もしくは部分的に重複して検出されており、いずれも詳細は不明だが、建物もしくは塀の一部と想定した。藤原京期の遺構のほか、上記のように、金堂基壇東北隅で検出した掘立柱穴列SA251・252と同様の性格をもつ掘立柱穴もあると考えられるが、特定できない。また先述のごとく、金堂の基壇外装を木製と想定すれば、その階段に関連する遺構を含む可能性もある。

土壇西側の調査区南端部にあるSB106は、東西に約1.8m離れて並ぶ柱穴２基。西と南に続く建物の東北隅と推定した。掘形は一辺が80㎝前後の不整方形で、検出面からの深さ60〜70㎝を測る。抜取穴から推定される柱径は20㎝程度である。柱掘形には、基壇土もしくは整地土に由来すると考えられる橙褐色の山土が混じる。柱穴からは７世紀前半の土師器甕、須恵器杯Ｇ蓋などが出土した。

埋土に山土

SB107も東西に並ぶ柱穴２基。SB106に重複し、それより新しい。柱穴の間隔は約1.6mで、東と南に続く建物の西北隅と推定した。掘形は一辺が65〜85㎝の不整方形で、検出面からの深さは、西の柱穴が70㎝、東の柱穴は45㎝程度である。抜取穴から推定される柱径は20㎝程度で、柱掘形と抜取穴のいずれにも、基壇土もしくは整地土に由来するとみられる橙褐色の山土が混じる。遺物は出土しなかった。

SB108は、SB106・107の北にあって、東西にならぶ柱穴２基。柱穴の間隔は2.3m程度で、西と南に続く建物の東北隅と推定した。ただ、東側の柱穴はごく浅く、柱穴でない可能性もある。西の柱掘形は一辺60〜70㎝の方形で、柱径は約15㎝。これらの柱掘形には橙褐色の山土は含まれず、柱抜取穴からは飛鳥Ⅰの土師器杯Ｃが出土した。

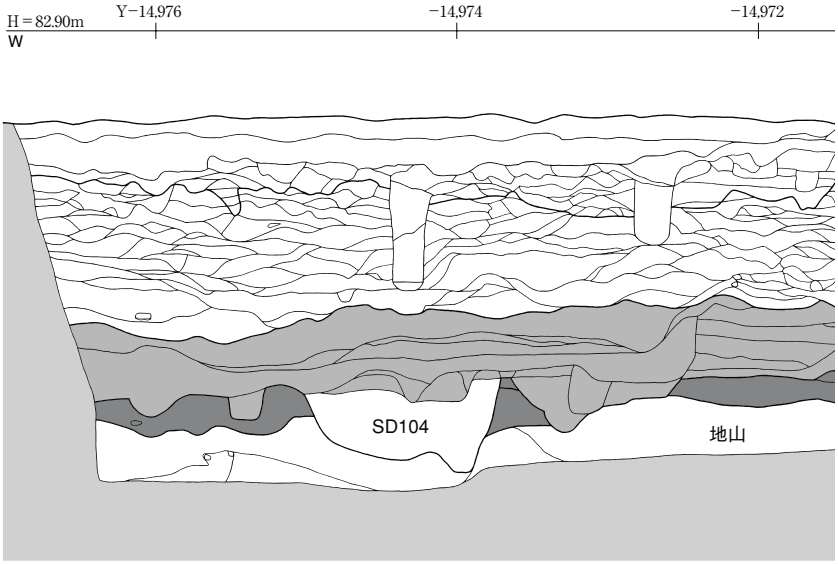


Fig. 38　金堂基壇掘込地業と吉備池堤防の断面　1:50

SB109は、金堂土壇の西南隅付近にある柱穴１基で、南と西にのびる建物の東北隅柱と推定した。柱掘形は一辺約70㎝の方形をなし、西側に抜取穴がのびる。柱掘形には基壇土もしくは整地土に由来するとみられる橙褐色の山土が混じる。遺物は出土しなかった。

以上のように、金堂西辺にあるSB106・107・109の柱穴掘形には、基壇土に似た橙褐色の山土を多量に含み、金堂造営開始後のものと推定される。この一帯は、寺の廃絶後はやがて藤原京域に含まれ、京の条坊が施工されているので、そうした建物の可能性があるだろう。一方、SB108柱穴には山土がまったく含まれず、出土遺物の年代観とあわせて、寺院造営に先行するものと想定される。柱穴の重複関係からみて、SB106よりSB107が新しく、SB108もこれらと重なる位置にあるため、都合３時期にわたる重複があったことになる。

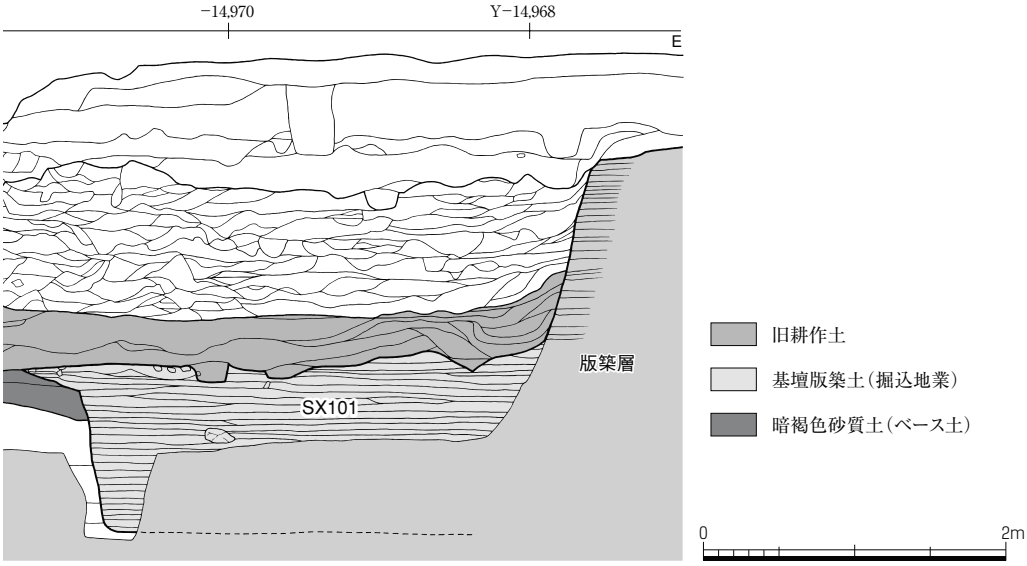
柱穴は３時期分

一方、金堂土壇北側の調査区には、外周の溝SD105と重なる位置にSA110が、さらにその北方のＬ字形をなす池内トレンチ東端付近にSB111がある。SD105と重複するSA110は、東西にならぶ柱穴２基で、柱穴の間隔は約4.6m、柱掘形の一辺50～90㎝を測る。

SB111は、北と東にのびる建物の西南隅柱と推定した柱穴１基。柱掘形は一辺0.7～1.0mで、検出面から10㎝程度しか残っていない。断面では、北端部の南北幅20㎝ほどが柱掘形底よりも30㎝ほど落ち込んでおり、柱痕跡になる可能性がある。柱掘形には黄褐色の山土が混じり、西方のSB106・107・109などと同様の性格が想定される。

吉備池堤防（Fig. 38）　金堂SB100と塔SB150の土壇をつなぐ堤防。第81-14次調査土壇西南部の東西トレンチでの断面観察によれば、金堂基壇西南隅を削平した旧耕作土上に、厚さ0.6～1.0mにおよぶ築堤をおこなっており、その下から素掘小溝を検出している。築堤土の断面には、作業単位を示す土塊の痕跡が残る。現在確認できる金堂基壇とのあいだに大きな不連続面を認めることができないことから、築堤や池の開削にあたって、金堂基壇をあらたに破壊することはなかったらしい。ちなみに、塔の土壇上東トレンチの断面の状況からみると、塔基壇も築堤時に大きな削平を受けてはいないようである。なお、築堤土中には、古代～中世の土器とともに近世陶器が含まれるので、吉備池が近世の築造にかかることは確実である。

近世に築堤



B　塔SB150とその周辺（PLAN 4，PL. 8～11）

遺存状況と基本層序　吉備池の南辺やや西寄りにある池に張り出した土壇が、版築を施した塔基壇であることを確認した。ただ、基壇の北および東北部はすでに護岸工事が終了しており、また土壇上では果樹栽培がおこなわれていたため、調査区は非常に限られたものとなった。

土壇上の基本層序は、耕作土の下に赤橙色～暗赤橙色の基壇攪乱土（厚さ20～60㎝）があり、それを除去すると基壇版築土が現れる。版築土の遺存状況はおおむね良好である。ただし、礎石はまったく遺存せず、礎石の据付穴や抜取穴も検出できなかった。礎石下の根石も残っていないことから、基壇の上部はかなり削平を受けているとみられる。

土壇の中心から東方に設定した調査区（土壇上東トレンチ）では、一部を残して基壇が大きく削られ、素掘小溝の面を埋めて吉備池の堤防が築かれた状況を確認できる。さらに、その堤防を南北に横断する断面Ｖ字形の溝が掘られているが、この溝には掘り直しが認められるので、水路として、しばらくのあいだ存続したらしい（Fig. 39）。

土壇の南側～西側の水田面は、土壇上面から2.3～2.8m下にあり、土壇南側の調査区では、土壇に沿って弧状をなす素掘小溝を検出した。これらが、基壇の立ち上がりを避けた結果だとすると、その時点で、円弧の内側には基壇の立ち上がりが残っていたことになる。なお、塔基壇周辺においても、基壇造成後に火災があったことを示す痕跡はまったく認められない。

火災痕なし

塔基壇（PL. 10，Fig. 39～41）　塔の基壇土は、花崗岩の風化土に由来する赤橙色粘質土を基調とし、これに赤褐色～黄白色シルトや茶灰色粘土などがまじる土を、版築で突き固めている。版築層は厚さ３～15㎝程度で、確認できるだけで30層におよぶ。金堂と違って掘込地業はおこなわず、旧地表面とみられる暗青灰色粘質土上に、厚さ５～25㎝ほどの明黄褐色の山土による整地をしたのちに版築を重ねている。この山土による整地は基壇外にも広がるが、暗青灰色粘質土上面は北西に向かって下がっているものの、少なくとも基壇内では、整地土が西でとくに厚くなるようすは認められない。また、後述するように、土壇上東トレンチでは版築最下層に

整地後に版築

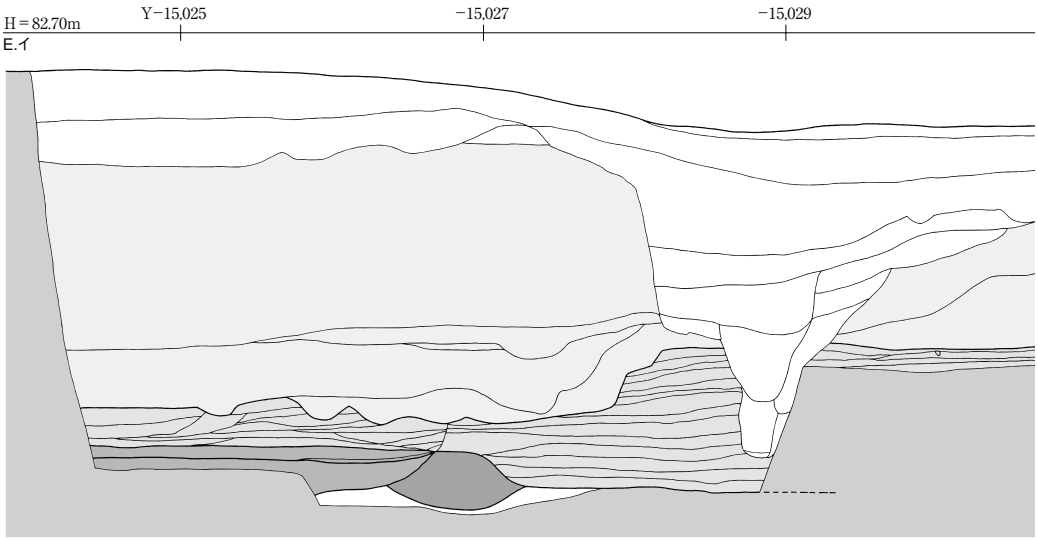


Fig. 39　塔基壇東辺の断面図（土壇上東トレンチ）1:50

整地土が存在しない部分もある。版築前の完全な不陸調整がこの整地によって達成されているとは言えないだろう。ただし、土壇南側の調査区の断面では、地形が西に低くなるにつれて整地も厚くなっている状況が観察できる。基壇築成に先立って整地をおこなったのち、一部整地土を掘り込んだものと考えておく。

版築の不連続

土壇上東トレンチは、先述したように、基壇が大きく破壊を受けているが、その底部で版築が不連続となる部分がある。基壇内方となる西側は、地山をやや掘り込んでおり、明黄褐色の山土による整地土が認められない。版築はほぼ水平に積まれ、版築土も赤橙色粘質土を基調とする他の部分とほぼ共通する。これに対し、基壇外方となる東側には、明黄褐色の山土による整地をおこなったうえで版築を施している。この部分の版築はやや粗く、版築土も黄灰色～黄褐色を基調とする粘質土で、基壇内方とは異なる。そして、両者の境界部分の底部には、灰茶色粘質土の塊が人為的におかれていた。以上のような版築の不連続面が生じた理由は不明だが、

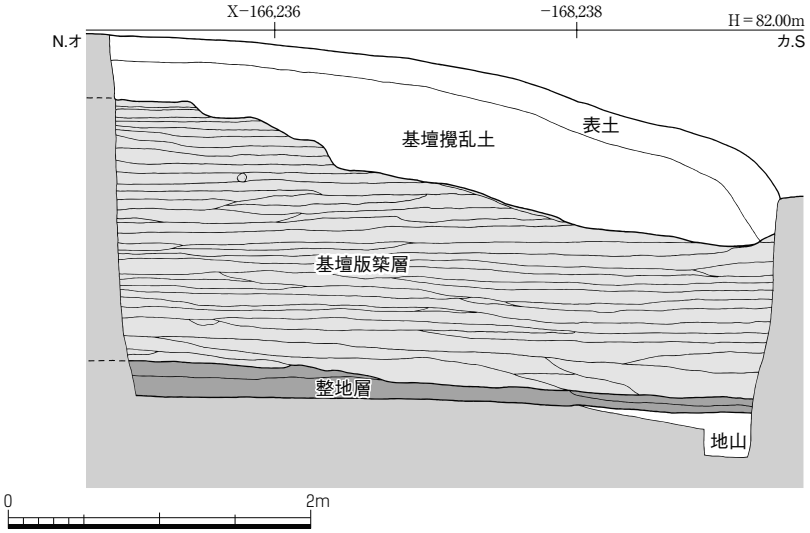
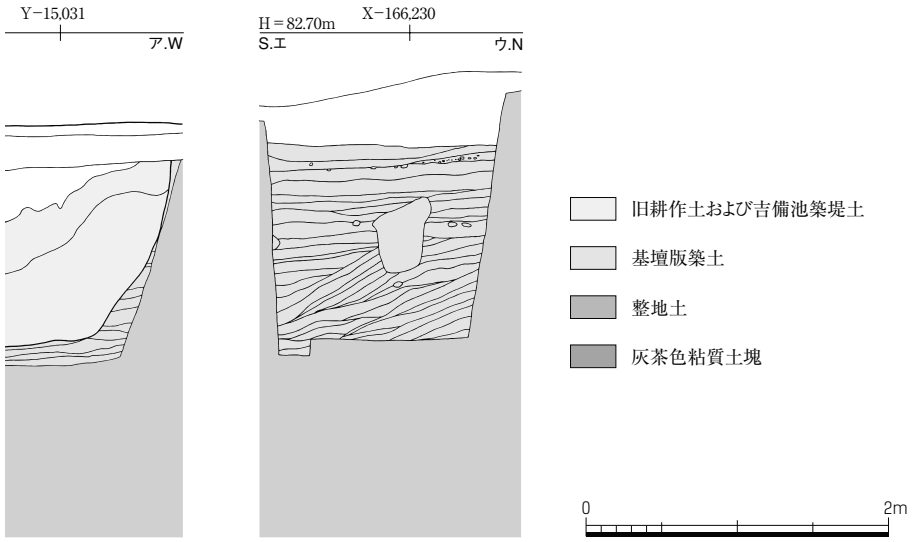


Fig. 40　塔基壇南辺の断面図（土壇上中央トレンチ）1:50（断面の位置はFig.42のオーカ）



（断面の位置はFig.42のアーイ，ウーエ）

あるいは版築の作業単位を隔てるものと解釈できるかもしれない。

基壇下の整地土上面の標高は79.5～80.0m、基壇土上面の標高は81.7～81.8mを測り、現存する基壇高は最大約2.3mある。版築土は、土壇の中心から南にのばした調査区（土壇上中央トレンチ）南端でも確認できるので、少なくとも基壇の南辺は現土壇の端までおよんでいたことが確実である。現状で確認できる基壇範囲は東西25.9m、南北26.7mであり[17]、東端および北端については、吉備池の護岸が施工されているため、不明とせざるをえない。

なお、基壇版築土からは７世紀前半頃とみられる土器の細片が出土している。

心礎抜取穴
6.7×5.4m

心礎抜取穴SX151（PL. 9, Fig. 41・42）　土壇上のほぼ中央部で、基壇を掘り込んだ巨大な穴を検出した。現存する版築土上面からの深さは40～50㎝を測り、底近くには拳大～人頭大の河原石を多量に残す。底面の標高は81.2～81.4mである。穴の平面規模は、北端および東端が調査区外となるため明確でないが、確認できる範囲で東西5.4m、南北6.7mに達する。こうした規模と土壇上の位置からみて、塔の心礎抜取穴であることは間違いなく、河原石は心礎下部の根石と判断される。埋土は赤橙色～赤褐色の粘質土で、攪乱土に覆われているが、埋土自体が比較的きれいなことから、抜き取られた年代はかなり遡る可能性が高い。この中から、７世紀後半の須恵器杯Ｂ蓋と甕などが出土した。

基壇築成
は４工程

基壇の築成（PL. 10, Fig. 40・41）　土壇中心部から西側にのばした調査区（土壇上西トレンチ）の断面で観察できる基壇の版築層は、大きくＡ～Ｄの４ブロックにまとめられ、Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄの順に積み上げた工程を復元することができる。

Ａブロックの版築は、基壇内方ではほぼ水平に積むものの、西側の縁辺部では西へ向かって低く傾斜し、20°前後の勾配となる。この水平部分の上面（標高81.3～81.4m）には小礫を突き固めており、それは少なくとも心礎抜取穴まで続いている。

Ｂブロックは、Ａブロック西縁部の傾斜面上にのり、Ａブロックの水平部上面に天端をそろえ、版築層の上面をいったんほぼ水平にする。この上面には、小礫は認められない。

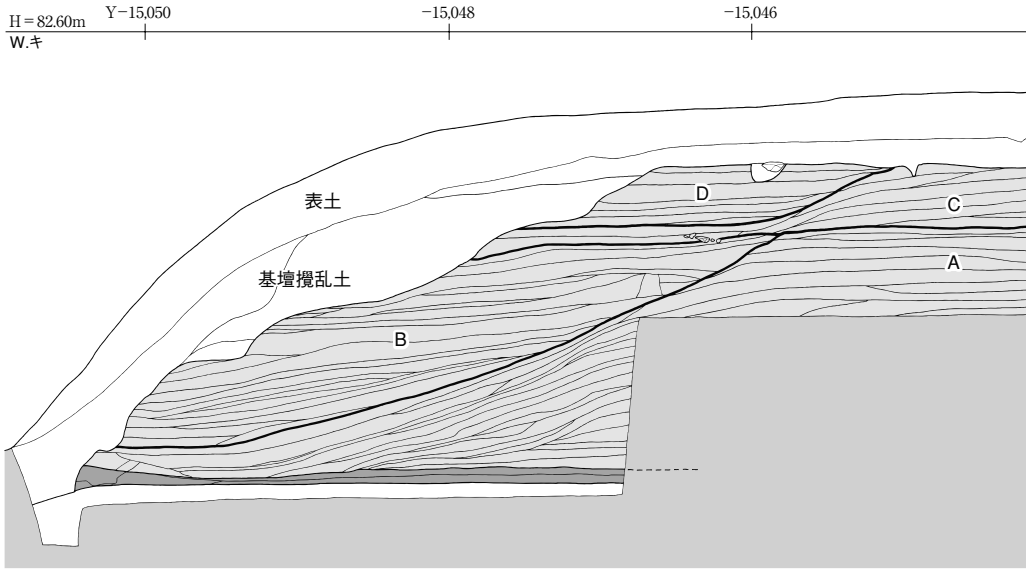


Fig. 41　塔基壇西辺の断面図（土壇上西トレンチ）1:50

Ｃブロックは、Ａブロックの小礫上およびＢブロックの上面の一部にのり、基壇内方では水平に版築するものの、西端部はやはり西へ向かって低く傾斜させる。Ｃブロック中には、心礎の根石とほぼ同大の石を含んでいる。

Ｄブロックは、Ｂブロック上とＣブロックの傾斜面上にのる水平の版築層である。おそらくＣブロック上面と天端をそろえて、基壇土の築成を完成させたものと考えられる。

Ａブロックのような傾斜面は、少なくとも基壇南辺では認められず、通常の水平な版築状況を示している[18]。それとの比較からも、西辺のＡブロックが、傾斜面をつくる意図のもとに版築をおこなっていることは明瞭である。そして、これにつづくＡブロック上面の小礫層の高さは、心礎抜取穴の底面すなわち心礎下面の高さに近く、両者が密接な関係にあったこともうかがえる。以上の点から、こうした傾斜面は、心礎を引き上げるためのものとみて誤りないだろう。同様の例は、尼寺廃寺（香芝市）の塔基壇でも確認されており[19]、巨大な心礎を引き上げる必要のあった塔基壇に特有のものと推定される。

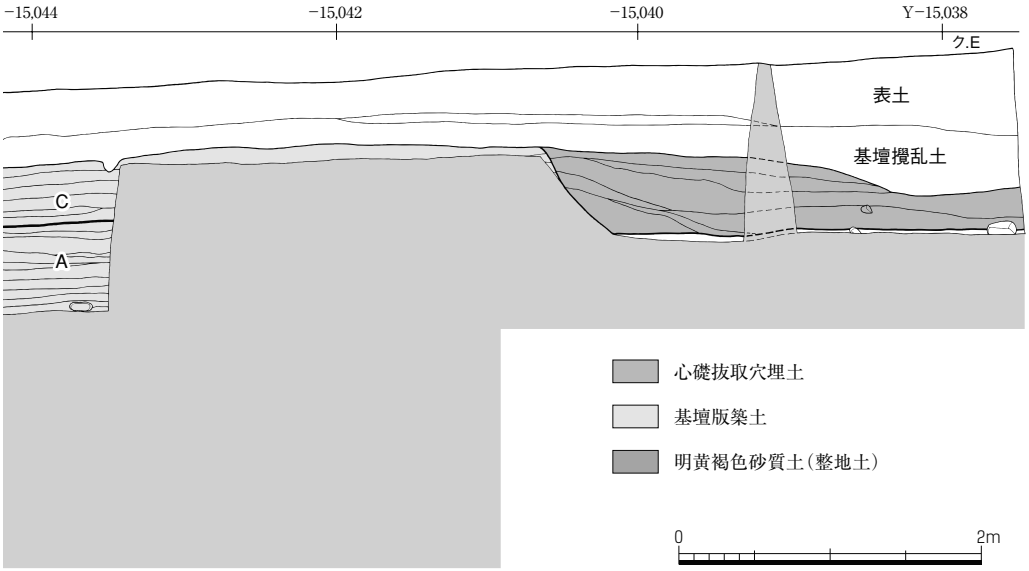
心礎引き上げ用の斜面

なお、心礎抜取穴内やその周囲では、心礎の据え付けにかかわる痕跡はまったく認められなかった。基壇築成の途中で心礎を引き上げて据えるという工法のため、あえて据付穴を掘る必要はなかったものと考えられる。

心礎の据付痕跡なし

基壇の規模と外装（Fig.42）　版築の範囲、心礎抜取穴の規模のいずれも明確でないため、基壇全体の規模に関しては推定の域を出ない。先述したように、版築を確認できる範囲は、少なくとも東西25.9m、南北26.7mあり、南辺の状況からみて、基壇の南北長がこれより広くなることは確実である。一方、東西長に関しては、これ以上の情報がない。基壇西辺の版築層Ａブロックの西端は、版築もやや乱れており、基壇の縁辺部とみることも不可能ではないが、その上にのるＢブロックがどこまで広がるかは不明である。

そこで、現状の金堂土壇と掘込地業の関係を検討すると、隅部分では大きく基壇が削られているものの、東辺中央部では２ｍほど、西辺および北辺中央部では１ｍ前後、掘込地業より小



（断面の位置はFig.42のキーク）

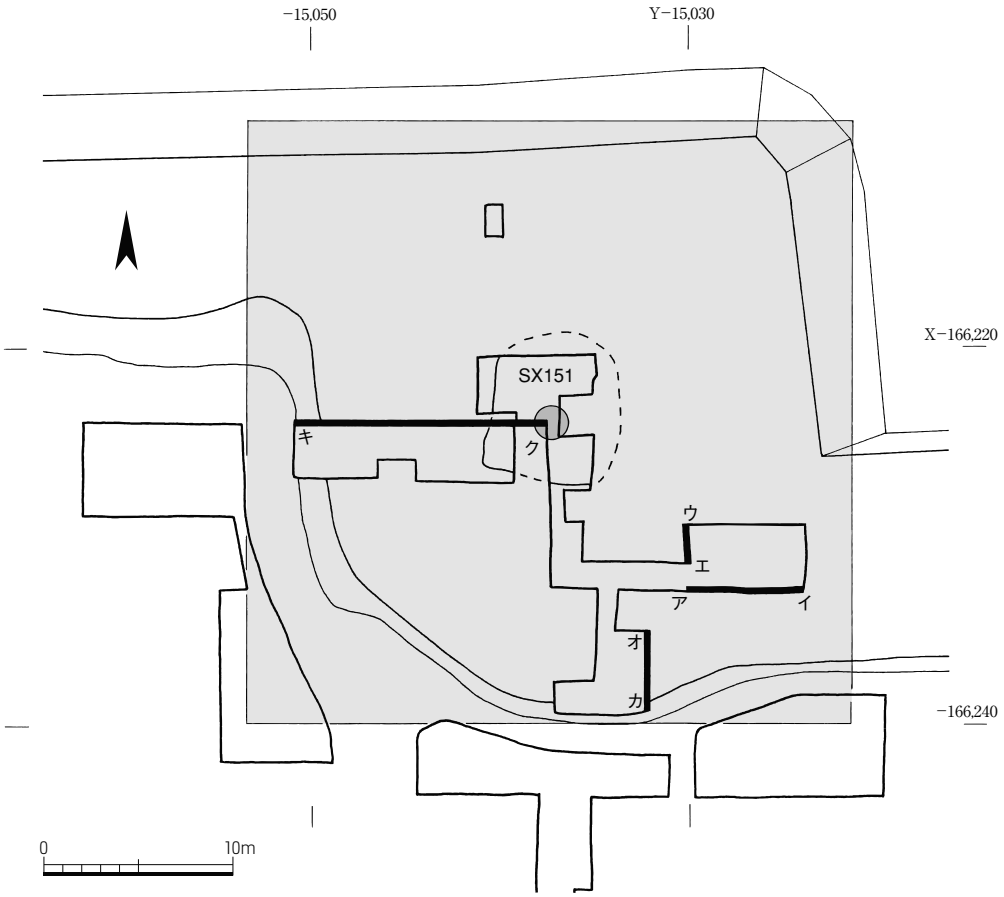


Fig. 42　**塔の調査区と基壇規模**（○は推定塔心）　1:400
（カタカナはFig. 39～41の断面位置）

さくなっている程度にすぎない。塔の場合も、東辺を除けば同様の可能性があるだろう。

一方、確認できる版築の範囲から塔の南北の中心を求めると、その位置は心礎抜取穴の南端付近となる。この場合、心礎はかなり小さいものとなってしまう。しかし、文武朝大官大寺の塔心礎抜取穴は南北5.6m、東西5.4mの規模をもち、復元される塔の中心と心礎抜取穴の中心はおおむね一致している[20]。したがって、塔の中心と心礎抜取穴の関係を適当な位置に定めることにより、基壇規模を推定するのが妥当であろう。

心礎抜取穴の全容も不明だが、現状ですでに塔の四天柱を含むほどの大きさであり、現状よりさほど大きくなるとは考えられない。そこで、塔心の座標をX=-166,224.0、Y=-15,037.4と推定すると、確認した基壇版築南限までの距離は15.3mとなり、南辺が１m弱ほど削られていると仮定した場合、塔基壇の規模は、一辺32mほどに復元される。北または東に心礎が抜かれているとみた場合でも、一辺30mを下回ることはないだろう。

基壇は一辺32ｍほど

基壇高については、先述したように、現存する基壇高が最大2.3mあり、心礎や礎石の大きさを考慮すれば、これより高くなることは確実である。厚さ1.2mを測る尼寺廃寺の塔心礎を参考に、その頂部付近まで基壇を積み上げていたとみると、基壇高は約2.8mと推定でき、金堂より高い基壇であった可能性がある。

基壇高は2.8ｍ

また、塔基壇の規模を上記のごとく復元すると、土壇南西および南東の調査区に基壇の隅が含まれることになる。金堂同様、基壇の隅部分は大きく削平を受けていると考えてよい[21]。

ちなみに、基壇版築や基壇外装の痕跡はまったく見出せなかった。凝灰岩片のような基壇外装に関わる遺物も皆無で、河原石さえ出土しないことから、金堂同様、痕跡を残しにくい木製の基壇外装を想定すべきだろう。　木製基壇か

小石敷SX155（PL. 11）　土壇南側の調査区からさらに南に延びる調査区（南トレンチ）で検出した拳大の小石を敷く遺構で、南北６ｍほどの間に比較的密に敷いている。この面の標高は79.7mである。断面の観察によれば、旧地表面上に施された明黄褐色粘質土（整地土）の上に位置しており、金堂東方の砂利敷SX103とはやや様相が異なるものの、回廊内の舗装の可能性がある。ただし東西幅３ｍの調査区内でも西半に集中し、東半および南方にはほとんどない。また、塔周囲におけるその他の調査区では検出していないなど、疑問な点もある。　回廊内の舗装か

C　中門SB320とその周辺（PLAN 5，PL. 12～14）

遺存状況と基本層序　中門基壇の遺存状況はきわめて悪く、石組雨落溝の一部とその石組みの抜取溝、雨落溝を構成する側石の抜取痕跡などから、かろうじて中門の遺構と判断できた。

付近の土層の基本層序は、上から、① 近現代の耕作土、② 中近世もしくはそれ以前からの耕作土である黄褐色～青灰色砂質土（厚さ20～25㎝）、③ 遺物包含層である灰褐色粘質土（厚さ20～30㎝）、④ 遺構検出時のベースである暗灰褐色砂質土（厚さ15～20㎝）、地山である黄灰褐色細砂となる。このうち、④と地山は、古い流路に由来するとみられる比較的締まりのない土層である。[22] 耕作にともなう素掘小溝は、②～④上面から切り込んでおり、南北方向のものが多いが、中門基壇より南では東西方向が主体となる。こうした状況は、第95次調査南区でも同様である。遺構のほとんどは、④の上面で検出した。遺構検出面の標高は80.7mほどであり、金堂基壇東方の砂利敷SX103よりわずかに低い。周囲の旧地形は、調査区東壁にかかる吉備池廃寺以後の斜行溝SD323の方向が示すように、東北東が高く、西南西に向かって低くなる。

中門基壇（PL. 13・14，Fig. 43）　中門基壇の存在を示すものとしては、調査区の西南隅付近で検出した、南北方向の石組溝がある。次項で述べる南面回廊南雨落溝SD161に接続するもので、第111次調査南区の西端にもその側石の一部が残る。石組溝は内法幅約30㎝、深さ約15㎝で、底石はなく、10～30㎝大の玉石を側石としている。黄灰色粘質土で人為的に埋められており、流水を示す砂礫の堆積は認められなかった。遺物もほとんど出土していない。石組溝の掘形は、幅約85㎝、検出面からの深さ約15㎝を測り、抜けた側石の痕跡が残る。　南北石組溝

この石組溝は、南でやや東に振れながら長さ約2.1mのびてとぎれるが、それに接続して、幅約1.0m、検出面からの深さ6～10㎝の素掘溝が東にのびている。この溝は、やがて北に折れたのち、クランク状に折れてさらに東へのび、全体で長方形をなす南への張り出しを形成する。この底にも側石の痕跡が残る。以上の石組溝をはじめとする溝をSD321とする。

また、SD321の北には、これとほぼ対称となるかたちで、SD322により区画された北への張り出しが存在する。SD322も、幅1.0m前後、検出面からの深さ５～10㎝の素掘溝である。SD322についても、SD321と同様に、10～20㎝の側石の抜けた痕跡が認められた。

したがって、上記のSD321とSD322で囲まれる部分が中門SB320の基壇であり、これらの溝は中門の石組雨落溝もしくはその抜取溝と考えられる。

中門の基壇そのものは、基壇外装を含めてまったく遺存せず、掘込地業もない。基壇の上面　掘込地業なし

は、斜行溝SD323や後述する藤原宮期の東西溝SD180などで破壊され、基壇土や礎石の痕跡は明瞭には確認できなかった。階段の存在を示す痕跡も認められない。ただ、建物内部とその北側のSD322を覆う土には、明黄褐色の粘土ブロックが混じっており、これは基壇土に由来する可能性がある。また、東南隅柱に比定できる位置には、礎石の据え付けもしくは抜き取りに関わるとみられる土質の違いSX335があるが、きわめて痕跡的である。

基壇の規模と外装　中門基壇は削平されているため、基壇高についても不明だが、礎石の据え付けや抜き取りの痕跡が失われていることから、最低でも礎石の厚さ程度はあったとみられる。30～50㎝程度だろうか。また、階段の痕跡が認められないことから、基壇内に設ける切り込み階段か、階段がなくても上れる程度の基壇高を想定せざるをえない。

基壇外装については、それに関わる切石や凝灰岩片などがまったく出土しないことから、乱石積ないし木製の基壇外装が考えられよう。ただし、乱石積の場合、雨落溝の基壇内方にあたる側石を基底石としたとすると、溝内外の側石で大きさが変わらないのが不審である。また、雨落溝内側に基底石をおいたのであれば、その痕跡が残っていない点が問題となる。よって、中門に関しても、金堂や塔と同じく、木製の基壇外装の可能性が高いと判断しておきたい。この場合、中門の基壇規模は、東西12.0m×南北9.8mほどと推定される。[23]

基壇規模は
12.0×9.8m

土坑SK326・327　第111次調査南区の北壁にかかる２つの土坑。相互の間隔は約2.7mあり、いずれも検出面から0.9～1.2mと深い。埋土の最上部には、吉備池廃寺所用の軒丸瓦などが廃棄されていた。一対の幢竿支柱掘形となる可能性もあるが、位置的にみて金堂中軸線より西に寄っており、また中門中軸線を折り返した西側には同様の遺構がない。出土遺物には、上記の軒瓦のほか、土師器小片や須恵器甕片があるが、年代は特定できない。

東西溝SD180（PL. 13・15，Fig. 45）　第111次調査南区および第95次調査南区で検出した素掘りの東西溝。藤原京の三条大路[24]北側溝に相当する。南面回廊南雨落溝SD162に接する位置にあり、中門および南面回廊基壇上を横断する。詳細は次項（55頁）を参照されたい。

藤原京三条
大路北側溝

東西塀SA325　第111次調査南区で検出した掘立柱東西塀。次項で述べる第95次調査南区の東西塀SA182の延長にあたり、中門SB320基壇上を直線的に横断する。柱間寸法は約1.8～2.1mで、2.0mほどの部分が多い。柱掘形は、一辺が40～55㎝のやや不整な方形をなし、径15～20㎝の柱痕跡には、基壇土に由来すると思われる黄色～黄褐色の粘質土が入る。掘形の深さは、検出面から30～40㎝である。

この掘立柱塀の時期や性格は明らかでないが、第95次調査南区で検出した掘立柱東西棟建物SB190（次項）にとりつくとみて、一連の施設と考えておく。東西溝SD180心からの距

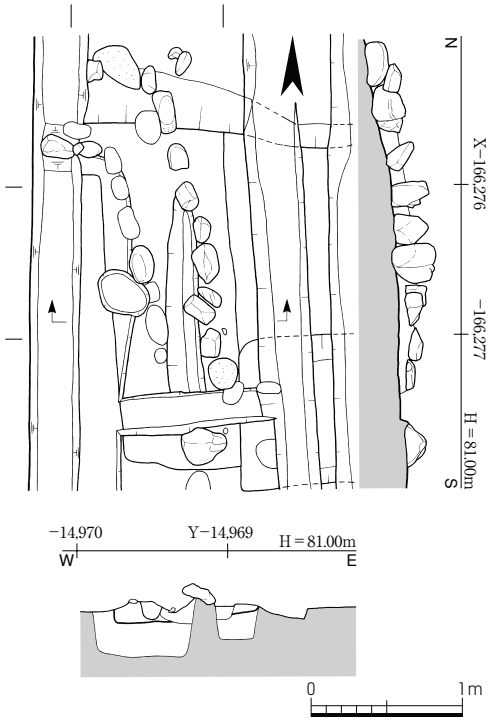


Fig. 43　中門SB320の石組雨落溝　1：50

離は4.1m前後を測り、藤原京左京三条十坊西南坪の南辺を遮蔽する塀となる可能性がある。

井戸SE330　第111次調査南区中央付近で検出した井戸。井戸枠が抜き取られた様相を呈し、掘形については明確でない。抜取穴の径は約2.2mを測る。周囲からの湧水が激しく、検出面から約1.5m下に砂層があることを確認して、掘り下げを断念した。抜取穴中には、中門もしくは回廊の雨落溝所用と思われる拳大～人頭大の河原石が廃棄されていた。出土遺物には、板材や飛鳥Vの土器などがあり、藤原宮期の井戸と考えられる。

このほか、SE330の南には、SD180の肩を破壊するかたちで、性格および年代不明の土坑SK328（径1.9～2.4mの不整円形、検出面からの深さ55㎝前後）がある。また、調査区東南隅には近代以降の野井戸SE329（径約2.0m）がある。

D　南面回廊SC160とその周辺（PLAN 6，PL. 15・16）

回廊全体の遺存状況　南面回廊・西面回廊・東面回廊を確認したが、いずれも吉備池堤防外側の水田にあり、かなり削平を受けている。そのため、回廊自体の基壇土および基壇外装、礎石の据付穴や抜取穴などを明瞭なかたちで検出することはできなかった。このうち南面回廊は、後世の耕作による削平のほか、棟通りのやや南に重複して掘られた藤原宮期の東西溝SD180によって、基壇上面が大きく破壊されている。また、東方の第111次調査南区や東面回廊を確認した第105次調査東区は、西方にくらべて地形が高く、水田化による遺構の削平が著しい。

調査では、まず、側石をもつ東西方向の雨落溝SD161と石組抜取溝SD162が約6mの間隔で平行することを確認し、南面回廊SC160の位置と規模が明らかとなった。そして、西面および東面回廊に関しては、ほぼ想定どおりの位置で部分的に石組みをともなう南北溝やその抜取溝を検出し、回廊の雨落溝と認定した。北面回廊に関わる遺構は確認していない。

基本層序　南面回廊は、第89次調査南トレンチと東南トレンチ、第95次調査南区、第111次調査南区で検出した。調査区の基本層序は、上から近現代の耕作土、旧耕作土となる暗黄褐色～淡灰色粘質土、吉備池廃寺廃絶後の整地土である暗黄灰色～茶灰褐色粘質土、吉備池廃寺創建時の整地土である黄褐色山土混じりの暗茶褐色～暗灰褐色粘質土、地山と考えられる黄灰褐色～灰褐色の砂となる。旧地表面は、現状と同じく、おおむね西下がりの傾斜である。現在の水田面が段差をもつため、上部の厚さは一定しないが、整地土の厚さはいずれも10～20㎝ほどである。遺構面の標高は、東から、第111次調査区で80.7m、第95次調査南区が80.0m前後、第89次調査区は79.6～79.9m、第95次調査西南区が78.8mであった。

南面回廊基壇（PL. 15・16，Fig. 45）　第89次調査南トレンチで側石の抜取痕跡をもつ東西溝を、同東南トレンチで、この溝の東延長部とともに、その約6m南を平行する自然石の側石をもつ東西溝を検出した。溝の位置や方位、両溝の間隔などから、この溝間が南面回廊SC160の基壇であり、平行する2条の溝は南雨落溝SD161と北雨落溝の石組抜取溝SD162と判断した。さらに、その東方に設定した第95次調査南区では、両溝の延長部を検出し、さらに東方の第111次調査南区では、これらの溝が中門SB320の南北両側溝SD321・322に接続し、その東へも痕跡的ながら連続することを確認した。これらの所見を総合すると、南北雨落溝（雨落溝の石組抜取溝）間の心々間距離は6.2～6.6mとなる。いずれの調査区でも回廊の掘込地業は検出されず、削平のため、回廊の基壇土もまったく残っていない。

雨落溝間は6.2～6.6m

第89・95次調査区では、北雨落溝の石組抜取溝SD162のすぐ南で、明黄褐色～暗黄褐色粘質土を埋土とする、幅15㎝ほどの帯状遺構SX183を検出した。これは、第95次調査の断面観察によれば、SD162によって破壊されており、第89次調査区では、SD162と重複関係はないものの、きわめて浅くしか残らない。また、東方の第111次調査区では、遺構検出面が全体に大きく削平されているため、SX183を確認できなかった。このSX183をSC160の基壇外装の抜取痕跡とすれば、基壇外装は雨落溝の側石のすぐ内側に設けられたことになる。その場合、南雨落溝SD161の北側にも同様の痕跡が想定されるが、藤原宮期の東西溝SD180で破壊され、不明である。以上から、回廊の基壇幅については、5.4m前後と復元できる。

基壇外装の抜取痕跡か

なお、第89・95・111次調査区では、回廊基壇上で直径0.9～1.5mほどの土質の違い（SX185およびSX324）を認めている。いずれもきわめて痕跡的だが、これらは北側柱列の礎石抜取穴や据付穴の可能性が指摘されてきた（『年報1998－Ⅱ』、『年報1999－Ⅱ』、『紀要2001』）。ちなみに、南側柱列の想定位置は、藤原宮期の東西溝SD180によって完全に破壊されている[25]。SX185の穴どうしの間隔は約３m、SX324ではそれより若干長い3.3m程度である。

しかし、これらを礎石に関わる痕跡とした場合、北雨落溝推定心との距離は２m前後、回廊梁行の柱間寸法は2.2～2.6mとなり、梁行に比べて軒の出が長大に過ぎる。南面回廊の礎石は、SX185、SX324の中心よりかなり外側に位置したとみて間違いないだろう。また、第95次調査で検出したSX185の柱間寸法を東へ延長させると、中門SB320にとりつく部分の柱配置が、第111次調査区のSX324とは対称にならない可能性が大きい。したがって、上記の土質の違いSX185、SX324は、礎石にともなう痕跡とは認めがたい。

基壇幅5.4mの単廊

以上、南面回廊SC160は、基壇幅5.4mほどの単廊と考えられる。基壇高については不明だが、礎石の痕跡が残らないことから、中門と同様、高さ30～50㎝程度と推定しておく。

基壇外装については、明黄褐色～暗黄褐色粘質土を埋土とする幅15㎝ほどの帯状遺構SX183を、その抜取溝とみることができる。この場合、SX183は石を抜いたような様相を示さず、また切石や凝灰岩片も確認できないことから、金堂や塔と同様に、回廊も木製の基壇外装であった可能性が想定されよう。

南雨落溝SD161（PL.16，Fig.44・45）　南面回廊の南雨落溝は、幅約1.0m、深さ50㎝ほどの掘形を掘り、拳大～人頭大の自然石を側石としてならべる。底石はない。溝幅は内法30～55㎝、溝の深さは30㎝程度である。第95次調査南区では東西17mにわたってよく残るが、部分的に側

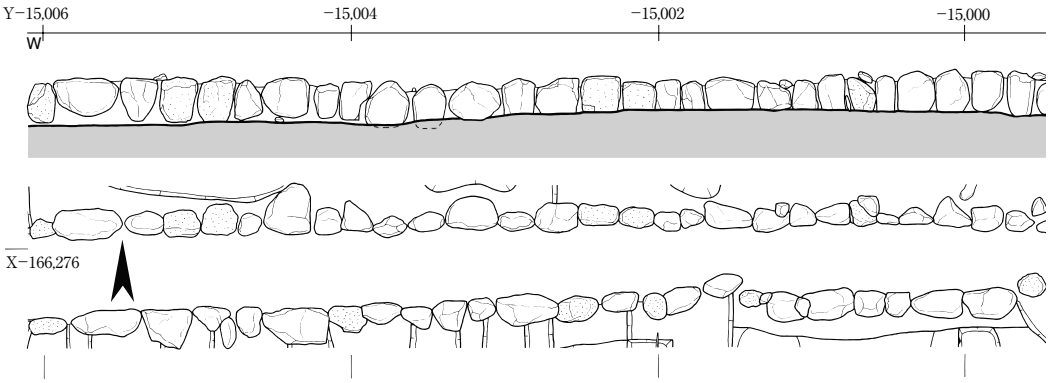


Fig. 44　南面回廊石組雨落溝SD161　1:50

石が溝内に落ち込んでいた。第89次調査東南トレンチでも、約２m幅で同様の石組みを検出している。側石は、風化の激しいものが砂塊となって残った部分もある。

溝底の標高は、第111次調査南区の西端（Y=−14,970）で80.4m、第95次調査南区の東端（Y=−14,993）が79.8m、同西端（Y=−15,009）では79.6m、第89次調査区（Y=−15,020）は79.5mである。したがって、西流したことが明らかだが、現状では東方の削平が大きく、中門SB320の東では痕跡的に残るにすぎない。溝の埋土には、流水による堆積土がなく、人為的に埋め立てられた様相を呈しており、基壇土に由来すると考えられる黄灰色の粘質土がまじる。なお北側石に沿って藤原宮期の東西溝SD180が通るため、溝の掘形の北肩は削られている。

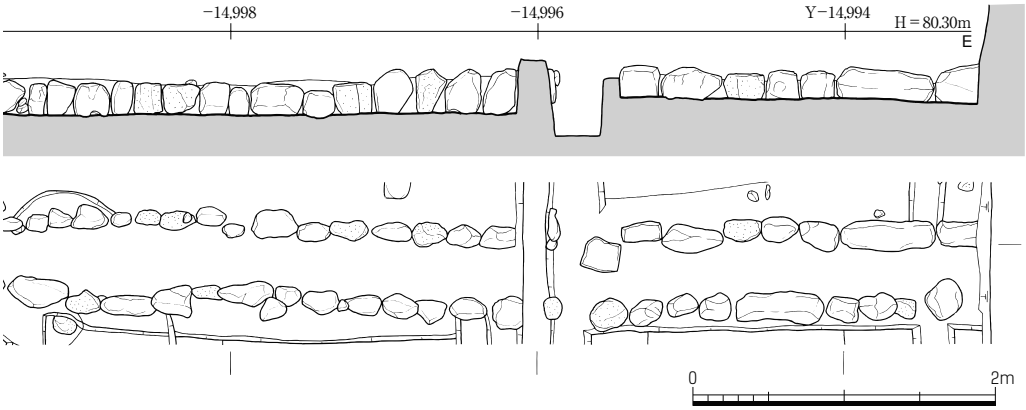
また、第95次調査西南区において、南面回廊南雨落溝と西面回廊西雨落溝の交点の検出を試みたものの、回廊関係の遺構は検出できなかった。検出面および南面回廊南雨落溝底の標高からみて、後世に完全に削平されたとは考えにくいが[26]、この調査区で検出した東西溝SD240は、南面回廊南雨落溝SD161の延長想定位置より１～２m北に寄っており、埋土の状況や出土遺物もSD161と異なる。なお、南面回廊南雨落溝が、西面回廊西雨落溝を越えて、標高の低い西方へと続いていたことは充分に想定される。

北雨落溝の石組抜取溝SD162（PL. 16，Fig. 45）　幅1.1～1.9m、検出面からの深さ10～15㎝の浅い素掘溝で、底には抜き取られた側石の痕跡がある。雨落溝の石組抜取溝であろう。この痕跡から復元できる側石の大きさや溝幅などは、南雨落溝SD161とほぼ同じである。

掘立柱塀SA181（PL. 16，Fig. 45）　第95次調査南区で検出した掘立柱東西塀。南面回廊南雨落溝SD161のすぐ南を平行し、SD161の掘形よりも古い。柱間寸法は約1.8～2.2mである。柱掘形は一辺40～60㎝のやや不整な方形で、黄色の山土が混じる。深さは20～30㎝である。第89・111次調査区では確認していない。第89次調査区は掘り下げが充分でなかった可能性もあるが、第111次調査区では削平されたと判断してよい。性格不明だが、掘形埋土の状況からみて、吉備池廃寺創建にかかわる遺構と考えられる。南面回廊建立以前の一時的な遮蔽施設か。

創建期の遮蔽施設

東西溝SD180（PL. 13・15，Fig. 45）　第95次調査南区および第111次調査南区で検出した素掘りの東西溝。南面回廊南雨落溝SD161に接する位置にあり、中門および南面回廊基壇上を横断する。幅1.7～2.7m[27]、検出面からの深さは60㎝程度である。溝底の標高は、第111次調査南区東端で80.5m、約62m西方の第95次調査南区西端では79.3mであり、西流したことは間違いない。溝の上層は、黄色土混じりの黄褐色～灰褐色砂質土で埋め立てられた様相を呈する。中層以下



は、礫混じりの灰色系の砂を主体とする流水堆積を示し、溝底付近は、遺物を比較的多く含む砂層となる。軒瓦を含む瓦片のほか、上層から飛鳥Ⅴ、中層から飛鳥Ⅳ、下層から飛鳥Ⅲ～Ⅳの土器が出土した。藤原宮期の溝であることは確実であり、その位置と遺構の状況から、三条大路の北側溝と判断される。

藤原京三条大路北側溝

もっとも吉備池廃寺周辺における藤原京の条坊遺構の検出例は乏しく、とりわけ東西方向の大路や条間路の検出例はほとんどない。上記の推定の妥当性については「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」で考察するが、第111次調査南区の南方でおこなった「橋本冠名遺跡」の調査や桜井市第12次調査では、条坊側溝に相当する東西溝を検出していない。[28)]

掘立柱建物SB190（PL. 16）　第95次調査南区の東端で検出した、南北にならぶ掘立柱穴３基。東西棟掘立柱建物の西妻に相当するとみられる。中央の柱穴は、南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162より新しく、掘立柱東西塀SA182・325が接続する一連の施設と考えられる。柱間寸法は1.9m前後で、柱掘形は一辺0.85～1.1m、検出面から30～50㎝の深さをもつ。柱掘形には、基壇土に由来するとみられる黄色粘土塊が入る。

この建物については、SD162より新しく、かつ正方位をとることから、藤原宮期と考えておく。東西塀SA182・325に開く門となる可能性を想定しうるだろう。この掘立柱列の位置が、左京三条十坊西南坪の中心に近いこともその傍証となる。[29)]

東西塀SA182（PL. 16，Fig. 45）　第95次調査南区で検出した掘立柱東西塀。南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と重複する位置にあり、第111次調査南区で検出した中門SB320の基壇上

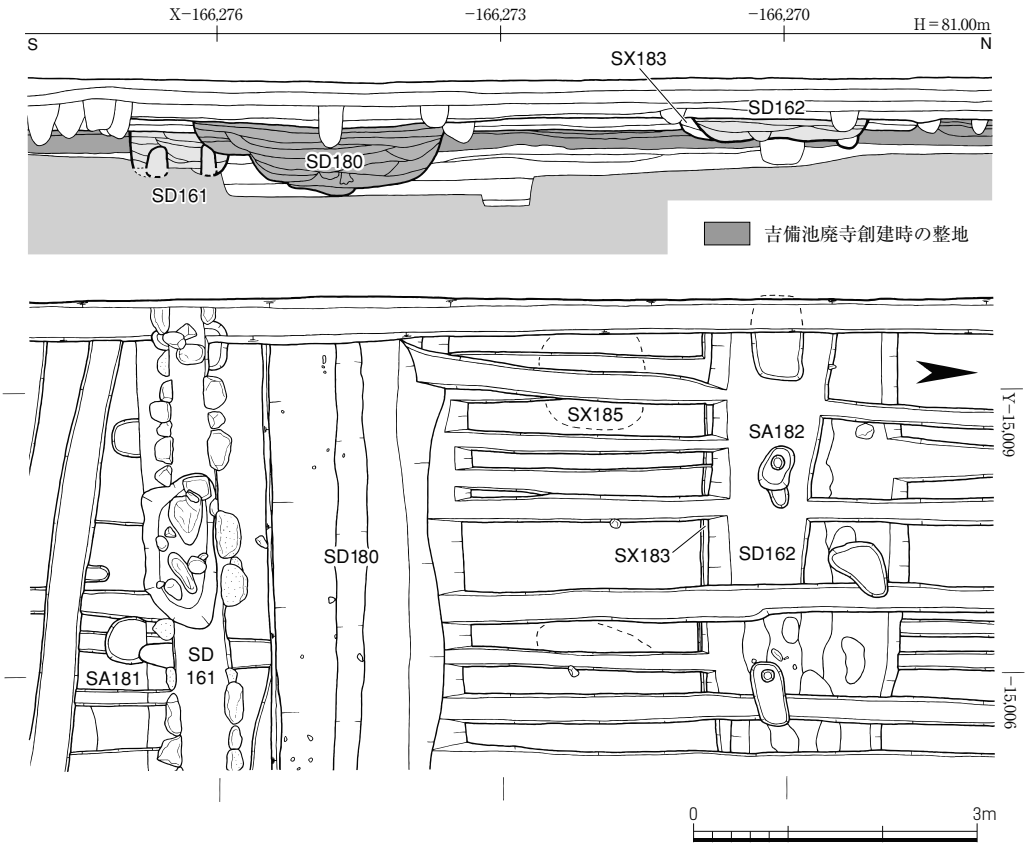


Fig. 45　南面回廊SC160付近の土層図と平面図　1:80

を横断する東西塀SA325の延長にあたる。『年報1999－Ⅱ』では南面回廊造営時の足場とみたが、SA325が回廊部分と中門部分の別にかかわらず、直線的にそれらの基壇上を横断することから、藤原宮期の遺構と解釈するのが妥当と考える。上記の東西棟掘立柱建物SB190にとりつく塀であろう。柱穴の寸法など詳細については、SA325の記載を参照されたい。

土坑SK193　第95次調査南区の北端近くにある土坑。南北長1.1m、深さ約10㎝で、東の調査区外へのびる。瓦片数点のほか、瓦器や土師器の甕、弥生時代の壺の破片などが出土した。

土坑SK186　第95次調査南区の中央部で検出した長さ４m以上、幅1.1mの南北に細長い土坑。南面回廊南雨落溝SD161より古く、吉備池廃寺創建以前の遺構である。埋土には、古墳時代の土師器、須恵器の甕を含む。性格不明。

創建以前の遺構

土坑SK187～189　第95次調査南区の浅い土坑。長辺1.1～2.5m、短辺70～90㎝の長方形平面をもち、長軸が正方位にほぼ合う。埋土には小礫が多く含まれる。SK188・189からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。いずれも藤原宮期の遺構とみられるが、性格は明らかでない。

E　西面回廊SC200とその周辺（PLAN 7，PL.17～19）

基本層序　西面回廊は、塔土壇の西側に設けた第95次調査西区東側のトレンチで検出した。調査区の基本層序は、上から、① 現耕作土、② 旧耕作土である淡灰褐色粘質土～茶灰褐色砂質土（厚さ10～20㎝）、③ 遺物包含層である灰褐色粘質土（厚さ10～15㎝）、④ 回廊雨落溝造営時のベースである黄色粘土混じり青灰色粘質土～暗灰褐色砂質土（厚さ10㎝前後）、⑤ 灰褐色粘土（厚さ10㎝前後）、地山である暗灰褐色粘土となる。素掘小溝の多くは③層上面、西面回廊SC200にともなう遺構や斜行溝SD215、土坑SK217・218などは④層上面で検出した。西区東側のトレンチから西には、整地土と考えられる黄灰褐色砂質土があって、斜行溝SD215を覆っている。この整地土は、南北溝SD201付近から西へ広がるものとみられる。西区東側のトレンチにおける遺構面の標高は78.9m前後。周囲の旧地形は西～西南西に向かって低くなる。

西面回廊の石組抜取溝SD201（PL.18，Fig.46）　幅1.1～1.4m、検出面からの深さ20～30㎝を測る素掘りの南北溝。後世の素掘小溝により大きく破壊されている。溝下面の標高は78.6～78.7mである。南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と異なり、石の抜取痕跡自体は明瞭でないが、溝底に灰褐色粘土が点々とつづき、石組みの存在をうかがわせる。

石の抜取痕跡SX202（Fig.46）　SD201の西約６mの位置で検出した４個の石の抜取痕跡。後述する伽藍内の排水暗渠SD215の埋土上面にある。当初の位置ではなく、転倒などによる石の移動後に抜き取られたものとみられる。

土質の差SX203（PL.18）　南面回廊におけるSX185やSX324と同様、SD201の心から２mほど西で、径約1.4mの土質の違いSX203を１箇所検出した。しかし、これも非常に痕跡的である。

西面回廊の復元（PL.17・18，Fig.46）　西面回廊SC200については、当初、南北溝SD201を東雨落溝の石組抜取溝、土質の差SX203を礎石の抜取痕跡、石の抜取痕跡SX202を西雨落溝関連遺構と理解した。つまり、SD201とSX202の間に西面回廊を想定したのである（『年報1999－Ⅱ』）。しかしながら、SX203に関しては、南面回廊の場合と同様、回廊の梁行と軒の出のバランスを欠くため、礎石の抜取痕跡とはみなしがたい。また、石の抜取痕跡SX202は二次的な移動後の痕跡であって、南北溝を形成する石にともなうものか確証がない。よって、西面回廊の遺構と

して確定的なのは南北溝SD201のみということになる。

そこで、あらためて西面回廊付近の調査区を見ると、SD201を境として、それより西側にだけ、整地土とみられる黄灰色土が広がっている状況を明瞭に認めることができる。これらは、SD201を東雨落溝ではなく西雨落溝とみて、回廊基壇をその東に想定することにより、説明がつく。すなわち、西面回廊を含む内側（東側）は、外側（西側）にくらべてやや高いため、後代に整地土が削平され、地形的に低い外側（西側）は整地土が遺存したと解釈できるのである。南面回廊でも、回廊外側（南側）の石組雨落溝が良好に遺存するのに対し、内側（北側）の雨落溝の石がまったく残っていないのは、このように、回廊で囲まれた内側が回廊の外側よりやや高かったことを示しているのであろう。

回廊内は外より高い

西面回廊西雨落溝

上記の理由から、SD201を回廊の外側、つまり西雨落溝の石組抜取溝と理解することにしたい[30]。西面回廊の基壇は、回廊内側の整地土と同様、削平されたものと考える。ちなみに、藤原京の東九坊大路がこの位置で検出できないのも、同じ理由による可能性がある。

以上、西面回廊については、西雨落溝の石組抜取溝SD201を検出したのみで、回廊基壇自体や基壇外装については不明とせざるをえない。南面回廊同様の仕様と推定しておく。

斜行溝SD215・210（PL. 19，Fig. 47）　SD215は、第95次調査西区東側のトレンチ西端部から中央のトレンチ内を西南西へ横断する素掘溝。検出面からの深さ60㎝前後の溝だが、近世の井戸SE220付近を境に、東西で様相が異なる。

伽藍の中心寄りにあたるSE220以東では、掘形は幅が1.2～1.4mで断面はV字形に近く、深さ70㎝ほど掘り込んだうえで、中央に人頭大の河原石を積み上げている。埋土は黄色もしくは灰色の粘土で、一時に埋めた様相を呈する。遺物は出土しなかった。

一方、SE220以西では、幅が２m前後となり、断面は方形に近くなるが、河原石は入れていない。さらにその底には幅90㎝、深さ15㎝ほどの長方形断面の素掘溝SD210を掘る。SD210の埋土は、流水による自然堆積を示す暗灰色～灰色細砂で、SD215とは様相を異にする。SD215検出面からSD210底までの深さは60㎝前後である。なお、この部分のSD215の上部は、次に述べる斜行溝SD225によって破壊されている。

SD210は、SE220以東ではSD215河原石積みのため確認できなかったが、溝底の標高からみて、東方へは続かないだろう。SD210とSD215が一連の遺構か、それとも時期差もしくは工程差であるのかは明らかにしえなかった。ただ、SE220付近を境に、伽藍の内外で様相が異なるのは、伽藍内をより重視した施工がおこなわれたことを示している可能性がある。

伽藍内を重視した施工

このSD215東半部の様相は、金堂基壇外周の溝SD104・105・250と類似しており、同様に

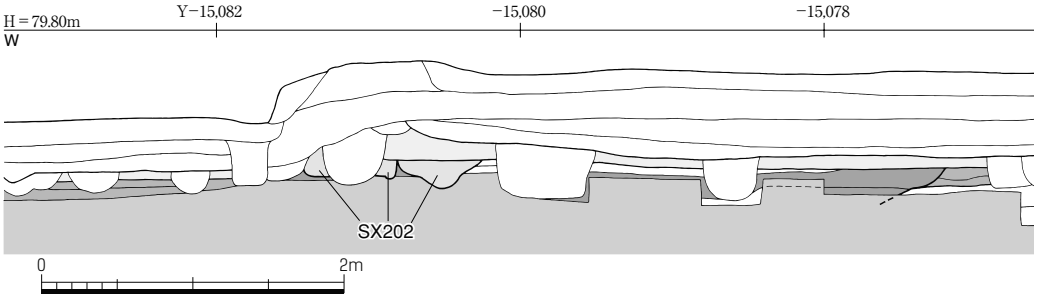


Fig. 46　西面回廊SC200付近の土層図　1:50

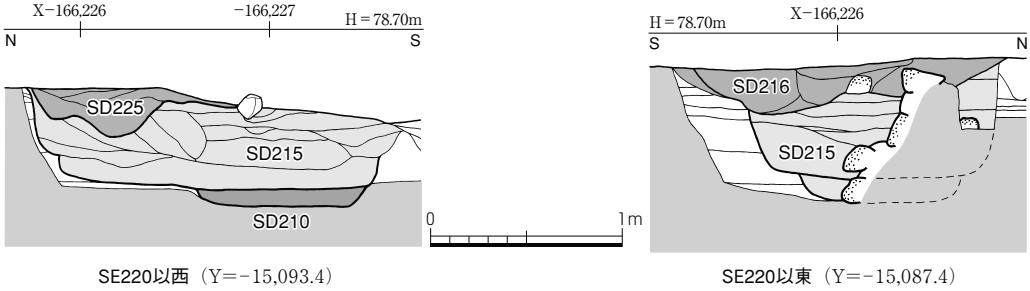


Fig. 47　斜行溝SD215・210の断面図　1:40

暗渠として機能したとみてよい。旧地形は西～西南西に向かって低くなっているため、回廊で囲まれた内部の水を排水する目的でつくられたものと推定される。なお、SD215を東方へのばすと塔基壇の北縁部にあたる。これがさらに東方へのび、金堂基壇周囲の溝SD104・105へ接続していたことは充分に考えられるだろう。

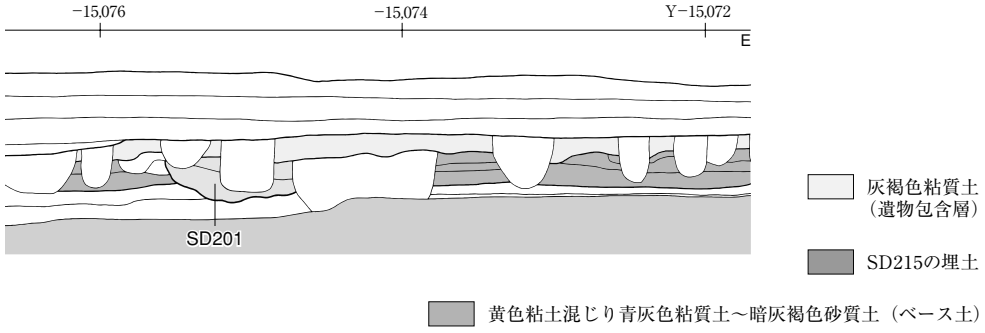
斜行溝SD225（Fig. 47）　第95次調査西区中央のトレンチにある近世井戸SE220付近から、西南西方向に流れる素掘溝。幅２ｍ前後、検出面からの深さは25㎝程度である。SD215と重複し、その上部を破壊する。溝の東端部は、藤原宮期とみられる土坑SK221と近世の井戸SE220の掘形で破壊されている。埋土には砂質土が堆積し、SD215に特徴的な黄色粘土がなく、河原石も含まない。下層から、飛鳥Ⅰの須恵器杯Hや弥生時代の壺の破片が出土した。性格については不明だが、SD215と一連のものである可能性も否定できない。

土坑SK216～218　いずれも第95次調査西区中央のトレンチで検出した土坑。調査区中央付近のSK216は、伽藍内の排水暗渠SD215の埋土である黄色粘土上から掘りこみ、東西2.4m、南北1.2mの長方形をなす。この埋土にも黄色の山土を含んでいる。断面は、東西両辺部が浅く中央部が深い逆凸字形で、検出面からの深さ約1.1mを測る。

SK216の北３ｍに位置し、調査区北壁にかかるSK217は、東西約２ｍ、南北1.7m以上の円形土坑である。西辺部には、長さ30㎝、幅５㎝の板２枚が長手方向を上下にして打ち込まれていた。検出面からの深さは約1.2m。藤原宮期の東西溝SD219より古い。

SK217の西５ｍの位置にあるSK218も、大部分が調査区北壁にかかる、東西4.5m以上、南北0.6m以上の土坑。掘り下げをおこなわなかったため、深さは不明である。これも、藤原宮期の東西溝SD219より古い。

これらの土坑は、埋土の状況が類似しており、同様な性格が想定される。SD215より新しく、藤原宮期の東西溝SD219より古いことから、吉備池廃寺の廃絶にかかわる土坑と推定しておく。　寺院廃絶期の土坑



SK216から７世紀の土師器杯Ｃと甕、SK217からは弥生時代の甕の破片が出土した。

土坑SK242　第95次調査西南区で検出した東西溝SD240の下層にある土坑。径２ｍ以上の円形をなし、調査区の壁面で確認できる深さは約40㎝である。回廊の外をめぐる雨落溝の西南隅想定位置に近いが、性格は明らかでない。藤原宮期の東西溝SD240よりも古いことから、吉備池廃寺にともなうものと判断した。遺物は出土していない。

南北塀SA204　第95次調査西区東側のトレンチで検出した、南北にならぶ掘立柱穴２基。間隔は1.6m程度である。北側の柱穴は南北に長い長方形で、検出面からの深さ約15㎝。南側の柱穴は径45～50㎝ほどの隅丸方形で、深さ約25㎝。柱間寸法からみて、さらに調査区外の南および北側に延びる可能性がある。いずれも、柱掘形には回廊基壇土に由来すると思われる多量の黄色粘土を含んでいる。藤原宮期の遺構と考えておく。

藤原宮期の遺構

東西溝SD219　第95次調査西区中央のトレンチ北縁部を横断する藤原宮期の素掘りの東西溝。幅50～90㎝、検出面からの深さは10～15㎝である。７世紀後半の土器が出土している。三条大路北側溝とみられる藤原宮期の東西溝SD180から約51m北に位置し、三条大路心からの距離は56mほどとなる。性格不明だが、宅地内の区画溝か。

土坑SK221　第95次調査西区中央のトレンチ内、近世井戸SE220の西に位置する土坑。SE220の掘形で一部破壊されている。断面はＶ字形をなし、完掘していないため深さは不明だが、検出面から50㎝以上を測る。上部から若干の瓦が出土。斜行溝SD225によく似た埋土をもつ。

東西溝SD226（PL. 19）　第95次調査西区中央のトレンチ西端から西側のトレンチ、さらに西方の調査区外へと続く藤原宮期の素掘りの東西溝。幅は東端部で約2.0m、検出面からの深さ20㎝前後で、西流する。溝底の標高は、西端部で77.7mである。飛鳥Ｖの須恵器杯Ｂなどのほか、判読不明の木簡、長さ1.3m×幅25㎝ほどの板材、獣骨などが出土した。溝の東端は護岸を施していたらしく、杭５本ほどを検出した。出土した板材もこの護岸にともなう可能性がある。この溝は、三条大路北側溝とみられる藤原宮期の東西溝SD180から約47m北に位置し、三条大路心からの距離は52mほどとなる。一方、溝の東端は、「第Ｖ章５ 藤原京条坊と寺地」での東九坊大路心推定位置から約50m西にあたる。藤原京の宅地内の区画溝であろう。

東西塀SA227（PL. 19）　第95次調査西区中央のトレンチ西端部から西側のトレンチにかけて検出した東西方向の掘立柱穴４基。東西溝SD226北肩の40～70㎝北を平行する。柱間寸法は2.1m等間で、１基は畦畔のため未検出だが、４間分に相当する。柱穴は径60㎝前後で円形に近く、柱痕跡の径は15㎝程度、検出面からの深さは25～55㎝を測る。遺物は出土していないが、SD226と同時期と考えておく。

近世の井戸SE220（PL. 19）　第95次調査西区中央のトレンチで検出した。一辺1.2mほどの方形をなす木製井戸枠をもつ。四隅には一辺12㎝ほどの角柱を立て、あいだに径６㎝前後の丸太を渡し、厚さ約１㎝の縦板を張る。掘形は一辺が3.5m前後の隅丸方形ないし円形で、SD215およびSD210を破壊する。掘り下げはおこなわなかった。

東西溝SD240（PL. 19）　第95次調査西南区で検出した素掘りの東西溝。幅約80㎝、検出面からの深さ約10㎝を測る。西端における溝底の標高は約78.7mであり、地形から西流するとみてよい。埋土には流水堆積による砂礫を多く含み、藤原宮期の土器が少量出土することから、藤原宮期の遺構と推定される。

この第95次調査西南区は、回廊の西南隅想定位置にあたり、南面回廊南雨落溝SD161の確認を意図して調査をおこなった。ここで検出したSD240は、SD161の想定位置より１～２m北にあるが、調査区内で西面回廊雨落溝に関連する南北溝は確認していない。地形から、SD240が西面回廊雨落溝位置をこえて西に延びていたことは確実とみられる。なお、藤原宮期の東西溝SD180は、方位の振れを考慮すると、ほぼSD240と同位置を通っていたと推定される。SD240は、埋土に砂礫を多く含む点でSD161とは状況を異にしており、藤原宮期の遺物が出土する点とあわせて、SD180の一部に該当する可能性が高いだろう。

東西塀SA241（PL. 19）　第95次調査西南区で検出した東西にならぶ掘立柱穴３基。中間の柱穴が抜け、また若干柱筋がずれるが、柱間寸法を1.9m前後とする東西塀と推定される。柱掘形は、径45～85㎝の不整円形で、東端のものはごく浅い。SD180もしくはSD240に関連するとみて、藤原宮期と考えておく。

F　東面回廊SC300とその周辺（PLAN 8，PL. 20・21）

遺存状況と基本層序　東面回廊は、金堂基壇東方に設定した第105次調査東区南トレンチで検出した。金堂掘込地業東端より約13m東で確認した南北溝SD305が、東面回廊西雨落溝の石組抜取溝にあたるものと推定する。基壇土や基壇外装、礎石の据付痕跡・抜取痕跡などはまったく遺存せず、東雨落溝も削平されているとみられる。

調査区の基本層序は金堂東辺とほぼ共通しており、上から、① 耕土・旧耕土（厚さ70～100㎝）、② 金堂廃絶後の整地層である灰色粘土（厚さ10～20㎝）、③ 遺物包含層である、鉄分の沈着が顕著な灰褐色～褐色粘質土（厚さ10～20㎝）、④ 吉備池廃寺創建時の整地とみられる橙黄色粘質土混じりの褐色～黄灰色粘質土（厚さ20㎝前後）、⑤ 金堂基壇構築のベースとなる、有機物と砂混じりの暗灰色～灰黒色粘質土（厚さ20㎝以上）、地山である灰黒色粘土～砂となる。東面回廊の遺構は、④層の上面で検出した。遺構面の標高は80.5m前後である。

西雨落溝の石組抜取溝SD305（PL. 21，Fig. 48）　幅1.1～1.4m、検出面からの深さ25～30㎝の南北溝で、わずかに２石を底部に残す。石は長径20㎝程度で、うち１石は平らな面を上に向けるものの、側石のならびを形成するほど整列しているわけではない。石の抜取痕跡も明瞭でないが、この溝には流水にともなう砂礫層がなく、黄色ないし黄灰色の山土混じりの粘質土によって一時に埋め立てられた様相を呈し、その際に投棄された瓦片や土器片を含んでいる。こうした埋土の状況は、南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と酷似しており、溝の規模や金堂との

山土で埋め立て

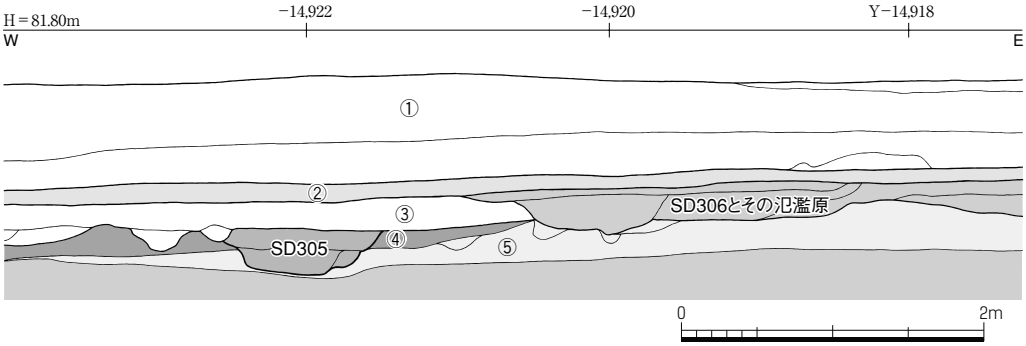


Fig. 48　東面回廊SC300付近の土層図　1:50

東面回廊西雨落溝

位置関係とあわせて、東面回廊西雨落溝の石組抜取溝と解釈するのが妥当だろう。

なお、この溝は、旧地形からみて、北流したものと推定されるが、第105次調査東区北トレンチでは、平安～鎌倉時代の溝SD306・307によって削平され、SD305の延長を確認することはできなかった。また、西雨落溝SD305に対応する東雨落溝の遺構も残っていない。したがって、周辺の地形が東へ向かって高くなる点を勘案すれば、東面回廊内外の標高はほとんど同じか、むしろ地形を反映して回廊外の方が高かった可能性があるだろう。

以上、東面回廊についても、西面回廊同様に不明な部分が多いものの、南面回廊とほぼ同じ仕様の基壇を有していたと考えられる。

平安～鎌倉時代の溝SD306・307　第105次調査東区で検出した、寺院廃絶後に東面回廊SC300上に掘られた素掘溝。南北溝SD306とそれから西へ分岐する東西溝SD307がある。SD306は、東区北トレンチでは幅2.6～2.9m、検出面からの深さ約20㎝を測る。SD307は幅1.6～2.2m、深さ30㎝ほどで、SD306にくらべて若干深い。東区南トレンチでは、SD306の下層遺構を確認する目的で掘り下げたため、遺構としては残っていない。SD306溝底の標高は80.6m前後で、旧地形からみて北流したものと考えられる。SD306・307いずれの埋土中にも、多数の礫とともに、吉備池廃寺創建瓦や瓦器椀などが含まれていた。後述する井戸SE312・313より新しく、12～13世紀頃の溝と推定される。

井戸SE311　第105次調査東区北トレンチ東南隅で検出した井戸。径40㎝ほどの曲物の井戸枠を備えていたとみられるが、井戸枠は抜き取られている。掘形は径約1.4mの円形で、検出面からの深さは約1.0mを測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土しており、この頃のものと考えられる。次に述べるSE312・313の機能を継承し、SD306・307と共存する井戸であろう。

平安～鎌倉時代の井戸

井戸SE312　第105次調査東区北トレンチの西端部で検出した井戸。SD307と重なる位置にあり、それより古い。曲物の井戸枠を二重にめぐらす。内側の曲物は径約30㎝、外側の曲物は径約40㎝を測り、いずれも高さ25㎝ほどが残存する。掘形は径約70㎝の円形である。11世紀代の瓦器椀などが出土したことから、その頃の遺構と考えられる。

井戸SE313　第105次調査東区北トレンチ、SE312の北方３mに位置する井戸。これも曲物の井戸枠を二重にめぐらしている。内側の曲物は径約30㎝、外側が径約40㎝とSE312とほぼ同規模である。遺構検出面から85㎝ほど掘り下げたが、底は未確認。外側の曲物は高さ35㎝、内側の曲物は高さ25㎝以上が遺存する。掘形は径1.3mで円形に近い。10～11世紀の黒色土器などが出土しており、この頃の井戸と考えられる。

G　僧房とその周辺（PLAN 9・10，PL.22～29）

遺存状況と基本層序　僧房は、金堂や塔、中門、回廊などとは異なり、比較的地盤のよい小丘陵の縁辺部に立地している。第111次調査北区および桜井市第９次調査区は、小丘陵に続く高燥な地形の頂部付近にあり、平坦面ないし北東へ向かってやや下る緩傾斜面をなす。

僧房SB340付近の基本層序は、上から、① 近現代の耕作土である暗茶灰色粘質土、②旧耕作土である黄褐色粘質土（厚さ30～40㎝）、③ 中世の瓦器を含む暗褐色粘質土（厚さ25～30㎝）、④８世紀の遺物を含む明茶色粘質土（厚さ10～25㎝）とつづき、その下が、花崗岩の風化した明黄灰色～明黄褐色シルトの地山となる。③層上面では、耕作にともなう素掘小溝を多数確認し、

さらには④層上面でも、それと方向を違える素掘小溝[31]のほか、掘立柱建物SB345を検出した。僧房SB340は、後述するように建物内部を掘りくぼめているが、その最下部にあたる柱掘形検出面（地山上面）の標高は80.8～81.0m、SB340周囲の地山上面の標高は81.2m程度である[32]。また、この北にある僧房SB400の遺構面の標高は80.9～81.4mであった。

なお、第111次調査北区の南半は、素掘小溝さえまったくなく、ある時期に削平されたか、当初より耕作に向かない地形であったと推定されるが、そこで確認した東西溝SD350付近の遺構面は標高81.3～81.4mである。その程度であれば、ゆるやかな北流れ面として耕作に適さないことはないとみられるので、少なくともこの部分は、ある時期（土層などからみて近世以降か）に、素掘小溝が消失する程度の削平を受けている可能性が高い。　大きく削平

一方、第105次調査中央区で検出した僧房SB260は、背後の小丘陵南縁を削って造成した平坦面に建てられており、近辺は南下がりの地形となる。このSB260付近の基本層序は、上から、①′耕作土、②′瓦器を含む灰褐色土（厚さ10～20㎝）、③′瓦器を含む暗灰茶色土（厚さ25～30㎝）、④′藤原宮期～平安時代初めまでの土器を含む暗橙黄色混じり灰色砂質土（厚さ10～20㎝）とつづき、その下が、地山である風化礫を含む橙黄色砂質土～シルトとなる。全体としては、SB340付近とほぼ同様の土層といえる。この地山上面で、飛鳥時代の僧房SB260と土坑SK261などを検出した。また、②′の下面では中世の大溝SD266などを、④′上面ではSB260周囲の小柱穴や小溝などを検出している。SB260付近の地山面は標高80.8～81.0m、中央区南端付近の地山面は80.3m前後である。

創建期の整地（PL. 29, Fig. 49）　僧房SB260の南方にあたる第105次池内調査区では、前節でも述べたように、吉備池廃寺創建にともなう整地を確認した。池内調査区の基本層序は、上から、Ⓐ池内堆積土、Ⓑ赤褐色砂質土と暗灰色～黄灰色砂質土が互層をなす整地土、Ⓒ吉備池廃寺創建に関わる整地土である灰色～灰黒色粘質土、Ⓓ古墳時代の遺物包含層である灰黒色粘質土～砂礫、Ⓔ黄灰色～橙黄灰色粘質土などの山土からなる地山崩落土、地山である花崗岩風化礫が斑状をなす橙黄褐色シルトとなる。

Ⓑ層は、池内調査区のうち、東端のトレンチ中央部から西から２番目のトレンチまで認められる。西端のトレンチでは攪乱を受けているが、その状況からみて、この位置までのびていたことが確実である。こうした広汎な広がりをもつことから、回廊や講堂などの基壇土そのものとは考えられず、吉備池廃寺にかかわる整地土である可能性が高い。

地山上面の標高は、池内東端のトレンチ北辺付近で79.8mであり、北方に位置する第105次調査中央区南端にくらべて約50㎝低い。地山は、ここからさらに西および南へ落ち込む様相を呈し、そこにⒹ、Ⓔ層が堆積している。なお、Ⓒ層下層には、一部に黄白色粘土と青灰色砂の

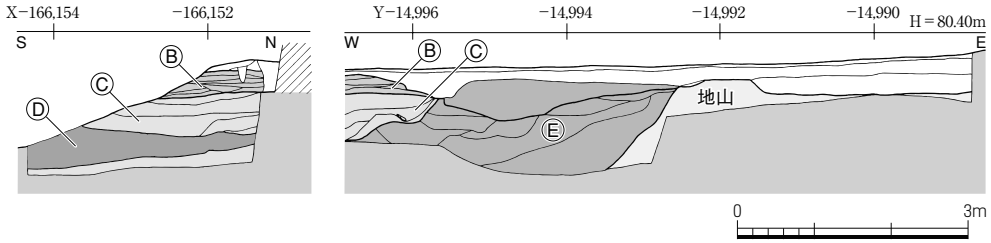


Fig. 49　吉備池廃寺創建期の整地　1:100

整地以前は低湿地

互層からなる水成堆積層が認められ、整地以前は流路ないしは低湿地だったと推定される。Ⓒ層には飛鳥Ⅰの遺物が含まれ、吉備池廃寺創建にともなう整地土と考えられる。

僧房SB340（PL. 22～24，Fig. 50）　第111次調査北区で検出した桁行11間×梁行２間の東西棟掘立柱建物。建物の全長は桁行28.0m×梁行5.4mほどで、柱間寸法は桁行が約2.5m、梁行は約2.7mである。柱掘形は、一辺約1.5～2.0mの隅丸方形で、埋土は、地山ブロックを含む黄褐色系の粘質土が層状をなしている。東南隅の柱穴掘形には炭が混じるほか、抜取穴に焼土が混じるものがある。柱掘形の深さは個々で若干異なるが、検出面から1.1～1.5mである。東西の妻柱は、側柱にくらべて平面がやや小さく、さらに東妻柱は検出面からの深さが約1.0mと浅い。柱のほとんどは抜き取られているが、柱痕跡からみて柱径は30～35㎝と考えられる。間仕切りや廂の柱穴はない。

南側柱列東から２基めの柱掘形からは、時期は特定できないものの、比較的多量の土器片が出土した。ただし、わずかながら吉備池廃寺創建軒瓦も含んでおり、建物が建てられた時期は、伽藍中心部の瓦葺建物よりやや遅れるとみられる。抜取穴には、７世紀後半とみられる土師器の杯が含まれ、柱が抜き取られた年代を示唆している。

SB340の外側には、平行して素掘溝がめぐる。北側柱の北にある東西溝をSD341、南側柱の南にある東西溝をSD342、西妻の西側にある南北溝をSD343とする。いずれも溝幅は40～60㎝、検出面からの深さは20～40㎝ほどである。SD342は、僧房SB340の西南端で直角に折れて南北溝SD343となり、途中でSD341が合流してさらに調査区北外方へのびる。これらの溝は、建物の外側を囲うようにめぐることから、雨落溝と判断される。SB340の推定柱位置から溝心までの距離は1.2m前後を測り、これがこの建物の軒の出であろう。なお、東妻の東側にも同様の溝があるかどうかは確認できない。

雨落溝

軒の出は1.2m前後

SB340の西妻、とりわけ西南隅付近で溝がＬ字形に折れる部分には、溝の埋土である淡黄色粘質土が溝外の南西方向に広がっており、溝の水が氾濫した状況を呈する。SD343は北流し、北方へ排水したと考えられるが、屈曲点付近であふれたものであろう。また、断面の観察では、ほぼ同位置で１度もしくは２度にわたる溝の造り替えが認められる部分があり、建物はある程

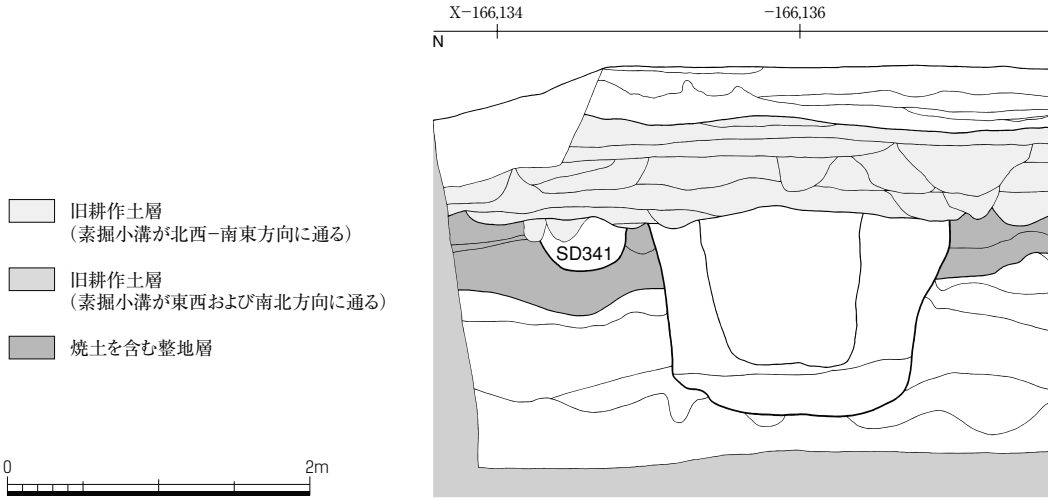


Fig. 50　僧房SB340東妻の柱穴断面図　1:50

度の期間存続したらしい。ちなみに、これらの溝から、吉備池廃寺創建期の軒瓦を含む瓦片が比較的多く出土しているが、この建物が掘立柱で、柱径も比較的小さいことを勘案すると、これらの瓦は本来、別の建物で使われていた可能性が高い。

柱掘形の検出は、建物の東部を除き、地山上面でおこなった。溝で囲まれた内部は、周囲より地山上面の標高が低く、地山によく似た整地土で覆われている。整地土の上面では抜取穴の輪郭がようやくわかる程度で、掘形の輪郭をつかむことはできなかった。掘形埋土も整地土とよく似た土質だが、雨落溝より内側となる部分の地山を掘りくぼめたのち、掘形を掘って柱をたて、整地を施しているようである。整地土中に遺物がほとんど認められないことから、建物内部を低くして使用したのではないらしい。この整地土は締まりがなく軟質で、建物外周の雨落溝は、これを切り込んでつくられている。

建物内部を掘り下げ

一方、建物の東端付近は、地山が北東へ向かって急激に落ちこみ、整地をおこなったうえで柱掘形を掘っている。こちらの整地土には、数カ所の焼土溜を含み、焼土溜SX357には飛鳥Ⅰの高杯Cのほか、スサ入りの焼土が混じる。次に述べる、SB340の北側にあるSB400の柱掘形や抜取穴にも焼土が含まれているが、これらは、第Ⅳ章３で後述するように(146頁)、寺院造営に先行して冶金関係の工房が存在したことに関連するのであろう。SB340の南東隅と北西隅の柱掘形によって破壊されている別の柱穴もしくは土坑は、それに関わる可能性が高い。

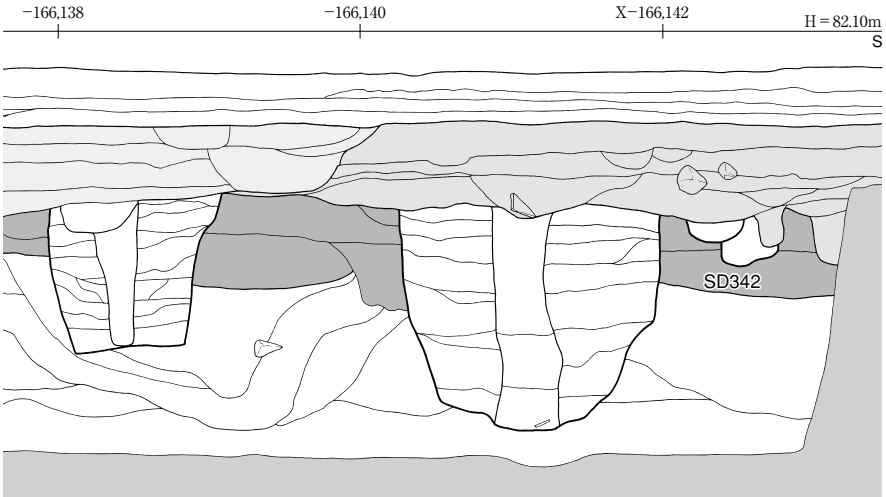
焼　　土

以上、SB340やSB400のような、伽藍後方にあってしかも東西に細長い建物は、僧房と考えるのが至当である。吉備池廃寺の僧房であることは間違いないだろう。

僧房SB400(PL.25・26，Fig.51)　桜井市第９次調査で検出した、桁行６間以上×梁行１間の東西棟掘立柱建物。建物の東端部を検出しているが、東の妻柱はない[33]。北側柱列７基、南側柱列４基の柱穴を確認し、柱間寸法は桁行が約2.7m、梁行が約5.4mである。先述のSB340の西側の南北溝SD343がそのまま北へのび、この建物の西を通ると考えると、SB400は桁行９間で、SB340と西妻をほぼそろえることになる。

西妻をそろえる

柱掘形は南北に長い略長方形で、長辺２ｍを越える大型のもの。最も大きい北側柱列東から３基めの柱穴は、南北2.9m、東西1.5m、深さ1.3mを測る。ほとんどの柱穴に、南へ柱を抜い



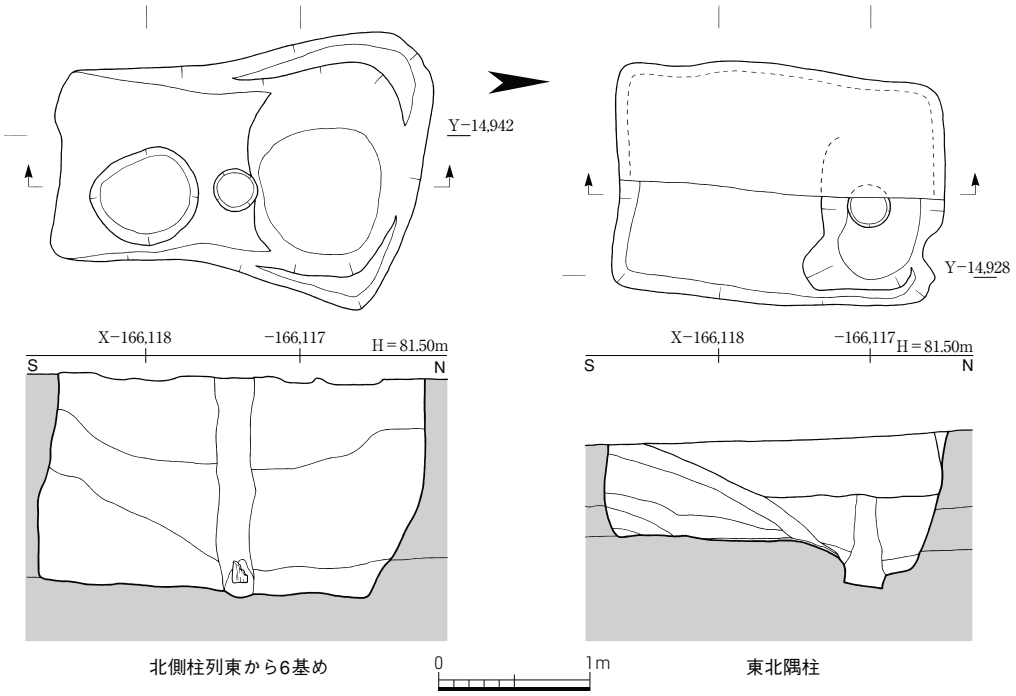


Fig. 51　僧房SB400柱穴断面図　1:50

たとみられる深い抜取穴があり、柱は掘形の北側に寄せて据えられていたことがわかる。ただ、北側柱列東から６基めには抜取穴がなく、柱痕跡が明瞭に残り、最下部に約20㎝の柱根が遺存していた。また北側柱列東から３基めの柱穴は、抜取穴をもつものの、底部に直径約30㎝の柱痕跡と腐蝕の進んだ柱根が遺存する。このほか、北側柱列の東から１～２基めと４基め、南側柱列東から４基めの底部近くには、粘土に置換した直径約30㎝の柱痕跡が残る。これらによって柱径および柱間寸法を把握することができた。

当初、巨大な柱掘形に対して柱径が小さいため、別にあった主柱が抜き取られ、添柱が遺存した可能性も想定したが、柱掘形と抜取穴の断面にそうした痕跡はまったく認められない。柱痕跡や柱根から復元される柱間寸法も整っており、柱径は30㎝程度とみて間違いない。なお、柱掘形には７世紀中頃までの遺物が、柱抜取穴には７世紀後半の遺物が含まれており、この建物の存続期間の一端がうかがえる。

SB400の東端以東では、北東の谷へむかう地山の落ち込みと、それを埋め立てた整地土を確認した。SB400東端の柱掘形は、この整地土上から掘り込まれており、整地は建物を建てる際

焼土や炭粒

におこわれたものらしい。また、SB400の柱掘形および抜取穴には、明瞭な焼土や炭粒が含まれている。こうした様相は上記のSB340と同様であり、第111次調査で確認した整地土中の焼土が、柱掘形の掘削時に入ったものと推定される。

僧房SB260（PL. 28，Fig. 52）　第105次調査中央区で東端を確認した、桁行３間以上×梁行２間の東西棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに約３ｍである。間仕切りや廂に相当する柱穴はない。柱掘形は一辺1.5m前後の隅丸方形で、検出面からの深さ1.1m前後を測る。柱は抜き取られた様相を示す。掘形・抜取穴とも、埋土中から遺物はほとんど出土しなかった。北側柱列東から３基めの柱穴は、後述する中世の大溝SD266・267によって大きく破壊され、遺存しない。この位置はSD266・267が交錯する部分にあたり、検出面から溝の底面までの深さは

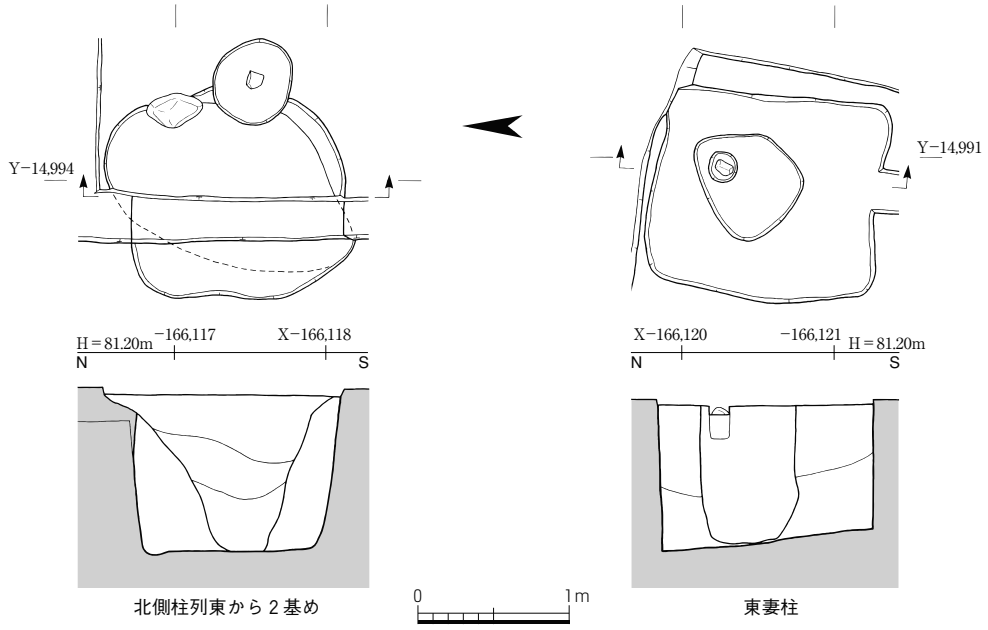


Fig. 52　僧房SB260柱穴断面図　1:50

85㎝程度である。したがって、ここの柱掘形はやや浅かったらしい。

SB260の東妻は、SB400の東妻から62.5m西にあるが、大型の柱掘形をもつこの２つの建物は、北側柱筋をそろえているとみられ、同時期の建物と考えられる。ともに、全長については明らかでないものの、僧房と推定してよいだろう。

土坑SK261　第105次調査中央区で検出した土坑。地山上で西辺部を検出したが、大部分は東の調査区外に広がる。直径2.5m以上、検出面からの深さ30㎝以上である。橙黄灰色砂質土を埋土としており、７世紀前半の土器が出土した。検出した層位と出土遺物からみて、吉備池廃寺創建期の土坑と推定される。

創建期の土坑

東西溝SD350（PL. 24，Fig. 53）　第111次調査北区の東南部で検出した素掘りの東西溝。幅1.0m前後、検出面からの深さ約40㎝を測る。底から20㎝ほどは流水による砂の堆積が認められ（下層）、それより上は、茶灰色の粘質土により一時に埋められた様相を呈する。この上層部分から奈良時代の土師器杯Ｃ小片と甕把手が出土した。一方、下層には明らかに奈良時代以降に下る遺物は含まれず、溝自体が比較的長いあいだ存続した可能性がある。「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」で検討するように、藤原京三条条間路の南側溝と考えられるが、これと対になる北側溝は検出できなかった。

三条条間路南側溝

なお、SD350から三条大路北側溝と推定される東西溝SD180心までの距離は、110.7ｍを測る。三条条間路心から三条大路心までの距離は、原則的には375大尺（大宝令大尺[34]、以下同じ）＝約133mであり、過去の調査成果から、三条条間路の側溝心々間距離は20大尺＝約７ｍ、三条大路は25大尺＝約９ｍとみてよい。したがって、三条条間路南側溝心と三条大路北側溝心の間隔は、本来、352.5（375−20/2−25/2）大

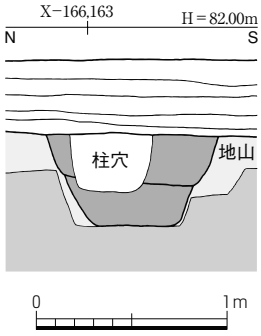


Fig. 53　SD350断面図　1:40

尺＝約125mとなるはずだが、SD180とSD350の間隔は、それより14mほど狭いことになる。

掘立柱建物SB345　第111次調査北区で検出した、桁行４間×梁行１間の東西棟掘立柱建物。僧房SB340に重複し、それより新しい。柱間寸法は、桁行が1.8m前後、梁行は3.1mを測るが、東西の妻柱を確認していない。梁行の柱間は２間分の長さがあるので、妻柱の掘形がごく浅いため削平されたか、僧房SB400と同じく明確な妻柱の掘形をもたない建物であろう。柱掘形は50～70㎝の方形で、深さは検出面から約30㎝を測る。黄褐色の柱痕跡を残す柱穴があり、柱径は15～20㎝である。土師器杯、甕のほか、須恵器甕が出土した。年代を特定できないが、奈良時代に降るものではない。比較的整った柱掘形をもち、藤原京の方位に合致することから、藤原宮期の遺構と推定される。

藤原宮期の遺構

掘立柱建物SB346　第111次調査北区で検出した、方２間の南北棟掘立柱建物。中心の柱がなく、総柱建物ではない。僧房SB340の東端付近に重複し、それより新しい。柱間寸法は、桁行（南北方向）が2.1m弱、梁行（東西方向）が1.5m弱を測り、北でやや西に振れる。柱掘形は一辺60～90㎝、検出面からの深さ30～50㎝程度で、抜取穴のほか、掘形の一部にも焼土や炭を含む。柱掘形から飛鳥Ⅴの須恵器が出土しており、藤原宮期の遺構と考えられる。

掘立柱建物SB347　第111次調査北区の西南付近で検出した、桁行３間×梁行２間の南北棟掘立柱建物。建物の西側柱列にあたる柱穴４基を検出し、北妻柱と東北隅柱は調査区中央部の南壁にかかる。方位は、北で西に振れる。柱間寸法は、桁行が約1.4m、梁行が約1.9mである。柱掘形は、一辺50～80㎝、検出面における深さ30～40㎝を測る。出土遺物がなく、時期不明だが、柱穴の形状が比較的しっかりとしていることから、藤原宮期の遺構とみておく。

井戸SE355　第111次調査北区東部の南壁にかかる井戸。直径2.8m以上で、掘形は抜取穴に破壊されている。この北側には、井戸の中心に向けてやや低く傾斜する石敷があり、西方にも浅い掘り込みがあることから、当初は周囲を石敷としていた可能性が大きい。井戸の縁辺部に人頭大の河原石をならべ、そのまわりに拳大の礫を敷いたものであろう。平城Ⅲの土器が出土しており、８世紀中頃の井戸と考えられる。

奈良時代の井戸

井戸SE360　第111次調査北区の北壁にかかる井戸。井戸枠は抜き取られ、掘形は抜取穴によって破壊されている。検出面における抜取穴の径は約1.4mを測り、埋土は中央が下がる層状の堆積を示す。また、検出面から1.4m下の底面には直径35㎝、深さ20㎝ほどの円形のくぼみがある。この部分は柱痕跡状の淡黄色シルトで、底部の曲物が抜き取られず、痕跡として残ったらしい。出土遺物は少ないが、８世紀中頃の井戸と推定される。

井戸SE356　第111次調査北区の北壁にかかる井戸。掘形の直径3.5m以上の比較的大きなものだが、井戸枠などは抜き取られている。10世紀頃の羽釜などが出土しており、この頃の井戸と考えられる。平面的な掘り下げは断念した。

平安時代の井戸

このほか、第111次調査北区や第105次調査中央区北トレンチでは、径50㎝程度もしくはそれ以下の不整円形をなす柱穴を多数検出した。もっとも、建物としてまとまるものは少ない。柱穴からの出土遺物もわずかで、時期を特定できないものが多いが、埋土に黒褐色粘質土が入る柱穴は中世の遺構とみられる。

南北塀SA401　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の東に位置する掘立柱南北塀。調査区の制約から中間部分を確認していないが、６間分、計４基の柱穴を検出した。方位は北で東

に振れる。柱間寸法は約1.8m、柱掘形は50～70㎝の隅丸方形で、検出面からの深さ60～70㎝を測る。柱径は約20㎝と推定され、柱穴の底に板状の榛原石や平瓦を敷いたものがある。南方の第111次調査区では延長部分を確認していない。

区画溝SD402　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400に重複する素掘りの南北溝。検出面における幅約60㎝、深さ約１ｍを測る。溝の壁面は垂直に近く立ち上がり、底面は幅35㎝で平坦をなす。南は調査区外へのび、北側はSB400北側柱筋付近でとぎれる。埋土は暗灰褐色土で大きく３層に分かれるが、流水による堆積は認められない。藤原宮期の区画溝と推定されるものの、南方の第111次調査区では延長部分を検出していない。

区画溝SD403　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の南方にある素掘りの東西溝。検出面における幅約40㎝、深さ約20㎝を測る。遺物の出土が少なく、厳密な時期の比定は困難だが、先述したSD402と直交することから、同時期の東西方向の区画溝と想定した。

土坑SK404　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の南側柱に重複する長方形土坑。南北3.2m以上、東西約0.7mを測る。深さは約50㎝で、埋土の上部には灰や炭・焼土塊を多量に含み、藤原宮期の須恵器・土師器などが出土した。

南北塀SA405　桜井市第９次調査で検出した、区画溝SD402心の西約１ｍに位置する掘立柱南北塀。３間分を検出し、南方の調査区外へと続く。柱間寸法は1.5～1.8m。柱掘形は一辺50～80㎝の方形で、検出面からの深さは35～50㎝である。北端で次に述べる東西塀SA406に接続すると解釈したが、さらにその北方へも不規則な柱間寸法でのびる可能性がある。埋土からは藤原宮期の土器が出土した。

東西塀SA406　桜井市第９次調査で検出した掘立柱東西塀。３間分を検出し、西方の調査区外へ続く。柱間寸法は1.5～1.7m。柱掘形は一辺65～80㎝の方形で、検出面からの深さは35～50㎝である。先述した南北塀SA405に接続すると考えられるが、南北溝SD402をまたいで、さらにその東へものびる可能性がある。藤原宮期の土器のほか、鉄釘などが出土した。以上、SA405・406は、SD402やSD403と併存する藤原宮期の区画施設の可能性がある。

中世の大溝SD266・267　第105次調査中央区の北寄りにあり、僧房SB260の北側柱を破壊する。上層の南北溝をSD266とし、その下層にある東西溝をSD267としたが、SD266の南端とSD267の東端は、平面的にほぼ同じ位置となる。

南北溝SD266は、地山上面で幅2.8m、深さ40㎝を測るが、上層にある灰褐色土（63頁の②′層）の下面から掘りこまれており、本来は、幅3.5m以上、深さ70㎝以上の規模となる。底近くに灰色粘土が薄く堆積するのが特徴で、14～15世紀とみられる白磁椀などが出土している。

東西溝SD267はSD266の下層にあり、SD266底面での幅は2.2m前後、そこからの深さは25㎝ほどだが、地山上面からの深さは約85㎝となる。やはり底に灰色粘土が堆積しており、SD266と類似した性格が想定される。出土遺物もSD266とほぼ共通し、14世紀の瓦器椀や14～15世紀の白磁椀、青磁椀などがある。

東西溝SD268　第105次調査中央区の南寄りにある素掘りの東西溝。検出した地山上面での幅は1.6m前後で、東で南に振れる。検出面から約60㎝まで確認したところで掘り下げを断念した。掘形は断面Ｖ字形をなし、瓦小片や小石が出土したが、時期を特定できる遺物はない。

H　北外周部の遺構（PLAN 11・12，PL. 30・31）

遺存状況と基本層序　桜井市第11次調査区と第105次調査西区が該当する。桜井市第11次調査区は、金堂の北約140mの小丘陵上に位置し、調査区の東端部分は大きく削平を受けているものの、それ以西では、6世紀末～藤原宮期以前の遺構を比較的良好な状態で検出した。一方、第105次調査西区は、この小丘陵の西方に位置する。この部分は南下がりの地形のため、北半は地山面が浅く、中世以後の遺構しか認められなかったが、南半では、包含層下で奈良時代末～中世の溝や流路を検出した。

桜井市第11次調査区の基本層序は、上から、表土（厚さ約10㎝）、粗砂を多く含む暗灰褐色粘質土（厚さ約20㎝）、地山のブロックを含む暗灰色～暗褐色の粘質土（厚さ約10㎝）とつづき、その下が、地山である黄灰色の花崗岩風化土となる。遺構のほとんどは、この地山面で検出した。丘陵地のため、地山面の標高は、もっとも高い調査区西南隅付近で約84.0m、最も低い東北隅付近が82.8mであり、ここから東は近世に削平されている。

また、第105次調査西区の基本層序は、上から、盛土・耕作土（厚さ約40㎝）、暗青灰褐色土（厚さ約20㎝）、黄灰色～橙黄褐色粘質土（厚さ約30㎝）、地山である橙黄褐色の花崗岩風化土となる。ただ、北半部は耕作土・床土（厚さ約30㎝）直下がほぼ地山となっていた。地山面の標高は79.5m前後である。

以下、遺構について、桜井市第11次調査区、第105次調査西区の順に記述する。

切り通しSX421（PL. 31）　桜井市第11次調査区の中央部にある東西方向の切り通しで、北側を切り下げている。段差は、次に述べる南北溝SD422の溝底との間で約70㎝、その他の部分では50㎝前後ある。後述する掘立柱建物SB420やSD422などを設けるため、北側の地山を切り下げ、平坦にしたものとみられる。

南北溝SD422（PL. 31）　桜井市第11次調査区中央部から北にのびる素掘りの南北溝。南端は切り通しSX421で止まり、北は調査区外へと続く。幅は最も広い部分で3.0m程度、検出面からの深さ30～40㎝であるが、南にむかうにつれて西側の肩が乱れ、溝幅が狭くなる。埋土には地山ブロックを多く含み、人為的に埋められた様相を呈する。

掘立柱建物SB420　SD422の東に接する南北棟掘立柱建物で、建物の西南隅を含む部分を検出した。桁行3間以上×梁行2間以上で、柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.3mとみられる。東側柱列は削平によって失われており、北は調査区外へのびる。柱掘形は一辺55～90㎝の方形で、検出面からの深さは、35～90㎝である。北から2基めの柱穴には、径15㎝ほどの柱痕跡を残している。

吉備池廃寺関連の遺構

以上のSX421、SD422、SB420は、金堂・塔・僧房・回廊とほぼ同一の方位を示し、吉備池廃寺に関連する施設と推定される。

竪穴住居SB426（PL. 31）　桜井市第11次調査区の西北隅で検出した方形の竪穴住居である。南北約3.5m×東西2.5m以上で、西の調査区外に続く。検出面から30㎝ほど地山を掘り下げ、南側に竈を設けている。方位は北で約20°西に振れる。東側の出入口とみられる場所では、径10㎝ほどの杭跡を2本確認した。竈の内部からは甑や高杯・杯などの破片が出土しており、6世紀末～7世紀初め頃の遺構とみられる。埋土は、地山のブロックを多量に含む比較的きれいな暗

灰褐色土で、自然堆積ではなく、人工的に埋められたことがうかがえる。

掘立柱建物SB425　桜井市第11次調査区の西北隅で検出した、桁行３間×梁行２間の東西棟掘立柱建物。竪穴住居SB426に重複し、それより新しい。東北隅の柱穴２基は調査区外となる。柱間寸法は、桁行が約1.6m、梁行は約1.5mである。建物の主軸は東で約20°北へ振れており、竪穴住居SB426と共通する。柱掘形は径35～70㎝で円形に近く、検出面からの深さ40～65㎝を測る。SB426より時期が降るものの、大きな時期差はないとみられる。

掘立柱建物SB423（PL.31）　桜井市第11次調査区の南寄りで検出した、桁行３間×梁行３間の総柱の南北棟掘立柱建物。全長は、桁行が6.3m、梁行4.2m、柱間寸法は、桁行が約2.1m、梁行は約1.4mを測る。建物の主軸は北で約15°東に振れ、東北隅の柱穴は切り通しSX421によって削平されている。柱掘形の多くは一辺約50～80㎝の方形を呈し、検出面からの深さは50～70㎝である。ただ、西側柱筋の柱掘形４基は南北に長い長方形で、長辺0.9～1.4m、短辺0.7～0.9mと大きく、検出面からの深さも、西南隅柱で約1.0mと深い。南側柱列西から３基めの柱穴には柱痕跡があり、柱径は約12㎝と復元される。

掘立柱塀SA424　桜井市第11次調査区の西南隅、SB423の西にある掘立柱塀で、直角に折れる。SB423同様、北で約15°東に振れる方位をもつ。東西・南北とも１間分を検出し、柱間寸法は、東西方向が1.3m、南北方向は1.9 mである。掘立柱建物となる可能性もあるが、柱掘形が小さく、併存するとみられるSB423との距離が１mしか離れていないことから、塀と考えておく。柱掘形は径50㎝前後の円形～隅丸方形で、検出面からの深さは40～65㎝である。

上記の掘立柱建物SB423と掘立柱塀SA424は、吉備池廃寺の時期とみられる南北溝SD422よりも古く、吉備池廃寺の直前にあたる時期の遺構と推定される。

吉備池廃寺直前の遺構

流路SD291～293　いずれも、第105次調査西区の南端付近で検出した自然流路である。

SD291は調査区東南隅から北北西へ向かう流路で、後述するSD287付近までのびて西方の調査区外へ続く。流路の東肩は比較的明瞭なものの、西肩は不明瞭で、ある程度の幅をもっていたらしい。青灰褐色砂～細砂を埋土としており、検出面からの深さ60㎝前後を測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土した。

SD292は、調査区西南隅から蛇行して北にのびる流路で、西方の調査区外へ続く。幅は明らかでないが、灰褐色砂～細砂の埋土をもち、検出面からの深さ40㎝程度を測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土し、やはりその頃の遺構と推定される。

SD293は、SD291・292の下層にある円弧状の流路。検出面における幅1.4～2.3m、深さ40㎝程度で、橙灰褐色粘質土を埋土とする。９世紀の土師器皿などが出土しており、奈良時代末～平安時代初頭頃の溝とみられる。

素掘溝SD285～287　第105次調査西区の中央部付近で検出したコの字形の素掘溝で、西の調査区外へつづく。北側の東西溝をSD285、東側の南北溝をSD286、南側の東西溝をSD287とする。次に述べる素掘溝SD288～290より新しく、埋土がこれらを覆っている。SD285～287は幅1.0～2.0m、検出面からの深さ30㎝程度を測る。黄褐色～灰褐色の粘質土を埋土とし、14～15世紀頃の羽釜、12～13世紀の瓦器椀などが出土した。14～15世紀の遺構とみられる。

素掘溝SD288～290　第105次調査西区の中央部付近で検出したL字形の素掘溝。幅60～80㎝、深さ40㎝以上で、いずれも暗灰色粘質土を埋土とする。SD289・290には遺物がみられないが、

SD288から14世紀の瓦器椀などが出土しており、いずれも14～15世紀の溝と推定される。これらの溝が埋没したのち、ほぼ同じ位置にSD285～287が掘られている。

Ⅰ　南外周部の遺構（PLAN 12，PL.32）

基本層序　中門SB320の南方で実施した桜井市第12次調査が該当する。調査区の基本層序は、上から、現代の盛土（厚さ0.8～1.0m）、耕土・床土（厚さ25～30㎝）があり、その下が遺物包含層である暗灰色粘土（厚さ15～30㎝）となる。これには飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が含まれ、次に述べるSD441・442を覆っている。この下に、地山である暗褐色粘土が広がる。遺構面の標高は80.5～80.7mである。

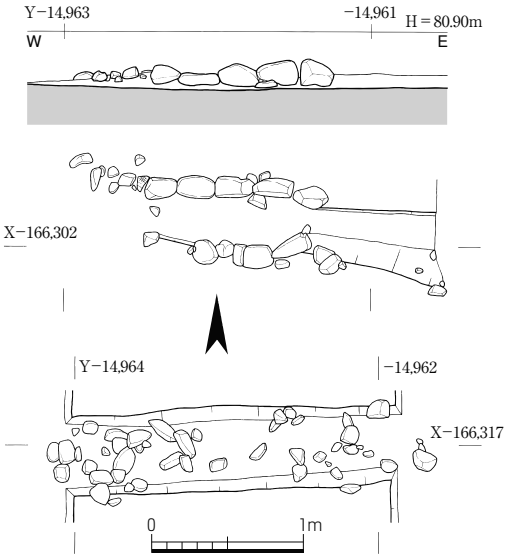


Fig. 54　SD441（上）とSD442（下）　1:50

東西石組溝SD441（PL.32，Fig.54）　調査区の北端付近で検出した東西方向の石組溝。拳大～人頭大の河原石を南北の側石として並べている。石組みの遺存状況は悪く、長さ1.7mにわたって確認したが、それより東と西には残っていない。溝の幅は内法で約30㎝、深さは15㎝程度である。いずれも南面回廊の南雨落溝SD161にくらべて小さい。北の側石はほぼ当初の位置にあるものの、南の側石で原位置に残るものは少なく、東端部の側石はともに内側に倒れ込んでいた。これらの側石も、SD161の側石と比較すると若干小振りである。溝は、この上部を覆う暗灰色粘土で埋まっており、須恵器の細片が出土した。

SD161より小規模

東西溝SD442（PL.32，Fig.54・55）　調査区の中央部で検出した東西溝。調査区を横断してさらに東と西へ続く。溝の幅は55㎝前後、深さは15㎝程度である。溝のなかには、側石が落ち込んだものとみられる拳大の河原石が散らばっていた。SD441と同じく暗灰色粘土を埋土とし、ごく少量の瓦が出土している。

ベースの高まりSX443（Fig.55）　SD441とSD442のあいだの中ほどにあるベースの高まり。南北幅3.6m、高さ20㎝程度の高まりで、不整形ではあるが、暗灰色粘土によって覆われ、古い段階から高まりとして存在していたことが確認できる。

以上の遺構については、中門SB320の南方に位置すること、SD441とSD442が対になる可能性が高いことから、これらを南北の雨落溝および基壇の名残とみて、この位置に吉備池廃寺の南門を想定することも不可能でない。桜井市教育委員会による当該地区の調査概報はその立場

南門か

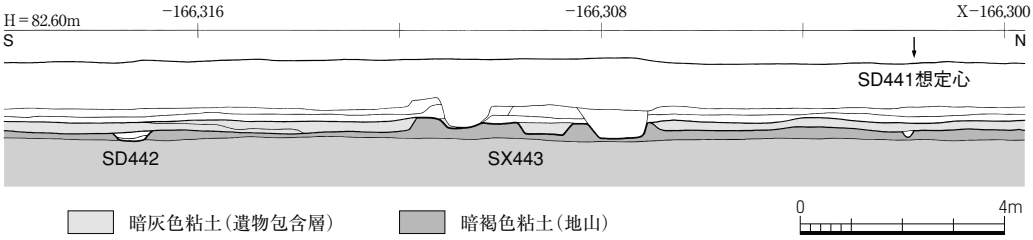


Fig. 55　東西溝SD441・442間の土層図　1:150

をとる[35]。しかし、そうした場合、SD441とSD442の心々間距離は約15.2mに達するので、中門の規模（南北の雨落溝心々間距離で約10.4m）をはるかに凌ぐものとなってしまう。溝の規模がそれにふさわしいものか疑問もあり、ベースの高まりが基壇土を構成するものかどうかも明らかでない。調査面積が限られ、遺構がきわめて断片的である点とあわせて、現状でこれらを南門の遺構と断定するのは困難であろう。本書における上記遺構の解釈については、「第Ⅴ章２ 伽藍配置の復元」を参照されたい。

1） 加えて、階段位置と建物の柱間は密接に関わると考えられるから、この場合、掘込地業段階で建物の柱位置まで考慮した高度な計画的施工がおこなわれたと想定しなければならない。

2） 山田寺講堂（桜井市山田）が正面端間を片開扉とするが、きわめてめずらしい。

3） 藤島亥治郎編『平泉 －毛越寺と観自在王院の研究－』東京大学出版会、1961年。

4） 奈良県教育委員会『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』1960年。

5） 西辺における掘込地業の座標はY=−14,970.9～971.2、東辺の座標はY=−14,934.9ほどである。なお、東辺には40㎝四方ほどの張り出し部分があるが、掘り込み時に壁が崩れた部分にも版築を施したものと解釈しておく。

6） 掘込地業の北辺の座標はX=−166,208.4～208.8、西南隅部における南辺の座標はX=−166,232.8と計測でき、本文で述べたように、この東側ではさらに南方へ張り出す。南方への張り出しを掘込地業と認めても、掘込地業の南北幅は最大約30.0mとなる。

7） 掘込地業の範囲と基壇規模の関係が判明するものとしては、以下の事例がある。まず、ほぼ同規模の例としては、７世紀末～８世紀の橘寺塔（明日香村橘）、８世紀の平城宮壬生門（奈良市）、下野国分尼寺金堂（栃木県国分寺町）、相模国分寺講堂（神奈川県海老名市）がある。一方、基壇より広い範囲に掘込地業を施す例には、中国北魏代の永寧寺塔（河南省洛陽市）、７世紀中葉～後半の山田寺金堂・塔、７世紀後半の川原寺東門（明日香村川原）、８世紀の相模国分寺塔、筑後国分寺講堂（福岡県久留米市）、11世紀の法勝寺金堂や12世紀の尊勝寺阿弥陀堂（ともに京都市）がある。なお、このうち筑後国分寺講堂は、掘込地業と基壇の心が一致しない。また、肥前国分寺塔（佐賀県大和町）では、25.4×24.9mの掘込地業を検出しており、塔としては日本最大級の掘込地業となるが、これも基壇範囲を越えて掘込地業を施した可能性がある。逆に、掘込地業の範囲を越えて基壇を築く例としては、８世紀の武蔵国分寺金堂・塔（東京都国分寺市）、下総国分尼寺金堂（千葉県市川市）、美濃国分寺塔（岐阜県大垣市）、伊予国分寺塔（愛媛県今治市）がある。

　壬生門：奈文研『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1981年。橘寺：奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年。諸国国分寺：角田文衛編『新修国分寺の研究』第２巻～第７巻、吉川弘文館、1987年～1997年。永寧寺：奈文研『北魏洛陽永寧寺』奈文研史料第47冊、1998年。山田寺：奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。川原寺東門：『藤原概報 ４』1974年。尊勝寺・法勝寺：古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店、1994年。

8） 土壇上南北トレンチの北端で礎石抜取穴の可能性を残す落ち込みを検出したが、土壇の保存を第一として断面観察をおこなっていないため、明確でない。ただし、この位置に金堂建物の柱が立つと想定した場合、身舎の妻柱に相当することになり、同じトレンチ内の南方にも柱が立つはずだが、そうした痕跡は確認されていない。

9） 現存基壇上面の標高が82.6m、後述する基壇東方の砂利敷SX103の上面は80.8～80.9mである。

10） 金堂および中門の南方でおこなった「橋本冠名遺跡」の調査では、わずかに凝灰岩片が出土しているが（前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、1985年）、金堂基壇に大量に使用されていたとは考えがたい。

11） 基壇高が大きいことから、凝灰岩壇正積を想定すると羽目石が大きくなり、それにともなって地覆石も大きくなる。たとえば、古墳の事例であるが、高松塚古墳（明日香村平田）の石槨の南壁は、137×113㎝の平面に対して、厚さが45～49㎝あり（奈良県教育委員会・明日香村『壁画古墳高松塚調査中間報告』1973年）、同程度の羽目石を想定した場合、地覆石は羽目石以上の大きさをもつはずである。しかし、このような大きな石材が抜き取られた痕跡はまったくない。したがって、下成基壇

が小さい二重以上の基壇を想定せざるをえないが、その場合も、凝灰岩片を含めて、基壇外装の痕跡がすべて失われた理由は説明しがたい。

12）石製の基壇外装は、基壇土との間に裏込土を入れて石材を固定する必要があるが、木製の基壇外装では、しっかりとした版築基壇を築いていさえすれば、裏込土の必要性は乏しい。なお、このように木製の基壇外装を想定した場合、後述する基壇周辺の掘立柱穴SB106～109、SA110は、基壇にとりつく階段関連の遺構となる可能性もあるだろう。

13）板材の痕跡を検出した例として、７世紀末の横滝山廃寺金堂（新潟県寺泊町）、８世紀中頃に創建された近江国庁の政庁東側区画にある礎石建物（滋賀県大津市）、８世紀後半創建の小食土（やさしど）廃寺（金堂？）（千葉市）がある。また、束柱が遺存した例として、12世紀の毛越寺南大門・廊・講堂（岩手県平泉町）、13世紀の永福寺二階堂・薬師堂・阿弥陀堂（神奈川県鎌倉市）があり、７世紀中頃の前期難波宮（大阪市）における内裏中心部の建物周囲の小柱穴についてもその可能性が指摘されている。このほか、三河国分寺塔（愛知県豊川市）では、掘込地業の外縁部に角材を約10°ほど内傾させて立てならべ、基壇外装としていた。

横滝山廃寺：寺泊町教育委員会『横滝山廃寺跡発掘調査概報 －第３次調査－』1984年。同『横滝山廃寺跡発掘調査概報 －第４次調査－』1985年。上野邦一「木造基壇外装を持つ建物の一事例 －新潟県三島郡寺泊町の横滝山廃寺－」『日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集』日本建築学会、1984年。小食土廃寺：千葉県教育委員会『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』1986年。近江国庁：滋賀県教育委員会『平成10年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』2000年、35～43頁。毛越寺：藤島亥治郎編『平泉』前掲註３)。永福寺：鎌倉市教育委員会『永福寺跡 －遺構編－』2001年。前期難波宮：植木 久「前期難波宮遺構にみる建築的特色 －いわゆる“小柱穴”遺構を中心に－」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号、大阪市文化財協会、1999年。三河国分寺：豊川市教育委員会『三河国分寺跡』1989年。

14）前期難波宮は、白雉３年（652）に完成した孝徳朝の難波長柄豊碕宮とみてよいが、その主要建物が木製の基壇外装を備えていたとすれば、この点も傍証となる。飛鳥板蓋宮とあわせて、７世紀中葉の宮殿建築が、屋根や基壇外装に厚板を含む木材を多用した可能性は高いと考える。

15）地下水位が掘込地業の底面より高くなった場合に湧水を集中させ、掘込地業部分に水が浸入するのをおさえる機能をもつ溝であろう。底に礫を入れるのは、暗渠としての機能をもたせたためと考えてよい。ただし、基壇基底部や基壇自体の高さをそろえる目的で、この溝に水を張って垂直方向の基準とした可能性も想定しうる。これと同様の溝はしばしば検出されており、山田寺では基壇周囲の排水溝と推定されている。基壇からやや離れて設けられ、周囲の整地以前に埋められるため、基壇周囲の整地土下層で検出されることが多く、調査の手がおよばないことも少なくないと思われる。なお、基壇外装や礎石を水平に据えるため、建物の四隅に立てる柱などの痕跡はとくに確認できなかった。中国宋代の水平を測る技術については、田中 淡「『営造法式』自序看詳總釋部分校補譯注（上）」（『東方学報』第72冊、京都大学人文科学研究所、2000年）の「定平」の項を参照。

16）瓦器１点と近世陶器２点が出土したが、いずれも小片であり、上部の攪乱土ないし時期の下る遺構からの混入とみなされる。

17）東西方向に関しては、版築を確認できる西限の座標がY=−15,050.2、東限はY=−15,024.3である。一方、南北方向は、南限がX=−166,239.3となるものの、北限については確認できない。土壇上中央トレンチ北方に設けた小調査区で基壇土が認められることから、これを基壇内として、その北壁の座標X=−166,212.6を、確認できる基壇の北限とみておく。

18）ただし、土壇上東トレンチ内で観察できる版築層は、北から南へ下がる傾斜面をなしている（Fig. 39）。これは、心礎の南東方にあたるものの、基壇縁辺部からは遠く、しかも東西方向でなく南北方向への傾斜であるため、何に由来するのか明らかでない。基壇西辺部におけるA・Cブロックとは異なる性格と考えておく。あるいは版築の作業単位の差によるものだろうか。

19）香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 ５』1996年。

20）『藤原概報 ９』1979年、43～52頁。

21）高句麗清岩里廃寺（平安南道平壌市）にみられるような八角形の基壇を想定すれば、調査区内に基壇がかからないことになるが、現在の土壇の形状を見るかぎり、その可能性は乏しいだろう。

22）調査区には、東壁にかかる斜行溝SD323のほか、遺構としては明確でないものの、調査区東北隅から南西へ斜行する流路状の砂礫などがあり、吉備池廃寺廃絶後も洪水の影響を受けやすい地形であったらしい。中門や南面回廊の基壇は、そのような後世の流路や氾濫によって削平されたものとみられ

る。このため、ベース土と遺物包含層の区別も明瞭とはいえなかった。

23） SD321およびSD322の底で確認できる側石痕跡の座標から、基壇東縁がY=−14,957.4～957.7、西縁がY=−14,969.0～969.4となり、東縁・西縁の雨落溝が若干振れることから、最大をとって東西幅12.0mとした。また基壇南縁がX=−166,277.1～277.2、基壇北縁がX=−166.267.2～267.4となることから、南北幅は9.8mと推定した。

24） 条坊の数詞呼称は、京域や京極の位置をどうとるかによって異なることになるが、本書では、混乱を避けるため、便宜的に岸説およびその延長呼称を用いる。

25） 第89次調査では、藤原宮期の東西溝SD180を認識していない。また、『年報1998−Ⅱ』では、回廊礎石抜取穴らしいくぼみをSD180想定位置にも認めているが、誤認である可能性が大きい。

26） 水平距離に対する高低差の比は、むしろ第111次調査南区と第95次調査南区の間の方が大きい。

27） 第111次調査南区では溝埋土と地山の区別が難しく、とくに南辺を掘りすぎた感があり、本来は、幅2.0±0.3m程度の溝と推定される。

28） 三条大路南側溝の位置は、第111次調査南区の南端（X=−166,281）より南となる。「橋本冠名遺跡」（前掲註10））の調査区北端の正確な座標は不明だが、SD180溝心から９m南に南側溝心を想定したとしても、溝の南端がかかる程度で、溝としての確認は難しいと思われる。一方、桜井市第12次調査区の北端は、X=−166,297.1と第111次調査区南端から16m南にあり（桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年、13～16頁）、南側溝の検出は望めない。

29） この建物を桁行３間（柱間寸法３m）の八脚門とすれば、その中心はこれより約4.5m東に想定できる。一方、「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」の復元では、この掘立柱列の位置は、左京三条十坊西南坪の中心より約13m西となるが、前提となる条件に限界があり、坪の中心に近いとみて問題ない。

30） 伽藍配置を含めた検討でも、SD201は西雨落溝とみるのが妥当なことが判明している。「第Ⅴ章２ 伽藍配置の復元」参照。

31） 第111次調査区東北部の中近世時点での旧地形は現在よりも一段低く、②層上面に相当する土層から、現在の畦畔の北縁にほぼ平行する北西−南東方向の素掘小溝を検出している。

32） ただし、SB340東端付近は地形が急激に落ち込み、整地を施したうえで柱掘形を掘っている。

33） 同様に妻柱をもたない例として、桜井市脇本遺跡第６次調査でも、桁行８間×梁行１間の西廂つき南北棟掘立柱建物（６世紀後半）を検出している（桜井市文化財協会『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』1992年、21～24頁）。SB340でも東妻柱は浅く、本来、掘立柱建物の妻柱に構造的な意味は乏しいとみてよい。ただし、壁を施工するためには必要であって、ごく浅い掘形をもっていたか、土台もしくは礎石上に柱を立てていた可能性が想定される。なお、SB400の梁行は、遺構としての柱間を数えれば１間になるため、２間分の梁行寸法をもつものの、梁行１間と表記する。

34） 大宝令大尺は、当時の土地測量に使われた尺度で、いわゆる高麗尺に相当する。１大尺=1.2小尺という関係にあり、実長は0.354～0.355m前後。小尺はいわゆる天平尺（唐大尺、１尺≒0.30m）である。なお、大宝令大尺・小尺をそれぞれ唐大尺・唐小尺（１尺≒0.25m）とみて、高麗尺の実在を否定する見解があるが（新井 宏『まぼろしの古代尺 −高麗尺はなかった−』吉川弘文館、1992年）、度地に関わる部分での大宝令の大尺使用規定や、和銅６年（713）2月19日の格によるその小尺への改定状況は、遺構や現存建築のうえでも数多く確認できる。したがって、それらが空文でなく実際に遵守されたこと、大宝令小尺が唐大尺であり、大宝令大尺がその1.2倍のいわゆる高麗尺であったことは動かない。井上和人「古代都城制地割再考 −藤原京・平城京を中心として−」『研究論集 Ⅶ』、奈文研学報第41冊、1984年。小澤 毅「条坊の復元」『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』奈文研、1995年。

35） 桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』前掲註28）、13～16頁。

第Ⅳ章　遺　　物

1　瓦　　磚

A　軒　瓦

吉備池廃寺の発掘調査では、軒丸瓦が４種類、軒平瓦が３種類出土した。これまでの『年報』や『紀要』では、大脇潔による型式設定[1)]にならい、吉備池廃寺創建軒丸瓦を「ＩＡ・ＩＢ」、創建軒平瓦を「Ｉb_1・Ｉb_2」として報告してきた[2)]。今回の正式報告にあたっても、基本的にはこれまでの型式分類を踏襲する。軒丸瓦については、吉備池廃寺の創建軒丸瓦をＩＡ・ＩＢ（Ｉ型式Ａ種・Ｉ型式Ｂ種）とし、これに続く藤原宮期から奈良時代の軒丸瓦をⅡ型式、平安時代の軒丸瓦をⅢ型式とした。

軒　丸　瓦
ＩＡ・ＩＢ・
Ⅱ・Ⅲ

一方、軒平瓦については、多少変更をくわえる。これまでの軒平瓦Ｉb_1・Ｉb_2という型式名は、斑鳩寺213型式Ｂ種を「Ｉａ」として認識し、押し型を押捺する前に施文がないか、重弧文を施文するかの違いを、「b_1・b_2」で表現するものだった。しかし、実際には、斑鳩寺例を「Ｉａ」と記述することはまったくなかった。それにくわえ、「第Ｖ章４　出土瓦をめぐる諸問題」で詳しく述べるように、吉備池廃寺の軒平瓦の文様型はたしかに斑鳩寺からの転用だが、型それ自体に彫り加えをおこなった形跡はない。よって、本来、瓦笵の彫り直しを表現するａ・ｂのアルファベットの小文字表記は、このケースにはなじまないことになる。

また、瓦笵で施文する手法以前の軒平瓦の型式分類は、『山田寺発掘調査報告』で重弧文軒平瓦を対象としておこなったように[3)]、文様の特徴と施文手法を中心として瓦の製作技法をも加味した分類がもっとも理解しやすいと思う。

軒　平　瓦
ＩＡ・ＩＢ・Ⅲ

そこで、本報告では、吉備池廃寺創建軒平瓦を「Ｉ型式」とし、これまでのＩb_1をＩＡ（Ｉ型式Ａ種）、Ｉb_2をＩＢ（Ｉ型式Ｂ種）として報告する。また、軒丸瓦にあわせて、藤原宮期から奈良時代の軒平瓦をⅡ型式、平安時代の軒平瓦をⅢ型式としたが、Ⅱ型式に該当する瓦当部の資料が出土しなかったので、本報告では軒平瓦Ⅱ型式を欠番とした。

ｉ　軒丸瓦（Fig.56～59，PL.33～36）

軒丸瓦Ｉ型式　山田寺式の重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦。ＩＡ・ＩＢの２種類の瓦笵があり、ともにきわめてよく似た文様である。これまでの調査において、ＩＡ42点、ＩＢ23点、種別不明25点の合計90点が出土した。

ＩＡとＩＢの
共　通　点

軒丸瓦ＩＡ・ＩＢとも、蓮弁は肉厚で、弁端の立ち上がりが小さいものの、強く反転する。一方、子葉は薄肉で細く、先端に丸みをもつ。蓮弁を取り囲む輪郭線は弁端で尖り、平面的にも反転を表現する。これは蓮弁の立体的な反転表現と対応している。弁央には、子葉基部から弁端にかけて稜線がはいる。

内区と外縁の間には１条の太い圏線がめぐり、蓮弁の輪郭線はこの圏線と接する。間弁は平面楔形で、タテに比べ、先端のヨコ幅が広い。

中房はごく緩やかな半球形をなし、１＋８の蓮子を置く。外周の蓮子はそれぞれ間弁の対角線上に配置される。直立する外縁には、３条の重圏文が細－太－細の順でめぐり、その外側はゆるい傾斜面となっている。瓦当径は19～20㎝。

IAとIBの相違点

軒丸瓦ＩＡ･ＩＢには、上記のような共通した瓦当文様の特徴がある。遺存状況のよい木之本廃寺[4]（橿原市木之本町）の資料を参照しつつ、両者の違いを列記しておく（PL.33～35）。

①軒丸瓦ＩＡは軒丸瓦ＩＢに比べ、子葉や圏線の表現が全体に細い。

②蓮弁の盛り上がりは、軒丸瓦ＩＢがより大きい。

③軒丸瓦ＩＡは中房の直径がやや小さい。ＩＡが4.0㎝前後、ＩＢが4.2～4.5㎝ほど。
　ＩＢの中房面には同心円状の凹凸がある。

④軒丸瓦ＩＢは、軒丸瓦ＩＡに比べ、中房の蓮子配置がより整然としている。

⑤外縁上の重圏文は、軒丸瓦ＩＢが軒丸瓦ＩＡよりもかなり太い。

次に、軒丸瓦ＩＡ･ＩＢについて、おのおのの接合手法や裏面調整など、製作技法を中心に記述していこう。

軒丸瓦ＩＡ（Fig.56・57，PL.33～37）　１（Fig.56，PL.33上・34-1）は、吉備池廃寺出土例の中で最も残りがよい。外縁幅は1.3㎝とやや狭く、３条ある重圏文のうち、外側の圏線までしか表出されていない。瓦当裏面は、深くヘラケズリした丸瓦筒部先端の形に対応させて、上端を斜めに削り落としている（PL.36-4）。丸瓦接合時には、凹面に接合粘土を付加する前に、瓦当裏面の粘土を丸瓦凹面にナデつけて、丸瓦を仮固定する（以下、これを「支持ナデつけ」と呼ぶ）。表面は全体に摩滅しており、裏面調整などは不明。瓦当裏面は、中央がやや高く膨らむ。直径20.0㎝、内区径15.5㎝、中房径4.0㎝、瓦当厚3.0㎝。硬質の焼成で、灰色をしている。

「支持ナデつけ」

後述する創建丸瓦１類Ａと、釘穴をとどめる丸瓦部とを合成し、軒丸瓦ＩＡの復元をおこなった（Fig.56-1）。全長約50㎝と、同時期の出土瓦の中でも最大の規格となる。釘穴は、一辺1.0㎝の方形で、焼成前に凸面から凹面に向けて穿孔しており、玉縁端部から約18.0㎝、全長の約1/3のところに位置する（PL.37-1・2）。このほかに、一辺1.3㎝の方形の釘穴をあけるものもある（PL.37-3）。

２（Fig.56，PL.34-2）は、外縁の外側は充分に表出されているが、外縁内面への粘土の充填が不充分であったため、１と同様の外縁幅となる。瓦当裏面の丸瓦接合面には、丸瓦の先端に加えられたタテ方向のキザミが転写されて残る（PL.36-8）。丸瓦接合前に、裏面全体に回転ナデをおこない（PL.34-2）、中央が少し高くなる。支持ナデつけはおこなわない。瓦笵をはずした後、瓦当上半の外縁内面をナデつける（PL.36-9）。復元瓦当径20.1㎝、瓦当厚は2.8㎝。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

丸瓦先端のキザミ

瓦当文様の大略を残す資料は以上の２点しかないが、丸瓦の接合手法などがわかる軒丸瓦ＩＡの資料をもう２点図示した。

５（Fig.57）は、凹面側を深く削って鋭くなった丸瓦の先端が、外縁の上面近くに達している。丸瓦先端は深くヘラケズリするが、キザミは加えない。支持ナデつけをおこなってから、接合粘土を付加する（PL.36-5）。外縁内面には、棒状の工具でナデつけた痕跡が残る。

6（Fig.57）は、瓦当側面に瓦笵の笵端の痕跡が残る。笵端の位置は、外縁上面端部から側面に向かって４㎜のところで、わずかな段差が認められる（PL.36-1）。外縁幅は1.6㎝。丸瓦先端凹面側を深くヘラケズリし、キザミを加えずに接合する。内面接合粘土をあてる前に、支持ナデつけをおこなう。凸面側には接合粘土がほとんどあてられていない。

軒丸瓦ＩＢ（Fig.56・57，PL.33～36）　吉備池廃寺からは良好な資料が出土しなかった。

3（Fig.56，PL.34-4）は、内区の半分弱ほどが残る資料である。復元内区径は16㎝、中房径4.5㎝。瓦当厚は2.0㎝と薄い。やや軟質の焼成で焼きしまらず、全体的に少し大きい。黄灰色をしている。

4（Fig.56，PL.33下・34-3）は木之本廃寺出土資料。参考資料として提示する。瓦当径20.6㎝、内区径15.6㎝。中房は径4.2㎝で、上面に同心円状の凹凸がある。外縁幅は1.5㎝、瓦当厚は3.1㎝。表面の摩滅が著しく、瓦当裏面の調整は不明であるが、裏面中央を高く仕上げている。硬質の焼成で灰色をしている。胎土に含まれる長石の量が著しく多い。

7（Fig.57）は、瓦当下半部にあたるおおよそ１弁分を残す資料である。瓦当裏面には丸瓦接合前におこなった回転ナデの痕跡が残り、瓦当裏面の周縁下半を丸くおさめる（PL.36-13）。側面は、円弧に沿った回転ナデ調整を２回に分けておこなっている。また、側面には部分的に木目圧痕をとどめるが（PL.36-14）、乾燥時に付着した偶発的な圧痕と思われる。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

「カット面」

8（Fig.57）は、丸瓦先端凹面側を深くヘラケズリして先を鋭くし（以下、このヘラケズリ面を「カット面」と仮称する）、キザミを入れずに瓦当裏面上端へかぶせるようにして接合する。丸瓦先端は外縁の文様面近くまで到達し、凸面側には接合粘土をほとんど付加しない。丸瓦接合時に支持ナデつけをおこなっているが、瓦当が比較的薄く作られていたのとカット面の長さが長かったため、カット面が瓦当裏面にとびだしてしまい、そこに支持ナデつけがあたっている（PL.37-4）。

9（Fig.57）は、最も薄いところで瓦当厚が１㎝に満たない、超薄手品である。瓦当裏面にはユビオサエの痕跡をとどめる。外縁内面にはくぼみ状のシワがあり、そこを境に粘土が剥離したようにみえるが、よく観察すると剥離面は内側の幅0.5㎝ほどで、残りの１㎝は破面である（PL.36-2）。後述するように、この資料をもって、外縁部分には粘土紐を笵詰めしていたと考えることはできない。

10（Fig.57，PL.36-15）は、細弁蓮華文風に見えるが、瓦笵が二重に押圧されたものである。いったん瓦笵に詰めた粘土を、時計回りの方向に約20°ずらして詰め直している。丸瓦接合時に支持ナデつけは加えない。瓦当裏面全体は念入りにユビオサエをおこなう。瓦当厚2.0㎝。どうやら、この瓦も吉備池廃寺の軒先を飾っていたようである。

最後に、軒丸瓦ＩＡ・ＩＢの製作技法についてまとめておく。

笵端が側面にかぶる

軒丸瓦ＩＡの瓦笵は、笵端が瓦当側面にわずかにかぶるタイプである。軒丸瓦ＩＢも、海会寺（大阪府泉南市）出土同笵資料の状況から、同じ形態であったことが判明している。[5)]

瓦当成形時、瓦笵へは板状の粘土を一度に詰め込んだと考えられる。出土資料のなかには、外縁内面に粘土紐を積み上げたようなくぼみ状のシワもみられる（PL.36-2）ので、外縁部分だけに先に粘土を詰めたとみなす意見がある。[6)] しかし、前述のように、その部分で剥離したこと

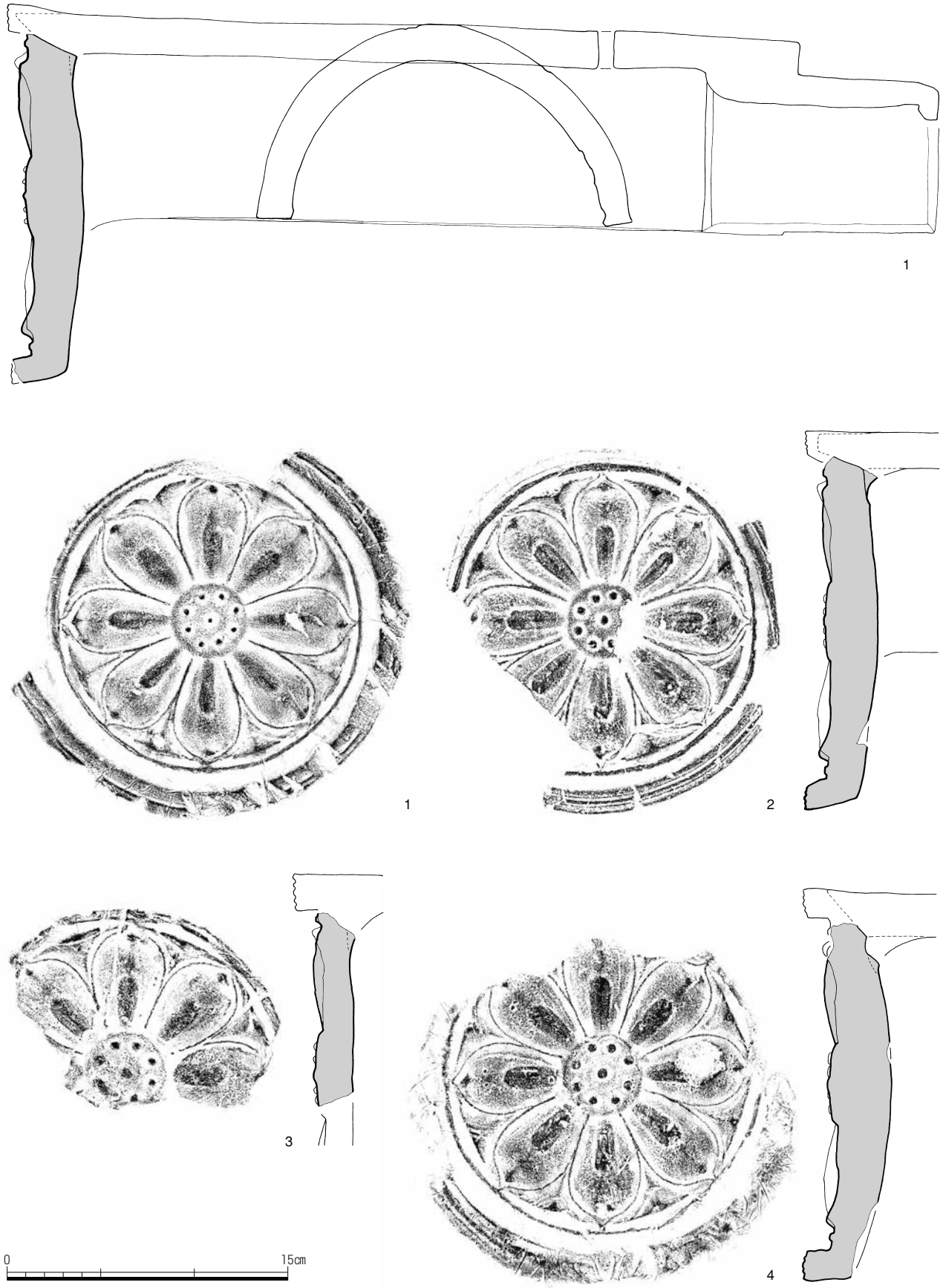


Fig. 56　軒丸瓦Ⅰ型式（1）　1:3

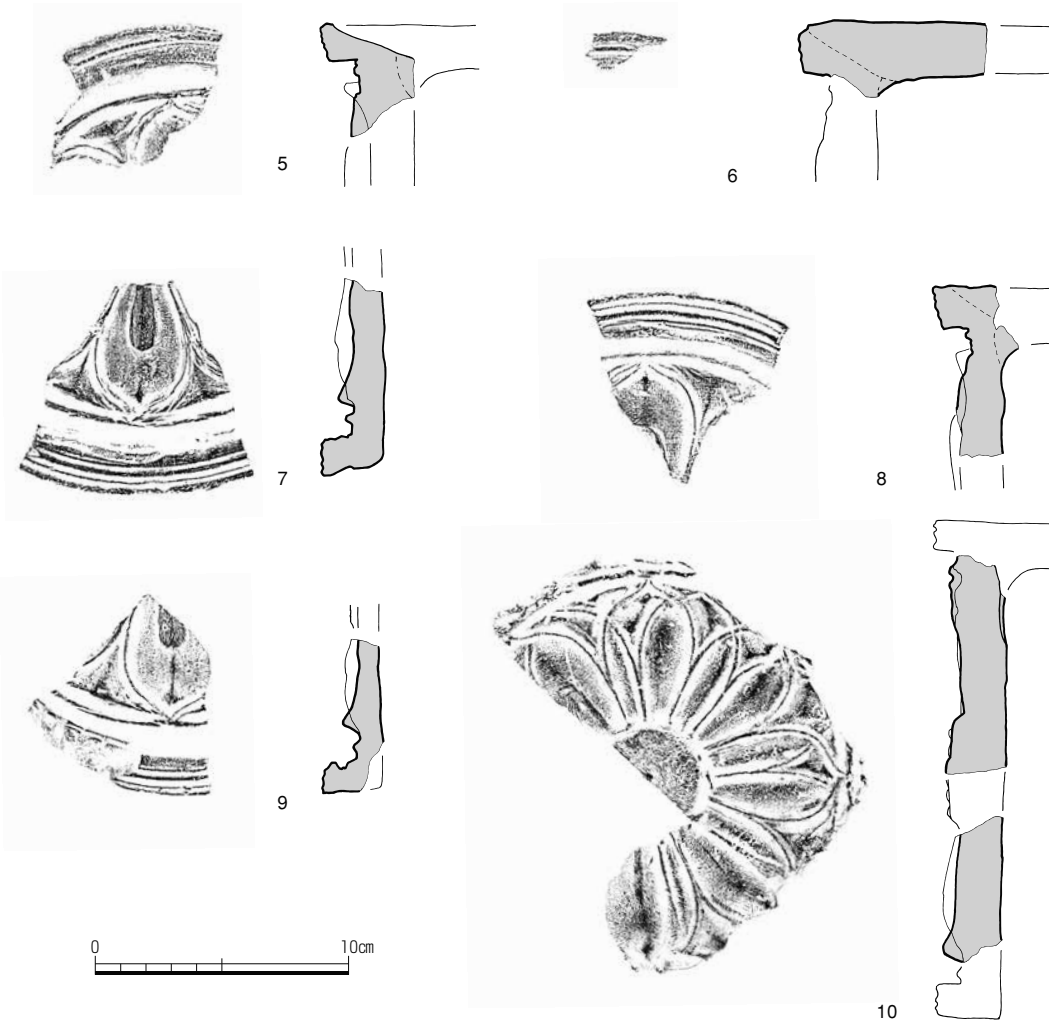


Fig. 57　軒丸瓦Ⅰ型式（2）　1:3

を明確に示す資料はない。そのうえ、外縁部分に粘土紐を充填したとすれば、瓦笵の形態から判断して、粘土紐を詰めたときに周囲からユビオサエをするはずだから、粘土は外縁の内面に密着すると予想できる。また、多少はみ出した粘土が内区におよんで、内区の周縁部に粘土のシワが発生することも考えられよう。ところが、外縁内面が瓦笵どおりに表出されていない資料がままみうけられる一方、内区の周縁部に粘土の継ぎ目風のシワを観察できる資料はない。したがって、板状の粘土を使って瓦当成形をおこなったと考えるのが妥当だろう。

板状の粘土で瓦当形成

軒丸瓦ⅠA・ⅠBとも、玉縁丸瓦（後述の丸瓦1類）を接合する。接合にあたっては、丸瓦筒部先端の凹面側を深く斜めにヘラケズリして接合する（PL.36-3，37-4）。また、このカット面にキザミを加えてから接合するものがあり、キザミは、タテ方向（PL.37-5）のほかに、タテと斜めのキザミを入れる例（PL.37-7・8）や、方向の違う斜めのキザミをX字状に入れる例（PL.37-6・9）がある。丸瓦凹面の円弧に沿ったヨコ方向のキザミの例はない。

瓦当裏面上端は、丸瓦の先端加工に対応するように、斜めに削り落している。そこに丸瓦をかぶせ、凹凸両面に少量の接合粘土を付加する。丸瓦を立てたとき、支持ナデつけをおこなっ

て固定するものもある。凹面側からの接合粘土の量が少なくなるのは、支持ナデつけをおこなうことによって、ある程度、丸瓦が固定できるからであろう。丸瓦凹面側のカット面の長さは2.3～3.6㎝、丸瓦の厚さは1.7～2.8㎝の範囲におさまる（Fig.58）。丸瓦先端のキザミはカット面の長さには関係なく、丸瓦厚の薄いものに加えられる傾向にある。

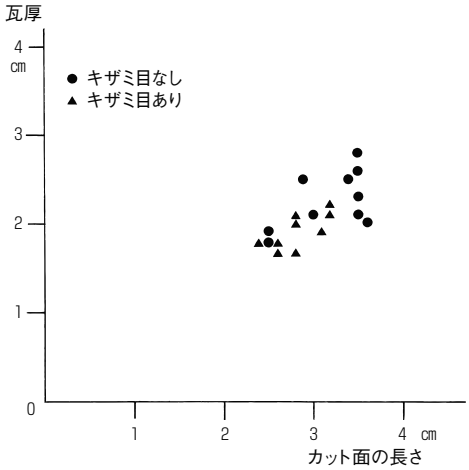


Fig. 58　瓦厚とカット面長の相関

丸瓦接合後の瓦当裏面調整は、不定方向のナデ調整（PL.34-1）が大半であるが、なかには、丸瓦接合前におこなった回転ナデの痕跡をとどめるものもある。後者は瓦当裏面中央が盛り上がる。瓦当裏面下半の周縁は、あまり角張らず、丸くおさめるものが多い。

瓦当厚はＩＡ・ＩＢともに３㎝前後が一般的で、２㎝前後の薄手品はＩＢで４点確認できる。また、１点ではあるが、ＩＡにも瓦当厚の薄いものがある。

胎土は緻密で、長石、石英、クサリ礫の砂粒が含まれる。硬質焼成で暗灰色や灰色に仕上がるもの、やや軟質焼成で橙褐色や黄灰色に仕上がるものなどがある。

軒丸瓦Ⅱ型式（Fig.59-11，PL.37-10・11）　Ⅱ型式は、藤原宮所用の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、6274型式Ac種である。6274型式はＡ・Ｂの２種があり、Ａ種は瓦笵の彫り直しによって、Aa・Ab・Acの３段階に分かれる。Ac種は、中心蓮子と一重目の蓮子５個を星形につなぐ。日高山瓦窯（橿原市上飛騨町）の製品である。弁端から外縁にかけての破片が１点出土した。　藤原宮所用 6274Ac

粘土紐巻きつけ技法による丸瓦の筒部凹面先端を浅くヘラケズリし、外区内縁に対応する位置に接合する。凹面の接合粘土の量は少なく、強くユビオサエして固定する。凸面側は、接合粘土を付加したのち、丁寧なタテヘラケズリをおこなう。凸面調整後、凹面の調整時あるいは乾燥時についたと思われる圧痕が、凸面瓦当面寄りに残る（PL.37-11）。この圧痕は、藤原宮出土の6274Acにも共通する。灰褐色の硬質の焼成で、胎土に含まれる砂粒は少ない。20mあまり隔てた第111次調査北区と桜井市第６次調査第２トレンチから破片各１点が出土し、両者が接合した。

軒丸瓦Ⅲ型式（Fig.59-12～14，PL.37-12～14）　平安時代の素文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。４点が出土した。蓮弁は、細い輪郭線の中に、先の丸い棒状の子葉を２本おく。弁央にも細い凸線が入る。隣り合う蓮弁の弁端をつなぐ弧線があり、これが間弁なのであろう。低く直立した中房に蓮子を配するけれども、蓮子の数や配置は明らかでない。外縁は低く直立する。内区に接して珠文帯がめぐる。　平安時代

14（PL.37-14）は瓦当面を欠損するが、瓦当裏面は良好に残存している。裏面の中央がくぼんでおり、そこに布の圧痕（密度５本/㎝）が残る。布を絞ったような痕跡は認められない。裏面下半の周縁はヘラケズリをおこなう。12と14には、いずれも瓦当裏面に明確な丸瓦接合痕跡が認められない。一本造り技法によって製作されたものである。砂粒の少ない胎土で、橙褐色をしている。12のみ第89次調査の塔基壇西側から出土、ほかは第105次調査中央区出土。

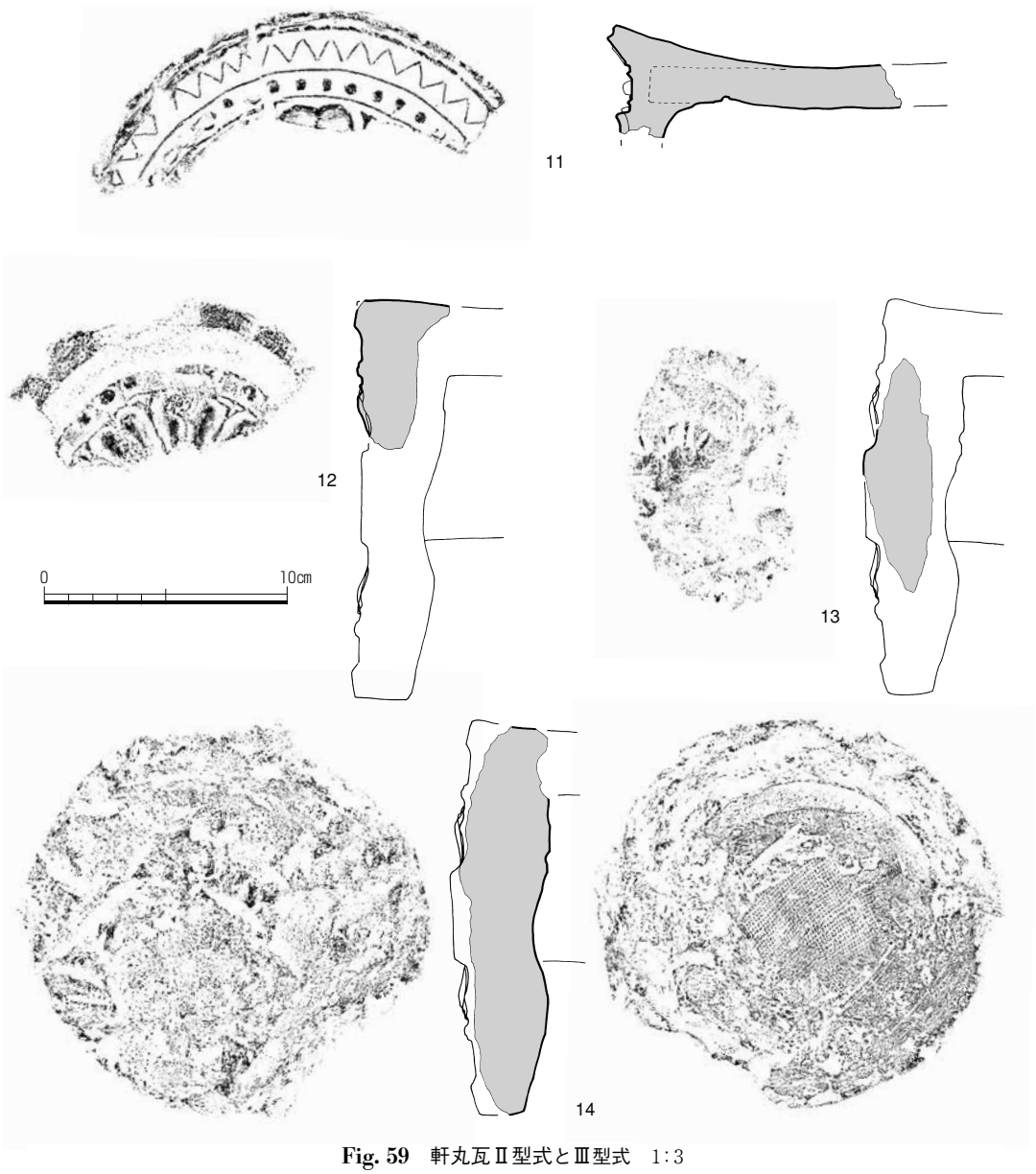


Fig. 59　軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式　1:3

ii　軒平瓦（Fig. 60～62，PL. 33・38・39）

吉備池廃寺から出土した軒平瓦には、創建の型押し忍冬唐草文軒平瓦（Ⅰ型式）と、平安時代の花菱風宝相華文軒平瓦（Ⅲ型式）があり、ほかに奈良時代と推定できる平瓦部片がある。

軒平瓦Ⅰ型式　軒平瓦Ⅰ型式は、型押しの忍冬唐草文軒平瓦である。文様１単位を彫り込んだ型（押し型）には、忍冬唐草文の単位文様が彫ってある。文様は、時計回りに一周する蔓から５葉の全パルメットが派生し、蔓の左右２ヵ所に２個一対の結節を表現したものである。この押し型は、斑鳩寺所用の213型式Ｂ種[7]と同じ型で、吉備池廃寺出土例はそれよりも傷が進行している。また、斑鳩寺ではこの押し型を上下反転させながら施文するが、吉備池廃寺は忍冬唐草文をすべて下向きに施文する。

斑鳩寺と同じ押し型

吉備池廃寺には、忍冬唐草文だけを施文するＩＡ（これまでＩb_1としたもの）と、重弧文施文後に押圧するＩＢ（これまでＩb_2としたもの）がある。発掘調査では、軒平瓦ＩＡが12点、軒平瓦ＩＢが１点、合計13点が出土した。

ＩＡとＩＢ

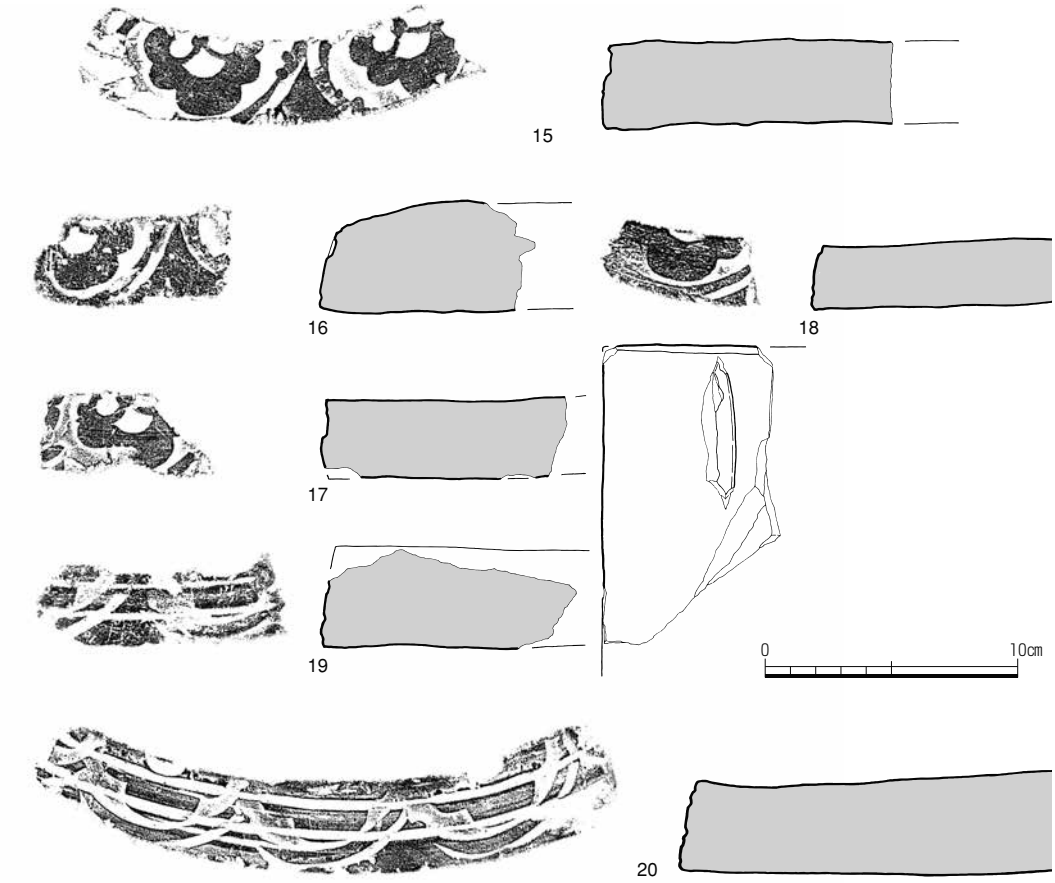


Fig. 60　軒平瓦Ⅰ型式　1:3

軒平瓦ⅠA（Fig.60, PL.33上・38）15（PL.38-5）は、2単位分の破片。創建平瓦（後述する平瓦1類）よりも分厚く作った瓦に、押し型を隣り合うように押捺して施文する。吉備池廃寺出土資料では、単位文様はほとんど常に、右側（以下、左右は、瓦当面を見た状態でいう）の単位文様が左側のそれを潰している[8]。したがって、施文は、瓦当面を上にして逆時計回りに押捺を繰り返している、と判断してよい。凹面は、板状工具を用いた入念なタテナデで調整し、瓦当面寄りをさらにヨコナデする。ごくかすかに布圧痕が残っている。凸面もタテナデ調整が主体である。瓦当面に近い凸面には、部分的に無文叩きの圧痕をとどめる（PL.38-5）。これは、桶を上下反転させた後、押し型施文前に瓦当厚を調整するためにおこなった補足叩きであろう。暗灰色で硬質の焼成である。

逆時計回りに押捺

補足叩き

16（PL.38-1）は、1単位強の破片。施文前に、板状工具を用いた回転ナデによって瓦当面を平滑にしている。このため、瓦当面には円弧に沿ったナデの痕跡が残る。押し型の施文は逆時計回りにおこなう。瓦当厚は3㎝ほどだが、平瓦部は4.3㎝もあって分厚い。粘土板合わせ目S型がある。

17（PL.38-2）は、凹凸面ともタテナデ調整し、さらに瓦当面近くの凹面にはヨコナデ調整を加える。瓦当厚は3.0㎝とやや薄い。

18（PL.38-3）は、左側面を残す破片である。側面の凸面側を幅1㎝ほど面取りする。瓦当厚は薄く、2.2～2.4㎝しかない。単位文様の左側は表出が浅い。凸面には須恵器高杯の脚端部が溶着する（PL.38-12）。

須恵器溶着

軒平瓦ＩＢ（Fig.60，PL.33下・38）　軒平瓦ＩＢは、瓦当面に三重弧文を施文したのちに、忍冬唐草文を施文する型式。吉備池廃寺からは、１点が出土したにすぎない。

その資料（19，PL.38-6）は、表面の摩滅が著しいものの、重弧文の凹線が押し型の押捺によって潰れているので、施文順序（重弧文→型押し）が判明する。残存部分では、忍冬唐草文の単位文様同士は重複していない。推定瓦当厚４㎝。

重弧文施文後に型押し

吉備池廃寺出土資料に軒平瓦ＩＢの良好な資料がないので、木之本廃寺出土資料を参考に掲げる（20，PL.38-7）。瓦当幅で23㎝を残し、単位文様３単位と少しが入る破片。右側面が残っていて、瓦の分割と側面調整によって単位文様が切れている。瓦当厚は3.0～4.0㎝。狭端に向かって厚さがほとんど変わらない直線顎である。凸面と凹面の調整は、軒平瓦ＩＡと同じ。さらに、凹面の瓦当面との縁に、当て具を用いた内叩きをおこなう。これは、押し型施文時に凹面縁にくぼみが生じたため、調整したものであろう。右側面は、凹面側縁寄りを軽く面取りする。粘土板合わせ目Ｓ型をとどめる。硬質の焼成で、灰色をしている。胎土には長石や石英、クサリ礫が含まれているが、雲母の微粒子も顕著である。

当て具を用いた内叩き

軒平瓦狭端部　創建の平瓦に比べて著しく分厚い平瓦狭端片を、軒平瓦狭端部とみなした。

21（Fig.61）は、厚さ３㎝ある狭端右隅の破片。凹面は板状工具によるタテナデ調整のあと、狭端縁のみヨコナデし、その後、側縁を面取りする。凸面も、板状工具を用いた丁寧なナデ調整をおこなう。狭端は、凸面側に曲がるように変形する（PL.38-14）。粘土円筒を反転した際に、自重によって潰れたものであろう。硬質の焼成で、暗灰色をしている。

22（Fig.61）は、厚さ5.1㎝あり、これまで確認されている軒平瓦の瓦当厚を越える厚さをもつ。凸面は摩滅しており不明だが、凹面は板状工具によるタテナデの後、狭端縁をヨコナデする。やや軟質の焼成で、灰白色をしている。

23（Fig.61）は、厚さ3.5㎝。調整は、凹凸両面とも板状工具によるタテナデ調整で、狭端縁のみヨコナデをくわえる。割れ面には、粘土板の合わせ目風の剥離面を確認できるが、ブロック状の粘土が各所で剥離したような感じで、粘土板合わせ目の方向は明確でない。硬質の焼成で、青灰色をしている。

24（Fig.61）は、狭端左隅の破片。厚さ3.5㎝。凹面側縁寄りをナデつけているが、面取りはおこなわない。調整は、凹凸両面とも板状工具によるタテナデ調整。狭端部は、凹凸両面の調整後に回転ナデをおこなっており、狭端面にごく浅い重弧文風の沈線をとどめる（PL.38-13）。硬質の焼成で、青灰色をしている。

粘土板桶巻き作り

軒平瓦Ｉ型式の製作技法　平瓦部の成形は、いずれも粘土板桶巻き作りによる。粘土板合わせ目はＳ型とＺ型の両者が確認できた（PL.39-1・２）。胎土・焼成・色調などは、後述する平瓦１類と酷似するが、粘土板の厚いものを巻きつけている点で、軒平瓦と平瓦を区別できる。厚さは3.0～4.5㎝くらいが普通であるが、なかには狭端部で５㎝を越える例もあった。

吉備池廃寺の瓦は、ほかの寺にくらべて寸法が桁外れに大きい。軒平瓦の場合も、粘土板があまりにも厚かったせいか、巻きつける前に粘土板に亀裂が入ってしまっている例が多くみられる（PL.39-2）。うまく桶に巻きつけるのには、かなり苦労したようである。

凹面と凸面の調整手法は、板状工具を用いたタテナデによって全体を調整し、狭端部はさらにヨコナデをおこなう。凸面は、板ナデによって移動した砂粒の痕跡をとどめるものと、それ

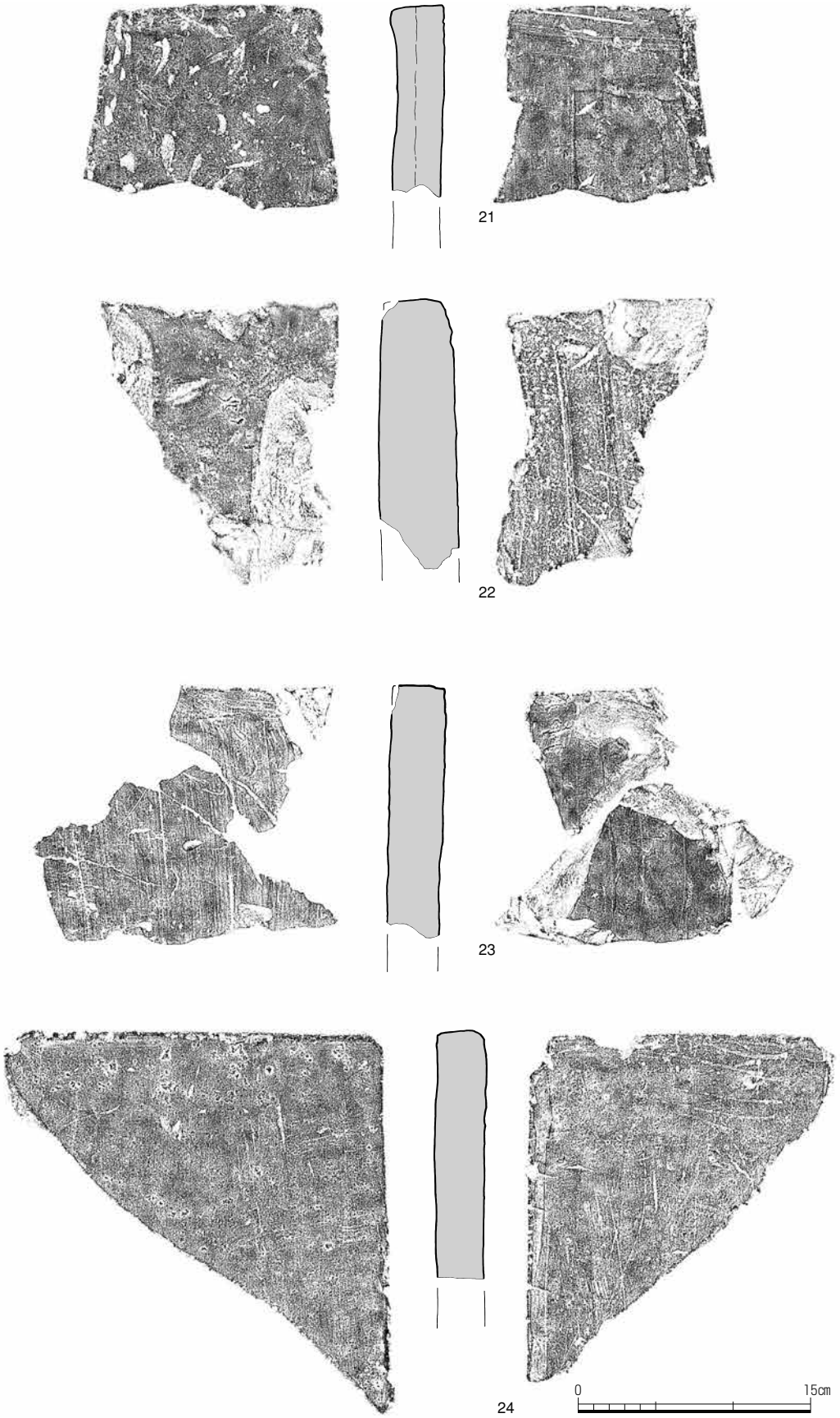


Fig. 61　軒平瓦Ⅰ型式の狭端部　1:4

を入念なナデ調整によって消去してしまうものとがある。叩き目はほとんど確認できない。凹面にも布や側板の圧痕はほとんど残らない。施文手法から判断しても、これら主だった調整は瓦当文様施文以前、桶からはずした粘土円筒の状態でおこなわれた、と理解できる。

主要な調整は施文前

軒平瓦Ⅰ型式の施文手法　軒平瓦ⅠA・ⅠBとも、忍冬唐草文は押し型を使って施文する。この押し型は半円に近い平面形で、長辺が約９㎝、短辺が約６㎝。両端を切り欠いている。型の大きさに対し、軒平瓦の瓦当面厚は2.2～4.0㎝と小さいため、実際に表出される文様は、最大でも上下が型の2/3しかない。

瓦当の左右どちらかの端が残る資料をみると、いずれも端の単位文様は部分的にしか瓦当面にあらわれない。しかも、凹面側には、凹面調整後に施文したことを示す粘土のふくらみが認められる場合がある（PL.38-8・9）のに、側面側にはそうしたふくらみはない。端の単位文様は、例外なく側面調整によって切り取られたように見える。また、軒平瓦ⅠBの重弧文も、木之本廃寺出土資料でみるかぎり、側面調整に先立って施文されている。さらに、山田寺の分割後施文の重弧文軒平瓦（山田寺四重弧文軒平瓦CⅡ）のように、重弧文が左右両端で垂れ下がることもない。これらのことから、軒平瓦Ⅰ型式は粘土円筒の状態で施文された、と考えられてきたのだが[9]、さらにその点を補強する材料を確認したので、述べておこう。

まずはじめに、重弧文の施文状況を木之本廃寺出土資料（Fig.60-20, PL.38-11）で再度詳しく観察すると、残存する瓦当面の中央あたりから左方向に、重弧文の凹線とは別に、幅１㎜ほどの平行した２本の沈線が残っている。沈線間の距離は1.3㎝。一方、重弧文の凹線は幅が２～３㎜あり、それぞれの沈線から少し上にずれて、沈線を消すように重複する。凹線間の距離は沈線間と同じく1.3㎝で、両者は一連のものと判断してよい。つまり、前者は重弧文を施文した際の挽き型の始点、後者は始点から時計回りに一周したものと考えることができる。本来、後者は始点とずれることなくつながるはずであったが、桶巻き段階での瓦当厚のばらつきが影響したのか、挽き型が円周の軌道から若干ずれてしまったため、始点を越えて施文をおこない、軌跡を修正して収束させた結果があらわれているのだろう。

施文の始点と終点

同様の痕跡は、忍冬唐草文でも確認できる。これも木之本廃寺出土例だが、左側縁をとどめる資料の中に、その部分で押し型の重複箇所が左右両側に認められる例がある（PL.38-10）。これまでの観察成果から、押し型は逆時計回りに押捺していったことがわかっている。とすれば、両端にその重複が認められるのは、この単位文様が押し型施文の始点であって、そこから逆時計回りに施文して一周し、最後の型押しが始点の左端と重複した、と考えるのがもっとも理解しやすい。ちなみに、逆時計回りに押捺すると、右側に重心が偏りがちになり、一見、文様の重複が逆転して見えることもあるが、始点となる唐草の右側２葉に次の押し型の型端が、また右側の結節に次の押し型の左１葉がそれぞれ重複する。桶を一周回った最後の押捺は、始点となる唐草の左側の結節から上方にのびて反転する蔓草の付け根に重複している。

以上、重弧文の施文、押し型の押捺のいずれも、円周に沿ってめぐるかたちでおこなわれた痕跡を見出すことができ、両者とも分割前の施文であることが確定した。

分割前施文

なお、後述する平瓦１類の広端幅が約36㎝と推定され、軒平瓦もほぼ同じ瓦当幅とみてよいので、瓦当面には５～６個の押し型が施文されていたと考えられる。また、瓦当面の全面に、重弧文施文時についた回転調整の痕跡が認められるため、櫛歯状の突出をもった板状の工具を

重弧文の施文具として用いたものと想定される。ただし、瓦当面に接する凹面および凸面には、施文具が被っていたことをうかがわせる痕跡は認められないので、瓦当厚を規定しながら施文するようなものではなかったらしい。

軒平瓦Ⅰ型式は、粘土円筒の状態で凹凸面と狭端部を調整したのち、粘土円筒を反転させて瓦当面を調整し、施文する。瓦当面と凹面のなす角度が鈍角になり、軒平瓦狭端部が凸面側に潰れる例があった。これらは、截頭円錐形に成形した粘土円筒を上下反転してから施文したことを示すものである。また、忍冬唐草文は逆時計回りに施文され、重弧文は時計回りに施文された。両者の方向が逆転するのは、一見矛盾するようだが、一般的に、右ききの人間が瓦当面を上に向け、かつ凸面を手前にして挽き型で重弧文を施文しようとした場合、時計回りに挽き型を動かしたほうが力が加わりやすい。一方、押し型を施文するさいには、逆時計回りに施文していくと、自分の手が次の押捺箇所をさえぎることがない。したがって、上に記した施文方法が最も理にかなっていたと推測する。

施文方向とその理由

軒平瓦Ⅲ型式（Fig.62-25，PL.39-3・4）　花菱風宝相華文軒平瓦。左右の端の破片が１点ずつ出土した。これを反転復元すると、1/2の単位文様３個の両端に1/4の単位文様が加わる構成になる。凹面には粗い布圧痕（５本/㎝）が残り、模骨痕はない。凸面はヘラケズリ調整で、瓦当沿いはヨコ方向、それ以外はタテ方向に調整する。顎面に粘土を貼り足した曲線顎である。軒丸瓦Ⅲ型式と胎土・焼成・色調が共通し、これと組み合う。

その他の軒平瓦　瓦当部分は残っていないが、軒平瓦の平瓦部とわかる破片が１点ある（Fig.62-26，PL.39-5）。凸面にヨコ縄叩き目をとどめる。縄叩きは側面調整後におこなわれ、狭端縁から広端縁に向って叩く。叩き目は若干左上がりとなる。凹面には布目痕をとどめるが、模骨痕はないので、奈良時代の一枚作り軒平瓦であろう。厚さ2.4㎝。

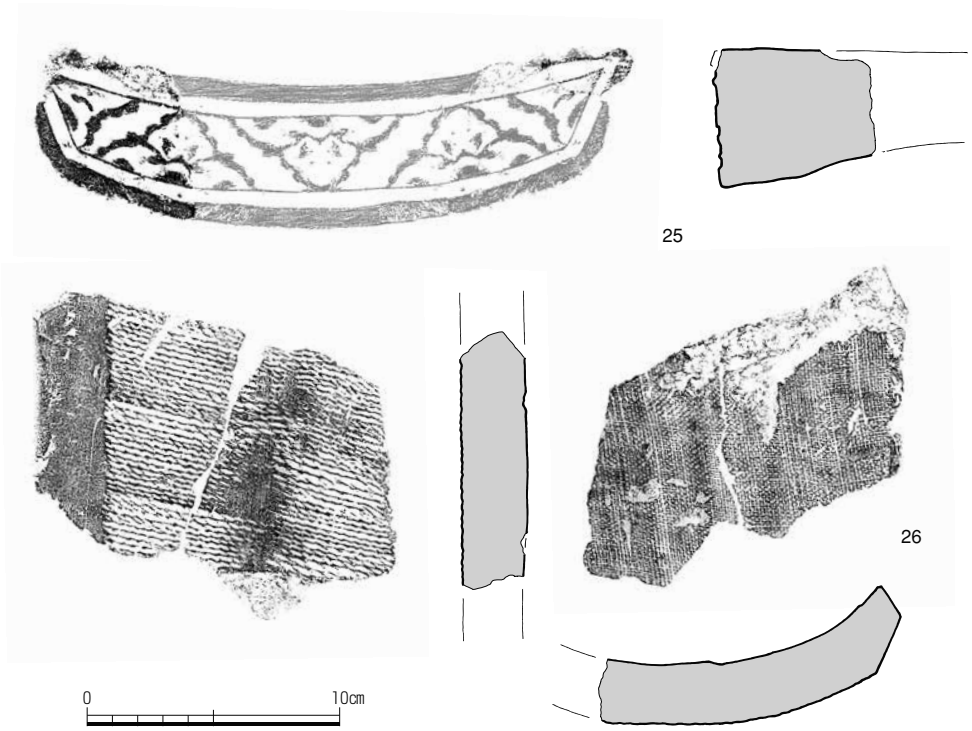


Fig. 62　軒平瓦Ⅲ型式と軒平瓦の平瓦部　1:3

iii　隅軒平瓦

軒平瓦ＩＡには、左側面を鋭角に削り落とした隅軒平瓦が１点ある（Fig.63，PL.38-4）。瓦当面と側面とがなす角度は、約50°に復元できる。瓦当厚は、残存部で3.5～3.8㎝あって、隅に向かって若干薄くなる。

瓦当面から約５㎝、側面から約４㎝のところに、直径1.5㎝の円孔をあける。この孔は、焼成前に凹面から凸面に向けて穿孔されるが、鉛直方向ではなく、凸面側でやや瓦当面に向かう。第105次調査西区の自然流路SD293から出土した。

円　　孔

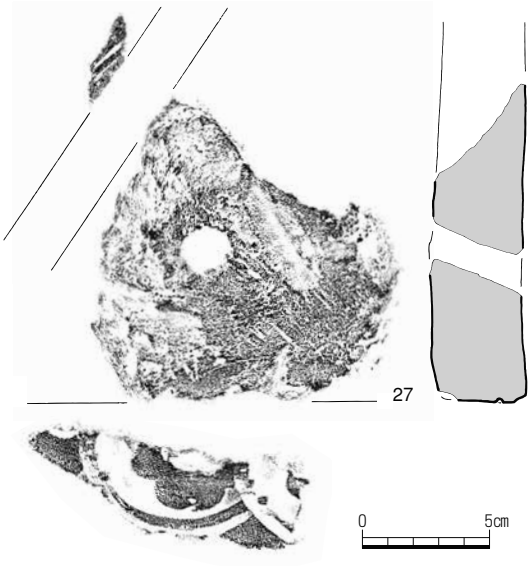


Fig. 63　隅軒平瓦　1:3

軒平瓦は通例、10㎝以上は茅負から先へ出ている。隅軒平瓦となるとさらに先へ出ていることが予想されるので、この孔が野地板に固定するための釘穴だとは考えにくい。対になるもう一つの隅軒平瓦と固定するためか、あるいは何か吊り下げるためのものだろうか。

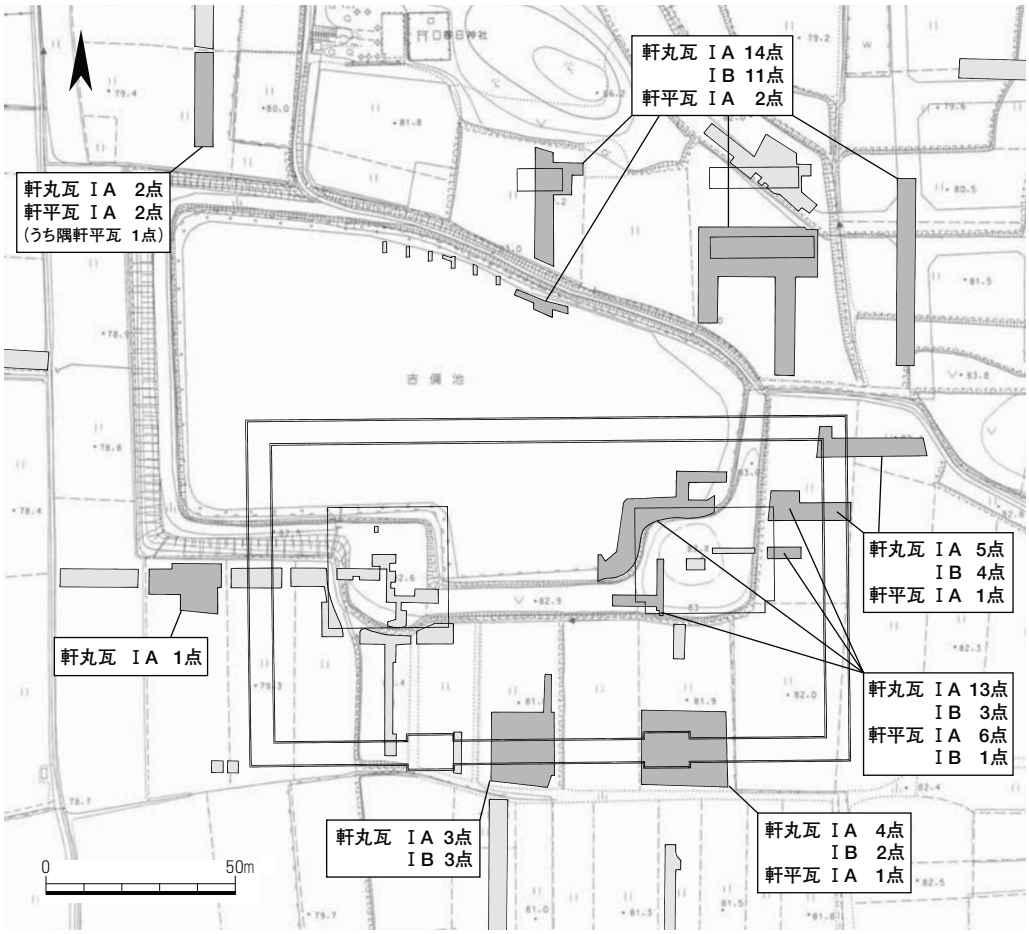


Fig. 64　創建軒瓦の型式別分布　1:2000

iv 小　結

以上、吉備池廃寺から出土した軒瓦を、Ⅰ型式：創建期、Ⅱ型式：藤原宮期から奈良時代、Ⅲ型式：平安時代、に分類して説明した。吉備池廃寺は、軒丸瓦・軒平瓦ともⅠ型式A・Bで軒先を飾っていたが、そのなかに瓦笵の笵傷が進行したものや、製作技法に大きな隔たりのある資料は確認できなかった。Ⅱ型式は、所用先は全く不明だが、出土量や分布からみて、葺き替え用の軒瓦ではない。Ⅲ型式は、大半が伽藍北方の第105次調査中央区から集中して出土した。後述する鬼瓦の存在からも、時を隔てて建立された別の堂宇に使用されたのであろう。

以前、佐川正敏は、塔の調査（第89次調査）を終えた段階で、軒丸瓦ⅠA・ⅠBと軒平瓦ⅠA・ⅠBの瓦当文様にみられるわずかな違いを型式学的変化とみなし、古代寺院における金堂→塔という一般的な造営順序と対応させて、金堂には軒丸瓦ⅠBと軒平瓦ⅠA、塔には軒丸瓦ⅠAと軒平瓦ⅠBが葺かれたとの仮説を提示した[10]。堂塔の造営と瓦生産が、計画的な関連性を備えていることを念頭においた想定である。これらの組合せについて再検討しておく。

軒瓦の分布状況　堂塔ごとに軒瓦出土点数を比較すると、次のようになる（Fig. 64）。

金堂周辺は、軒丸瓦ⅠA13点・ⅠB３点、軒平瓦ⅠA６点・ⅠB１点。塔周辺なし。中門周辺は、軒丸瓦ⅠA４点・ⅠB２点、軒平瓦ⅠA１点。南面回廊周辺は、軒丸瓦ⅠA３点・ⅠB３点。西面回廊周辺は軒丸瓦ⅠA１点。東面回廊周辺は、軒丸瓦ⅠA５点・ⅠB４点、軒平瓦ⅠA１点。僧房周辺（桜井市第６次調査を含む）は、軒丸瓦ⅠA14点・ⅠB11点、軒平瓦ⅠA２点。第105次調査西区は、軒丸瓦ⅠA２点、軒平瓦ⅠA２点（うち１点は隅軒平瓦）。

以上、軒瓦の出土量自体が少ないこともあり、堂塔ごとの所用軒瓦の型式を確定するのは難しい。また、廃絶後の瓦の二次的な移動による影響も否定できないだろう。ただし、瓦葺ではない僧房付近からも、後述する丸瓦や平瓦とともに、軒瓦が一定量出土しているという事実は、その近傍に瓦葺建物が存在したことを示唆するものと考えてよい。

僧房付近に瓦葺建物

軒瓦の組合せ　軒丸瓦ⅠAとⅠBについては、佐川が指摘した瓦当文様の違い以外の部分、つまり瓦工人の技術が直接表現される製作技法の面でも、型式間の違いは認められなかった。

そこで、吉備池廃寺全体での出土量を比較して軒瓦の組合せを考えると、軒丸瓦ⅠAには軒平瓦ⅠA、軒丸瓦ⅠBには軒平瓦ⅠBが組むこととなる。一方、木之本廃寺での出土点数は、軒丸瓦ⅠA11点・ⅠB14点、軒平瓦ⅠA25点・ⅠB４点となり、組合せは逆転してしまう[11]。遺跡の性格の違いもあり、出土状況が異なるのは当然なのだろうか。それにしても、二つの寺跡とも、軒平瓦ⅠBの出土量はきわめて少ない。よって、発掘調査の成果をもとに軒瓦の組合せや所用堂塔を考定することは、現段階においても困難である。

重弧文軒平瓦の発生　軒平瓦ⅠBに施文される重弧文は、山田寺の四重弧文軒平瓦や四天王寺（大阪市）の三重弧文軒平瓦の創作に多大なる影響を与えたとみて間違いない。重弧文や軒丸瓦外縁の重圏文は、仏像光背などにみられる重圏文などの意匠をもとに発生したとの見方が有力である[12]。吉備池廃寺における重弧文の発生も同様に理解するのが自然だろう。

他方、軒平瓦ⅠBほど明確な文様とはなっていないが、軒平瓦ⅠAの瓦当面や軒平瓦の狭端面には、回転調整をおこなった際にできた重弧文状の沈線を、今回、いくつか確認することができた。重弧文が瓦の文様として発生・定着する前提として、重弧文施文具が調整具から変化していった可能性も一つの考え方として述べておきたい[13]。

調整具から施文具へ

B　道具瓦など

道具瓦には、面戸瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある。ヘラ描き瓦や磚などもここでとりあげる。

i　道具瓦（Fig.65・66，PL.39）

面戸瓦　28（Fig.65，PL.39-6）は、成形した丸瓦の玉縁隅をヘラケズリして、角を丸く落とした瓦。１点のみの出土で全体を把握しきれないが、平面逆台形の切り面戸瓦に復元可能である。玉縁の端面が残るので、両側に袖が伸びない形式である。凸面には面戸瓦の平面形を下書きしたような痕跡は確認できない。玉縁段部の状況からみて、創建期の丸瓦１類Ａを加工している。硬質の焼成で暗灰色である。第111次調査北区出土。

切り面戸瓦

ただし、丸瓦１類Ａと平瓦１類（ともに吉備池廃寺創建瓦）にこの面戸瓦を組み合わせると、この復元では、側面のカーブがうまく合わない。隅棟に用いた登り面戸瓦、あるいは隅棟の出隅側に葺くために使用された丸瓦の可能性も提示しておく。

割り面戸瓦

なお、木之本廃寺からは、丸瓦１類と同じ丸瓦を素材とした割り面戸瓦が出土している。上辺幅38.5㎝、下辺幅15.0㎝あり、これを丸瓦１類Ａと平瓦１類に組み合わせたところ、ぴったりと納まった（PL.39-10）。ちなみに、山田寺回廊で使用された割り面戸瓦は、上辺幅24.5㎝、下辺幅11.0㎝（PL.39-11）なので、木之本廃寺出土資料はその1.5倍の規格である。

切り熨斗瓦

熨斗瓦　創建期の平瓦１類を素材とした切り熨斗瓦が２点出土した。

36（Fig.66）は、残存部の幅16㎝前後であるが、一方が幅狭くなっている。凹面は板状工具を用いたタテナデ、凸面は丁寧なナデ調整をおこなう。狭い方を上にして凸面側からみたとき、左側面はヘラケズリし、右側面には分割截面が残る。右側縁寄りの凸面の風化が著しい。粘土板合わせ目Ｚ型を残す。硬質の焼成で灰褐色をしている。厚さは1.8㎝。第111次調査南区の土坑SK326出土。

37（Fig.66）は、残存部最大幅21.0㎝、厚さは2.2㎝ある。平瓦広端が残っている。ここでの幅は18.0㎝。広端を下にして凸面側からみたとき、左側が本来の平瓦側縁である。左側面には平瓦分割時の側面調整をそのまま残し、そこに接した凹面には紐による分割界線も残る。一方、右側の側縁は、熨斗瓦用に分割したさい、広端縁寄りを大きく削って平面形を調節している。凹面は板状工具を用いたタテナデをおこない、広端縁を３～4㎝幅で面取りする。凸面も板状工具を用いた丁寧なタテナデを主体とし、部分的に無文叩き板による補足叩きの圧痕をとどめる。硬質の焼成で灰褐色をしている。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

鬼　瓦　29（Fig.65）は、鬼面文鬼瓦の左眼の部分。全体には楕円形の平面形であるが、瞳は正円に近く、内側下方に寄る。全体に風化しているものの、風化の度合いが少ない下瞼の輪郭線から瞳にかけての部分には、粘土を削りだしたような痕跡が認められないので、笵型を用いて製作した鬼瓦と考える。

笵型を使用

30（Fig.65，PL.39-7）は、平面アーチ形をした鬼瓦頂部裏面の破片。粘土板の合わせ目で剥離しており、文様はまったく残らない。裏面はヨコヘラケズリ調整。裏面と側面の角度は鈍角をなす。

鬼瓦片２点は、第105次調査中央区から出土した。両者は、平安時代のⅢ型式軒瓦と胎土・焼成・色調が共通し、これらと組み合う。

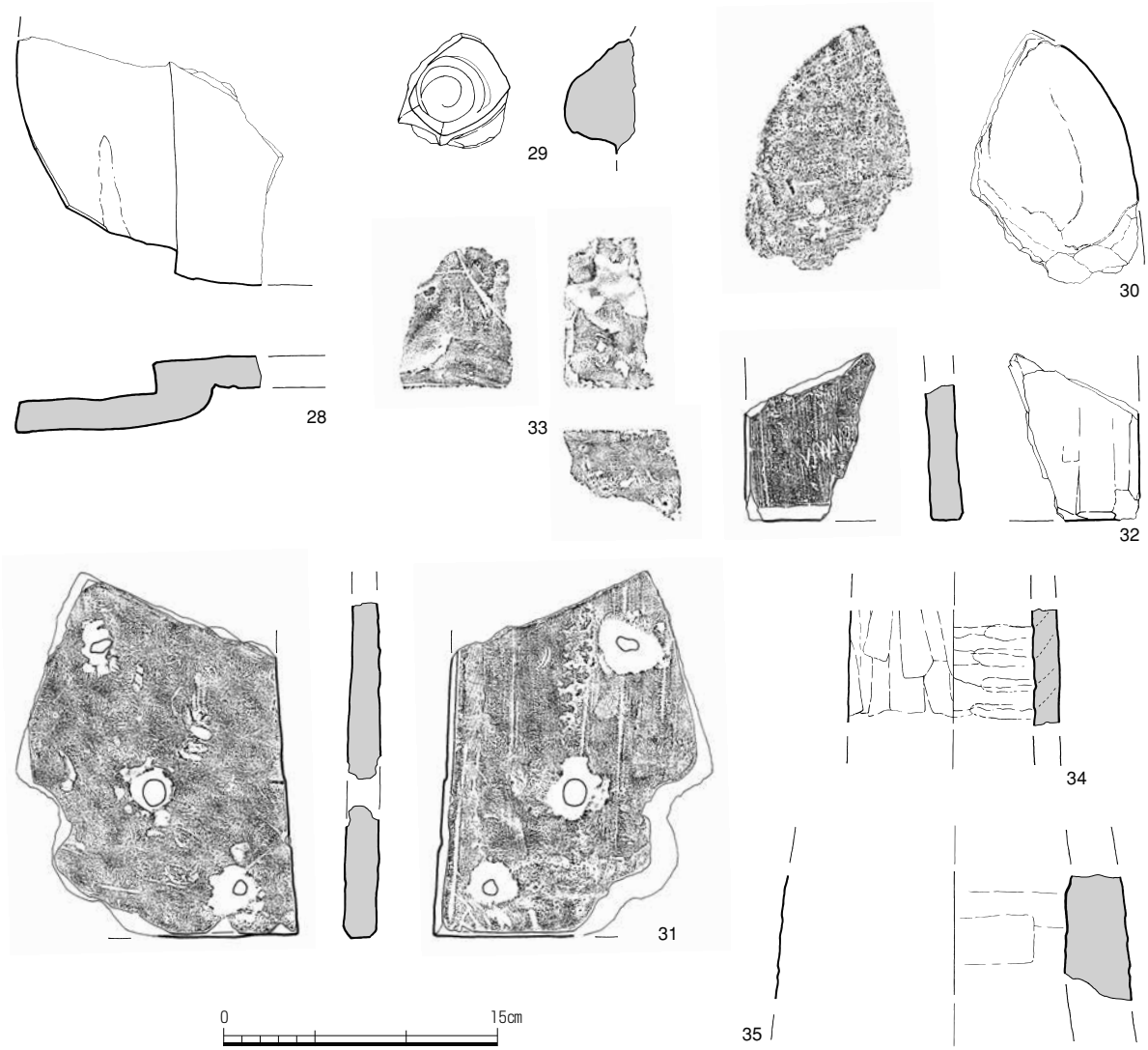


Fig. 65　面戸瓦・鬼瓦・磚・土管など　1:4

ii　その他の瓦磚（Fig. 65，PL. 39）

ヘラ描き瓦　32は、凸面広端隅に波状のヘラ描きをした平瓦片である。凸面を調整したのち、先の細いもので描いているが、装飾を意図したのではなく、戯画的なものであろう。硬質の焼成で、青灰色をしている。厚さは1.7㎝。平瓦は、創建期の平瓦１類である。第105次調査中央区出土。

用途不明平瓦　31（PL. 39-8）は、創建期の平瓦１類に、焼成後に穿孔したものである。広端隅の残存部の３カ所に穿孔がある。孔は対角線上にほぼ等間隔で並ぶが、一直線にはなっていない。凹凸両面から、鑿状の工具で突くようにして孔をあけている。第105次調査東区の東面回廊西雨落溝の石組抜取溝SD305から出土した。　穿　孔

平瓦１類には、ほかに、同様の穿孔をおこなおうとしたが、途中でやめた例がある（Fig. 79-17，PL. 43-7）。ともに用途は不明。

土　管　34は、円筒形の土管である。幅2.5㎝前後の粘土紐を積み上げて成形し、内面はヨコナデ、外面は丁寧にタテヘラケズリする。内面には、粘土紐の継ぎ目が残っている。厚さ1.2㎝。胎土には長石や石英の細砂粒を多く含む。硬質の焼成で、青灰色をしている。外径11.5㎝に復

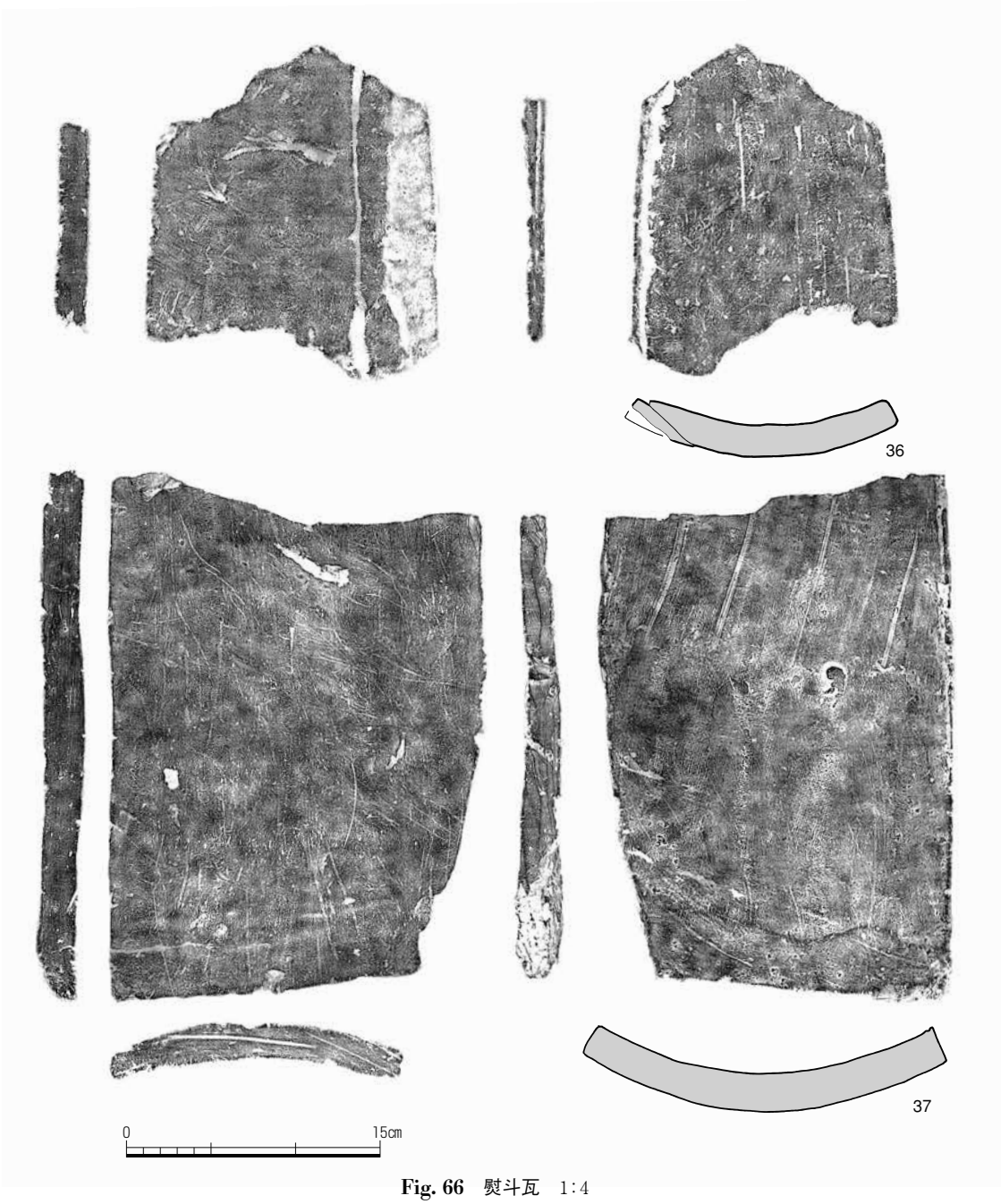


Fig. 66　熨斗瓦　1:4

元できる。第105次調査中央区出土。

35は、厚さ3.0～3.6㎝。外面・内面ともにヨコヘラケズリする。胎土には長石や石英の砂粒を多く含み、大粒のものが目立つ。硬質の焼成で青灰色をしている。残存部の外径は、最大で19.6㎝に復元できる。狭端側に鍔状の凸帯が付く土管になるかどうかはわからない。第81-14次調査区の金堂基壇西側から出土した。

磚　33（PL.39-9）は、4面をとどめるが、全体を復元するには至らない。表面はヘラケズリをおこなうが、粘土の充填が少なかった部分にはユビオサエ痕が残る。硬質の焼成で灰褐色をしている。厚さは8.5㎝である。第111次調査北区出土。また、第81-14次調査区からも、磚の小破片が1点出土した。

C　丸　瓦

吉備池廃寺からは、破片数総計3,310点、総重量576.1kgの丸瓦が出土した。これまで、各調査次数の概要報告の中では、出土丸瓦はすべて玉縁丸瓦に限られること（後述するように、行基丸瓦とおぼしき破片はごく微量ある）や、おおむね厚さ1.7cmを境として「厚手品」と「薄手品」とに分類できること、などを指摘した。本報告では、吉備池廃寺から出土した丸瓦を、１類から４類に分類し、さらに各々を成形技法や調整手法で細分した。

ｉ　丸瓦１類（Fig.67～70，PL.40・41）

１類は大型

『年報』や『紀要』で「厚手品」と呼んだ大型の粘土板巻きつけ作り玉縁丸瓦。凹面の玉縁段部の形状に２種があり、これを指標にＡ・Ｂ２種に細分する。丸瓦１類Ａは段部凹面が断面でほぼ直角に屈折し、丸瓦１類Ｂは段部凹面が緩やかに屈曲する。筒部の側面調整などは両者大差がないため、筒部だけの断片（Fig.70）ではＡ・Ｂを区別できない。

丸瓦１類Ａ（Fig.67・68，PL.40・41）　凹面の段部がほぼ直角に屈折する大型の玉縁丸瓦。

完形品が１点ある（Fig.67-1，PL.40-1）。全長50.0cm、筒部長42.3cm、玉縁長7.7cm、筒部広端幅22.0cm、筒部段部幅19.5cm、玉縁端部幅14.2cm、筒部厚さ1.8～2.0cm、玉縁部厚さ1.5～1.8cm、重さ5.3kg。

分割凸帯は紐

凸面は玉縁部をヨコに、筒部をタテに、それぞれ丁寧にナデ調整し、叩き目を全く残さない。逆に、凹面は調整をおこなわないので、布圧痕や糸切り痕、分割界線（PL.41-3）が残る。分割凸帯は紐。玉縁部と筒部とでは分割界線が連続しないので、両者別々に紐をかけるか、段部で紐が模骨の中をくぐっているものと考える。凹面の段部には、凸型台の当たった痕跡がある（PL.41-3）。

側面は、分割破面と分割截面をともにヘラケズリ調整するｃ手法[14]。筒部のヘラケズリは広端に向かい、玉縁部のそれは狭端に向かう。筒部はさらに、凹面側に狭い面取りのヘラケズリを加える。玉縁部端面と筒部広端面も、ともに凹面側のみ面取りする。胎土に石英・長石・クサリ礫を含む。硬い焼きで暗青灰色をする。第111次調査北区出土。

２（Fig.67，PL.40-2）は、玉縁部が完存する。凹面の段部から玉縁部先端までが15cmあって、１より長い。凸面は筒部がタテナデ調整、玉縁部はヨコナデ調整する。側面は、ｃ手法のヘラケズリ調整。凹面段部の布圧痕は、凸型台にあたって一部消える。段部のやや広端寄りの凸面を中心として、調整後に補足の叩きをおこなっているので、その時に潰れたのだろう。砂粒の多い胎土で硬質の焼き。玉縁長8.7cm、玉縁幅15.2cm、筒部幅19.0cm。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

布袋の詳細

３（Fig.67，PL.40-5）は、玉縁段部に貼り足した粘土が剥離している。凹面には、布袋の綴じ合わせ目Ｓ型の圧痕が残る[15]。摩滅しているため、判然としない部分もあるが、綴じ合わせ目はほつれ気味になっており、この綴じ合わせ目の圧痕に接して、玉縁段部からはじまると思われる襞縫い（ダーツ）の圧痕も認められる。こちらは、重ね代の基部を、左上がりのまつり縫いで留め付けている。玉縁の先端では、さらに襞を折り重ねており、この部分だけは左右（円周方向）にまつり縫いする。縫い目は２段がみえる（PL.41-6）。玉縁長8.4cm。第111次調査北区出土。

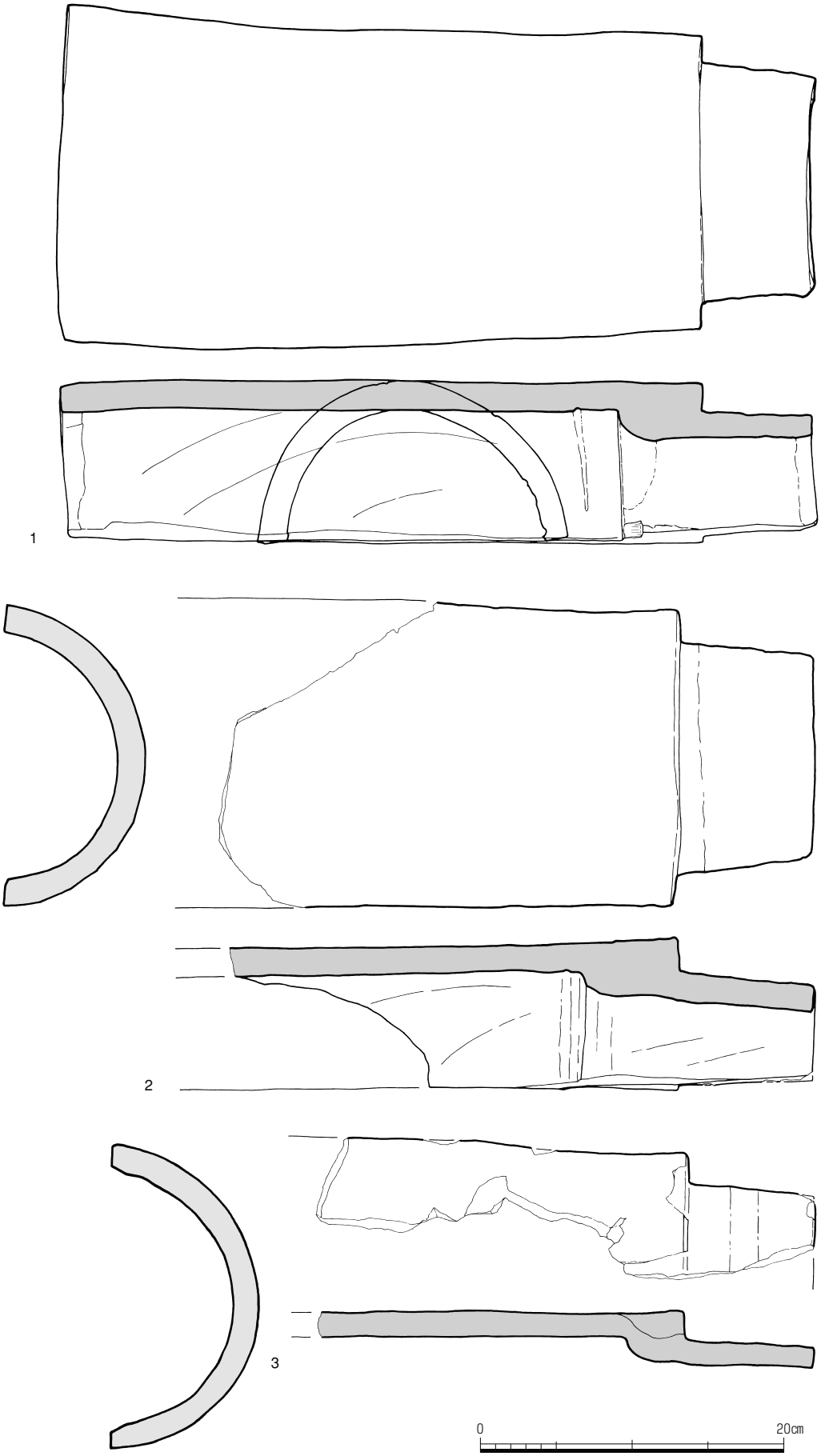


Fig. 67　丸瓦実測図（1）　1:4

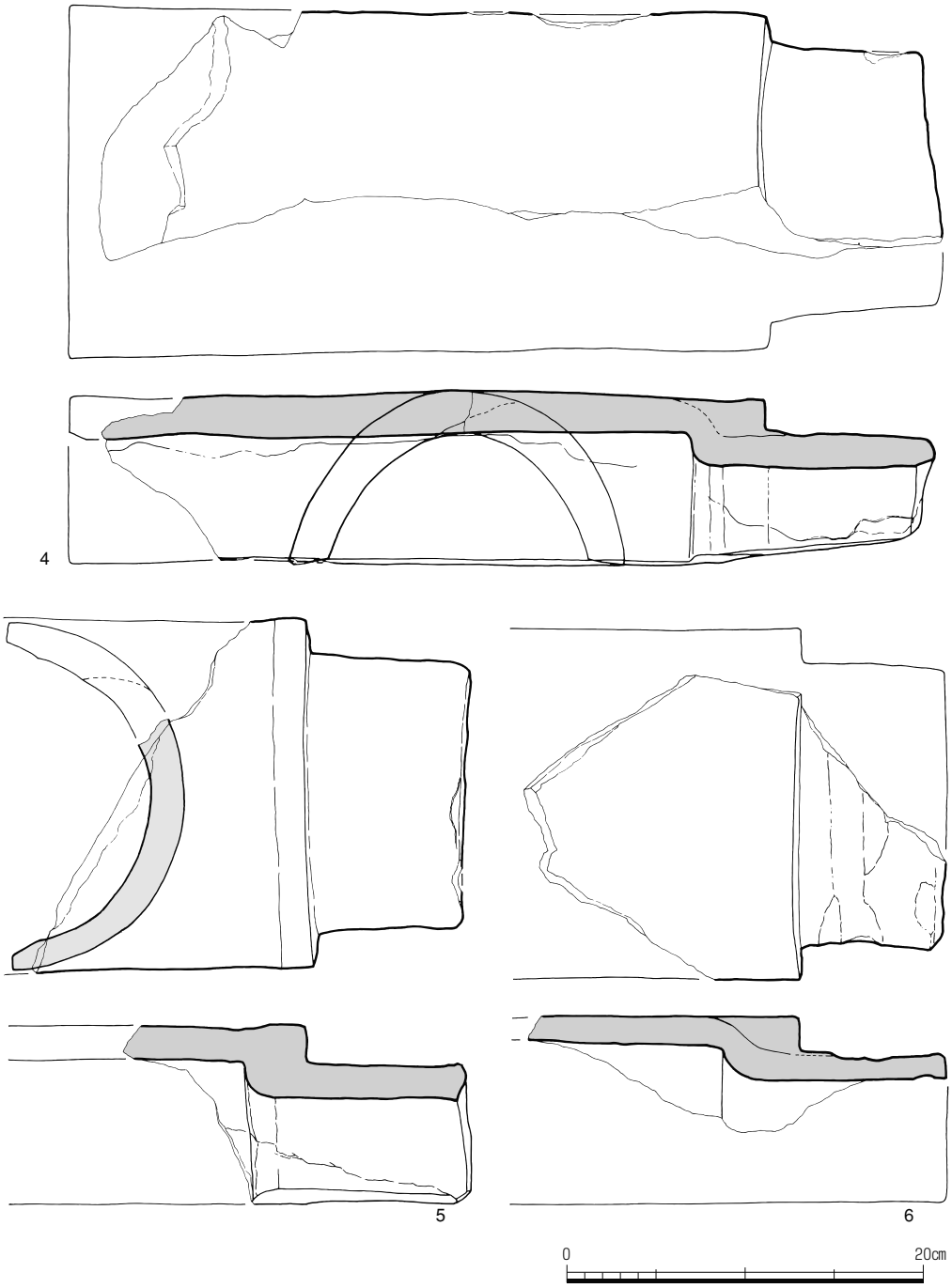


Fig. 68　丸瓦実測図（2）　1:4

4（Fig. 68）は、全体のおよそ1/2を残す資料。凸面は摩滅して調整手法等は不明。凹面には、筒部から玉縁部に続く粘土板合わせ目Ｓ型がある（PL. 41-5）。第111次調査北区の僧房北雨落溝SD341出土。

粘土板合わせ目Ｓ型

5（Fig. 68，PL. 40-3）も、玉縁部内面に粘土板合わせ目Ｓ型が残る。第111次調査北区の僧房北雨落溝SD341出土。4・5とも玉縁長は8.4㎝あり、凹面縁の面取りが幅広い。これらを含めて、丸瓦１類Ａ玉縁部の資料35点中、粘土板合わせ目を確認した６点すべてがＳ型で、Ｚ型はない。

6（Fig. 68，PL. 40-4）は、玉縁部内面に分割截線が残っている（PL. 41-4）。切り間違ったのだろう。玉縁長は7.6㎝。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

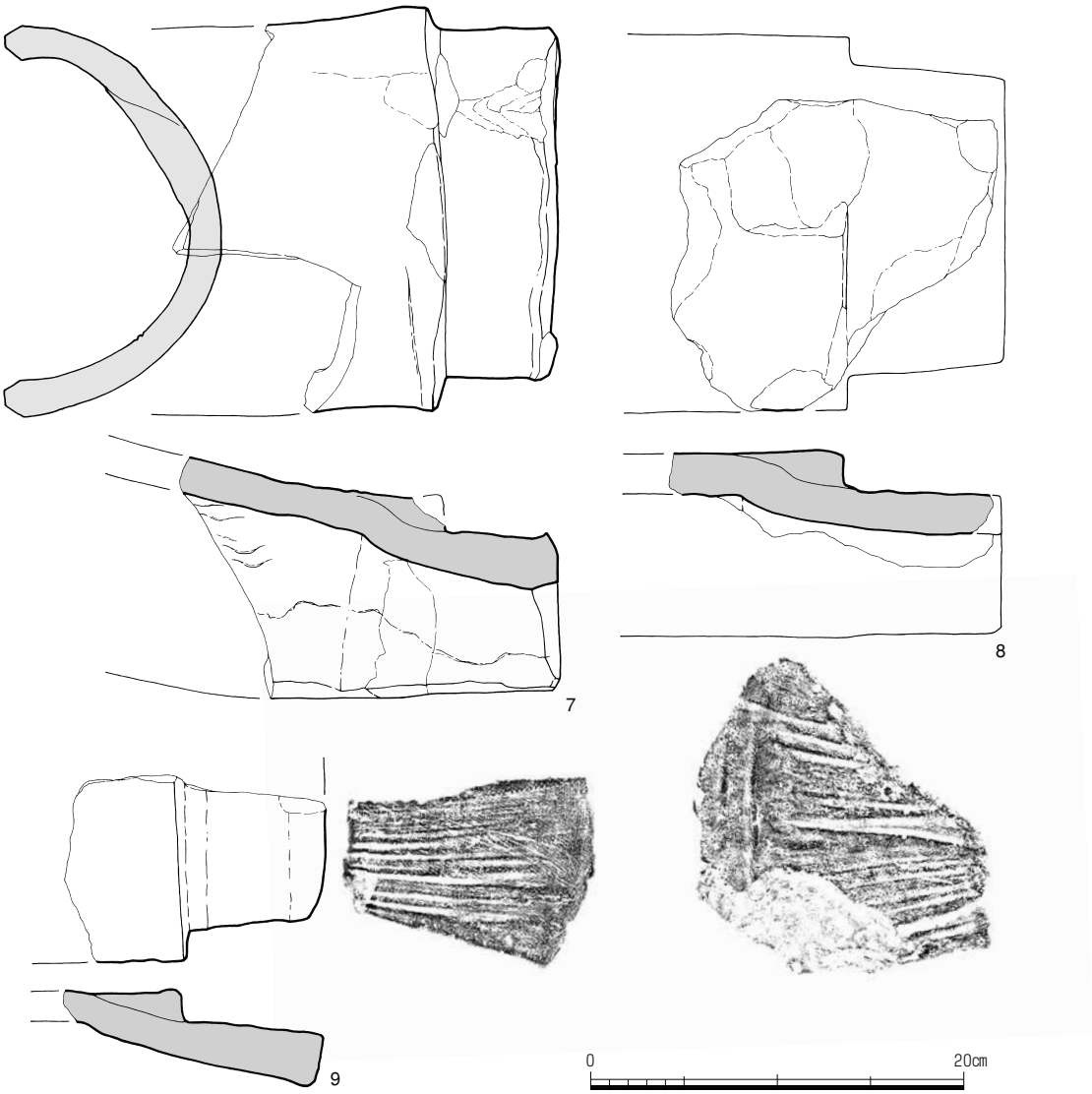


Fig. 69　丸瓦実測図（3）　1:4

段差が緩い
1　類　B

丸瓦１類Ｂ（Fig. 69，PL. 40・41）　凹面の玉縁部から筒部への段差が緩やかな玉縁丸瓦。

7（PL. 40-6）は、凸面を丁寧にナデ調整して叩き目を残さない。側面は、凹凸両面側にやや幅広の面取りをおこない、玉縁部の端も凹面側を面取りする。凹面は調整せず、布圧痕と糸切り痕が残るほか、玉縁部から筒部に連続する粘土板合わせ目Ｓ型と、布袋の綴じ合わせ目の痕跡や当て具の圧痕がある。綴じ合わせ目はぐし縫いで留めてあるが、重ね代の縁辺を留めた縫い目の痕跡がない。あるいは、襞縫いの痕跡かもしれない。粘土板合わせ目Ｓ型と判明する１類Ｂはこの１点のみ。玉縁部凸面のやや粗いユビナデ調整は、この粘土板合わせ目の隙間を調整したのだろう。焼き損じのためか、変形が著しい。玉縁長6.6㎝、玉縁幅18.8㎝、段部での筒部幅21.8㎝。第111次調査北区包含層出土。

8（PL. 41-1）と９は、凹凸面とも摩滅するが、玉縁部凹面に布袋のしわが何条もみえるのが特徴。玉縁の段部に貼り足した粘土が剥落している。側面は、凹面側にのみ面取りをおこなう。玉縁長約８㎝。１類Ｂの玉縁部は１類Ａより分厚い。８は第105次調査東区、９は第111次調査南区の土坑SK327出土。丸瓦１類Ｂは、１類Ａに比して出土量が格段に少ない。

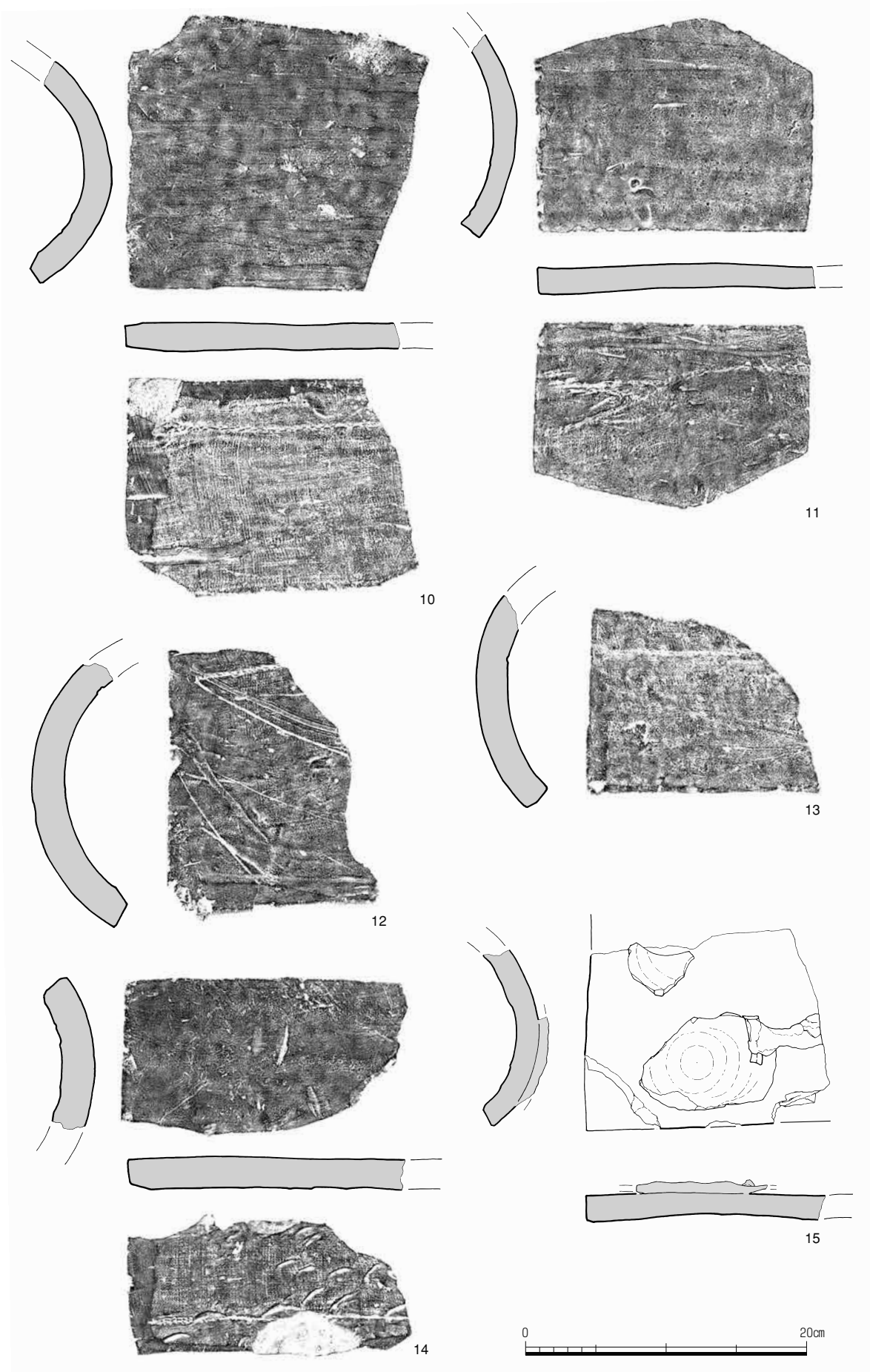


Fig. 70　丸瓦実測図（4）　1:4

このほか、A・B不明の丸瓦１類の筒部で、特徴的な資料を列記する（Fig.70，PL.41）。

丸瓦の布袋

10（PL.41-8）には、ぐし縫いの布袋綴じ合わせ痕跡と、粘土板合わせ目Ｓ型がある。綴じ目の時計回り方向（向かって右側）には浅い段差がみえるので、この部分が重ね代だろう。重ね代の縁には縫い目がなく、付加手法のない「綴じ合わせGZo」の布袋。粘土板合わせ目を軽くユビナデ調整している。凸面はタテ方向にヘラナデ調整。暗青灰色をした硬質の瓦。第105次調査東区SD306出土。

11の凹面広端部には、三角形に布圧痕のみえない部分があるので、布袋の綴じ合わせ目が位置することは間違いないが、ナデ調整のため、綴じ目の縫い方など詳細は不明。凸面はタテナデ調整。側面に分割破面が残る。暗灰色で硬質の瓦。第111次調査北区出土。

12（PL.41-7）には、綴じ目をまつり縫いした綴じ合わせ目の痕跡（綴じ合わせMlZx）はあるが、縫い目の痕跡はみえない。第111次調査南区の土坑SK327出土。13の綴じ目圧痕は、12と同一と判断してよい。13は第111次調査南区のSD180出土。12・13とも軟質の瓦。

14（PL.41-9）は、凹面の側辺近くにある布袋綴じ目痕跡（ぐし縫い）を、端面が円形をした工具で押さえる。凸面がかなり摩耗し、叩きの痕跡がはっきりしないので、当て具の痕跡なのか、綴じ目のくぼみを押さえただけなのか不明。第105次調査東区包含層出土。

須恵器溶着丸瓦

15（PL.41-10）は、凸面に須恵器杯Ｇが溶着した資料。杯Ｇは身２個体と蓋１個体がある。杯Ｇ身は底部が瓦に密着し、身の１点に杯Ｇ蓋のかえり部分の断片が付着して残っている。身の縁辺の多くは打ち欠かれている。なお、瓦の凹面には、14と同様の当て具痕跡が多数ある。金堂基壇西側での表採品だが、吉備池廃寺創建瓦の生産が瓦陶兼業窯でおこなわれていたことを示唆する資料として、参考に掲げておく[16)]。

２類は縄叩き

ii　丸瓦２類（Fig.71，PL.41）

丸瓦２類は、凸面にタテ縄叩き目を残す玉縁丸瓦。『年報』や『紀要』で「薄手品」とよんだ丸瓦がこれにあたる。平瓦にも「厚手品」（平瓦１類）と「薄手品」（平瓦２類）とがあるが、丸瓦２類は、平瓦の「薄手品」（平瓦２類）ではなく、タテ縄叩きの桶巻き作り平瓦（平瓦３類）あるいは一枚作り平瓦（平瓦４類）とセットになる。製作技法によって、Ａ～Ｄに細分する。吉備池廃寺廃滅以降の丸瓦で、いずれも１点ないし数点を確認できたにすぎない。

丸瓦２類Ａ　粘土板巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦。段部の破片が１点ある（16）。凸面は縄叩きの後、ヨコナデ調整。凹面には布圧痕と糸切り痕が残り、側辺近くに布袋の綴じ合わせ痕跡（ぐし縫い）がみえる（PL.41-11）。綴じ合わせ目の時計回り方向には重ね代がないので、布袋は「綴じ合わせGS」。段部で布圧痕が潰れるのは、凸形台の圧痕だろう。側面調整は、分割破面と截面をヘラケズリするc_1手法。胎土には石英、長石、雲母を含む。硬質の焼きで暗青灰色。筒部復元径18.4㎝。第111次調査北区出土。

丸瓦２類Ｂ　粘土紐巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦。段部から玉縁部にかけての破片が１点ある（17，PL.41-2）。凸面をヨコナデ調整するが、筒部には縄叩き目がかすかに残る。凹面は布圧痕が残り、玉縁部凹面には、布袋をまつり縫いでつぎはぎした痕跡がある（PL.41-12）。

布袋をつぎはぎ

また、粘土紐の積み重ねを示す粘土の隙間もある。側面調整はc_1手法で、凹面側の縁を面取りする。胎土は石英、長石、雲母を含み、やや粗い。硬質の焼きで暗青灰色。玉縁長5.0㎝、第105次調査中央区包含層出土。

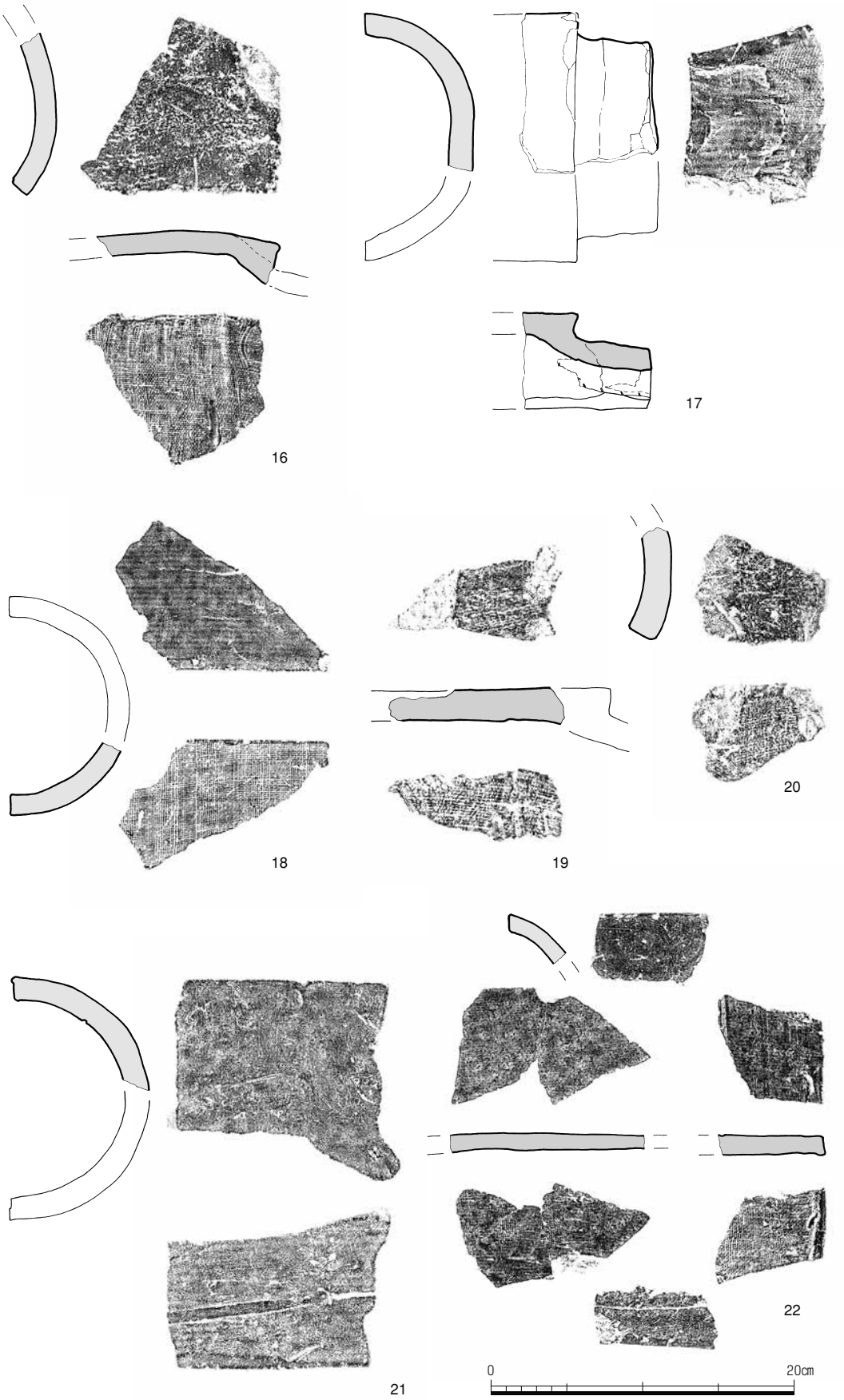


Fig. 71　丸瓦実測図（5）　1:4

丸瓦２類Ｃ　２類Ａと同じく、粘土板巻きつけ作りのタテ縄叩き玉縁丸瓦と推定できるが、側面調整と焼きで区別した。筒部の破片が１点（18，PL.41-13）と段部の小破片が１点ある。凸面はタテ縄叩きののち、ヨコナデ調整。凹面には布圧痕と糸切り痕がある。側面はヘラケズリののち、ナデ調整。面取りはない。石英、長石、雲母などを含むやや粗い胎土で、淡灰褐色のしっかりした焼き。筒部復元径約15.5㎝、厚さ1.4㎝。第111次調査北区出土。

丸瓦２類Ｄ　凸面にタテ縄叩きを残す玉縁丸瓦（19・20）。筒部の厚さは約２㎝あって分厚い。凹面の布圧痕は、織り目の密度が５本/㎝とごく粗い。布袋は、筒部と玉縁部とを別にして縫い合わせる[17]。砂粒をふくむやや粗い胎土で、赤褐色に発色する軟質の丸瓦。第105次調査中央区から６点の出土を確認した。

布圧痕粗い赤褐色瓦

ⅲ　丸瓦３類（Fig.71，PL.41）

叩き目不明で、丸瓦１類よりも小振りの玉縁丸瓦筒部と推定される破片がある（21）。凸面はヨコナデ調整して成形時の叩き目を残さないが、側面近くには、調整後についた無文叩き板の圧痕がある。凹面は調整しない。布圧痕と布袋の綴じ目がある（PL.41-14）。布袋の綴じ目は、広端側を縫い合わせない「布Ｂ」[18]。側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整するｂ手法。胎土には、石英、長石、クサリ礫の細粒を含む。比較的硬質の焼きで、明灰色をしている。第111次調査南区のSD180から出土した１点だけを確認した。側面調整や布袋の特徴からみて、飛鳥時代初期の「星組」瓦工人に特徴的な玉縁丸瓦の可能性がある。

３類は飛鳥時代初期

ⅳ　丸瓦４類（Fig.71）

行基丸瓦

同一個体の行基丸瓦と推定できる破片が、第81-14次調査区から３点出土した（22）。狭端部と側辺の破片が各１点ある。凸面はタテナデ調整し、狭端部はヨコナデ調整する。叩きの種類は不明。狭端面はナデ調整し、凹面側の縁を面取りする。側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整し（ｂ手法）、凹凸面側に面取りのヘラケズリを加える。石英・長石の細粒を含むが緻密な胎土をもち、比較的硬く焼けている。表面は黄灰色から暗灰色。厚さ１㎝と薄く、７世紀前半の瓦とみてよいだろう。

ⅴ　小　結

以上、吉備池廃寺出土の丸瓦を１類から５類に分類した。丸瓦１類は総破片数、総重量とも丸瓦の99％以上を占めるので、創建丸瓦と認定してよい。その製作技法をまとめておこう。

丸瓦１類の模骨は、玉縁部まである一木の模骨と考える。布袋は、筒部広端まで綴じ付けた「布Ａ」。綴じ合わせ目には少なくとも２種類がある。分割凸帯は撚り紐を使用するが、段部では凸帯を露出させないので、玉縁部と筒部とで紐が連続しない。粘土板は、丸瓦の全長分の長さをもったものを逆時計回りに巻きつける。このため、粘土板合わせ目は筒部から玉縁まで連続し、合わせ目はＳ型に限られる。段部は、凸面に粘土を貼り足して成形する。凸面を叩いたのち（叩き目不明）、タテ方向に丁寧に調整する。模骨から粘土円筒をはずし、分割界線を目安に二つに分割する。分割截線は凹面側から入れる。側面調整をしたのち、凹面の四周と時に側辺の凸面側にも面取りをおこなう。

丸瓦２類は、７世紀末の藤原宮期以降の丸瓦と推定する。このうち、丸瓦２類Ａ・Ｂは製作技法や焼きのぐあいから判断して、藤原宮所用瓦とみてよかろう。丸瓦２類Ｃは、奈良時代の瓦だろう。丸瓦２類Ｄは平安時代、丸瓦３類と４類は吉備池廃寺創建以前の瓦だろう。

D 平 瓦

吉備池廃寺からは、破片数総計17,963点、総重量2,073.3kgの平瓦が出土した。出土平瓦については、各調査次数の概要報告のなかで簡単な報告をおこなってきた。そこでは、創建期の平瓦については、おおむね厚さ1.7cmを境として、「厚手品」と「薄手品」とに分類できること、出土量は前者が９割を占めること、創建期以外の時期の平瓦もごく少量存在すること、が指摘されている[19]。今回の報告では、吉備池廃寺から出土した平瓦を１類から５類に分類し、さらに各々を成形技法や調整手法で細分した[20]。

ｉ 平瓦１類（Fig.72～80，PL.42～44）

大型の１類

『年報』や『紀要』で「厚手品」と呼んだ厚さ約２cm以上の粘土板桶巻き作り平瓦。完形品はないが、大略の判明する資料が３点ある。

１（Fig.72，PL.42-1）は、全長41.5cm、推定狭端幅31.5cm、推定広端幅36cm、厚さ２～2.5cm。凸面はタテナデ調整ののち、一部ヨコナデ調整を加え、成形時の叩き目を残さない。凸面の広端寄り半分には、調整後に付いた無文叩き板の痕跡がある。凹面も、広端から狭端に向かうタテナデで丁寧に調整し、布圧痕や桶の側板痕跡をまったく残さないが、瓦のほぼ中央と、それより広端寄りおよそ10cmのところに、狭端・広端と平行する浅いくぼみがある。あるいは桶の綴じ合わせに関連する痕跡だろうか。

桶綴じ合わせの痕跡

側面調整は、分割破面と分割截面をともに截面と平行にヘラケズリ調整するc_1手法。狭端面と広端面もヘラケズリ調整し、凹面四周を面取りする。側面と端面および面取りのヘラケズリは、凹面からみて時計回り方向に動く。現存重量4.63kgあり、完形品だと６kgを越えるだろう。第111次調査北区の土坑SK362出土。

２（Fig.73，PL.42-2）は、全長41.8cm、現存最大幅30cm、厚さ1.7～２cm。凸面は全面タテナデ調整、凹面もタテナデとタテヘラケズリ調整。叩き目や布圧痕、桶の側板痕跡などは一切残さない。側面調整はc_1手法、端面はヘラケズリ調整し、凹面四周に面取りのヘラケズリを加える。第111次調査北区の僧房北雨落溝SD341出土。

３（Fig.74，PL.42-3）は、全長42.5cm、狭端幅26cm以上、厚さ2.2cm。凸面は、広端から狭端に向けてタテないし斜めにナデ調整し、叩き目を残さない。補足の叩き目もみあたらない。粘土板合わせ目Ｚ型の剥離面がある。凹面は、狭端から広端に向けてヘラのような工具を使ってナデ調整する。桶の側板痕跡や布圧痕はみえないが、凹面のほぼ中央には、1と同様に、狭端・広端と平行する浅いくぼみがみえる。側面調整はc_1手法、狭端・広端面はヘラケズリ調整。凹面の周囲をヘラケズリで面取りする。第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土。

このほかに、全長の判明する資料が１点ある（Fig.75-4，PL.43-1）。全長は42.7cm、厚さ1.6～1.8cm。凹凸面とも、タテナデ調整で叩き目や布圧痕を消し去る。側面調整はc_1手法、狭端・広端面はヘラケズリして、凹面四周をヘラケズリで面取りする。全体に摩滅しているので、ケズリ調整の方向などは不明。第105次調査中央区包含層出土。

５～13・20は狭端部（Fig.75～77・80，PL.43・44）。凹凸面にタテ方向の調整を加える。

凸面の調整手法は、ナデ（6・7・11～13，PL.43-2～4）、ヘラナデ（8・10，PL.43-5・6）、ヘラケズリ（5・9，PL.44-3）があり、いずれも凸面の全面におよんで成形時の叩き目を残さない。

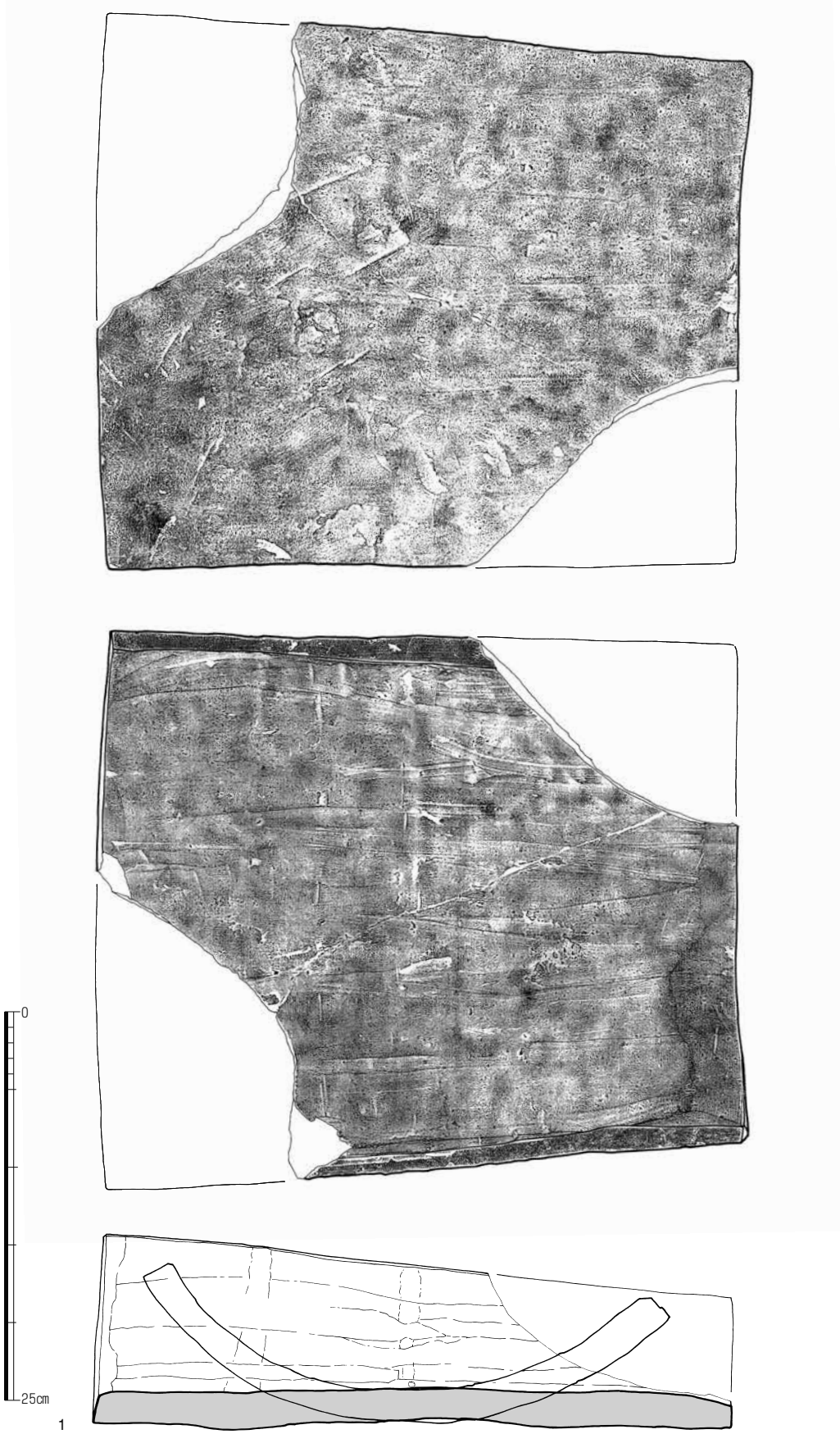


Fig. 72　平瓦１類実測図（１）　1:4

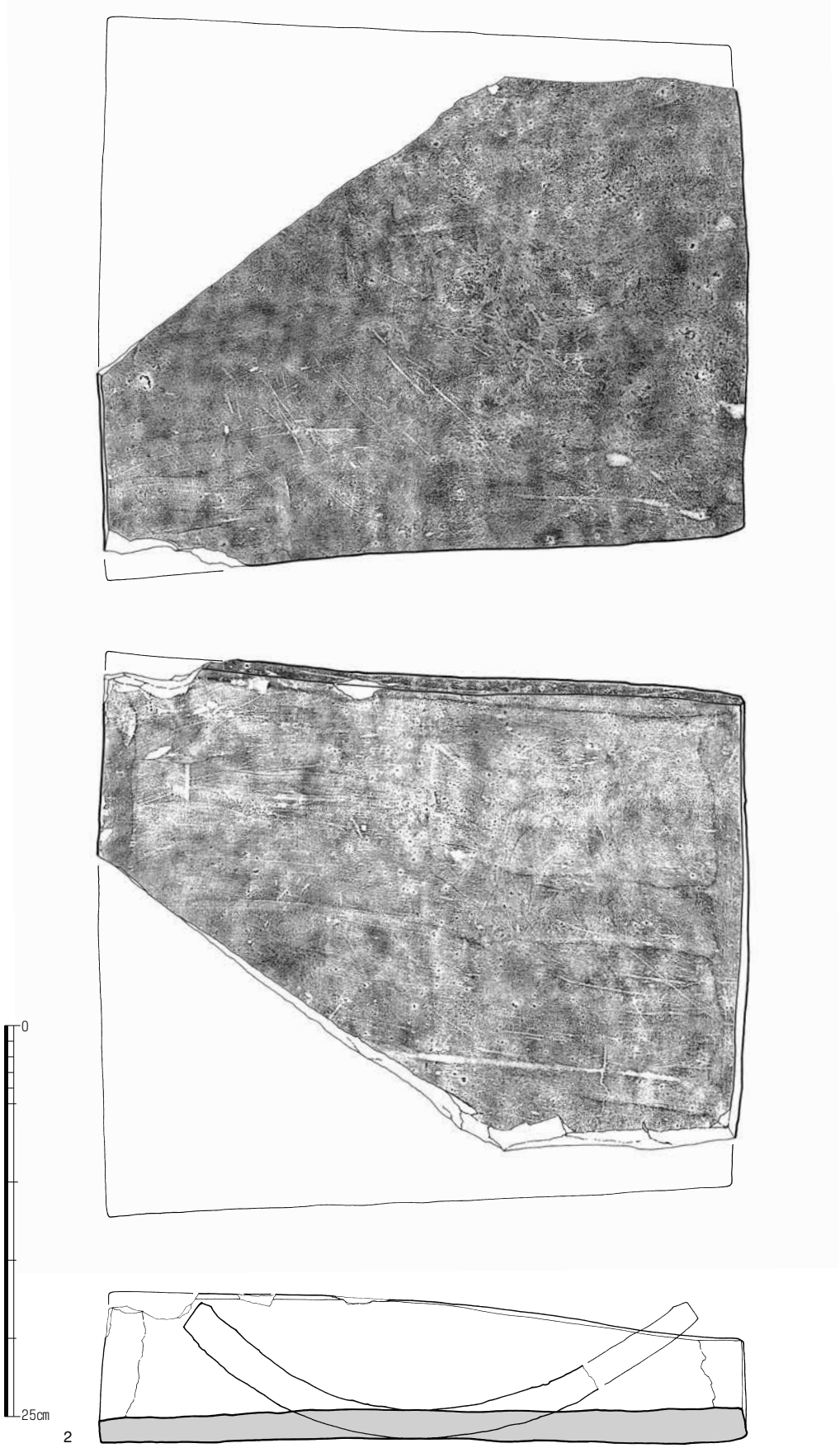


Fig. 73　平瓦１類実測図（２）　1:4

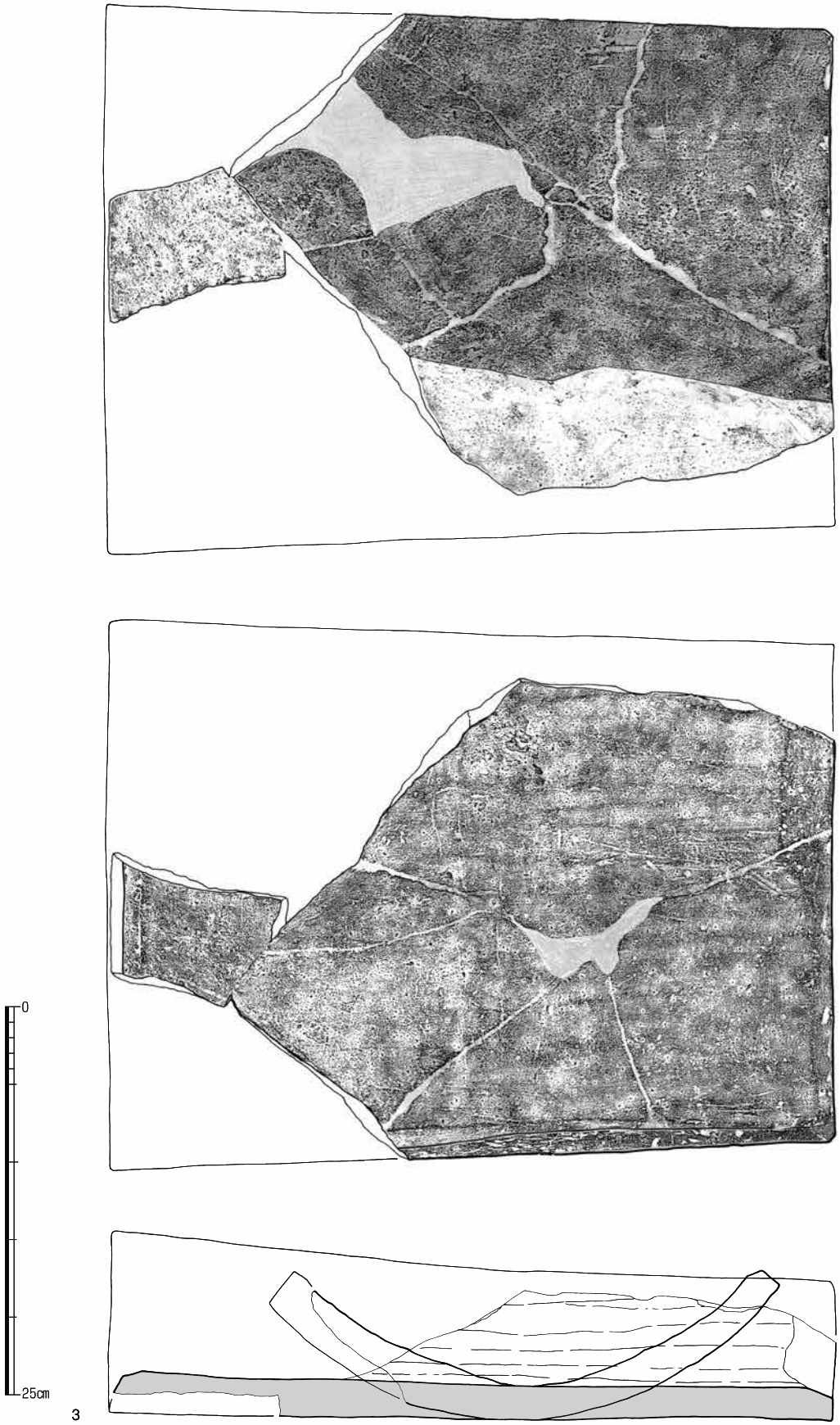


Fig. 74　平瓦１類実測図（３）　1:4

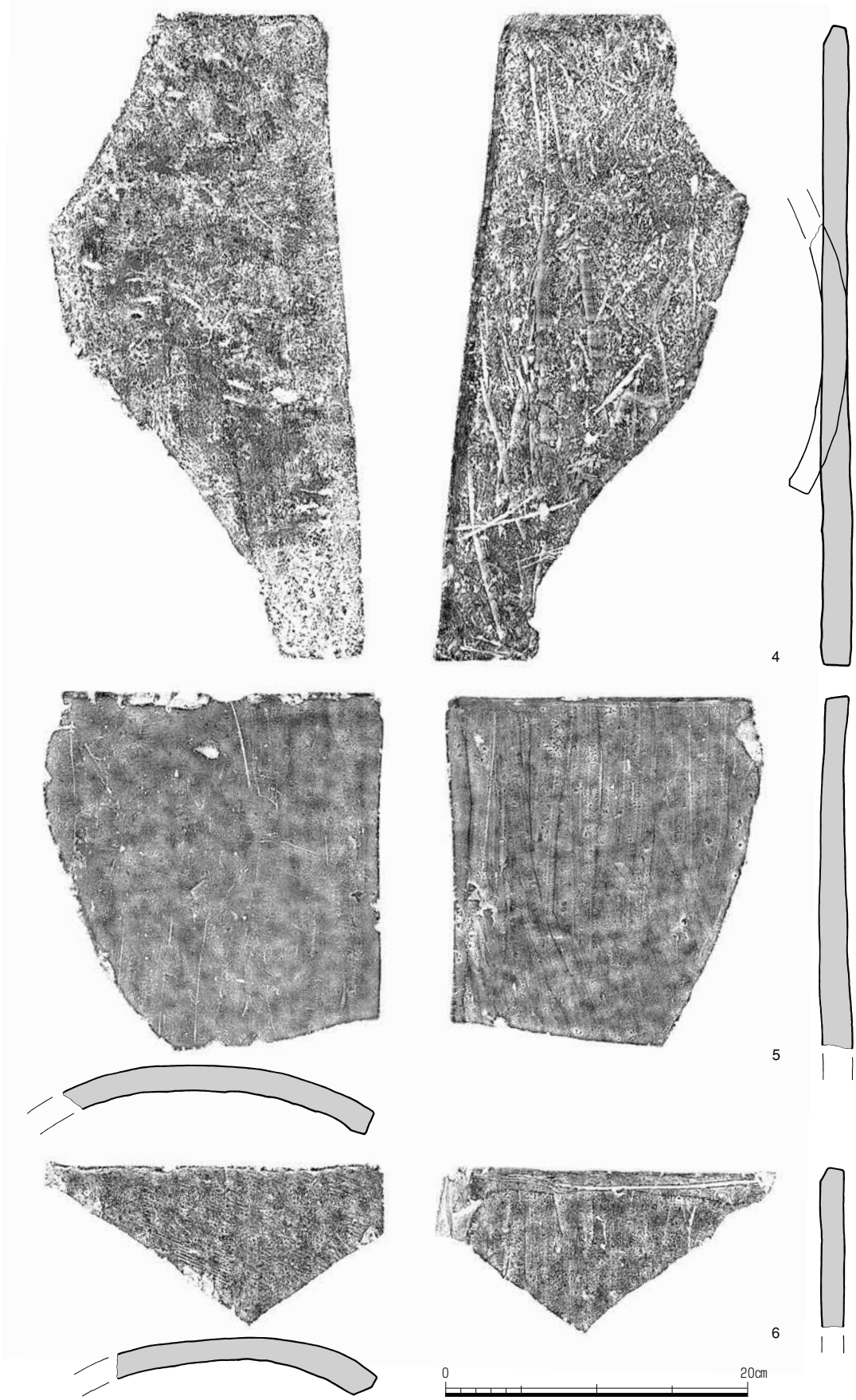


Fig. 75　平瓦１類拓影（１）　1:4

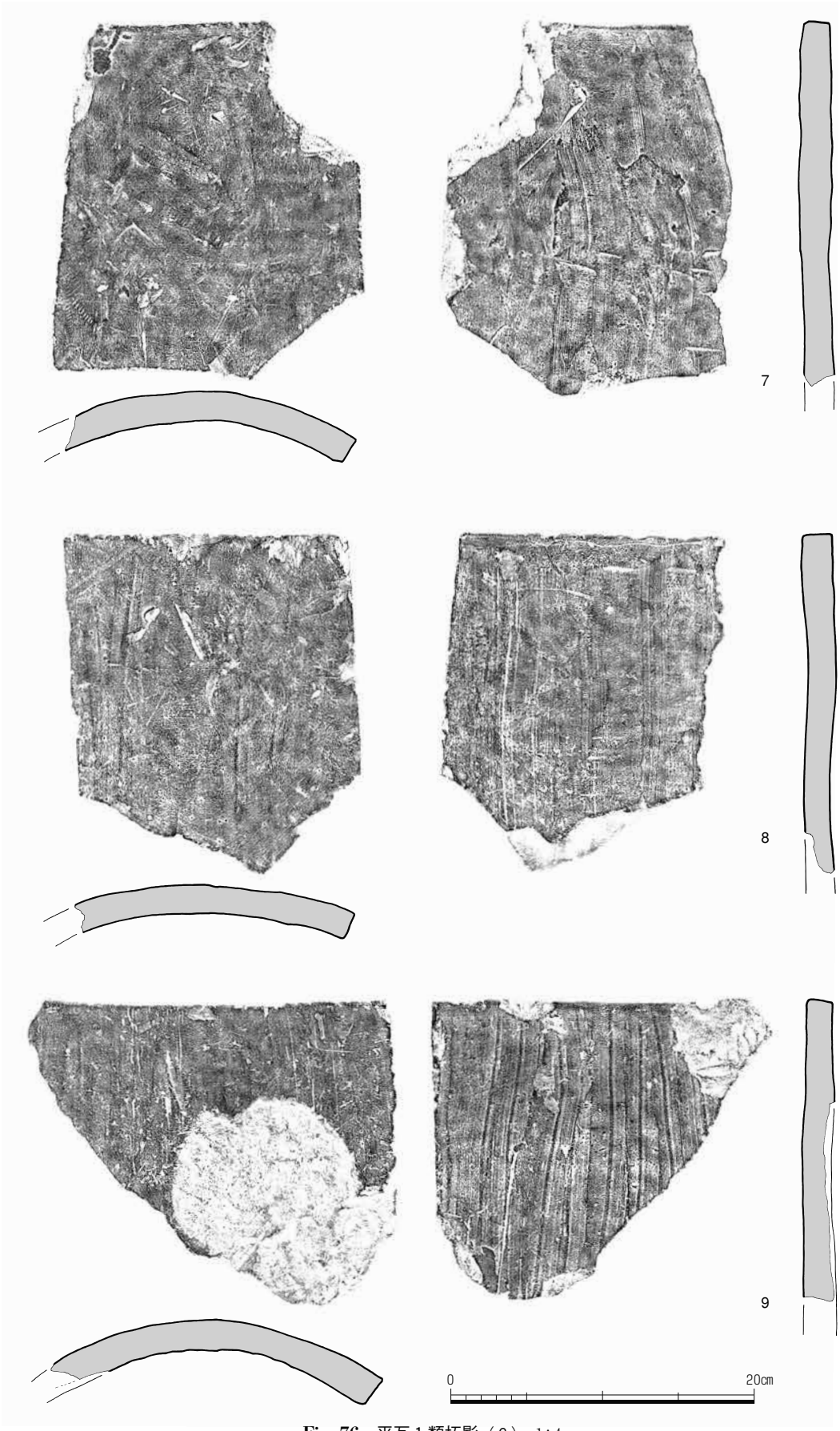


Fig. 76　平瓦１類拓影（２）　1:4

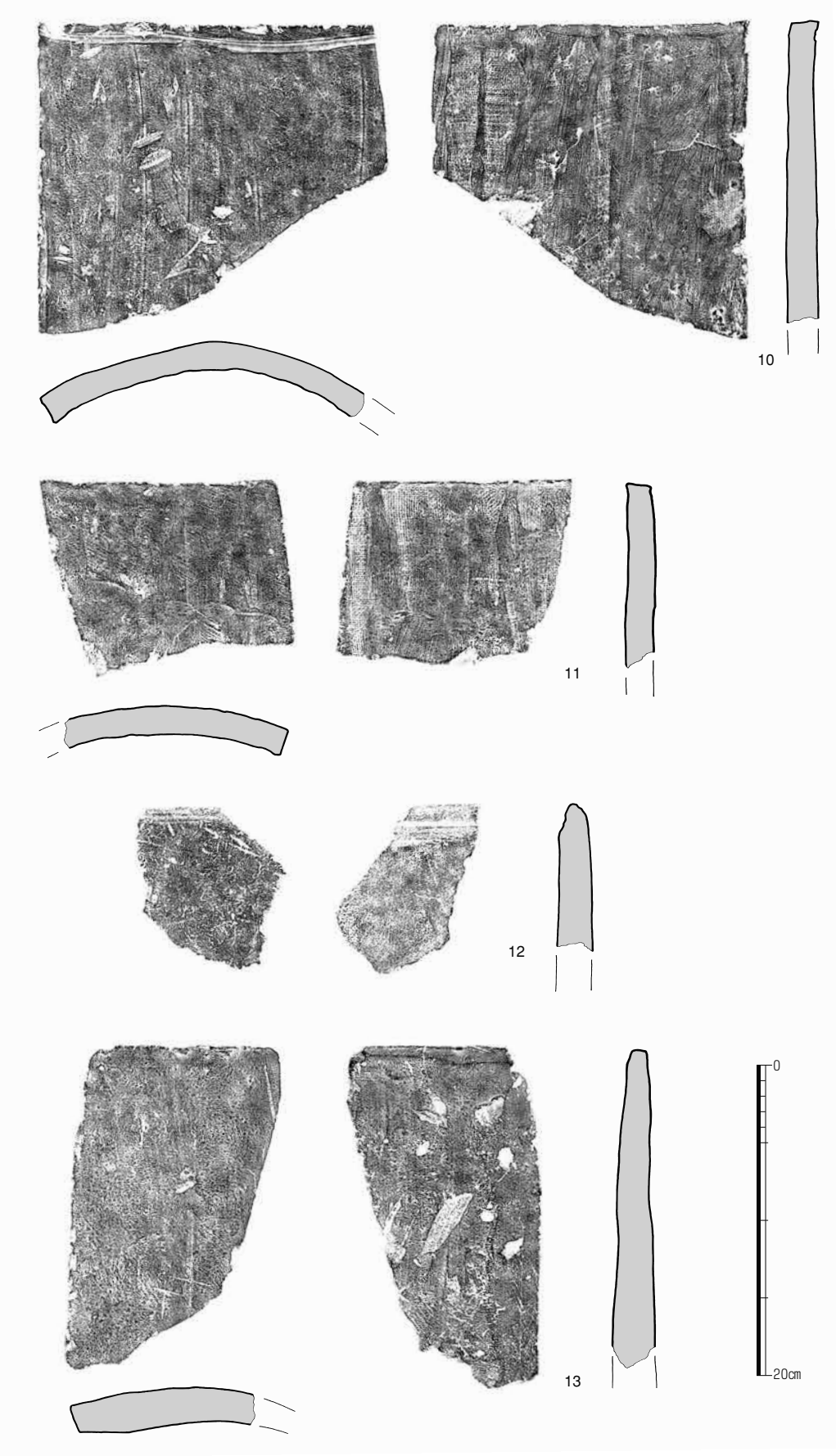


Fig. 77　平瓦１類拓影（３）　1:4

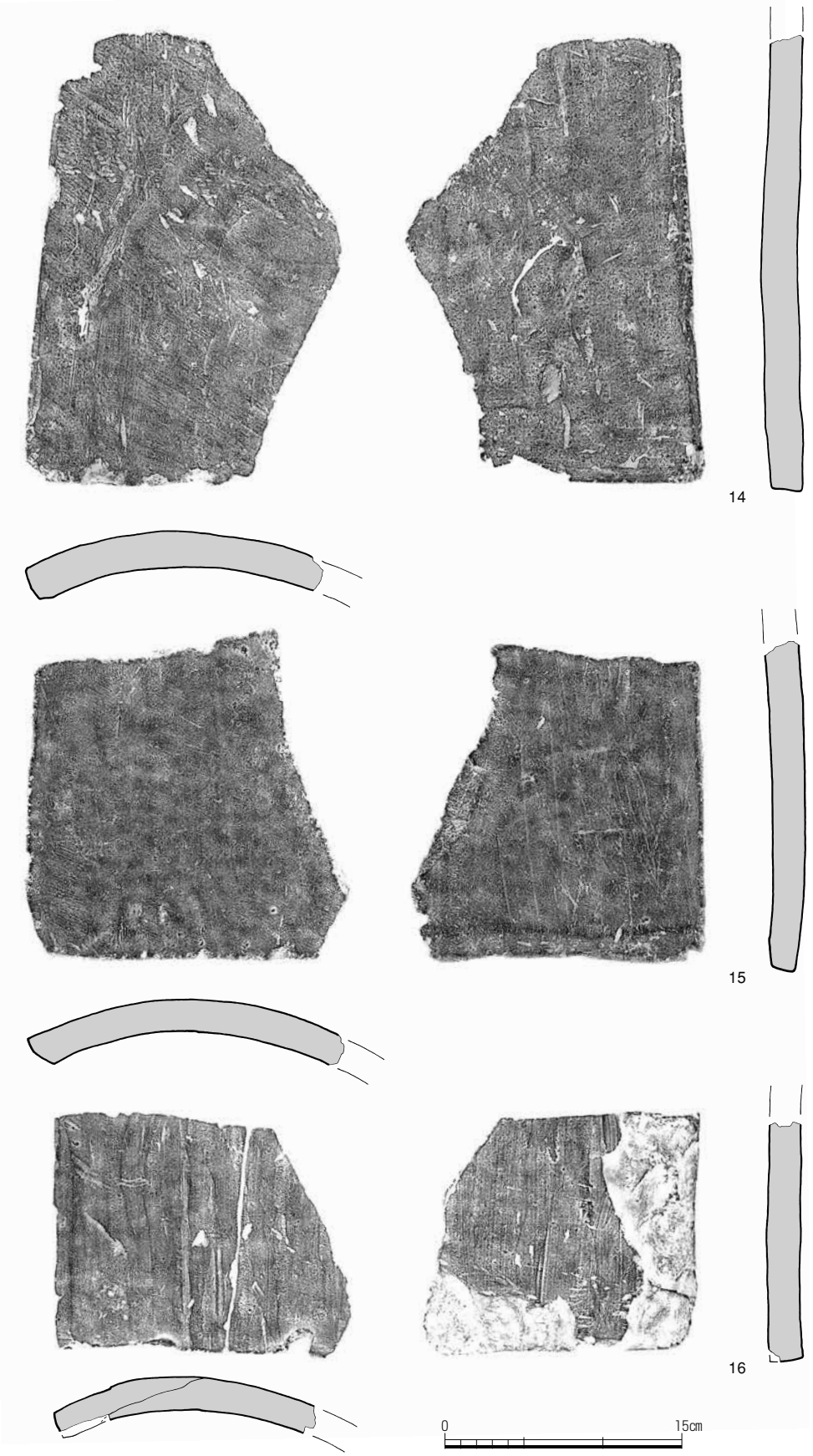


Fig. 78　平瓦１類拓影（４）　1:4

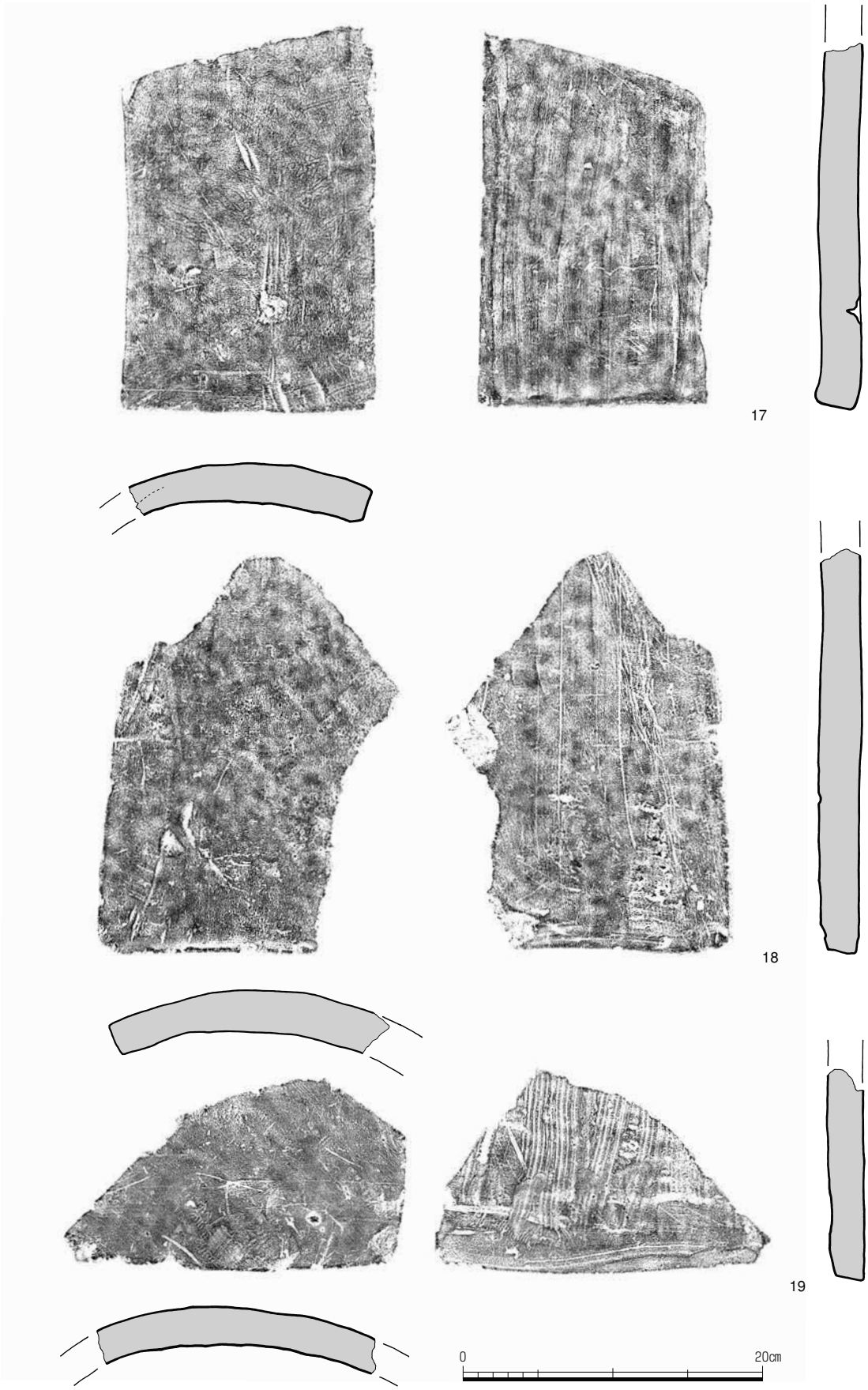


Fig. 79　平瓦１類拓影（５）　1:4

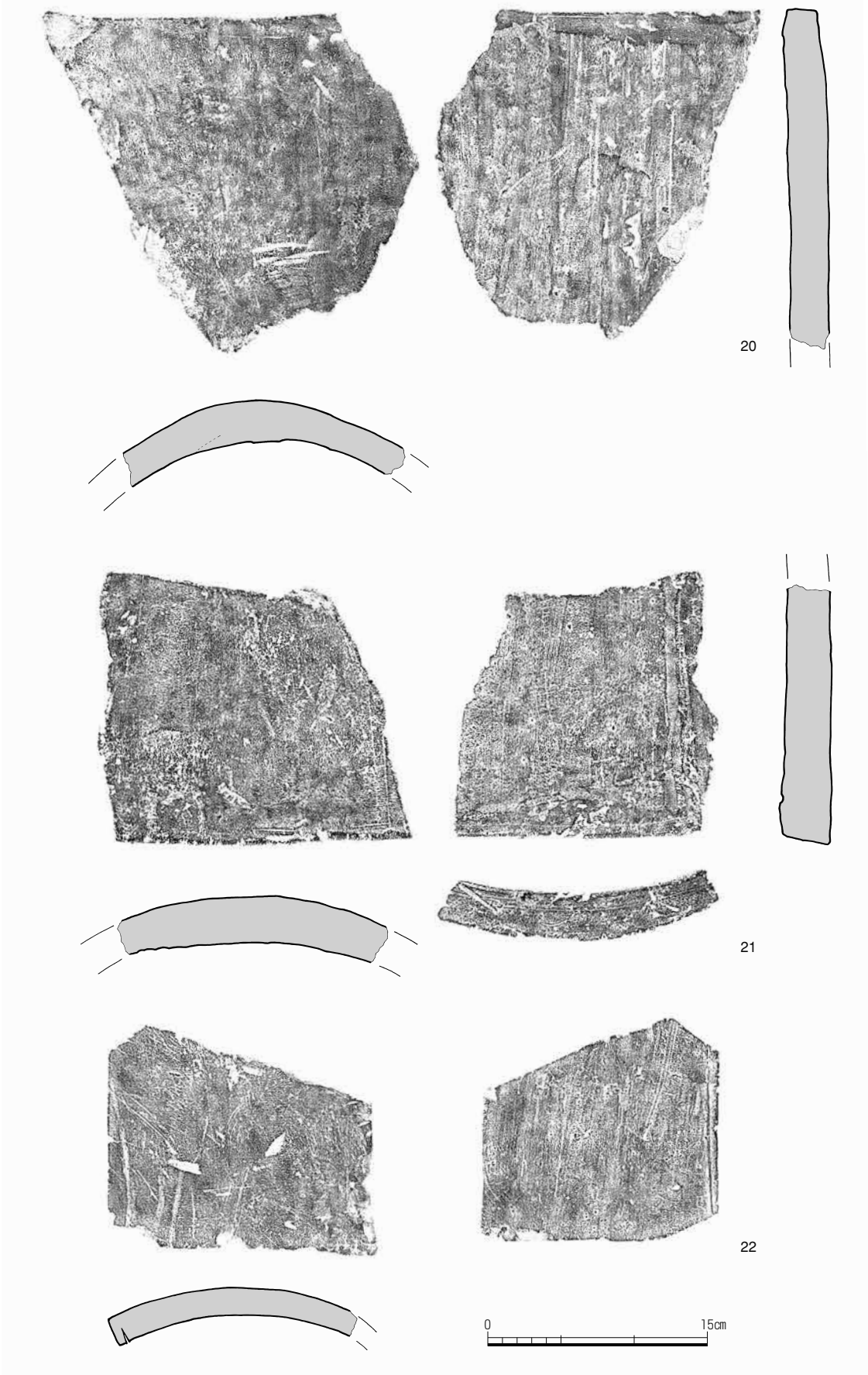


Fig. 80　平瓦１類拓影（６）　1:4

ただし、ナデ調整する個体には、調整後に無文ないしは細かい平行刻線（あるいは木目か）の叩き板で叩いた痕跡が残る（6・7・11，PL.43-2～4・44-1）。凹面も凸面同様、タテ方向に調整する。わずかに布圧痕が残ることがある（10・11，PL.43-3・5）ほか、粘土板合わせ目S型を確認した（20，PL.44-9）。狭端面はヘラケズリする。さらにヨコナデ調整を加えることがあり、断面が丸みをもつ例も稀にある（12，PL.44-7）。 調整後の叩き

14～19・21・22は広端部の破片（Fig.78～80，PL.43・44）。凹凸面の調整は、狭端部の破片と違いがない。調整後に凸面を叩くことがあり（Fig.78-14，PL.43-8・44-2）、やはり、刻線のない無文叩き板を使う。凹面に、ハケ目の痕跡を残す例がある（Fig.79-19，PL.44-6）。広端面もヘラケズリ調整する。ヨコナデ調整を加える比率は、狭端より小さい。このほか、側面の分割截線を入れ損ねた例（Fig.80-22，PL.44-11）や、分割凸帯の紐の痕跡（分割界線）かと思われるくぼみ（PL.44-10）がある。側面調整は、基本的にはｃ手法だが、ｂ手法の例もあり、ごく稀に分割破面が残ることがある（PL.44-12・13）。平瓦１類は原則として厚さ３㎝を越えないが、まれにそれ以上の個体がある（Fig.80-21）。 分割界線

ii　平瓦２類（Fig.81～83，PL.45～47）

『年報』や『紀要』で「薄手品」と呼んだ、厚さ約２㎝未満の粘土板桶巻き作り平瓦。凸面を丁寧にナデ調整して叩き目を残さない「平瓦２類Ａ」、凸面を調整せず平行叩き目が残る「平瓦２類Ｂ」、凸面を調整せず格子叩き目が残る「平瓦２類Ｃ」の３種に細分した。 2類は薄手

平瓦２類Ａ（Fig.81，PL.45）　広端で幅18.3㎝、長さ34.4㎝を残すやや大型の破片がある（23，PL.45-1：第111次調査北区の僧房SB340の北側柱列柱抜取穴出土、24，PL.45-2：第111次調査北区の僧房南雨落溝SD342出土）。全長が35㎝以上と推定でき、以前推測したような「小型平瓦」とするのはあたらない[21]。厚さ1.2～1.8㎝。 2類は小型にあらず

凹凸面とも丁寧に調整するため、凸面には叩き目をまったく残さず、凹面にも布圧痕が残ることはほとんどない。調整はナデまたは板ナデで、多くは広端から狭端に向かって調整する。ただし、狭端から広端に向かう例や、凸面のみヨコないし斜めにナデ調整する例もある。また、凹面をタテにヘラケズリ調整した例もあった。凸面調整ののちに、無文の板で軽く叩いた例があり（23・25，PL.45-3）、凹面にはそれに対応した当て具の痕跡がある（25，PL.45-4）。１例だけ粘土板合わせ目S型を確認した（28，PL.45-5）。

側面は、分割破面だけをヘラケズリ調整するｂ手法。分割截面が残る（PL.45-6）。広端面はヘラケズリ調整ののちナデ、狭端面はナデ調整した例が多い。広端側の凹面縁に面取りのヘラケズリをおこなう。

平瓦２類Ａは、石英、長石、雲母のほかクサリ礫の粒を含む緻密な胎土をもち、灰色ないし淡褐灰色をして焼きがやや甘いものと、硬質の焼きで灰色から青灰色をしたものがある。

平瓦２類Ｂ（Fig.82，PL.45～46）　凸面はごく稀に軽いナデ調整が入る程度で、ほとんどが細かな平行叩き目を明瞭に残す。叩き目は、狭端あるいは広端に平行するか左上がりの方向で、その上から方向の違う叩き目が重複する例がある（33・35～37，PL.45-8・46-4～6）。いずれにしても、叩き締めの円弧を描くようにはみえない。 平行叩き目

叩き板を完全に同定することはできなかったが、１㎝あたり７本前後のごく細い刻線を入れる叩き板（31，PL.46-2）、１㎝あたり３～４本程度の細い刻線をもつ叩き板（29・34，PL.45-

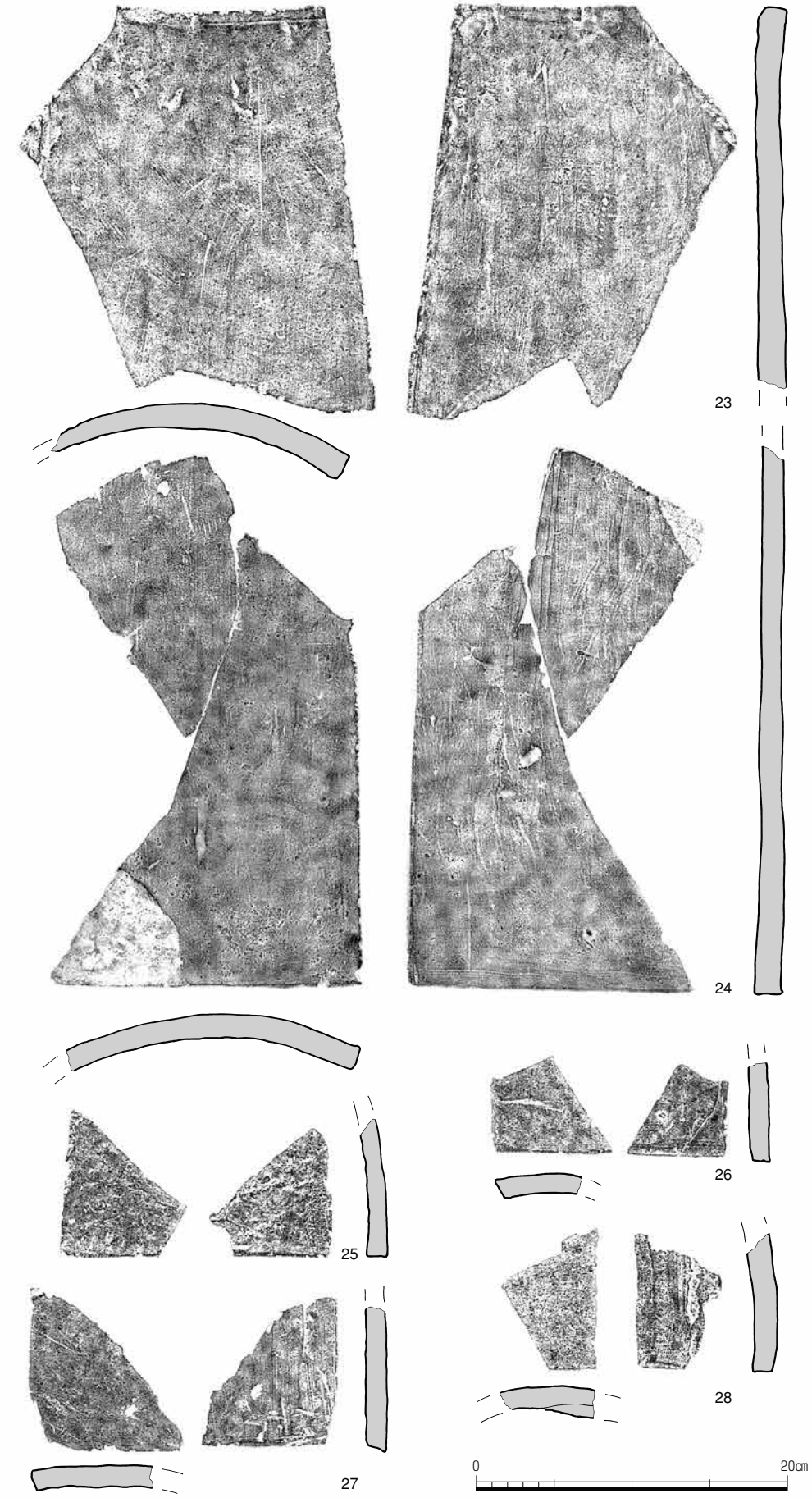


Fig. 81　平瓦２類Ａ拓影　1:4

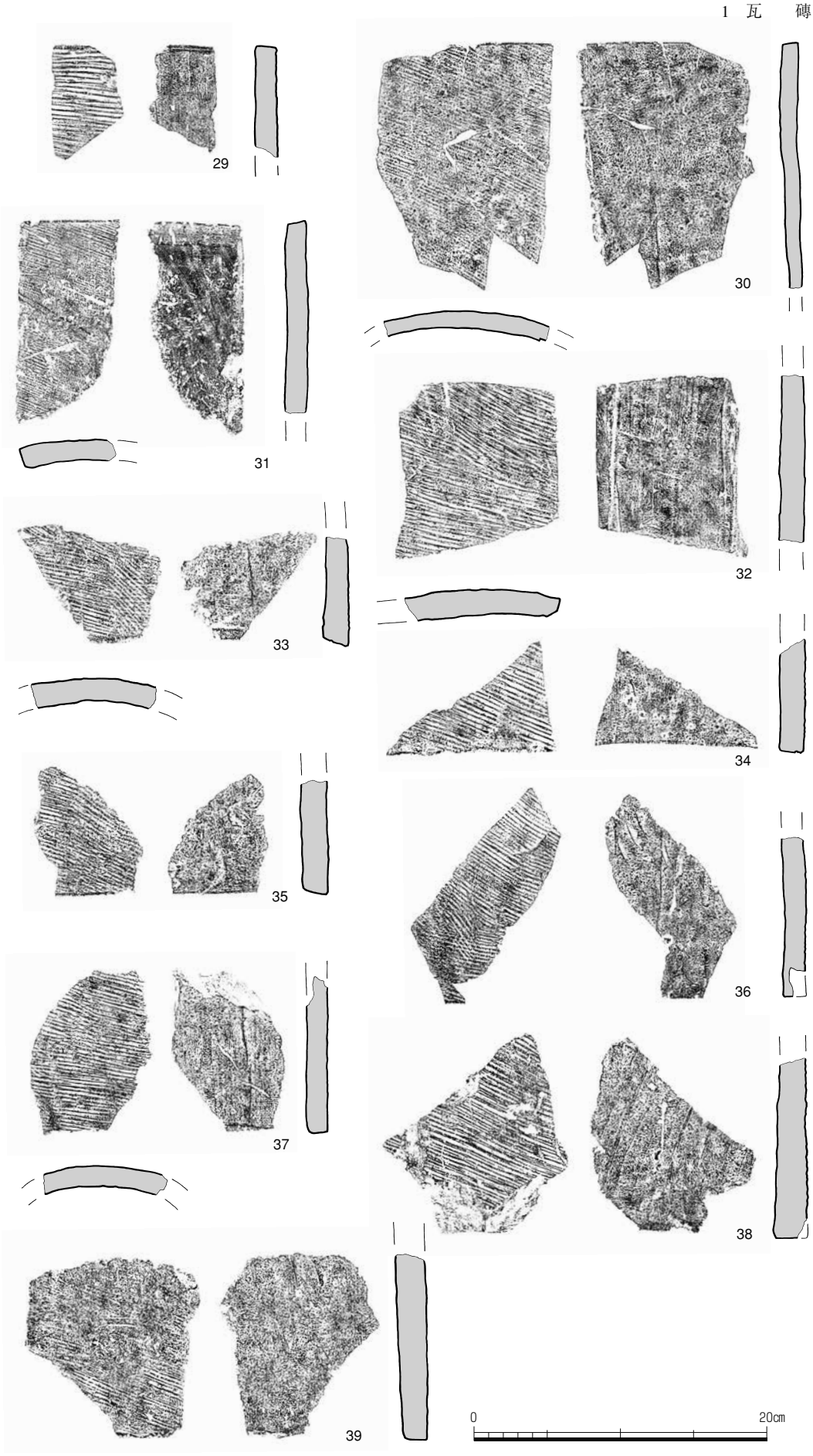


Fig. 82　平瓦２類Ｂ拓影　1:4

7・46-3)、刻線がやや太い叩き板（32・33・35，PL.46-1・4)、間隔がやや広く刻線が太い叩き板（37～39，PL.46-6～8）があることは識別できる。ほかに、叩き目の凹部がきわめて細く、単なる柾目の板を叩き板としたのではないかと思えるものがある（30，PL.45-9)。また、叩き板の先端は角が落としてあることがわかる例もある（36，PL.46-5)。

柾目の板の叩き板

凹面はタテないしヨコ方向のナデ調整をおこなうが、糸切り痕や布圧痕を残すことがある。桶側板の痕跡は明瞭でない。

側面は、破面をヘラケズリ調整するｂ手法。凹面側ないし凸面側に面取りをするものがある。狭端面と広端面はヘラケズリ調整で、そののちナデ調整を加えることがある。凹面側だけを面取りするものが多い。

一辺20cm以上の破片がなく、規格は不明。厚さは1.4～2.0cmあって、２類Ａより少し分厚い。

平瓦２類Ｃ（Fig.83，PL.47）　凸面に正格子あるいは斜格子叩き目を残す平瓦。

叩きを7種に分類

叩き板は、**イ**～**ト**の７種類がある。なお、叩き板**ロ**・**ハ**・**ヘ**の３種は、刻線が叩き板の木目（軸線）とどのような角度で交わるかがわからない。

叩き板**イ**は、叩き板の木目に平行および直交する刻線を入れた正格子刻線叩き板（40，PL.47-1)。木目に平行する刻線がやや太く（７～９㎜間隔)、木目に直交する刻線はやや細い（６～７㎜間隔)。

叩き板**ロ**は、正格子刻線叩き板（41，PL.47-7)。刻線と叩き板の木目と角度は不明。刻線の間隔が８～９㎜あり、叩き板**イ**ほど２方向の刻線で間隔の差がない。刻線が叩き板**イ**よりも細いため、格子目が大きくみえる。

叩き板**ハ**は、正格子刻線叩き板（43，PL.47-4)。２方向とも刻線の間隔が５～６㎜と狭く、しかも刻線は断面Ｖ字形をしているため、叩き目を見たとき、凹部底に平坦面がない。

叩き板**ニ**は、正格子に近い斜格子刻線叩き板（42，PL.47-5)。刻線は木目に平行および斜交し、お互いが交わる角度はおよそ75～80°。木目に平行する刻線がやや太く（５～６㎜間隔)、木目に斜交する刻線が細い（３～５㎜間隔)。

叩き板**ホ**は、斜格子刻線叩き板（46，PL.47-6)。刻線はともに木目と斜交し、刻線どうしは45°前後の角度で交差する。刻線の間隔は５～７㎜。

叩き板**ヘ**は、斜格子刻線叩き板（47，PL.47-9)。刻線の交差角度はおよそ70～75°。刻線の間隔は56㎜。

叩き板**ト**は、斜格子刻線叩き板（48，PL.47-8)。刻線はともに木目と斜交する。刻線どうしの交差角度はおよそ70～75°で、刻線の間隔は約７㎜。叩き板**ヘ**に似るが、木目が浮きだす点で区別できる。

２種類の叩き目が共存する例では、叩き目は左右で違っており、上下で異なる場合はなかった。ただし、いずれもそれほど大きくない破片資料での状況ではある。

叩き板の組合せ

叩き板の組合せは、叩き板**ホ**のあとに叩き板**ロ**が重なる例（41，PL.47-7）のほか、先後関係不明ながら、叩き板**イ**と叩き板**ト**（40，PL.47-1)、叩き板**ホ**と叩き板**ヘ**（44，PL.47-2)、そして叩き板**ホ**と叩き板**イ**？(45，PL.47-3）が重なる例があった。したがって、例数の少ない叩き板**ハ**および叩き板**ニ**を除く５種類がすべて関連することとなり、排他的に使用された叩き板は存在しない。

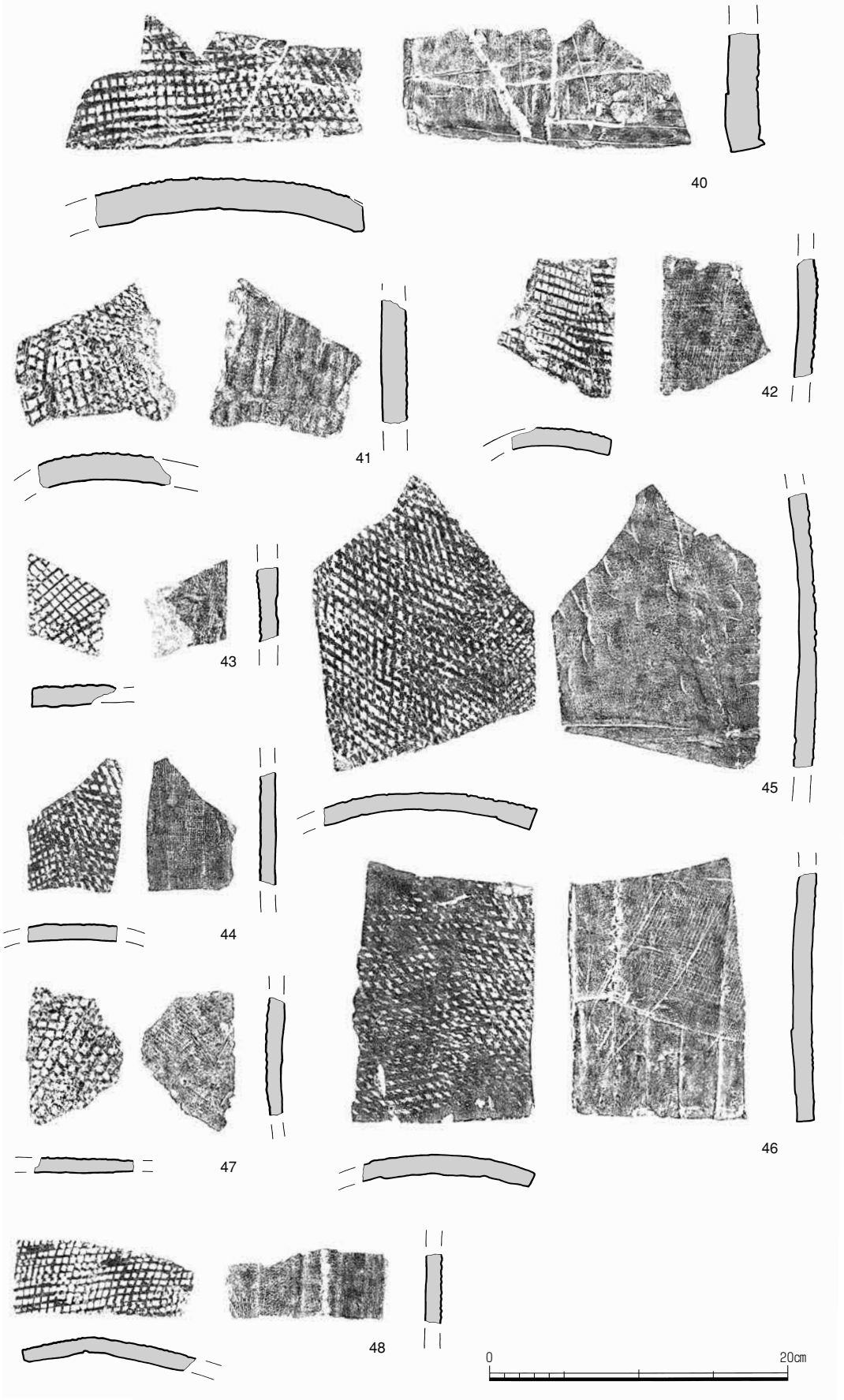


Fig. 83　平瓦２類Ｃ拓影　1:4

当て具痕跡

凹面は、タテまたはヨコ方向のナデ調整をおこなうが、２類Ａや２類Ｂに比べるとかなり簡略な調整にとどまっており、ほとんど調整していない例もある。このため、凹面には糸切り痕、桶側板の圧痕、布圧痕が明瞭に残る。当て具による爪形の痕跡（45，PL.47-3）や布綴じ合わせ目（46・48，PL.47-6・8）をとどめる例もある。46（PL.47-6）の布綴じ合わせは、綴じ目がぐし縫いで、重ね代の端を留め付けた縫い目は残っていない（綴じ合わせGSx）[22]。布袋が桶の下端までかぶらないため、広端では桶の側板に粘土板がじかに接している。側板の幅は2.2～2.6㎝ある。48（PL.47-8）は左上がりのまつり縫い（綴じ合わせMlSx）。

側面調整は、破面だけをヘラケズリするｂ手法のほかに、分割破面と分割截面を截面に平行にヘラケズリ調整するc_1手法があり、後者の方が目立つ。狭端面と広端面は、ヘラケズリ調整ののち、ナデを加える。平瓦２類Ｃも、一辺20㎝を越える破片がなく、規格は不明。厚さは1.2㎝前後の薄いものが多いが、１例だけ２㎝を越える破片があった。

３類は桶巻き縄叩き

ⅲ　平瓦３類（Fig.84，PL.48）

平瓦３類は、タテ縄叩きの桶巻き作り平瓦。粘土板桶巻き作りの「平瓦３類Ａ」と粘土紐桶巻き作りの「平瓦３類Ｂ」に細分する。

粘土板桶巻き

平瓦３類Ａ　凹面に桶の側板痕跡があり、糸切り痕を残すタテ縄叩きの桶巻作り平瓦（49～51，PL.48-1～3）。

凸面は調整がなく、凹面もごく一部をナデ調整ですり消す程度しか調整しない。凸面の縄叩き目は密度にばらつきがあり、同様に、側面の調整と面取りの仕方にも数種が存在する。

49（PL.48-1）は、縄叩き目の密度が９本/３㎝で、凹型台の上で調整したため、縄叩き目が潰れる。凹面は軽く板ナデ調整する。

50（PL.48-2）は、縄叩き目の密度が11～12本/３㎝で、凸面の側辺近くにそれと平行する凹型台の縁の痕跡がある。

51（PL.48-3）は、凸面をヨコナデ調整して、縄叩き目をほとんど消し去る。凹面には粘土板合わせ目Ｚ型を残す。

平瓦３類Ａは、厚さ1.8～2.7㎝あり、規格は不明。石英や長石を含んだ緻密な胎土と粗い胎土とがある。

粘土紐桶巻き

平瓦３類Ｂ　凹面に桶の側板痕跡と、粘土紐の継ぎ目を残すタテ縄叩き桶巻作り平瓦（52～55，PL.48-4・5）。

53（PL.48-5）は、凹凸面ともほとんど調整しない。凸面には10本/３㎝の縄叩き目があり、凹面に桶の側板圧痕と布圧痕のほか、粘土紐の継ぎ目がある。52は、凸面をタテ縄叩きののち、ヨコナデ調整する。凹面に、綴じ目まつり縫い、縫い目ぐし縫いの布綴じ合わせ痕跡（MSg）がある（PL.48-4）。

52～55とも、側面調整は、分割破面と分割截面をともに凸面側に深くヘラケズリするc_2手法。凹面側の縁に面取りをおこなうものと、これを欠くものとがある。狭端面と広端面はともにヘラケズリ調整する。規格の判明する資料はないが、厚さは1.7～2.8㎝。

石英や長石は少なく、クサリ礫の目立つ緻密な胎土をもつ。焼きはやや甘く、青みがかった灰色をしている。53～55は、胎土と色調から判断して、藤原宮所用の高台・峰寺瓦窯の産品とみてよかろう。

高台・峰寺瓦窯産

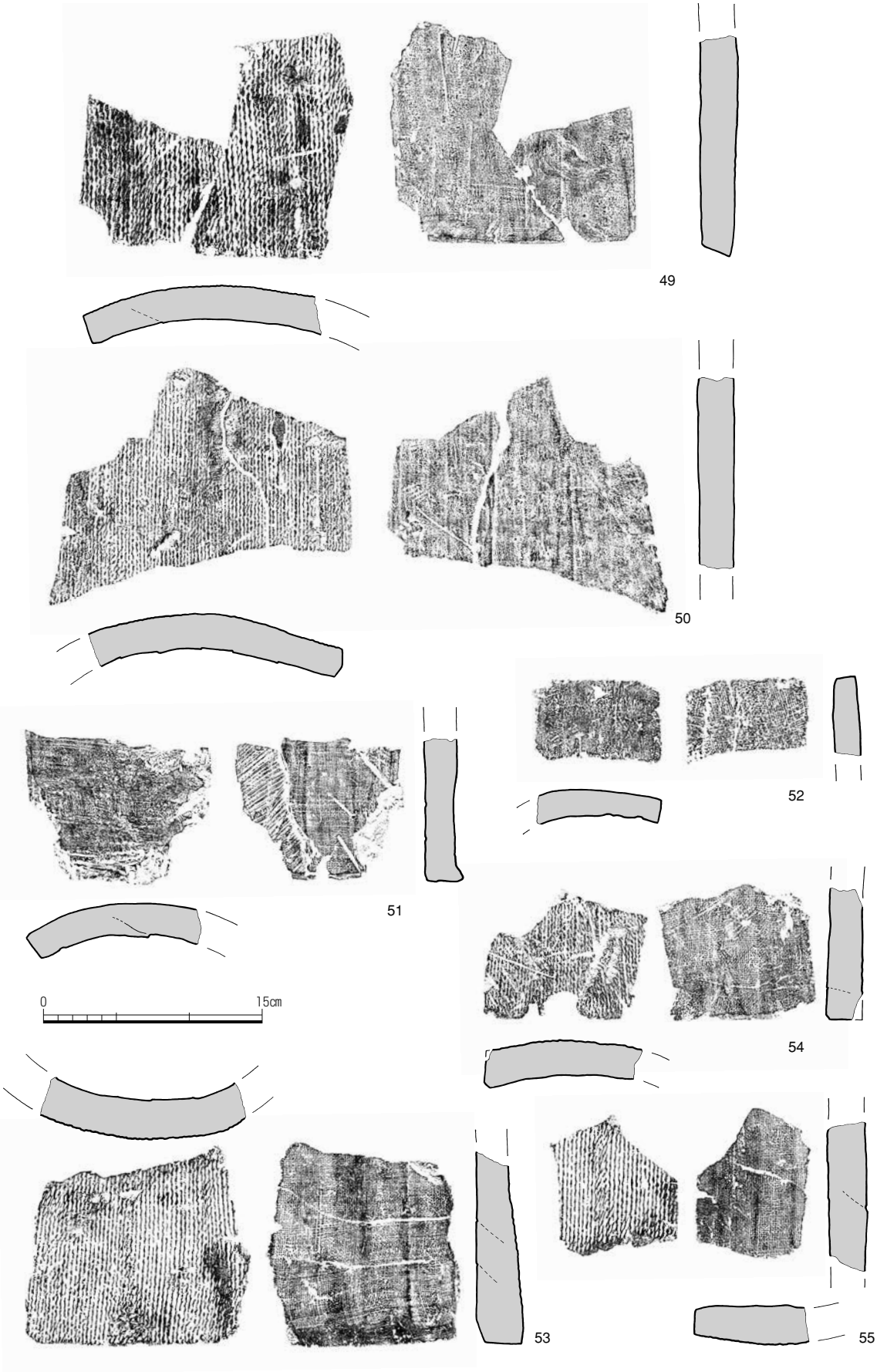


Fig. 84　平瓦３類Ａ・Ｂ拓影　1:4

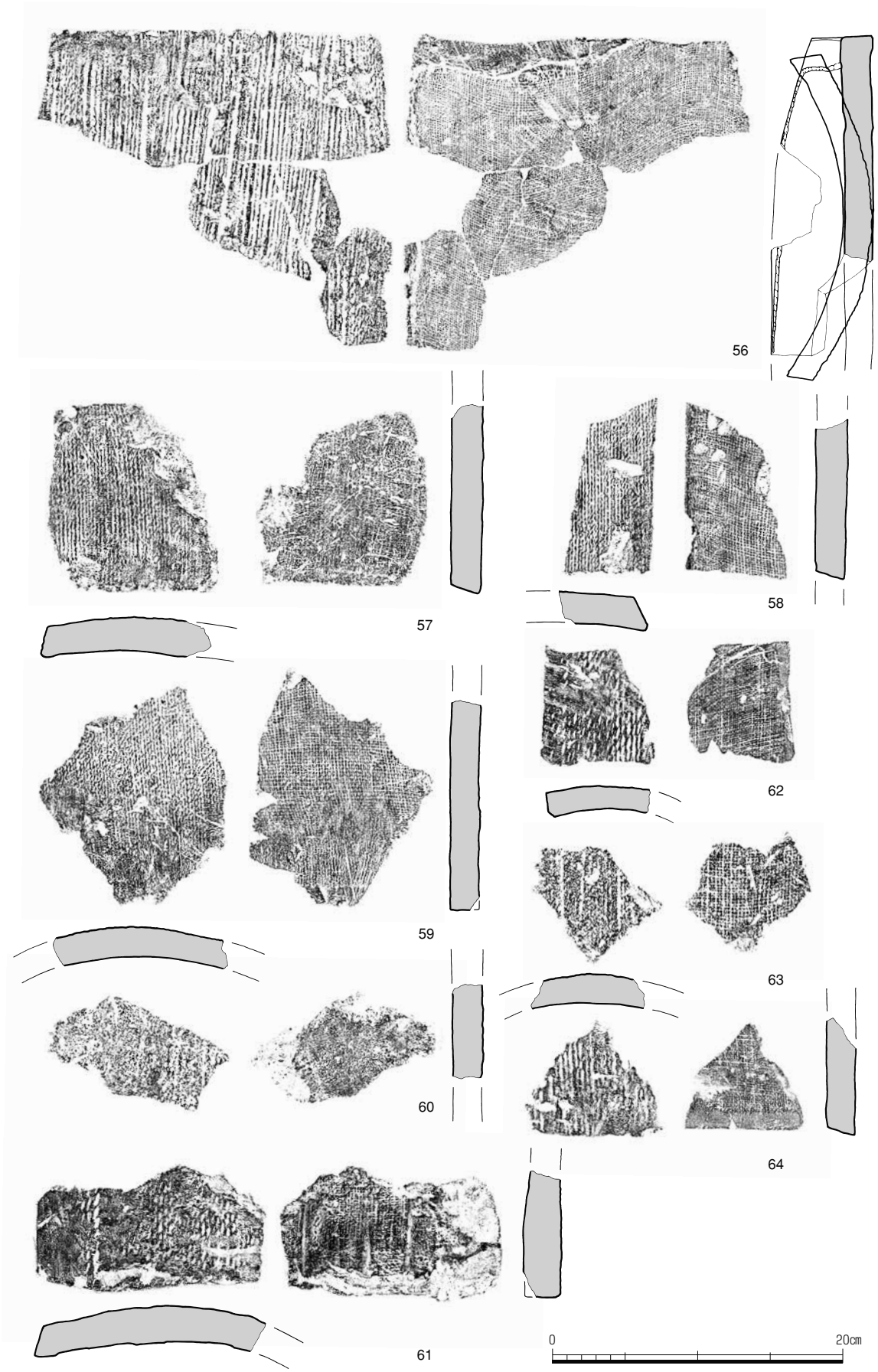


Fig. 85　平瓦４類Ａ・Ｂ拓影　1:4

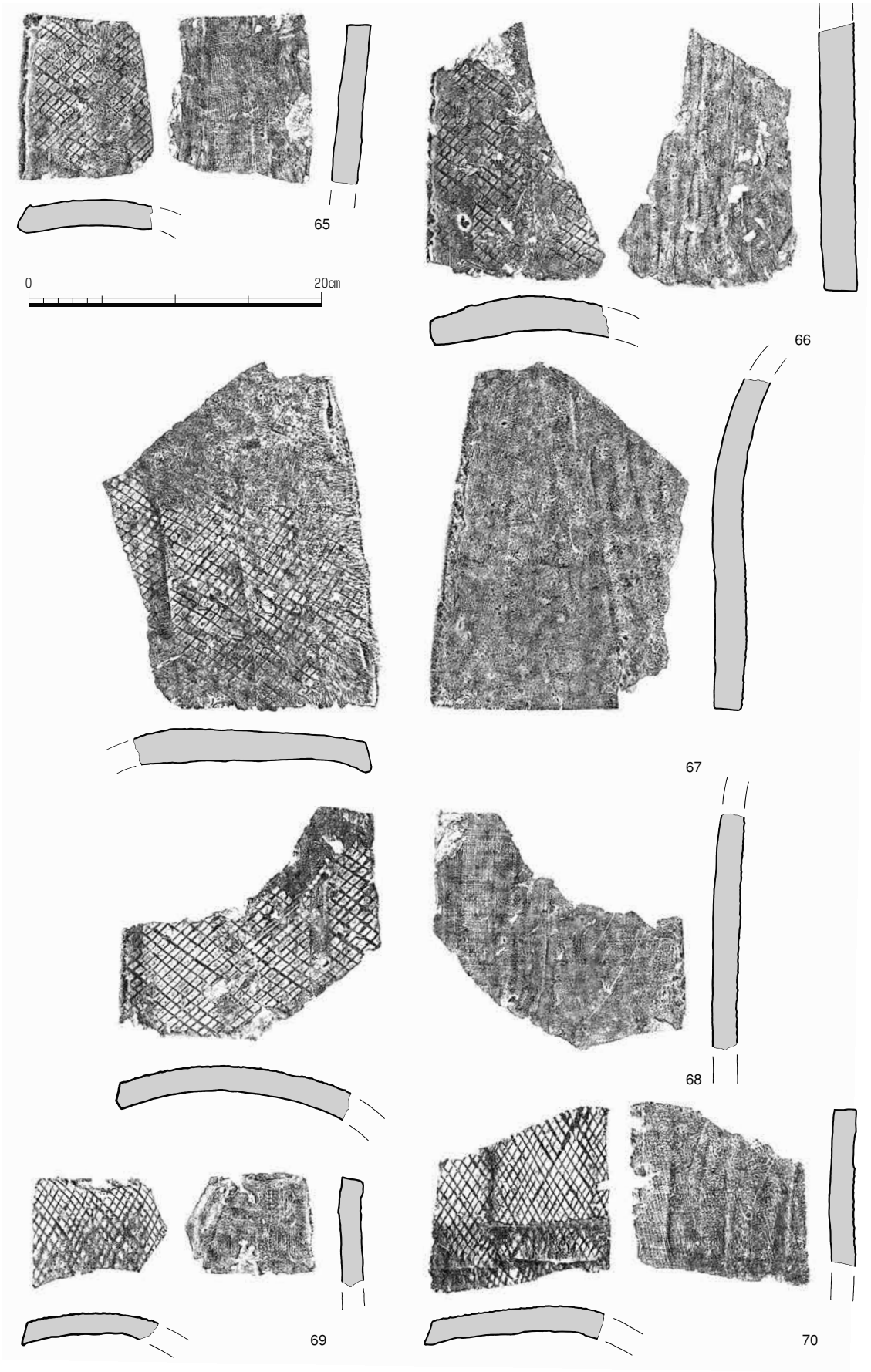


Fig. 86　平瓦 5 類拓影　1:4

iv　平瓦４類（Fig.85，PL.49）

縄叩きの一枚作り

平瓦４類は、タテ縄叩きの一枚作り平瓦。黒灰色・灰色ないし淡青灰色をして縄叩き目が密な「平瓦４類Ａ」と、ハナレ砂を使用して赤褐色に発色する「平瓦４類Ｂ」とに細分する。

平瓦４類Ａ（56～59・61・62，PL.49-1～3）　凹凸面ともほとんど調整しないので、凸面にはタテ縄叩き目が、凹面には布圧痕と糸切り痕が明瞭に残る。桶の側板痕跡や粘土板合わせ目がないこと、さらには、56（PL.49-1）のように、布端の圧痕が凹面の狭端から側辺にかけて連続することから、一枚作り平瓦と判断できる。縄叩き目は、縄の縒りが明確でないものもあり、３㎝あたりの縄叩き目の条数も、５本程度から10本を越えるものまで各種ある。縄叩き目の多くは、凹型台にのせたときの圧迫により潰れている。凹面を叩く例もある（61，PL.49-2）。

凹型台

側面は、基本的に、凸面側を深くヘラケズリする。さらに、凹面の縁を面取りする例がある（56）。狭端・広端とも端面をヘラケズリ調整したのち、凹面側のみ面取りする。

規格は不明だが、厚さは2.0～2.8㎝ある。石英や長石のやや大きな粒を含んだ粗めの胎土をもち、焼きはおおむね硬質。表面は暗灰色、断面は灰色をしている。

平瓦４類Ｂ（60・63・64，PL.49-4～6）　凸面には粗いタテ縄叩き目を、凹面には粗い布圧痕を残す。凸面にはハナレ砂が付着する。側面は凸面側に深くヘラケズリしたのち、凹面側を面取りする。平瓦４類Ａと違って、赤褐色に発色する特徴がある。厚さ２㎝前後。

v　平瓦５類（Fig.86，PL.50）

斜格子叩きの一枚作り

平瓦５類は、斜格子叩きの一枚作り平瓦。叩き板は２枚、つまり、刻線が約100°の角度で交差し、２方向の刻線の間隔に違いがあるもの（65～68，PL.50-3～6）と、刻線が約60°の角度で交差し、２方向の刻線がほぼ等間隔となるもの（69・70，PL.50-1・2）とがある。前者は格子目が粗い平行四辺形となり、後者は細かな菱形の格子目となる。凸面は、叩き目を軽くナデ調整する。凹面は、部分的にナデ調整する例と、破片のほぼ全面がナデ調整された例がある。この違いは、叩き板の違いには必ずしも対応しない。側面は、凸面側に深くヘラケズリし、ナデ調整を加える。端面はヘラケズリのみ。厚さ1.5～2.4㎝。破片資料しかないので、規格は不明。砂粒を含んだ緻密な胎土をもち、硬質の焼きで灰色をしたものと、軟質で明るい褐色をしたものとがある。

vi　小　結

以上、平瓦を５類に分類して報告した。丸瓦と平瓦の組合せについて簡単にまとめる。

吉備池廃寺創建瓦は、丸瓦１類および平瓦１類と２類。丸瓦１類は、出土丸瓦総量の99％以上、平瓦１類は、出土平瓦総量の約90％を占めた。平瓦２類は総量の10％近くを占めるので、これら以外の丸・平瓦はごく微量しか出土していない。丸瓦１類と一緒に焼かれたのは平瓦１類で、平瓦２類と技法や焼き質が近似する丸瓦は出土しなかった。

藤原宮期の平瓦３類Ａ・Ｂは、丸瓦２類Ａ・Ｂと同時期。ともに高台・峰寺瓦窯の製品と推定できる資料はあるが、セットとして持ち込まれた確証はない。平瓦４類Ａは奈良時代の瓦で、丸瓦２類Ｃが組む可能性がある。平瓦５類も一枚作りなので近似した時期と推定できるが、丸瓦には斜格子叩き目を確認できなかった。これらの瓦は、出土量がごく微量にとどまり、かつ創建瓦とは瓦の規格が違うので、吉備池廃寺の差し替え瓦ではない。吉備池廃寺廃滅後の瓦でまとまっているのは、丸瓦２類Ｄと平瓦４類Ｂのセット。これについては後述する。

1） 大脇 潔「吉備寺はなかった －『京内廿四寺』の比定に関連して－」『文化財論叢 Ⅱ』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。
2）『年報 1997-Ⅱ』～『年報 2000-Ⅱ』および『紀要 2001』。軒丸瓦の「A・B」は、同文異笵を意味する。一方、軒平瓦の「b」は、押し型が斑鳩寺（法隆寺若草伽藍、生駒郡斑鳩町）の213型式B種のそれを転用していることから、瓦笵の彫り直しを表現する「小文字のアルファベット」（奈文研・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年）で、斑鳩寺例が先行することを示したものであった。
3） 花谷 浩「軒平瓦」『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年、213～242頁。
4） 木之本廃寺の認識と概要については、「第Ⅴ章4 出土瓦をめぐる諸問題」を参照のこと。
5） 仮屋喜一郎ほか『海会寺 －海会寺遺跡発掘調査報告書－』泉南市教育委員会、1987年。
6） 伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈文研、2000年。
7） 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15、小学館、1991年。
8） 後述するように、木之本廃寺出土資料には時計回りに施文した例が少数ある。
9） 伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)。
10）『年報 1998-Ⅱ』67～68頁。
11） 木之本廃寺の型式別出土点数は、伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6）参照。
12） 井内 功「山田寺瓦当紋様の溯源」『古代瓦研究論誌』井内古文化研究室、1982年。『年報 1998-Ⅱ』68頁。
13） 奈文研『古代瓦研究 Ⅰ』前掲註6)、360～365頁参照。
14） 瓦の側面調整は次の3種に分類。a手法：分割破面を調整しない。b手法：分割破面のみ調整する。c手法：分割破面と分割截面をともに調整する。奈文研『藤原報告 Ⅱ』奈文研学報第31冊、1978年、42頁。c手法は、ヘラケズリが分割截面と平行するものをc_1手法、分割破面側を深くヘラケズリ調整するものをc_2手法と細分する。
15） 布袋の綴じ合わせに関わる用語は、大脇潔（大脇 潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集 Ⅸ』奈文研学報第49冊、1991年）にならって、次のように記号化した。
　M：綴じ目まつり縫い　G：綴じ目ぐし縫い
　S：布重ねSタイプ（左が上）　Z：布重ねZタイプ（右が上）
　l：綴じ目まつり縫いの針目左上がり　r：綴じ目まつり縫いの針目右上がり
　m：縫い目まつり縫い　g：縫い目ぐし縫い　o：縫い目なし　x：縫い目不明
16） 大きい方の杯G身は、現状で差しわたし10cmほどあるが、変形して広がっているので、口径は10cm足らずと推測できる。また、杯G蓋のかえりは、高さが5mm程度しかないようにみえる。この資料については、以前に大脇 潔が言及している。大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註1)、註22。
17） 類品は山田寺と川原寺にある。山田寺は、玉縁丸瓦BⅢb5①とBⅢb5②。奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註3)、Ph.131-2・3、Ph.133-17・19。同書では、玉縁丸瓦BⅢb5①・②を天平宝字年間から平安時代前期に位置づけた（513頁）。
18）『藤原報告 Ⅱ』前掲註14)、42～43頁参照。
19）『年報 1997-Ⅱ』90頁、『年報 1998-Ⅱ』64頁、『年報 1999-Ⅱ』70頁、『紀要 2001』82頁など。『年報 1997-Ⅱ』では、「薄手品」を小型瓦と推測している。また、『紀要 2001』では藤原宮期の丸瓦・平瓦の存在を報告している。このほかに、大脇潔が、吉備池廃寺で採集した平瓦をA～C類に分類している。大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註1)、註22。本書の分類との対応は、大脇A＝平瓦2類B、大脇B＝平瓦2類C、大脇C＝平瓦1類・2類A、となるだろう。
20） 伊藤敬太郎は、平瓦をⅠ群とⅡ群に分けた。伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)。それぞれ、本書の1類と2類に対応する。
21） 本薬師寺の裳階用小型平瓦は、全長28.9cm、狭端幅19.8cm、広端幅23.3cm（いずれも平均値、『年報 1997-Ⅱ』35頁）。また、木之本廃寺からは、完形に近い平瓦2類Bが出土しており、全長40cm、広端幅30cm以上、重量約4kgある（伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註6)）。
22） 前掲註15）参照。

2　土 器 類

土器類は、奈文研による調査で整理用木箱（内法72×45×12㎝）65箱分が出土し、桜井市の調査ではコンテナ17箱分が出土した。その多くは、包含層や時期の新しい遺構からの出土である。ここでは、柱穴や整地土など、吉備池廃寺の創建や廃絶に関して重要な意味をもつものを中心に報告する。可能なかぎり図示したが、小片が多く良好な資料が少ないので、図化できない場合も、器種を判定しうるものは本文に列記した。また、包含層、耕作にともなう小溝、中近世以後の小穴などから出土した土器のうち、図化できる古代の遺物も掲載した。

土器の器形や調整方法の名称[1)]、年代観などは、従来の奈文研刊行物[2)]に従う。口径などは、口縁部が1/6以上残るものにかぎり記述した。

また、埴輪は吉備池廃寺以前の遺物であるが、調査区のほぼ全域から出土しており、近隣にこれまで古墳の存在が知られていないことから、紹介することとした。

A　土　器（Fig.87～96，PL.51・52）

i　金堂SB100とその周辺（Fig.87）

掘込地業

SX101出土土器　金堂基壇の版築土および掘込地業SX101出土の土器には、土師器杯H・甕、須恵器壺・甕などがある。土師器杯Hは、図化できないが、比較的深い器形である。遺物は古墳時代から７世紀代までのものに限られるものの、詳細な時期決定は難しい。

基壇外周溝

SD104・105・250出土土器　金堂基壇の外周をめぐる溝のうち、西辺のSD104からは、土師器の杯C・甕C、須恵器の杯H身・壺・甕などが出土した。土師器杯Cは底部外面不調整、内面にまばらな放射暗文を施す。比較的深い器形で７世紀前半のものである。他はいずれも小片ばかりで時期決定は難しいが、７世紀後半以後に属するとみられる遺物はない[3)]。北辺のSD105からは、土師器杯C・甕・竈（かまど）、須恵器甕・甑（はそう）などが出土した。甑（1）は口縁部の破片で、口径11.6㎝。飛鳥Ⅰであろう。色調は青灰色～黒灰色。胎土には砂粒を多く含む。東辺のSD250からは、土師器杯C・杯H・竈、須恵器杯H身などが出土した。

掘込地業の排水溝

SD102出土土器　掘込地業SX101の排水溝SD102の埋土からは、７世紀前半の土師器杯CⅠが出土したが、図示できない。底部の破片で、外面にヘラケズリ、内面に放射暗文を施す。

SX103出土土器　金堂東側の砂利敷SX103からは、土師器の杯C・甕、須恵器の杯H・有蓋高杯・鉢・甕などが出土した。須恵器長脚有蓋高杯（2）は杯部の破片で、色調は青灰色、胎土は精良。飛鳥Ⅰに比定できる。雷丘北方遺跡SD3580[4)]などに類例がある。

SA251・252出土土器　金堂基壇外周の溝SD105・SD250と並走する柱列。遺物は僅少であるが、SA251から土師器甕、SA252から７世紀代の土師器杯C・甕が出土した。

SB106～109出土土器　金堂基壇周囲で検出した掘立柱穴である。SB106・SB108の柱穴には７世紀代の資料しか含まれず、SB106の柱穴から土師器の杯C・甕、須恵器杯G蓋が出土した。また、SB108の抜取穴からは土師器杯CⅡ（3）が出土した。口径12.0㎝、器高4.4㎝、b_1手法。内面は１段放射暗文。赤褐色の胎土である。飛鳥Ⅰの新しい段階であろう。SB107・109の柱穴からは遺物が出土しなかった。

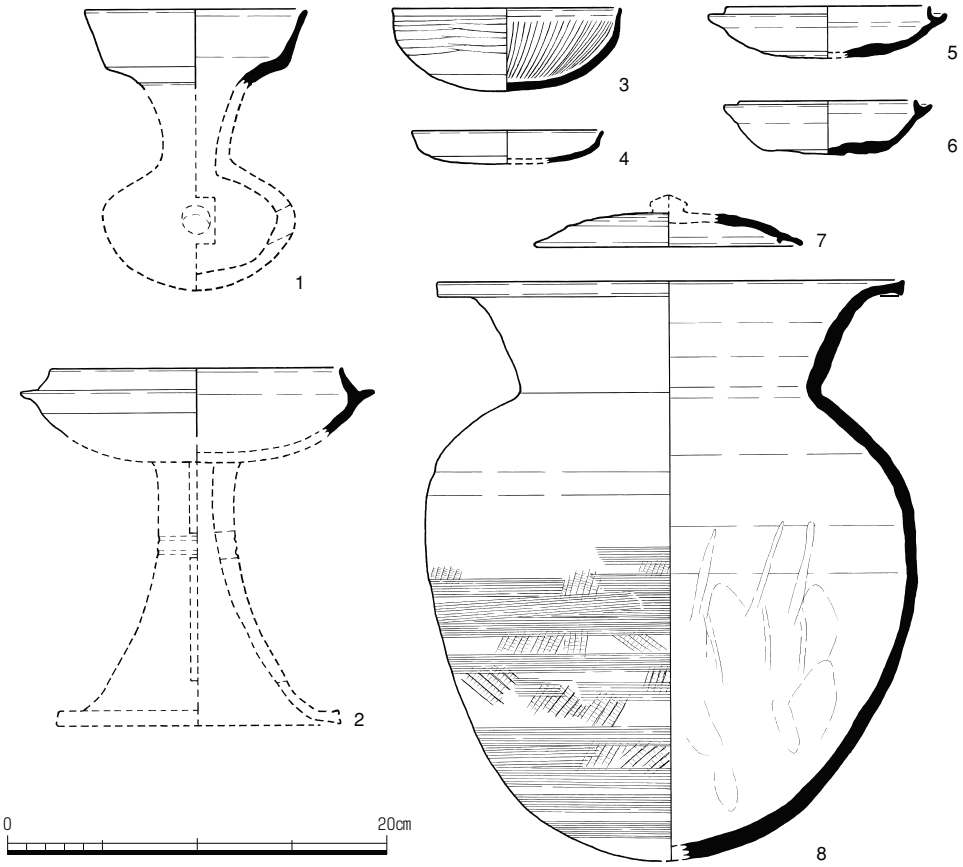


Fig. 87　金堂・塔周辺出土土器　1:4

吉備池堤防出土土器　第81−14次調査・第89次調査ともに、吉備池堤防の築堤土から雑多な土器片が出土した。埴輪など古墳時代の遺物、７世紀代の土師器や須恵器、黒色土器、中世の瓦器、近世の陶器椀などがある。

その他（4〜6）　金堂周辺の包含層などから出土した土器のうち、土師器の皿Ａ（4）は口径10.0㎝、a_0手法。須恵器の杯Ｈ身（5・6）は、ともに底部外面ヘラキリ、色調は灰色で、精良な胎土をもつ。５はかえり径9.2㎝、外径11.0㎝、器高2.9㎝。６はかえり径10.8㎝、外径12.6㎝、器高2.7㎝。SA110・SB111の柱穴には土器が含まれていなかった。

ii　塔SB150とその周辺（Fig. 87，PL. 51）

SX151出土土器（7・8）　塔心礎抜取穴SX151からは、土師器杯Ｃ・甕、須恵器杯Ｇ蓋・杯Ｂ蓋・甕などが出土した。須恵器は７世紀後半のものとみてよい。杯Ｂ蓋（7）は内面に小さいかえりがある。頂部外面はロクロケズリ。かえり径11.7㎝、口径14.2㎝。青灰色を呈し、１〜３㎜の砂を多く含む。甕Ａ（8）は口径24.8㎝、復元高30.6㎝。口縁端部は上下に肥厚して、端部に面をもつ。体部外面の下半は叩きののちカキ目、底部は叩きののちナデ。内面は体部中位に縦方向のナデ、上部から口縁部はロクロナデとする。淡青灰色を呈し、１〜２㎜の砂粒を多く含む。このほか、SX151からは別個体の甕体部片も出土した。　心礎抜取穴

その他　塔基壇の表土・攪乱土から、土師器杯Ｃ・甕、須恵器杯Ｈ・壺・甕などの古代の土器片とともに、埴輪、瓦器椀小片などが出土した。また、基壇版築土には土師器と須恵器蓋・甕が含まれるが、いずれも細片である。基壇南方の小石敷SX155にともなう土器はなかった。

iii　中門SB320とその周辺

中門雨落溝　**SD321・322出土土器**　第111次調査南区で検出した中門SB320にともなう雨落溝である。基壇南側のSD321からは、土師器皿・甕、須恵器杯などの小片が出土した。また、基壇北側のSD322からは、土師器の甕、須恵器の壺などが出土したが、いずれも図化しがたい。

その他　第111次調査南区の土坑SK326には須恵器甕、SK327には土師器の小片があるのみで、時期比定などは困難である。井戸SE330からは、土師器杯Ａ・甕、須恵器杯Ｈ身・飛鳥Ⅴの杯Ｂ蓋・甕が出土した。掘立柱東西塀SA325では遺物は出土していない。

iv　南面回廊SC160とその周辺（Fig.88，PL.52）

回廊雨落溝　**SD161・SD162出土土器**　南面回廊SC160の南雨落溝SD161の埋土からは、土師器の甕Ｃ、須恵器の杯Ｈ身・杯Ｇ蓋・壺などが出土した。いずれも小片である。北雨落溝の石組抜取溝SD162からは、土師器の杯Ｃ・蓋・鉢・甕、須恵器の壺・甕などが出土した。土師器甕は、口縁部の形態からみて飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。

SD180上層　**SD180出土土器**（11～18）　第95次調査南区と第111次調査南区で検出した素掘りの東西溝。

第95次調査では、上層の埋め立て土から、土師器の杯Ｂ・甕・竈、須恵器の杯Ｈ身・杯Ｂ蓋・壺・甕などが出土した。土師器杯Ｂには、形態からみて７世紀後半、同じく甕は、口縁部形態から飛鳥Ⅳ～Ⅴ、須恵器杯Ｂ蓋には飛鳥Ⅴのものがある。須恵器甕（17）は口径20.2㎝、体部外面は叩きのちロクロナデ、内面は同心円当て具痕の上をナデ。

SD180中層　また、中層からは、土師器杯CⅢ・杯Ｈ・高杯Ｃ・甕Ａ、須恵器椀Ｂ・鉢・壺・平瓶・甕などが出土した。土師器杯ＣⅢ（11）は口径11.4㎝、a_0手法。色調は明橙褐色、飛鳥Ⅳとみられる。土師器甕（13）は口径14.4㎝、色調は暗褐色～明褐色。同じく甕Ａ（14）は口径26.4㎝、底部を欠くが器高約30㎝。口縁端部は上下にやや肥厚し、角張った形態である。色調は橙褐色、胎土には砂粒を多く含む。須恵器平瓶（15）は体部の破片。まるみを帯びた体部で、上面に沈線を１条施す。体部下半は斜格子叩きとし、底部外面はナデ、体部上半はケズリのちロクロナデで調整し、肩部より上位の体部上面および体部内面はロクロナデである。

SD180下層　下層からは、土師器杯CI、須恵器甕、弥生土器片が出土した。杯CI（12）は飛鳥Ⅲ～Ⅳで、内面に１段放射暗文、見込に螺旋暗文を施す。明灰褐色、胎土精良。

一方、第111次調査では、土師器の杯Ｃ・椀・甕・甑（こしき）、須恵器の杯Ｂ蓋・高杯Ｃ・平瓶・壺・短頸壺・甕などが出土した。須恵器杯Ｂ蓋は飛鳥Ⅴのもの。平瓶（16）は頸部中位に２条の沈線をめぐらせる。肩は稜を持って屈曲し、沈線を１条施す。口縁部径13.8㎝。色調は灰色で、精良な胎土だが、焼成はやや軟質。須恵器甕Ａ（18）は、口径63.8㎝に復元される大型のもの。口縁部上半の外面には、２条１組の沈線と櫛描波状文による２段構成の文様帯がある。口縁端部は上下に拡張して幅広い端面をつくり出し、外面下端に沈線が１条めぐる。色調は明灰色で、胎土には１～５㎜ほどの砂礫を少量含む。

SK187～189出土土器　第95次調査南区で検出した浅い土坑SK187～189のうち、SK187は土器が出土していない。SK188では飛鳥Ⅳ～Ⅴの須恵器杯Ｂ蓋が出土した。また、SK189からは、土師器の杯Ａ・杯BI、須恵器の杯BI・Ⅲなどが出土した。土師器、須恵器ともに、形態の特徴から飛鳥Ⅴに比定できるものを含んでいる。土師器杯BI（9）は口径21.2㎝。口縁部外面はミガキ、内面は２段放射暗文と見込に螺旋暗文を施す。色調は赤褐色～明褐色を呈し、胎土

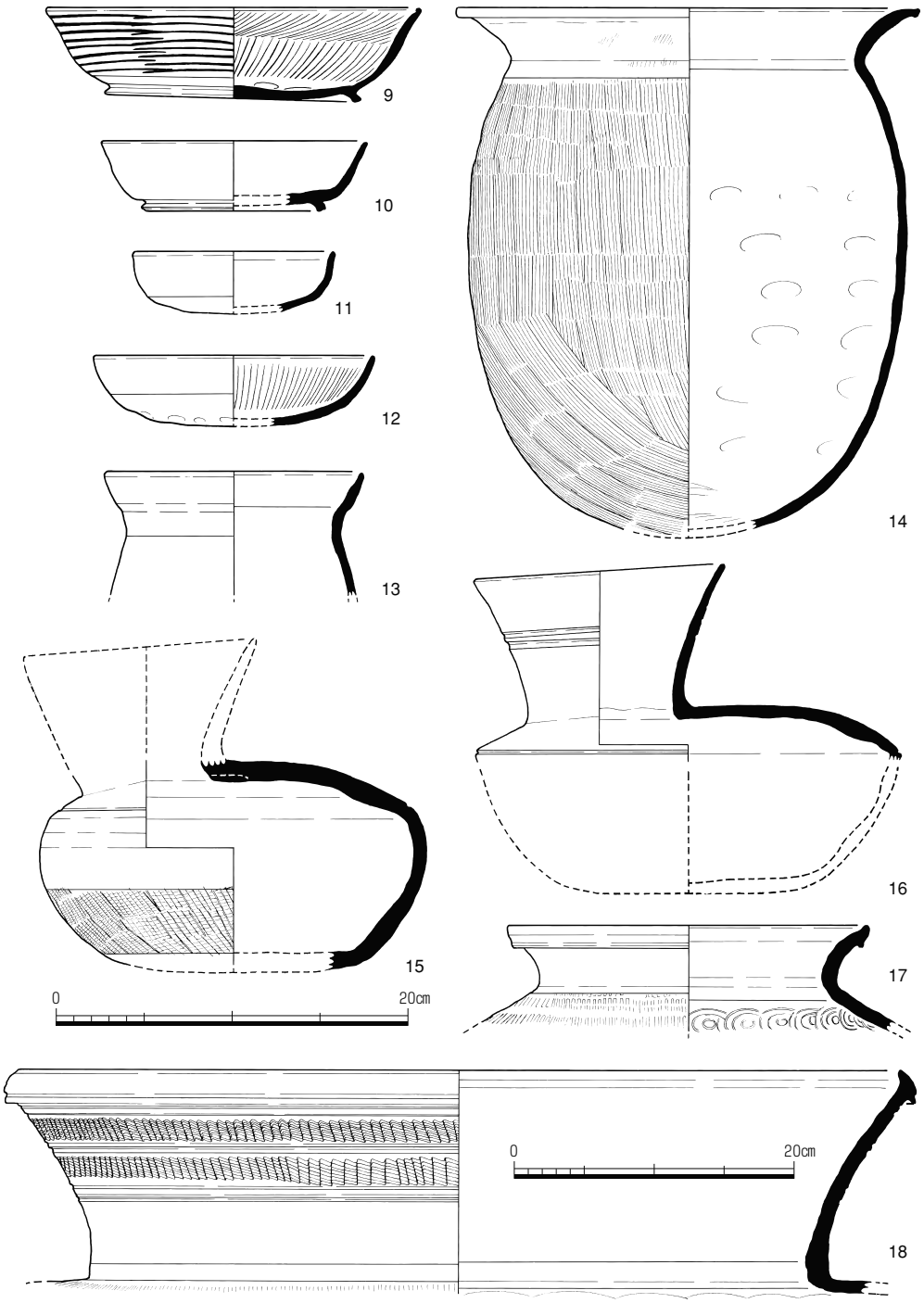


Fig. 88　南面回廊周辺出土土器　1:4（18のみ1:5）

は精良。須恵器杯BⅢ（10）は明灰色の色調で、胎土には1㎜ほどの砂粒を比較的多く含む。口径15.0㎝、器高4.0㎝。ほかに、胎土・色調はほぼ同様の、10とよく似た個体があり、口径14.8㎝、器高4.0㎝である。

その他　第95次調査南区で検出した掘立柱建物SB190の柱穴からは、飛鳥Ⅰとみられる土師器杯CIと、土師器甕の破片が出土した。また、SK193では土師器の甕、弥生土器片とともに、摩滅した瓦器の小片が出土している。南区の中央部にある吉備池廃寺創建以前の土坑SK186には、布留式の壺・甕、須恵器甕の破片が含まれていた。

SX183・SX185・SX324からは土器が出土しなかった。また、掘立柱の東西塀SA181、SA182にも土器はみられない。一方、包含層からは雑多な土器類が出土しているが、そのうち須恵器杯BⅢには、胎土などがSK189出土品と共通する個体がある。

v　西面回廊SC200とその周辺（Fig. 89，PL. 52）

SD219出土土器（19～21）　第95次調査西区中央のトレンチにある素掘りの東西溝。遺物は土師器が少量出土したにとどまる。ⅢA（21）は口径14.0㎝。口縁部をヨコナデ、体部下半はナデで調整する。内面は風化により調整不明。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を多く含む。小型壺は２個体あり（19・20）、19は口径7.0㎝、器高4.6㎝の完形品。体部外面は全面ナデ、内面もナデで調整し、口縁部はヨコナデ。短い口縁部は外反し、肥厚ぎみのまるい端部をもつ。明黄褐色で砂粒を多く含む粗い胎土。20もほぼ同様である。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属すると思われる。

SD226出土土器　第95次調査西区中央のトレンチから西方へ続く素掘りの東西溝。土師器の鉢・甕、須恵器杯H・杯B・壺・甕などの破片が出土した。須恵器杯BⅢ（22）は口径16.2㎝、器高3.7㎝をはかる。色調は灰色で、砂粒を含む胎土をもつ。飛鳥Ⅴであろう。このほか、弥生土器の壺も出土している。

SD240出土土器　第95次調査西南区で検出した素掘りの東西溝。土師器の杯・甕、須恵器の甕などがある。土師器甕は口縁端部に面をもつ形態で、飛鳥Ⅴに比定できる。

その他　第95次調査西区中央のトレンチでは、素掘溝SD225の下層から、飛鳥Ⅰの須恵器杯H身と弥生土器の壺片が出土した。同じトレンチの土坑SK216～218のうち、SK216からは７世紀代の土師器杯Cと７世紀前半とみられる土師器甕が出土し、SK217では弥生土器とおぼしき甕片がみつかった。また、近世の井戸SE220には、土師器の甕と須恵器の小片がわずかに含まれていた。西区東側のトレンチの掘立柱南北塀SA204からは、土師器甕の破片が１点出土したにとどまり、年代の詳細は決めがたい。

なお、第95次調査西区の以下の遺構は、土器を包含していなかった。西面回廊SC200にともなう雨落溝の石組抜取溝SD201、土質の差SX203、石の抜取痕跡SX202、斜行溝SD210・215、土坑SK218・221、東西塀SA227。また、第95次調査西南区の東西塀SA241、土坑SK242からも土器は出土していない。

vi　東面回廊SC300とその周辺（Fig. 90，PL. 51）

SC300整地土出土土器（23～28・31～38）　東面回廊SC300にともなう橙黄色粘質土混じりの褐色～黄灰色粘質土層は、吉備池廃寺創建期の整地土である。この中から、土師器の杯C・杯G・杯H・高杯C・高杯H・甕、須恵器杯H・蓋・高杯・瓶・甕などが出土した。土師器杯H（23・24）は明褐色の胎土に比較的砂粒を含む。ⅢH（25）も同様。高杯C（32）は口縁端部に内傾面をもち、杯部内面は１段放射暗文。口縁部はヨコナデ、杯底部外面には指の圧痕が残る。

創建期整地

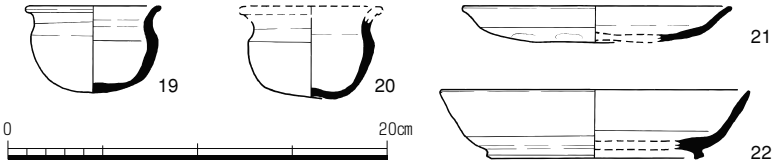


Fig. 89　西面回廊周辺出土土器　1:4

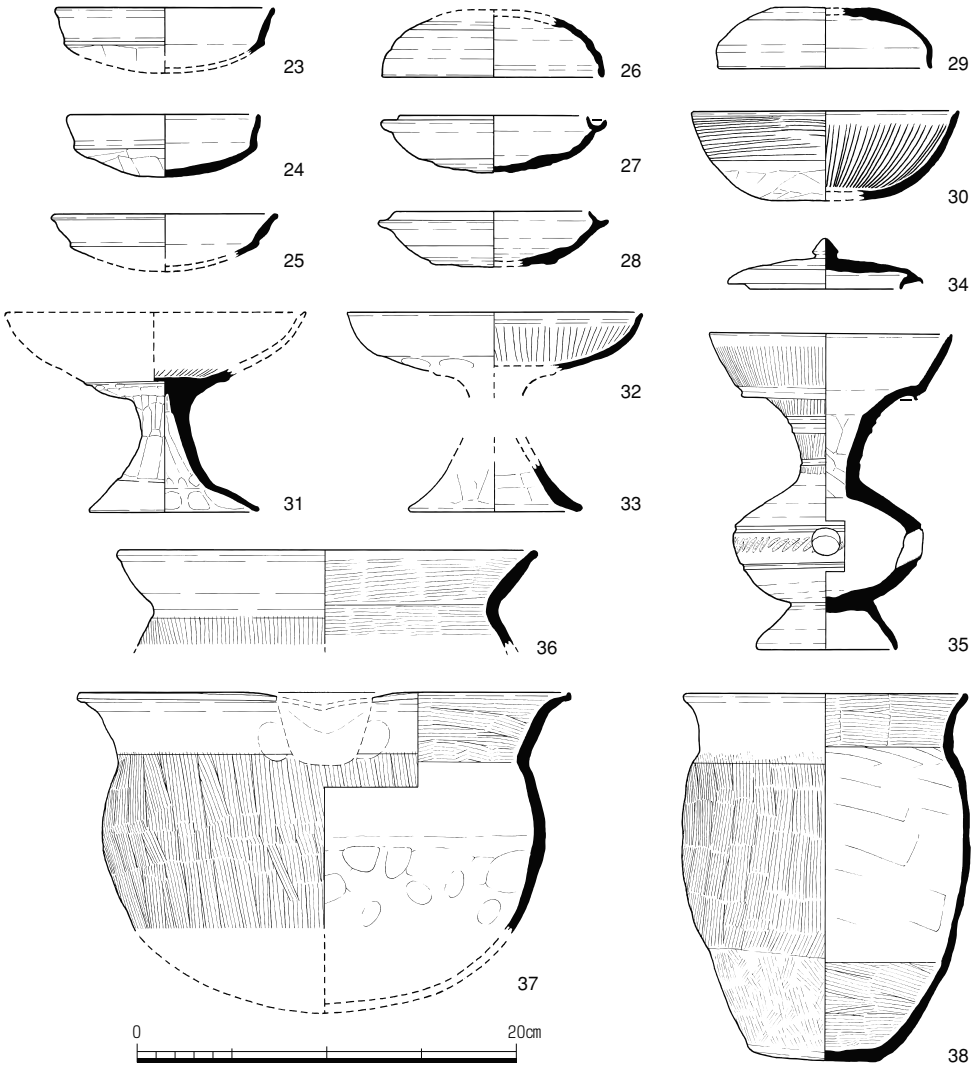


Fig. 90　東面回廊周辺出土土器　1:4

高杯C（31）にも、同様の放射暗文と見込の螺旋暗文がある。杯部下面の接合部は、凸帯状の段差をなす。脚部外面は縦方向のナデ、内面は絞り痕が明瞭である。脚端部は外面ヨコナデ、内面には強い指の圧痕が残る。明橙褐色で精良な胎土。31・32と類似した高杯Cは、飛鳥Ⅰの新しい段階に位置づけられる飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層[5]などから出土している。高杯H（33）は脚端部の破片で、端部はヨコナデするが、脚部外面は面取りのヘラケズリ、内面も横方向のヘラケズリとする。色調は橙褐色で、胎土は精良。土師器片口鍋（37）は口径26.0㎝。体部内面には無文当て具痕とナデがみられる。口縁端部はナデにより上方へ肥厚する。片口の両側にオサエの痕跡が残る。胎土は明褐色。土師器甕（36）は口径22.0㎝。黄褐色で、砂粒を含む粗い胎土である。同じく甕A（38）は、底部および体部下半を先に成形し、上半部を継ぎ足していることが明瞭である。下半は内外面をハケ、底部内面をナデで仕上げる。接合痕より上位の内面は横方向の板ナデ[6]。口縁部はわずかに外反し、まるい端部をもつ。色調は灰褐色で、微細な砂粒を多く含む。器形や調整に特徴があり、畿内産の土器ではなかろう。平底の甕は、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに例がある。

飛鳥Ⅰの新しい段階

須恵器蓋（34）は、かえり径8.0㎝、口径10.3㎝、器高2.7㎝。宝珠形のつまみがつく。口縁を

受ける部分は外傾する面をなし、杯類ではなく、壺などの蓋であろう。色調は暗灰色で、上面は自然釉が一方へ流れている。杯H身（27・28）は低いかえりをもち、底部外面はヘラキリ。27は外面灰色、断面が赤灰色を呈し、胎土は精良。28は暗灰色で白色の微粒子を含む。杯H蓋（26）は28と似た胎土で、頂部外面ロクロケズリ、口縁部内側がナデにより凹線状をなす。端部はやや摩耗している。瓶（35）は高台付きのもの。口縁端部を欠くが、口径13㎝、器高16.5㎝ほど。頸部から体部の内面に漆が付着している。灰色で精良な胎土。

これらの土器群は、山田寺下層のSD619および整地土[7]、甘橿丘東麓の焼土層SX037[8]、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに近似した内容といえる。

回廊雨落溝
石組抜取溝

SD305出土土器（29・30）　東面回廊SC300の雨落溝の石組抜取溝SD305からは、土師器の杯C・杯G・甕、須恵器の杯H蓋・杯G蓋・甕などが出土した。７世紀前半とみてよい。土師器杯C（30）は、口径14.0㎝、器高4.7㎝、b_1手法。内面は１段放射暗文。色調は外面橙色、内面明橙褐色で精良な胎土をもつ。須恵器杯H蓋（29）は、頂部外面をヘラケズリしている。

SD306・307出土土器　第105次調査東区で検出した吉備池廃寺廃絶後の溝で、12～13世紀頃に埋まったものとみられる。土師器には、７世紀後半の杯A、奈良時代後半～平安時代の甕、９～10世紀の杯などがあり、須恵器には、飛鳥Ⅴの杯B蓋、奈良時代前半の須恵器杯Bがある。ほかに、奈良時代の土馬や製塩土器の破片、９～10世紀の黒色土器A類椀・B類椀、緑釉陶器の皿、灰釉陶器の壺、12世紀末～13世紀初めの瓦器椀、円板など、雑多な遺物が出土した。

SE311～313出土土器　いずれも第105次調査東区で検出した井戸。SE311からは12～13世紀の瓦器椀など、SE312からは９世紀の土師器杯や11世紀の瓦器椀などが出土し、SE313には10～11世紀の黒色土器A類椀などが含まれていた。

vii　僧房とその周辺（Fig.91～94・96，PL.51・52）

創建期整地

灰色～灰黒色粘質土層出土土器（Fig.91-39・40）　第105次調査池内調査区の灰色～灰黒色粘質土層は飛鳥Ⅰの土器を含み、吉備池廃寺創建にともなう整地と考えられる。土師器の杯CⅢ・高杯C・甕、須恵器の杯H身・高杯・甕・漆の付着した瓶などが出土した。土師器甕Bの把手は挿入式である。土師器高杯C（40）は口径16.9㎝、器高12.2㎝をはかり、脚端部径は10.5㎝である。口縁部はヨコナデし、内面に粗い１段放射暗文を施す。外面のミガキは施していない。杯部下半の外面はオサエとナデ。杯部の成形は２段構成で、下面の接合部に凸帯状の段差がある。脚部はナデで整え、内面には絞り痕がみられる。屈曲して開く端部は外面ヨコナデ、内面に指の圧痕が残る。明橙褐色で胎土は精良、脚端部に黒斑がある。飛鳥Ⅰの新しい段階に比定され、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層などに類例がある。ほかに、時代が遡る遺物として、TK47型式の須恵器杯H身（39）、埴輪などが含まれている。

飛鳥Ⅰの
新しい段階

僧房の土器

SB340出土土器（Fig.92-50・51）　SB340は、第111次調査北区で検出した掘立柱の僧房である。土器の大半は小片だが、柱掘形から土師器杯C・杯H・甕、須恵器杯H身・甕などが出土し、抜取穴からは土師器杯A・甕、須恵器杯H身・杯G蓋・高杯・甕などが出土した。抜取穴出土の土師器杯Aには、口縁端部の形状から飛鳥Ⅳ～Ⅴとみられる破片がある。南側柱列東から２基めの柱掘形出土の土師器杯GⅡ（51）は、口径12.0㎝、器高3.7㎝。いびつな口縁部をもち、暗褐色で精良な胎土に雲母を多く含む。須恵器杯H蓋（50）は、南側柱列東から８基めの柱穴の抜取穴から出土した。口径12.2㎝、器高3.0㎝。頂部外面はヘラキリのまま。このほか、

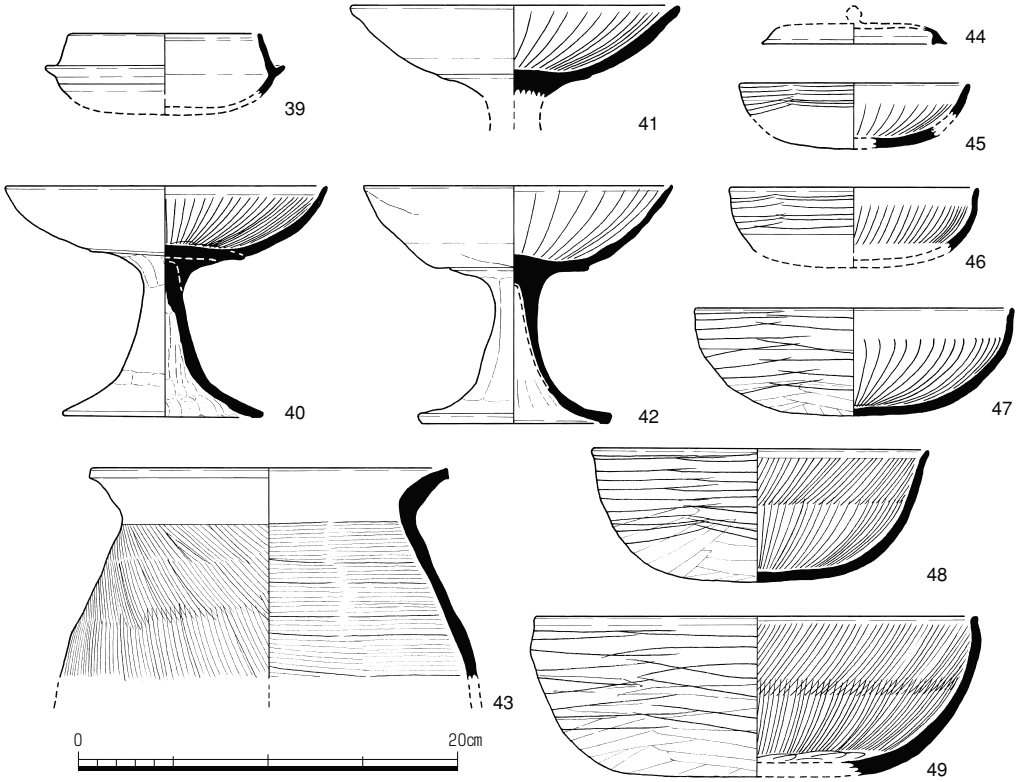


Fig. 91　僧房周辺整地土等出土土器　1:4

SB340の西雨落溝SD343から、円面硯の脚部片（Fig. 96-127）が出土している。

SB340東方の整地土出土土器（Fig. 91-41～43）　SB340の東にある整地土のなかには、数ヵ所の焼土溜があり、そこから、焼土とともに、飛鳥Ⅰに属する土師器の高杯C、甕などが出土した。高杯C（42）は口径16.2㎝、器高12.6㎝、脚端部径10.0㎝。杯部は内面に粗い１段放射暗文を施している。杯部の成形は２段構成になっており、下面の接合部には凸帯状の段差がある。脚部は縦方向のナデ、端部は外面ヨコナデ。色調は明褐色で、胎土に少量の砂を含む。42は深い杯部をもつが、これと比較的類似した深い器形が、飛鳥Ⅰの古い段階とされる川原寺下層SD02にある[9]。高杯C（41）は口径17.2㎝で、42より浅い杯部に復元される。杯部下面に接合部の段差がある。色調は明黄褐色を呈し、外面に黒斑をもつ。41は、第105次調査池内調査区出土の高杯C（40）および東面回廊SC300整地土出土の高杯C（31・32）と同様に、山田寺下層整地土[10]、甘橿丘東麓SX037、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層など、飛鳥Ⅰの新しい段階の例と似ている。川原寺下層SD02出土品にも41のような浅い器形はあるが、口縁部外面にミガキを施す点が、41などの吉備池廃寺出土例と異なる。山田寺下層整地土・飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層のものにもミガキはない。土師器甕（43）は口径18.7㎝、なで肩の体部をもち、口縁端部はナデにより四角く成形する。色調は明褐色、粗い胎土で１～５㎜ほどの砂礫を多く含む。

焼土溜

飛鳥Ⅰの新しい段階

SB400出土土器（Fig. 92-52～60）　SB400は桜井市第９次調査で検出した僧房である。柱掘形には飛鳥Ⅰの土器が含まれ、抜取穴にはそれに加えて飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器がある。

僧房の土器

柱掘形からは、土師器の杯C・甕B、須恵器の杯H・杯G・高杯・提瓶・甕などが出土した。土師器甕Bの把手は挿入式。須恵器杯H身（52・53）のうち、52はかえり径10.1㎝、外径12.2㎝。底部外面はロクロケズリを施す。青灰色で胎土に砂粒を少量含む。53はかえり径10.2㎝、

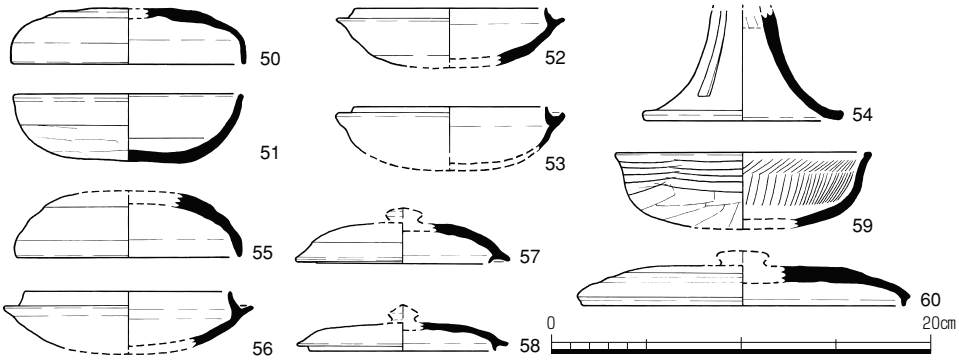


Fig. 92　僧房柱穴出土土器　1:4

外径12.2㎝。色調は青灰色。須恵器高杯（54）は脚部の破片で、端部径10.6㎝。三方に長方形の透かしが入る。色調は灰色～黒灰色、胎土精良。

抜取穴からは、土師器の杯Ａ・杯Ｃ・杯Ｈ・甕、須恵器の杯Ｈ・杯Ｇ・杯Ｂ・高杯・椀・壺・甕などが出土した。土師器甕Ｂの把手には、挿入式のものがある。土師器杯AⅢ（59）は口径13.4㎝。器表面は風化しているが、b_1手法であろう。内面には２段放射暗文を施している。口縁端部は小さく内側に巻き込む。須恵器杯Ｈ身（56）はかえり径10.8㎝、外径13.2㎝。底部外面はロクロケズリで調整する。色調は灰色である。須恵器杯H蓋（55）はまるい形態で、頂部外面ロクロケズリ、青灰色で胎土は精良。須恵器杯Ｇ蓋（57・58）のうち、57は小さなかえりをもち、かえり径9.1㎝、口径11.4㎝。色調は灰色、胎土には砂粒を含む。58は、小さいが口縁端部より突出するかえりをもつ。暗灰色の精良な胎土で、上面に灰をかぶる。須恵器杯Ｂ蓋（60）は、端部を小さく折り返す形態である。頂部外面はロクロケズリ。色調は灰白色を呈し、胎土は精良だが、焼成は不充分で軟質。

飛鳥Ⅰまでを含む整地

SB400東方の整地土出土土器　SB400東端の柱穴に先立つ整地土は、古墳時代から飛鳥Ⅰまでの土器を含んでいたが、いずれも図示しがたい。土師器には、杯Ｃ・杯Ｈ、接合部が凸帯状を呈する高杯Ｃ・甕Ｂなどがあり、須恵器には、古墳時代の杯Ｈ蓋、飛鳥Ⅰの杯Ｈ身、壺・甕などがみられる。

SB260出土土器　僧房SB260の柱穴からは土師器杯Ｃなどの細片がわずかに出土した。

創建期土坑

SK261出土土器（Fig. 91-44～49）　第105次調査中央区で検出した吉備池廃寺創建期の土坑である。土師器杯Ｃ・杯Ａ・鉢、須恵器杯Ｇ蓋などが出土した。

土師器の杯CⅡ（45）は内面に１段放射暗文、外面は横方向のミガキを施し、底部外面はナデ。橙褐色で精良な胎土。46もほぼ同様で、褐色を呈する。杯CⅠ（47）は口径16.7㎝、器高5.7㎝、b_1手法。内面に上端がわずかに左へまがる１段放射暗文を施す。底部外面はケズリで、４分割とみられる。色調は褐色、胎土精良。杯Ａ（48）はやや歪むが、口径約18㎝、器高7.1㎝、b_1手法。口縁端部は外反し、内側に内傾面をもつ。底部外面は中央を１方向、周縁を４分割のケズリで調整する。内面は２段放射暗文、口縁部外面は横方向のミガキを施す。色調、胎土は47と同様。鉢（49）の口縁はやや歪むが、口径23.4㎝、器高8.5㎝、b_1手法。底部外面はケズリ。内面に２段放射暗文を施す。色調や胎土は47と同様。須恵器杯Ｇ蓋（44）は口縁部破片だが、幅広の平らな受け部をもつ。明灰色で、胎土にはわずかに砂粒が入る。

数点の資料で先後関係を検討する無理を承知のうえで、これらを飛鳥Ⅰの新しい段階に属す

るとされている[11]山田寺下層のSD619・整地土、甘橿丘東麓の焼土層SX037、飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層、雷丘北方遺跡のSD3580、飛鳥Ⅱの基準資料である坂田寺のSG100[12]から出土した土器と比較してみよう（以下、遺跡名で略称する）。

SK261の位置づけ

まず目につくのが鉢（49）で、やや浅く平底気味の器形は、山田寺下層や甘橿丘の例が大きく開く口縁部をもつのとは異なり、飛鳥Ⅲ～Ⅳのものにも似る。しかし、全形が判明する鉢の資料は少なく、坂田寺にも底部形状が判明する個体はないことから、飛鳥Ⅰの新しい段階から飛鳥Ⅱの古い段階の頃にこのような形状の鉢がある可能性は充分考えられる。次に、これまで主に検討対象にされてきた杯類についてみると、土師器杯CI（47）は口径・器高とも山田寺下層と坂田寺の中間に位置し、飛鳥池にほぼ同じものがある。杯Cの径高指数の平均は、山田寺下層が36.0、甘橿丘が35.7、飛鳥池は34.2。雷丘北方には浅いものと深いものがあり、杯CIの深いものに限れば34.0。飛鳥Ⅱの坂田寺は33.3。これらに対して、本例（47）は径高指数34である。したがって、径高指数だけをみれば、山田寺下層・甘橿丘よりやや新しく、坂田寺よりやや古い様相ということができ、飛鳥池と同じ頃の飛鳥Ⅰの新しい段階に比定される。杯CⅡ（45・46）も、残存率が低く参考程度だが、同様な位置づけが可能である。

飛鳥Ⅰの新しい段階

以上、SK261出土土器は、飛鳥Ⅰでも新しい段階として捉えることが可能であり、飛鳥Ⅰと飛鳥Ⅱの中間的な様相をもつといえよう。しかしながら、資料数自体が少なく、土師器・須恵器の各器種を総合的に比較検討することができないので、あくまで杯Cの径高指数による位置づけにすぎないことを断わっておく。

明茶色粘質土出土土器　第111次調査北区で確認した明茶色粘質土の整地土には、奈良時代とみられる土師器杯C・ⅢAなどの破片が含まれていた。

SD350出土土器　同じく第111次調査北区にある素掘りの東西溝。上層から土師器杯A・杯C・甕、須恵器杯蓋・平瓶・短頸壺・甕などが出土した。土師器甕Bの把手には、挿入式と、貼付式で薄手幅広の奈良時代のものとがある。土師器杯Aには、口縁端部をまるく巻き込む平城Ⅲの頃のものが含まれている。また、下層の堆積土からは、土師器甕A、須恵器杯B・鉢などが出土した。土師器甕Aは、図化できないが、体部がやや寸詰まりな形態で、藤原宮期以後のものであろう。須恵器は小片のため、時期比定は難しい。

SB345～347出土土器　第111次調査北区で検出した掘立柱建物である。SB345の柱穴からは土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。年代の詳細は決めがたいが、奈良時代までは下らないだろう。SB346柱掘形からは、土師器杯・甕、飛鳥Ⅴとみられる須恵器杯B蓋が出土し、抜取穴には土師器杯・甕と飛鳥Ⅴの須恵器杯B・甕などがある。SB347では土器が出土しなかった。

飛鳥Ⅴ

SE355・356・360出土土器　第111次調査北区の井戸SE355からは、平城Ⅲに比定できる土師器杯Aなどが出土した。また、SE356には奈良時代の土器片、10世紀の土師器杯、羽釜がある。SE360では、土師器の杯・甕、須恵器の杯A・甕などのほか、須恵器杯B（Fig.93-63）が出土している。口径10.7㎝、器高3.7㎝。底部外面ヘラキリ。

SA401出土土器（Fig.93-61・62）　桜井市第9次調査で検出した僧房SB400の東にある掘立柱南北塀。柱穴から、土師器の杯C・杯H・皿・甕、須恵器の杯H身・杯G蓋・甕などが出土した。土師器杯H（61）は、底部ケズリ、口縁部ヨコナデである。土師器甕は、端部をまるくおさめる個体のほかに、口縁部の形態から藤原宮期とみなされる甕も出土した。須恵器杯H身

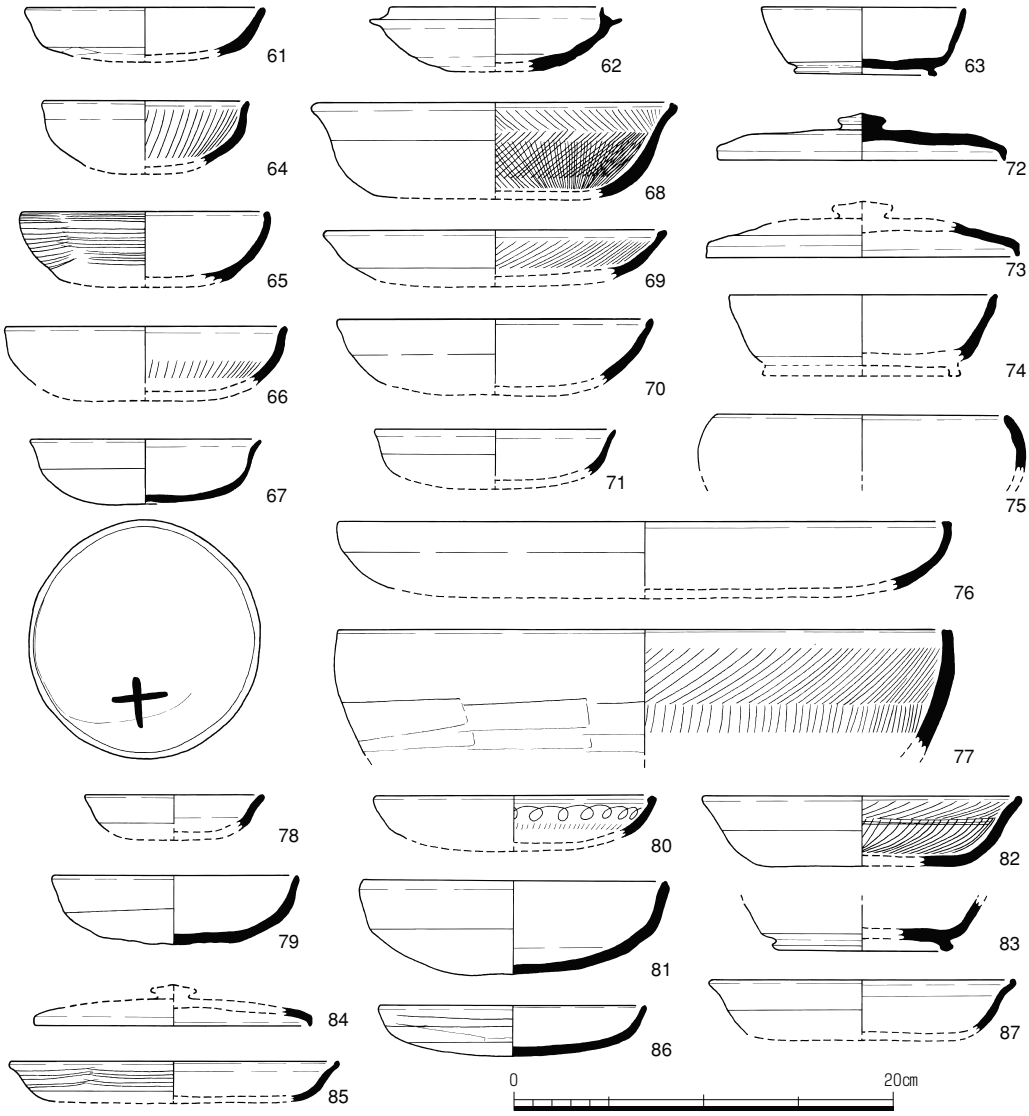


Fig. 93　僧房周辺遺構出土土器　1:4

(62) は、かえり径11.2㎝、外径13.4㎝。底部外面はヘラキリ、色調は明灰色。このほかにも、飛鳥Ⅰの須恵器杯H身がある。須恵器の杯G蓋は、図化しがたいが、頂部外面をロクロケズリ、口縁部を強くロクロナデする７世紀前半のものがある。

SD402出土土器（Fig. 93-64～77）　僧房SB400に重複する素掘りの南北溝SD402では、遺物を上層と下層に区別して取り上げたが、どちらも飛鳥Ⅴに比定できる。

飛　鳥　Ⅴ

上層出土の土師器には、杯A・杯C・杯D・杯H・皿・高皿・鉢・甕・竈・盤など、須恵器には、杯H・杯B・高杯・甕などがある。土師器杯Aは、飛鳥Ⅳ～Ⅴの形態が多い。杯AI (68) はb_1手法で、内面の暗文は、通常の２段放射暗文に加えて、下段の放射暗文を二重に施している。橙褐色で精良な胎土である。杯D (65) は内彎ぎみで、内側に肥厚する口縁部の外面に横方向のミガキを施す。色調は橙色～黒褐色で、砂粒を含む。須恵器杯B蓋 (72・73) は、いずれもかえりがない。72は口径15.2㎝、頂部に扁平な宝珠形つまみがある。色調は明灰色、胎土はやや砂粒を含み、上面に灰かぶりがある。同じく73は口径16.4㎝、頂部外面はロクロケズリ。灰色で、胎土にはわずかに砂粒を含む。

下層には、土師器の杯Ａ・杯Ｃ・ⅢＡ・高杯Ａ・甕Ｂ・竈、須恵器の杯Ｂ・鉢・甕Ａなどがある。土師器甕Ｂの把手は貼付式。土師器の杯AⅢ（71）は、口径12.6㎝、e_0手法。明橙褐色で胎土は精良。杯CⅢ（64）は口径10.8㎝、e_0手法。口縁端部は、強いナデにより外反気味につまみ出す。橙褐色で精良な胎土。杯CⅡ（66）は口縁端部に内傾面をもち、65と似た胎土である。杯Ｇ（67）は口径12.0㎝、器高3.5㎝。底部外面に「十」の墨書がある。色調は橙色、微細な砂粒を少量含む。ⅢＡ（69・70）はともに底部不調整。69は口径18.0㎝で、口縁部上端が面をなす。70は、口縁端部が内側に小さく肥厚する。同じくⅢＡ（76）は、口縁端部が内側に肥厚して、上面に平坦面をもつ。器表面は風化しているが、内面に１段放射暗文の痕跡がある。須恵器の杯BⅢ（74）は灰白色で胎土精良。杯Ｂ蓋には、かえりがない形態のものがある。鉢（77）は体部下半を横方向にケズリ、口縁部はヨコナデし、端部上面がわずかにくぼむ平坦面となる。内面は２段放射暗文。鉢（75）はまるい口縁端部をもつ。

SK404出土土器（Fig.93-78～82）　僧房SB400の南側柱列に重複する長方形土坑。土師器は杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・杯Ｇ・ⅢＡ・甕、須恵器は杯Ｂ蓋・甕などがある。土師器杯には飛鳥Ⅲ～Ⅳのものもあるが、全体としては飛鳥Ⅴに属するものが主体を占める。　**飛　鳥　Ⅴ**

土師器の杯AⅠ（82）は口径16.6㎝、器高3.7㎝。底部外面は風化のため調整不明。内面は２段放射暗文。橙褐色を呈し、精良な胎土。杯CⅢ（78）は口径9.4㎝。杯CⅡ（79・81）はともに底部外面不調整のe_0手法。79は口径12.8㎝、器高3.7㎝。褐色。81は口径12.8㎝、器高3.7㎝。風化のため暗文はみえない。黄褐色～橙褐色で砂粒を多く含む。ⅢＡ（80）は、口縁端部内側がまるく肥厚し、１段放射暗文と螺旋暗文を施す。色調・胎土は82などと共通。

SA405・406出土土器（Fig.93-83～87）　桜井市第９次調査区の掘立柱塀である。ともに出土土器は飛鳥Ⅴといえるが、小片が大半で図化は難しい。SA405からは、土師器の杯Ａ・杯Ｃ・高杯・甕Ｂ、須恵器の杯Ｂ（83）・鉢などが出土した。土師器杯Ａは灯火の痕跡をもつ個体もある。土師器甕Ｂの把手は貼付式。SA406には、土師器の杯Ａ・杯Ｃ・ⅢＡ・高杯・甕、須恵器の杯Ｂ蓋（84）・甕などがある。土師器杯AⅡ（87）は口縁端部を小さく巻き込む。表面風化のため暗文はみえない。橙褐色を呈する。ⅢＡ（85）はb_1手法とみられるが、表面風化のため詳細不明。色調は明橙褐色、胎土は精良である。ⅢＡ（86）は口径14.0㎝、器高2.7㎝、b_0手法。褐色で精良な胎土。

その他（Fig.94）　第105次調査中央区にある溝SD266・267からは、14世紀の瓦器椀、14～15世紀の白磁椀などが出土した。同じ中央区の東西溝SD268では土器が出土しなかった。桜井市第９次調査で検出した東西溝SD403には、７世紀代の土師器、須恵器などがある。

このほか、僧房周辺の包含層などから、７世紀～８世紀をはじめとして、平安時代から中・近世あるいはそれ以降の土器が比較的多量に出土した。

包含層などのため、時期比定はしにくいが、７世紀前半の遺物は次のようなものがある。土師器の高杯（98）は脚部片。ロクロ成形され、波状文を１条施す。長方形の透かしは三方に開く。色調は明橙褐色、胎土は精良。このような土師器は、山田道SD2320[13]など、飛鳥Ⅰの土器にともなう例がある。須恵器杯Ｈ身は底部外面ヘラキリのもの（89）とロクロケズリのもの（91）がある。杯Ｈ蓋（88）は頂部外面ヘラキリ、杯Ｇ蓋（90）は頂部外面ロクロケズリ。椀Ａ（92）は銅鋺を模した器形で、口縁部外面に２条の沈線があり、底部外面はロクロケズリで調整する。　**７世紀前半**

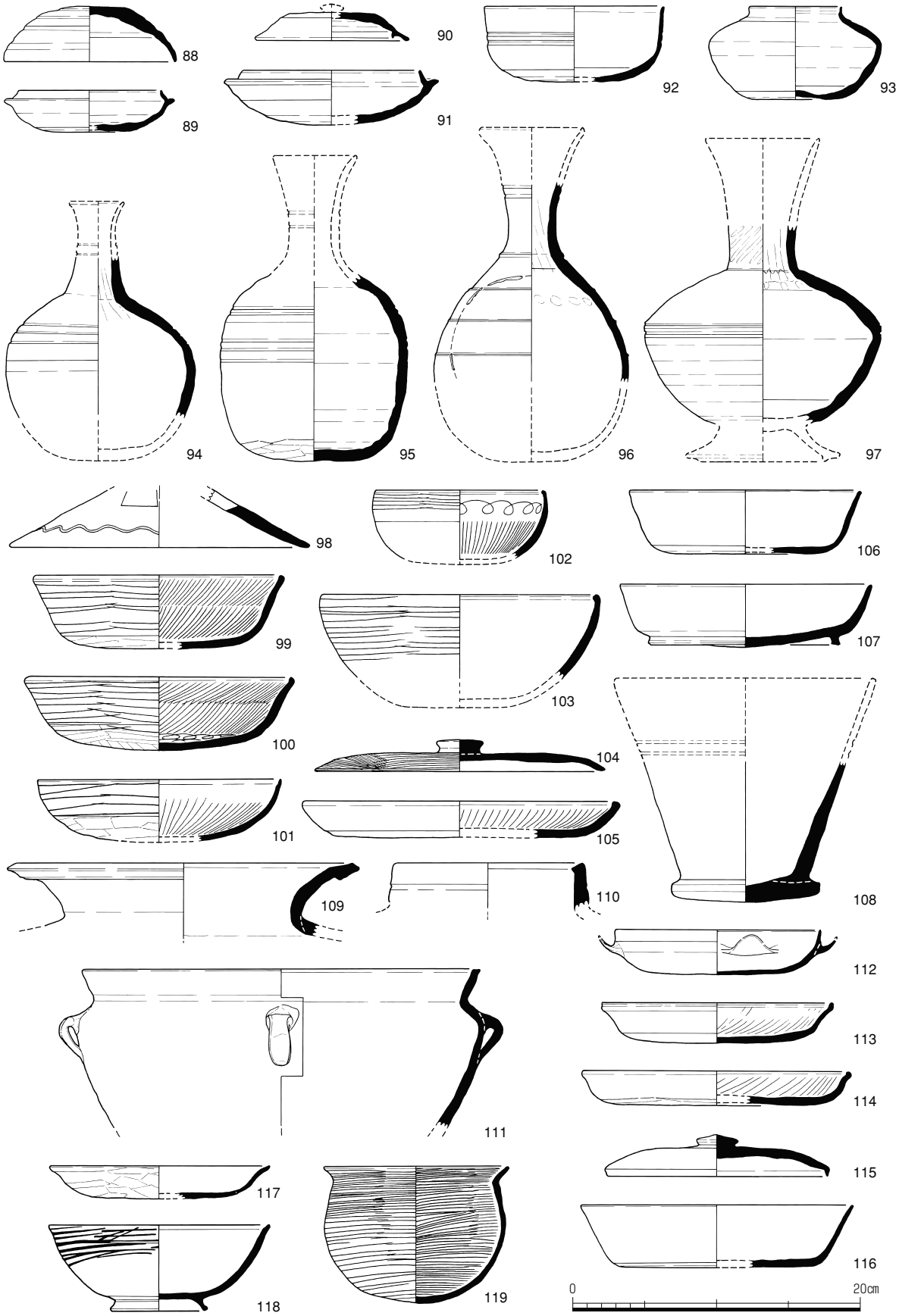


Fig. 94　僧房周辺包含層等出土土器　1:4

小型の短頸壺（93）は口径6.4㎝、器高6.5㎝で、底部外面をロクロケズリで調整している。口径7.8㎝の蓋の融着痕跡があるが、該当する蓋は出土しなかった。長頸壺（94～97）は、飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層などに類例がある。94は体部に３条の沈線があり、下半をロクロケズリで調整する。95は体部上半に５条の沈線を施す。底部外面はヘラケズリ。96は体部に小さな段が３段あり、頸部付根に１条の鋭く細い凸帯、頸部上位には２条の沈線がめぐる。金属器模倣の器形である。成形は全体をロクロナデ。体部に、壺または高杯脚とみられる口径10㎝ほどの口縁端部が融着しており、横位で焼成したことが知られる。台付長頸壺（97）は強く張った算盤玉形の体部で、肩部に２条の沈線がある。体部下半をロクロケズリしている。杯・皿など日常の器に加えて、これら須恵器の長頸壺や後述する土師器の鉢など、仏具と関係する土器が含まれている点は、寺院跡にふさわしい特徴といえよう。　**仏具と関係**

上記のほか、７世紀後半に属する土器も比較的多量に存在している。土師器杯AI（99・100）のうち、99は口径17.0㎝、器高5.2㎝、b_1手法。内面２段放射暗文、見込に二重の螺旋暗文。100は口径18.5㎝、手法や暗文は99と同様。杯CI（101）は口径16.9㎝、b_1手法。皿A（105）は口径21.3㎝、器高2.6㎝、a_0手法。皿A（112）は口径14.3㎝、器高3.2㎝。b_0手法。ケズリは口縁部近くまでおこなう。貼付式の扁平な把手があり、本来一対と考えられる。橙褐色で砂粒を含む胎土。蓋（104）は上面が平らで大きいつまみをもち、頂部のミガキは全体を５分割している。鉢（102・103）は、口縁部外面の下部をヘラケズリする。103の口径は19.0㎝。須恵器の杯AⅢ（106）は、口径16.1㎝、器高4.4㎝。底部外面はヘラキリのまま。杯BⅡ（107）は口径17.4㎝、器高4.4㎝。底部外面は、同じくヘラキリのままである。鉢F（108）は底部径10.4㎝、灰白色で、焼成はやや軟質。短頸壺（110）は口径13.0㎝、口縁端部は内傾面をもち、内側へ突出する。甕A（109）は口径23.6㎝である。甕C（111）は口径27.6㎝。肩部に左右一対の把手を貼り付ける。　**７世紀後半**

８世紀以降に下る遺物としては、土師器、須恵器のほか、黒色土器などがある。土師器の杯AⅢ（113）、皿AI（114）は、ともにb_0手法。須恵器の杯AⅡ（116）は口径18.8㎝、器高4.4㎝。底部外面ロクロケズリ。杯B蓋（115）は口径15.4㎝。これらは奈良時代中頃のものと考えられる。また、奈良時代後半以降の遺物も出土しており、土師器皿A（117）、黒色土器B類椀（118）、黒色土器A類甕（119）などがある。　**８世紀以降**

viii　北外周部（Fig. 95）

桜井市第11次調査区と第105次調査西区が相当する。

SB426出土土器（120～121）　竪穴住居SB426の埋土から、土師器高杯（120）と甕、須恵器壺が出土した。柱穴には土師器の甕、竈内には土師器の杯類・高杯G（121）・挿入式の甕B把手・甑などがある。竈内出土土器は小片だが、吉備池廃寺創建より古い時期のものとみてよい。

SB423出土土器　杯H身（122）は飛鳥Ⅰに比定できよう。他は大半が小片である。

その他　桜井市第11次調査では、切り通しSX421と南北溝SD422から、土師器甕と埴輪の破片が出土した。SB420・425、SA424では土器が出土していない。

第105次調査西区で検出した中世の溝からは、古代のものを含めて、比較的多量の土器が出土した。SD291～293は南トレンチにある流路で、SD291には９～10世紀の土師器杯、12～13世紀の瓦器椀などがある。SD292にも12～13世紀の瓦器椀などが含まれており、SD293で

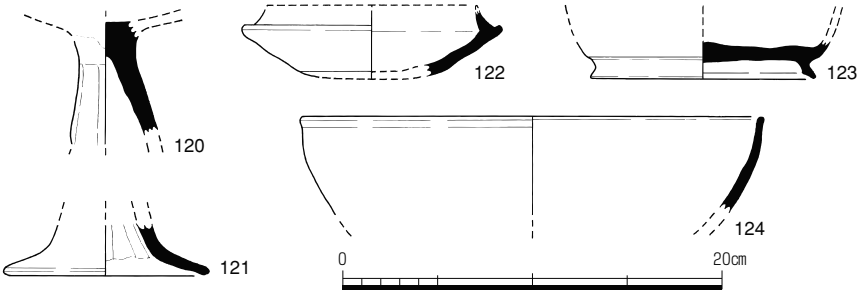


Fig. 95　北外周部・南外周部出土土器　1:4

は９世紀の土師器皿などが出土した。また、コの字形をなす溝SD285～287には、12～14世紀の瓦器椀などが含まれる。このほか、SD286・287の底面で検出したＬ字形の溝SD288～290のうち、SD288には14世紀の瓦器椀、瓦質擂鉢などがある。

ix　南外周部（Fig. 95）

桜井市第12次調査区が相当する。SD442・SX443からは土器が出土していない。

SD441出土土器（123・124）　調査区の北方で検出した東西方向の石組溝。土師器杯Ａ・杯Ｈ・甕、須恵器杯Ｂ・椀Ｃ・甕・壺がある。溝の側石の間からは、須恵器甕の体部片が１点出土した。須恵器杯Ｂ（123）は、つま先立ちの比較的高い高台をもつ底部の破片。高台径11.8㎝である。厚い底部と丸みのある腰部が特徴的で、飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけることができる。須恵器鉢（124）は口縁部がほぼ直立し、端部に面をもつ。

飛鳥Ⅲ～Ⅳ

x　特殊遺物など（Fig. 90・93・96，PL. 52）

７世紀末と奈良時代

土　馬　４点ある。第105次調査では、中央区の包含層から７世紀末頃とみられる胴部１点と脚部１点、東区の12～13世紀頃の溝SD307から奈良時代の脚部が１点出土した。また、第111次調査南区の包含層からも、折り曲げて成形した奈良時代の胴部１点が出土している。

墨書・ヘラ記号・針書土器　墨書土器は３点が出土した。そのうちの１点は、桜井市第９次調査区の藤原宮期の溝SD402からの出土。土師器杯Ｇの底部外面に「十」を記す（Fig. 93-67）。ほかの２点は中世の土器なので省略する。ヘラ記号をもつ土器は、第105次調査中央区の包含層から出土し、７世紀のものとみられる丸底の須恵器平瓶の底部外面に「×」と刻んでいる。針書土器は第111次調査南区SD180から出土した。須恵器甕の体部外面に、直交する３本の直線を刻むが、文字ではない。

円　面　硯

硯（Fig. 96-125～127）　３個体、計４片がある。第105次調査では、円面硯の破片が包含層およびそれに属する窪みから１点ずつ出土し、同一個体とみられる（125）。堤部と脚部が残存しており、長方形の透かしをもつ。なお、断片のため、図示した直径は確定的ではない。第111次調査北区においては、僧房SB340の西雨落溝SD343から円面硯の脚端部が１点（127）、同じく包含層から堤部が１点出土した（126）。127は明灰色、126は青灰色～紫灰色を呈し、焼成も異なる別個体である。

緑釉陶器・灰釉陶器（Fig. 96-128～131）　緑釉陶器は３点ある。うち１点は、第105次調査東区のSD307から出土した皿の口縁部（128）で、口縁部径13.2㎝。内外面とも、全面に淡黄緑色の釉を施し、口縁部内面には緑色の釉が部分的に残る。胎土は褐色がかった白色で、軟質。他の２点は、第105次調査中央区の包含層出土で、椀の底部である（129・131）。129は、下面に糸

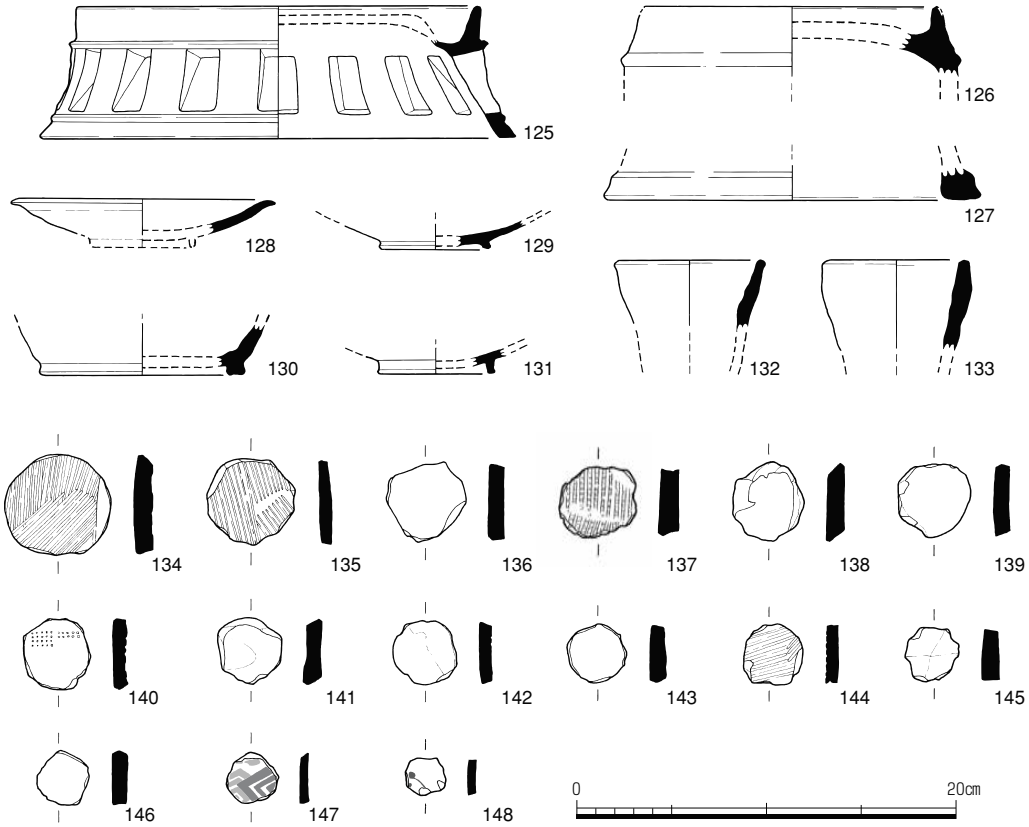


Fig. 96　特殊遺物など　1:4

切り痕が残る削り出し高台をもち、高台内側以外の全面に淡緑色の釉を施す。胎土は明灰色、焼成は須恵質で堅緻。131は貼付け高台で、内面から高台外面まで淡黄緑色の釉を施す。胎土は白～灰白色。

灰釉陶器は24点あるが、いずれも小片。第105次調査東区のSD306とSD307に壺体部が各１点、同じくSD292に壺または平瓶の口縁部片がある。ほかに壺、皿、椀が包含層などから出土した。SD306出土の壺（130）は体部外面ロクロケズリ。釉は体部から高台外面におよぶ。

白磁・青磁　白磁は、第105次調査中央区の水田床土から椀の小片が出土した。薬師寺西僧房跡出土品[14]と類似した玉縁状の口縁端部をもち、10世紀頃の製品とみられる。ほかに中世の白磁・青磁が、第105次調査中央区のSD267や包含層などから出土している。

薬師寺西僧房と類似

漆・白色物付着土器　漆付着土器５点、白色物付着土器４点が出土した。第105次調査東区では、東面回廊SC300にともなう創建期の整地土から、漆が付着した須恵器瑤が１点出土している（Fig. 90-35）。また、池内調査区の創建期整地土の土器にも漆付着の瑤破片がある。ほかに、第105次調査東区の中世の溝SD306では、漆が付着した須恵器壺と白色物が付着した須恵器甕・平瓶が出土した。上記以外は包含層などからの出土で、漆が付着した須恵器壺と平瓶が１点ずつ、白色物が付着した須恵器甕と壺が１点ずつある。白色物付着土器については尿瓶の可能性が指摘され、分析がおこなわれたことがある[15]。そこでは、白色物質がギブサイトかそれに似た物質と判明したが、尿に起因するかどうかは確定的ではない。

製塩土器（Fig. 96-132・133）　第105次調査で８点、第111次調査では156点が出土した。いずれも小片で、吉備池廃寺の遺構にともなうものはない[16]。第105次調査東区の12～13世紀頃の溝

SD306の２点以外は、すべて包含層などに属する。したがって、年代は確定しがたいが、奈良時代末～平安時代のものであろう。口径７～10cmほどで直線的に開く形態のものが主体を占め、胎土は細かい砂を多く含むものと、きめ細かい胎土に１～３㎜ほどの砂粒を多く含むものとがある。色調は灰白色から橙色を呈し、二次的な火熱を被っている。このほかに、微砂を多く含む薄手のもの、厚手で大型のもの、口縁部が屈曲して開くもの、口縁部が内彎するものなどが少数みられる。

奈良時代末～平安時代

円　板（Fig.96-134～148）　土器片などを加工した直径数cmの小型の円板が15点ある。うち遺構からの出土は２点で、１点（139）は第105次調査東区の12～13世紀の溝SD306から、もう１点（141）は第105次調査西区の14～15世紀の溝SD285から出土した。そのほかは包含層などからの出土で、吉備池廃寺の遺構にともなうものはない。転用された土器は、いずれも中・近世のもの。表側中央がよく擦れている個体があるが、油の付着や灯火の痕跡はまったく認められない。円板は縄文時代から明治時代まであるともいわれ、縄文時代と中・近世を中心として多くの研究があるものの、性格や用途は依然はっきりしない。今回の出土例からも、性格などを限定することはできなかった。

B　埴　輪（Fig.97・99，PL.53）

埴輪は調査区のほぼ全域で出土しているが、円筒埴輪33点・形象埴輪７点のあわせて40点と出土点数は少なく、かついずれも小片で、全形がわかるものはない。

円筒埴輪

円筒埴輪（Fig.97）は大きく３類に分けることができる。[17]

A　類（1～6）　外面が黄褐色～黄茶色を呈し、高い突帯をもつのが特徴で、突帯は断面が台形のもののほかに、器壁からほぼ垂直に立ち上がるものもある。外面調整は、一次調整にタテハケ、二次調整にタテハケまたはＢ種ヨコハケを用いる。断面はいずれも黒色化しており、焼成の際、内部まで熱が充分伝わっていないことがわかる。有黒斑で野焼き焼成である。出土点数は最も多く、18点を占める。口縁部（1）は端部が「く」字形に外反する。２は体部の破片で、内外面ともにハケ調整を施す。３～５は同一個体と思われる破片で、体部の径は約30cmをはかる。突帯上下を強くナデて高く鋭い突帯を形成し、目の細かいハケ原体を使ってＢ種ヨコハケを密に施す。内面調整は、上半ではナナメハケ、下半ではナデおよびオサエを用いている。円形の透孔をあけ、外面には赤色顔料を塗っている。６も高い突帯をもち、Ｂ種ヨコハケを密に施す。内面はナデ調整で、粘土紐積み上げ痕跡を残す。外面には赤色顔料を塗っている。４世紀後半～５世紀初頭。

B　類（7～9）　外面は淡茶色～黄灰色を呈する。野焼き焼成であるが、比較的硬質に焼成されており、摩滅したものは少ない。突帯はやや低く、上面の幅が広い。断面は台形または「M」字形を呈する。外面調整は、Ａ類と変わらない目の細かなヨコハケを密に施すもの（7）もあるが、目の粗いヨコハケを断続的に施すもの（8）も見られる。内面調整は、タテハケやナナメハケを用いるもの（7・8）と、ナデを用いるもの（9）がある。断面が黒色化した破片は少なく、灰黒色あるいは器壁内外面と同色を呈する。５世紀前半～中頃。

C　類（10～12）　外面が明橙色～淡橙色、断面が青灰色を呈し、窖（あな）窯を用いて硬質に焼成されている。突帯は低く、台形の断面をもつ。12はとくに突出が小さい。口縁部（10）は直立して

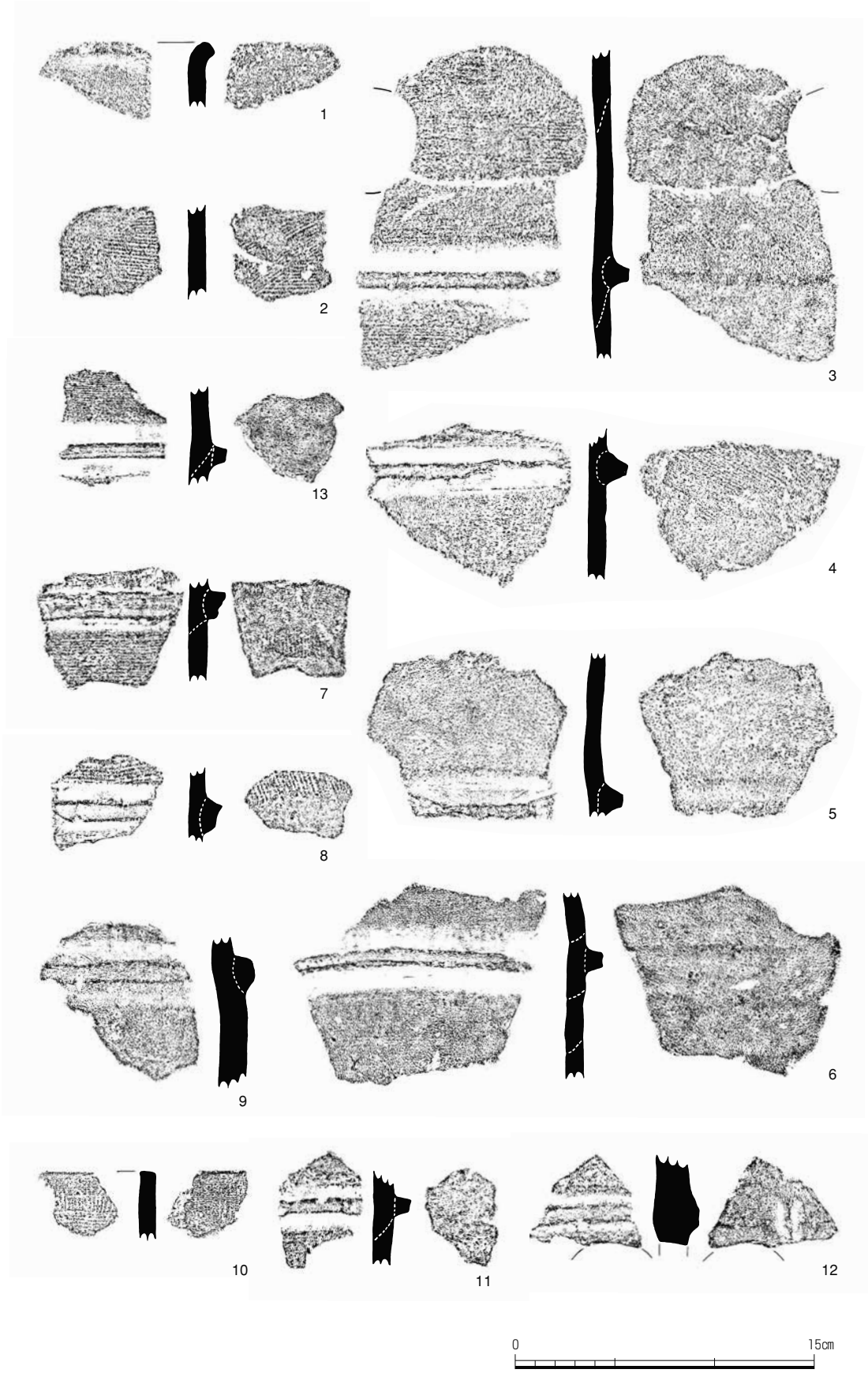


Fig. 97　円筒埴輪　1:3

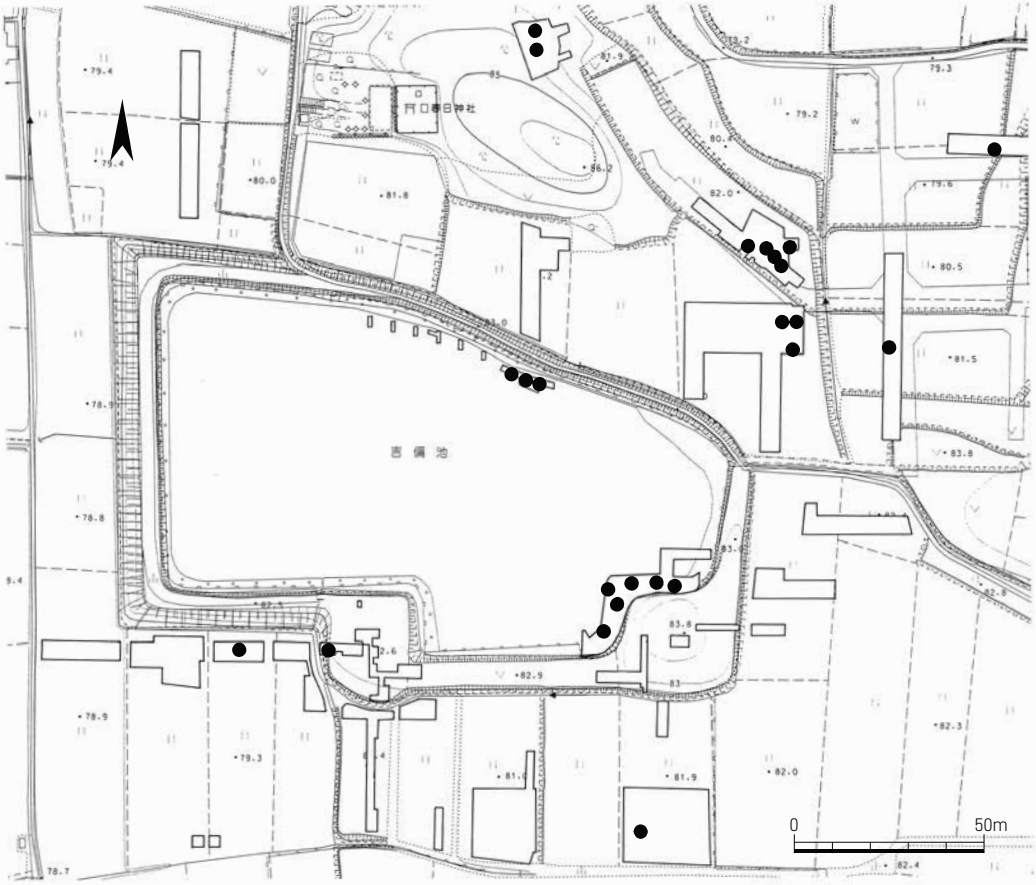


Fig. 98　埴輪の出土地点　1:2000

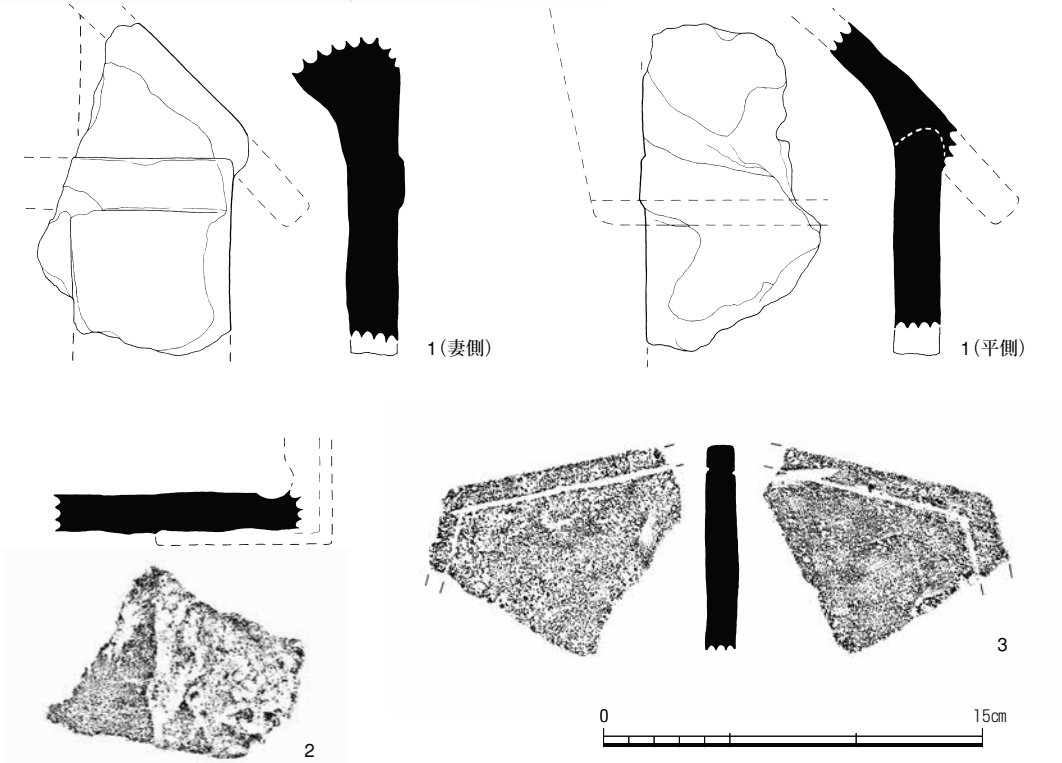


Fig. 99　形象埴輪　1:3

終わり、外面調整はタテハケ後にヨコハケを施す。内面調整は、口縁端部付近にのみヨコハケを施すほかはナデによる。11は外面をヨコハケ、内面はナデで調整している。12は、突帯にごく近接して、円形の透孔をあける。5世紀後半～6世紀前半。

形象埴輪（Fig.99）には、家形埴輪と蓋形埴輪がある。1は切妻造屋根と壁体との接合部分である。妻側には粘土板を貼り付けて、角柱と梁を表現している。2は家形埴輪の壁体角で、外面には剥離痕が見られる。この部分に粘土板を貼り付け、角柱を表現したのだろう。角の内面は、縦方向に強くナデ付けている。3は蓋形埴輪の立ち飾りである。両面とも丁寧なナデで仕上げられ、縁取りの沈線が各1条見られる。いずれの形象埴輪も黄褐色～赤褐色を呈し、軟質で、A類ないしB類のどちらかに伴うものである。 形象埴輪

なお、吉備池廃寺北方の春日神社裏山とその周辺は、従来から埴輪出土地として知られている[18]。また、戦前から奈良県下各地で考古資料を収集してきた松本俊吉が、吉備池内および周辺で採集した遺物の中にも埴輪が見られる[19]。今回の報告とも関連するため、以下、これらの埴輪について簡単に触れておこう。 吉備池廃寺近隣の埴輪

13は春日神社裏山で採集[20]した円筒埴輪で、断面が台形の高い突帯をもつ。外面は細かく密なB種ヨコハケで調整され、赤色顔料が残る。A類に属するものである。松本の収集資料の中には、A類・B類と同様、外面の二次調整に細かなB種ヨコハケを用いる円筒埴輪（目録番号K3560）や、外面の一次調整にタテハケとナナメハケを用い、二次調整を欠いたC類に含まれる円筒埴輪（目録番号K3562）、網代を表現した家形埴輪（目録番号K3559）などがある。また、桜井市文化財協会が1995年におこなった吉備池廃寺東北部の調査[21]でも、谷状に落ち込む傾斜面から埴輪が出土している。そのうち円筒埴輪は、いずれも器壁が薄く摩滅し、「ていねいな細かいハケ調整」を特徴としている。これらはA類と同様の特徴をもつ。ほかに、網代を表現した家形埴輪片もある。

以上のように、吉備池廃寺周辺では、過去の発掘調査や採集資料を含めて上記の3類の埴輪が出土し、時期差を有するものの、混在している様子がうかがえる。では、それらの埴輪はどのようにして運ばれてきたのだろうか。

第105次調査池内調査区では、吉備池廃寺創建に伴う整地層から4点の埴輪が出土している（Fig.97-5・8）。5はA類、8はB類の破片である。また、小片のため図示していないが、外面明橙色、断面青灰色を呈し、窖窯で焼成されたC類の円筒埴輪の体部片も含まれている。つまり、吉備池廃寺創建期の整地土には、A・B・C各類の埴輪が含まれているのである。ただ、A類の埴輪の中には、軟質であるにもかかわらず、ほとんど摩滅せずに赤色顔料がよく残っているものが存在する。これらは、整地土に紛れて遠くから運ばれたと考えるよりも、吉備池廃寺の近くからの流れ込みを想定するほうが自然だろう。

吉備池廃寺の周辺では、現在、埴輪をもつ古墳の存在は知られていない。しかし、藤原京内では、橿原市四条古墳群・日高山古墳群・新賀池古墳のように、宮や京の造営に伴って破壊された古墳の検出例が増えており、吉備池廃寺からさほど離れていないところにも、埴輪を立て並べた古墳が存在したと考えられる。現状では、地形が大きく改変されているため確認できないが、その候補地として、春日神社裏山の小丘陵を挙げておきたい。摩滅が少なく、大きな破片が残るA類の円筒埴輪は、それに伴うものと推定される。 吉備池廃寺北方に古墳

1）土師器の杯、皿類の調整手法は、記述の簡略化のため、以下のように記号化している。外面調整手法のうち、a手法は土器の口縁部をヨコナデし、底部を調整しない。b手法は口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリで調整する。c手法は口縁部と底部の外面全体をヘラケズリする。e手法は口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しない。また、外面にヘラミガキを施す場合があり、施す部位の違いによって区別する。0手法は口縁部も底部も磨かない。1手法は口縁部だけを磨く。2手法は底部だけを磨く。3手法は口縁部と底部の両方を磨く。a～e手法と0～3手法の組み合わせにより、a_1手法、b_0手法などと調整の仕方を表現する。なお、径高指数=器高÷口径×100、四捨五入。

2）『平城宮発掘調査報告 Ⅶ』1976年、『藤原報告 Ⅱ』1978年、『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987年、『藤原報告Ⅳ』1995年、各年度の概報など。

3）SD104を検出した第81-14次調査では、上部が削平されて土層関係が明らかでなく、近世までの土器が含まれていたことから、近世の溝と判断した。しかし、これらの土器はいずれも小片で、染付の椀、濃緑色の釉が施された須恵質の壺、摩耗した瓦器椀が1点ずつにすぎない。第105次調査東区では、層位関係から、SD105・250が創建当初の溝であることが確定している点とあわせて、重複する近世以後の遺構や包含層からの混入とみなしてよかろう。

4）『藤原概報 26』1996年。

5）『藤原概報 22』1992年。

6）調整手法の原理からいえば、条痕を伴わないハケ目調整と称することもできる。

7）『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。

8）『藤原概報 25』1995年。

9）『藤原概報 10』1980年。

10）『山田寺発掘調査報告』前掲註7)。

11）川原寺下層SD02→甘橿丘東麓SX037→飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層・雷丘北方遺跡SD3580→坂田寺SG100という変遷が提示されている。なお、山田寺下層のSD619・整地土出土の土器は、杯Cの径高指数や底部のケズリなど、甘橿丘より古い要素をもつものが主体だが、新しい要素をもつ個体もあるので、飛鳥池遺跡と同じ頃にまたがる内容をもつとみなされている。したがって、山田寺下層は、甘橿丘・飛鳥池より古い土器を中心としつつ、その下限は飛鳥池遺跡と同じ頃にあると捉えるべきで、年代の近似値としては641年が与えられる（『藤原概報 25』前掲註8)、『藤原概報 26』前掲註4）参照)。本稿で比較している径高指数などは、主体を占める古めの土器の様相ということになる。

12）『藤原概報 3』1973年。

13）『藤原概報 20』1990年。ただし図示していない。

14）『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年。

15）村上　隆・佐藤昌憲・黒崎　直「土器などに付着した白色物質 ―小便容器の可能性を探る―」『トイレ遺構の総合的研究 ―発掘された古代・中世トイレ遺構の検討―』（科学研究費補助金研究成果報告、研究代表者：黒崎　直）奈文研、1998年。

16）第111次調査北区では、156点中6点が藤原宮期の遺構として取り上げられたが、これまで、藤原宮期にこのような製塩土器は確認されていない。混入であろう。

17）円筒埴輪の編年・調整技法などの名称は、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1978年に準じた。

18）文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 奈良県』1990年では、「埴輪出土地」として登録されている(3-2321)。奈良県の遺跡地図番号は14-B-23。

19）奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和考古資料目録 第12集』1985年。目録番号は、同書に記載されているものである。

20）1998年9月22日、台風7号による強風で春日神社裏山の木々が倒れ、神社本殿が倒壊した。埴輪はその際の踏査で、倒れた木の根元から採集したものである。

21）清水真一「吉備池遺跡第6次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財 1995年度発掘調査報告書 1』桜井市文化財協会、1996年。

3　石製品・土製品・金属製品ほか

A　石製品（Fig. 100，PL. 54）

吉備池廃寺から出土した石製品類には、サヌカイト製品としてナイフ形石器１点、剥片24点、石核４点、石鏃２点があり、ほかにチャート製剥片１点、太形蛤刃石斧２点、砥石９点、有孔石板１点、碁石かと思われる扁平な丸石７点などがある。サヌカイト製剥片には、被熱したもの２点を含む。そのほか、凝灰岩片7.51kg、流紋岩質溶結凝灰岩（榛原石）片21.11kg以上、砂岩片4.45kg以上、被熱した礫2.30kg、石英と長石7.80kg以上、メノウ片１点（10g）などがある。

出土状況をみると、サヌカイト製品は主として北側の小丘陵周辺に分布し、桜井市第９次調査（以下、「調査」を略す）で５点、同第11次で13点（ナイフ形石器を含む）、第105次中央区で６点出土した。ほとんどが後世の溝や柱穴、整地土、耕土などから出土し、原位置を保つものはない。砥石の多くは第105次中央区、第111次北区から出土している。被熱した礫は第111次北区に比較的多く、なかでも創建時整地土に含まれるものが0.5kg以上あり、後述する工房に関わる可能性がある。同様に、砂岩についても、第111次北区の整地土とSB340柱掘形から全体の半分以上（2.24kg）が出土し、工房に関わる砥石の素材が含まれている可能性がある。榛原石は、第105次中央区・西区と第111次北区では各々１～３kg程度と少なく、第105次東区と第95次南区はそれぞれ６kg前後である。第105次東区の榛原石の多くは包含層ないしSD306・307から出土したが、SD305にもわずかに含まれ、第95次南区では石溜を形成していた。石英類は、第111次北区からの出土が5.85kgと圧倒的に多く、うち2.7kgあまりがSB340柱掘形からの出土。凝灰岩は第95・111次南区SD180から半分以上の4.32kgが出土し、第105次中央区・西区で１～1.5kg前後、塔周辺と第105次東区・第111次北区では0.5kg前後しか出土していない。

ナイフ形石器

ナイフ形石器１は、サヌカイト製で風化が進んでいる。縦長の剥片を素材として、先端を斜めに切り取るように整形し、その側縁と刃部となる側縁の下半部に主要剥離面側からブランティングを施し、横断面が台形に近い、厚みのあるナイフ形石器に仕上げたもの。基部の剥離調整は、石材の質によるのであろうか、大きく抉れるようになっている。ほぼ完形で、長さ3.3㎝、幅1.3㎝、厚さ0.8㎝、重さ3.0g。桜井市第11次のSB423の西側柱列北から２基めの柱穴より単独で出土。これまで奈良県内では、二上山北麓以外に、ナイフ型石器の単独発見例がいくつか知られており[1)]、今回、本例を加えることとなった。本遺跡に最も近い位置での出土例に、桜井市阿部丘陵遺跡群の横長剥片を素材としたものが１点ある[2)]。また、縦長剥片を素材としたものとして、河合町フジ山古墳付近採集品[3)]、天理市布留遺跡出土品[4)]がある。２は二次剥離のある**チャート製剥片**。青灰色を呈する。片面には中央部に大きく原礫面ないし節理面を残し、他面にはわずかながら主要剥離面をとどめる。周縁部全体を両面から細かく剥離調整する。背面では左上縁部に打点を残し、また、腹面では右下縁部から左側縁部にかけて広く打点が認められる。ほぼ完形で、縦2.2㎝、横1.9㎝、重さ3.0g。桜井市第11次覆土出土。

石鏃

石鏃３は無茎凹基式で、サヌカイト製。基部の抉りが浅く、側縁は不整な直線状をなす。整形・調整がやや粗く、左右の脚は大きさが不揃いである。長さ2.0㎝、幅1.7㎝、重さ1.0g。第105次中央区床土出土。**石鏃**

Fig. 100　石製品・土製品・金属製品　1:2

4は無茎凹基式で、サヌカイト製。基部の抉りが深く、身の中央付近まで入る。側縁は直線的である。整形・調整が丁寧で、全体に形が整い、左右の脚も大きさが揃っている。長さ2.0㎝、幅1.6㎝、重さ0.58g。塔心礎抜取穴出土。**太形蛤刃石斧**5は、刃部と基部を欠失した、基部に近い身部片である。表面は丁寧に研磨される。重さ389.0g、残存長7.5㎝。石材は砂岩。金堂西南隅耕土出土。**碁石**かと思われる扁平な円形の小石は、いずれも表面が平滑になっており、径が1～2㎝程度である。11は白色の小石で、径1.1㎝、厚さ0.6㎝、重さ約1g、整った円形を呈し、やや厚みがある。石材は石英。第95次南区SK189出土。12は不整な円形ないし楕円形を呈し、中央がわずかに窪む灰黒色の小石。径1.3㎝、厚さ0.6㎝、重さ約1g。石材は砂岩。第95次南区SK189出土。13は灰褐色を呈する小石で、平面形は楕円形。径1.47㎝、厚さ0.4㎝、重さ約1g。材質は確定できないが、塩基性凝灰岩か。第105次西区SD291出土。**有孔石板**6は四辺が折損しており、元の形態は不明。残存長5.6㎝、最大の厚さ0.7㎝、重さ17.0gある。穿孔は両面から行うが、断面図の上面方向からが深く、径もやや大きく0.8㎝あり、他面では径0.6㎝。下面がやや摩滅しており、あるいは提砥として使用されたものかもしれないが、確証はない。表面に鉄分が付着し、摩滅も著しいため確定できないが、石材は流紋岩ないし粘板岩か。第105次東区SD307出土。**砥石**は、現状で大・中・小型の別がある。7は大型品で、横断面が台形を呈し、一端がやや細くなる方柱状に石材を粗割して、長側面を砥面としたもの。砥面は3面あり、1面は全体を内湾するまで使用しているが、他の2面は一部を使用しているにすぎない。長さ11.7㎝、幅5.0㎝、厚さ4.8㎝。重量291.0g。砂岩製。第105次中央区包含層出土。8は中型品で、扁平な砥石。両小口が割れているが、使用中あるいは使用後の欠損なのか、粗く整形したものなのかは判然としない。割れ面を除き4面が砥面として使用される。長さ4.3㎝、幅4.0㎝、厚さ1.7㎝。重量47.0g。砂岩製。第105次東区包含層出土。9は扁平な砥石先端部の破片で、全形は不明ながら、厚さなどから考えて中型品とみられるもの。現状では、外湾する砥面が1面のみ認められ、その裏は自然面を残す。緩く弧を描く縁辺部以外は割れて欠失する。残存する長さ4.0㎝、幅3.3㎝、厚さ1.0㎝。現存の重量15.0g。黒色片岩製。第105次西区出土。10は五角形を呈する小型の砥石。平らな石材の側面をやや急角度で粗く打割して五角形に整形し、側面を砥面とするものだが、うち1面は使用されていない。未使用面は、あるいは指を添えるために残されていたのであろうか。頂部および底面は打割した面ないし自然面のままである。砥面はいずれも内湾している。長さ3.3㎝、幅2.9㎝、厚さ1.4㎝、重量13.0g。流紋岩製。僧房SB340南側柱列東から2基めの柱掘形出土。出土状況から、後述する創建以前の工房に関わるものと推定される。

太形蛤刃石斧

砥石

B　土製品など（Fig. 100，PL. 54）

吉備池廃寺から出土した土製品などには、坩堝（るつぼ）2点、とりべ2点、羽口片40g以上、不明土製品1点、炉壁かと見られる焼土片1点があり、ほかに冶金関連遺物として、椀形滓を含む鉄滓0.19㎏がある。そのほか、焼土5.45㎏以上、粘土熔融物少量、粘土小片少量などが出土。小片が多く、図示できるものは限られている。

冶金関連遺物

焼土は、北側の小丘陵周辺の調査区、とくに第111次北区に集中し、全体の約68％に相当する3.75㎏の出土があった。とりわけSB340東端部の焼土溜SX357付近での出土量（計2.45㎏、全

体の約45%）が多い。焼土のうち、寺院創建時の整地土に含まれるものは明らかに創建以前に属し、上層の包含層に含まれるものの一部もこれに由来するだろう。後述する冶金関連遺物の出土状況から考えると、焼土の一部は工房に関わる可能性がある。焼土は、ほかに第105次西区でも比較的多く出土した。また、鉄滓は、第111次北区と第105次東・西区で出土した。

とりべ19は、口縁部から胴部にかけての破片で、内外面とも灰色に焼けて硬化している。胎土には砂粒を含む。小片のため必ずしも明らかではないが、口縁の直径は24㎝程度と推定され、口縁部の厚さ2.2㎝前後の比較的大型のとりべと考えられる。僧房SB340の西雨落溝SD343上層出土。**坩堝18**は、口縁部から胴部にかけての破片。内外面ともに灰色に焼けて一部ガラス化し、硬化が著しい。胎土には砂粒を含む。口縁部の厚さ3.0㎝前後とかなり厚手で、破片のため明確ではないが、直径24㎝前後とみられる、かなりの大型品である。第105次東区包含層出土。このほかに、図示していないが、僧房SB340の北雨落溝SD341から、片口の付くとりべ口縁部片が、また、第111次北区の創建時整地土から、緑青を吹いた鉱滓が付着する小型坩堝口縁部片が出土している。冶金関連遺物は、少量ながら第111次北区に比較的集中して認められ、出土層位などから、創建以前の工房が付近にあった可能性がある。

創建以前の工房

C　金属製品（Fig.100，PL.54）

吉備池廃寺から出土した金属製品には、青銅鏡片（乳断片、第105次中央区包含層）１点、銅鈒（か）具（こ）１点、鉄釘12点（第105次の僧房SB260柱穴から１点、包含層その他から11点）、鉄座金１点（第95次西区包含層）、鉄刀子かと思われる破片１点（第111次北区包含層）、鉄不明品小片５点、球形鉛製品１点、富壽神寶１点、寛永通寶１点（桜井市第11次包含層）などがある。

鈒　　具

16は銅製の**鈒具**である。表面は腐蝕し、銅地金が露出あるいは土中の砂粒が付着し、もともと漆膜あるいは鍍金等があったのかどうかは不明。長さ4.4㎝、幅4.3㎝、現存重量39.3g。外枠と刺金と軸の３部品から構成される。外枠は、いわゆるＣ字形の縁金と基部の横棒が一体で鋳造されたもの。別鋳の刺金は、元部付近から先端が折損し失われるが、「Ｔ」字形で、装着用の軸を通すために横軸部が中空となっている。軸は、刺金が枠に錆着した現状では材質・製作法等を肉眼で確認できないが、Ｘ線写真（PL.54-16右）では両端を丸く収めた棒状を呈する。鋳造後、軸を通した刺金を装着するに際し、枠を外側から押圧したようで、枠全体が一方へやや歪む。第105次東区包含層出土。いわゆる「Ｔ字形刺金」を備える鈒具の類例は多くないが、長野県などを中心に十数例が知られており、用途について鈒帯（かたい）か馬具かで議論がある[5)]。本例は、製作技法を別にすれば、一、二を除いて既出例と大きさや形態が酷似し、制作・流通年代や用途が共通することが推察できる。奈良時代から平安時代にかけてのものだろう。ちなみに、本例の出土地点に近いほぼ同一土層から、馬の臼歯が出土している。包含層のため、共伴とみてよいか、にわかに判断しかねるが、本鈒具の用途を考えるうえで注意される。鉄製品には図示できるものが少なく、ここでは２点を掲げておく。**17**は断面方形の**鉄棒状品**で、一端を扁平に鍛造成形し、わずかに屈曲させる。折損のため他端は失われている。折損する部位に向かってわずかながら細くなる。何らかの工具あるいは折頭釘の未成品かもしれない。現存長12.9㎝、扁平部位の幅1.0㎝、身部の幅0.8～0.6㎝、現存重量41.0g。桜井市11次覆土出土。**14**は**折頭釘**。腐蝕が進行し、かつ先端部を欠失するが、ほぼ全形をうかがえる。頭部は扁平に鍛造成形する

Ｔ字形刺金

ことなく、方形の断面形を保ちながら鋭角をなして短く屈曲する。現存長6.2㎝、頭部幅1.9㎝、身中央部幅0.7㎝。現存重量13.9g。第111次北区耕作溝出土。**球形鉛製品15**は、わずかに破損が認められるが、ほぼ完形品。表面は酸化して淡い灰白色を呈する。鋳造品で、鋳型の合わせ目が水平の細い稜線となって残存する。その稜線は玉の中央部ではなく、上方に偏っている。また、玉の側面も球形というよりは多角形に近く、現状で８本の稜線が認められ、八角以上になるものらしい。全体として、半球状の底部をなす八角柱形の身部に、扁平な半球状の頭部が載るような外観を呈する。銃弾であろうか。重さ11.8g、直径1.24㎝。第81−14次表土出土。

20（PL.54）はいわゆる皇朝十二銭のひとつ、**富壽神寶**である。腐蝕が進み、錆のため表面には砂粒が付着する。上部には穴があき亀裂が入り、鉄分が付着して「富」字部分を覆う。腐蝕と付着砂粒のために他の銭文も判然としない。径2.35～2.40㎝、内郭0.65～0.70㎝、現存重量1.9g。第105次東区出土。　富壽神寶

D　木製品（Fig.101，PL.55）

木製品には、楔２点、たたり１点、留針１点、曲物底板２点、斎串（いぐし）１点、角材状ないし板状などの品目不明な部材７点、柱根等４点、杭２点、加工木などがあり、ほかに第105次東区のSE312・313の井戸枠用曲物４点がある。遺存状態が悪く、図示できるものは少ない。曲物枠は脆弱なため、取り上げを断念した。年輪年代の測定が可能なものはない。

遺構別に見ると、第95次南区のSD162から加工木、SD180から部材・杭・加工木、第95次西区のSK217から加工木、SE220から加工木、SD225からたたり、SD226から杭・加工木・留針・部材など、第105次東区のSD305から楔・加工木、SD306から加工木、SE311井戸枠抜取穴から曲物底板・加工木、SE313から加工木、第111次南区のSE330から斎串・部材、第111次北区僧房SB400の北側柱列東から３基めおよび６基めの柱掘形より柱根（樹種コウヤマキ）、第105次中央区と東区の包含層中から楔や加工木などが、また創建以前の包含層中から柱根かと思われる丸木片（樹種マキ）が出土した。SB400出土の柱根は、長さが17～19㎝、幅11～14㎝、厚さ10㎝足らずで、腐蝕が著しく進行した小木片と化している。

2は**楔**。先端部を欠失し、頭頂部が摩耗する。刃に相当する部分は身部よりも細く仕上げる。腐蝕のため加工痕は不鮮明。長さ11.0㎝、幅1.7㎝、厚さ1.1㎝、樹種はヒノキ。第105次東区のSD305出土。**6**は腐蝕が著しく、形が崩れているが、ほぼ全形をうかがえる。平面形は縦16～17㎝、横20㎝程度の長方形で、４側面は高さ約12.5㎝の長方体の上部1/3を斜めに削り落とし、台形とする。頂部に長さ約６㎝、幅約４㎝の長方形孔を穿つ。孔は上半部が垂直に穿たれ、下半部は下へ向かって外方へ広がり、底部へ貫通して方約10㎝となる。やや小振りながら、その形態は大阪府久宝寺南遺跡出土のたたりの台に類似する[6]。柱部分が出土しておらず、断言はできないが、上述した形態の類似性からみて、ここでは一応**たたり**の台としておく。第95次西区のSD225出土。樹種はヒノキで横木取り。**留針４**は、細長い棒状の材の側面全体を細かく削り、先端を一方から斜めに切り落とし、頭頂部を丸くおさめたもの。加工はそれほど丁寧ではなく、全体にやや湾曲している。長さ15.1㎝、直径0.5㎝。樹種はヒノキ。**3**は**曲物底板**。推定の直径17㎝、厚さ約0.6㎝で、全体のおよそ1/4の破片。現状では、樺皮綴孔や側面に側板を固定する木釘孔は認められず、あるいは蓋板か。一面に刃物痕が多数残る。第105次東区のSE　たたり

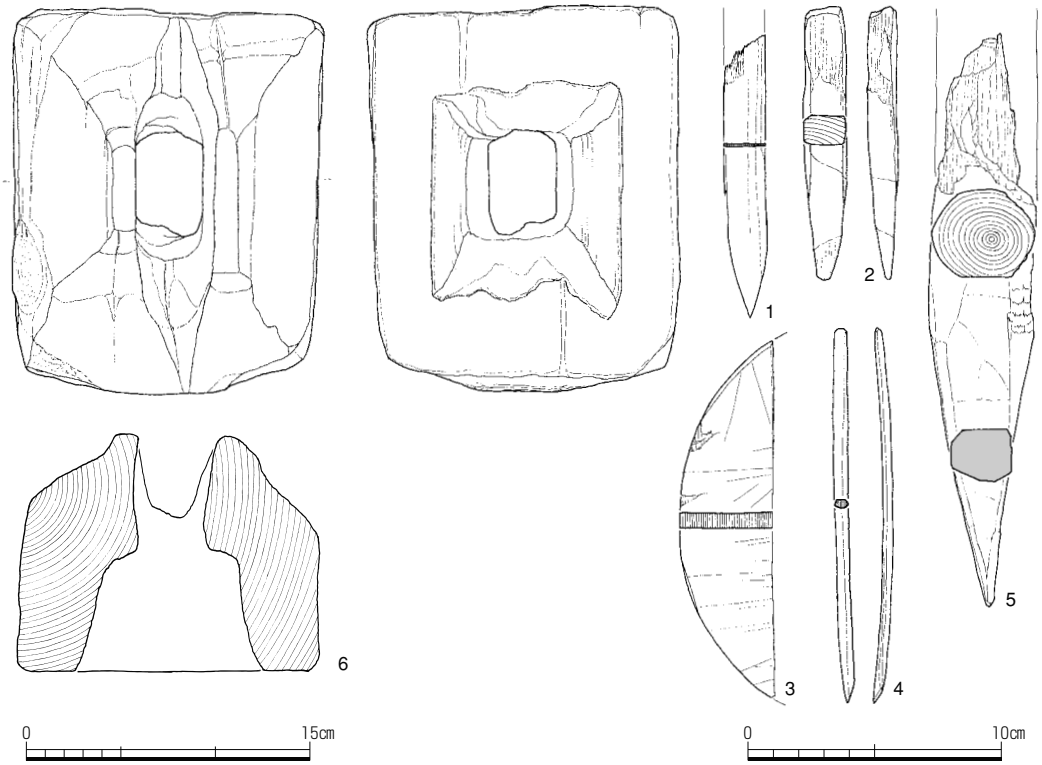


Fig. 101　木製品　1:3（6のみ1:4）

311井戸枠抜取穴出土、樹種はヒノキ。同じ遺構から出土したもう１点の曲物底板は、腐蝕が著しく図示していないが、直径約16㎝あり、樹種はヒノキ。1は薄く細長い板の一端が剣先状に尖る**斎串**で、上端部は欠失する。頭部の形態と切り込みの有無および形状が不明であるが、ここでは斎串に含める。残存長11.3㎝、幅1.7㎝、厚さ約0.1㎝。樹種はヒノキ。第111次南区SE330出土。5は**杭**の先端部。残存長23㎝。直径約４㎝の丸材先端部を長さ約11㎝にわたり、粗く四角錐状に削剥したもの。第95次西区SD226出土。樹種はモミ属。

E　動・植物遺存体（PL.55）

動・植物遺存体には、獣骨や獣歯0.85kg、鼈甲（べっこう）かと思われる微小片、少量のクルミとモモの種などがある。種子は第105次東区のSD305・306や包含層などから出土した。また、獣骨、獣歯は第95・111次南区SD180、第105次東区SD306・307、同西区SD292、第111次北区のSX357などから出土した。全体として腐蝕・風食が著しく、腐蝕が比較的進んでいないものでも細片化しており、種を識別できるものが少ない。上述の第105次調査東区の包含層から出土した馬の臼歯２点（7・8）のほか、SD180から馬の左大腿骨１点が出土している。

馬歯と馬骨

1）有本昭子「竹内遺跡採集のナイフ形石器」『旧石器考古学』59、旧石器文化談話会、2000年。
2）清水真一・佐藤良二「奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』37、旧石器文化談話会、1988年。
3）吉村公男・深瀬早人・佐藤良二「馬見丘陵におけるナイフ形石器の一例 －奈良県河合町フジ山古墳付近採集－」『旧石器考古学』39、旧石器文化談話会、1989年。
4）島田政則・北村博義「天理市布留遺跡出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』40、旧石器文化談話会、1990年。
5）冨永里菜「馬具の革金具」『銙帯をめぐる諸問題』奈文研、2002年。
6）上原真人編『木器集成図録　近畿原始篇』奈文研史料第36冊、1993年。

第Ⅴ章　考　　察

1　寺名比定とその沿革

A　吉備池廃寺と百済大寺

吉備池廃寺の性格　以上、吉備池廃寺における発掘調査の成果を報告してきた。ここに、飛鳥時代としては並はずれた規模の金堂と塔が建っていたこと、中門・回廊や僧房をはじめとする関係施設も相当に充実していたことは、もはや動かしがたい。また、個々の建物だけではなく、回廊の東西長をはじめ、伽藍全体もきわめて大規模であったことが明らかとなっている。

詳細については次節以下で論じるが、飛鳥時代の主要寺院と比較すると、吉備池廃寺の金堂は、山田寺（桜井市山田）の実に2.8倍、藤原京の官寺である本薬師寺（橿原市城殿（きどの）町）に比べても1.7倍の基壇面積をもつ。これを越える規模の金堂は、文武朝に国家筆頭の官寺として大官大寺（明日香村小山）が建立されるまで存在しない。さらに、塔に関してはその巨大さがいっそう際だっており、吉備池廃寺の塔は、同時代の他の寺院にくらべて、実に４～７倍の基壇面積を有している。これに比肩しうる塔は、やはり文武朝大官大寺の九重塔しかない。

巨大な金堂と塔の基壇

したがって、吉備池廃寺の性格については、その規模からも、一豪族の氏寺とは考えられない。この点でも、吉備氏の氏寺としての吉備寺にあてる説は成立しえないだろうし、近隣に本拠をもつ阿倍氏の氏寺と考えるのも、その氏寺たる安倍寺（桜井市阿部）が別に存在する事実とあわせて、無理があろう。吉備池廃寺とほぼ同時期の氏寺としては、大化改新後に右大臣となった蘇我倉山田石川麻呂の発願による山田寺があるけれども、吉備池廃寺の伽藍や堂塔は、山田寺はもちろん、のちの官寺である川原寺（明日香村川原）や本薬師寺をもはるかに凌ぐ規模を有しているのである。やはり、天皇（大王）家にかかわる寺院と考えざるをえない。

天皇家に関係する寺院

また、吉備池廃寺の位置は、当時、宮室が集中した飛鳥地域にも近接している。天皇家関係の寺院であればなおのこと、それに関わる記録は残りやすいはずである。とすれば、吉備池廃寺を、史料上の寺院の中に求めうる可能性はひじょうに高いとみてよい。

百済大寺への比定　そこで、有力な候補として浮上してくるのが、百済大寺である。この寺は、『日本書紀』と『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『大安寺縁起』）が、ともに舒明11年（639）の創立と伝える、日本最初の勅願寺であった。寺地の移転を伴う複雑な沿革をたどるが、その法燈は、高市大寺・大官大寺を経て、今の大安寺に伝わっている。

百済大寺の所在については、現在の広陵町百済周辺に比定するのが古くからの通説であった。しかし、この一帯で、それに該当する遺構や瓦の出土は知られていない。一方、香具山の北西麓一帯に百済大寺を比定する見解もあり[1)]、吉備池廃寺同笵の瓦を出土する木之本廃寺（橿原市木之本町）は、近年、その有力な候補となっていた。

吉備池廃寺の軒瓦（=木之本廃寺の軒瓦）については、本章の「4 出土瓦をめぐる諸問題」で詳述するが、それらの年代は、まさしく百済大寺の年代と合致する。というより、現状で、百済大寺の軒瓦は、ほかに求めがたいのである。これらを百済大寺のものとする見解は、山崎信二によって最初に提示されたが[2]、以後、瓦の研究者が例外なくこの説を支持する[3]のは、決して理由のないことではない。今までは、木之本廃寺を含めて、寺院跡としての明証を欠いていたけれども、それが実際に、しかも並はずれた規模の遺構として確認された以上、吉備池廃寺が百済大寺である可能性は、考古学的には否定しがたいだろう。

百済大寺か

また『大安寺縁起』によれば、百済大寺は、天武２年（673）に高市の地に移建されて、高市大寺となっている。『日本書紀』も、同年の造高市大寺司任命を伝えており、これらの記事は史実と考えられるが、それを裏づけるように、吉備池廃寺における瓦の種類や出土量は、そこで命脈を絶った寺院のものとしてはあまりにも僅少である。そのうえ、圧倒的に小片が多く、再用に耐えるような製品はほとんどない。よって、短期間のうちに、別の場所へ移転したことはほぼ疑いなく、吉備池廃寺で出土する瓦は、その際に廃棄された不要品とみてよい。史料に見える高市への移建とまさに符合するものといえよう[4]。

移建は確実

以上、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性はきわめて高いと考えられる。ただし、百済大寺や高市大寺については、主として史料に基づく研究の蓄積があり、上記の推定の妥当性を確認するためには、それとの整合性を含めた検証作業が不可欠となる。以下、とくに百済大寺の所在をめぐる既往の学説との関わりを中心に、この問題を考えてみることにしたい。

B　百済大寺・高市大寺の沿革

百済大寺の創立　まず、百済大寺と高市大寺の沿革を簡単に振り返っておこう（Tab.7）。

天平19年（747）勘録の『大安寺縁起』によると、大安寺の歴史は、聖徳太子の羆凝（くまごり）寺に始まるとされる。けれども、この部分は後代の仮託であって、事実とは認められない[5]。すでに詳細に論じられているように[6]、『日本書紀』『大安寺縁起』が一致して舒明11年（639）の創立とする百済大寺をその淵源とみるのが、現在、ほぼ定説となっている。

百済大寺は舒明朝創建

『日本書紀』によれば、百済大寺は、舒明の詔により、百済宮と対になるかたちで創建された。天皇の発願による最初の寺院であり、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」とあるように、広汎な地域から動員がおこなわれたことがうかがえる。そして、いずれの史料も、「百済川の側」に九重塔が造立されたことを伝えている。奈良時代以前に九重塔をそなえていたことが史料に明らかな寺院は、これと後身にあたる大官大寺の二つだけである。

なお、『大安寺縁起』には百済宮の記事が見えないが、これは、撰録者が、『日本書紀』と共通の原史料から、百済大寺関係の記事だけを採ったためとみてよいだろう[7]。一方、『大安寺縁起』のみに見えるものとしては、建立の際に子部社を切り開いたため、社神の怨みにより九重塔と金堂の石鴟尾が焼失し、舒明は崩御にあたって、皇后である皇極に寺の再建を遺勅したという、説話的な記事がある。

しかし、舒明が百済宮で死去したのは、百済大寺の発願からわずか２年３ヵ月後の舒明13年（641）10月のことである。したがって、上記の記事を根拠に、舒明創建の百済大寺が焼失し、皇極朝に再建されたとする見解があるけれども[8]、舒明朝のうちに、そこまで堂塔が建ち上がっ

Tab. 7　百済大寺・高市大寺の沿革

年　（西暦）	記　　事	出　典	備考
舒明11年（639）	大宮と大寺をつくる。百済川のほとりを宮処とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県をその大匠とする。 百済川のほとりに九重塔を建てる。	日本書紀	百済大寺
	百済川のほとりに子部社を切りひらいて、九重塔を建てる。百済大寺と号す。 社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鴟尾を焼破。	大安寺伽藍縁起并流記資財帳（以下、縁起）	
舒明12年（640）	舒明、百済宮に移る。	日本書紀	
舒明13年（641）	舒明、百済宮で死去。宮の北で殯をおこなう。	日本書紀	
皇極元年（642）	百済大寺を建てるために、近江と越の人夫を動員。	日本書紀	
	阿倍倉橋麻呂と穂積百足の二人を造此寺司に任命。	縁　起	
皇極２年（643）	皇極、飛鳥板蓋宮に移る。	日本書紀	
大化元年（645）	恵妙法師を百済寺の寺主とする。	日本書紀	
	孝徳、難波に都を遷す。	日本書紀	
白雉元年（650）	丈六・脇侍・八部など36体の繡仏を造らせる。	日本書紀・縁起	
白雉２年（651）	丈六の繡仏などが完成する。	日本書紀・縁起	
斉明元年（655）	斉明（皇極）、飛鳥板蓋宮に重祚。	日本書紀	
天智７年（668）	丈六釈迦仏像ほかの諸像を百済大寺に安置する。	扶桑略記	
天武２年（673）	天武、飛鳥浄御原宮で即位。 美濃王と紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命する。	日本書紀	高市大寺（天武朝大官大寺）
	御野王と紀臣訶多麻呂の二人を造寺司に任命する。 百済の地から高市の地に寺を移す。	縁　起	
天武６年（677）	高市大寺を改めて、大官大寺と号す。	縁　起	
天武11年（682）	大官大寺で140人あまりを出家させる。	日本書紀	
天武14年（685）	大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経をよませる。	日本書紀	
持統８年（694）	持統、藤原宮へ移る。	日本書紀	
大宝元年（701）	造大安寺官と造薬師寺官を寮に準じさせる。 造塔官と造丈六官を司に準じさせる。	続日本紀	文武朝大官大寺
大宝２年（702）	高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命する。	続日本紀	
文 武 朝	文武、九重塔と金堂を建て、丈六の仏像を造らせる。	縁　起	
和銅３年（710）	元明、平城宮へ移る。	続日本紀	
和銅４年（711）	大官大寺焼け落ちる。	扶桑略記	
霊亀２年（716）	（大安寺を）平城京左京六条四坊へ移し建てる。	続日本紀	大安寺
神護景雲元年（767）	高市郡高市里の古寺地西辺の田２町など、大和・摂津・山背の計６町の田を大安寺に献入する。	類聚三代格	
元慶４年（880）	百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地である十市郡百済川辺の田１町７段160歩と高市郡夜部村の田10町７段250歩を、大安寺の願い出によって返還する。	日本三代実録	

ていたとは考えがたい。その時点では、百済大寺の堂塔は一つとして完成にいたっていなかったとみるべきである[9]。こうした火災を含む説話的な記事が『日本書紀』にまったく認められないこととあわせて、これを史実と考えるのは無理であろう[10]。両者の史料的価値の差については多言を要しまいが、『大安寺縁起』にしかない記事の信憑性を『日本書紀』と同等に扱うことによって組み立てられる論理には、根本的な危うさがあると言わざるをえない。

塔の焼失は史実でない

ところで、この九重塔造立については、まったくの虚構とみる説[11]と、史実を伝えるものとする説[12]とが対立している。しかし、史実と認めがたい『大安寺縁起』の焼失記事を取り去れば、これを含む舒明朝以後の造営に関して、『日本書紀』と『大安寺縁起』の語る記事は、相互に補完するかたちで、ほぼ一致している点が注目される。

造営の再開

すなわち、『日本書紀』によれば、皇極元年（642）9月には、百済大寺造営のために、近江と越の人夫を動員しており、これは、阿倍倉橋麻呂と穂積百足の二人を「造此寺司」に任じたという『大安寺縁起』の記事とも対応する。前年の舒明の死によって頓挫した造営の再開を示すものとみてよいだろう[13]。そして、大化元年（645）8月には、寺主として恵妙が任命され（『日本書紀』）、白雉2年（651）3月には、皇極の命により前年10月に製作を開始した36体の繡仏が完成している（『日本書紀』『大安寺縁起』）。さらに、天智7年[14]（668）には、のちの大安寺金堂本尊となる丈六仏ほかの乾漆像が、天智によって施入された（『大安寺縁起』『扶桑略記』）。したがって、少なくとも、こうした造像と施入がおこなわれた時点で、それをおさめるべき堂宇は、ほぼ完成していたと考えざるをえない。

また、以上の記事は、百済大寺の造営の継続とその進捗状況を示す一連の記録として、つながりがきわめてスムーズである。『大安寺縁起』が『日本書紀』を参照することなく成立したと考えられる[15]点とあわせて、両者に一致する記述内容は、史実を伝えるものと理解すべきであろう。百済大寺の造営は、舒明・皇極から天智へとつづく皇統によって継承され、比較的順調に進展したとみてよい[16]。

順調な進展

よって、百済大寺における九重塔の存在についても、これを潤色とする理由は乏しく、舒明朝における起工は事実と考えるのが妥当だと思う。また、舒明は、あえて蘇我氏の勢力基盤から離れた場所に、百済大寺と百済宮を建設した可能性が高いが[17]、その場合、天皇家の寺として創建された百済大寺は、蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺（明日香村飛鳥）に対する強烈な対抗意識の産物とみることができる。飛鳥寺をはるかに凌ぐ九重塔は、そのシンボルにほかならないだろう。なお、こうした大規模な塔の系譜は、以後、文武朝大官大寺の九重塔、さらに大安寺の2基の七重塔へと受け継がれており、百済大寺以来の伝統と推定される[18]。

高市への移建と文武朝の造営　天武2年（673）、百済大寺は、百済の地から高市の地に移されて、高市大寺となる。『大安寺縁起』には、同年12月の御野王と紀臣訶多麻呂の「造寺司」任官と高市移建記事が見え、『日本書紀』も同様に、美濃王と紀臣訶多麻呂の「造高市大寺司」任官を記す。天武がこの年の2月に飛鳥浄御原宮で即位していることから、これらが飛鳥浄御原宮に近接した場所への移建措置であったことは確実であろう。

高市大寺へ

なお、『大安寺縁起』によれば、その後ほどなく、天武6年（677）には大官大寺への改称がおこなわれている。『日本書紀』でも、これ以降は大官大寺の呼称に統一されており、地名に基づく従来の寺名からの転換が図られたことがうかがえる[19]。そして、天武9年（680）には、官司

の治める「国の大寺たるもの二三」として、高い寺格が保証された。この「大寺」とは勅願寺のことであって、その第一号としての百済大寺・高市大寺・大官大寺は、例外的に寺名に「大寺」の呼称を含む特別な扱いがなされたのである。[20)]

文武朝大官大寺の造営

一方、『続日本紀』には、文武朝における「大安寺」（大官大寺）の造営を示す記事がある。『大安寺縁起』にも対応する記録があることから、この時点で新たな伽藍の造営がおこなわれたことは疑いの余地がなく、それは発掘調査によっても裏づけられる。

すなわち、明日香村小山に基壇を残す大官大寺は、文武朝の建立にかかるものであって、高市大寺（天武朝大官大寺）ではないことが明確となった。伽藍の中で最初に造営された金堂基壇とその下から、藤原宮期の土器が出土したのである。[21)]また、この伽藍は、藤原京の条坊に完全に則っている。[22)]藤原京条坊の施工は、早くとも「新城」造都記事の見える天武５年（676）以後と推定されるので、[23)]この点からも高市大寺とは考えられない。

高市大寺は、移建年次から考えても、藤原京条坊とは無関係の伽藍であったはずであり、またその経緯からみると、百済大寺をほぼそのままのかたちで移建した可能性が高いと思う。[24)]とすれば、藤原京第一の官寺としては不充分なものであったことは想像に難くないだろう。文武朝の大官大寺の造営は、それを藤原京の条坊にあわせた大伽藍へと脱皮させるための措置として理解できるのである。

なお、文武朝大官大寺の伽藍は、完成を間近に控えて焼失したことが、発掘調査で確認されており、『扶桑略記』和銅４年（711）条の大官大寺焼亡記事を裏づけている。

C　百済大寺の所在

所在を示す史料　百済大寺や百済宮の位置を具体的に示す史料は限られており、確実に信頼がおけるのは、『日本書紀』『大安寺縁起』が一致して伝える「百済川の側」に建てられたという記録にすぎない。ただし、『大安寺縁起』のその部分には、子部社を切り開いて九重塔を建てたとあり、『日本三代実録』元慶４年（880）10月20日条にも、百済大寺が子部大神の近傍にあったとする記事が見える。後者は、百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地の返還を願い出た大安寺三綱牒の中に見えるもので、この申請は朝廷の認めるところとなり、十市郡百済川辺の田１町７段160歩と、高市郡夜部村の田10町７段250歩が、大安寺に返入されている。

百済川の側

子部社近傍

これらによって、百済大寺の近辺に子部社が存在したこと、百済大寺が十市郡の百済川のほとりに存在したことは、事実と考えてよいだろう。[25)]もちろん、『日本三代実録』の記事は、厳密には、大安寺が返還を要求した土地の位置を示すものであって、百済大寺や高市大寺の位置を正しく伝えていない可能性はある。[26)]しかし、廃絶後の時間的な経過や、大安寺との地理的な隔たりが、正しい所伝を全く失わせるほど大きいものだったとは思われない。とくに、過去の寺地に大規模な基壇が形をとどめていたとすれば、何らかのかたちで、そうした記憶は残されていたと考えるのが自然ではないか。朝廷がこの申請を認めている点とあわせて、これらは百済大寺の所在を示す史料と判断してよいと思う。

既往の学説　通説では、百済川を現在の曽我川にあて、その西方、鎌倉後期の三重塔の建つ北葛城郡広陵町百済を百済大寺の旧地としてきた。この曽我川を隔てた東は十市郡に属し、現在、そこに子部神社も鎮座する。また、『万葉集』の高市皇子の殯宮挽歌には、葬列が「百済の原」

広陵町説

を経て、「木上宮（城上殯宮）」へと向かう姿が歌われており（巻２－199）、「百済の原」を百済大寺近辺、城上殯宮を広陵町内に比定しうるとすれば、両者の位置関係にも無理がない。

しかしながら、広陵町一帯では、それらしい瓦や遺構は全く見つかっていない。瓦葺の寺院の場合は、少なくとも瓦の散布というかたちで、その存在の徴証は得られるのが普通であり、この点が通説の大きな弱点である。さらに問題となるのは、広陵町百済の地が、十市郡でなく広瀬郡に属したことで、『日本三代実録』の記載とは齟齬をきたしてしまう。

和田萃説　そこで、これに対して疑問を呈したのが、和田萃である。和田は、橿原市高殿町に「東百済」「百済」「西百済」の地名が残り、「百済川」という小河川も存在することから、香具山の北西の一帯に百済大寺を比定する説を提起した。そして、城上殯宮についても、阿倍山田道に沿った明日香村の「木部」（明日香村飛鳥）に求める。[27]

この説は、多くの賛同者を得て一時定説化するが、その後、さらにこれに対する反論が提示される。なかでも、通説に立つ平林章仁の反論[28]は詳細だが、和田説の最大の問題点は、持統10年（696）に死去した高市皇子の葬列が通過したという「百済の原」が、遷都２年後の藤原京内、それも宮内かそのごく近辺となってしまうことである。宮内は論外としても、その間近の都市的な様相を示していた地域を、「百済の原」と呼んだとは考えられない。また、明日香村の「木部」の一帯は、当時京内と意識されていた可能性が高く、死穢を避ける喪葬令皇都条の規制により、そこに皇子や皇女の殯宮が営まれることはなかっただろう。[29]以上、こと「百済の原」と城上殯宮の位置に関して、和田説は成立しがたいと思う。

城上殯宮の所在　こうしたなかで、近年、城上殯宮の所在に関する新説が、渡里恒信によって提示された。[30]『日本書紀』の武烈３年11月条に「城の像を水派邑に作れとのたまふ。仍りて城上と曰ふ」と見えることから、「水派邑」や用明２年（587）４月丙午条の「水派宮」を寺川と粟原川の合流点付近に求め、城上殯宮もその一帯に想定するものである。この近辺には、２ヵ所に「木部」の小字名も残っている（城上郡二十二条二里三十・三十一坪、現桜井市上之庄。十市郡路東二十三条六里八坪、現桜井市東新堂）。[31]

渡里恒信説

一方、『万葉集』には、題詞を欠くものの、同じく高市皇子の殯宮挽歌と推定される一群があり、そこでは、葬列が「城於の道」を通り、「石村を見つつ」、殯宮へ向かったことが歌われている（巻13－3324）。[32]前者は、城上殯宮への道の意味であろうが、後者の「石村（＝磐余）」は、「第Ⅱ章１　調査地域」で述べたように、吉備池廃寺の一帯を含むか、その南ないし南西に隣接する地域の呼称であったと推定される。したがって、高市皇子の宮であった香具山宮から、「百済の原」を経て城上殯宮へ至る道筋の途中に位置することになり、これは葬列が「石村を見つつ」通過したという歌詞とも整合してくる。

もっとも、磐余については、吉備池廃寺よりさらに北東に比定する説もあるけれども、[33]いずれにしても、香具山からみて北東方向にあたることは確実であり、香具山宮を発した葬列が北東へ向かったことは間違いないだろう。その場合、香具山から北西方向の広陵町に城上殯宮を求める通説では、北東へ向かう理由を説明しがたいのに対し、渡里説はこうした葬列のコースをもっともよく説明しうる。周辺の青木廃寺（桜井市橋本）や宗像神社（桜井市外山）などが、高市皇子やその子の長屋王との強い結びつきを示している事実[34]とあわせて、城上殯宮や長屋王家の「木上司」が渡里の比定地に存在した可能性は高いと考える。[35]

百済大寺の所在　城上殯宮の位置を以上のように想定すると、おのずから、「百済の原」は吉備池廃寺の一帯に求められることになる[36]。百済大寺の所在を十市郡と記す先の『日本三代実録』の記事を考えあわせれば、地理的にも、百済大寺を吉備池廃寺に比定する説は、通説であった広陵町（旧広瀬郡）百済説以上に有力といえるだろう。吉備池廃寺の一帯が、古代から一貫して十市郡に属していたことは、確実だからである。

百済大寺は十市郡所在

また、子部神社は、現在、橿原市飯高町に鎮座するが、それが古代の位置を伝えるという確証はまったくない。逆に、この東方でおこなった発掘調査では、西北西へ向かう、13世紀頃に埋没した幅200mにおよぶ河川の存在が確認されており[37]、子部神社の社地を含むこの地域の条里の乱れは、そうした古い時期の曽我川や飛鳥川の流路であったことが明らかとなっている[38]。つまり、現在の子部神社の位置は、古代まで溯りえないのである。

一方、吉備池廃寺では、金堂土壇の東方に「カウベ」「コヲベ」、北側の小丘陵に「高部」という小字名が残る[39]（Fig.32）。これらは、『大安寺縁起』や『日本三代実録』の記事から百済大寺近傍に想定される「子部社」「子部大神」との関連をうかがわせるに充分であろう。上記の地名は、かつてそこに子部神社が存在したことを強く示唆するものとみてよい[40]。

子部社に関わる小字名

さらに、「第Ⅲ章１ 遺跡の立地と地形」で述べたように、寺域の南寄りの部分は、現在の米川の旧河道にあたっており、吉備池廃寺が河川の北側に立地していたことは、事実として確かめられる。それが、『日本書紀』と『大安寺縁起』が百済大寺の所在を「百済川の側」と伝える「百済川」に相当することは間違いないだろう。

以上、「百済大寺=吉備池廃寺」説にとって支障となる要素はほとんどないことが確認できたと思う。吉備池廃寺は百済大寺と考えて誤りあるまい[41]。

百済大寺は吉備池廃寺

D　高市大寺の所在

所在を示す史料　それでは、百済大寺を移建した高市大寺はどこにあったのだろうか。前述のように、明日香村小山の大官大寺は、文武朝の造営によるもので、その下層に前身寺院が存在した徴証はまったくない。高市大寺が別地に存在したことは確実である。

これに関して、『大安寺縁起』は、百済の地から高市の地へ移したと記すのみであるが、先の『日本三代実録』には、大安寺に返入された旧寺地として、高市郡夜部村の田10町７段250歩が見える。これは、返還の申し立てをおこなった大安寺三綱牒の「高市大官寺」の寺地にあたるものと考えられる[42]。

この「高市大官寺」という呼称を、高市大寺と大官大寺を兼ねた大安寺による創称とみて、それぞれの寺地が区別されていないのは、両者が隣接した位置関係にあったことを示すとする見解がある[43]。その可能性は高いだろう。少なくとも、高市大寺と文武朝大官大寺はともに夜部村に含まれ、ごく近接した位置関係にあったと考えておきたい。

高市大寺は夜部村所在

なお、夜部村は、『和名類聚抄』の「高市郡遊部郷」に相当するとみられるが、範囲については明らかでない。ただ、『日本後紀』大同元年（806）４月庚子条には、「大宮に直に向かへる野倍（山辺）の坂」という歌が引かれている。同じ歌は『日本霊異記』下巻第38話にも見え、また『万葉集』にも、「屋部の坂の歌」と題された別の歌がある（巻３－269）。

この「屋部の坂」は、香具山から南に下る中ツ道の坂とする見解もあるが[44]、「大宮に直に向か

へる」という表現から、藤原宮の南正面に位置する日高山丘陵の坂と解するべきだろう[45]。「大宮」を平城宮とみる説もあるけれども、この歌意に該当する坂は平城京には存在せず、藤原京でも、日高山丘陵を下る朱雀大路の坂以外には求めがたいからである。

木之本廃寺と奥山廃寺・小山廃寺　以上のように、高市郡夜部村は、文武朝大官大寺から北西の日高山丘陵を含む範囲であって、高市大寺もそのなかに存したと推定される。以下、この周辺でそれに該当する可能性をもつ寺院について検討しよう（Fig. 102）。

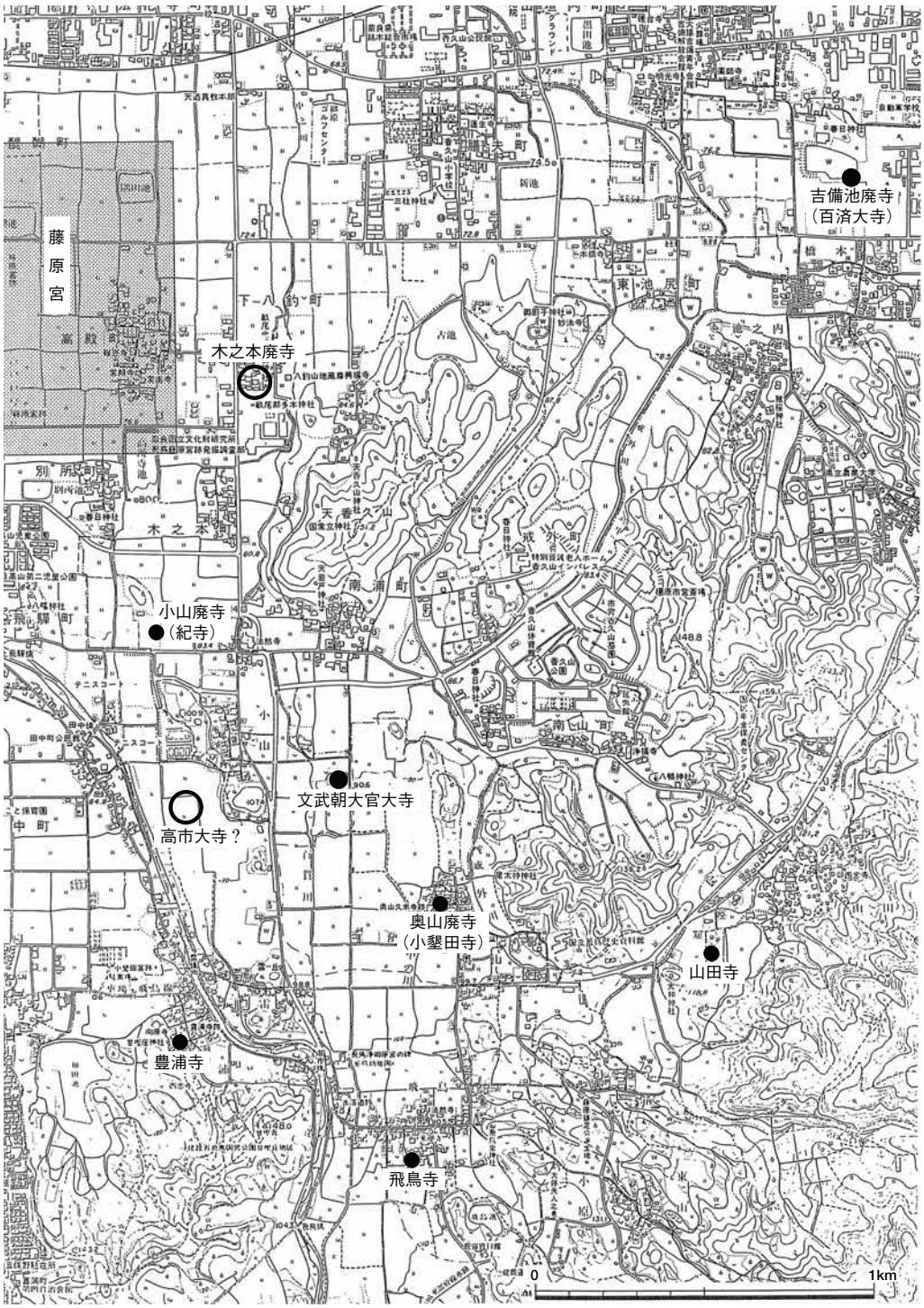


Fig. 102　吉備池廃寺・文武朝大官大寺と周辺の寺院　1:20000

まず、吉備池廃寺と同笵の瓦を出土する木之本廃寺が、高市大寺の候補の一つであることは否定できない。ただし、寺院跡であることを示す遺構は、今のところ検出されていない。

また、木之本廃寺の周辺は、十市郡と高市郡の郡界が錯綜しており、古代にいずれに属したか即断できないものの、中世以降は確実に十市郡に属しており、この点が高市大寺にあてる場合の障害となる。そのうえ、『日本三代実録』の記事との関係では、先述の想定とは異なり、文武朝大官大寺との間が離れすぎてしまう。木之本廃寺の性格については未詳とせざるをえないが、これを高市大寺にあてるのは困難だろう。

このほか、高市大寺に関しては、奥山廃寺（奥山久米寺、明日香村奥山）に比定する見解[46]や、小山廃寺（紀寺、明日香村小山）にあてる説[47]が提示されている。しかし、奥山廃寺は、瓦の年代が高市大寺に合致せず[48]、むしろ小墾田寺（小治田寺）に比定するのが妥当と思われる[49]。また小山廃寺は、伽藍規模が小さいうえに、藤原京の条坊に合致することから、高市大寺とは考えがたい[50]。金堂基壇の面積でも、小山廃寺は吉備池廃寺の1/3に満たないのである。

高市大寺の所在　以上のように、上記の三寺院はいずれも高市大寺に該当する可能性は乏しいが、もう一つ、寺院の存在を想定できる場所がある。文武朝大官大寺の西方、飛鳥川との間の平坦地（明日香村雷）である。残念ながら発掘調査がほとんどおこなわれていないため、不明な部分が多いけれども、この周辺からは、大官大寺と同笵の瓦のほかに、四重弧文軒平瓦、凸面に布目をもつ特徴的な平瓦などがみつかっている[51]。

大官大寺西方の平坦地

注目されるのは、それらと共通する瓦が、平城京の大安寺でも出土するという事実である。つまり、ここから大安寺へ瓦を運んだ状況が復元され、前身にあたる寺院がこの地に存在したことをうかがわせる[52]。とすれば、年代的に文武朝大官大寺に先行する瓦の存在とあわせて、それを高市大寺にあてることは充分に可能だろう[53]。

高市大寺か

そこで、史料にもう一度目を向けると、文武朝大官大寺が中心伽藍以外にも別に寺地を有していたことについては、次のような史料的裏づけがある。

すなわち、『類聚三代格』巻15の神護景雲元年（767）12月1日太政官符には、大安寺に献入された6町の田のうち、「路東十一橋本田」と「路東十二岡本田」の計2町が、高市郡高市里の「専古寺地西辺」に存したと見える[54]。これらは、大官大寺の西方、飛鳥川との間の平坦地である路東二十八条三里十一坪（字サコツメ）と十二坪（字フケノツボ）に比定することができる[55]（Fig. 103）。したがって、寺地はそこまで広がっていたと考えてよい。

「専古寺地西辺」

また、『日本三代実録』が返入を記す夜部村の田の面積は、藤原京の条坊で6町を占めた文武朝大官大寺の中心伽藍の範囲に近いが、厳密にはそれより小さい。便宜的に、条坊制1町と条里制1町の一辺の比を5：4（375大尺：300大尺）とすると、両者の面積比は25：16となり、大官大寺の寺地6町は条里制の9町3段270歩に相当するが、旧寺地として返還された10町7段250歩には達しない。また、この場合の条坊制6町の面積は条坊計画線間の数値で、実際の寺地は、それから外周の道路部分を減じたものとなる。一方、条里制1町の面積は、畦畔や溝渠を含んで、より広くなることが確認されている（300大尺は、実長で約106mであるのに対し、条里制1町の一辺長は約109m）。したがって、文武朝大官大寺の寺地6町を正確に条里水田に換算すれば、その面積は、これよりもさらに小さくなる。両者の差が、中心伽藍以外の寺地の存在を示すことは確実だろう。

さらに、『大安寺縁起』には、大和国にあった５ヵ所の庄の一つが「高市郡古寺所に在り」と見える。『日本三代実録』の記事が、これや神護景雲元年（767）の献入地を除いた寺地の返還を示すものだとすれば、大官大寺の寺地は、さらに大きかったことになる。

以上のように、文武朝大官大寺は、中心伽藍の西方、飛鳥川との間にもかなりの寺地を有していた。路東二十八条三里十一坪と十二坪を含むこの一帯には、前述のごとく、文武朝大官大寺より年代的に先行する大安寺と共通の瓦が分布しており、前身である高市大寺の伽藍そのも

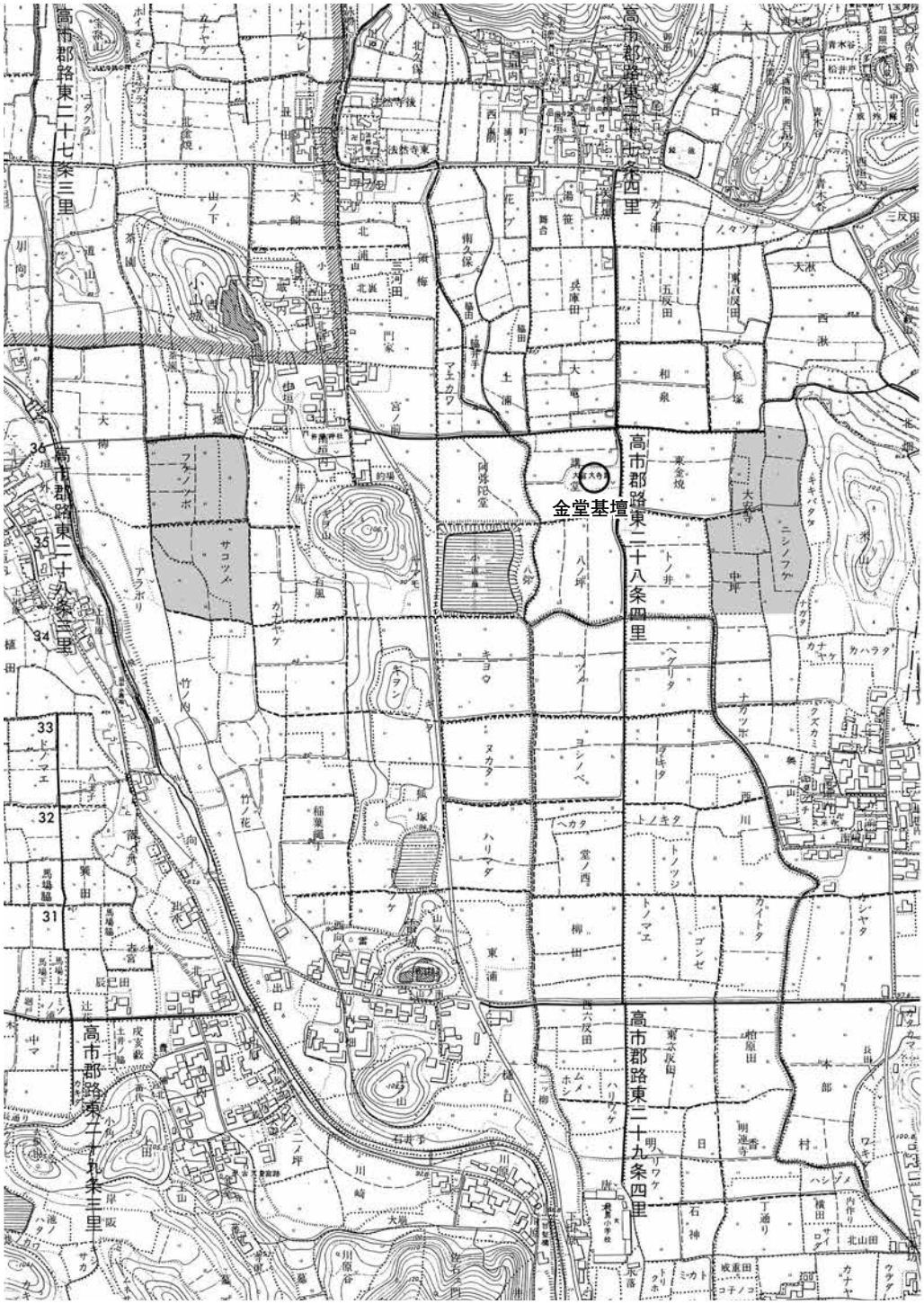


Fig. 103　文武朝大官大寺周辺の条里と小字　1:8000（『大和国条里復原図』に加筆）

のが存在した可能性がきわめて高いと思う。[56)]

「高市里」

とくに注目したいのは、先の太政官符にみえる路東二十八条三里の「高市里」という里名である。高市大寺という寺名が、郡名としての高市に基づくのではなく、百済大寺と同様、狭域地名に由来することは確実とみられるが、その「高市」地名がここに存在する意義は大きいと言わざるをえない。高市大寺は、この路東二十八条三里「高市里」に求めるべきであろう。[57)]

もっとも、現状で、この場所から吉備池廃寺と同笵の瓦の出土は見られず、建物基壇の存在も未確認である。高市大寺の実態の解明は、吉備池廃寺の調査が百済大寺への比定を可能にしたのと同様に、今後の発掘調査に俟つ部分が大きい。

1）和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰　上』塙書房、1995年、5～83頁（初出1969年）。和田 萃「百済宮再考」『季刊明日香風』第12号、飛鳥保存財団、1984年。

2）山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎出版、1983年、註148。

3）大脇 潔『飛鳥の寺』日本の古寺美術 14、保育社、1989年、162～191頁。毛利光俊彦「仏教の開花」『新版古代の日本』第6巻 近畿Ⅱ、角川書店、1991年。花谷 浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻第2号、考古学研究会、1993年。菱田哲郎「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5、名著出版、1994年。上原真人『瓦を読む』歴史発掘 11、講談社、1997年、85～86頁。森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局、1998年、117～136頁（初出1994年）。岡本東三『古代寺院の成立と展開』日本史リブレット 17、山川出版社、2002年、44～52頁。

4）小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。

5）福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書院、1948年、15～30頁。また、聖徳太子（廐戸皇子）が、わが子である山背大兄王をさしおいて田村皇子（舒明）に後事を託したというのは不自然であり、百済大寺の造営開始が舒明即位11年後というのも、太子の委託によるものとすれば遅きにすぎる（黛弘道「聖徳太子と大安寺と日本書紀」『東アジアの古代文化』102号、大和書房、2000年）。

6）水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』吉川弘文館、1993年、159～225頁。

7）塚口義信「百済大寺に関する基礎的考察 －『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』所載の焼失記事を中心として－」『日本書紀研究 第十八冊』塙書房、1992年。

8）森 郁夫「百済大寺 －吉備池廃寺をめぐる問題点－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 Ⅰ』帝塚山大学考古学研究所、1998年。

9）大橋一章「百済大寺造営考」『美術史研究』第19冊、早稲田大学美術史学会、1982年。ちなみに、皇極元年（642）7月庚辰条には、降雨祈願のため、蘇我蝦夷が「大寺」の南庭に仏像を安置し、衆僧を集めて法会を営んだという記事がある。この「大寺」を百済大寺と解する見解がしばしば見受けられるが、法会の主宰者が蝦夷であることや、『日本書紀』における「大寺」の用例からみて、蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺を指すと判断して誤りない（大橋一章「大寺考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第41輯第3分冊、早稲田大学大学院文学研究科、1996年）。百済大寺が、その時点で法会を営むことができる状況にまで、造営が進行していたことを示す史料とはなりえないのである。

10）発掘調査でも、金堂や塔の焼失をうかがわせる痕跡はまったくない。ただし、僧房SB340・SB400の柱掘形には明瞭な焼土の混入がみられるが、これらは寺院造営に先行する冶金関係の工房に関わる可能性が高い（146頁）。周辺部で火災がなかったとは断言できないけれども、『大安寺縁起』の記事を伽藍中枢部の焼失に結びつけるのは無理であろう。

11）星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」『法政大学大学院紀要』第16号、法政大学大学院、1986年。星野良史「大化改新後の百済大寺」『古代国家の歴史と伝承』吉川弘文館、1992年。

12）大橋一章「百済大寺造営考」前掲註9）。塚口義信「百済大寺に関する基礎的考察」前掲註7）。

13）舒明死後の殯は百済宮の北で挙行され、「百済の大殯」と称された。このすぐ近辺で槌音高く工事がおこなわれるはずもなく、百済大寺の造営が、その間中断していたことは疑いない。

14）この年次は『扶桑略記』による。

15）水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』前掲註６）、159～225頁。星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11)。塚口義信「百済大寺に関する基礎的考察」前掲註７）。
16）大橋一章「百済大寺造営考」前掲註９）。
17）舒明の正宮であった飛鳥岡本宮は、舒明８年（636）に焼失する。その後、舒明は蘇我氏の本拠である飛鳥へ戻ろうとはせず、やがて百済大寺と百済宮の建設に着手する。こうした点からみると、蘇我蝦夷によって擁立された舒明ではあったが、治世の後半においては、蘇我氏との間に確執を生じていた可能性が高いと思う。
18）水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』前掲註６）、159～225頁。
19）星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」『法政考古学』第10集記念論文集、法政考古学会、1985年。
20）大橋一章「勅願寺と国家官寺の造営組織」『仏教芸術』222号、毎日新聞社、1995年。大橋一章「大寺考」前掲註９）。
21）上野邦一「大官大寺跡における最近の発掘調査」『仏教芸術』129号、毎日新聞社、1980年。
22）井上和人「大官大寺の発掘調査」『日本歴史』第422号、吉川弘文館、1983年。
23）小澤 毅「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』第44巻第３号、考古学研究会、1997年。
24）大脇 潔『飛鳥の寺』前掲註３）、162～191頁。大橋一章「勅願寺と国家官寺の造営組織」前掲註20)。なお、高市大寺の建築が、礎石や瓦を用いない程度のものだったとする見解がある（星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」前掲註19)）が、従えない。
25）星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11)。
26）平林章仁『七世紀の古代史 －王宮・クラ・寺院－』白水社、2002年、11～56頁（初出1987年)。
27）和田 萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰　上』５～83頁、和田 萃「百済宮再考」前掲註１）。
28）平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26)、11～56頁。
29）上野 誠『古代日本の文芸空間 －万葉挽歌と葬送儀礼－』雄山閣出版、1997年、170～180頁（初出1995年)。
30）渡里恒信「城上宮について －その位置と性格－」『日本歴史』第598号、吉川弘文館、1998年。
31）奈良県教育委員会『大和国条里復原図』1980年、№77。
32）渡里恒信は、これらの歌を、慶雲２年（705）５月に死去した忍壁皇子の葬送に関わるものとみるが、3324番歌の「皇子の尊」を文学特有の修辞として、忍壁皇子にあてるのは無理があると思う（平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26)、85～116頁（初出1999年))。この表現からも、通説どおり高市皇子への挽歌であって、歌中の「雲」は火葬とは関係しないと判断すべきだろう。
33）第Ⅱ章１の註３）参照（13頁)。
34）大脇 潔「忘れられた寺 －青木廃寺と高市皇子－」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会、1993年。
35）寺崎保広『長屋王』人物叢書、吉川弘文館、1999年、179～188頁。
36）吉備池廃寺は条坊が施工された藤原京域に含まれるので、それを「百済の原」と称したことに疑問がないわけではない。しかし、周辺部では条坊施工が遅れる例が知られており（竹田政敬「藤原京の京域」『古代文化』第52巻第２号、古代学協会、2000年)、持統10年（696）段階で、東京極に近いこの地域まで都市化が及んでいなかったことは充分考えられる。
37）中井一夫・松田真一・寺沢 薫「国道24号線バイパス工事に伴なう試掘調査概報 －橿原市飯高・小槻地区－」『奈良県遺跡調査概報 1978年度』奈良県教育委員会、1979年。
38）井上和人『条里制研究の一視点 －奈良盆地における条里地割の施工年代についての再検討－』静邨詩社（私家版)、1994年、13～18頁。
39）奈良県教育委員会『大和国条里復原図』前掲註31)、№83。
40）ちなみに、猪熊兼勝は、金堂基壇の東と南に接する小字「カムリ石」を、『大安寺縁起』に見える百済大寺金堂の石鴟尾のこととし、その南の小字「冠名」も「冠石」の誤写とみる。
41）一方、百済大寺と対になって造営された百済宮については、いまだその遺構を確認するにいたっていない。ただ、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」という『日本書紀』舒明11年（639）７月条の記事が、両者の位置関係を示すものだとすれば、百済宮は百済大寺の西側に存在したことになる。地形的には、吉備池廃寺の寺域北半から西北西に向かって、現在の吉備の集落がのる高燥な微高地がのびており、それを中心とした地域が有力な候補となろう。また、『日本書紀』敏達元年（572）４月

条の百済大井宮も、前後の宮室の所在からみると、この近辺に存在した可能性が想定されるので、あるいは舒明の百済宮の下層に存在するのかもしれない。

42）これを寺院周辺の寺領とみる説もあるが（平林章仁『七世紀の古代史』前掲註26）、11～56頁）、大安寺三綱牒の文意を素直にとって、旧寺地（寺院地）と解するのが妥当だと思う。また、そこには「水湿之地」「高燥之処」があったとされるが、「高燥之処」は、基壇を含む比較的高い部分とみてよく、そこに百姓が居住したことが知られる。この２種類の地形は、百済大寺と「高市大官寺」のいずれの旧地にも存在したとして不都合はなく、とくに「水湿之地」だけを百済大寺に結びつける（星野良史「百済大寺の創立に関する一考察」前掲註11））必要はない。

43）星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」前掲註19）。

44）岸　俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、67～101頁（初出1970年）。和田 萃「百済宮再考」前掲註１）。しかし、その根拠とされた「大和国東喜殿荘近傍図」（西岡虎之助編『日本荘園絵図集成（下）』東京堂出版、1977年、第25図）の比定には、誤りがあることが指摘されている（井上和人「飛鳥京域論の検証」『考古学雑誌』第71巻第２号、日本考古学会、1986年）。

45）小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註４）。

46）田村吉永「百済大寺と高市大寺 －大安寺成立に関する一見解－」『南都仏教』第８号、南都仏教研究会編、1960年。

47）猪熊兼勝「瓦と塼」『高松塚と藤原京』日本美術全集第３巻、学習研究社、1980年。森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』前掲註３）、117～136頁。森 郁夫「百済大寺」前掲註８）。近江俊秀「吉備池廃寺は百済大寺か －百済大寺と高市大寺の所在地をめぐって－」『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐって －百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所、1998年。

48）山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」前掲註２）、註114。佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 Ⅰ －飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈文研、2000年。

49）小澤 毅「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮 －七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成－」『文化財論叢 Ⅱ』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年、註27。大脇 潔「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、1997年。

50）井上和人「大官大寺の発掘調査」前掲註22）。

51）大脇 潔「大安寺 １－百済大寺から大官大寺へ－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研学報第60冊、2000年。

52）中井 公「大安寺 ２－大官大寺から大安寺へ－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。

53）大脇 潔「大安寺 １」前掲註51）。中井 公「大安寺 ２」前掲註52）。

54）「専寺」は貴寺・当寺の意味。吉川真司の教示による。また、「路東十一」「路東十二」は、大和国の京南条里のうち、下ツ道の東に広がる路東条里の坪番付を示すが、条と里は省略されている。

55）田村吉永は、これより１里東の路東二十八条四里十一坪・十二坪（字中坪、大安寺、ニシノフケ）に求めたが（田村吉永『飛鳥京藤原京考証』綜芸舎、1965年、12～21頁）、そこは文武朝大官大寺東方の丘陵西麓、田村が狂心渠に比定したフケ田に面した場所にあたり、寺地の東辺ではありえても西辺とはなりえない。それに対して、二十八条三里十一坪・十二坪は、まさに寺地西辺というにふさわしい。この場合、「岡本田」は正しく西山丘陵の南麓にあたる。また「橋本田」についても、付近に現在も橋が架かるように、飛鳥川にかけられた橋を想定して無理がない（小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註４））。

56）ちなみに、『大安寺縁起』によれば、大安寺には斉明・天智・天武の歴代天皇が施入した百済大寺や高市大寺の仏像が伝わっていた。それらは、文武朝大官大寺の焼亡の時点で、隣接する高市大寺に安置されていたとすれば、無理なく説明できる。大脇 潔「大安寺 １」前掲註51）。大脇 潔「『百済大寺』論争の行方をめぐって」『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐって －百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所、1998年。中井 公「大安寺 ２」前掲註52）。

57）小澤 毅「藤原京の条坊と寺院占地」『古代』第110号、早稲田大学考古学会、2001年。

2　伽藍配置の復元

A　伽藍の軸線と寺域

基準方位の算出　吉備池廃寺の調査成果に基づき、以下、伽藍配置の復元をおこないたい。まず、作業にあたって基準となる方位を算出しておこう。一連の遺構としてある程度長い距離を検出し、伽藍全体の基準方位を考えるうえで定点となるのは、南面回廊の南雨落溝と掘立柱僧房の柱痕跡である。それぞれの座標を1/20実測図で計測するとTab.8のようになり、その数値を用いて振れを算出すると、Tab.9の結果が得られる。

東で北に振れる

これから明らかなように、ほとんどが東で北に振れる方位を示すが、僧房SB340の北側柱列だけは東で南に振れる結果となった（Tab.9のJLとJK）。しかし、方眼方位に対するずれはわずか5～15㎝であり、柱心の確定が困難な事例も存在することを考慮すれば、これを過大視する意味は乏しい。また、僧房SB340だけをとっても、計測部位により方位のばらつきがあることが判明している（Tab.9のJL～OP）。掘立柱建物ならではの造営時における施工誤差や、計測時の誤差を勘案すれば、大略の傾向を示すとみるにとどめるべきだろう。

一方、南面回廊南雨落溝も、直線的には施工されていない（PL.15・16，Fig.44）。事実、第95次調査区内だけでも、施工誤差もしくは施工後のひずみとみられる石列のうねりを観察できる。したがって、ここでも遺構の軸線については、大略の傾向しか知ることができない。ただ、一連の遺構として最も長大な距離を確認しているのは、この南面回廊南雨落溝であり、現状では、これ以上に方位の基準として適当な遺構はほかに存在しない[1)]。そこで、ひとまず南面回廊南雨落溝を検出した両端を結ぶ方位（E 0°53′29″N、Tab.9のAD）を、吉備池廃寺の伽藍の振れと仮定することにしたい。

なお、このほかに、ひとつの遺構をある程度の距離にわたって検出し、方位の基準としうるものとしては、僧房SB400と僧房SB340の柱がある。それぞれの建物のなかで、より検出距離の長いSB400北側柱列（E 1°44′32″N、Tab.9のFG）とSB340南側柱列（E 0°37′14″N、Tab.9のOQ）を各建物の方位とし、これらを加えた三者の方位の単純平均を求めると、E 1°05′05″Nとなる。しかし、検出距離が短いものは、それだけ方位の信頼性に劣ると考えられることから、検出距離に応じた加重平均を算出するほうが有意義だろう。そこで、おのおのの方位に検出距離を乗じ、その和を検出距離の和で割って加重平均を算出すると、E 0°55′58″Nという数値を得ることができる。これは、先に伽藍の振れと仮定した南面回廊南雨落溝の方位（E 0°53′29″N）にも近く、上記の想定の妥当性を示すものとみてよい。

伽藍の振れ

ちなみに、この南面回廊南雨落溝の振れは、100mで1.56mの振れに相当する（E 0°55′58″Nの場合は、同じく1.63m）。したがって、直線性を問題とする場合や、X座標、Y座標がともに大きく異なる場合には考慮する必要があるが、X座標とY座標のどちらかをほぼ等しくする2点間の距離の算出には、ほとんど影響を及ぼさない。

なお、南北距離（X座標の差）でｘm、東西距離（Y座標の差）でｙm離れた2点間の距離（L）を、それぞれ上記の振れ（$\alpha = 0°53′29″$）を考慮した距離に換算する場合、南北距離はＬ＝

Tab. 8　検出遺構の位置（1）

点	遺　　構	X座標	Y座標	調　査　区
A	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.50	-15,018.30	第89次調査東南トレンチ
B	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.55	-15,009.30	第95次調査南区
C	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,276.40	-14,994.00	第95次調査南区
D	南面回廊SC160 南雨落溝南側石	-166,275.75	-14,970.10	第111次調査南区
E	僧房SB260 北側柱列東から2基め	-166,117.45	-14,994.20	第105次調査中央区
F	僧房SB400 北側柱列東から6基め	-166,117.40	-14,941.65	桜井市第９次調査区
G	僧房SB400 北側柱列東北隅柱	-166,117.00	-14,928.50	桜井市第９次調査区
H	僧房SB260 南側柱列東から2基め	-166,123.30	-14,994.10	第105次調査中央区
I	僧房SB400 南側柱列東から4基め	-166,122.60	-14,936.40	桜井市第９次調査区
J	僧房SB340 北側柱列西北隅柱	-166,136.05	-14,952.10	第111次調査北区
K	僧房SB340 北側柱列西から6基め	-166,136.10	-14,939.45	第111次調査北区
L	僧房SB340 北側柱列東から3基め	-166,136.20	-14,929.35	第111次調査北区
M	僧房SB340 西妻柱	-166,138.60	-14,952.15	第111次調査北区
N	僧房SB340 東妻柱	-166,138.45	-14,924.25	第111次調査北区
O	僧房SB340 南側柱列西南隅柱	-166,141.45	-14,952.05	第111次調査北区
P	僧房SB340 南側柱列西から5基め	-166,141.20	-14,941.70	第111次調査北区
Q	僧房SB340 南側柱列東南隅柱	-166,141.15	-14,924.35	第111次調査北区

Tab. 9　遺構の方位の振れ　東で北に振れる。－（マイナス）はその逆。

区間	遺　　構	X座標の差	Y座標の差	方位の振れ
AD	南面回廊SC160南雨落溝	0.75	48.20	0° 53′ 29″
BD	南面回廊SC160南雨落溝	0.80	39.20	1° 10′ 09″
AC	南面回廊SC160南雨落溝	0.10	24.30	0° 14′ 09″
CD	南面回廊SC160南雨落溝	0.65	23.90	1° 33′ 28″
BC	南面回廊SC160南雨落溝	0.15	15.30	0° 33′ 42″
EG	僧房SB260とSB400の北側柱列	0.45	65.70	0° 23′ 33″
EF	僧房SB260とSB400の北側柱列	0.05	52.55	0° 03′ 43″
FG	僧房SB400北側柱列	0.40	13.15	1° 44′ 32″
HI	僧房SB260とSB400の南側柱列	0.70	57.70	0° 41′ 42″
JL	僧房SB340北側柱列	-0.15	22.75	-0° 22′ 40″
JK	僧房SB340北側柱列	-0.05	12.65	-0° 13′ 35″
MN	僧房SB340妻柱	0.15	27.90	0° 18′ 29″
OQ	僧房SB340南側柱列	0.30	27.70	0° 37′ 14″
OP	僧房SB340南側柱列	0.25	10.35	1° 23′ 01″
AD・FG・OQの平均（単純平均）				1° 05′ 05″
AD・FG・OQの平均（検出距離に応じた加重平均）				0° 55′ 58″

$x\cos\alpha \pm y\sin\alpha$、東西距離は$L=y\cos\alpha \pm x\sin\alpha$として算出されることになる。[2)]

寺域の復元　吉備池廃寺の寺域は、周囲の遮蔽施設や区画溝を検出していないため、遺構からは明確に知ることができない。ただ、回廊で囲まれる伽藍中心部の北方および南方に位置する桜井市第９次・第12次調査区の当該時期の遺構を含むことは確実であろう。とすれば、現在確認できる南限の遺構は東西溝SD442、北限の遺構は南北溝SD422であるので、寺域の南北は260m以上におよぶことになる。同様に、東西については、遺構から確認できる東限が、第105次調査東区南トレンチの東面回廊西雨落溝の石組抜取溝SD305、西限は第95次調査西区で検出した西面回廊外にのびる斜行溝SD215であるから、180m以上となる。よって、寺域が南北260m以上×東西180m以上におよぶことは確実である。

寺域は260×180m以上

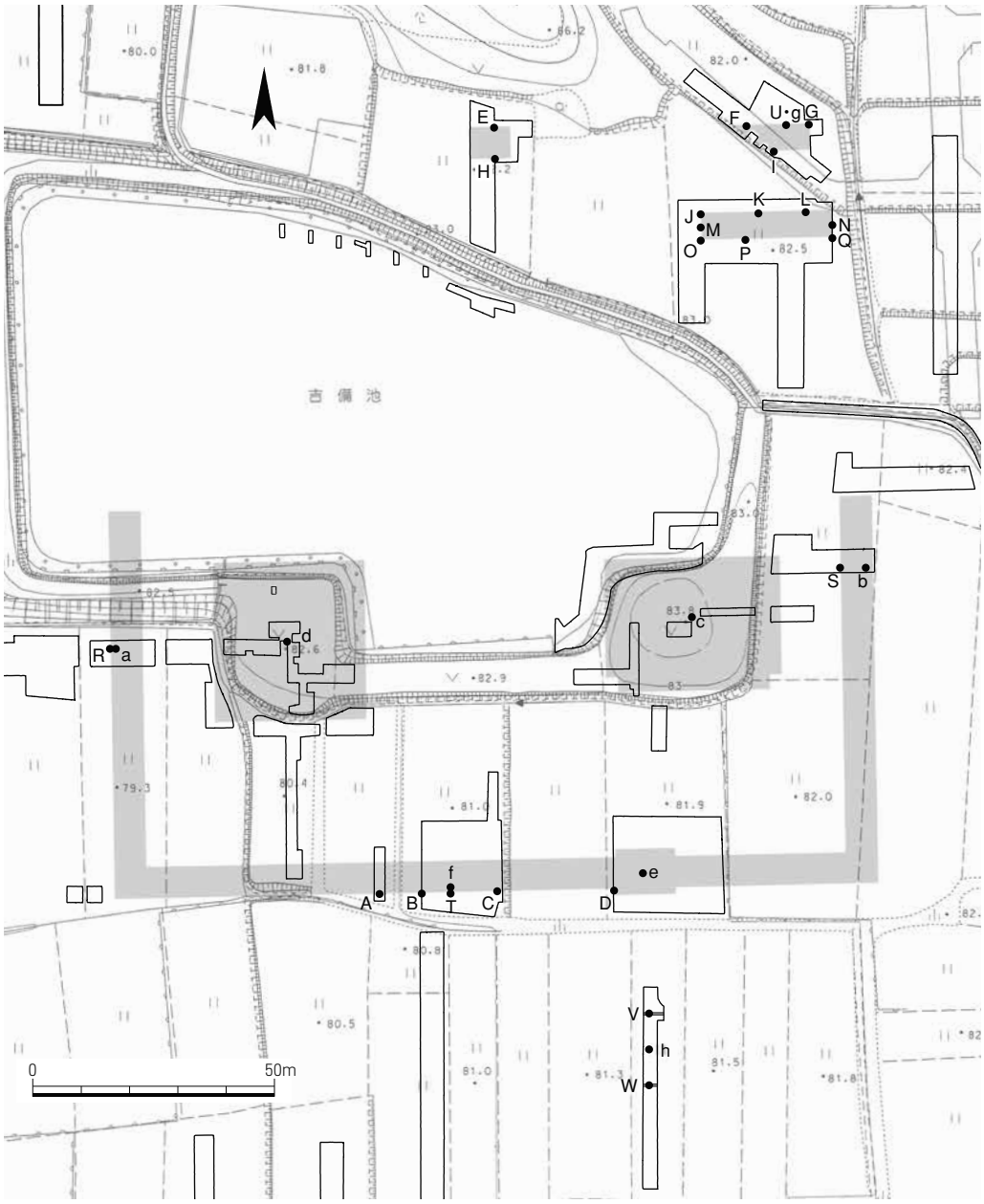


Fig. 104　検出遺構および堂塔の定点　1:1500

B　伽藍中心部の復元

飛鳥時代の寺院の伽藍配置に関しては、これまでの研究により、位置の基準が回廊の外側柱筋におかれたことが指摘されている[3)]。本書でも、その可能性を想定して検討を加えることにしよう。したがって、基準線を定めるためには、まず回廊の復元をおこなう必要があるが、この点は次節で詳述することとし、ここではその成果から、回廊の梁行寸法を3.3m（11尺）、雨落溝の出を1.5m（5尺）として考察を進めたい。

伽藍中心部の復元をおこなううえで定点となる遺構の座標は、Tab.10のとおりである。また、それらをはじめとする遺構から中心堂塔の座標を推定すると、Tab.11のようになる。

回廊の東西規模　西面回廊西雨落溝心（Tab.10のR）と東面回廊西雨落溝心（Tab.10のS）の距離は、前記の振れを考慮して換算すると、152.9mとなる。これは、回廊棟通り間の距離（回廊心々間距離）に等しい。上述のごとく、回廊の梁行寸法を3.3m、雨落溝心々間距離を6.3mとすれば、回廊外側柱筋間の距離は156.2mと算出される（Tab.12の①）。

東西回廊間は156.2m

一方、飛鳥寺（明日香村飛鳥）や法隆寺西院伽藍（生駒郡斑鳩町）では、伽藍配置に高麗尺（大宝令大尺[4)]。以下、大尺と記す）を使用したことが指摘されている[5)]。東西回廊外側柱筋間156.2mは440大尺に相当し、その場合、1大尺の長さは0.355mとなる。これは上記の飛鳥時代寺院や藤原京などの都城の造営尺にくらべても妥当な値で、以下、この数値を吉備池廃寺の堂塔間距離の算出に用いることにする。また、次節で述べるように、建物造営に使用した基準尺は1尺＝

Tab. 10　検出遺構の位置（2）

点	遺　　構	X座標	Y座標	調　査　区
R	西面回廊SC200 西雨落溝SD201心	-166,226.0	-15,074.6	第95次調査西区
S	東面回廊SC300 西雨落溝SD305心	-166,209.0	-14,921.9	第105次調査東区
T	南面回廊SC160 南雨落溝SD161心	-166,276.1	-15,003.0	第95次調査南区
U	僧房SB400 北側柱列東から3基め柱心	-166,117.2	-14,933.8	桜井市第9次調査区
V	南外周部 東西石組溝SD441心	-166,301.8	-14,962.0	桜井市第12次調査区
W	南外周部 東西石組溝SD442心	-166,317.0	-14,962.6	桜井市第12次調査区

Tab. 11　堂塔の推定座標

点	遺　　構	X座標	Y座標	調査区	備　考
a	西面回廊SC200外側柱筋	-166,226.0	-15,073.1	第95次西区	Rの1.5m東
b	東面回廊SC300外側柱筋	-166,209.0	-14,917.1	第105次東区	Sの4.8m東
c	金堂SB100心	-166,220.3	-14,953.4	第81-14次	基壇規模37×25m
d	塔SB150心	-166,224.0	-15,037.4	第89次	第Ⅲ章2参照
e	中門SB320心	-166,272.2	-14,963.4	第111次	基壇規模12.0×9.8m
f	南面回廊SC160外側柱筋	-166,274.6	-15,003.0	第95次南区	Tの1.5m北
g	僧房SB400北側柱列	-166,117.2	-14,933.8	桜井市第9次	Uに同じ
h	東西溝SD441とSD442の中点	-166,309.4	-14,962.3	桜井市第12次	VとWの中点

0.300mほどとみられ、さらに７世紀中葉に造営された前期難波宮（大阪市）では、造営尺が１尺＝0.292mと推定されていることから、それらの妥当性についてもあわせて検討した。

堂塔間の距離　Tab. 11に基づき、前項の計算式にしたがって各堂塔間の距離を算出したのが、Tab. 12である。これから明らかなように、伽藍配置の基準となったのはやはり回廊外側柱筋であって、しかも大尺で計画されているとみて間違いない[6)]。

大尺で計画

金堂心－東面回廊外側柱筋間が102.7大尺と、100大尺よりやや大きくなる（Tab. 12の②）のは、金堂西面の掘込地業外にのびる水平版築層を基壇土と認めたためかもしれない。しかし、北面についても同様に解釈しているにもかかわらず、金堂心－南面回廊外側柱筋間は150.7大尺と、150大尺に近い完好な数値を示す。「第Ⅲ章２ 遺構各説」で詳述したように、金堂基壇の規模は確定しがたいので、計画値としては金堂－東面回廊間を100大尺とみてよいだろう。

また、塔心－西面回廊間外側柱筋間は100.6大尺と、100大尺に近い（Tab. 12の③）。調査時点

Tab. 12　堂塔間の距離

番号	区　　間	備考	実長 単位m	令大尺 1尺=0.355m	唐大尺Ａ 1尺=0.300m	唐大尺Ｂ 1尺=0.292m
	東西回廊の西雨落溝間	ＲＳ	152.9	430.7	509.8	523.8
①	東西回廊外側柱筋間	ａｂ	156.2	440.0	520.8	535.1
②	金堂心－東面回廊外側柱筋	ｂｃ	36.5	102.7	121.6	124.9
③	塔心－西面回廊外側柱筋	ａｄ	35.7	100.6	119.1	122.3
④	金堂心－南面回廊外側柱筋	ｃｆ	53.5	150.7	178.4	183.3
⑤	塔心－南面回廊外側柱筋	ｄｆ	51.1	144.0	170.4	175.1
⑥	中門心－東面回廊外側柱筋	ｂｅ	47.3	133.1	157.6	161.9
⑦	南面回廊外側柱筋－僧房SB400北側柱列	ｆｇ	156.3	440.2	521.0	535.3
⑧	南面回廊外側柱筋－SD441・442の中点	ｆｈ	35.4	99.8	118.1	121.3
⑨	金堂心－中門心の東西距離	ｃｅ	10.8	30.4	36.0	37.0
⑩	僧房SB400北側柱列－僧房SB340南側柱列		24.3	68.4	81.0	83.2
⑪	僧房SB400北側柱列－僧房SB340棟通り		21.6	60.8	72.0	74.0
⑫	僧房SB400北側柱列－僧房SB340北側柱列		18.9	53.2	63.0	64.7
⑬	僧房SB400南側柱列－僧房SB340北側柱列		13.5	38.0	45.0	46.2
①′	東西回廊内側柱筋間	ＲＳ-3.3m	149.6	421.4	498.8	512.5
②′	金堂心－東面回廊内側柱筋	ｂｃ-3.3m	33.2	93.4	110.6	113.6
③′	塔心－西面回廊内側柱筋	ａｄ-3.3m	32.4	91.3	108.1	111.0
④′	金堂心－南面回廊内側柱筋	ｃｆ-3.3m	50.2	141.4	167.4	172.0
⑤′	塔心－南面回廊内側柱筋	ｄｆ-3.3m	47.8	134.7	159.4	163.8
⑥′	中門心－東面回廊内側柱筋	ｂｅ-3.3m	44.0	123.9	146.6	150.6
⑦′	南面回廊内側柱筋－僧房SB400北側柱列	ｆｇ-3.3m	153.0	430.9	510.0	524.0
⑧′	南面回廊内側柱筋－SD441・442の中点	ｆｈ+3.3m	38.7	109.1	129.1	132.6
①″	東西回廊棟通り間	ＲＳ	152.9	430.7	509.8	523.8
②″	金堂心－東面回廊棟通り	ｂｃ-1.65m	34.8	98.1	116.1	119.2
③″	塔心－西面回廊棟通り	ａｄ-1.65m	34.1	95.9	113.6	116.7
④″	金堂心－南面回廊棟通り	ｃｆ-1.65m	51.9	146.1	172.9	177.6
⑤″	塔心－南面回廊棟通り	ｄｆ-1.65m	49.5	139.3	164.9	169.4
⑥″	中門心－東面回廊棟通り	ｂｅ-1.65m	45.6	128.5	152.1	156.3
⑦″	南面回廊棟通り－僧房SB400北側柱列	ｆｇ-1.65m	154.7	435.5	515.5	529.6
⑧″	南面回廊棟通り－SD441・442の中点	ｆｈ+1.65m	37.1	104.4	123.6	127.0

では、西面回廊雨落溝の石組抜取溝SD201を東雨落溝にともなう遺構と解釈したが（『年報1999-Ⅱ』）、遺構の検討に加え、伽藍配置のうえからも西雨落溝の蓋然性が高いと言えよう。

以上のように、吉備池廃寺の伽藍配置計画は、東西の回廊外側柱筋間を440大尺とし、東西それぞれの回廊外側柱筋からいずれも100大尺の位置に金堂心と塔心をおくものであったと復元される。したがって、金堂−塔間は心々間距離で240大尺となる。さらに、南面回廊外側柱筋−金堂心間は150大尺（実長150.7大尺、Tab.12の④）、南面回廊外側柱筋−僧房SB400北側柱列間は東西回廊間と同じく440大尺（実長440.2大尺、Tab.12の⑦）、南面回廊外側柱筋−南方の東西溝SD441・442の中点間が100大尺となる（実長99.8大尺、Tab.12の⑧）（Fig.105）。

金堂心と塔心の位置

塔の南北位置　ここで問題となるのが、塔の南北位置と中門の東西位置である。まず、塔の南北位置について検討してみよう。塔−南面回廊間は144.0大尺と10大尺単位の完数にならないが、塔心が、金堂心と同様に南面回廊から150大尺北の位置におかれたとすると、現在の想定心より約2.1m北方に塔心を求めなければならない。この場合、確認している心礎抜取穴のかなり北寄りに塔心が位置することになり、塔の土壇南辺に残る版築土を基壇内と考える必要があることから、基壇規模は35m以上となる。しかし、第Ⅲ章２で検討したように、心礎抜取穴の規模から、塔心の位置が大きく動くとは考えがたいので、この想定は成り立ちにくい。

次に、金堂基壇北辺と塔基壇北辺をそろえている可能性を検討したい。金堂北辺の座標をX=−166,207.8、Y=−14,953.4とし、振れを考慮して西へ延伸すると、塔の位置における座標は、X=−166,209.1、Y=−15,037.4となる。これと推定塔心（Tab.11のｄ）との距離は14.9mとなり、塔基壇の一辺は29.8mと算出される。けれども、その場合、塔土壇南辺で確認した版築土が基壇外となってしまい、不適切である。

なお、遺構自体からは、塔基壇の一辺は32m程度と想定され（50頁）、この場合、塔基壇の北辺は、金堂の北辺よりも1.1m北に位置することになる。いずれにしても、現状では、塔心の位置や基壇規模を確定できるだけの資料がなく、加えて金堂の基壇規模も明確ではないため、塔の厳密な南北位置については不明とせざるをえない。ただ、遺構の状況からみて、配置計画としては、金堂基壇と塔基壇の北辺をあわせる意図があったと推測しておきたい。

金堂と北辺を合わせる

ちなみに、金堂南辺の張り出し部を基壇に含めてその中心を金堂心とした場合には、金堂と塔の中心をあわせている可能性があるが、この場合、金堂心が南方に寄り、金堂−南面回廊間の150大尺という数値との整合性は失われる。建物心が通常、棟位置を基準とし、南辺の張り出し部を基壇内に含めると、孫廂や向拝ではない本格的な建物の上部構造を考えなくてはならなくなる点とあわせて、成立しがたいだろう。

中門の位置　中門の心は、東面回廊外側柱筋から133.1大尺の位置にある（Tab.12の⑥）。したがって、金堂や塔のように、東西の回廊から10大尺単位の完数値で配置する計画とは異なっていたとみられる。しかし、中門心は金堂の南北中軸線より10.8m西方に寄っており、金堂と西辺を合わせているわけでもない。金堂や東面回廊との関係だけからは、中門をこの位置におく明快な理由を見出すことは困難である。

ただし、中門心−東面回廊内側柱筋間の44.0m（Tab.12の⑥′）という数値に着目すると、この距離は、東西回廊内側柱筋間の距離149.6mの2/7＝42.7mに近似することに気づく。すなわち、東西の回廊と重なる隅部分を除いた南面回廊を５：２に内分する位置に近いのである。

そこで、検出した中門の位置を、伽藍全体の南北中軸線で西に折り返すと、わずかに第89次調査の東南トレンチにかかるものの、土壇南トレンチと東南トレンチにはさまれた未調査区に、そのほとんどが納まってしまうことが判明する。したがって、施工上の誤差などを考慮すれば、塔の南方のやや東に偏した位置にも、ほぼ同規模の中門が存在した可能性は充分に想定できるだろう。すなわち、南面回廊を２：３：２に分ける位置に、金堂と塔それぞれに対応して二つの中門が建つ、という異例の伽藍配置が復元されるのである。

二つの中門

この場合、位置の基準を回廊の外側柱筋ではなく、内側柱筋におく点に若干疑問があるが、今のところ、これ以外に、中門が金堂心から西へずれる理由を合理的に解釈できる案は見出せない。また、そうした位置に中門をおいた理由も不分明だが、後述するように、金堂と塔の間

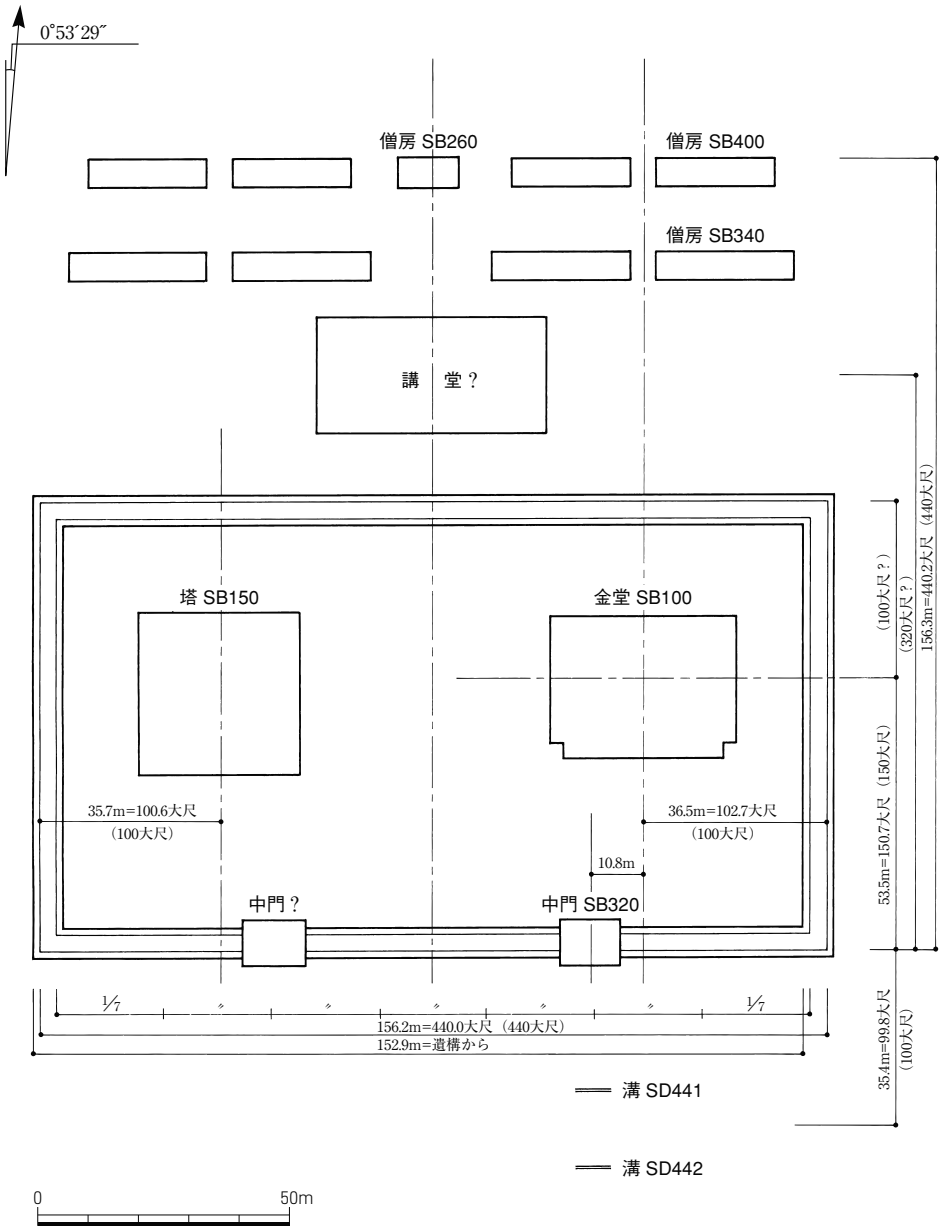


Fig. 105　伽藍配置復元図（括弧内は復元値）　1:1500

隔がひじょうに離れていることや、南門との位置関係によるのだろうか。

僧房の配置　上述のごとく、南面回廊から僧房SB400までの距離は、東西回廊間と同じく440大尺と復元され、僧房についても高い計画性のもとに配置されていることが明らかとなった。

僧房SB400とその南にある僧房SB340との関係は、配置の基準になったとみられるSB400北側柱列からSB340棟通りまでが60.8大尺であることから（Tab.12の⑪）、60大尺として計画された可能性があるけれども、判然としない。次節で述べる、建物の造営尺である唐大尺（大宝令小尺、1尺≒0.300m）が、僧房一郭の配置にも適用されていると想定できなくもないが、SB400とSB340の柱間寸法や全長が合わないなど、不審な点が残る。むしろ、SB400南側柱列とSB340北側柱列間を38大尺としたとみたほうがよいかもしれない。なお、SB400と僧房SB260との関係は、SB260がわずかに北に寄る感はあるものの、おおむね配置の基準となる北側柱筋を合わせていると解釈するのが自然だろう。

一方、金堂中軸線を、振れを考慮して北方へ延伸すると、僧房SB340西妻柱位置（Tab.8のM）の約2.5m西を通る。SB400とSB340は西妻の位置をほぼあわせているとみられることから（65頁）、SB400の西にも同様に金堂中軸線が通ることになる。したがって、この2棟の僧房は金堂中軸線と密接な関係にあり、金堂中軸線をはさんで西側に折り返した未調査区にも、同様の僧房が存在した可能性が想定される。

金堂中軸と密接な関係

さらに、回廊の南北中軸線つまり伽藍全体の中軸線[7]を北方にのばすと、僧房SB260の東から2基めの柱位置（Tab.8のEもしくはH）の西2.3～2.4mの位置を通る。これからSB260の桁行柱間を特定することはできないけれども、SB260の位置がおおむね伽藍中軸線に合致していることは疑いなく、ここにも中軸線と僧房との有機的な関係をうかがうことができる。

また、塔の北方にあたる第105次調査中央区と西区の間の地域は発掘調査がおよんでいないが、この地域にも、塔の中軸線に合わせるかたちで僧房が展開していたとみるのも、あながち無理な想定とは思われない。すなわち、地盤のよい小丘陵南側の平坦面に、多数の僧房が展開していた状況を復元しうるのである。

多数の僧房を想定

C　伽藍配置の特質

伽藍の規模　前節および後述の各節での検討から、吉備池廃寺が舒明11年（639）創建の百済大寺にあたることは確実である。次節で詳述するように、この金堂と塔は同時代の遺構に比べて格段に大きく、それにともない、回廊に囲まれた中心伽藍もきわめて大規模であったことがわかる（Fig.106）。

吉備池廃寺の回廊東西規模は、575～645年にかけて造営された新羅皇龍寺（慶尚北道慶州市）第2次伽藍の東西回廊棟通り間の距離555.39尺＝168.3m[8]より若干小さい程度であり、当時の中国における仏教寺院については明確でないものの、東アジアでも突出した伽藍規模をもつ寺院の一つだったと推定される。南北規模に関しては不明だが、金堂－南面回廊間よりも金堂－北面回廊間が大きいとは考えにくく、東西に細長い形態をとることは間違いなかろう。

突出した伽藍規模

「法隆寺式伽藍配置」　金堂を回廊内の東に南面させ、その西に塔を並立させる形態は、一般に、法隆寺西院伽藍を代表例とする「法隆寺式伽藍配置」と呼ばれている。法隆寺式もしくはその金堂と塔の位置を逆転させた「法起寺式伽藍配置」の古例は、650年代頃の法輪寺（生駒郡斑鳩

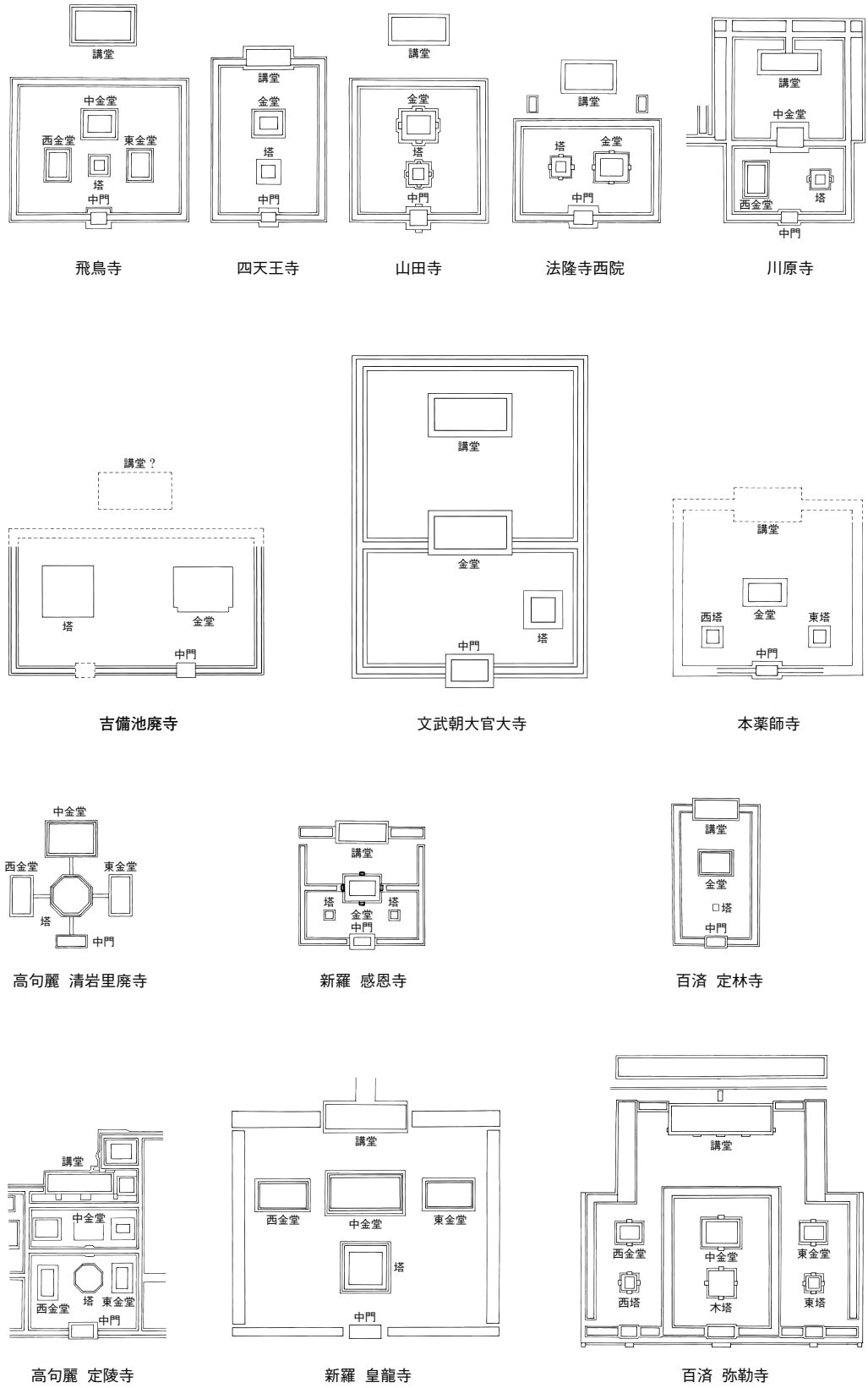


Fig. 106　日本および朝鮮半島の伽藍配置の比較　1:4000

町）や安倍寺（桜井市阿部）、海会寺（大阪府泉南市）などにみることができるが[9]、吉備池廃寺（＝百済大寺）は、それらより年代的に先行すると考えられる。もっとも、吉備池廃寺の場合は、北面回廊の状況が不明なうえ、中門の位置が伽藍全体の中軸線上にないため、典型的なタイプとは言えないけれども、金堂と塔を横に並置した、いわゆる法隆寺式伽藍配置としては最古の寺院となる。

「法隆寺式」の最古の例

百済大寺の創建にあたって、このような伽藍配置が採用された理由は定かではない。法隆寺式もしくは法起寺式の伽藍配置は、朝鮮半島（韓半島）や中国にその例が見られないことから日本独自のものとされ、金堂と塔を同時に礼拝できる特徴が指摘されてきた。そして、7世紀後半の地方寺院にしばしばそれが見出されるのは、山麓や山腹に立地することが多い地方寺院に縦長の四天王寺式は適さず、横置きの法隆寺式が好まれたためと解されている[10]。

ところで、法隆寺式や法起寺式にもっとも特徴的なのは、金堂や塔を並置することによって、それぞれが独自の前庭部（南庭）をもつことである。これは、伽藍の造営が継続している段階において、きわめて有効に機能した要素であったと考えられる。すなわち、古代寺院は、造営に長い年月を要したものが多いが、確認できる事例については、まず金堂の建立が先行する場合が多いことが明らかになっている。そのさいに、金堂と塔を並置する伽藍配置であれば、金堂の完成後、ただちに金堂を中心とした寺院活動を開始することが可能となる。塔やそのほかの堂宇の建立は、これと並行するかたちで、しかも金堂南庭における法会の妨げを最小限にして進めることができるからである。また、塔の建立が金堂に先行したとしても、塔を中心とする法会と他の堂宇の建立を並行しうる状況に変わりはない。

したがって、建立が比較的急がれた場合や、すでに僧侶が寺院活動を開始しており、伽藍の完成を待つばかりの場合などに、金堂と塔を横に並べる配置を採用した可能性を想定できるのではなかろうか。もちろん、こうした配置は、中央の官寺としては、金堂の中心性が確立していくまでの過渡的な形態であったことも事実だが、それが地方寺院に普及していくのは、天皇（大王）家の寺院として創設された百済大寺（＝吉備池廃寺）が採用した配置であったという理由に加えて、このような実用性が考慮されたことも一因であったと推定する。

実用性への配慮

もっとも、いわゆる法隆寺式伽藍配置の嚆矢となった百済大寺がこの配置をとるにいたった理由が、上記のようなものであったという確証はない。だが、舒明朝には、大陸に派遣されていた留学生や僧侶の帰国があいついでおり、これが百済大寺の創建に深くかかわっていたとすれば、彼らの止住寺院としても、伽藍の建造は急がれたであろう[11]。比較的多数存在したと想定される吉備池廃寺の僧房はそれを示すものかもしれない。

金堂と塔の間隔　吉備池廃寺の伽藍配置を法隆寺西院伽藍（以下、法隆寺と略す）と比較すると、金堂から塔までの距離がひじょうに広いことがわかる。法隆寺では、吉備池廃寺と同じく、金堂心と塔心を東西回廊の外側柱筋から等距離にとっているが、金堂と塔の心々間距離も、それとほぼ同じ87大尺とする。すなわち、東西回廊外側柱筋間をほぼ3等分する点に、金堂と塔を配置しているのである[12]。一方、吉備池廃寺では、金堂と塔の心々間距離は84.0mで、240大尺とみてよいが、この距離は、回廊東西規模（440大尺）の約55%にあたる。ここから金堂と塔の基壇分を差し引いた、構築物のない空間は東西49.5mとなり、それが東西回廊基壇間の内法（144.2m）のほぼ1/3に相当する。つまり、金堂と塔のあいだの空間が占める割合やその実長

金堂と塔の間は広大

は、法隆寺にくらべて格段に大きい。

こうした特徴が何に由来するのかは明確でない。伊東忠太は、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の百済大寺に関する記事「失火焼破九重塔並金堂石鴟尾」を、九重塔が焼け落ちるとき、その九輪が金堂の上に倒れかかり、金堂の鴟尾を破壊したと解釈して、塔の高さから金堂と塔の距離を推測することが可能と考えた[13]。前節で述べたように、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の当該記事の信憑性は疑わしく、伊東の解釈自体にも問題があるが、塔の高さと金堂と塔の心々間距離の関係については検討する必要があるだろう。

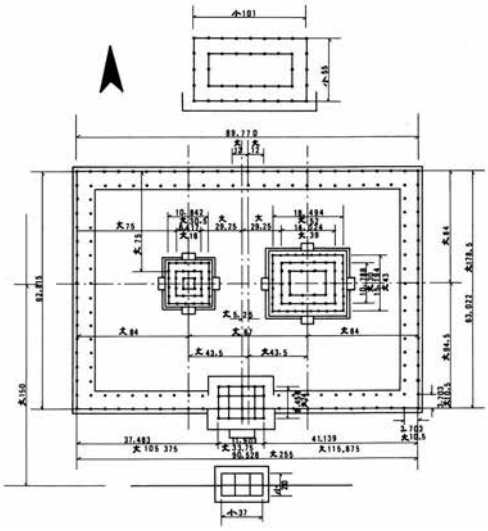


Fig. 107　法隆寺西院の伽藍配置計画　1:2000
（註３）岡田英男論文より転載）

塔の高さとの関係

法隆寺の金堂と塔の心々間距離は31.5m[14]、基壇上からの五重塔の高さは32.6m（107.44尺）である[15]。五重塔が後代の修理による改変を受けていることを勘案すると、両者はごく近似した数値を示すことになる[16]。こうした状況は、正確な数値は不明ながら、法輪寺や法起寺（生駒郡斑鳩町）でも同様であるらしい[17]。また、平城京薬師寺（奈良市）では、東塔心から金堂の南北中軸線（伽藍全体の中軸線）までの距離が塔の高さと近似した値を示す[18]。以上、なお検討の余地はあるが、塔の高さが何らかのかたちで平面に現れている可能性は否定できない。

次節で検討するように、吉備池廃寺の塔基壇は、新羅皇龍寺の木塔（九重塔）とほぼ同規模と考えられる。皇龍寺木塔の高さは、『三国遺事』が引く「刹柱記」によれば225尺であり、金東賢はこれを「東魏尺[19]」（=高麗尺）とみて、皇龍寺伽藍の平面、立面の造営計画を考察している[20]。この値（曲尺の264.6尺=80.2m）は吉備池廃寺の金堂と塔の心々間距離にも比較的近く、金堂と塔の間隔が大きいのは、九重塔の高さを反映しているため、と解釈することが可能かもしれない[21]。とすれば、百済大寺における九重塔の存在は、塔基壇の規模だけではなく、金堂と塔の間隔の点からも想定できることになる[22]。

伽藍配置の特徴　上記の分析も含めて、吉備池廃寺の伽藍配置の特徴をまとめると、次のようになるだろう。

まず、堂塔の配置計画には大尺を使用し、原則として回廊外側柱筋を基準とした10尺単位の完数とする。回廊で囲まれた伽藍中心部は東西に細長く、日本における同時代の寺院をはるかにしのぐ規模を有しており、新羅皇龍寺に匹敵する。また、回廊内の金堂と塔の間隔もひじょうに広いが、これは塔の高さに由来する可能性がある。伽藍配置は、南面する金堂を東に、塔を西においた、いわゆる法隆寺式の伽藍配置であり、創建年代からみて、国内では最古の例となる。ただし、中門は伽藍全体の中軸線上になく、金堂南方のやや西に寄った特異な位置にある。この位置は、東西の回廊内側柱間を５：２に内分する点に近く、伽藍全体の中軸線で折り返した塔の南方やや東寄りの位置にも、もう一つの中門をおく配置を想定することができる。つ

まり、南面回廊を２：３：２に分ける位置に、金堂と塔それぞれに対応して二つの中門が建つ伽藍配置が復元される。さらに、僧房の配置も伽藍中心部と密接な関係にあり、多数の僧房が建ちならんでいた可能性がある。

D　残された課題

以上、吉備池廃寺の伽藍配置を復元し、その特質について述べてきた。以下、伽藍配置をめぐる残された課題を挙げておくことにしたい。

北面回廊の位置　北面回廊と講堂に関しては、発掘調査による直接的な資料がまったくない。まず、北面回廊について検討しよう。

比較資料として法隆寺（Fig.107）をみると、そこでは、金堂心と塔心の中点を通る南北線を伽藍全体の中軸線とし、金堂心と塔心を結ぶ東西線から、北側の北面回廊外側柱筋までを84大尺とする。一方、南側は、南面回廊の外側柱筋ではなく、内側柱筋までを84大尺にとる。すなわち、回廊の梁行分だけ南面のほうを広くしている。また、東面回廊外側柱筋から金堂心、西面回廊外側柱筋から塔心までの距離も84大尺である。したがって、法隆寺では、南面をやや広くする以外は、建物心と各面の回廊外側柱筋までの距離を統一しているといえよう。

吉備池廃寺では、東面回廊外側柱筋－金堂心、西面回廊外側柱筋－塔心の距離がともに100大尺であるのに対し、南面回廊外側柱筋－金堂心を150大尺としており、やはり南面を広くとっていることは間違いない。したがって、法隆寺に倣えば、北面回廊外側柱筋の位置は、金堂心から100大尺北に想定することが可能である[23]。この場合、北面回廊の大半は既調査区からはずれた吉備池内に含まれるが、回廊の東北隅は、第105次調査東区北トレンチ付近となり、中世の東西溝SD307が、ほぼ北面回廊内側の雨落溝の位置に相当することになる。

金堂・塔の南面が広い

講堂の位置　次に、講堂の位置と北面回廊との接続のしかたが問題となる。その前に、そもそも講堂は存在したのか、という疑問もあるだろう。この点に関して、遺構のうえからは講堂の存在を示す積極的な証拠はないが、一般に、寺院遺跡における講堂や回廊は、金堂や塔に比べて基壇が低いため、遺構として残りにくいことが知られている。

また、吉備池廃寺の場合、講堂が想定される伽藍全体の中軸線後方は、「第Ⅲ章１ 遺跡の立地と地形」で述べたように、旧地形が最も低い谷地形の底部、もしくは北側の小丘陵から谷へ向かって落ちる斜面部分にあたる。そこでは、第105次池内調査区で、吉備池廃寺創建時の大規模な整地を確認しており、講堂もしくはそれに類する堂宇の存在をうかがわせる。一方、小丘陵上の高燥な立地を示す第111次調査北区の南方では、素掘小溝さえ検出されず、近世以降に大きく削平を受けている可能性が高い。

第105次調査中央区や第111次調査北区で確認した僧房は、掘立柱建物であることから、瓦葺建物とは考えがたい。しかし、それにもかかわらず、この周辺からは比較的多量の瓦が出土している。これらは、近辺に瓦葺建物が存在したことを示すものにほかならないだろう。講堂もしくは食堂のような施設を想定するのが妥当である。さらに、僧房が数的にも比較的充実していたとすれば、僧侶の数も多く、伽藍自体の完成度も高かったものと思われる。前節でも考察したように、史料のうえからも百済大寺の造営は比較的順調に進展したとみられる点とあわせて、講堂が存在したことは確実と考える[24]。

講堂は存在

講堂と北面回廊との関係については、講堂に回廊が接続する形態、もしくは回廊外に講堂をおく形態の二案が想定できる。前者の例には四天王寺と橘寺[25]（明日香村橘）がある。いずれも講堂は金堂や塔などに遅れて７世紀後半～８世紀の建立とされるが、７世紀前半の寺院創建当初から、配置計画自体は存在したと考えられる。また、四天王寺式伽藍配置の源流とみられる百済の寺院にも、回廊が講堂に接続する定林寺（忠清南道扶余郡）のような例がある。吉備池廃寺の場合、伽藍配置を異にしているが、講堂に回廊がとりつくとすれば、金堂と塔のあいだの広い空間を、講堂の前庭部として利用したと考えることができるかもしれない。

一方、飛鳥寺をはじめ、山田寺（桜井市山田）や法隆寺では、講堂は北面回廊の外側におかれている。いわゆる法隆寺式伽藍配置の古例である安倍寺や法輪寺も、講堂を回廊外におく。

安倍寺との共通点

安倍寺は、金堂と塔の距離が大きいことでも吉備池廃寺と似るが、ほかにも、中門が金堂と塔の中点を通る伽藍中軸線上にない可能性があること、金堂周囲に溝をめぐらすらしいことなど、いくつかの共通点が認められる[26]。安倍寺は、百済大寺の「造此寺司」（『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』）に任じられた阿倍倉橋麻呂の造立といわれ[27]、後述する本章４の出土瓦の検討によっても、百済大寺や山田寺の年代に近接した７世紀中葉の創建とみてよい。とすれば、安倍寺と百済大寺（＝吉備池廃寺）の共通点は、両者の創建にかかわった阿倍倉橋麻呂に関連するものと考えるべきだろう[28]。安倍寺が、吉備池廃寺の南東約500mの至近距離に位置する事実とあわせて、両者が密接な関係を有していたことは間違いないと思う。この場合、安倍寺の金堂と塔の間隔が広いのは、先述のような塔の高さと金堂―塔の心々間距離を合わせる設計によるのではなく、たんに百済大寺の平面を縮小したためと考えたい。

講堂は回廊の外に想定

以上のように推定すると、安倍寺の配置は、吉備池廃寺の伽藍を復元するうえでも有効な材料となりうる。よって、ここでは、安倍寺に倣い、講堂を北面回廊の外側におく復元案（Fig. 105）をひとまず提示しておくことにしよう。

ただし、講堂の規模や正確な位置に関しては、まったく根拠がない。そこで、規模については、飛鳥寺や山田寺の講堂が桁行柱間を偶数間とすること、ほかの寺院の例からみて、平面が金堂や塔より大きい可能性があること、次節で考察するように、金堂の柱間寸法は13尺もしくは14尺を基調とすること（この場合の１尺は約0.300m）などから、山田寺講堂や薬師寺講堂などの柱間寸法を参考に、桁行10間（124尺＝10尺＋13尺×８＋10尺）×梁行４間（48尺＝10尺＋14尺×２＋10尺）の入母屋造を想定した。基壇に関しては、基壇の出を14尺として[29]、東西152尺×南北76尺と考えておく。

また、伽藍内での位置については、南面回廊外側柱筋から320大尺北に講堂心をおき、多数の僧房との併存を推定した[30]。講堂の前庭部がやや狭い印象を与えるけれども、回廊基壇との間は実長で約12.4mある。これは、法隆寺西院伽藍（14m前後）より若干狭い程度である。ともあれ、北面回廊以北の様相については不確定要素が多く、上記の復元はあくまで一案にすぎないことを強調しておきたい。

南門の問題　桜井市第12次調査では、中門の南方で２条の東西溝SD441・442を検出し、中ほどにあるベースの高まりSX443とあわせて、調査概報はこの間に吉備池廃寺の南門を想定する[31]。前述のように、これらの溝の中点は、南面回廊外側柱筋から100大尺南にあるとみてよいので（Tab. 12の⑧）、少なくとも伽藍配置上、重要な位置を占めていたことは確実だろう。

しかしながら、その約45m西方でおこなった橋本冠名遺跡の調査（第1トレンチ）では、これらの延長にあたる溝は確認されていない[32]。ただ、それより15m西方の第2トレンチでは、トレンチ北端から2.5～8.5m間で、道路の一部ともみられる硬い遺構面を検出している。また、第1トレンチでも、この南にあたる部分で、硬く踏みしめられたような遺構面（生活面）の存在を認めている。

上記の硬質の遺構面は、南門前方を走る東西道路となる可能性もあるが、いずれも桜井市第12次調査の東西溝SD441・442からは南へかなり隔たっており、性格を特定できない。現状では、桜井市第12次調査区で検出した2条の溝と、その間のベース土の高まりSX443のみが、南門ないし寺域南限に関係づけられる材料であり、門の内外にのびていたはずの道路やそれにともなう溝、遮蔽施設などについては不明とせざるをえないだろう。

遺構解釈の問題点

一方、SD441・442やSX443についても、調査範囲がきわめて限定されたこともあって、南門の南北の雨落溝や基壇と確定できるわけではない（72～73頁）。SD441とSD442の心々間距離は約15.2mに達するので、南北雨落溝間心々間距離で約10.4mを測る中門をはるかにしのぐものとなってしまう。ところが、これらの溝に用いられた石は中門や回廊の雨落溝よりも小さく、溝の規模も貧弱な感が否めない。また、この一帯は、旧流路にあたる地盤がよくない場所だが、このような状況下で、ベース土を基壇土として残しつつ、周囲を削りこんで基壇をつくる方法がありうるのか、という遺構自体の解釈も問題となろう。

南門位置の問題点

加えて、SD441とSD442の間に南門を想定した場合に問題となるのは、伽藍配置全体における南門の位置である。ここに南門を推定すると、金堂・塔それぞれに対応して二つの南門・中門を設けたと考えるか、南門・中門ともに一つずつで、伽藍の軸線が東へ寄せられたと理解するか、どちらかとなろうが、先に中門について検討したのと同様に、なぜ金堂の正面ではなく、西へ寄った位置におかれたのか、その理由を追究しなければならない。けれども、後者の想定では、門の中軸線が金堂中軸線からずれる理由は説明困難である。一方、前者も、東西それぞれの南門・中門が、後方の金堂や塔の中軸線と合致しない理由の説明にはならないだろう。

むしろ、中門の位置が伽藍全体の中軸線寄りに偏している事実を重視すれば、南門は伽藍中軸線上に存在したと考えることも不可能ではない。この場合、吉備池廃寺の金堂と塔は東西に大きく離れている関係もあって、それぞれの中軸線寄りの位置に二つの中門がおかれたとみることができるからである。

もちろん、SD441とSD442の間に南門を想定しないとしても、この2条の溝の性格と、両者の中点が南面回廊外側柱筋から100大尺に位置するという事実をどう解釈するかは問われることになる。その状況から、寺域の南限にかかわる蓋然性は高いと考えるが、この間を道路とみるのも一案であり、柱穴は検出されていないものの、何らかの遮蔽施設の存在を推定することもできよう。けれども、今のところ、それを検証する手だてはない。

いずれにしても、以上のように情報が限られた現況にあっては、2条の溝の性格および南門の位置を確定するのは時期尚早といわざるをえない。中門より南方における遺構の実態とその位置づけについては、資料の増加を待ってあらためて検討すべきであろう。その意味でも、今後、周囲の遺構を含めた遺跡全体に対する厳重な保護と、学術的視点に立った綿密な発掘調査の実施を望みたい。

1） このほか、僧房SB260とSB400は、建物の北側柱筋を揃えているとみられるけれども、方位の振れのとりかたによっては、棟通りや北側柱筋、南側柱筋が揃う可能性も否定できない。いずれにしても、この２つの僧房が配置上密接な関連をもつことは確実だが、SB260とSB400の北側柱を結んだ方位（Tab.9のEG・EF）は、計測した２カ所でも振れが異なる。柱筋が揃うという前提が不確定要素を含む点とあわせて、これを伽藍方位の基準とするのは適当ではないだろう。

2） 南北方向では、２点の関係が、一方からもう一方をみたとき第１象限もしくは第４象限にある場合に －（減法）、第２象限もしくは第３象限にある場合が ＋（加法）となる。東西方向では、同様に、一方からもう一方をみたとき、第１象限もしくは第４象限にある場合は ＋（加法）、第２象限もしくは第３象限にある場合が －（減法）となる。

3） 岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」『研究論集 Ⅷ』奈文研学報第47冊、1989年。

4） 第Ⅲ章２の註34）（75頁）参照。

5） 岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註３）。井上和人「飛鳥京域論の検証」『考古学雑誌』第71巻第２号、日本考古学会、1986年。

6） たとえば、回廊内側柱筋間の実長149.6mを420大尺、回廊棟通りの実長152.9mを430大尺とみると、ともに１大尺=0.356mとなる。これを用いてTab.12のような計算をおこなったが、回廊外側柱筋を基準とした場合のような完好な数値とはならない。また、唐大尺（=大宝令小尺）にあたる尺についても、１尺=0.291～0.299mを仮定して同様な計算を試みたが、完好な数値を得られなかった。

7） 回廊の南北中軸線（伽藍全体の中軸線）は、西面回廊外側柱筋（Tab.11のａ）と東面回廊外側柱筋（Tab.11のｂ）の中点（X=－166,217.5　Y=－14,995.1）を通り、北で0°53′29″西に振れる直線とする。

8） 金 東賢「皇龍寺跡の発掘」（『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年）によれば、東西回廊の棟通り間の距離は、南端で558.03尺、北端で552.75尺を測り、平均555.39尺という。

9） 森 郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局、1998年、77～115頁（初出1991年）。

10） 宮本長二郎「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」『日本美術全集』第２巻、講談社、1990年。澤村 仁「白鳳・天平の寺院建立」『日本古寺美術全集』第３巻、集英社、1979年など。

11） 金堂と塔を東西に並置する伽藍配置が、帰朝した留学生や僧侶によってもたらされた可能性も否定できない。とりわけ、後述するように、吉備池廃寺の回廊の東西規模や塔基壇の大きさが新羅皇龍寺に近似するのは、その計画や、建造中の皇龍寺伽藍の姿が日本に伝えられていたことを示唆するものではなかろうか。

12） 岡田英男によれば、金堂心と塔心の距離は300大尺の1/4にあたる75大尺にとるのが古制らしく、飛鳥寺、若草伽藍（生駒郡斑鳩町）のほか、川原寺（明日香村川原）がこれを踏襲している。一方、山田寺（桜井市山田）と四天王寺（大阪市）は84大尺ほどにとる。岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註３）。

13） 伊東忠太『日本建築の研究・上』伊東忠太著作集第１巻、竜吟社、1937年（1982年に原書房により復刻）、227頁。

14） 岡田英男「西院伽藍と若草伽藍の造営計画」『法隆寺発掘調査概報 Ⅱ －昭和57年度防災工事に伴う発掘調査－』法隆寺、1983年、第86図。

15） 法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺五重塔修理工事報告 附図』1955年。

16） 現在の塔は元禄９年（1696）の修理で五重部分が2.6尺（0.8m）高められた状態を保っており、当初の高さは105尺（31.8m）程度である。すると、塔の高さと金堂－塔心々間距離はほとんど一致することになる。なお、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、五重塔は現状よりはるかに高い16丈（48.5m）と記されているが、昭和大修理によって、四重以下が創建以来一度も改修を受けていない事実が判明し、資財帳の記録は誤りであることが確定している。文献の記載と遺跡だけから、塔の高さと金堂との距離を検討するのは、やや危険がともなうだろう。

17） 法輪寺の場合は、金堂－塔の心々間距離の方が若干長いようだが、法起寺（生駒郡斑鳩町）ではほぼ一致するとみてよい。法輪寺、法起寺については、以下の掲載図により略測した。観光資源保護財団『法輪寺三重塔調査報告書』1972年。村上訒一「法起寺旧境内の発掘」『年報 1970』。

18） 東西両塔の心々間距離は71.71mで、伽藍中軸線から東塔心までは35.81mを測る。また、東西両塔の心を結んだ線から金堂心までの南北距離は29.2mである（奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学

報第45冊、1987年)。基壇上面からの現薬師寺東塔の高さは112.65現尺=34.13m、当初の復元高は114.04尺=34.55mである（浅野 清『薬師寺東塔に関する調査報告書』薬師寺、1981年)。したがって、おおむね伽藍中軸線から東塔までの距離が、東塔の高さに等しいとみることができる。

19）ここでいう「東魏尺」は、同書に通常、曲尺の1.176倍と記された、いわゆる高麗尺（=大宝令大尺）である。「東魏尺」は、『隋書』律歴志の「東後魏尺」（東魏後尺）を指し、『隋書』原文では、晋前尺の「一尺五寸八毫」にあたるとされている。この数値をそのまま用いると、実長は0.348mと算出され、そこから高麗尺ないしその源流とみる説が生まれた。しかし、『宋史』律歴志に引くところでは、「東魏後尺」の晋前尺に対する比率は「一尺三寸八毫」と記されており、この場合の実長は0.300mとなる（藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』綜芸舎、1969年、27頁ほか)。前後の時代の尺の実長から考えても、『宋史』の記述に信をおくべきであって、これが現在の中国および日本を通じた定説となっている。したがって、「東魏尺」を「高麗尺」と同一視することはできない。なお、高麗尺については、第Ⅲ章２の註34）（75頁）を参照されたい。

20）金 東賢「皇龍寺跡の発掘」前掲註８)。

21）同様に金堂−塔間の間隔が広い寺院として、安倍寺を挙げることができる。ここでは、塔基壇の一辺が12.1mほどであるにもかかわらず、塔−金堂の基壇間の距離は約38mもあり、想定される塔の高さよりも明らかに大きい（桜井市『安倍寺跡環境整備事業報告 −発掘調査報告書−』1970年)。この解釈については後述する。

22）法隆寺五重塔と法起寺三重塔の初層平面がほぼ同規模（方6.4m）であり、室生寺五重塔（宇陀郡室生村）がそれらよりはるかに小さい（方2.4m）という事実が示すように、塔の初層平面や基壇規模と塔の層数とは必ずしも関連しない。ただし、高層の塔になるほど、塔の逓減によって上層の平面は小さくなるので、高い塔を建てるために巨大な基壇がつくられた、と解釈するのは不可能でないだろう。

23）法隆寺ほかの事例では、回廊の縦横比を1：$\sqrt{2}$とするものもあるが（岡田英男「飛鳥時代寺院の造営計画」前掲註３))、それを吉備池廃寺に適用すると、南北の回廊外側柱筋間の距離が110.5m（311大尺）あまりとなり、金堂北側の空間が南側よりも大きくなってしまう。そのため、ここでは、金堂と東面回廊の距離から北面回廊の位置を推定することとした。

24）『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、「袁智天皇」（皇祖母尊=皇極）により施入された繡仏１帳の記載がある。これは、『日本書紀』白雉元年（650）10月条、同２年（651）３月条の記事とも対応しており、百済大寺に安置されたものであることは疑いない。一方、『薬師寺縁起』などによると、薬師寺の場合、繡仏は講堂に置かれていたらしい。そもそも繡仏は、礼拝の対象としての本尊的な意味とは異なり、本尊の補足的な性格をもつものと想定されており（守田公夫『刺繡』日本の美術 59、至文堂、1971年)、『七大寺巡礼私記』によれば、薬師寺講堂の繡仏は、平安時代末には最勝会の時のみ懸けられるだけであった。繡仏が、そうした法会の荘厳具のような性格をもつとすれば、百済大寺の場合も、講堂におかれたとみるのが自然ではなかろうか。

25）奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年。

26）桜井市『安倍寺跡環境整備事業報告』前掲註21)。

27）福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書店、1948年、290～293頁。

28）直木孝次郎「百済大寺の建立と阿倍氏」『相愛大学研究論集』第15(１)巻、1998年。

29）一般に、講堂には簡素な組物を使うため、基壇の出は小さいが、平城京の薬師寺講堂では、検出した礎石位置と雨落溝の距離から、三手先組物を使用したことが判明している（箱崎和久「薬師寺講堂について」『日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠、1997年)。平城京薬師寺は本薬師寺と堂塔の規模がほとんど一致し、本薬師寺の規模を踏襲しているとみられる。このほか、現存するものでは、京都の東寺講堂（1490年再建）が、それまでの基壇規模を踏襲して三手先組物を用いている。以上の例から、主要官寺の講堂には三手先組物が使用された可能性が大きいといえよう。

30）伽藍中軸線上の北方には僧房SB260が独立するが、この南にはSB400に対するSB340のような僧房が並ばないことから、SB260の南に講堂や食堂などの礎石建物を想定することも可能だろう。

31）桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年、13～16頁。

32）前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度（第２分冊)』奈良県立橿原考古学研究所、1985年。

3　堂塔の建築的考察

A　建物造営尺の検討

この節では、吉備池廃寺の個々の建物について検討してみたい。前節の考察により、堂塔の配置には、大宝令大尺に相当するいわゆる高麗尺（大尺）が用いられていることが判明した。一方、堂塔の柱間寸法には、これとは別の尺度が使用されたことが想定できる。そうした建物の造営尺については、金堂や塔、中門、回廊では、礎石位置が明確でないため検討できないが、３棟の僧房SB260・340・400から推定が可能である。ただし、これらの僧房は、掘立柱建物という性格上、礎石建物のように、礎石位置から柱心を定め、造営尺を求めるという精密な手法をとることができない。したがって、厳密な寸法を追究することは不可能であり、算出される数値はあくまで概略を示すものであることを断わっておきたい。

「第Ⅲ章２ 遺構各説」で述べたように、SB260の柱間寸法は桁行・梁行ともに3.0m、SB340では桁行が2.5mほどで、梁行は2.7mである。SB400は、梁行を２間分とみれば、桁行・梁行ともに柱間寸法の単位は2.7mとなる。柱が抜き取られているため、個々の柱間についてこれ以上正確に把握するのは困難だが、SB340は桁行11間の全長が約28.0mと計測され、遺構の観察から、等間と判断できた。よって、SB340の桁行柱間寸法は、平均2.55mと算出される。

以上から、僧房の柱間寸法は、SB260が3.0m、SB340が2.55mと2.7m、SB400が2.7mであり、これらをほぼ完数値とする造営尺は、１尺＝0.300mの長さとなる。すなわち、SB260が桁行・梁行ともに10尺、SB340が桁行8.5尺・梁行９尺、SB400が桁行・梁行とも９尺に相当する。この数値は前述のように厳密なものではなく、誤差を含んでいるが、おおむね、これを建物の造営尺と考えて誤りないだろう。

なお、上記の造営尺が、唐大尺すなわち大宝令小尺にあたることは間違いない。大宝令の雑令は、土地を測る場合には小尺の1.2倍にあたる大尺、それ以外は小尺を使用するよう定めており、吉備池廃寺は、その規定どおりの状況で造営された様相がうかがえる。

ちなみに、前節で算出した１大尺＝0.355mを1.2で除して１小尺の長さを求めると、0.296mという値となる。これを造営尺とみることももちろん可能だが、その場合、SB340の桁行柱間8.5尺を11倍すると27.7mとなって、計測値との間に0.3mの差を生じてしまう。ここでは、遺構との整合性を重視して、１尺＝0.300mを吉備池廃寺の建物造営尺と考えることにしよう。また、これは、643年に金堂の造営を開始した山田寺（桜井市山田）の伽藍中心部の造営尺（1尺＝0.3024m）[1]にごく近い数値でもある。

建物造営尺は0.300m

B　金　堂

基壇規模　上部構造に関わる金堂基壇の規模は、東西約37m×南北約25mと推定される（41頁）。これを、さしあたり桁行124尺×梁行84尺と考えておく。この規模は、飛鳥時代[2]の金堂としては格段に大きく、百済大寺の後身である文武朝大官大寺金堂（明日香村小山）には及ばないものの、面積では、同時代に造営された山田寺の2.8倍、本薬師寺金堂（橿原市城殿町）の 1.7倍に達

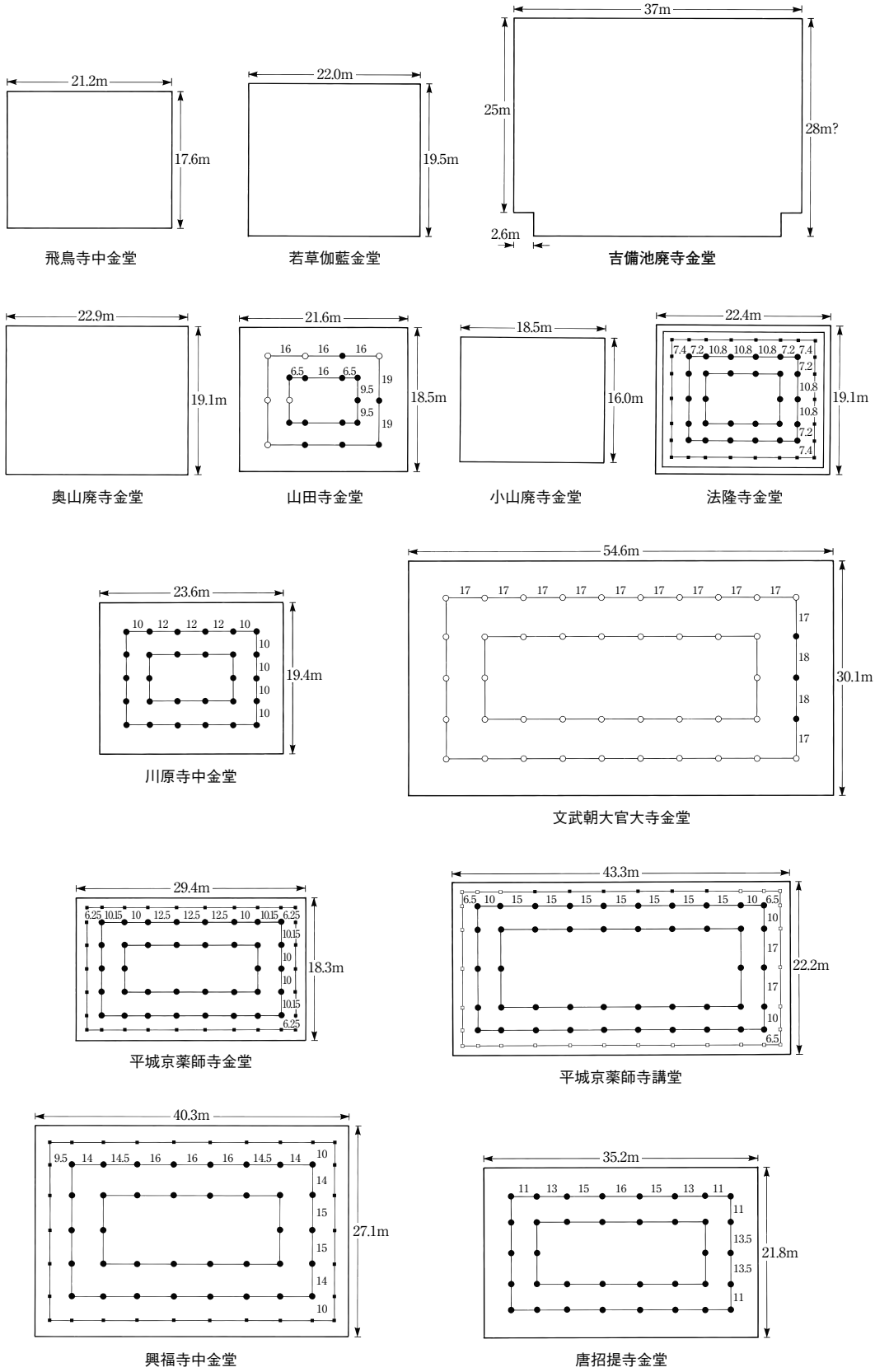


Fig. 108　7～8世紀における金堂等の平面規模の比較　1:800

基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺＝0.294～0.303m）で統一

する（Fig. 108）。巨大な金堂が建っていたことは間違いない。

ところで、村田健一は、現存する古代建築に使用されている継手のない部材の長さは、最長で10m台前半であることをつきとめ、これが当時入手可能な材寸の限界で、建物規模を規定する要因のひとつと推定した[3)]。そして、軸部や組物に継手をつくらない塔や校倉などは、とくに材料の長さによる制約が大きいと考え、飛鳥時代や奈良時代前半における塔の初重平面が、原則的に一辺８m以下である理由を、一本材として得られる材料の長さの限界に結びつけている。また、８世紀後半に８mを超える塔が多くみられることから、軒桁（丸桁）などの長材に継手をつくるなどの構造技法が発達し、平面規模が拡大した可能性を指摘した。

吉備池廃寺の金堂は、基壇規模からみて、継手のない部材で組み上げることは不可能であり、１丁10mを限度とすれば、桁行材で３丁、梁行材で２丁程度が必要になると考えられる。したがって、村田の見解に従うならば、構造技法の発展は、７世紀中期にはすでにその萌芽があったとしなければならない。それにもかかわらず、飛鳥時代の寺院遺跡で、吉備池廃寺金堂に匹敵する規模の遺構をほかに認めることができないのは、その技術が一般的なものではなく、当時、それを動員できる寺院がきわめて限られていたことを示唆するものであろう。つまり、吉備池廃寺金堂の基壇は、たんに巨大な規模だけが問題なのではなく、その上部に建つ建築の構造技法自体が先進的なものであり、それを導入できた発願者の権力や財力がひじょうに大きかったことをも物語っているのである。

上部構造は先進的

ともあれ、当時の有力豪族の発願による寺院や、大陸から新技術をもたらしたと推定される渡来系氏族の寺院に、吉備池廃寺金堂に匹敵するものは存在せず、これをしのぐ規模の金堂は、藤原京および平城京の官寺でようやく現れるにすぎない。吉備池廃寺の寺名を文献史料から導くとすれば、やはり百済大寺以外にはありえないだろう。

平面復元の前提　基壇規模から金堂の平面を推定するにあたり、前提となる条件をいくつか確認しておきたい。

まず、基壇の出すなわち軒の出と、それにともなう組物や屋根形式について検討するが、７世紀～８世紀前半の金堂建築では、側柱（この場合、裳階柱は含まない）からの基壇の出が12～17尺と比較的大きいことが知られている（Fig. 108）。これは軒の出の大きさを示すものであり、吉備池廃寺金堂に関しても、軒の出の大きい三手先程度の組物を想定するのがもっとも自然だろう。また、ほかの金堂の例からみて、屋根形式は寄棟造もしくは入母屋造、すなわち側柱からの基壇の出が四周とも等しい形態と考えられる。この場合、基壇の出を13～17尺程度とすれば、建物本体は桁行90～98尺×梁行50～58尺と想定できる。

三手先組物を想定

つぎに、山田寺金堂のような、身舎と廂の柱間を同数とする柱配置をもつ可能性について検討してみよう。山田寺金堂の柱間寸法は、身舎が桁行中央間16尺、端間6.5尺、梁行9.5尺等間、廂が桁行16尺等間、梁行19尺等間であり、身舎柱からの廂の出は9.5尺である（Fig. 108）。山田寺金堂式[4)]の柱配置で特徴的なのは、身舎と廂の桁行中央間をそろえ、廂の桁行端間＝身舎の桁行端間＋廂の出とすることであり、梁行も同様に、廂梁行柱間＝身舎梁行柱間＋廂の出とする。このため、身舎の桁行端間は、廂の桁行端間より廂の出の分だけ小さくなるが、そのかわりに、内部空間の広さは確保される。

こうした柱配置を吉備池廃寺に適用する場合、平面を桁行・梁行方向ともに大幅に拡大にす

る必要がある。その際に、建物の隅部分における上記の原理には変化がないと仮定し、たとえば外観が桁行・梁行とも14尺等間、廂の出を８尺とする桁行７間×梁行４間の金堂を想定すると、身舎の隅の間は６尺、梁行は６尺＋14尺＋14尺＋６尺＝40尺となる。つまり、身舎内部の空間が大きく、建物の外周に近い部分にだけ柱が密集する構造となってしまう。この場合、内部にもうひとまわり柱をめぐらすことが必要だろう。しかし、それならば、山田寺金堂式の柱配置とするより、単純な四面廂建物とするほうが合理的である。山田寺金堂式の柱配置は、本来、比較的小さな仏堂で、身舎内部空間を広くしようとする場合に最大の効果を発揮するものであって[5]、規模の大きな仏堂にとっては合理的とはいえまい。吉備池廃寺金堂の平面には想定しがたいと考える。

次に、法隆寺西院伽藍（生駒郡斑鳩町）の建築に見えるような隅一組物[6]を用いた可能性について検討してみたい。隅一組物の場合、軒桁（丸桁）を壁面から持ち出すと、隅部分で軒桁の支持点間の距離が広くなることから、隅の間（＝廂の出）をその他の柱間よりも小さくすることが求められる。すると、梁行の大きな建物では、結果的に山田寺金堂式の柱配置と大差なく、身舎梁行柱間が過大となって、建物の外周に近い部分にだけ柱が密集することとなる。やはり、

Tab. 13　金堂等の基壇規模と縦横比　単位：m

堂宇名	年代	桁行		梁行		全長の比	備考	文献
		間数	全長	間数	全長	桁行/梁行		
飛鳥寺中金堂	6世紀末	－	21.2	－	17.6	1.21		1
若草伽藍金堂	7世紀前半	－	22.0	－	19.5	1.13		2
奥山廃寺金堂	7世紀前半	－	22.9	－	19.1	1.20		3
山田寺金堂	7世紀中葉	3	21.6	2	18.5	1.17	放射状組物	4
川原寺中金堂	7世紀後半	5	23.6	4	19.4	1.22		5
小山廃寺金堂	7世紀後半	－	18.5	－	16.0	1.16		6
法隆寺金堂	7世紀後半	5	22.4	4	19.1	1.17	裳階付・二重基壇	7
本薬師寺金堂	7世紀末	7	29.5	4	18.2	1.62	裳階付	8
文武朝大官大寺金堂	8世紀初	9	54.6	4	30.1	1.81		9
興福寺中金堂	8世紀前半	7	40.3	4	27.1	1.49	裳階付	10
平城京薬師寺金堂	8世紀前半	7	29.4	4	18.3	1.61	裳階付	11
平城京薬師寺講堂	8世紀前半	9	43.3	4	22.2	1.95	裳階付	12
唐招提寺金堂	8世紀後半	7	35.2	4	21.8	1.62	現存	13
吉備池廃寺金堂		7？	37	4？	25	1.48	裳階付？	

文献

1　奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第５冊、1958年
2　文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報』1969年
3　『藤原概報 26』1996年
4　奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年
5　奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第９冊、1960年
6　奈良県立橿原考古学研究所『明日香村紀寺跡発掘調査概報』奈良県遺跡調査概報1977年度、1978年
7　法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺金堂修理工事報告』法隆寺国宝保存工事報告書第14冊、1956年
8　『藤原概報 23』1993年
9　小澤　毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会、1993年
10　奈文研『興福寺 －第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報 Ⅲ－』興福寺、2002年
11　奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年
12　寺崎保広「薬師寺講堂の調査」『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈文研、1996年
13　太田博太郎編『日本建築史基礎資料集成 第４巻 仏堂 Ⅰ』中央公論美術出版、1971年

これも、吉備池廃寺のような基壇規模をもつ建物に適用するのは困難であろう。

もっとも、柱間寸法を比較的小さくとり、廂を二重にめぐらす梁行６間の平面を想定すれば、ありえない構造ではないかもしれない。ただし、隅一組物とする要因が、村田健一が指摘するような部材の組み上げ方法によるとすれば、[7]そうした形式をとらない薬師寺東塔（奈良市）以後の建物に一般的な構法を、吉備池廃寺の時点まで遡らせることができるかが問題となる。

以上、当然のことではあるが、ほかの金堂と比較して格段に大きい吉備池廃寺金堂の平面に、同時代の比較的小さな仏堂の構造をそのまま適用することはできない。むしろ、先述したように、この巨大な基壇をもつ建築に用いられた構造技法は、当時先進的なものであった可能性が高く、８世紀の遺構を視野に入れて検討する必要があるだろう。

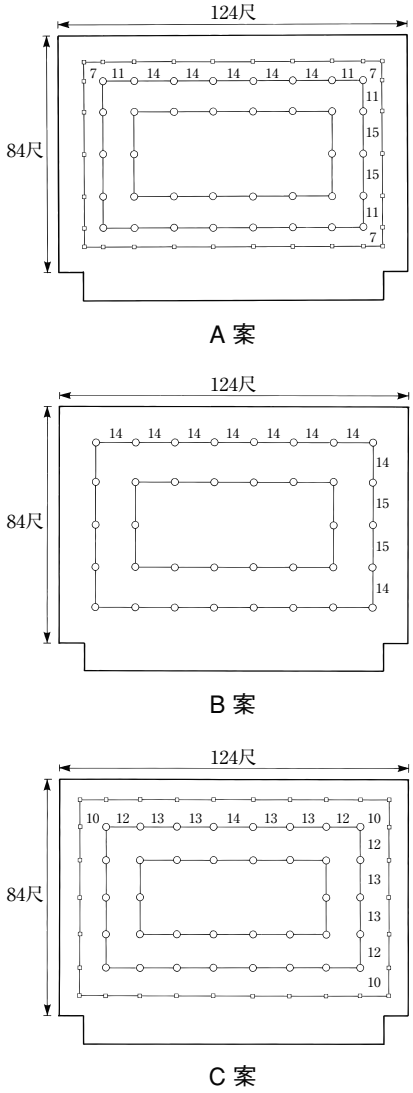


Fig. 109　金堂の平面復元案　1:800

金堂の平面復元　Tab. 13は、大和の主要寺院の金堂を中心に、基壇規模と縦横比を比較したものである。Fig. 108とあわせて通観すると、７世紀末以降の金堂は、桁行が７間ないし９間と大きくなる関係上、梁行に対する桁行の比率が増し、平面がやや細長い形状となる。吉備池廃寺金堂も同様の特徴をもち、基壇の縦横比（1.48）は、桁行７間×梁行４間の興福寺中金堂（1.49、奈良市）や薬師寺金堂（1.61）と近似することがわかる。したがって、吉備池廃寺金堂についても、基壇の実長および縦横比から、桁行７間×梁行４間とみるのが妥当だろう。

金堂平面は７間×４間

ただ、興福寺中金堂や薬師寺金堂には外側に裳階がつくけれども、吉備池廃寺金堂が裳階をそなえていたかどうかは明らかでない。現在のところ、裳階用と考えられる小型瓦は出土していないが、[8]裳階の屋根には法隆寺金堂や五重塔のような板葺も想定できるため、ここでは裳階がつく可能性を含めて推定した。なお、基壇南面の張り出しについては、建物本体の上部構造とは関係のないものとみたので、張り出し位置を柱位置ととくに関連づけることはしていない。しかし、正面における基壇上面の面積を確保するためのものという観点から（41頁）、側柱からの基壇の出が大きくなる復元案では、裳階をつけることにした（Fig. 109）。

復　元　案

復元案Ａは、薬師寺講堂のように、廂の出をやや小さくし、身舎の梁行を大きくとった案である。基壇の出が16尺となることから、薬師寺金堂や講堂の例に倣い、裳階の出は少し小さめの７尺と想定した。この場合、屋根は入母屋造となる。[9]

復元案Ｂは、大官大寺金堂に倣い、桁行柱間をすべて同寸とする案である。基壇の出は、他の案よりやや小さい。ただし、薬師寺講堂では基壇の出10.5尺でも裳階（6.5尺の出）をつけているので、この案でも裳階をつけることは可能だが、他との区別を出すために、裳階をつけない案とした。屋根は入母屋造となる。

復元案Ｃは、屋根を寄棟造とする案で、興福寺中金堂や唐招提寺金堂（奈良市）のように、わずかではあるが桁行中央間に向けて柱間を広くした。この場合、基壇の出が17尺にもなることから、興福寺中金堂に倣って、裳階の出を比較的大きな10尺にとった。

Ｃ　塔

心礎の特徴　吉備池廃寺の塔心礎抜取穴は、南北6.7m以上×東西5.4m以上、現存する版築土上面からの深さ20～50㎝を測る、ひじょうに大きなものである（48頁）。これは、心礎自体が巨大であったことを示すものだろう。

一方、文武朝大官大寺の塔心礎抜取穴は、南北5.6m×東西5.4mで、現存する基壇版築土上面から１mほどの深さがあった[10]。明治初年に調査したという岡本桃里の礎石配置図[11]によれば、この塔心礎は南北12尺（3.6m）×東西10尺（3.0m）の大きさとされている。

吉備池廃寺の場合、塔心礎抜取穴の全容は不明だが、現在確認できる抜取穴の平面規模は、すでに文武朝大官大寺のそれを上まわっており、３m四方以上の心礎をもつことは確実とみられる。こうした巨大な塔心礎の例としては、ほかに尼寺廃寺（香芝市）の心礎が約3.8m四方[12]、久米寺（橿原市久米町）の心礎が4.1×2.9m[13]の規模をもち、いずれも日本最大級である。吉備池廃寺の塔心礎も、これらに匹敵する巨石であったと推定される。

日本最大級の心礎

ところで、吉備池廃寺の心礎には据付穴が認められず、基壇版築の途中で据えたものと考えられる。現存する基壇高は最大2.3mを測るので、厚さ1.2mの尼寺廃寺塔心礎を参考に、その頂部付近まで基壇を積み上げていたとすれば、基壇高は約2.8mとなる（50頁）。この場合、心礎上面が基壇上に出た地上式心礎となるが、たとえば約1.2mほど心礎を地下に埋める尼寺廃寺塔のような地下式心礎[14]を想定すると、基壇高は３mを大幅に超える異常な高さに復元せざるをえない。したがって、地上式心礎を想定するのが妥当だろう。現在確認できるもっとも古い地上式心礎は、若草伽藍の塔（生駒郡斑鳩町、７世紀前半）であり、吉備池廃寺（＝百済大寺）の塔は、それに次ぐ古例とみられる。

地上式心礎

上記のような規模の心礎を、上面が地上に出るように据え付けると、心柱を囲む四天柱の礎石を据える余地はほとんどなく、心柱を囲む四天柱は省略するか、心礎上に立てるかのいずれかであったと考えざるをえない。ちなみに、文武朝大官大寺の塔は、方５間の平面で柱間寸法は10尺等間だが、四天柱礎石の据付・抜取痕跡がなく、四天柱の礎石は存在しなかった可能性が高いとされている[15]。しかし、四天柱自体を省略した場合、内部の横架材を３間分架けわたす必要があり、文武朝大官大寺のように柱間10尺とすると、30尺（＝約９m）以上の横架材が必要となって、構造的な問題を生じるおそれが大きい。したがって、心礎上に四天柱を立てたとみるのが妥当だろう。

四天柱は心礎上か

基壇規模　現存する塔基壇と心礎抜取穴から、基壇は一辺32m程度と推定される（50頁）。これは、飛鳥時代の他の塔基壇はもちろんのこと、国内では、一辺23.8mの基壇をもつ東大寺七重

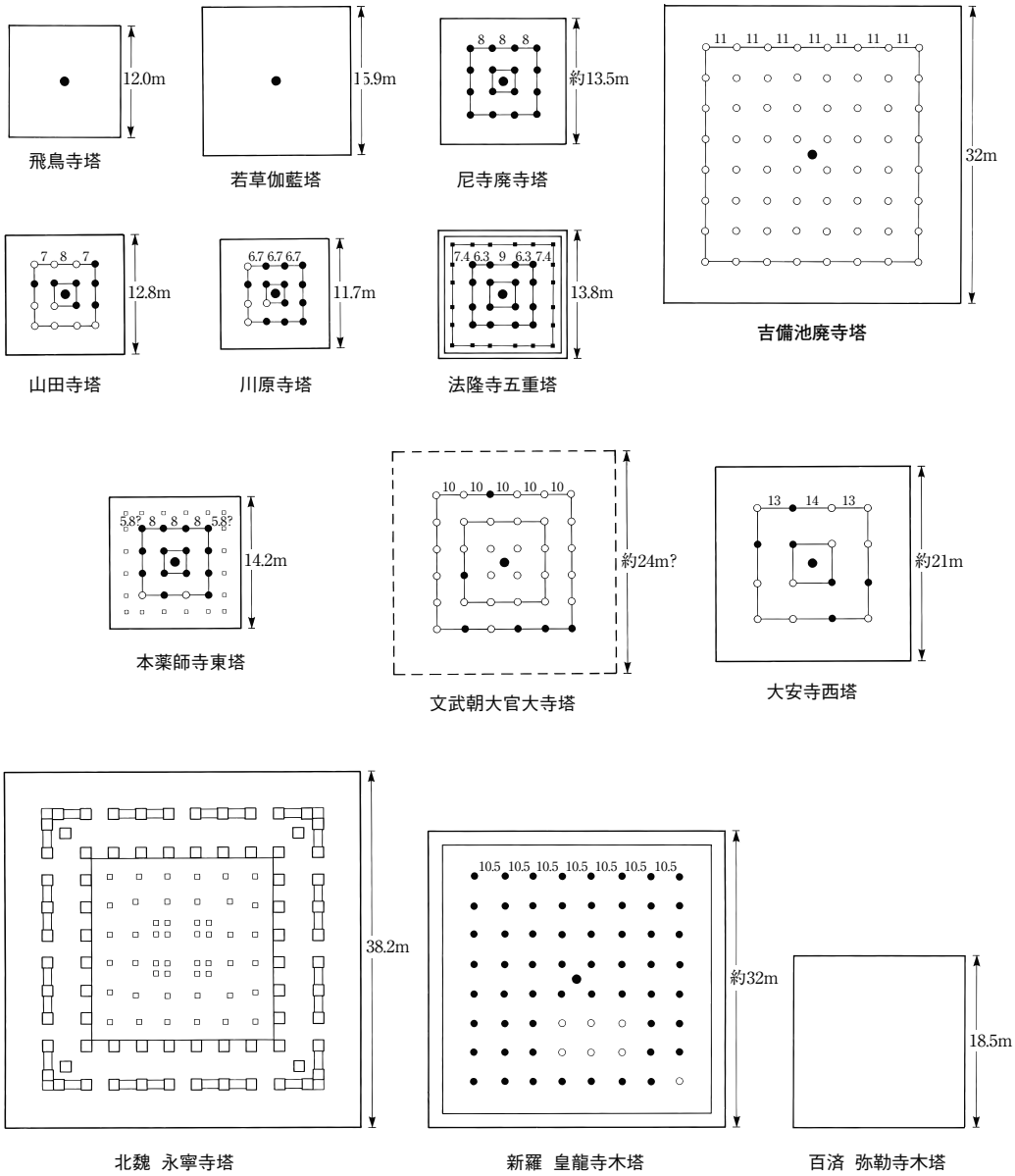


Fig. 110　古代の塔の平面比較　1:800

基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺＝0.294～0.303m）で統一

塔[16]（奈良市）をもしのぎ、文武朝大官大寺[17]に比肩する規模となる（Fig. 110）。

また、東アジアに目を向ければ、中国北魏の首都洛陽において、516年に霊太后胡氏の発願で造営された永寧寺九重塔（河南省洛陽市）の一辺38.2m[18]にはおよばないが、百済の武王が益山の地に7世紀前半に完成させた弥勒寺木塔（九重塔、全羅北道益山郡）の一辺18.5m[19]を上まわり、新羅の善徳女王が645年に完成させたと記される皇龍寺木塔（九重塔、慶尚北道慶州市）の一辺32m程度[20]とほぼ同じ規模を示す。したがって、当時の東アジアでも屈指の規模をもつ塔だったことは疑いない。

東アジア屈指の塔

こうした中国および朝鮮半島（韓半島）の九重塔は、いずれも皇帝や王が関与して建設されたものに限られる。永寧寺九重塔は534年に焼失してしまうものの、吉備池廃寺（＝百済大寺）の造営にあたって、舒明天皇の意識にそれらが影響を与えた可能性は充分に考えられよう。巨大

な塔基壇の上には、やはり巨大な平面と高さをもった九重塔が建っていた蓋然性がきわめて高いといえる。[21)]

この場合、前項で引用したような、部材長と建物規模に関する分析は適用できなくなる。すなわち、部材長が10m台前半を限度とするならば、一丁材で塔の軸部を組み上げるのは到底不可能であり、３丁程度の継手をもつ塔を想定せざるをえない。したがって、現存する塔からはうかがえない何らかの構造技法的な工夫があった可能性は大きいだろう。ただし、一方で、歴史上にあらわれる九重塔は、百済大寺や大官大寺のほか、平安後期の法勝寺八角九重塔など、ごくわずかしかない。奈良時代の大安寺や東大寺でさえ七重塔であることを勘案すると、百済大寺から大官大寺に至る九重塔には、建物自体の構造的欠陥もしくは建設時の技術的問題が存在した可能性も否定できない。

塔の平面復元　吉備池廃寺の塔基壇では、心礎抜取穴以外に礎石の痕跡を確認していないため、柱配置を復元する材料がない。ここでは、百済大寺の後身にあたる文武朝大官大寺と、新羅皇龍寺の発掘調査例を参照しながら、平面を推定することにしたい。[22)]

文武朝大官大寺の塔は、1904年に礎石抜取穴を実測した本澤清三郎の記録によれば、方５間で柱間は11尺とされている。その後、1978～1979年の発掘調査では、柱間寸法を10尺とみる方が遺構に合致するとした。[23)]一方、新羅の皇龍寺木塔は、方７間の礎石が残り、柱間寸法はすべて3.1～3.2mである。[24)]これらの10～11尺という柱間寸法は、７世紀の塔と比較すると格段に大きく、８世紀後半の各地の国分寺クラスに等しい。[25)]塔についても、金堂と同様に、８世紀の建築も視野に入れて考える必要があるだろう。

そこで、まず、吉備池廃寺の塔基壇一辺約32mを107尺とみる。そして、金堂で想定したように、軒の出を13～17尺とすれば、塔の初重平面は一辺73～81尺と算出される。柱間については、現存する建築や遺跡でも中央間を広くとる例は多いけれども、皇龍寺に倣って等間と推定しよう。すると、それに合致するのは、方７間、11尺等間（一辺77尺）の平面となる。この場合、軒の出は15尺となる。

方７間
11尺等間

なお、上記の平面で、法隆寺金堂や五重塔のような隅一組物の形式をとると、隅の軒桁（丸桁）の支点間が15尺以上あくことになり、法隆寺と同様、隅部分の軒の垂下は免れないと思われる。したがって、隅一組物以外の構法を想定するべきだろう。

D　中門と回廊

中門の平面復元　中門の基壇規模は、東西12.0m×南北9.8mほどと推定される（52頁）。ここから復元できる中門は、桁行３間×梁行２間の規模である。柱間寸法については不明だが、東南隅柱位置付近にある土質の違いSX335を、礎石の据え付けもしくは抜き取りの痕跡とみると、桁行中央間3.6m、両端間2.7m、梁行3.4m、軒の出1.8m程度となり、切妻造八脚門を想定することができよう。階段の痕跡は認められず、雨落溝の張り出しもないことから、礎石程度の高さをもつ基壇とすれば、基壇内に切り込み階段を設けた可能性が高い。

中門は切妻造八脚門

回廊の平面復元　前節で述べたように、回廊の梁行寸法は伽藍配置を考察するうえでも重要なため、最初に類例を検討してみたい。Tab.14は、おもに発掘調査で確認した回廊の梁行寸法と、柱心からの基壇および雨落溝の出を比較したものである。

まず基壇の出について、実寸法では、四天王寺（大阪市）が１ｍを切る（0.76m）一方、文武朝大官大寺や本薬師寺は1.5mを越えているが（それぞれ2.1m、1.7m）、１～1.5m程度が標準と考えられる。梁行寸法に対する基壇の出の割合は、ややばらつきがあるけれども、３割前半～４割前後を標準とみるのが妥当だろう。

次に、柱心からの雨落溝の出を比較すると、文武朝大官大寺や本薬師寺では実寸法も大きく（それぞれ2.4m、2.0m）、梁行寸法に対する比率も５割を上まわっている。これは、法隆寺西院回廊とは異なり、地垂木と飛檐垂木からなる二軒とするためだろう。なお、８世紀後半の坂田寺（明日香村阪田）も、梁行寸法に対する雨落溝の出の割合が大きいが（0.523）、実寸法からは一軒とみてよい。坂田寺回廊は檜皮葺だったことが判明しており、屋根材が軽いために軒の出の割合を大きくすることができたものと推定される。以上、雨落溝の出については、梁行の45%前後で、実寸法1.5～1.8mを標準とみるのが妥当と考える。

吉備池廃寺の場合、もっとも検出状況のよい南面回廊で、南北の雨落溝の心々間距離は6.2～6.6mであり、片側で20㎝程度ばらつく。まず、雨落溝の出がもっとも小さくなる6.2mの場合の回廊梁行寸法を検討しよう。なお、吉備池廃寺回廊の基壇規模は5.4mと想定でき、単廊とみ

Tab. 14　回廊の梁行寸法と基壇・雨落溝の関係　単位：m

	梁行寸法	基壇幅	基壇の出	雨落溝の出	基壇の出／梁行	雨落溝の出／梁行	備　考
飛鳥寺	3.64	6.12	1.24	1.58	0.342	0.433	文献１
四天王寺	3.94	5.45	0.76	－	0.192	－	文献２
橘寺	2.73	5.76	1.52	－	0.556	－	文献３
山田寺	3.78	6.35	1.29	1.59	0.340	0.419	文献４
川原寺	3.82	6.43	1.30	1.83	0.341	0.480	文献５
法隆寺西院	3.7	6.1	1.29	1.59	0.348	0.430	文献６
本薬師寺	3.7	7.1	1.7	2.0	0.459	0.541	文献７
文武朝大官大寺	4.2	8.4	2.1	2.4	0.500	0.571	文献８
坂田寺	3.03	5.4	1.19	1.59	0.391	0.523	文献９
吉備池廃寺 案１	3.3	5.4	1.05	1.45	0.318	0.439	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案２	3.15	5.4	1.125	1.6	0.357	0.508	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案３	3.0	5.4	1.2	1.75	0.400	0.583	雨落溝心々6.2m
吉備池廃寺 案４	3.3	5.4	1.05	1.65	0.318	0.500	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案５	3.35	5.4	1.03	1.625	0.306	0.485	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案６	3.4	5.4	1.00	1.6	0.294	0.471	雨落溝心々6.6m
吉備池廃寺 案７	3.3	5.4	1.05	1.5	0.318	0.455	雨落溝心々6.3m
吉備池廃寺 案８	3.3	5.4	1.05	1.55	0.318	0.470	雨落溝心々6.4m
吉備池廃寺 案９	3.3	5.4	1.05	1.6	0.318	0.485	雨落溝心々6.5m

文献　１　奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第５冊、1958年
２　文化財保護委員会『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告第６、1967年
３　奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年
石田茂作「橘寺・定林寺の発掘」『飛鳥』近畿日本叢書第３冊、近畿日本鉄道株式会社、1964年
４　奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年
５　奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第９冊、1960年
６　奈良県教育委員会『国宝法隆寺廻廊他五棟修理工事報告書』、1983年
７　『藤原概報 24』1994年
８　『藤原概報　９』1979年
９　『藤原概報 22』1992年

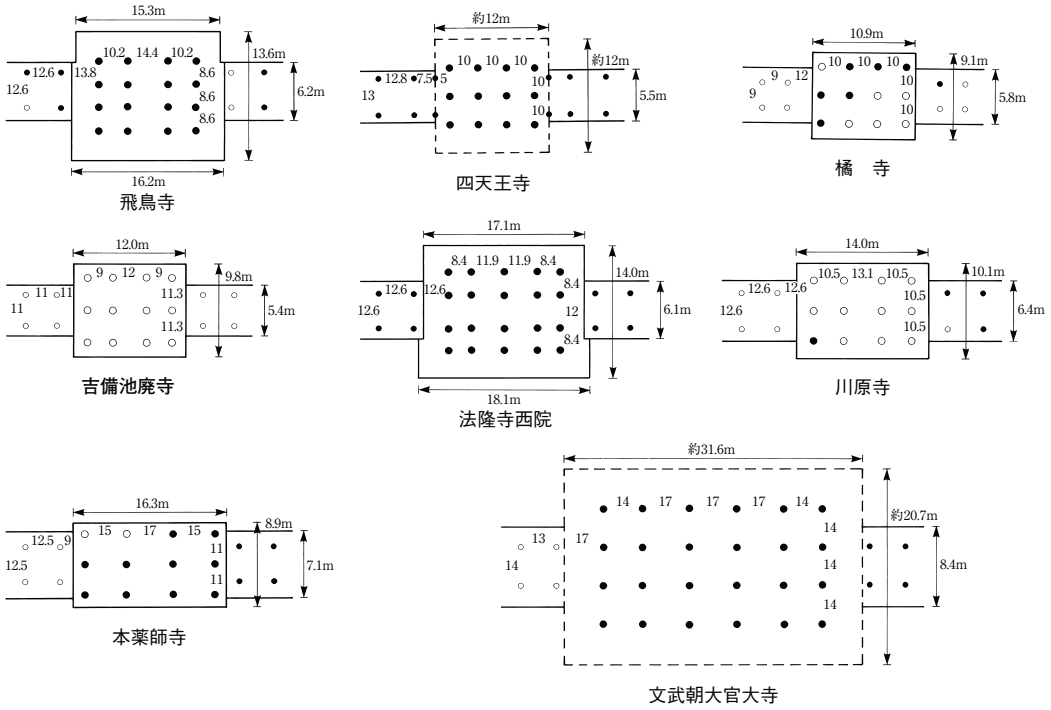


Fig. 111　飛鳥時代の中門と回廊の比較　1:800

基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺＝0.294～0.303m）で統一

て間違いない（54頁）。このとき、回廊の梁行寸法として適当な値は、3.3m（11尺）、3.15m（10.5尺）、3.0m（10尺）の3案に絞られる（Tab. 14の案1～3）。

3.3mの場合は、基壇および雨落溝の出の実寸法がそれぞれ1.05m、1.45mで、若干小さい感があるが、先に推定した標準値に近く、不自然な数値ではない。これに対して、3.15mとすると、梁行に対する雨落溝の出の比率がやや大きくなってしまう（0.508）。3.0mの場合は、さらにその比率が増し、実寸法では一軒と考えて充分なのにもかかわらず、坂田寺を大きく越える数値（0.583）となる。吉備池廃寺の回廊の屋根は瓦葺とみてよいので、こうした寸法は考えがたいだろう。雨落溝の出が、これより20㎝ほど大きくなる可能性があることを考慮すれば、回廊の梁行寸法は3.3mと復元するのが妥当である。

次に、雨落溝の出が最も大きくなる6.6mの場合は、回廊の梁行寸法として適当な値は、3.3～3.4mとなる（Tab. 14の案4～6）。しかし、梁行を3.35mや3.4mにとると、梁行寸法に対する基壇の出の比率が、標準を下まわってしまう（それぞれ0.306、0.294）。梁行に対して雨落溝の出の割合がやや大きい傾向はあるものの（0.500）、やはり3.3mが適当な寸法といえる。以上、回廊の梁行寸法は3.3mと考えてよいだろう。

回廊梁行は3.3m

なお、遺構自体にばらつきがあるため、柱心からの雨落溝の出は必ずしも一定しないが、伽藍配置を検討するうえでは、回廊の柱位置と雨落溝の出をかりに定めておく必要がある。そこで、雨落溝心々間距離を6.3m、6.4m、6.5mにとった場合についても、それぞれ検討をおこなった（Tab. 14の案7～9）。雨落溝の出と梁行寸法に対するその割合（括弧内）は、順に1.5m（0.455）、1.55m（0.470）、1.6m（0.485）となる。いずれもとくに無理な数値ではないが、伽藍配置の検討では小数点以下第1位までとしたことを勘案し、雨落溝の出と梁行寸法に対する比

率を、山田寺回廊（1.59m、0.419）や法隆寺西院回廊（1.59m、0.430）に近い数値に求めるとすれば、雨落溝の出を1.5m（0.455）と考えるのが妥当だろう。この場合、雨落溝心々間距離は6.3mと復元できる。

一方、回廊の桁行寸法については、検討する材料がないけれども、山田寺回廊や法隆寺西院回廊などの例から、梁行寸法と同程度と推定しておく。

中門と回廊の規模　金堂と塔の巨大さに比べると、中門・回廊は意外に小規模である。とくに中門は、飛鳥寺（明日香村飛鳥）や法隆寺西院、文武朝大官大寺など、飛鳥時代から藤原宮期の寺院の中門が、しばしば梁行を３間にとるのと比較しても、小さい感は否めない（Fig.111）。

回廊は、７世紀までの寺院に一般的な単廊である。復元される梁行寸法は、ほかの寺院にくらべて実寸法ではやや小さく、柱心からの雨落溝の出も、大官大寺や本薬師寺ほど大きくない。飛鳥寺や山田寺、法隆寺などの系譜に連なる、飛檐垂木のない一軒の構造と考えられる。

中門と回廊のバランスは適当

しかしながら、以上のような規模は、中門と回廊の組み合わせだけをみれば、Fig.111からも明らかなように、バランスのとれたものと言える。しかし、やはり金堂や塔の規模に対しては、ややバランスを欠くといわざるをえない。これは、前節で想定したように、吉備池廃寺が二つの中門をそなえた形式であったことに関わるのだろうか。

E　僧　房

僧房の平面　現存する最古の僧房建築は、法隆寺西院伽藍の東室（747年以前に建立）であり、発掘調査で確認された最古の僧房遺構は、川原寺（665年頃創建、明日香村川原）の西僧房である[26]（ただし、僧房の創建年代は不明）。吉備池廃寺の僧房SB340・400・260は、百済大寺（639年創建、673年移建）の僧房と考えられるから、現時点では最古の僧房遺構となる。したがって、同時代の僧房の実態が不明なため、以後の僧房と比較してみることにしよう（Fig.112，Tab.15）。

最古の僧房

まず、８世紀における官寺の僧房は、桁行総長がさらに長いことがわかる。しかも、その内部を２間もしくは３間ごとに仕切って一つの房をつくり、建物の中央部に馬道とよぶ通路を設けるのが一般的である。

しかし、SB340・400・260では、間仕切りの柱や床束の痕跡は発見できなかった。また、SB340の桁行は11間で、この程度ならば馬道を設ける必要は乏しいが、２間または３間の同規模の房を連ねることができず、変則的な組み合わせとしなければならない。たとえば、建物の中央に馬道を想定すると、馬道をはさんだ両側に２間と３間の房を想定することになろう。この場合、川原寺の僧房に似たものになるが、全長が短すぎる感がある。一方、２間一房×５房という形態を考えると、馬道を建物の中央に設定できないことになる。

SB340は、遺構のうえから、土間か床張りかを特定することはできないけれども、建物の周囲に雨落溝が遺存するため、大きな削平を受けているとは考えがたい。しかし、床面にあたるような硬質の面は認められず、また、土間で礎石上に間仕切りの柱をおくのであれば、何らかの痕跡が残りそうだが、そうしたものもない。建物内部を掘りくぼめて柱を立て、その後にやや軟質の整地土を積むという建設工程も考えあわせると、痕跡を残しにくい転ばし根太程度で床を張った建物を想定するのが妥当だろう。そして、床上に間仕切りの柱を立てたと推定しておきたい。細長い建物の内部を一室の空間として、僧侶が雑居しているという姿は、やはり想

床張りか

Tab. 15　文献史料にみえる僧房の規模

寺名	大房 数	大房 長	大房 広	大房 高	中房 数	中房 長	中房 広	中房 高	小房 数	小房 長	小房 広	小房 高	備考
大安寺	2	274.5尺	39尺	10.5尺	2	274.5尺			1	100尺	12尺	9尺	東西房南列
	2	245尺	39尺	10.5尺	2	291尺	30尺	11尺	1	291尺			東西房北列
	2	125尺	39尺	10.5尺	1	270尺	30尺	11尺					北房
興福寺	2	209尺	45尺	16.6尺					2	209尺	15尺	12尺	東・西僧房
	1	408尺	45尺	16.6尺					1	408尺	15尺	12尺	北僧房
元興寺	2	12房							2	12房			東室南階・北階
	2	10房							2	10房			西南行・西北行
									1	18間			新房
法隆寺	1	175尺	38尺										
	1	181尺	38尺										
	1	155尺	32尺										
	1	106尺	38尺										
西大寺	2	70尺	40尺						1	45尺	16尺		十一面堂院
									1	30尺	16尺		
	2	90尺	40尺						1	56.5尺	16尺		四王院
	1	57尺	36.07尺						1	56.5尺	14尺		
	1	90尺	27尺						1	90尺	12尺		小塔院

文献史料

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』：房名は一部推定

『興福寺流記』

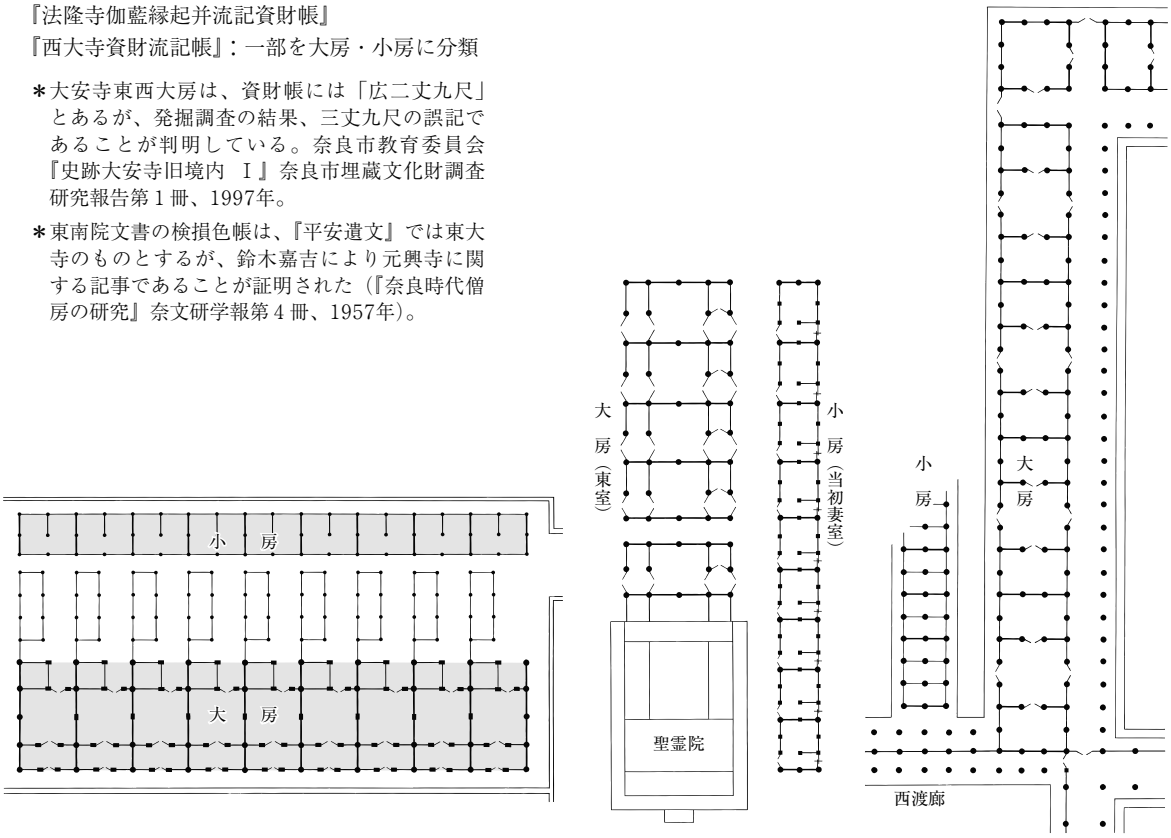
「東南院文書・長元８年（1035）検損色帳」『平安遺文』551

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』

『西大寺資財流記帳』：一部を大房・小房に分類

＊大安寺東西大房は、資財帳には「広二丈九尺」とあるが、発掘調査の結果、三丈九尺の誤記であることが判明している。奈良市教育委員会『史跡大安寺旧境内　Ⅰ』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第１冊、1997年。

＊東南院文書の検損色帳は、『平安遺文』では東大寺のものとするが、鈴木嘉吉により元興寺に関する記事であることが証明された（『奈良時代僧房の研究』奈文研学報第４冊、1957年）。



平城京薬師寺西僧房　　法隆寺東室・妻室　　川原寺西僧房

Fig. 112　大房・小房の類例　1:800

像しにくいと思う。

SB340とSB400の関係　SB340とSB400は南北に並立し、大型の柱掘形をもつ東西に長い建物という点で共通するが、柱掘形の形状や掘削方法が異なっており、梁行の柱間数や桁行の柱間寸法にも差が認められる。この柱間寸法はSB260とも一致せず、すべてを同時造営とみるには疑問がある。ただ、これらの配置には計画性が認められることから、先に全体の配置計画があり、それに基づいて順次建設が進められたと考えるのが妥当だろう。

ところで、８世紀の官寺における僧房は、講堂の東・西・北を取り囲むように配され、三面僧房を構成するのが基本形と推定されている。そして、平城京薬師寺西僧房の発掘例[27]のように、梁行の大きな二面廂をもつ大房と、梁行の小さな身舎だけの小房（小子房）の柱間をそろえて並立させ、一体として使ったようである。法隆寺東室と妻室も、そうした大房と小房の関係にあるとみてよい[28]。また、文献史料でも、大房・中房・小房の桁行全長を同一とする例が多いことが判明している（Tab.15）。

大房と小房ではない

一方、SB340とSB400はいずれも身舎だけの建物で、梁行規模に差がなく、そのうえ桁行は全長のほか、個々の柱間寸法も異にしている。したがって、両者の間に、８世紀の大房と小房の関係を想定することはできない。

以上、吉備池廃寺の僧房は、いくつかの点で８世紀の寺院の僧房の特徴とは異なる点が認められる。これらが、７世紀中頃まで遡る一般的な様相なのか、吉備池廃寺（＝百済大寺）独自のものなのかは、類例の増加を待って判断する必要があるが、僧房の建物形式やその発展過程を究明するうえで、貴重な遺構であることは間違いないだろう。

1）奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。

2）ここでは、推古天皇が豊浦宮に即位した592年から、694年の藤原遷都までを飛鳥時代と呼ぶこととする。以下同じ。

3）村田健一「古代建築における建物規模・構造と部材長」『年報 1999－Ⅰ』。

4）山田寺金堂と同様の柱配置をもつものに、夏見廃寺金堂（三重県名張市、７世紀末）、穴太廃寺再建金堂（滋賀県大津市、７世紀後半）がある。このほか、組物を放射状に配したと推定される正家廃寺金堂（岐阜県恵那市、８世紀前半）の例もあるが、柱間を広くすると軒桁を受ける支点間の距離も広くなり、大建築には向かない構造と考えられる。

5）村田健一は、山田寺金堂式の柱配置を生み出した要因を、安置仏の大きさに求めている。村田健一「山田寺金堂式平面建物の上部構造と柱配置の意味」『紀要 2001』。

6）「隅一組物」とは上野邦一が提案した造語で、隅柱上の組物を隅行き方向にしか出さない形態の組物をいう。上野邦一「隅一組物の建物について」『建築史学』第８号、建築史学会、1987年。

7）力のかかる力肘木の断面欠損を極力少なくするために、その位置を壁付きのものより高くすることから、隅柱位置では物理的に隅行一方向にしか組物を出せない、という。村田健一「山田寺金堂式平面建物の上部構造と柱配置の意味」前掲註５）。

8）裳階用の小型瓦を用いた例として本薬師寺（橿原市城殿町）および平城京薬師寺があるが、それ以外に裳階用の小型瓦の存在を確認できる明確な事例はない。よって、裳階をもつ場合であっても、裳階用の瓦が別につくられたとは断言できない。

9）寄棟造では、隅木が大棟の位置までのびるため、隅木尻（頂点）を支持する束が必要となり、隅木尻の位置に梁が架からなければならない。隅木は45°方向に納まるから、梁行の柱間寸法は桁行の柱間寸法にほぼ反映されることになる。一方、入母屋造では隅木が棟までのびないため、せいぜい廂の間を正方形として、隅木が納まればよい。屋根と柱配置の関係については、村田健一「奈良時代仏堂建築の平面（柱配置）と屋根形式 －寄棟造と入母屋造について－」（『年報2000－Ⅰ』）参照。

10）『藤原概報 ９』（1979年）では、「現基壇面から１ｍほど」の深さがあると記すが（44頁）、実測図

で確認すると、これは現存する基壇版築土上面からの深さを意味している。

11）保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年、第59図。

12）香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5』1996年。山下隆次「尼寺廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。なお、尼寺廃寺の塔基壇は、最大でも一辺13.8mであり、山田寺の塔心礎は1.8m四方程度で、塔基壇の一辺は約12.8mである。ここから、心礎の大きさは、塔自体の規模とは必ずしも関係しないことがわかる。

13）奈良県教育委員会『重要文化財久米寺多宝塔修理工事報告書』1986年、4頁。

14）尼寺廃寺の塔では、基壇周囲の礫敷や基壇上の12基の礎石が遺存し、基壇上面は礎石上面より若干下に想定されている。この場合、基壇高は約1.4mとなり、心礎上面は基壇上面から1.2mの深さに位置することになる。香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5』前掲註12)。

15）『藤原概報 9』1979年、45頁。

16）小島俊次・岡田英男・泉森 皎「東大寺西塔院の緊急調査」『奈良県文化財調査報告書』第8集、奈良県教育委員会、1965年。西塔基壇の大きさは確認されたが、東塔については不明である。ちなみに、天沼俊一は、東西両塔の柱間寸法を復元したうえで、基壇を一辺89尺と想定していた（天沼俊一「東大寺東塔院及西塔院址」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第5回、奈良県、1918年)。

17）文武朝大官大寺の塔は、基壇外装の施工前に焼亡したことが発掘調査で確かめられており、本来の基壇規模については不明である。基壇上では、心礎抜取穴のほか、方5間に復元できる礎石の据付穴や抜取穴を6箇所で検出した。基壇は版築によって築かれているが、掘込地業はともなわない。版築土の縁辺部は約25°の傾斜面をなし、東辺と南辺は、後世の攪乱によって幅5～7mのテラス状となる。確認できる版築層の広がりは、東西36.3m×南北37.3mにおよぶ。また、平面では検出していないが、版築の縁辺部には、基壇築成後に掘られ、短期間で埋没したと考えられる幅約80㎝、深さ20～40㎝の素掘溝がある。溝上には礫敷が残り、この上面から現存基壇上面までの高さは1.2mを測る。そして、基壇周囲の溝の内側に基壇縁を想定し、一辺35m、高さ2m近い基壇を復元する。塔の初重平面は一辺50尺、柱間10尺等間とみる（『藤原概報 9』1979年、43～52頁)。しかし、基壇規模が方5間の塔に対して過大であることから、その後、佐川正敏は、基壇が小さくなる可能性も指摘したうえで、方7間説を提示した（『年報1998－Ⅱ』65頁)。

一般の基壇構築例からみても、亀腹状に版築した端部をカットして基壇外装を施すのはごく自然な工法である。大官大寺塔の場合も、基壇縁が25°の傾斜をもつ状態で完成とされたわけではない。基壇外周の溝が、吉備池廃寺の金堂基壇外周の溝SD104・105・250と類似した性格の遺構となる可能性を含めて、基壇規模は35mより小さいと考えるべきだろう。ちなみに、概報の想定する基壇縁を起点に、版築土縁辺部における傾斜を、高さ約2mと推定される基壇上面まで延長し、そこで垂直にカットしたとすれば、基壇の一辺長は26.5m程度におさまることになる。

ただし、佐川がいうように平面を方7間とすると、塔の側まわりの礎石据付穴や抜取穴はすべて削平されたと見なければならなくなる。けれども、礎石がほぼ完存していた時期に岡本桃里が描いた礎石配置図（前掲註11)所収）は、やや信憑性を欠く部分もあるものの、方5間の塔跡を描いているとみてよい。最も荷重のかかる隅柱の礎石を、他の礎石の「五尺四方」より大きい「六尺四方」と記すのも、方5間とする想定を補強するものといえる。橿原神宮造営のため1889年に礎石が抜き取られたのち、1904年にこの遺跡を実測した本澤清三郎が、やはり方5間の礎石抜取穴の図を示している（本澤清三郎「廃大官大寺」『考古界』第4篇第2号、考古学会、1904年）点とあわせて、文武朝大官大寺の塔は方5間であった蓋然性が高いと考える。

18）奈文研『北魏洛陽永寧寺』奈文研史料第47冊、1998年。

19）張 慶浩「弥勒寺跡の発掘」『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年。

20）金 東賢「皇龍寺跡の発掘」『仏教芸術』207号、毎日新聞社、1993年。文化財管理局・文化財研究所『皇龍寺 －遺跡発掘調査報告書 Ⅰ－』1984年。皇龍寺木塔は石列を三重にめぐらす基壇をそなえており、側柱から羽目石・葛石をもつ基壇（ここでは、かりに上成基壇と呼ぶ）までが3.4m、犬走り状にめぐらしたその外側の石列（同じく、中成基壇と呼ぶ）までが側柱から4.9m、さらにその外側の石列（下成基壇と呼ぶ）までが側柱から6.0mを測る。したがって、基壇規模は、下成基壇までが34.5m程度、中成基壇までで32m程度、上成基壇までは29m程度である。雨落溝がなく、軒の出は不明だが、階段は中成基壇縁付近まで出る。さらに下成基壇までを含むと軒の出がやや長すぎる感があるため、ひとまず中成基壇までを、われわれの概念に合致する基壇と考えておきたい。

21）吉備池廃寺とほぼ同規模の基壇をもつ新羅皇龍寺の九重塔の高さが、『三国遺事』などに伝える225尺で、これを「東魏尺」（高麗尺）とみる金東賢の見解（金 東賢「皇龍寺跡の発掘」前掲註20））が正鵠を射ているとすると、その高さは80.2mとなる（172頁）。吉備池廃寺についても、前節で述べたように、金堂と塔の間隔（心々間距離約84.0m）が塔の高さを反映しているとみれば、これに近い高さを想定することができる。なお、古代の九重塔や七重塔の立面を知るための資料としては、慶州南山の塔谷第２寺址の石刻（慶尚北道慶州市）がきわめて有効であろう（Fig. 113）。小場恒吉『慶州南山の仏蹟』朝鮮宝物古蹟図録 第二、朝鮮総督府、1940年、65～67頁、図版第82～84。国立慶州文化財研究所『慶州南山』2002年、63頁、図版406・407。

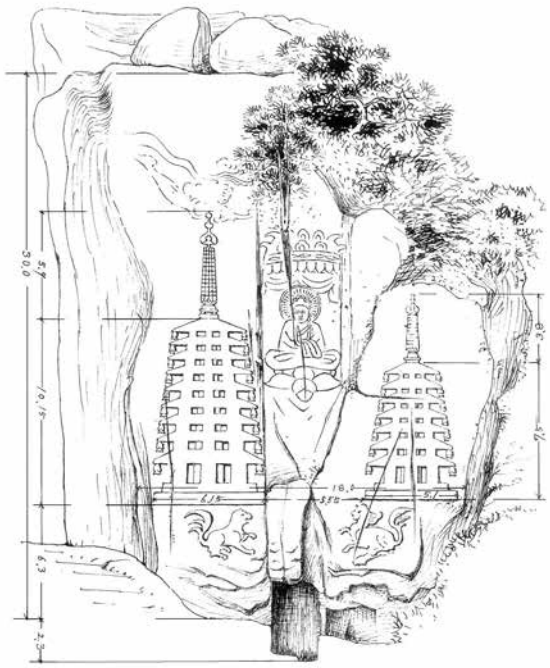


Fig. 113　慶州南山・塔谷第２寺址にある塔の石刻
（註21）小場恒吉『慶州南山の仏蹟』より転載）

22）巨大な塔の事例としては、ほかに東大寺の両塔があり、天沼俊一は、東大寺東塔を方３間、柱間寸法17尺+21尺+17尺=55尺と報告している（天沼俊一「創立当時に於ける東大寺南大門、東西両塔院及び其沿革」『建築雑誌』283号、建築学会、1910年。天沼俊一「東大寺東塔院及西塔院址」前掲註16））。しかし、国分寺を含めた塔の一般的な柱間寸法はせいぜい12尺程度であり（宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美術全集』第２巻、集英社、1979年所載の一覧表参照）、東大寺東塔の柱間寸法は破格であって、一般的とは思われない。

また、天沼の東塔跡の実測は、礎石の失われた状況でその跡を測ったものであり、江戸初期の「東大寺寺中寺外惣絵図并山林」には、東塔が方３間、西塔が方５間に描かれている。この点、「杜撰を極め」ると天沼も評したように、東塔と西塔で柱間が違うことは考えにくいが、その後、西塔の基壇は一辺23.8mであることが発掘調査で確認されている（小島俊次・岡田英男・泉森 皎「東大寺西塔院の緊急調査」前掲註16））。とすれば、東西両塔ともに、基壇の出を13尺前後、柱間寸法を11尺前後とする、方５間の塔を考えるほうが自然ではなかろうか。天沼が実測した塔跡や階段跡などは鎌倉再建時のもので、創建時とは平面を異にする可能性も否定できない。ちなみに、天沼の復元案は、各重の軒の出が25尺以上となるなど、奈良時代の建築としてやや想定しにくい寸法をとる部分がある。

23）本澤清三郎「廃大官大寺」、『藤原概報 ９』43～52頁（前掲註17））。しかし、発掘調査時点での礎石据付穴や抜取穴の遺存状況がかなり劣悪であったことを勘案すると、本澤が曲尺で54尺（柱間11尺）とした塔の初重平面を、50尺（柱間10尺）と断じてよいかは問題が残る。金堂に関して本澤の示した数値（桁行142尺×梁行59尺）が、その後の調査で判明した実寸（桁行153尺、梁行70尺）にくらべてかなり控えめであることを考えあわせれば、文武朝大官大寺の塔が、一辺55尺、柱間11尺等間であった可能性も充分に想定できるのではないか。

24）金 東賢「皇龍寺跡の発掘」、文化財管理局・文化財研究所『皇龍寺 －遺跡発掘調査報告書 Ⅰ－』前掲註20）。

25）宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」前掲註22）所載の一覧表による。

26）奈文研『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第９冊、1960年。

27）奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年。

28）奈良県教育委員会『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』1961年。奈良県教育委員会『重要文化財法隆寺妻室修理工事報告書』1963年。

4　出土瓦をめぐる諸問題

吉備池廃寺からは、さほど大量の瓦が出土したわけではないが、その瓦はこの遺跡の年代や性格を考えるにあたってきわめて重要だ。以下、創建瓦を中心として、関連遺跡にも検討をおよぼしながら、吉備池廃寺の瓦がもつ意味を解き明かし、その歴史的意義に言及したい。

A　創建瓦の系譜と年代

第Ⅳ章１で報告したように、吉備池廃寺の創建瓦は、軒丸瓦ＩＡ・ＩＢ、軒平瓦ＩＡ・ＩＢ(Fig.114)、丸瓦１類、平瓦１類・２類で構成され、ほかに若干の切り熨斗瓦や面戸瓦がある。鴟尾や鬼瓦は、その出土を確認していない[1)]。吉備池廃寺の調査が始まって以来、その創建瓦については、各年度の『年報』および『紀要』で論じたほか、数多くの論考がある[2)]。

創建軒丸瓦の系譜

吉備池廃寺創建軒丸瓦の様式的・年代的位置づけを明確に述べたのは、大脇潔だった。大脇は、吉備池廃寺創建軒丸瓦２種について、つぎの３つの特徴を捉えて山田寺金堂の創建軒丸瓦よりも先行すると認められる、と述べた。

１．中房の断面形が低い半球形をしている

２．蓮弁が長い

３．外縁の重圏文は中央の１本が太く、両側の２本は細い

１の特徴は、石神遺跡（明日香村飛鳥）で出土した素弁十弁蓮華文軒丸瓦（最末期の「花組」）から、いわゆる角端点珠型式の素弁八弁蓮華文軒丸瓦（奥山廃寺式）に登場し、瓦当径が大きい素弁八弁蓮華文軒丸瓦（船橋廃寺式）を経て、山田寺創建軒丸瓦に移行する最終段階の様相と評価した。２の特徴は、船橋廃寺式軒丸瓦を受け継いだ大型の瓦当に対応する。そして、３の特徴は山田寺創建軒丸瓦各種に受け継がれていく、と評価した[3)]。この位置づけはその後も継承されていき、今のところ異論をはさむ余地がない。

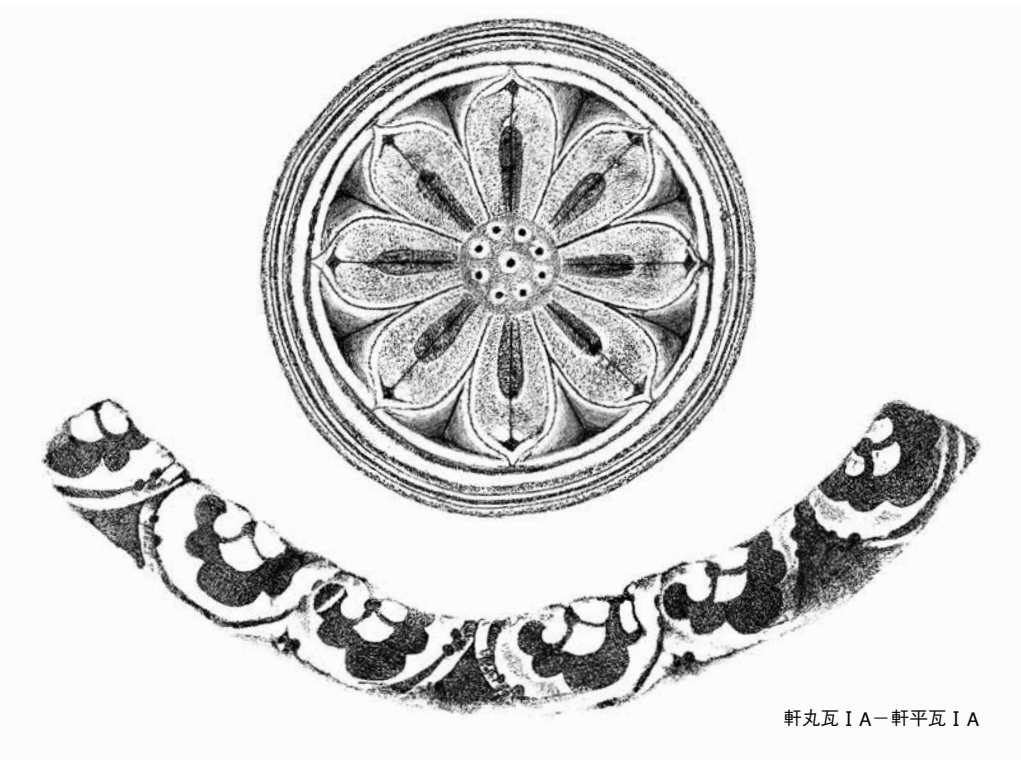
軒平瓦の型は斑鳩から

また、軒平瓦の押し型（施文型）は、斑鳩寺（法隆寺若草伽藍、生駒郡斑鳩町）軒平瓦213Bと同じものながら、後にくわしく述べるように、型の傷が相当増えていて、明らかに後出する。はじめに型が製作された斑鳩寺では、213Bを次のような軒瓦変遷のなかで理解した[4)]。

斑鳩寺軒瓦の変遷

斑鳩寺創建期の軒平瓦には、手彫り忍冬唐草文軒平瓦と型押し忍冬唐草文軒平瓦の２種がある。手彫り忍冬唐草文軒平瓦は、施文の下描き線を入れるための型板を使用する「手彫りＡ」と、型板を使用しない「手彫りＢ」に分類できる。「手彫りＡ」は、型板を瓦当面にピンで留めて文様を下描きし、それに合わせて文様を彫る。忍冬唐草文は７葉構成をとる。「手彫りＢ」は、下描きなしに文様を彫っており、文様が大振りかつ比較的整っている「手彫りＢⅠ」と、瓦も文様もやや小ぶりで文様の粗雑な「手彫りＢⅡ」に細分できる。「手彫りＢⅠ」の忍冬唐草文は７葉構成が基本だが、「手彫りＢⅡ」のそれは５葉構成をとる。製作技法の違いなどからみても、斑鳩寺の手彫り忍冬唐草文軒平瓦が、Ａ→ＢⅠ→ＢⅡと変化したことは疑いない。型押し忍冬唐草文軒平瓦は、これら手彫り忍冬唐草文軒平瓦に遅れ、施文手法をさらにいっそう簡略化した型式と考えている。

斑鳩寺創建期の軒丸瓦は、弁端に点珠を配置する「星組」で始まる。飛鳥寺Ⅷａ・Ⅷｂや豊



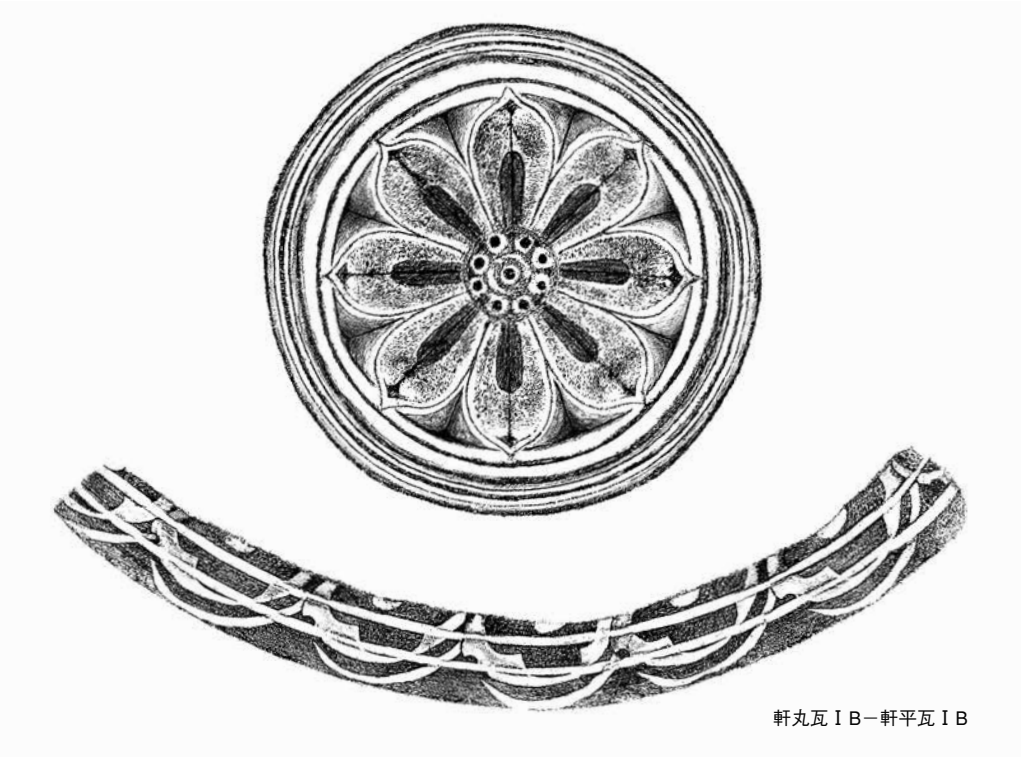


Fig. 114　吉備池廃寺創建軒瓦拓影　1:3

浦寺ⅡBa・ⅡBbと同笵の素弁九弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺３Bb）および四天王寺同笵の素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺４Ａ）がそれだ。ついで、弁が大きく盛り上がる素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺６Ｃ・６Ｄ）が登場し、この段階で丸瓦筒部先端を片ほぞ形に加工して接合する手法から、筒部先端凹面を斜めに削って接合する手法に遷移する。その次の段階で、弁端が幅広い素弁八弁蓮華文軒丸瓦（斑鳩寺７Ａ）が製作された。

斑鳩寺では、金堂の掘込地業を塔のそれが破壊していたことを確認しており、おのおのの整地土層等に含まれる軒瓦の型式を斟酌しつつ、①軒丸瓦３Bb・４Ａ－「手彫りＡ」「手彫りＢⅠ」（金堂創建軒瓦）、②軒丸瓦６Ｃ・６Ｄ－「手彫りＢⅡ」（塔創建軒瓦）、③軒丸瓦７Ａ－型押し（213A・213B、講堂北方建物）の３組の軒瓦セットを復元した。そして、考証の詳細は略すが、①を法隆寺瓦編年飛鳥時代前期（592～622）、②・③を同・中期（622～643）に編年した。したがって、吉備池廃寺と同じ押し型を使う型押し忍冬唐草文軒平瓦（斑鳩寺213B）の年代は、630年代を前後する時期、といちおう考定することができる。

創建軒瓦の年代観

以上のように、軒丸瓦と軒平瓦の両者について、文様と製作技法および関連する軒瓦や遺跡との関係を勘案すれば、吉備池廃寺創建軒瓦は、おおむね630年代から640年代初頭に位置づけうる様式的特徴を備えていると判断してよいだろう。

Ｂ　同笵瓦出土寺院

次に、吉備池廃寺同笵瓦および出土遺跡をとりあげて、吉備池廃寺の性格を考えることとしたい。吉備池廃寺創建軒丸瓦と同笵の瓦を出土した遺跡には、木之本廃寺（橿原市木之本町）、四天王寺（大阪市）、楠葉平野山瓦窯（京都府八幡市・大阪府枚方市）、海会寺（大阪府泉南市）などがあり（Fig.116）、軒平瓦の型は斑鳩寺からの転用だった。これらの寺との関係を同笵・同型瓦を軸に考える。はじめに、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦にいたるまで同笵および同型式の瓦がみつかった木之本廃寺をとりあげる。

同笵瓦
同型瓦

ⅰ　木之本廃寺と出土瓦

木之本廃寺は、香具山の西麓にある式内社・畝尾都多本神社（うねおつたもと）近辺に位置する。このあたりから瓦が出土して寺院跡と推定されだしたのは、60年あまり昔のことだった。1937年、岩井孝次が都多本神社西側の水田から採集された軒丸瓦（吉備池廃寺軒丸瓦ⅠＢ）と軒平瓦（吉備池廃寺軒平瓦ⅠＡ）を紹介した[5]。岩井は、これらの瓦について「飛鳥時代末期」とみなし、「寺名不明なるも紀寺址の北方三丁餘りの地點にして、瓦の出土量極めて少なきも多分當期の創立にかゝる寺址ならん」と推定した。また、同型とまでは判断していないが、法隆寺の型押し忍冬唐草文軒平瓦と大官大寺跡から出土したという同型品[6]を類品としてあげた。

1970年に刊行された『飛鳥白鳳の古瓦』[7]において稲垣晋也は、岩井が紹介した軒丸瓦を参考資料として再録し（同書293頁）、四天王寺同笵品の「類型」とした。この時、稲垣は出土遺跡を「木之本廃寺」と命名しており、これがこの遺跡名の初見だろう。ただし、同書の「古瓦の分布形態」（280～290頁）には木之本廃寺は登場しない。

1983年、山崎信二は、「木之本廃寺」の名称こそ使っていないが、畝尾都多本神社西側から「吉備寺」にかけての一帯を、舒明朝の百済大寺の年代に合致する瓦が出土する地域として注目した[8]。それを裏づけるかのように、同年におこなわれた畝尾都多本神社西側での家屋建築にと

もなう発掘調査（藤原宮第37-７次調査）では、南北方向の自然流路から吉備池廃寺創建軒平瓦と同型品が出土した（『藤原概報 14』1984年、30頁）。1983年のこの調査によって、岩井が想定したごとく、畝尾都多本神社付近に古代寺院跡が存在した可能性が高まった。

木之本廃寺の本格調査

1985年から1987年にかけて、畝尾都多本神社の南側で奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎建設にともなう事前調査がおこなわれた。その結果、藤原宮期前後から奈良時代あるいは中世にいたる各種遺構が発見されたが、木之本廃寺の存在を直接的に証明するような伽藍遺構はみつからなかった（『藤原概報 16』1986年、5～28頁、『同 17』1987年、8～29頁、『同 18』1988年、23～27頁）。しかしながら、瓦の出土量は、藤原京内としてはかなり多い。[9)]

木之本廃寺出土軒瓦

この調査では、吉備池廃寺の創建軒丸瓦（ＩＡ・ＩＢ）と創建軒平瓦（ＩＡ・ＩＢ）が総計63点（1983年調査分を含む）出土した。軒丸瓦ＩＡが11点、軒丸瓦ＩＢが14点、種別不明６点。軒平瓦は、重弧文のないＩＡが25点、重弧文を重ねるＩＢが４点、種別不明は３点だった。

調査地が藤原京内でも宮に近いため、出土した瓦すべてが木之本廃寺所用か問題はあるが、軒丸瓦はほかに、奥山廃寺ⅧＡと同笵の山田寺式、小山廃寺同笵の紀寺式（雷文縁複弁八弁蓮華文）および6233Bb（藤原宮とも同笵）、長林寺（北葛城郡河合町）同笵の法隆寺式、藤原宮同笵の6273B、6274Aa、6276C･G、文武朝大官大寺同笵の6231A･Cがある。

軒平瓦は、四重弧文が数種あるほか、法輪寺同笵の均整忍冬唐草文（「池上」刻印付き）、同笵例のない均整忍冬唐草文、久米寺および藤原宮同笵の6561A、藤原宮同笵の6641C、6643C、6647A、文武朝大官大寺同笵の6661Bがある。このほか、夏見廃寺と同型の磚仏が出土した。

吉備池廃寺同笵の軒丸瓦２種は、丸瓦部が瓦当裏面の高い位置にあり、凹面を大きく削って楔形に加工して接合する。削っただけのものと、そこに斜めあるいはタテのキザミを入れるものがある。瓦当裏面は平坦な個体と中高にふくらむ個体とがあり、吉備池廃寺ＩＢ同笵品に後者の例が目立つ。なかには回転ナデの痕跡を残す個体もある。木之本廃寺出土例と吉備池廃寺出土例を比較すると、両者は笵傷が一致するばかりか、笵傷の大小あるいは多寡でも区別できず、胎土や焼成の具合もまったくかわらない。ことは軒平瓦でも同じだ。

吉備池廃寺の瓦と同一

丸瓦は、吉備池廃寺で設定した丸瓦１類Ａ･Ｂが両者ある。平瓦も１類と２類Ａ･Ｂ･Ｃが揃って出土した。平瓦１類の完形に近い資料の法量は、全長45.5㎝、狭端幅33㎝、広端幅35～36㎝（推定）、厚さ2.9㎝、重量約８㎏（推定）ある。

このように、二つの遺跡から出土する共通の瓦は、一つの瓦窯から同時に二ヵ所に供給されたか、一方から他方へと移送されたかのどちらかの状況を考えざるをえない。

なお、藤原京内では、香具山北西麓一帯以外にも、吉備池廃寺と同じ型押し忍冬唐草文軒平瓦がみつかる地域がある。それは、藤原宮跡南方の日高山（橿原市上飛騨町）周辺だ。1975年、日高山北麓での調査（藤原宮第17次調査）で、型押し忍冬唐草文軒平瓦が２点出土した（『藤原概報 6』1976年、10～15頁）。忍冬唐草文はすべて下向きに施文し、重弧文は重ねない（吉備池廃寺軒平瓦ＩＡ）。その後、1988年におこなった日高山西南麓の調査（藤原宮第54-19次調査）でも１点が出土している（『藤原概報 19』1989年、33～40頁）。軒丸瓦は出土していない。

日高山周辺にも同型瓦

ii　軒丸瓦の同笵例

木之本廃寺以外で、吉備池廃寺創建軒丸瓦と同笵品を出土した遺跡としては、四天王寺とその瓦窯・楠葉平野山瓦窯、そして海会寺が知られている（PL.35）。

四天王寺　吉備池廃寺創建軒丸瓦と同笵の瓦は、四天王寺第Ⅱ期（７世紀第２四半期末から７世紀後半）に編年されるNMⅡa1とNMⅡa2の２種[10]。四天王寺NMⅡa1が吉備池廃寺軒丸瓦ＩＡと、四天王寺NMⅡa2が吉備池廃寺軒丸瓦ＩＢと同笵だ（PL.35-１・３）。

四天王寺の同笵軒丸瓦

現在、四天王寺宝物館にはNMⅡa1が３点、NMⅡa2が１点所蔵されている。いずれも瓦当文様はシャープで、外縁や中房蓮子などには瓦笵の彫り直し痕跡は認められない。ただし、吉備池廃寺ＩＡと四天王寺NMⅡa1を比較すると、明らかな笵傷の拡大は認めがたいものの、木目の浮き上がりが多くなっていることから、四天王寺例が後出すると判断できる。一方、四天王寺NMⅡa2については、笵傷や瓦笵の状況から先後は判別できなかった（PL.35-７･11）。瓦当厚はそれぞれ２㎝前後しかなく、吉備池廃寺例より薄い。

NMⅡa1は製作技法と胎土が微妙に違う２種がある。瓦当面をほぼ完全に残す２点（『聚成』10･11･67頁の47･49、PL.35-１は67頁47）は、丸瓦先端凹面寄りを軽く斜めに削り、削った面に斜めやX字状のキザミ目を付けて接合する。その際、支持ナデつけはおこなわない。瓦当裏面は、全体を入念な不定方向のナデで平坦に仕上げ、下半周縁は軽くつまみあげるようにナデる。外縁は剥離している部分が多いが、残存部では圏線が明瞭に残る。ただし、外縁幅を吉備池廃寺や木之本廃寺例より５㎜ほど狭く仕上げているため、外側の圏線は充分に表出されていない。この２点はきわめて精緻な胎土に雲母の微粒子を含むのが特徴的で、これは楠葉平野山瓦窯出土例と共通する。もう１点（『聚成』67頁48）は、丸瓦接合時に支持ナデつけをおこなう。こちらの胎土には雲母の微粒子が含まれていない。

NMⅡa2は、瓦当下半部のみが残存する資料（PL.35-３、『聚成』67頁46）のため、丸瓦接合手法はわからない。瓦当裏面には丸瓦接合前に板状工具で回転ナデをおこなった痕跡が確認でき、わずかながら裏面中央が高くなる。下半周縁はNMⅡa1同様、軽くつまみあげるようにナデる。胎土には雲母の微粒子を含んでいない[11]。

四天王寺NMⅡa1とNMⅡa2には、粘土板桶巻四枚作りの三重弧文軒平瓦がともなう。

海会寺　海会寺創建軒丸瓦ＩＡが、吉備池廃寺軒丸瓦ＩＢおよび四天王寺NMⅡa2と同笵[12]（PL.35-２･８･12）。海会寺ＩＡを瞥見したところ、大きくわけて、瓦笵に彫り加え（改笵）をおこなうものと、それ以前のものが存在することを確認した。改笵以前のものも、中房面の同心円状のくぼみが吉備池廃寺および四天王寺と共通しているが、外縁に新たな笵傷が認められるので、３遺跡のなかでは最も後出することは明らかだ。

海会寺では改笵あり

改笵後の製品は、中房蓮子を深く彫り加え、それ以前より中房蓮子が３㎜ほど高くなる。このため、瓦当面全体に同時に粘土を詰め込むのではなく、まず、蓮子の一つ一つに小片の粘土を詰めて、蓮子をよりよく表出させようという工夫のあとが見られる（PL.35-８）。

瓦当厚は、改笵前のもので2.7㎝前後、改笵後のものは2.0～4.0㎝ある。後者は、薄手と厚手にわけることができる。

丸瓦部は、広端を凹凸両面から削って接合する。接合時には支持ナデつけをおこなうものと、おこなわないものがある。前者は改笵後の厚手のものに多くみられ、後者は改笵前のものや改笵後の薄手のものに多い。

瓦当裏面は、ユビまたは板状工具によって入念にナデ仕上げするものがほとんどだが、なかには、丸瓦接合前に、裏面全体を板状工具を使って回転ナデ調整して平滑にするものもある。

いずれにせよ、裏面下半は周縁に沿ってつまみ上げるようにナデる。

海会寺軒丸瓦ＩＡには、行基丸瓦がともなう。丸瓦部のほぼ中央には、焼成前に凸面から凹面方向にむけて穿孔された、直径1.0㎝の円形の釘穴がある[13]。創建期の海会寺には、文様のある軒平瓦は採用されていない。

以上、四天王寺および海会寺の吉備池廃寺同笵軒丸瓦について、観察成果を記述した。これまでも指摘されてきたように、吉備池廃寺創建の軒丸瓦ＩＡとＩＢは四天王寺と、そして軒丸瓦ＩＢはさらに海会寺とも同笵関係にある。三者は、吉備池廃寺→四天王寺→海会寺の順に瓦笵が動いた結果としての同笵関係にあり、同笵瓦は寺ごとに製作技法と焼きが違っている。

笵型だけが移　動

iii　軒平瓦の同型例

吉備池廃寺軒平瓦ＩＡ・ＩＢの型は、斑鳩寺213Bと同型だ[14]。型は、おおよそ半月形をし、両端は斜めに面取りしたように切ってある。吉備池廃寺・木之本廃寺例と斑鳩寺例とを比較して、傷の状況をくわしくみてみよう。

文様型の傷

斑鳩寺　斑鳩寺213Bの型には、傷の少ないものと、傷が拡大したものとがある。これを「傷第１段階」と「傷第２段階」とよんで区別する。傷の部位を示す際には、忍冬唐草文１単位が、蔓が時計回りに巻き込んで上方に開いた状態での上下左右で表現することとする（Fig. 115）。

傷第１段階には、「傷Ａ～Ｃ」が確認できる。傷Ａは、蔓が時計回りに巻き込んで型の輪郭に最も近づく位置にある横方向の線状の傷。木目の方向を示すのだろう。傷Ｂは、蔓の右側にある結節のやや下に位置している。傷は浅い。傷Ｃは、５葉の忍冬唐草文基部の結節から左に延びて忍冬唐草文先端にとどく細い線状の傷。

傷第２段階には傷Ａと傷Ｂが拡大する。傷Ａは、型の右下隅に残っていた文様面（型のベース

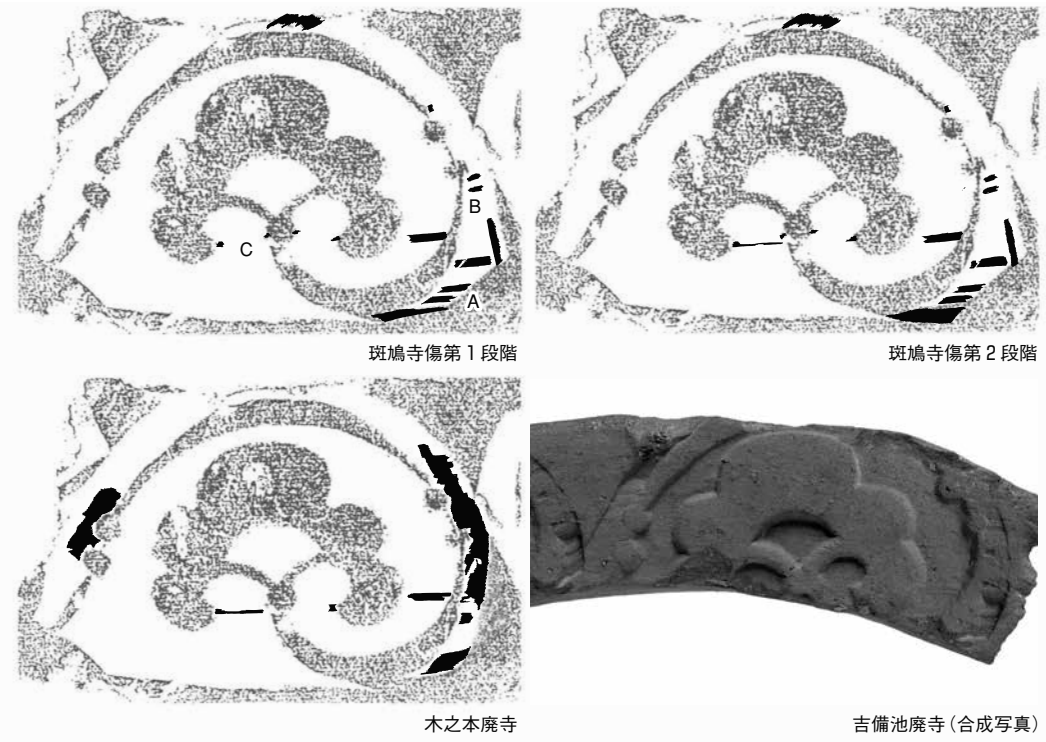


Fig. 115　軒平瓦押し型の傷の比較

面）が破損し、三角形状の傷となる。また、傷Ｂが拡大し、太くかつ深くなる。傷Ｃに大きな変化はない。

このほかに、時計回りに巻き込む蔓の頂部には斜めに走る傷があり、傷Ｂの右側にも木目と直交する傷がある。また、傷Ａ・Ｂと平行する木目のような小さな傷が、蔓右側の結節の上下や忍冬唐草文先端などにみえる。しかし、これらの傷は、第１段階と第２段階の間で顕著に拡大する様子をみせない。

吉備池廃寺と木之本廃寺　吉備池廃寺あるいは木之本廃寺から出土する軒平瓦の型にも、傷Ａ・Ｂを確認できる。よって、両者同一は間違いない。しかし、こちらには斑鳩寺例にはない大きな傷がある。

大きな傷が発生

もっとも目につくのは、蔓の左右にある結節外側に現われる傷だ。傷が蔓の文様と同じ深さに達しているため、結節の外側の輪郭線が失われてしまっている。忍冬唐草文から右に延びて蔓にとどく傷は、斑鳩寺例ではかすかな木目状にしかみえなかったものが、明瞭な幅をもった傷として存在する。さらに、型の右下隅を削って外周を丸くする。

以上のように、吉備池廃寺軒平瓦ＩＡ・ＩＢの忍冬唐草文の型は、斑鳩寺213Bの型を転用したとみて間違いない。しかしながら、両者を比較すると、施文手法と軒平瓦の製作手法に大きな違いがある。いずれもこれまでにも指摘されていることだが、再度、まとめておこう。

施文手法の違いは、型を上下反転させるか否かにある。斑鳩寺例では、粘土板桶巻作りの粘土円筒を分割する前に、瓦当面を上に向け、型を上下反転させながら施文する。型は瓦当面を反時計回り方向に動く。この施文手法は、同文の斑鳩寺213Aでも同じだ。これに対して、吉備池廃寺・木之本廃寺例では、型は上下に反転せず、忍冬唐草文は常に下向きに表現される。施文時に型が動く方向は、斑鳩寺例と同じ反時計回り方向をとる。

施文手法に大きな違い

軒平瓦の形状を比較すると、斑鳩寺213A・Bでは型の大きさに合わせた瓦当厚（6.5㎝前後）としているが、吉備池廃寺・木之本廃寺例では4.0㎝前後しかないため、文様の上下が表現されない。また、吉備池廃寺軒平瓦ＩＢに特徴的な、型押し以前に重弧文を施文する手法は、斑鳩寺にはない。

製作技法の点でも、斑鳩寺例と吉備池廃寺例とでは違いがある。粘土板桶巻作りという点では共通するものの、瓦の縦断面形を比較すると異なる点がある。斑鳩寺例は、瓦当厚を大きくするために瓦当面近くの凸面が曲線顎風に湾曲するものがあり、それらは顎面を削って仕上げる。これは、とくに斑鳩寺213Aに多くみられるが、瓦当厚の小さな吉備池廃寺例では、このような仕事は必要ない。さらに、凹面の調整を比較すると、吉備池廃寺・木之本廃寺例のほうがはるかに丁寧な調整をおこなうし、焼きの具合にも違いがある。斑鳩寺例と比較した時、製作技法細部の違いは大きく、軒平瓦の型（斑鳩寺213Bの型）は吉備池廃寺創建にあたって斑鳩から移動してきたが、それに斑鳩の瓦工が付き添ったとは考えがたい。

斑鳩の瓦工は来たらず

ⅳ　同笵・同型瓦出土遺跡間の関係

吉備池廃寺の軒丸瓦と軒平瓦は、おのおの同笵・同型瓦を出土する遺跡があり、相互の笵傷や型の傷によって、吉備池廃寺→四天王寺（楠葉平野山瓦窯）→海会寺：軒丸瓦瓦笵の移動、斑鳩寺→吉備池廃寺：軒平瓦文様型の移動、と理解した。いずれの場合も、瓦笵あるいは押し型の移動はあったが、瓦工がこれに付き従うことはなかった。

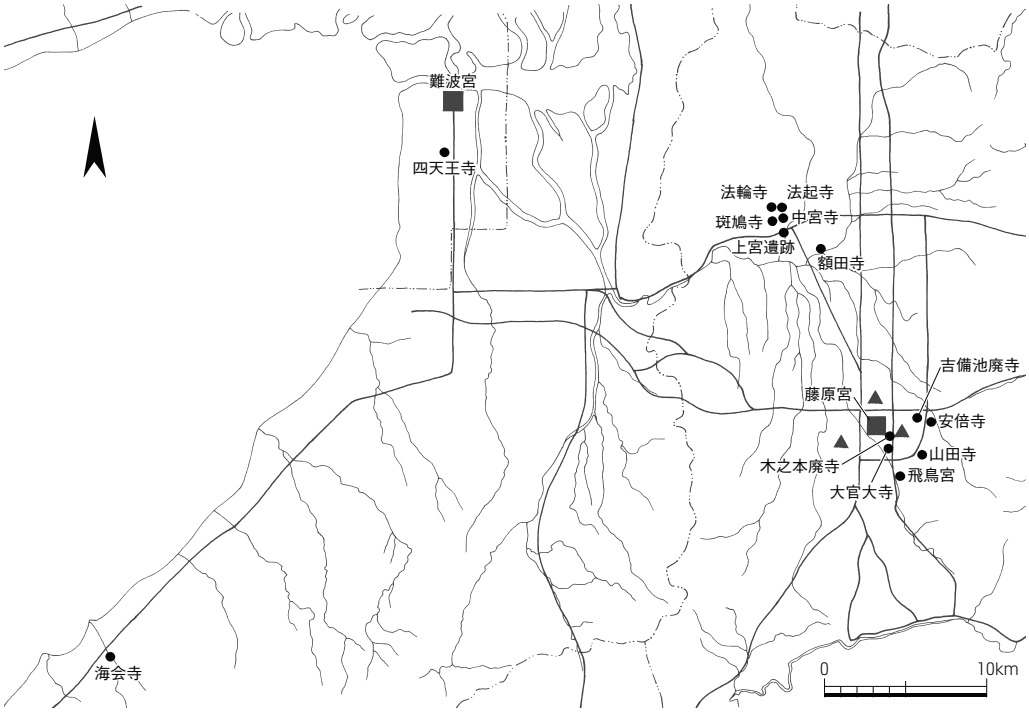


Fig. 116　関連遺跡地図

同笵・同型関係の時期

吉備池廃寺の創建軒丸瓦の同笵関係と、軒平瓦の同型瓦の関係は、まず、その関係が発生した時期に差がある。つまり、軒平瓦にみる斑鳩寺との関係は、吉備池廃寺創建直前ないし当初に発生した関係だが、軒丸瓦の同笵関係は、吉備池廃寺造営が大略進んだか、完成後に発生しただろう。

吉備池廃寺創建軒平瓦の押し型が斑鳩寺から移動したことは、当然、斑鳩寺檀越の上宮王家との関連を考えないわけにはいかない。『日本書紀』舒明即位前紀には、推古天皇の崩御後、その後嗣が、田村皇子と山背大兄王との間でしばらく決着せず、おのおのの皇子を推す群臣同士が対立するさまが描かれている。この対立は、山背大兄王を推挙した境部摩理勢が滅ぼされてようやく解消し、田村皇子が即位して舒明天皇となる。その後しばらく、山背大兄王の動静は史上に記録を残さない。

上宮王家が押し型供与

推古30年（622）に厩戸皇子が亡くなったのちは、山背大兄王が上宮王家を伝領している。吉備池廃寺の造営を開始するにあたって斑鳩からおこなわれた援助が、瓦の型の供与という事績で今に伝えられているとすると、それは、山背大兄王の意志に発した、ある程度積極的な援助だったと推測する。

一方、吉備池廃寺軒丸瓦の瓦笵が、四天王寺および海会寺へと移っていった時期は、孝徳朝に降るだろう。網伸也は、吉備池廃寺同笵軒丸瓦を含む四天王寺第Ⅱ期瓦について、これを難波遷都にともなう四天王寺伽藍の整備と関連づけてとらえている。[15)]

難波遷都と四天王寺

『日本書紀』によると、孝徳天皇は、即位後半年たった大化元年（645）の12月にいたって難波に遷った（大化元年12月癸卯条）。その後、翌２年（646）正月にここで「改新の詔」を発し（大化２年正月甲子条）、３月には、東国国司に詔して処断をおこなう（同３月甲子条、辛巳条）。世にいう「大化の薄葬令」が出たのは、その３日後のことだった（同３月甲申条）。

このように、飛鳥を離れた難波の地で新たな施策がおこなわれるなか、大化４年（648）2月、

左大臣阿倍内麻呂（倉梯麻呂）が四天王寺に四衆を招いて、塔の内に仏像四躯を安置し、さらに霊鷲山の像を造った（大化４年２月己未条）。この仏像が小四天王像だったことは、『太子伝古今目録抄』（『提婆羅惹寺麻訶所生秘決』）の「塔内四天事」に見える。[16]

四天王寺への仏像施入

また、皇祖母尊（皇極）は、白雉元年（650）に、丈六、侠侍、八部など三十六部の繡仏を作らせ（白雉元年10月条）、翌２年（651）３月に完成している（白雉２年３月丁未条）。これが、のちに平城京大安寺に伝来したことは、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によって判明する。

そして、同年12月に、孝徳天皇は難波長柄豊碕宮に遷った。この宮殿は、翌白雉３年（652）９月にいたって完成を迎え、そのありさまは、「ことごとくに論ふべからず」と評されるほど壮麗なものだったらしい（白雉３年９月条）。

『日本書紀』孝徳紀に、仏像の施入を含む具体的な造営が記される寺院は、入滅した国博士旻法師のために仏・菩薩像を造らせたという記事[17]（白雉４年（653）６月条）を除くと、上記の四天王寺と、皇祖母尊が繡仏を施入した寺、すなわち大安寺の前身にあたる百済大寺以外にない。孝徳朝における四天王寺と百済大寺の位置づけがうかがえる。四天王寺第Ⅱ期瓦の意義もここにあったと推断してよかろう。それは、難波長柄豊碕宮と不可分の仏教伽藍へと四天王寺が転換した証だった。

では、もう一つの吉備池廃寺同笵軒丸瓦をもった寺、海会寺はどうか。この寺に直接関わる文献史料はほとんどない。『日本霊異記』中巻第22縁にみえる和泉国日根郡の「尽恵寺（盡恵寺）」を「畫恵寺」の転写ミスとみて、「ガヱジ」＝「カヱジ」と想定することは無稽とはいえない部分があろう。だが、それと吉備池廃寺あるいは孝徳朝の四天王寺と同笵の軒丸瓦が創建瓦となった海会寺との間には、埋めるべき懸隔が相当にあると判断せざるをえない。

吉備池廃寺と四天王寺あるいは海会寺との関係は、瓦だけからは導き出せない部分が多く存在する。いずれにしろ、飛鳥とその周辺の「山田寺式」軒丸瓦を創建瓦とする古代寺院で、大和の範囲を超えた同笵関係をもつ寺は、吉備池廃寺をおいて他にない。これは、この寺の性格に大きく関わる特徴といって間違いないだろう。

C　出土瓦の量的検討

吉備池廃寺から出土する瓦は、通常の古代寺院跡での発掘調査に比較すると、その量が極度に少ない。そして、これこそが、この寺の移転を傍証する一つの材料とされてきた。[18]では、瓦が出土する宮殿跡や寺院跡あるいは官衙遺跡では、実際にどれぐらいの瓦が出土しているのか。吉備池廃寺はそれと比べてどうなのか。この点を、近年の調査成果に基づきながら、具体的な数値をあげて検討してみよう（Tab.16）。分析手法は、平城京西隆寺（奈良市）の出土瓦を扱った小澤毅にならった。[19]

瓦出土量をめぐる算数

i　丸瓦と平瓦の比率

吉備池廃寺からは、総計2,649.4kgに達する瓦が出土した。丸瓦と平瓦の重量比は1：3.60。ただし、当然のことながら、丸瓦と平瓦は１枚の重さが違うので、重量比はそのまま両者の個体数比とはならない。小澤がおこなったように、丸瓦と平瓦各々について、１枚の平均重量を算出し、それによって個体数（以下、「重量比換算個体数」）を計算する必要がある。

重量比換算個体数

丸瓦は、その99%以上が創建丸瓦の１類と判断できる。[20]丸瓦総重量の576.1kgを、丸瓦１類の

完形個体で計測した重量5.3kgで除せば、重量比換算個体数は108.70本となる。

個体数比の算出方法

同様に、平瓦も平瓦１類が90%を占めるから[21]、そのなかで最も完形に近い個体の復元推定重量6.3kgを用いて、平瓦総重量2,073.3kgを除せば、重量比換算個体数は329.10枚という数がえられる。丸瓦と平瓦の個体数比は1：3.03となる。ただし、平瓦については、平瓦２類も創建期に使用された。２類は瓦の厚さが薄く、１枚の重量も軽い。吉備池廃寺の資料では重量を算定できないが、木之本廃寺出土例にほぼ全形がうかがえる資料（吉備池廃寺平瓦２類Ｂ）があり、それによると重量は約4.0kgと推算できる。平瓦１類と２類の比率を９：１と仮定した場合、平瓦の重量比換算個体数は次の式で求められる。

2,073.3kg×（0.9÷6.3kg＋0.1÷4.0kg）＝348.018

これによれば、平瓦の重量比換算個体数は348.02枚となり、丸瓦と平瓦の個体数比は１：3.20とやや広がる。

ところで、木之本廃寺から出土した吉備池廃寺平瓦１類と同型式の瓦には、推定復元重量約８kgの例がある。この数値を使って同じ計算をおこない、平瓦の総重量を単純に８kgで除せば、259.16枚という数値がえられる。この場合、丸瓦と平瓦の個体数比は１：2.38。また、総重量の10%を平瓦２類として計算すれば、１類と２類あわせて285.08枚となり、丸瓦と平瓦の個体数比は１：2.62となる。

丸・平瓦比瓦葺を明証

以上のように、吉備池廃寺から出土した丸瓦と平瓦の比率として、1：2.62～3.34という数値をえることができた。この数値は、瓦葺建物に使われた瓦としてごく妥当なものと考える。ほかの例と比較してみよう。

平城京西隆寺では、数次にわたる発掘調査により、丸瓦3,994.5kg（破片数で23,777点）と平瓦13,283.5kg（同じく104,207点）が出土した。完形に近い個体による丸瓦と平瓦の平均重量は、丸瓦2.5kg、平瓦3.2kg。これをもとに重量比換算個体数を計算すると、丸瓦は1,598点、平瓦は4,151点と算出され、両者の比は１：2.60だった[22]。

小澤も指摘しているように、この数値は、平城宮第二次大極殿院で佐川正敏が推計した丸瓦と平瓦の総量[23]（丸瓦47,700枚、平瓦119,900枚）からえられる比率、1：2.51に近い[24]。

これらの分析例と、吉備池廃寺の出土瓦が示す丸瓦と平瓦の比率は近似している。上記の二つの分析が対象としたのは、西隆寺の中枢伽藍と平城宮第二次（東区）大極殿であり、ともに瓦葺建物が並び建つ遺跡だ。したがって、吉備池廃寺から出土した丸瓦と平瓦は、瓦葺建物にのっていた瓦が遺棄されたものと判断してよい。さらに、飛鳥藤原地域で奈文研が調査した近年の例をみても（Tab.16）、出土量の多い寺院跡あるいは宮殿中枢部では、平瓦の丸瓦に対する重量比は、おおむね３を前後する数値を示している[25]。これも、傍証としてよいだろう。

次に、吉備池廃寺出土瓦の量そのものが示す意味を考えてみよう。

ii　丸瓦・平瓦総量2.65ｔは多いか少ないか

吉備池廃寺各調査ごとに出土瓦の点数と重量を集計し、100㎡（１アール）あたりの出土重量をみると、総平均では68.3kgだが、金堂周辺を調査した第81-14次調査は282.2kg、第105次調査でも106.6kgと３桁の数値がでている。この量は多いのか少ないのか。

単位面積で数百kgの瓦

山田寺では４ｔの瓦

飛鳥藤原地域にある寺院跡の調査例をみると、1996年の山田寺南面回廊の調査（山田寺第10次調査）は、単位あたりの出土重量が頭抜けて大きく、４ｔ近く（3989.7kg）の瓦が出土した。こ

Tab. 16　吉備池廃寺と飛鳥藤原地域の瓦出土量

遺跡・次数等		丸瓦 点数	丸瓦 重量kg	平瓦 点数	平瓦 重量kg	瓦重量kg	調査面積m²	100m²当 瓦重量kg	平瓦重量/丸瓦重量
吉備池廃寺	81-14	1,567	253.1	8,419	932.1	1,185.2	420	282.2	3.68
	89	5	7.4	379	30.9	38.3	351	10.9	4.17
	95	132	28.9	604	80.7	109.6	724	15.1	2.80
	105	1,062	182.8	5,212	603.9	786.7	738	106.6	3.30
	111	446	98.1	2,897	399.0	497.1	1,140	43.6	4.07
	（北区	328	76.0	1,817	289.2	365.2	605	60.3	3.81）
	（南区	117	22.1	1,080	109.8	131.9	535	24.6	4.97）
	奈文研合計	3,264	570.3	17,511	2,046.6	2,616.9	3,373	77.6	3.58
	桜井市９次	26	2.5	328	17.3	19.8	239	8.3	
	桜井市11次	17	2.2	102	6.7	8.9	140	6.4	
	桜井市12次	3	1.1	22	2.7	3.8	125	3.0	
	桜井市合計	46	5.8	452	26.7	32.5	504	6.4	4.60
	総合計	3,310	576.1	17,963	2,073.3	2,649.4	3,877	68.3	3.60
本薬師寺	参道	21,060	2,596.3	65,471	5,271.1	7,867.4	558	1,409.9	2.03
	西塔	12,765	2,107.0	50,036	13,519.0	15,626.0	609	2,565.8	6.42
坂田寺	1995-1	1,298	216.8	3,913	705.4	922.2	58	1,590.0	3.25
	1996-1	1,554	154.8	12,453	651.1	805.9	120	671.6	4.21
飛鳥寺	1996-1	5,717	529.3	33,788	1,766.8	2,296.1	262	876.4	3.34
	1996-3	2,232	300.2	9,534	975.9	1,276.1	270	472.6	3.25
	91-8	2,461	339.2	7,866	805.5	1,144.7	70	1,635.3	2.37
	99-12	364	33.6	1,056	92.3	125.9	39	322.8	2.75
山田寺	10	4,748	1,592.4	13,533	5,190.1	6,782.5	170	3,989.7	3.26
川原寺	1996-1	5,443	1,206.7	18,622	3,332.4	4,539.1	155	2,928.5	2.76
石神遺跡等	110	45	5.5	200	16.0	21.5	440	4.9	2.91
	116	67	6.8	334	24.2	31.0	490	6.3	3.56
	103	26	1.9	128	7.9	9.8	120	8.2	4.16
	108-4	527	45.6	2,481	159.9	205.5	30	685.0	3.51
藤原宮大極殿院・朝堂院									
	100	12,701	1,477.9	52,591	4,475.1	5,953.0	2,070	287.6	3.03
	107	16,651	2,220.9	59,809	6,049.8	8,270.7	3,140	263.4	2.72
	117	14,246	1,554.5	67,522	4,775.2	6,329.7	1,700	372.3	3.07
藤原宮官衙	78	177	20.6	192	23.5	44.1	1,608	2.7	1.14
	79	19	2.7	77	7.4	10.1	1,320	0.8	2.74
	80	16	2.4	24	6.5	8.9	1,780	0.5	2.71
	82	23	2.3	107	10.8	13.1	1,800	0.7	4.70
	94	54	13.0	164	31.8	44.8	1,260	3.6	2.45
	102	24	3.9	10	0.5	4.4	495	0.9	0.13
	108-5	0	0	5	0.9	0.9	300	0.3	—
	108-8	15	2.1	33	7.2	9.3	350	2.7	3.43
	108-11	35	3.7	351	19.4	23.1	470	4.9	5.24
	108-10	64	21.0	308	88.8	109.8	225	48.8	4.23
藤原京	81-1	36	6.7	126	21.2	27.9	428	6.5	3.16
	81-8	19	2.6	176	29.3	31.9	667	4.8	11.27
	88	6	0.6	43	1.9	2.5	650	0.4	3.17
	90	10	1.7	41	5.2	6.9	1,260	0.5	3.06
	101	10	0.7	45	5.5	6.2	1,663	0.4	7.86
	109	18	4.9	81	7.6	12.5	2,600	0.5	1.55
	113	103	14.4	610	105.6	120.0	2,080	5.8	7.33
	115	68	13.5	154	25.2	38.7	3,000	1.3	1.87

の調査では、回廊部材が倒壊したままの状態で発見され、屋根瓦も落下状態で出土した。とくに、東から２間目あたりでは、まず棟が落下し、北流れの屋根は「く」の字におれて崩壊した状況が遺存していた。これは、瓦葺建物が崩壊したのち、さしたる取りかたづけがおこなわれることなく埋没した例といえよう。[26)]

古代寺院では瓦１ｔ超

それに次ぐのは、寺域西半分各所を総延長250mにわたってトレンチ調査した1996年の川原寺調査。回廊西北隅から西に延びる複廊南側の焼失落下瓦層、その南方の築地塀周辺あるいは食堂推定地周辺から大量の瓦が出土し、平均すると100㎡あたり約３ｔの出土量となった。[27)]

西塔の西南部と南面回廊の一部を対象とした本薬師寺の調査（本薬師寺1995-1次、1996年）では、数基の瓦溜や雨落溝から多量の瓦が出土した。[28)]これらは西塔と南面回廊に使われた瓦で、100㎡あたり約2.5ｔの計算になる。この３例が100㎡あたり２ｔを越える。

これ以下では、瓦葺の北面大垣とその瓦が埋没した北外堀を調査した飛鳥寺の例[29)]（第91-8次、1998年）が約1.6ｔ、回廊周辺でおこなった坂田寺の調査[30)]（坂田寺1995-1次、1995年）が約1.6ｔで、瓦溜などがみつかった本薬師寺参道の調査[31)]（本薬師寺1994-2次、1995年）の約1.4ｔ、飛鳥寺西門の調査[32)]（飛鳥寺1996-1次、1996年）の約0.9ｔが続く。1995年より古い調査では、整理段階で丸・平瓦の点数や重量を計量していないためデータがないが、飛鳥藤原地域の古代寺院では、100㎡あたり１ｔを越える瓦が出土する状況が観てとれる。[33)]

官衙や宅地の瓦は微量

これに対して、瓦葺建物がほとんどなかった藤原宮の官衙地区や藤原京内の調査では、100㎡あたりの出土瓦はkg重量１桁台にとどまっている。50kg近い数値を示す調査が１例あるが、これは藤原宮の西面外濠を一部調査した結果だ。[34)]瓦葺建物のない宮殿の官衙地区や京内宅地と、寺院跡の出土瓦重量との懸隔は甚だしいものがある。吉備池廃寺でも、桜井市教育委員会が単独でおこなった寺域周辺部の調査をみると、100㎡あたり３kgから８kgほどの瓦しか出土していない。これは、藤原京内の出方とよく似ている。

では、吉備池廃寺金堂周辺の100㎡あたり280kg余りの出土瓦、第105次調査の107kgほどの出土瓦が意味するものは何だろう。

100㎡あたりの出土瓦がkg重量３桁の数値を示している例を探すと、西面回廊を調査した坂田寺の例[35)]（坂田寺1996－１次、1996年、672kg）、西面大垣や講堂の東西両側などを調査した飛鳥寺の例[36)]（飛鳥寺1996－３次、1996年、473kg）、寺域東辺を調査した飛鳥寺の例（第99-12次、2000年、323kg）などがある。飛鳥寺の２例は、前者では寺域外を含んでいたり、後者は顕著な遺構のない地点だったりして、数値が低くなったものと推定する。坂田寺の例は、回廊自体が奈良時代に創建された檜皮葺建物で、下層部分の調査を広範にはおこなわなかった結果とみてよい。

藤原宮中枢に似た状況

それよりも注目すべきは、藤原宮中枢部の調査例だろう。近年おこなわれた３回の調査は、第100次調査が内裏東南隅から朝堂院東北隅の回廊部分を含み、第107次調査は朝堂院東第一堂と朝堂院東面回廊、第117次調査では大極殿院東面回廊を調査した。これらは、いずれも、藤原宮を代表する瓦葺礎石建物を含んでいる。しかしながら、出土瓦の量は寺院跡の例に比べてはるかに少ない200kg台から300kg台という数値を示している。[37)]100㎡あたり４ｔという膨大な数値を示した山田寺南面回廊の例が、建物倒壊後ほとんど手つかずの状態で残った瓦の量とみなした場合、藤原宮中枢部の調査例が示す瓦の量は、その１割に満たない。これには、和銅３年（710）の平城遷都による建物の移建と、それにともなう屋根瓦の移送が関連していると考え

るのが当然だ。屋根瓦の大半が移送され、１～２割の再用不可能な瓦が現地に遺棄された状態を示しているに他ならない。

藤原宮中枢部から出土する瓦の量について、このような推論が許容されるのならば、吉備池廃寺金堂周辺の調査区（第81-14次調査や第105次調査）から出土する瓦の量も、本来、瓦葺建物に使われた瓦のうち、再利用できない瓦が現地に残された状況を反映したものだ、と解釈できる。吉備池廃寺と藤原宮中枢部が、単位面積あたりほぼ相似た量の瓦を出土するのは、二つの遺跡とも瓦葺建物があったが、それらがのちに他所に移された、という共通した歴史的経過をたどったことの結果だったと推断する。

瓦葺建物が移された

D　安倍寺・額田寺との関係

吉備池廃寺と近接して立地する安倍寺（桜井市阿部）、そして『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が百済大寺の前身寺院とする羆凝道場に擬せられる額田寺（額安寺、大和郡山市）は、同笵瓦こそ出土していないが、吉備池廃寺の性格と歴史的意義を考察するうえで重要な位置を占めていると考える。二つの寺院について、吉備池廃寺との関連から述べてみたい。

i　吉備池廃寺と安倍寺

吉備池廃寺に最も近接した古代寺院といえば、安倍寺をおいてない。安倍寺の創建軒丸瓦は、山田寺式軒丸瓦があり、ほかに重圏文縁の素弁軒丸瓦（弁央に細い稜線がある）や、素文縁の単弁軒丸瓦があって、吉備池廃寺と類似している。それもあって、後述するように、安倍寺と百済大寺あるいは吉備池廃寺との関係に論及した考察がいくつか提示されている。ここでは、まずそれらについて検討を加えたのち、吉備池廃寺と安倍寺との関係について考察する。

安倍寺の概要　安倍寺は、『東大寺要録』巻第六 末寺章第九に「崇敬寺 字安倍寺　右安倍倉橋大臣之建立也」とあって、寺号を崇敬寺といったらしい。寺伝に、大化元年（645）僧道昭開基とするが、信じがたい。「安倍倉橋大臣」は、『日本書紀』孝徳即位前紀皇極４年（645）6月庚戌条にみえる「阿倍内麻呂臣（左大臣）」、辛亥条の「阿倍倉梯麻呂大臣」、つまり阿倍内臣鳥の子、麻呂にあたる。阿倍内麻呂は同年（大化元年）７月戊寅条（「阿倍倉梯万侶大臣」）、己卯条（「阿倍倉梯麻呂大臣」）、大化４年（648）２月己未条（「阿倍大臣」）、４月辛亥条（「左大臣」）に登場し、大化５年（649）３月辛酉条に薨去が記される。内麻呂の死後、阿倍氏は布勢・引田・許曽倍などの枝氏にわかれ、斉明から天智の代には阿倍引田臣比羅夫が、持統の代には布勢朝臣御主人が氏の主となった。安倍寺の遺跡は古くから寺跡として知られ、『大和志料』（下巻、奈良県教育会、1914年、188頁）も、周辺にある古墳との関係などから、阿倍氏の氏寺とする。

安倍寺の発願者

ここで、ことさらに安倍寺を取り上げるのは、安倍寺発願者との伝承がある阿倍内麻呂について、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に百済大寺造寺司任命の記録が残っており、吉備池廃寺との間には、近接して立地するという地理的な関係だけでなく、歴史的な関係をも想定しうるからだ。

安倍寺跡は、1965～1967年に木材工業団地区画整理にともなう発掘調査がおこなわれ、金堂・塔・回廊などが確認された。金堂は、基壇規模約23m×約18m、塔は基壇一辺約12m、回廊は北面と西面が確認された。金堂を東に、塔を西におき、これを回廊が取り囲む「法隆寺式」伽藍配置で、講堂は回廊の外にあったらしい[38]。調査の結果をうけて、伽藍中心部は史跡指定さ

安倍寺の伽藍配置

れた[39]。その後、1980年代後半以降、指定地周辺の開発が進んだために発掘調査が増加し、それにともなって新たな知見が加わっている。

1989年には、伽藍の西方から、東側を石積で護岸した幅2.5mの溝がみつかった[40]。この溝は、翌年の調査でもその延長部が確認され、推定南北長が110mをこえる[41]。これに対して、塔の南方では区画施設が発見されなかった[42]。これらの成果に基づき、清水真一は、寺域を一辺180～200mとみて、西面する「四天王寺式」伽藍配置を推定した[43]。

安倍寺創建瓦の年代

安倍寺の創建軒丸瓦について、『安倍寺報告』は４型式５種類に型式分類し、２種ある九弁蓮華文軒丸瓦が単弁・素弁軒丸瓦の72%を占めることから、これらを創建瓦とした。そして、九弁蓮華文軒丸瓦が八弁蓮華文軒丸瓦よりも文様が「便化」している、とみたが、それ以上詳細な編年や年代観は述べられなかった。その後、とくにこの寺に関する論考は発表されず、安倍寺の創建年代を語るときには、山田寺とだいたい同じような時期、と解するのが一般的だった[44]。

ところが、近年になっていくつかの論考が公表され、安倍寺の創建年代には諸説が登場している。以下、それらを順にみていこう。

菱田哲郎説

安倍寺創建軒丸瓦に関する諸説　1994年に菱田哲郎は、安倍寺の軒丸瓦を３種すなわち、Ａ：重圏文縁単弁八弁、Ｂ：素文縁単弁八弁、Ｃ：素文縁単弁九弁、に分類し、ＡからＢ・Ｃへ変化するとみた。そして、安倍寺での「山田寺式」軒丸瓦採用の背景には、この様式を創出するにあたって阿倍内麻呂の関与が確認できると説いた[45]。菱田は、断定を避けながらも、安倍寺の創建を７世紀の中頃に近い時期と考えているようだ。

近江俊秀説

これに対して、近江俊秀はもっと新しいとみた。近江は、1997年に発表した論文[46]で、安倍寺創建軒丸瓦を、Ａ：重圏文縁単弁八弁（菱田Ａ・『安倍寺報告』３型式）、Ｂ：重圏文縁単弁八弁（『安倍寺報告』１型式）、Ｃ：素文縁単弁八弁（菱田Ｂ・『安倍寺報告』２型式）、Ｄ：小型の素文縁単弁八弁（『安倍寺報告』になし[47]）、Ｅ：素文縁単弁九弁（菱田Ｃ・『安倍寺報告』４Ａ型式）、Ｆ：素文縁単弁九弁（『安倍寺報告』４Ｂ型式）、に分類し直し、Ｂ種とＤ種を除いたＡ・Ｃ・Ｅ・Ｆの４種を安倍寺の創建軒丸瓦とした[48]。そして、この順、つまりＡ種→Ｃ種→Ｅ種→Ｆ種、と変化するとみて、これらの軒丸瓦の製作技法を山田寺などの創建軒丸瓦と比較したうえで、安倍寺の創建を７世紀第４四半期と考えた。

その最大の根拠は、安倍寺Ａ種が「天武朝の造営再開に伴い採用された（山田寺）Ｃ種から派生した可能性が強い」ことと、「技法的には山田寺Ｃ種よりもさらに後出する特色を示している[49]」こと、さらにはＣ種・Ｅ種が外縁の重圏文を失っていることやその多くが先端未加工の丸瓦を接合すると観察した点にあった。この年代には、７世紀第４四半期と推定しうる田中廃寺（橿原市田中町）軒丸瓦Ｉｂ[50]の存在をも傍証としている[51]。

菱田・近江とも、安倍寺Ａ種を最古型式に位置づける点では一致し、これと類似すると考えた山田寺Ｃ種を年代推定の根拠とすることも共通する。二人の年代観に違いが生まれたのは、山田寺出土瓦の整理が進むなかで、山田寺Ｃ種の年代が変更された結果ともいえよう[52]。

年代の鍵は山田寺Ｃ種

それまで、山田寺の創建期（石川麻呂造営期、641～649年）と考えられていた山田寺Ｃ種は、造営過程のなかでも後半の造営再開期（661～685年）にその大半が製作・使用されたことが判明した。くわえて、安倍寺Ａ種は山田寺Ｃ種と同笵と判明した[53]。近江は「Ａ種については、他の不明寺院の瓦窯から少量安倍寺にもたらされた可能性」を想定していたが、それがいわば的

中したわけだ。そこへ、吉備池廃寺の調査成果が加わった。

近江はこの状況を受けて、新たな議論を展開しつつある[54]。まず、安倍寺の軒丸瓦編年は再検討が必要だと訴え、かつて自らが田中廃寺を媒介として年代決定の根拠とした先端未加工の丸瓦接合手法について、「７世紀第４四半期まで年代を下げるのは無理がある」と訂正し、安倍寺の創建を７世紀第２四半期に近い時期まで遡らせる考えに変わったようだ。安倍寺と吉備池廃寺との伽藍配置の類似、そして百済大寺造寺司に任命された阿倍内麻呂の存在、といったことがその理由として述べられているが、発表要旨という形でもあり、意を尽くした議論とはなっていない。

近江新説

以上のように、安倍寺の創建年代については、山田寺に近い７世紀中頃とする説と、７世紀第４四半期とする説の二つがあった。前者の説では、創建者は『東大寺要録』の伝承のように阿倍内麻呂による造営の可能性が考慮され、百済大寺との関連が問題となろう。吉備池廃寺も安倍寺跡と類似した伽藍配置を採るからだ。一方、７世紀第４四半期の造営となると、問題は複雑となる。先に述べたように、阿倍内麻呂が亡くなったあと、阿倍氏は「分裂」するから、枝族のどの氏が寺造営の中心になったのかを議論する必要が生まれる。

安倍寺創建年代に二説

なお、創建以降の軒瓦には、軒丸瓦では、平城京長屋王邸（奈良市）や平城京観世音寺（大和郡山市）同笵の6272B、平城宮同笵の6308Cと6313Aaがある。軒平瓦は、重弧文が発掘調査で３点しか出土しなかったように、基本的には重弧文軒平瓦を採用していない。ほかに、藤原宮同笵の6643Cがある。発掘調査で出土したもう１種類の偏行唐草文軒平瓦[55]は、本薬師寺跡出土例[56]と同笵。

安倍寺の瓦編年への疑問　菱田と近江が安倍寺A種を最古型式としたのは、これが原型の山田寺式（山田寺創建軒丸瓦）に最も近似していると考えたからだ。原型からの文様要素の脱落、あるいは文様が崩れていく方向で変化をたどるのは正しい。安倍寺Ａ種にはじまって、Ｃ種→Ｅ種→Ｆ種とする編年案では、外縁の重圏文から素文への変化、蓮弁の輪郭線の消失、そして中房蓮子の減少（Ａ種は１＋６、それ以外は１＋４）の３点は説明可能だ。だが、疑問な点もある。

旧案はＡ→Ｃ→Ｅ→Ｆ

まず、安倍寺Ａ種に存在し、Ｃ種で稜線状に退化したはずの蓮弁の子葉、さらに、Ｃ種でなくなった内区と外縁との間の圏線が、いずれもＥ種で復活することを、この編年案では説明しにくい。もう一つは、安倍寺では重弧文軒平瓦がともなわないことへの説明。近江は、安倍寺に重弧文軒平瓦がないことに注意を喚起し、それを大和以外の他地域からの影響で説明できる可能性を述べた。具体的には、坂田寺の山田寺式軒丸瓦（坂田寺７Ａ）に重弧文軒平瓦がともなわないことを、善正寺式軒丸瓦（坂田寺８Ａ）の存在を媒介として、河内との関係で説明し、これを例証としている。だが、坂田寺の山田寺式軒丸瓦は、河内に展開する西琳寺式（西琳寺型式）と文様系譜の上でも繋がるから、重弧文軒平瓦がなくても様式的説明が可能なのだ[57]。

以上、安倍寺創建軒丸瓦に関する旧来の編年案には、多少疑問な点が存在する。したがって、その編年案を前提に安倍寺の創建年代について検討をしてみても、あまり実りのあるものとはならないと思う。そこで、今一度資料に立ち返ってみよう。

安倍寺創建軒丸瓦の型式分類　はじめに、安倍寺創建軒丸瓦の各型式について、その特徴をまとめる。型式分類は、近江分類を踏襲するが、Ｂ種はＣ種と同笵の可能性が高いので[58]、Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの５種に分類した（Fig.117）。

創建軒丸瓦は５種

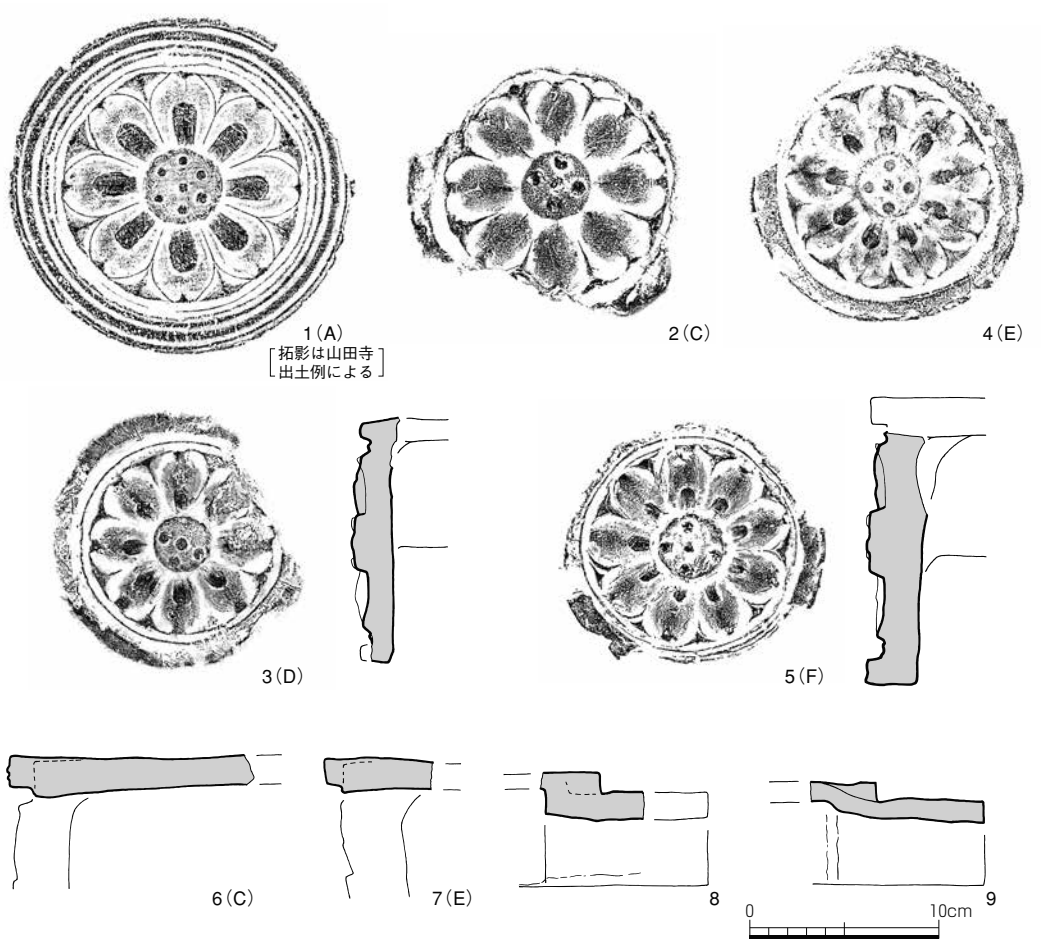


Fig. 117　安倍寺出土瓦　1:4

Ａ種は山田寺Ｃ種同笵

Ａ　種　蓮弁に舌状の子葉をおく単弁八弁蓮華文軒丸瓦（1）。蓮弁はややずんぐりとしており、弁端は反転する。弁の周囲に輪郭線がめぐる。間弁は短く、楔形をしている。中房は高く突出し、中房面は平坦。１＋６の蓮子をおく。外縁は幅約２㎝あり、四重圏文をかざる。圏線は外から２条目がほかよりも太い。弁区と外縁との間には１条の圏線がある。瓦当径18㎝。山田寺軒丸瓦Ｃ種と同笵。

Ｃ　種　素弁八弁蓮華文軒丸瓦（2）。子葉はないが、弁央に稜線がある。間弁は楔形。低い中房に１＋４の蓮子をおく。幅1.2～1.8㎝の外縁に重圏文をかざる。圏線は１条がほかよりも太い。弁区と外縁との間に圏線はない。瓦当径約15㎝。

小型で薄いＤ　種

Ｄ　種　子葉をもつ単弁八弁蓮華文軒丸瓦（3）。瓦当径が13㎝ほどしかなく、５種のなかでは最も小型の軒丸瓦。蓮弁は大きく盛り上がり、弁端にしっかりとした反転の表現がある。蓮弁周囲に輪郭線はない。子葉は先がやや尖り気味となる。間弁は楔形。中房面は緩やかなふくらみがり、そこに１＋４の蓮子をおく。外側の蓮子はすべて間弁に対応する。外縁は素文縁。弁区と外縁との間にはやや太い圏線がめぐる。圏線の断面形は三角形。

Ｅ　種　素文縁の単弁九弁蓮華文軒丸瓦（4）。蓮弁の形状はＤ種に似ており、先端が細くなって明確に反転する。中房は低く平坦で、１＋４の蓮子をおく。外側の蓮子は、１個のみが弁央に対応するほかは、間弁に対応する。弁区と外縁の間には圏線がめぐる。瓦当径約15㎝。

Tab. 17　安倍寺の軒丸瓦型式別出土点数

型式	奈良県調査（65～67）報告書	資料目録	桜井市89（宮西）	桜井市90（宮西）	桜井市90（二階堂･三本柿）	桜井市96（17次）	合計
A	（4）	4					4
B	（1）	0					0
C	（7）	8		4			12
D	（0）	0	1	1			2
E	（18）	11	1	7			19
F	（5）	14	3	6	2	1	26
EヵF	（8）	0					
不明			3				3
合計	（43）	37	8	18	2	1	66

F　種　E種と同様の素文縁単弁九弁蓮華文軒丸瓦（5）。蓮弁は、先端が強い丸みをもっており、弁端の反転の表現は弱い。また、弁区全体が、圏線がめぐる外縁との間の部分よりも一段高くなっている。中房は高く突出し、1＋4の蓮子をおく。外側の蓮子配置はE種と逆で、1個だけが間弁に対応し、ほかは弁央に対応する。瓦当径14.5㎝。

各型式の出土点数は、Tab. 17に示した[59]。以上の5種のうち、A種は山田寺ほかと同笵関係にある。ほかの型式との関係を考える上で重要と考えるので、まず、安倍寺A種の同笵例について記す。

安倍寺A種と山田寺C種の同笵関係　山田寺C種は、笵傷のない段階と笵傷のある段階とがある[60]。最も明確な傷は、弁区と外縁との間にあって、弁端と外縁の内側とをつなぐように現れた傷だ。この傷は、安倍寺A種でも確認できる。両者の同笵は疑いない。

A種は西念寺山瓦窯産

安倍寺以外にも、豊浦寺およびその南方に近接して位置する西念寺山瓦窯（ともに明日香村豊浦）から、山田寺C種同笵瓦が出土している（『藤原概報 8』1978年、51頁）。興味深いことに、山田寺を除く2ヵ寺と西念寺山瓦窯の瓦は、相互によく似た胎土と焼き上がりを示している。山田寺出土例ではみることのない、砂っぽくてガサガサした感じの胎土が共通する。これは、山田寺の瓦窯（所在未詳）から西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦笵が移り、そこで生産された製品が豊浦寺と安倍寺とに供給された結果にほかならないだろう。

瓦笵の移動時期

西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦笵が移った時期はいつだろうか。山田寺C種は、瓦笵の笵傷進行と接合部の丸瓦加工手法によって、① 笵傷なし、片ほぞ形Ⅱ型、② 笵傷なし、楔形加工、③ 笵傷あり、楔形加工、④ 笵傷あり、未加工、の4段階に区分できる。

①段階は、遡っても天智2年（663）の「塔を構える」という記事（『上宮聖徳法王帝説』裏書）の時期で、④段階は、この段階の製品に縄叩き目があることから、奈良時代に降る可能性が高い。同様の技法の製品は、山田寺金堂創建軒丸瓦A種の「第3段階」にもあり、両者ともに瓦笵の最終段階の製品に特徴的だ[61]。

西念寺山瓦窯へ山田寺C種の瓦笵が移動した時期が④段階以降だと、同笵の安倍寺A種の年代は奈良時代となるが、そうとは断定しきれない。山田寺C種の笵傷は、先述した弁区と外縁の間にある傷以外は、明瞭に傷の発生や拡大を確認できない。安倍寺A種で確認できる傷も、

瓦当面が荒れていることもあって、この傷に限られる。したがって、安倍寺A種が、山田寺C種の③段階以降の製品に対応することは断言できるが、④段階以降と確定することは現状では困難だ。笵傷発生以後のある段階の一時的移動にすぎず、瓦笵が再び山田寺の瓦窯へと戻っていった可能性も考慮する余地はある。

以上、山田寺Ｃ種の検討成果によりながら、同笵の安倍寺A種の年代を探った。西念寺山瓦窯産と推定できる安倍寺Ａ種の年代は、山田寺の造営が再開された天武２年（673）～天武14年（685）のある時期以降、は確実だが、それ以上には時期を絞りこめない[62]。

安倍寺創建軒丸瓦の製作技法　創建軒丸瓦Ａ・Ｃ～Ｆ種について製作技法をまとめておこう。

Ａ種は、接合部を観察できる個体がなく、詳細は明らかでない。瓦当は厚さ3.2㎝ある。丸瓦を、おそらくは未加工で瓦当の上端に接合するようだ。接合粘土をあてるまえに、凸面側の瓦当成形粘土を棒で押しつけた痕跡が残るものがある（県資料No.1722）[63]。裏面はナデ調整、接合部内面（凹面）は粗いユビナデ調整で、凹凸が残っている。

Ｃ種接合溝に丸瓦挿入

Ｃ種は、笵傷の多寡で段階区分できそうだが、基本的には瓦当厚３㎝台のやや厚いものが主体。丸瓦は、瓦当裏面上端の外縁位置に接合溝を設けたのちに、そこにさし込んで接合される。接合の角度が上端部でやや鈍角になるものが多い。丸瓦先端凹面は未加工で、キザミもない資料が多いが、なかには先端の凸面を浅くヘラケズリし、凹面に横方向のキザミを入れた資料もある（県資料No.1727）。接合粘土は少量。丸瓦先端がほとんど瓦当表面に接している（Fig.117-6）ためか、瓦当面の外縁基部をヘラのようなものでナデる。裏面は、丁寧なナデ調整で平坦に仕上げる。Ｃ種には瓦笵が著しく摩滅した例があり（県資料No.1732）、これは瓦当厚が2.2㎝しかない。丸瓦接合位置がほかのものより低く、弁区の周囲あたりに対応する。丸瓦剥離面には布圧痕やキザミの痕跡はない。

Ｄ種（Fig.117-3）は、瓦当厚が２㎝未満しかない薄い瓦当。厚さ１～1.2㎝ほどの薄い丸瓦を瓦当裏面の上端、外縁位置に接合する。凹凸面にあてた接合粘土が剥落しているので、キザミの有無などはわからないが、丸瓦の先端に加工はないようだ。丸瓦を立てたのち、凹面に支持ナデつけをし、ごく少量の接合粘土をあてる。瓦当裏面はナデ調整して平坦にする。

Ｄ種の接合粘土は少量

Ｅ種は、瓦当厚３㎝台のものと２㎝前後のものがある。後者には、瓦当裏面中央が浅くくぼむものがあり（県資料No.1735など）、これらの個体では裏面と側面の角をつまむようにしてナデ調整する。瓦当裏面全体に薄い粘土板を貼り足して、瓦当成形する。丸瓦の先端は、凹凸面とも浅くヘラケズリするが、キザミはない。丸瓦の先端はほとんど瓦当表面に接しており（Fig.117-7）、丸瓦を立てたのち支持ナデつけをし、凹面にはやや多めの接合粘土をあてる。

Ｆ種（Fig.117-5）は、Ｅ種とよく似た作り方をしている。瓦当厚は２～３㎝あり、裏面が平坦な個体と、中くぼみになる個体とがある。瓦当裏面に薄い粘土板を貼り付ける手法も、Ｅ種と同様。丸瓦の先端は、凹面をやや深めにヘラケズリするものが多い。凸面側もヘラケズリするのかどうかはよくわからない。丸瓦の先端は、ほとんど瓦当表面にとどいている。凹面側の接合粘土の量はやや多い。丸瓦を立てたのち、支持ナデつけする。

安倍寺オリジナル４種

安倍寺創建軒丸瓦の再編年　従来、山田寺の山田寺式軒丸瓦に最も近似することをもって、安倍寺Ａ種をこの寺の創建瓦の筆頭に考えてきた。だが、安倍寺Ａ種は山田寺Ｃ種と同笵で、しかも山田寺とは瓦窯を異にすることが判明した。したがって、安倍寺の創建軒丸瓦編年は、Ａ

種からの型式変化という方向性で考えるのではなく、C～F種のなかでまず考えてみるべきだろう。この4種では、D種が型式的に先行すると考える。

最古型式はD種

D種は、弁のてりむくりや子葉の表現がもっともしっかりしており、また、瓦当が薄くつくられている。接合位置はE・F種と変わらないが、接合粘土が少ない。

また、13㎝弱の瓦当径に対応する玉縁丸瓦が桜井市の調査で出土しており、これがD種にともなう可能性が高い（Fig.117-8・9）。この丸瓦は、玉縁と筒部を一枚の粘土板で作る。筒部から段部をこえて玉縁まで、粘土板合わせ目が連続する資料がある。段部凹面は、ほぼ直角に屈折するものとややゆるく屈曲するものがあるが、ともに玉縁の凹面全面をヘラケズリして布圧痕を残さない。

玉縁凹面をヘラケズリ

玉縁凹面をヘラケズリする手法は、筒部だけに模骨（木型）を使用する飛鳥時代初期の「星組」丸瓦に特徴的な手法で、凹面のほぼ全面をヘラケズリする手法は、奥山廃寺のいわゆる角端点珠型式（奥山廃寺Ⅱ型式）にともなう丸瓦にある。奥山廃寺の例も「星組」の玉縁丸瓦と同様、筒部の上端に粘土を積み上げるやり方で玉縁部を形成しており、削り残した部分には布圧痕はみえない。

D種に対応する安倍寺の丸瓦は、筒部と玉縁を一枚の粘土板で成形するので、この点では吉備池廃寺や山田寺の創建丸瓦と共通し、そこに奥山廃寺にあった調整手法が残存しているとみることができる。おそらく、強く屈折した模骨に布や粘土板をなじませるのが技術的に困難だったため、そのシワなどをヘラケズリで調整したのだろう。玉縁凹面をヘラケズリする手法は、吉備池廃寺や、山田寺以降に創建された寺院では確認できない。技法的には、吉備池廃寺と相前後する時期とみてよいだろう。

吉備池廃寺に近い時期

このD種に後続するのが、同じ素文縁だが九弁蓮華文の軒丸瓦E・F種と考える。瓦当径を拡大したことが、八弁から九弁への弁数の増加につながったのだろう。蓮弁の子葉が小型化している点も新しい要素といえるだろうし、この2種は、瓦当厚がD種よりも分厚く、接合粘土の量も多くなっている。

C種は、八弁蓮華文ではあるが、蓮弁に子葉の表現がない。一方で、外縁には重圏文をかざって、一見、山田寺式の文様を正当に踏襲しているようにみえる。だが、C種の重圏文縁は搬入されたA種からの影響とみるべきで、その時期はE・F種と併行するか、あるいは若干遅れるとみたい。

以上の安倍寺創建軒丸瓦の関係を図示すれば、素文縁と重圏文縁の2系統があって、

創建軒丸瓦の編年案

（素文縁）　D種→E・F種
（重圏文縁）　A種→↑　└→C種

となろう。したがって、安倍寺の創建時期は、出土点数は少ないが、D種によって判定すべきと考える。D種の蓮華文は、蓮弁に輪郭線こそないものの、山田寺の中門・回廊に葺かれた山田寺軒丸瓦D種に近似するし、先述したように、対応する丸瓦の技法的な特徴から、吉備池廃寺と近い時期と考えて問題ない。安倍寺の創建時期を、吉備池廃寺や山田寺に近接した7世紀第2四半期末頃とみて、大きくは過たないだろう。

平瓦2類の性格　さて、安倍寺の創建時期をこのように考えると、吉備池廃寺の創建瓦に関して、一つの憶測が成り立つように思う。それは、創建瓦に含めた平瓦2類に関わる問題だ。

平瓦２種は安倍寺用か

吉備池廃寺の創建瓦は、軒瓦のほかに丸瓦１類と平瓦１・２類がある。丸瓦１類と平瓦１類はセットを構成するが、平瓦２類には対応する丸瓦が見当たらない。ふつう、丸瓦と平瓦はセットで製作されるから、対応する丸瓦を欠く平瓦の単独生産は想定しにくい。ところが、安倍寺には、吉備池廃寺平瓦２類Ｂに近似した、凸面に叩き目を残す平瓦が存在する。側面調整は、分割破面だけをヘラケズリするｂ手法をとることからみて、安倍寺創建時の平瓦だろう。

これが安倍寺軒丸瓦Ｄ種とセットだとすれば、対応する丸瓦の直径が12～13㎝しかないため、大型の丸瓦を葺いた吉備池廃寺に、丸瓦は葺くことができなかったが、平瓦の規格はほぼ同じだったので、平瓦だけを供給した結果と推測することができる。これが、吉備池廃寺の創建平瓦２類の、創建瓦のなかでの客体的なあり方に反映されているとみてはどうだろう。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる、阿倍内麻呂を百済大寺造寺司に任命したとの記事は、吉備池廃寺平瓦２類の存在にその痕跡をとどめている、ともいえるだろう。

ii　額田寺との関連について

百済大寺前身寺院

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』は、百済大寺の前身寺院として、廐戸皇子が田村皇子（のちの舒明天皇）に託した「羆凝村」の道場をあげる。『扶桑略記』の推古25年（617）条に「願はくは一精舎を熊凝村に建て」、同じく推古29年（621）２月22日条に「平群郡熊凝精舎」とあるのがそれだ。この熊凝精舎を、石田茂作は、伝承に基づき額田寺（額安寺、大和郡山市額田部）にあてるとともに、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が廐戸皇子没後100年そこそこの記録だから「絶対に信用してよいもの」で、さらに「飛鳥時代の古瓦の出る事は、この創建の記録の誤らない事を重ねて證するものである」とした。[64]

しかし、福山敏男は、熊凝精舎＝額田寺説が鎌倉時代中期に成立した『聖徳太子伝私記』下巻に初めてみえる説にすぎないことから、これを疑問とし、遡って『日本三代実録』元慶４年（880）10月20日条に大安寺の奏上文を引いて「平群郡熊凝道場」とあるのは、「飽浪葦墻宮」が平群郡（『日本書紀』天武５年（676）４月辛丑条には「飽波郡」と見える）にあったとの知識による大安寺側の解釈と断じた。[65]

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にいう羆凝道場＝百済大寺前身寺院説は、「羆凝（熊凝）」の地名自体が失われてしまった現在ではほかに史料もなく、判断のしようがないし、[66]羆凝道場（熊凝精舎）を額田寺にあてる説自体も平安時代以前に遡らないとあっては、これまた検討の余地がない。

それでも、額田寺の発掘調査で法隆寺若草伽藍金堂所用と考えている手彫り忍冬唐草文軒平瓦が出土したことを受け、この瓦に、羆凝道場にはじまり百済大寺・高市大寺・文武朝大官大寺・大安寺へと法灯が伝えられたとの伝承の実体が潜むのではないかと、ひかえめに憶測する説がある。[67]

額田寺の創建軒瓦

しかし、多くの採集資料を集成して額田寺の瓦を再検討した上原真人の研究成果[68]によれば、額田寺の創建軒丸瓦は、素弁六弁蓮華文軒丸瓦をあてるべきだ。この軒丸瓦は、同文異笵２種があり、瓦当径の大きさや幅が広い素文の直立縁といった特徴からして、７世紀第２四半期の瓦としてよいだろう。大和でも類例はほとんどないが、飛鳥の和田廃寺（橿原市和田町）に１点だけ類品があるのは、飛鳥地域との関係をうかがうよすがにはなる。また、額田寺から今のところただ１点しか出土していない手彫り忍冬唐草文軒平瓦についても、過大な評価はつつしむべきだろう。[69]

額田寺では、その後、河内の「西琳寺型式（系列）」の山田寺式軒丸瓦を採用する。直立縁に文様をほどこさず、弁央に細い稜線を走らせることが、この型式の山田寺式軒丸瓦の特徴で、中河内に多く分布する。一方、大和では坂田寺と寺戸廃寺（北葛城郡広陵町）ぐらいにしか採用されていない。上原は、中河内と関連する背景として大和川の水運を推測しているが、妥当な見解だろう。

法隆寺式瓦を採用

７世紀後半の額田寺では、法隆寺式が採用される。軒丸瓦は、蓮弁が短く、大きな中房に１＋８＋16の蓮子を配置する。外縁は、緩い傾斜縁に線鋸歯文をおく。笵型は２種あり、一重目の蓮子が弁央に対応する配置（上原論文図Ⅱ－９～12）は、法起寺塔創建瓦（法隆寺37F）と共通し、一重目の蓮子が間弁に対応する配置（同図13）は、法輪寺所用軒丸瓦（法隆寺37E）と共通する。法隆寺式軒平瓦は１種類だと上原は認定しており、それは法起寺塔創建瓦（法隆寺217C）に酷似する。これらの瓦は、法起寺塔の完成年代から７世紀末頃と認定してよい。

さて、法隆寺西院伽藍の創建にあたって製作・使用された法隆寺式軒丸瓦は、蓮子配置が１＋７＋11（法隆寺37A～C）または１＋６＋10（法隆寺37Da）に限られ、外縁は平縁に線鋸歯文をおく特徴が共通する。額田寺の法隆寺式軒瓦は、それとはちがって、法輪寺あるいは法起寺の法隆寺式軒瓦と強い共通点をもち、法隆寺自体と直接の関係を瓦から導くのは困難だ。額田寺から「法隆寺式軒瓦」が出土するからといって、それによって法隆寺ひいては廐戸皇子とこの寺を結びつけるのは論証とはほど遠く、いかがなものかと思う。[70] このほかには、藤原宮式軒丸瓦（上原論文図Ⅱ-15）が出土している。藤原宮とは別笵だが、膳夫寺（橿原市膳夫町）と同笵のように思う。[71]

額田寺の軒瓦を概観すると、７世紀代には斑鳩地域や中河内地域と強い結びつきをもち、飛鳥周辺ともわずかな関連を保っているが、そこに宮殿や官寺が関わることはない、といった特徴をうかがうことができる。

続く奈良時代には、平城宮式軒瓦の文様をベースに、独自の瓦当文様を創作しており、額田部氏の氏寺たる額田寺を、瓦当文様としても表現しているように思える。ただし、平城宮式とはいっても、平城宮同笵品を使用するわけではないので、平城宮（皇后宮）同笵品を使う法隆寺東院とは、寺としての格に懸隔があったとする上原の指摘は重要だと考える。また、大安寺との間にも、軒瓦や鬼瓦で特段の同笵関係や文様の共通性は見出せていない。この時代にも、宮殿や官寺との関係は希薄だ。

額田寺とは縁が薄い

以上のような、古瓦に表現された額田寺からは、吉備池廃寺へとつながる赤い糸を紡ぐことはできない。福山が述べたごとく、羆凝道場（熊凝精舎）を額田寺にあてる説自体が平安時代以前に遡らないことを、遺物から示唆しているのではなかろうか。[72]

E　その後の吉備池廃寺

吉備池廃寺からは、この寺の創建瓦以外の瓦が少量出土した。そのうち藤原宮期から奈良時代までの瓦（丸瓦２類Ａ～Ｃ、平瓦３類・４類Ａ）は、藤原宮同笵の軒丸瓦１点を含むものの、瓦葺建物の存在を示すものではない。檜皮葺建物の棟積などに使われたものがあったのかもしれないが、その用途を特定することは難しい。

これに対して、軒丸瓦Ⅲ型式、軒平瓦Ⅲ型式、丸瓦２類Ｄ、平瓦４類Ｂそして鬼面文鬼瓦は、

種類の揃う瓦一式

赤褐色に発色する色調や胎土が共通しており、ひとまとまりの瓦としてとらえてよい。軒瓦ばかりでなく、鬼瓦があることによって、これらが一つの瓦葺建物に用いられたこと疑いない。

軒丸瓦は、外区の珠文帯と外縁との間に一段低い素文帯を設けた複弁八弁蓮華文で、中房は一段高い。同笵例を聞かないし、類似した文様の瓦を見出すことができなかった。この軒丸瓦は「成形台一本作り」技法によって作られている[73]。山崎信二は、大和における同技法の瓦を、東大寺や法隆寺の講堂再建に臨んで、平安京からの技術移植によって成立するとし、平安時代中期Ⅰ（910～973）に編年した[74]。平安京では、この技法が中期Ⅰ期～Ⅱ期（876～1016）に盛行し[75]、寛仁４年（1020）に藤原道長が創立した法成寺の瓦には認められない[76]。

軒平瓦は、内区に花菱風宝相華文をかざる。この文様は、丹波篠Ａ号窯で焼かれた法成寺創立の瓦に始まり、平安京瓦編年中期Ⅲ期（1016～1058）に出現する[77]。朝堂院や三条西殿跡、鳥羽離宮南殿跡では、12世紀の播磨産の軒平瓦にこの文様がある[78]。大和では興福寺に、上下の外区に珠文を並べた花菱風宝相華文軒平瓦がある。藪中五百樹は、興福寺瓦編年Ⅵ期（1078～1103）とする[79]。

鬼瓦は、目玉の部分しか文様のわかる部位はないが、これが型作りとは判明した。大和の型作り鬼瓦は、12世紀中頃の法隆寺夢殿の例[80]、承元４年（1310）再建用の興福寺北円堂例[81]などが最も新しい作例で、それ以後は、手づくねの鬼瓦に交替する[82]。

11世紀前半に瓦葺仏堂

製作技法から推定される軒丸瓦の年代と、文様から推定される軒平瓦の年代との間に、微妙にずれはあるが、おおむね11世紀前半をこれらの瓦の年代として推定する。

さて、これら一群の瓦は、吉備池廃寺調査区のどこででも出土したのではない。総計41点と量は多くないものの、そのうちの27点が第105次調査中央区から出土した。これには、軒丸瓦と鬼瓦各２点と軒平瓦３点を含んでいる。そのほか、現吉備池北岸に位置する第105次調査西区から５点、第111次調査北区から３点が出土した。第105次調査中央区は、現在、春日神社が鎮座する低丘陵の南側に位置する。この丘陵は、南東から延びていた舌状の丘陵を、吉備池廃寺の造営にあたって中途を削平したために独立したようにみえている。そして、その東南部には、第105次調査中央区を設定した水田から1.5mほどの高さで、幅８ｍほどの平坦面がめぐっている。おそらく、この平坦面に小規模な瓦葺仏堂が建っていたのだろう。

11世紀の前半に、この地には吉備池廃寺とは別の瓦葺仏堂が建てられた。それが吉備池廃寺を意識したものだったかどうかは、記録もなく明らかでない。だが、その後ほどなく廃滅したことだけは間違いなさそうだ。

Ｆ　瓦からみた吉備池廃寺と百済大寺

以上、吉備池廃寺出土瓦について、種々の方面から検討を加えた。最後に創建瓦について述べたことをまとめておこう。

吉備池廃寺創建瓦の年代は、軒瓦の文様と製作技法により、おおむね630年代から640年代初頭と判断した。

これは、まず、舒明13年（641）に創建され、大化５年（649）までに完成したと考えられる山田寺金堂および中門・回廊の創建軒丸瓦との比較による。吉備池廃寺創建軒丸瓦は、山田寺のものより様式的に若干先行する要素をそなえている。また、吉備池廃寺創建軒平瓦の型は、

ほぼ630年代と考定した斑鳩寺213Bの押し型を、若草伽藍での使用後に瓦窯と瓦工を変えつつ再使用したものだった。丸瓦の形状も、山田寺創建期の丸瓦によく似ており、それよりは２割ほど大きく作られている。大きな瓦には大規模な建物がふさわしく、それは金堂と塔の基壇規模からも推定されたことだった。

また、吉備池廃寺創建瓦の出土量は、従来からも少ないとはいわれていたが、これをほかの遺跡での出土量、とくに藤原宮中枢部の近年の調査成果と比較することによって、瓦葺建物が移建されたのちの状況とみるべきことを述べた。出土した瓦のなかには補修瓦がみあたらず、後世の瓦はこの寺に葺かれたものではないことを論証した。

吉備池廃寺創建瓦の年代と規格、そして遺跡での瓦の出土状況は、舒明11年（639）に創建され、わずか三十余年のちの天武２年（673）に高市の地に移されたと伝える「百済大寺」にふさわしい。

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、百済大寺造寺司に阿倍内麻呂（阿倍倉橋麻呂）が任ぜられたとの記録がある。彼は氏寺たる安倍寺創建者とも伝えるが、安倍寺の創建瓦をあらためて検討すると、その創建は７世紀中頃、内麻呂存命中（649年以前）と考える余地も充分あるだろうとの結論をえた。さらに、吉備池廃寺創建平瓦の一部（平瓦２類）が安倍寺から供給された可能性も指摘した。この点では、記録は信頼にたる事実を伝えるとみえる。

だが、その一方で、同書が百済大寺の濫觴とする羆凝精舎（その伝承地の額田寺）に関しては、瓦からは関連を見出すことはできなかった。それはかえって、天皇家勅願寺としての「大寺」の系譜を廐戸皇子（聖徳太子）に仮託しようとする意図をあらわにするようだ。[83)]

吉備池廃寺の瓦は、この遺跡に、かつて九重塔を誇った百済大寺の大伽藍がそびえていたことを今に伝える。子部神の怨みも、瓦にまでは及ばなかったのだろう。

1）後述する木之本廃寺では、割面戸瓦を確認した。吉備池廃寺から鴟尾片が一片も出土しなかったことは、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「石鴟尾」の存在を暗示するのかもしれない。

2）大脇　潔「大安寺１ －百済大寺から大官大寺へ－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。大脇　潔「吉備寺はなかった －『京内廿四寺』の比定に関連して－」『文化財論叢Ⅱ』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。上原真人「寺院の変遷からみた仏教」『仏教の受容と古代国家 －日本古代国家の成立を探る Ⅲ』第８回歴史の華ひらく泉南シンポジウム、泉南市・泉南市教育委員会、1995年。小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。（小澤「吉備池廃寺と百済大寺」『吉備池廃寺をめぐって －百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所、1998年もほぼ同文）。近江俊秀「吉備池廃寺は百済大寺か －百済大寺と高市大寺の所在地をめぐって－」『吉備池廃寺をめぐって －百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所、1998年。大脇　潔「『百済大寺』論争の行方をめぐって」『吉備池廃寺をめぐって －百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所、1998年。花谷　浩「兄弟の瓦 －百済大寺と海会寺」『海会寺跡』（第１回古代史博物館フォーラム 歴史を語る 第１話）泉南市、1998年。伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 Ⅰ』奈文研、2000年。

3）大脇　潔「吉備寺はなかった」前掲註２）、170～171頁。

4）毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』法隆寺昭和資財帳 15、小学館、1991年。

5）岩井孝次『古瓦集英』岩井珍品屋、1937年、図版13-55、図版30-153。

6）石田茂作『古瓦図鑑』大塚工芸社、1930年、図版第132-428。現在の明日香村小山にある大官大寺（文武朝大官大寺）跡からの出土として報告され、山村廃寺の均整忍冬唐草文軒平瓦および斑鳩寺型押し忍冬唐草文軒平瓦（213B）と並べて掲載された。目録には「大官大寺ノ創立ハ白鳳時代デアルガ、文様ノ形式上シバラクコヽニオク」とある。法隆寺式軒瓦が飛鳥時代と認識されていた当時のことで

はあるが、同じ押し型を使った法隆寺例が並置されているのは慧眼といえよう。ただし、その後、奈文研がおこなった大官大寺跡の発掘調査では、当該軒平瓦は１点も出土しなかった。

７）奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術、1970年。

８）山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎出版、1983年、註148。なお、「吉備寺」の存否については、大脇 潔「吉備寺はなかった」前掲註２）参照。

９）以下、木之本廃寺出土瓦については、伊藤敬太郎「吉備池廃寺・木之本廃寺の創建瓦」前掲註２）と、花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研学報第60冊、2000年を参照。

10）四天王寺軒瓦の分類と編年は、以下の文献を参照した。天沼俊一ほか『四天王寺図録 古瓦編』四天王寺、1936年。四天王寺文化財管理室『四天王寺古瓦聚成』柏書房、1986年（以下、『聚成』として引用）。上原真人「仏教」『岩波講座 日本考古学』第４巻 集落と祭祀、岩波書店、1986年。網 伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、1997年。網 伸也「四天王寺の『百済大寺式』軒丸瓦」『古代瓦研究 Ⅰ』奈文研、2000年。

11）四天王寺出土瓦の観察は、西川雄大がおこなった。調査にあたり、柏原智覚の協力を得た。

12）仮屋喜一郎ほか『海会寺 －海会寺遺跡発掘調査報告書－』泉南市教育委員会、1987年。

13）海会寺出土瓦の観察は、西川雄大がおこなった。調査にあたり、城野博文の協力を得た。

14）毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』前掲註４）。

15）網 伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」前掲註10）。

16）『大日本仏教全書』聖徳太子伝叢書、仏書刊行会、1912年、66頁。

17）白雉４年（653）６月条には、これらが川原寺に安置されたと見え、同条所引の或本は、その場所を山田寺とする。しかし、この時点で川原寺が存在したことにはつながらないだろう。

18）小澤 毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註２）。小澤は、「移建は確実」の根拠として、出土瓦に「補修用の瓦がまったく存在しない」ことと、「丸瓦や平瓦の出土量も僅少であり、そのうえ、圧倒的に小片が多い」ことをあげている（38頁）。

19）小澤 毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』奈文研学報第52冊、1993年。

20）丸瓦１類以外の型式は、出土量の１％に満たない（『年報 1998-Ⅱ』64頁、『紀要 2001』82頁）。

21）平瓦を「厚手品」と「薄手品」とで分類集計した第81-14次調査区では９％、第89次調査区では10%が「薄手品」だった（『年報 1997-Ⅱ』 90頁、『年報 1998-Ⅱ』 64頁）。「薄手品」には、ごく少量の３類以下の平瓦を含むが、基本的には平瓦２類と判断してよい。縄叩きをもつ平瓦３類と４類は、全体量の２％未満しかない（『紀要 2001』82頁）。

22）小澤 毅「西隆寺創建期の軒瓦」前掲註19）。

23）佐川正敏「第Ⅱ期遺構の造営瓦とその年代」『平城宮発掘調査報告 XⅣ』奈文研学報第51冊、1993年、96～117頁。

24）ここでの平瓦の枚数は、大極殿の屋根が入母屋の場合の推定所用枚数32,218枚を採用したもの。寄棟の場合は33,528枚で、第二次大極殿院全体の平瓦総計は約121,200枚、丸瓦に対する平瓦の枚数比は１：2.54となる。なお、丸瓦と平瓦の枚数比には、平瓦の葺足が大きな影響を与える。佐川は、大極殿院所用平瓦の葺足を15㎝とし、平瓦全長に対する比率0.38～0.40が、恭仁宮や東大寺法華堂の例とも整合するとした。小澤も、西隆寺における丸瓦と平瓦の個体数比（１：2.60）は両者の葺足の比率に対応すると考えて、葺足長12.4㎝を割り出し、これが平瓦全長の37%に相当すると述べた。これらは、平瓦三枚葺きの実例だろう。

25）山田寺回廊では、出土した軒平瓦や平瓦に残る風食痕が全長の約半分に達しており、二枚葺きだったとみてよい。この場合、丸瓦に対する平瓦の個体数比は、奈良時代の諸実例より小さくなる。だが、重量比でみるとよく似た数値になる。

　山田寺回廊所用の創建丸瓦（丸瓦ＢⅡ、ＢⅣ）は筒部長33～36㎝、平均重量2.7㎏。創建平瓦は、平瓦３類が全長37～41㎝、重量4.7～6.0㎏、平瓦４類が全長35～40㎝、重量4.0～5.5㎏（奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年）。

　二枚葺きとした場合の丸瓦と平瓦の個体数比は、1.65～1.89で、平瓦の重量を単純に平均して重量５㎏とした場合、重量比では１：3.05～3.5となる。奈良時代の瓦に比べると、丸瓦に対して平瓦が重いため、個体数比と重量比に差がでてくる計算だ。

26）佐川正敏「山田寺の調査」『年報 1997-Ⅱ』。

27）花谷 浩「川原寺の調査 －1995-１・1996-１次」『年報 1997-Ⅱ』。

28）千田剛道・西口壽生「西塔・南面回廊の調査（1995-1次）」『年報 1997-Ⅱ』、花谷 浩「本薬師寺出土の瓦」『年報 1997-Ⅱ』。
29）花谷 浩「飛鳥寺の調査 －第91-8次調査」『年報 1999-Ⅱ』。
30）『藤原概報 26』1996年、87～89頁。出土瓦の多くは、奈良時代回廊の整地土層から出土した。出土した軒瓦も90%が７世紀代のものだった。
31）『藤原概報 26』1996年、62～75頁。
32）花谷 浩「飛鳥寺の調査 －西門地区の調査（1996-1次）」『年報 1997-Ⅱ』。
33）このほか、1984年の山田寺東面回廊の調査では、調査面積572㎡で11ｔの瓦が出土したと報告した（『藤原概報 15』1985年、95頁）。100㎡あたり1.92ｔの計算になる。
34）渡邉淳子「西方官衙南地区の調査 －第108-10次」『紀要 2001』。藤原宮外周の大垣は瓦葺。
35）西口壽生・佐川正敏「坂田寺の調査 －1996-1次」『年報 1997-Ⅱ』。
36）西口壽生「飛鳥寺1996-3次調査」『年報 1997-Ⅱ』。
37）３つの調査区は奈文研調査以前に日本古文化研究所が発掘調査しており、また、第100次調査区の北辺にある礎石建物SB530のまわりと東辺は、奈文研第２次調査区と重なっている。第100次調査区と重複する第２次調査区については瓦を全量採取していたので、第100次調査区の面積に対して20%ほどを占める第２次調査区重複分を補正する必要がある。これを２割とみたとき、単位面積あたりの瓦重量は、287.58÷0.8＝359.48㎏、と推算できる。

一方、古文化研究所の調査は、基本的に、トレンチ調査あるいは壺掘りによって礎石位置を確認する手法をとっており、また、埋め戻した土からも多量の丸・平瓦がみつかる。破片となった瓦は採取せずに埋めてしまったようなので、その影響は考慮せずともよいだろう。

ただし、大極殿院回廊「東殿」をねらった第117次調査の北区だけは、日本古文化研究所がやや広範囲に全面調査を実施している。その時の調査では瓦敷が発見されたが、これを掘り出して除去してしまっている。また、ここにはかつて鴨公小学校校舎が建っていて、それによる攪乱も著しかった。第117次調査について、北区（1,200㎡）と南区（500㎡）にわけて瓦の出土量を記すと、北区：丸瓦885.14㎏、平瓦2,364.22㎏、合計3,249.46㎏、南区：丸瓦669.33㎏、平瓦2,410.87㎏、合計3,080.2㎏。100㎡あたりの瓦重量は、北区：270.79㎏、南区：616.04㎏、となって、北区での日本古文化研究所の調査による瓦の減失は否定できない。第117次調査については、現在もまだ整理中なので、今後さらに検討を要するし、それ以降の調査についても同様のデータを積み上げていきたい。
38）石田茂作は、塔跡土壇の北東に畑地があって、ここが講堂跡に推定できると報告している。石田は、約１町四方の法隆寺式伽藍配置を考えた。石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会、1936年、145～156頁。
39）田中英夫・久野邦雄・泉森皎ほか『安倍寺跡環境整備事業報告－発掘調査報告書－』桜井市、1970年。以下、『安倍寺報告』として引用。
40）清水真一「国史跡安倍寺・宮西地区 発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘調査報告書１』桜井市文化財協会、1990年。
41）清水真一「国史跡・安倍寺の周辺地区発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書 ２』桜井市文化財協会、1991年。
42）清水真一「安倍寺跡第14次調査」『桜井市内埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』桜井市文化財協会、1994年。清水真一「安倍寺跡第17次調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書１』1997年。
43）清水真一「安倍寺跡」『埋文センター5年のあゆみ』桜井市文化財協会、1994年。
44）たとえば、小島俊次「安倍寺址」『国史大辞典』第１巻、吉川弘文館、1979年。
45）菱田哲郎「瓦当文様の創出と７世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 ５、名著出版、1994年。
46）近江俊秀「安倍寺の瓦 －大和安倍寺の造営年代をめぐる一考察－」『古代文化』第49巻第５号、古代学協会、1997年。以下、「近江1997年論文」として引用。
47）石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』前掲註38)、図版第88－１。
48）Ｂ種とＤ種を除外したのは、奈良県教育委員会による発掘調査でＢ種が１点しか出土せず、Ｄ種が全く出土しなかったことによる。ただし、Ｂ種の存在は疑問。註58）参照。
49）近江1997年論文（前掲註46)）、34頁。

50）当初笵（Ⅰａ）では蓮弁に子葉があるが、これを削り落として素弁に改笵したもの。竹田政敬「平松廃寺 －前身寺院は飛鳥に－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。

51）近江は、安倍寺の創建年代が『東大寺要録』の記述に引きずられている状況を危惧し、出土瓦の分析から安倍寺の造営時期を考えようとした。これは、至極正当な着眼だった。

52）山田寺Ｃ種のほとんどは製作が天武朝に降る、と公表したのは、1994年の『年報 1994』（28～29頁）。

53）近江俊秀『大和考古資料目録 第23集　飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1998年、39頁。

54）近江俊秀「大和の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり Ⅳ －山田寺式軒瓦の成立と展開（１）－』古代瓦研究会、2000年。以下、「近江2000年論文」として引用。

55）『安倍寺報告』前掲註39）、第14図１・２。

56）『藤原概報 26』1996年、69頁 Fig.45の「新型式」とした軒平瓦。

57）花谷　浩「畿内の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり Ⅴ －山田寺式軒瓦の成立と展開（２）－』奈文研、2001年。

58）『安倍寺報告』前掲註39）では、Ｂ種（報告の型式番号は１型式）について、「子葉のもたない８葉の単辨で」「周縁は高く、三重圏文がめぐらされている」とし、Ｃ種の特徴を「（Ｂ種より）直径が１㎝ほど小型につくられ、辨央の稜線が先端まで明瞭に附されている」とする（14頁、括弧内は筆者）。また、近江は1997年論文（前掲註46））のなかで、Ｂ種は「弁央にややにぶい稜線」、Ｃ種は「弁央（特に中房付近と先端部）にするどい稜線」をもつと述べている（32頁）。

しかし、『安倍寺報告』の第13図１に示されたＢ種の拓本を、同図２（Ｃ種）の拓本と重ね合わせると、中房蓮子の配置と間弁の位置がまったく重なる。さらに、桜井市所蔵資料も含めて、弁央に子葉のない軒丸瓦を比較した結果では、確かに、弁央の稜線が蓮弁基部だけにしか表現されない個体と、弁央の稜線が弁端まで明瞭な個体とがあるけれども、両者は中房蓮子の配置が一致するだけでなく、弁区にある笵傷もすべて一致する。同笵は疑いない。

『安倍寺報告』第13図１のＢ種の拓本は、図版７-1にＢ種として掲載された瓦と、瓦当面を横断する割れの形状や位置が一致する点からみて、これをもとに復元的に作成したものだろう。18頁第３表によれば、Ｂ種は１点しか出土していないことも、そうした想定を裏づける。この図版７-1掲載の瓦を奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で実見したところ、Ｃ種だった。直径は、18頁第３表でＢ種の直径とされる17.1㎝。以上、安倍寺出土の軒丸瓦で子葉をもたない八弁蓮華文には、Ｃ種と異なる型式は認められず、Ｂ種の存在は否定すべきだろう。

なお、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵資料の観察にあたっては、今尾文昭の協力を得た。また、桜井市埋蔵文化財センター所蔵資料の観察には、清水真一の協力を得た。多謝。

59）近江が1997年論文（前掲註46））と2000年論文（前掲註54））で記載した出土点数のうち、伽藍中心部出土としたものは『安倍寺報告』前掲註39）18頁第３表の点数そのままで、『大和考古資料目録 第23集』前掲註53）作成時に再整理した成果ではない。Tab.17の「奈良県調査・報告書」は、『安倍寺報告』18頁第３表に記載の型式別点数（括弧内に表記）。報告の型式番号と本稿での型式名との対応は、１＝Ｂ、２＝Ｃ、３＝Ａ、４Ａ＝Ｅ、４Ｂ＝Ｆ、（４）＝ＥヵＦ、とした。「奈良県調査・資料目録」は、『大和考古資料目録 第23集』39～45頁所載の資料と、桜井市立埋蔵文化財センターに寄託中の資料をあわせて型式認定した点数。合計にかかわる奈良県調査分の点数はこれによるものとする。桜井市調査資料については、年次と地区ごとで集計した。文献は、註40）～42）を参照のこと。ただし、報告とは点数が一致しないものもある。

60）奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註25）、490～498頁。

61）奈文研『山田寺発掘調査報告』前掲註25）、497頁 Fig.184。

62）安倍寺跡から発掘調査で出土した偏行唐草文軒平瓦は、粗い胎土をもち、うち１点は安倍寺Ａ種と似たような赤茶色の発色をしている。これは平瓦部凹面に模骨痕を残さないので、一枚作りの可能性が高く、奈良時代に降るだろう。ただし、西念寺山瓦窯や本薬師寺でのセットを確認できないので、両者のセット関係については保留したい。

63）奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和考古資料目録 第23集　飛鳥・奈良時代寺院出土の軒瓦』前掲註53）。以下、番号は同書による。

64）石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』前掲註38）、281～296頁（引用文は293頁）。

65）福山敏男『奈良朝寺院の研究』高桐書院、1948年、15～30頁。飽波評の成立および飽波郷と額田郷の帰属については、仁藤敦史「額田部氏の系譜と職掌」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』国立歴史民俗博物館、2001年参照。

66）黒田慶一「熊凝考」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集、真陽社、1988年。

67）前園実知雄「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1978年度』奈良県教育委員会、1979年。

68）上原真人「額田寺出土瓦の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』国立歴史民俗博物館、2001年。

69）手彫り忍冬唐草文軒平瓦は、ほかに上宮遺跡（生駒郡斑鳩町）でも出土している。斑鳩町教育委員会荒木浩司による。

70）仁藤敦史「額田部氏の系譜と職掌」前掲註65)、111頁。

71）上原真人「額田寺出土瓦の再検討」前掲註68）所載の拓本と、保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年、図版第24掲載の膳夫寺軒丸瓦の写真（疏瓦４）を比較すると、外区の蓮子配置が一致する。額田部氏と膳氏については、時代は異なるものの、推古紀18年（610）10月丙申条の、「額田部連比羅夫に命（みことおほ）せて、新羅の客迎ふる荘馬（かざりうま）の長とす。膳臣大伴を以て、任那の客迎ふる荘馬の長とす」という記事が想起される。余談だが、膳夫寺から出土する山田寺式軒丸瓦の内区だけを使ったとおぼしき垂木先瓦が、文武朝大官大寺（明日香村小山）の発掘調査で１点だけ出土している（『藤原概報 11』1981年、42頁)。同じものが膳夫寺からも出土するかどうかは不詳。

72）狩野久は、羆凝精舎を飽浪葦墻宮の近傍に存在する「宮室に付属する仏堂のように考えられる」とし、『日本書紀』に登場しないという理由で、その存在まで疑うことには否定的な見解を示している。狩野　久「額田部連と飽波評」『日本古代政治社会史研究』上巻、塙書房、1984年（狩野『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、1990年所収)。また、大江親通『七大寺巡礼私記』は、羆凝精舎を摂津国羆凝村とする。この説におおかたの論者は否定的だが、黒田慶一は、『荒陵寺御手印縁起』にみえる摂津国の「羆凝地」が摂津国大郡だとする。黒田慶一「熊凝考」前掲註66)。

73）毛利光俊彦「成形台一本造り技法の展開」『平城宮発掘調査報告 XⅢ』奈文研学報第50冊、1991年、270～276頁。これは、木村捷三郎が提唱した「一本造りあぶみ瓦」で、鈴木久男のいう「D技法」、上原真人のいう「横置き型一本造り」に対応する。木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『造瓦と考古学』木村捷三郎先生頌寿記念論集刊行会、1976年。鈴木久男「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館、1990年。上原真人「仏教」前掲註10)。

74）山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集 Ⅵ』奈文研学報第38冊、1980年。

75）近藤喬一「軒瓦の編年試案」『平安京古瓦図録』平安博物館、1977年。

76）木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」前掲註73)。

77）近藤喬一「軒瓦の編年試案」前掲註75）参照。

78）平安博物館『平安京古瓦図録』前掲註75)。

79）藪中五百樹「平安時代における興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194号、毎日新聞社、1991年。なお、最近では、Ⅴ期（1017～1067）に遡る可能性も述べている。藪中五百樹「奈良～平安時代の興福寺の新形式瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 Ⅱ』帝塚山大学考古学研究所、2000年。

80）毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝 瓦』前掲註４)。

81）奈良県教育委員会『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1965年、第314図。

82）毛利光俊彦「鬼瓦」『山田寺発掘調査報告』前掲註25)、524～532頁。

83）ただし、廐戸皇子の斑鳩宮に瓦葺仏堂があったことは、出土瓦のなかに隅軒平瓦（215A）が存在することによって確実だ。同じような施設を飽浪葦墻宮に想定し、それを羆凝精舎にあてようとする狩野久の見解は、今のところ否定する材料がない。

5　藤原京条坊と寺地

A　藤原京の京域と道路規格

吉備池廃寺が寺院としての機能を失ったのち、一帯は藤原京の範囲に含まれ、条坊が施工された。「第Ⅲ章２ 遺構各説」で報告したように、今回の一連の発掘調査でも、藤原京の条坊道路側溝のほか、溝や建物・塀などの遺構を検出している。

なお、藤原京の京域については、岸俊男の復元[1)]が長く定説としての位置を占めてきた。中ツ道と下ツ道を東西の京極、横大路を北京極とする、12条×８坊の復元案である。この場合、１坊は半里（約265m）四方で、４町（１町＝約133m四方）に分割されていたことになる。

ところが、1979年以降、岸説では京外にあたる部分でも、藤原京の条坊遺構があいついで検出され、宅地のありさまも、岸説の京内部分とまったく変わらないことが判明する。したがって、岸の復元を越えた範囲に条坊がしかれ、京として機能したことは動かない状況となった。そして、1996年には東と西の京極が確認され、京域の東西は岸説の2.5倍にあたる5.3㎞におよんでいたことが確定するにいたる。

また、条坊道路の規格を検討すると、側溝心々間距離で比較した場合、岸説でいうところの偶数条坊大路（二条大路・東二坊大路など）が約16m（45大尺）の幅員をもつのに対して、奇数条坊大路（三条大路・東一坊大路など）は約９m（25大尺）と格段に小さく、むしろ一般の小路（条間路・坊間路）の約７m（20大尺）に近似した数値を示す。平城京以後の都城が、例外なく16町を１坊とする形態をとる事実とあわせて、藤原京の１坊も１里（約530m）四方と考えるべきであろう[2)]。

1坊は16町

つまり、岸説の偶数条坊大路だけが本来の大路であり、奇数条坊大路は、坊の中央を走る条間路や坊間路であったことになる。実際、奇数条坊大路と小路の25大尺と20大尺という幅員は、それぞれ、平城京の条間路・坊間路と小路にそのまま受け継がれているのである[3)]。

以上の点から、藤原京域の東西幅5.3㎞は、正しく10坊分に相当するとみてよい。一方、南北の京極は今のところ未確認だが、少なくとも９条分の広がりをもつことが確認されている。律令における坊令の人数規定を考えあわせると、南北の京域も、東西の坊数と同じく10条であった蓋然性は高いだろう[4)]。その場合、４坊分を占める藤原宮は、10条×10坊の正方形の京域の中央に位置することになる（Fig.118）。

10条×10坊の京域復元

なお、藤原京の条坊は、平城京で左京「三条二坊」というような数詞呼称が用いられたのとは異なり、「林坊」（『続日本紀』文武３年（699）正月壬午（26日）条）のごとく、固有坊名で呼ばれたことがわかっている。また、平城宮朱雀門下層の下ツ道西側溝から出土した「左京小治町」と記す過所木簡[5)]も、大宝令施行後の藤原京で、「小治町（小治坊）」という固有坊名が使用されていた事実を示している。

したがって、藤原京条坊に関しても、岸説の偶数条坊大路を大路、奇数条坊大路を条間路や坊間路、その他を小路とする１坊＝16町型の呼称が実態に即していることは明らかだが、南北の京極が確定していない現況も勘案して、ここでは、ただちにそうした平城京型の呼称を適用することは差し控え、条坊呼称については、便宜上、従来の呼称を踏襲することにしたい[6)]。

B　東西道路の復元

吉備池廃寺の寺域全体を画する外郭施設については不明な点が多いけれども、その伽藍がのちの藤原京左京三条九坊・十坊と四条九坊・十坊の一部にかかることは間違いない。寺地の南寄りの部分には三条大路、北方ないし北寄りの部分には二条大路が東西に走り、その間に三条条間路が通っていたと推定される。これらの東西道路はいずれも過去に調査例があり、三条大路と三条条間路は、今回の調査でも側溝を検出することができた。一方、南北方向の道路は、東九坊大路と、東京極より１本内側（西側）にあたる東十坊坊間路が寺域内を通過する位置に想定されるが、それらに関しては、今のところ発掘調査で確認した例がない。ただし、東京極にあたる東十坊大路や東九坊坊間路は発掘例があり、東五坊大路など、中ツ道以東におけるその他の調査成果も蓄積されつつある（Tab. 18, Fig. 118）。以下、そうした成果に基づき、吉備池廃寺周辺の条坊を復元しておこう。

作業にあたっては、データの解析と統計的な処理を容易にするために、条坊道路の道路心や

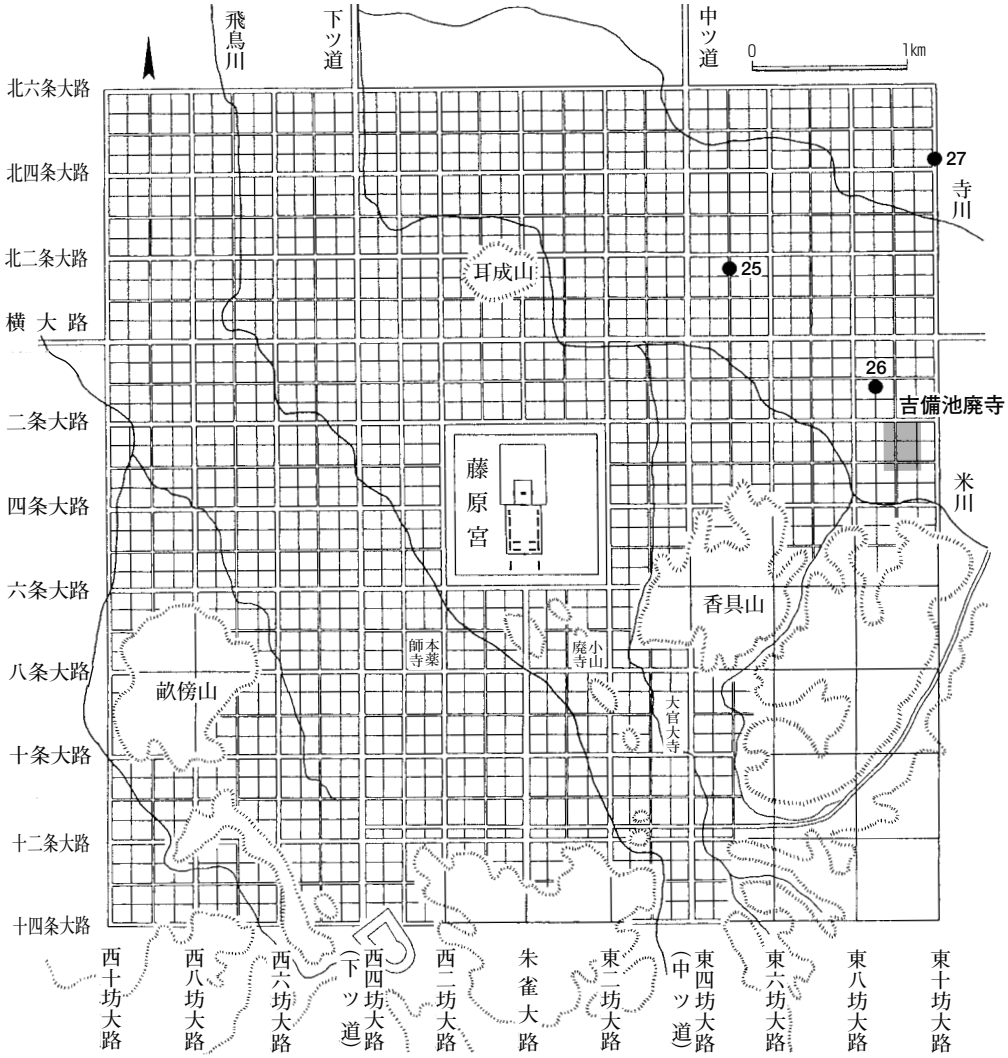


Fig. 118　藤原京条坊の復元と吉備池廃寺の位置　1:50000

数字はTab. 18 と対応、一部の条坊は模式図
条坊呼称は便宜的に岸説とその延長呼称による

側溝心を、国土座標を用いたＸ・Ｙの１次関数であらわすこととする。そして、単回帰分析により、直線の傾きと切片の最確値を計算する方式を採用した[7]。あわせて、それらの直線性と実測値との整合性を検証するために、相関係数と残差分散を表示した[8]（Tab.19）。

単回帰分析

二条大路　今回の調査では直接確認していないが、右京三坊から左京一坊にかけて、複数の検出例がある（Tab.18－1～12）。側溝心々間の幅員は、16.2～16.9m（復元値45大尺=15.9m）である。回帰分析により算出される両側溝心の方程式はやや傾きを異にするが、検出遺構と回帰式の齟齬を示す残差（実測値と予測値の差）や残差分散（残差の平方和を自由度で割った値）を比較すると、北側溝心（残差分散0.162）は、南側溝心（残差分散0.024）にくらべてかなり大きな数値となって

Tab. 18　関連条坊座標値一覧表（1）　＊計算により修正

番号	条坊道路	種　別	X座標	Y座標	調査機関・次数	座標値の典拠
1	二条大路	北側溝心	-166,035.2	-18,088.4	橿原市 1992年度	文献１ p.29
2	二条大路	北側溝心	-166,034.7	-18,002.0	奈文研 39次	文献１ p.27
3	二条大路	北側溝心	-166,034.2	-17,773.0	奈文研 58-13次	文献２ p.30
4	二条大路	北側溝心	-166,031.8	-17,458.0	奈文研 71-3次	文献３ p.74
5	二条大路	北側溝心	-166,030.9	-17,336.2	奈良県 1967年度	座標再計算
6	二条大路	南側溝心	-166,051.7	-18,088.4	橿原市 1992年度	文献１ p.29
7	二条大路	南側溝心	-166,050.9	-18,002.0	奈文研 39次	文献１ p.27
8	二条大路	南側溝心	-166,050.7	-17,905.0	奈文研 58-14･15次	文献４ p.31
9	二条大路	南側溝心	-166,050.5	-17,886.4	奈文研 41-1次	文献５ p.52*
10	二条大路	南側溝心	-166,050.4	-17,839.0	奈文研 33-3次	文献１ p.27
11	二条大路	南側溝心	-166,050.4	-17,816.0	奈文研 48-7次	文献６ p.48*
12	二条大路	南側溝心	-166,047.8	-17,336.2	奈良県 1967年度	座標再計算
13	三条条間路	北側溝心	-166,172.9	-18,087.4	橿原市 1996年度	文献１ p.31
14	三条条間路	北側溝心	-166,172.0	-17,999.0	奈文研 39次	文献７ p.28*
15	三条条間路	南側溝心	-166,179.9	-18,087.4	橿原市 1996年度	文献１ p.31
16	三条条間路	南側溝心	-166,176.8	-17,524.6	奈文研 18-3次	実測図
17	三条条間路	南側溝心	-166,163.3	-14,931.0	奈文研 111次	文献８ p.80
18	三条大路	北側溝心	-166,303.2	-18,000.0	奈文研 25次	文献１ p.27
19	三条大路	北側溝心	-166,292.8	-16,994.0	奈文研 108-11次	文献９ p.54
20	三条大路	北側溝心	-166,292.7	-16,958.9	奈文研 27次	文献１ p.25
21	三条大路	北側溝心	-166,274.0	-14,948.0	奈文研 111次	文献８ p.78
22	三条大路	南側溝心	-166,312.2	-18,000.0	奈文研 25次	文献１ p.27
23	三条大路	南側溝心	-166,301.7	-16,958.9	奈文研 27次	文献１ p.25
24	三条大路	南側溝心	-166,299.2	-16,779.2	奈文研 21-2次	文献10 p.25*
25	東五坊大路	道路心	-165,061.3	-16,102.9	桜井市 1986年度	文献１ p.38
26	東九坊坊間路	道路心	-165,788.0	-15,187.8	桜井市 1996年度	文献１ p.38
27	東十坊大路	道路心	-164,376.0	-14,800.3	桜井市 1996年度	文献１ p.38

文献　1　奈文研『藤原京研究資料（1998）』1999年
2　奈文研「第58-13次調査」『藤原概報 19』1989年
3　奈文研「第71-3 次調査」『藤原概報 24』1994年
4　奈文研「第58-14･15次調査」『藤原概報 19』1989年
5　奈文研「右京三条二坊の調査（第41-11次）」『藤原概報 15』1985年
6　奈文研「二条大路の調査（第48-7 次）」『藤原概報 17』1987年
7　奈文研「右京二条二坊・三条二坊の調査（第39･43次）」『藤原概報 15』1985年
8　箱崎和久・小谷徳彦「吉備池廃寺の調査 －第111次」『紀要 2001』2001年
9　小池伸彦「東北官衙・東方官衙北地区の調査 －第108-11次」『紀要 2001』2001年
10　奈文研「藤原宮第21-2 次の調査」『藤原概報 8』1978年

いる。したがって、ここでは、遺構データとの当てはまり具合のよい南側溝心の回帰式（相関係数0.99318）の傾き（E 0° 17′ 08″ N）を、二条大路の方位と考えておきたい。

なお、二条大路推定位置付近の地形を観察すると、現在の春日神社の北に「磐余邑顕彰碑」が建つが、その北東に、丘陵を東西方向に切り通した痕跡が残っている。これが二条大路の道路痕跡である可能性は高いだろう[9)]。藤原京の大路として、多少の地形の改変を伴いながら、直線的に施工されたものと推定される。

三条条間路　今回、南側溝SD350を検出した（Tab. 18-17）。北側溝に相当する溝は確認できなかったが、後代の削平を受けたものと判断しておく。三条条間路については、これ以外に、右京三坊と右京一坊で検出例があり（Tab. 18-13～16）、側溝心々間の幅員7.0m（復元値20大尺=7.1m）という成果が得られている。　SD350

ただし、北側溝心の確認例は相互に近接した２地点しかなく（Tab. 18-13・14）、それらを結んだ直線は、南側溝心にくらべてかなり大きな傾きを示すが、信頼性に欠ける。精度的に安定した（相関係数0.99996、残差分散0.012）南側溝心の回帰式の傾き（E 0° 18′ 01″ N）を三条条間路の振れとみるのが妥当だろう。三条条間路は、二条大路に近似した方位であったことになる。ちなみに、今回の調査成果を除く２つの南側溝心（Tab. 18-15・16）を結んだ直線を延伸しても、今回の実測値との間には0.8mの差を生じるにすぎない。SD350が三条条間路南側溝にあたり、直線的に施工されたことは確実とみられる。

三条大路　今回の調査で、北側溝SD180を検出している（Tab. 18-21）。対になる南側溝は、調査区外となるため、確認できなかった。三条大路については、これ以外に、右京三坊と左京二坊で検出例があり（Tab. 18-18～20・22～24）、側溝心々間の幅員は9.0m（復元値25大尺=8.9m）であることが判明している。　SD180

今回の成果を含む北側溝心の回帰式を算出すると、その傾き（E 0° 32′ 39″ N）は、南側溝心にくらべて若干小さな数値となる。しかし、検出地点間の距離が、南側溝心の約1220mに対して、北側溝心では約3050mと2.5倍に達しており、相関係数（0.99951）においても上回る。よ

Tab. 19　条坊道路の関数化　（　）は問題を含むもの

条坊道路	種　別	方　程　式	相関係数	残差分散	典拠
二条大路	北側溝心	X＝ tan 0° 19′ 28″ Y-165,933.0	0.98299	0.162	1～5
二条大路	南側溝心	X＝ tan 0° 17′ 08″ Y-165,961.5	0.99318	0.024	6～12
三条条間路	北側溝心	（X＝ tan 0° 35′ 00″ Y-165,988.8）	－	－	13～14
三条条間路	南側溝心	X＝ tan 0° 18′ 01″ Y-166,085.0	0.99996	0.012	15～17
三条大路	北側溝心	X＝ tan 0° 32′ 39″ Y-166,131.8	0.99951	0.218	18～21
三条大路	南側溝心	X＝ tan 0° 35′ 56″ Y-166,124.1	0.99897	0.197	22～24
朱雀大路	東側溝心	Y＝-tan 0° 37′ 39″ X-19,240.7	0.99962	0.126	30～34
朱雀大路	道路心	（Y＝-tan 0° 25′ 09″ X-18,644.3	0.99943	0.042	35～37
朱雀大路	西側溝心	（Y＝-tan 0° 23′ 55″ X-18,592.6）	－	－	38～39
東一坊坊間路	道路心	（Y＝-tan 0° 38′ 26″ X-19,149.1）	－	－	41～42
東一坊大路	道路心	Y＝-tan 0° 54′ 20″ X-19,793.0	0.99986	0.015	43～45
東二坊坊間路	道路心	Y＝-tan 0° 57′ 12″ X-19,790.7	0.99965	0.094	46～53
東二坊大路	道路心	Y＝-tan 0° 54′ 43″ X-19,537.0	－	－	54～55
東三坊坊間路	道路心	Y＝-tan 0° 07′ 01″ X-17,094.5	0.99777	0.018	56～61

って、残差分散そのものには、両者の間で大きな差がないけれども（北側溝心0.218、南側溝心0.197）、北側溝心の傾きを三条大路の振れと考えておくことにしたい。いずれにしても、三条大路は、二条大路や三条条間路と比較して、かなり大きな振れをもっていたことになる。

なお、今回の成果を除いた調査事例から北側溝心の回帰式を求め、北側溝心の位置を計算すると、今回の検出位置より2.0m北となるが、これは、他の検出地点との間隔（最も近いもので約2010m）を勘案すれば、ほぼ一致しているとみてよい。遺構の検出状況とあわせて、SD180が三条大路北側溝にあたり、直線的にのびていたことは間違いないだろう。

C　南北道路の復元

一方、東九坊大路と東十坊坊間路は、過去に検出例がまったくなく、中ツ道（東四坊大路）以東の南北道路については、方位の振れを知ることができる事例さえ存在しない。ただ、吉備池廃寺に比較的近接して東九坊坊間路を確認しているので、これと東五坊大路および東十坊大路に基づき、条坊の復元を試みることにしよう（Tab.18-25～27）。方位に関しては、以下、朱雀大路を含む左京の南北道路の振れを検討して、参考資料としたい（Tab.20）。

朱雀大路の方位　藤原宮・藤原京の中軸線である朱雀大路は、北五条から七条にかけて調査例があり（Tab.20-30～40）、とくに東側溝心については良好な資料が得られている。側溝心々間の幅員は、藤原宮内の先行条坊で15.8～16.5m（復元値45大尺=15.9m）、宮南面の七条で24.8m（復元値70大尺=24.8m）である。道路幅員の異なる後者の成果（Tab.20-34・40）を除いて算出した両側溝心の回帰式は、傾きに差があるが（Tab.19、東側溝心 N 0° 37′ 39″ W、西側溝心 N 0° 23′ 55″ W）、観測数の多い東側溝心のデータの信頼性が高い（東側溝心の回帰式の相関係数0.99962、残差分散0.126に対して、西側溝心は２点しかデータがない）。

朱雀大路の回帰式

一方、七条の調査成果を含めた道路心の回帰式は、直線性にこそ優れているものの（相関係数0.99943、残差分散0.042）、検出地点の両端間の距離（約1139m）は、東側溝心（約2823m）のそれより大幅に短い。また、藤原宮の北面中門および南面中門（朱雀門）の建物心（Tab.20-28・29）は、朱雀大路の道路心に一致すると考えられるが、上記の回帰式から、各々の位置での道路心を求めると、北面中門心とは0.2m、南面中門心とは実に3.0mの差を生じてしまう。

これに対し、東側溝心の回帰式を用いて、8.0m（側溝心々間距離の1/2）西に道路心を推定した場合、その位置は、北面中門および南面中門の建物心とほとんど一致する[10]（実測値と計算値の差は0.1～0.2m）。したがって、東側溝心の回帰式が、道路心の回帰式にくらべて、検出遺構との整合性に優れていることは明らかである。ここでは、東側溝心の方位（N 0° 37′ 39″ W）を朱雀大路の振れと考えておくことにしよう[11]。

東側溝心の振れを採用

なお、以上の朱雀大路の方位は、下ツ道と中ツ道の中間の値を示す。下ツ道は、平城京から藤原京まで多くの調査例があり、途中の部分や藤原京域内で多少のばらつきは認められるものの、全体としては、N 0° 18′～19′ Wの安定した振れをもつ[12]。それに対して、中ツ道の振れはかなり大きく、奈良盆地の北端に位置する平城京の南辺では、下ツ道を基準に同じく４里を測り出した平城京東京極の位置より、160m近く中ツ道が西に寄る結果となっている。藤原京朱雀大路は、下ツ道と中ツ道の正しく中央に設定されているので、両者の方位が影響を与えていることは間違いないだろう。

Tab. 20　関連条坊座標値一覧表（2）　＊計算により修正　（　）推定値

番号	条坊道路	種　別	X座標	Y座標	調査機関・次数	座標値の典拠
28	北面中門	建物心	-166,113.2	-17,429.2	奈文研 18次	文献11 p.22*
29	南面中門	建物心	-167,019.8	-17,419.4	奈文研 1次	文献11 p.22*
30	朱雀大路	東側溝心	-164,410.9	-17,440.1	橿原市 1990年度	文献 1 p.28
31	朱雀大路	東側溝心	-166,085.7	-17,421.4	奈文研 18次	文献 1 p.24
32	朱雀大路	東側溝心	-166,394.0	-17,418.2	奈文研 83-7次	文献 1 p.27
33	朱雀大路	東側溝心	-166,430.7	-17,418.3	奈文研 20次	文献 1 p.25
34	朱雀大路	東側溝心	-167,233.9	-17,408.5	奈文研 17-2･3次	文献 1 p.32
35	朱雀大路	道路心	-166,085.7	-17,429.3	奈文研 18次	文献 1 p.24
36	朱雀大路	道路心	-166,430.7	-17,426.5	奈文研 20次	文献 1 p.25
37	朱雀大路	道路心	-167,225.1	-17,420.9	奈文研 17-2･3次	文献 1 p.32
38	朱雀大路	西側溝心	-166,085.7	-17,437.2	奈文研 18次	文献 1 p.24
39	朱雀大路	西側溝心	-166,430.7	-17,434.8	奈文研 20次	文献 1 p.25
40	朱雀大路	西側溝心	-167,233.9	-17,433.3	奈文研 17-2･23次	文献 1 p.32
41	東一坊坊間路	道路心	-166,359.0	-17,289.2	奈文研 55次	文献12 p.7
42	東一坊坊間路	道路心	-166,520.0	-17,287.4	奈文研 58次	文献13 p.7
43	東一坊大路	道路心	-165,873.0	-17,171.4	奈文研 48次	文献 1 p.37
44	東一坊大路	道路心	-166,379.6	-17,163.5	奈文研 38次	文献14 p.6*
45	東一坊大路	道路心	-166,470.0	-17,161.9	奈文研 78･78-7次	文献15 pp.9-10
46	東二坊坊間路	道路心	-165,653.3	-17,034.4	奈文研 56次	文献 1 p.37
47	東二坊坊間路	道路心	-165,822.5	-17,031.1	橿考研 1993年度	文献16 p.20
48	東二坊坊間路	道路心	-166,370.6	-17,021.8	奈文研 30次	文献17 p.12*
49	東二坊坊間路	道路心	-166,396.5	-17,021.2	奈文研 75-13次	文献18 pp.27-28
50	東二坊坊間路	道路心	-166,426.0	-17,020.9	奈文研 21-1次	文献 1 p.24
51	東二坊坊間路	道路心	-166,562.6	-17,018.5	奈文研 33-4次	文献19 p.25*
52	東二坊坊間路	道路心	(-167,310.0	-17,006.5)	奈文研 75次	文献20 pp.47-48
53	小山廃寺金堂	建物心	-167,536.4	-17,002.8	橿考研他 1973年度	文献21 p.95
54	東二坊大路	道路心	-166,400.0	-16,888.4	奈文研 75-13次	文献18 pp.27-28
55	東二坊大路	道路心	-167,510.0	-16,871.0	橿考研 1992年度	文献 1 p.39
56	東三坊坊間路	道路心	-165,705.0	-16,756.5	奈文研 54-17次	文献22 p.48
57	東三坊坊間路	道路心	-165,780.8	-16,756.3	奈文研 60-6次	文献 1 p.38
58	東三坊坊間路	道路心	-165,944.0	-16,756.3	奈文研 66-17次	文献23 p.43
59	東三坊坊間路	道路心	-166,952.0	-16,754.0	奈文研 47･50次	文献 1 p.39
60	東三坊坊間路	道路心	-167,033.0	-16,753.8	奈文研 53次南区	文献24 p.26
61	東三坊坊間路	道路心	-167,857.3	-16,752.2	明日香村 1987年度	実測図

文献　1　奈文研『藤原京研究資料（1998）』1999年
11　奈文研「藤原宮第18次の調査」『藤原概報 6』1976年
12　奈文研「藤原宮東方官衙・内裏東外郭地域の調査（第55次）」『藤原概報 18』1988年
13　奈文研「内裏地域の調査（第58次）」『藤原概報 20』1990年
14　奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査（第38･41･44次）」『藤原概報 15』1985年
15　奈文研「内裏東官衙地区・東方官衙北地区の調査（第78次調査･第78-7次調査）」『藤原概報 26』1996年
16　今尾文昭・大西貴夫「藤原京左京二条二坊発掘調査報告書 －東二坊坊間路の調査－」『奈良県遺跡調査概報 1993年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、1994年
17　奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査Ⅰ（第30次）」『藤原概報 11』1981年
18　奈文研「東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75-13次）」『藤原概報 25』1995年
19　奈文研「藤原宮東方官衙地域の調査（第33-4 次）」『藤原概報 12』1982年
20　奈文研「左京七条一・二坊の調査（第75次）」『藤原概報 25』1995年
21　泉森 皎「紀寺跡の主要伽藍と藤原京の条坊」『条里制・古代都市研究』通巻15号、1999年
22　奈文研「左京二条三坊の調査（第54-17次）」『藤原概報 18』1988年
23　奈文研「左京二条三坊の調査（第66-17次）」『藤原概報 23』1993年
24　奈文研「左京六条三坊の調査（第53･54-1次）」『藤原概報 18』1988年

左京の南北道路の方位　藤原京左京の南北道路で方位の知られるものとしては、西から順に、東一坊坊間路、東一坊大路、東二坊坊間路、東二坊大路、東三坊坊間路がある。

東一坊坊間路　東一坊坊間路は、2地点で道路心のデータが得られている。側溝心々間の幅員は、7.0～7.2m（復元値20大尺=7.1m）である。点間距離が短く（約161m）、精度に問題は残るが、それぞれを結んだ直線は、朱雀大路に近い振れ（N 0°38′26″W）を示す。

東一坊大路　東一坊大路は、3地点の道路心データがあり、側溝心々間の幅員8.6～9.0m（復元値25大尺=8.9m）という成果が得られている。回帰直線によくのるけれども（相関係数0.99986、残差分散0.015）、その振れは、朱雀大路にくらべるとかなり大きい（N 0°54′20″W）。

東二坊坊間路　東二坊坊間路については、6地点の道路心データがある。側溝心々間の幅員は、6.3～7.1m（復元値20大尺=7.1m）である。このほか、西側溝心の東3.5mに道路心を推定できる例があり（Tab.20-52）、小山廃寺（紀寺）金堂心（Tab.20-53）もこの道路心に一致するとみてよい。[13] それら8地点から求めた回帰式の傾きは、東一坊大路に近い数値（N 0°57′12″W）を示している（相関係数0.99965、残差分散0.094）。

東二坊大路　東二坊大路の道路心データとして確実なものは、2地点で得られている。側溝心々間の幅員は、16.0～16.6m（復元値45大尺=15.9m）である。約1112m離れた両者を結んだ直線は、東一坊大路や東二坊坊間路に近い振れ（N 0°54′43″W）を示す。

東三坊坊間路　東三坊坊間路は、6地点で道路心データが得られており、側溝心々間の幅員は、6.3～7.3m（復元値20大尺=7.1m）である。いずれのデータも回帰直線によくのるが（相関係数0.99777、残差分散0.018）、その傾きは正方位に近く（N 0°07′01″W）、東一坊大路や東二坊坊間路・東二坊大路はもちろん、朱雀大路とも大きく異なる。

以上、左京の南北道路は必ずしも方位が揃うわけではなく、朱雀大路や東一坊坊間路など、0°38′前後の振れをもつものと、東一坊大路・東二坊坊間路・東二坊大路のように0°55′前後振れるもの、さらに東三坊坊間路のように、0°07′しか振れないものが存在することが明らかとなった。これらは、右京の南北道路が全体として、下ツ道に近いながらもわずかに大きな振れを示すのとは、明らかに状況を違えている。

こうした方位の振れの違いは、藤原京設定時の測量精度が、それほど高いものではなかったことを明示している。ただ、そのなかで、0°55′前後の振れをもつ例が多いのは注目してよく、中ツ道の方位が影響を与えた可能性が想定される。[14]

東九坊大路・東十坊坊間路　以上のように、朱雀大路を含む左京の南北道路の方位は必ずしも一定せず、朱雀大路に近いか、それ以上の振れをもつ場合が多い。今回問題となる東九坊大路や東十坊坊間路の方位を積極的に推定しうる根拠は得られなかった。そこで、調査例も多く、精度的に安定した数値を示す朱雀大路と東一坊～東二坊大路の振れを用いて条坊の復元をおこない、両者を比較してみよう。

まず、道路心の位置が判明している東五坊大路・東九坊坊間路・東十坊大路が、いずれも朱雀大路の振れ（N 0°37′39″W）をもつと仮定し、三条大路付近（X＝-166,270）における各々のY座標を求めると、西から順に-16,089.7、-15,182.6、-14,779.6となる。それぞれの間隔は907.1mと403.0mだが、これに方位の振れを勘案しても、907.0m・403.0mとほとんど同一の数値を示す。東五坊大路と東九坊坊間路の間隔は7町分に相当するので、平均すると、この間

Tab. 21　吉備池廃寺周辺の条坊道路の推定

条坊道路	種　別	方　程　式	備　考
二条大路	道路心	X＝ tan 0° 17′ 08″ Y－165,953.5	南側溝心から8.0m北
三条条間路	道路心	X＝ tan 0° 18′ 01″ Y－166,081.5	南側溝心から3.5m北
三条大路	道路心	X＝ tan 0° 32′ 39″ Y－166,136.3	北側溝心から4.5m南
東九坊大路	道路心	Y＝－tan 0° 37′ 39″ X－16,869.3	東九坊坊間路心から134.3m東
東十坊坊間路	道路心	Y＝－tan 0° 37′ 39″ X－16,735.0	東九坊坊間路心から268.6m東

の１町の東西長は129.6m（907.0m÷７）、一方、３町分にあたる東九坊坊間路と東十坊大路の間は、134.3m（403.0m÷３）ということになる。

次に、上記の南北道路の振れが、東一坊大路・東二坊坊間路・東二坊大路の３本の振れの平均値（N 0° 55′ 25″ W）に等しいと仮定して同様の計算をおこなうと、各々の地点のＹ座標は、順に－16,083.4、－15,180.0、－14,769.8と算出される。間隔は、それぞれ903.4mと410.2m（方位の振れを補正して903.3m・410.1m）である。東五坊大路～東九坊坊間路間の１町の平均東西長は129.0m（903.3m÷７）、東九坊坊間路～東十坊大路間は136.7m（410.1m÷3）となる。

したがって、後者の振れを用いた場合は、東九坊坊間路の東と西で、１町の平均東西長がかなり大きく異なることになってしまう。もとより、これらは、原則的には等しくなるように設定されたはずであり、現実に差が生じている例が多数存在することは事実だが、後者の振れが前者にくらべてやや妥当性を欠くことは否めないだろう。ここでは、今回の検討対象とした左京の条坊道路全体（朱雀大路を除く）の振れの平均値（N 0° 42′ 20″ W）にも近い、前者の朱雀大路の振れを、東九坊大路と東十坊坊間路の振れと仮定することにしたい。そして、東九坊坊間路心を起点に、以東の１町の平均東西長である134.3mの間隔をおいて、東九坊大路と東十坊坊間路の道路心を推定しておく。以上により算出される吉備池廃寺周辺の条坊道路の方程式は、Tab.21のとおりである。

朱雀大路の振れを採用

D　吉備池廃寺の寺地と条坊

まず、上記の方程式を用いて、吉備池廃寺周辺における条坊道路を復元しておこう（Fig. 119）。それぞれの交差点の道路心は、Tab. 22のようになる。

前項で記したように、ここでは東九坊大路と東十坊坊間路の方位を同一と仮定し、両者の間隔（坪の東西長）を134.3mとして計算したが、東西方向の道路は、それぞれ方位を異にしてい

Tab. 22　吉備池廃寺四周の条坊復元

交差点	条坊道路と種別	X座標	Y座標
A	二条大路と東九坊大路の交点の道路心	-166,028.5	-15,050.9
B	三条条間路と東九坊大路の交点の道路心	-166,160.4	-15,049.5
C	三条大路と東九坊大路の交点の道路心	-166,279.2	-15,048.2
D	二条大路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,027.8	-14,916.6
E	三条条間路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,159.7	-14,915.2
F	三条大路と東十坊坊間路の交点の道路心	-166,278.0	-14,913.9

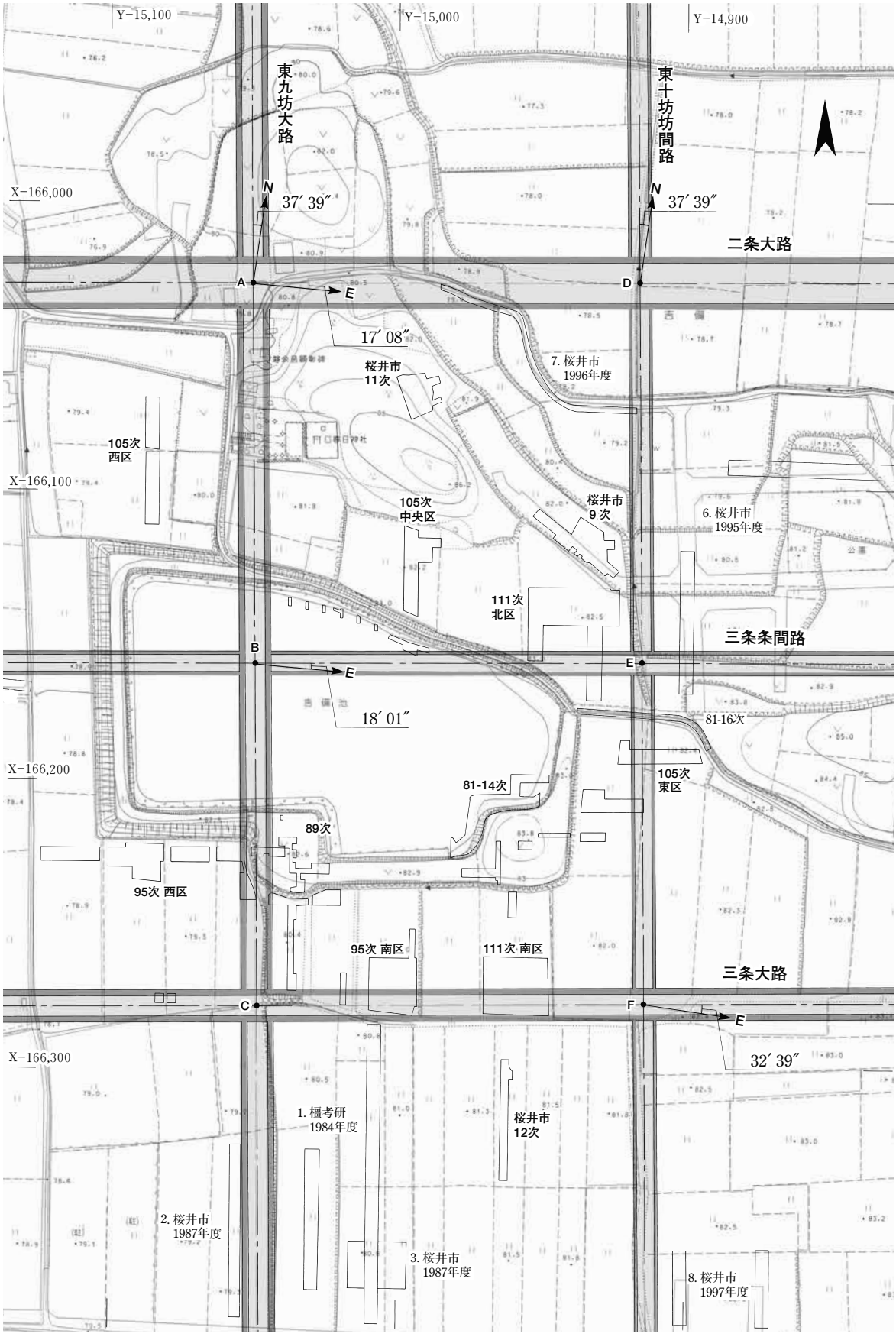


Fig. 119　吉備池廃寺周辺の条坊復元　1:2000

るので、坪の実長には差がある。

以下、左京三条十坊西北坪とその南の西南坪の辺長を、条坊計画線間（道路心々間）距離で比較すると、まず、二条大路と三条条間路の振れはほぼ等しいので、西北坪の西辺（A−B間）と東辺（D－E間）は、ともに131.9mと算出される。これは、藤原京の１坪（１町）の標準的な辺長とされる約133m（375大尺）に近い数値である。一方、これらにくらべて三条大路の振れはかなり大きいため、西南坪の西辺（B－C間）は118.8m、東辺（E－F間）は118.3mと、かなり短い数値となる。

西南坪の南北長は短い

なお、第95次調査西区で検出した２条の東西溝SD219とSD226の溝心の位置は、三条大路の道路心から、それぞれ56.2 m、 51.8 m北にあるとみられる。この距離は、当該坪の南北長の1/2（59.2～59.4m）に比較するとかなり短く、条坊計画線間を２等分する設定とはいいがたい。同様に、SD226の東端も、東九坊大路の道路心より50.0m西に位置しており、坪の東西長を134.3mとした場合、その1/2（67.2m）と1/3（44.8m）の間の数値を示す。したがって、これらが坪内の区画溝として掘られたとしても、その位置は、坪を規則的に等分するというものではなかった可能性が高い。

ところで、東西に走る三条条間路と三条大路は、今回の調査で、それぞれ南側溝と北側溝を検出しているので、いずれも、吉備池廃寺が廃絶したのちに、寺域内を横断するかたちで建設されたことは間違いない。また、二条大路についても、地形の状況からみて、実際に施工されたことは確実といえる。

廃絶後の条坊道路施工

一方、南北方向の道路は、東九坊大路と東十坊坊間路が寺域内を通過する位置に想定されるが、遺構を確認するにはいたらなかった。もっとも、復元の前提となる資料自体に限界があり、ここで推定した位置が必ずしも正確とはいえないものの、東十坊坊間路に関しては、周辺の遺構の検出状況を勘案すると、削平を受けたとみてよいだろう。

また、東九坊大路は、塔基壇にかかる位置に想定されるけれども、そうした痕跡もまったく認められなかった。巨大な基壇が遺存するため、そこを通過する道路施工は見送られたか、実際の道路位置が推定とずれているかのいずれかであろう。後者の場合、今回の推定より当該道路の振れが小さいか、東九坊坊間路との間隔が狭かったとすれば、塔基壇の西を南北に縦貫したことは充分考えられる。ちなみに、塔基壇と西面回廊の間は、整地土が失われるほどの削平を受けているとみられるので、道路側溝が遺存しないとしても不自然ではない。

さらに、これをそのまま北へ延伸すると、寺域北方の小丘陵の西、第105次調査西区との間を通過する。その部分は、東側にくらべて西側が一段低く落ちており、現在の里道北側の等高線にもそうした状況があらわれている。これらが人為的な地形の改変を示しているとすれば、東九坊大路は、今回の推定位置の若干西を通っていた可能性が高いことになる。今後の調査の進展による解明を待ちたい。

1） 岸 俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、5～28頁（初出1969年）。

2） 阿部義平「新益京について」『千葉史学』9号、千葉歴史学会、1986年。

3） 井上和人「古代都城制地割再考 −藤原京・平城京を中心として−」『研究論集 Ⅶ』奈文研学報第41冊、1984年。井上和人「都城の定型化」『季刊考古学』第22号、雄山閣出版、1988年。

4） 小澤 毅「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』第44巻第３号、考古学研究会、1997年。ただ

し、すでに宮殿や寺院が集中していた飛鳥中枢部をはじめ、大和三山や丘陵地帯には条坊が施工された痕跡がない。これらは、そこが藤原京の設定範囲や理念上の京域からはずれることには直結しないが、実際の施工にさいしては、現実的な対応が図られたことがうかがえる。

5） 平城宮木簡1926号。奈文研『平城宮木簡 Ⅱ 解説』奈文研史料第８冊、1975年、59～62頁。

6） 条坊呼称を実状にあわせて全面的に改定した長岡京の例を引くまでもなく、将来的には、藤原京についても、実態に即した呼び方に改めるのが望ましいだろう。少なくとも、北京極の位置が決まれば、数詞呼称の起点は確定できるので、改定作業そのものに支障はなくなる。また、以後、再改定が必要となるような事態が生じるおそれもない。

7） 作業には、市販の表計算ソフト「Microsoft Excel」の分析ツール「回帰分析」を使用した。なお、条坊遺構の方程式を算出・提示することについては、その意義を疑問視する見解もある（武田和哉「日本古代都城の条坊施工の一側面 －幅員が変化する条坊道路の存在－」『立命館大学考古学論集 Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会、2001年、註28）。たしかに、これらは二次的なデータのうえ、たえず更新される性質のものであり、一次資料としての発掘成果こそがまず重視されるべきであることは言うまでもない。しかし、条坊道路が直線として施工されているかどうかを検証し、検出遺構がそれに該当するかを確認するうえでも、関数を用いた解析はやはり不可欠であろう。いたずらに数式の算出に紙数を費やし、一次資料をおろそかに扱うことに対する警鐘としては評価したいが、上記の作業の必要性ならびに有効性は否定できないと考える。

8） 回帰式の適合度を検証するうえでは、残差（実測値と予測値の差）や残差分散（残差の平方和を自由度で割った値）が有効な指標となる（入倉徳裕「条坊の復元」『平城京内の発掘調査報告 －1994（平成６）年度－』奈良県遺跡調査概報1994年度（第１分冊）、奈良県立橿原考古学研究所、1995年、94～98頁）。ただ、検出地点間の距離もデータの安定性に強くかかわっており、その大小は相関係数にも影響を与えるが、一般に、距離が大きいほどデータの安定性も高いと考えてよいだろう。ここでは、直線性および実測値との整合性をはかる指標として、相関係数と残差分散の両者を提示しておくことにしたい。

9） 大脇 潔「藤原京京域復原論」『文学・芸術・文化』第９巻第２号、近畿大学文芸学部、1998年。

10） 北面中門と南面中門の建物心を結ぶ直線の傾きも、N 0° 37′ 10″ Wと、朱雀大路東側溝心にごく近い振れを示す。しかし、後者のデータにくらべると点間距離が短いため（約907m）、ここでは、より安定した精度をもつことが確認されている東側溝心の方位を朱雀大路の傾きとする。

11） ちなみに、幅員を異にする宮南面の七条の調査データを含めて、東側溝心の回帰式を算出すると、Y＝－tan 0° 38′ 13″ X－19,267.6となる。この傾き（N 0° 38′ 13″ W）や相関係数（0.99958）、残差分散（0.151）は、七条の成果を除いた場合の先述の回帰式（傾きN 0° 37′ 39″ W、相関係数0.99962、残差分散0.126）と大きな変化がない。つまり、幅員が広がるとされる宮南面部分を含めて、東側溝心はほぼ一直線に通っていたと考えてよいことになる。朱雀大路の「拡幅」の実態については、なお検討が必要であろう。

12） 分析にあたっては、以下の文献所載の調査データを使用した。奈良市教育委員会『史跡 平城京朱雀大路跡 －発掘調査・整備事業報告－』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第２冊、1999年、76～78頁。奈文研『藤原京研究資料（1998）』1999年。

13） 泉森 皎「紀寺跡の主要伽藍と藤原京の条坊」『条里制・古代都市研究』通巻15号、条里制・古代都市研究会、1999年。

14） 竹田政敬「藤原京の京域」『古代文化』第52巻第２号、古代学協会、2000年。以上の点からも、藤原京条坊の方位の違いを、施工時期の先後に結びつける見解（山中 章『日本古代都城の研究』柏書房、1997年、45～99頁（初出1993年））は成り立たないだろう。

第Ⅵ章　結　　語

以上、奈良県桜井市吉備に所在する吉備池廃寺について、1997～2001年の５年間にわたる学術調査を中心に、その成果を詳述してきた。これらの発掘調査により、当初は瓦窯と推定されていた本遺跡が、７世紀の巨大な寺院跡であることが判明し、古代史上の大きな発見として注目を集めたことは記憶に新しい。本書では、調査およびその後の検討成果を正式に報告するとともに、そこから導かれるいくつかの問題にも論及したが、以下、それらの内容を要約し、今後の課題についても触れておくことにしよう。

1　遺　　構

金　堂　金堂は、約１ｍの深さの掘込地業をおこない、東西37m×南北25mほど、復元高２ｍ以上の巨大な版築基壇を築いている。基壇南辺の一部は南へ張り出す。また、基壇の外周には、底に石を入れた溝をめぐらし、掘込地業内からの水とともに西方へ排水したらしい。礎石は遺存せず、それにかかわる痕跡も確認できないが、基壇の実長および縦横比から、桁行７間×梁行４間の建物を想定することができる。この外側に、さらに裳階がつく可能性もある。基壇外装についてはまったく痕跡がなく、遺構の状況などから、木製の壇正積基壇を想定した。塔および中門・回廊についても同様の構造と考えておく。なお、基壇の東辺では砂利敷を確認しており、本来、基壇外はこうした舗装がほどこされていたものとみられる。

塔　金堂の西方に位置する塔は、掘込地業をともなわず、整地土の上に版築を重ねて、一辺約32m、復元高2.8mの巨大な基壇を築く。基壇の中央部には大きな心礎抜取穴が残り、心礎は、上面が基壇上に出る地上式であったと考えられる。また、基壇の西辺では、版築の途中で心礎を運び上げるためのスロープの存在を確認した。心礎以外の礎石やそれに関わる痕跡は残っていないが、想定される心礎の大きさから、四天柱は心礎上に立てた可能性が高い。基壇の規模は、飛鳥時代のほかの寺院はもちろん、奈良時代の東大寺七重塔をもしのぎ、文武朝大官大寺や新羅の皇龍寺の九重塔に比肩する。吉備池廃寺の塔も九重塔と考えてよいだろう。初重平面は、方７間、11尺（１尺=0.300m）等間と推定する。

中門・回廊　中門基壇は削平され、周囲の雨落溝から、東西12.0m×南北9.8m程度の基壇と推定される。桁行３間×梁行２間の切妻造八脚門であろう。ただし、中門の位置は、金堂心から西へずれており、この点から、金堂と塔それぞれに対応して、二つの中門が存在した可能性が想定される。また、回廊は南面および東面・西面回廊を確認し、基壇幅5.4m、梁行11尺と復元できる。東西の回廊間の距離は外側柱列間で156.2mあり、440大尺（１大尺=0.355m、以下同じ）として設定されたとみてよい。回廊で囲まれた空間は広大だが、中門や回廊自体は、金堂・塔にくらべると意外に小規模といえる。これは、先に想定したような二つの中門をもつ配置とも

関わるかもしれない。

僧　房　金堂の北方とその西で、掘立柱の僧房３棟を確認した。いずれも梁行２間の規模をもつ東西棟建物で、今のところ、発掘で確認した国内最古の僧房遺構となる。南北に並ぶ２棟のうち、SB340は桁行11間、SB400もそれと西妻をあわせた桁行９間（推定）の細長い平面をもつ。低い床を張り、内部を仕切って使用したのだろう。SB400北側柱列から南面回廊外側柱列までの距離は、東西回廊間と同じく440大尺である。こうした計画的な配置や、金堂および伽藍全体の中軸線との関係から、多数の僧房が展開していた状況が想定できる。形態的には８世紀の僧房と異なる点が多いが、僧房の発展過程を知るうえで貴重な資料といえよう。

寺域と伽藍配置　吉備池廃寺関係の遺構の広がりは、南北260m×東西180m以上におよぶ。伽藍中心部は、南面する金堂と塔を東西に並べた、いわゆる法隆寺式伽藍配置をとり、その最古の例となる。堂塔の配置は大尺で計画され、原則として回廊の外側柱列を基準に、10尺単位の完数で設定された。金堂心および塔心は、東面・西面回廊からそれぞれ100大尺、金堂心は南面回廊から150大尺の位置に置かれている。回廊で囲まれた中枢空間は東西に細長く、その東西規模は同時代の国内寺院をはるかに超え、新羅皇龍寺に匹敵する。また、金堂と塔の間隔も心々間240大尺とひじょうに大きいのが特徴だが、これは塔の高さに由来する可能性がある。講堂と北面回廊の遺構は確認できなかったが、大規模な整地や瓦の出土状況から、その存在は確実視できる。伽藍の完成度はかなり高かったとみてよい。

廃絶後の遺構　吉備池廃寺が廃絶したのち、一帯は藤原京の京域に含まれ、条坊が施工された。発掘調査では、三条大路と三条条間路の側溝のほか、宅地の塀や建物、区画溝などを検出している。そして、平城遷都後は条里制が施行され、水田化していったものと考えられる。なお、出土瓦からみると、11世紀前半頃、付近に小規模な瓦葺仏堂が建てられたらしい。

2　遺　　物

軒　瓦　軒丸瓦４種類（ＩＡ、ＩＢ、Ⅱ、Ⅲ）、軒平瓦３種類（ＩＡ、ＩＢ、Ⅲ）が出土したが、平安時代のⅢ型式（軒丸瓦４点、軒平瓦２点）を除くと、ほとんどが創建時の単弁八弁蓮華文軒丸瓦（ＩA42点、ＩB23点、種別不明25点）と型押し忍冬唐草文軒平瓦（ＩA12点、ＩＢ１点）にかぎられる。葺き替え用の瓦はまったくなく、出土点数自体も、そこで命脈を絶った寺院のものとしては僅少である。比較的短期間のうちに、別の場所へ移建されたことは確実であろう。吉備池廃寺から出土するのは、そのさいに遺棄された再用不能の瓦と考えられる。軒丸瓦ＩＡ・ＩＢは、様式上、643年に造営が始まった山田寺金堂の所用瓦より若干先行する要素をそなえている。一方、軒平瓦ＩＡ・ＩＢは、斑鳩寺（法隆寺若草伽藍）の軒平瓦213Bの施文型を使用しており、型の傷の状態から、斑鳩寺に後出することが判明している。したがって、創建軒瓦の年代は、ともに630年代から640年代初頭と判断してよい。なお、軒丸瓦ＩＡ・ＩＢの笵は、その後、楠葉平野山瓦窯へ運ばれて四天王寺の瓦生産に使用され、ＩＢの笵はさらに海会寺の創建瓦生産に用いられた。四天王寺のこれらの瓦は、孝徳朝の難波遷都にともなう伽藍整備に関連する可能性が高く、上記の年代観を補強するとともに、この時期における四天王寺と吉備池廃寺の位置づけを示唆している。

丸瓦・平瓦　総計2,649.4㎏（丸瓦576.1㎏、平瓦2,073.3㎏）が出土した。丸瓦の99％以上は、玉縁部まである一木の模骨を用いて製作された創建丸瓦１類。これと組む厚手の創建平瓦１類は、平瓦全体の約90％を占める。残りの平瓦のほとんどは薄手の平瓦２類だが、それに対応する丸瓦は存在せず、近接する安倍寺創建時の平瓦がもたらされたものと推定した。平瓦１類と２類の比率を９：１と仮定し、丸瓦および平瓦の総重量をそれぞれの個体重量で割って完形品の数量に換算すると、丸瓦と平瓦の個体数比は、１：2.62～3.34と算出される。これは、総瓦葺の建物に使われた瓦としてごく妥当な数値である。また、吉備池廃寺の瓦の出土量は、全体では100㎡あたり68.3㎏だが、金堂周辺（282.2㎏）のように、その数倍に達する部分も存在する。一方、飛鳥藤原地域の古代寺院では、100㎡あたり１ｔを越える瓦が出土しており、吉備池廃寺に近い状況を呈するのは藤原宮中枢部である。そこでは、100㎡あたり200㎏台から300㎏台という数値で、これが、平城遷都にともない、屋根瓦の大半が移送された結果を示していることは確実である。吉備池廃寺も同様に、瓦葺建物が存在し、移建されたものと推断する。

土　器　整理用木箱で82箱分が出土したが、小片が多く、良好な資料は少ない。吉備池廃寺創建にともなう整地土には飛鳥Ⅰの土器が含まれ、金堂基壇の掘込地業や基壇外周の溝から出土する土器も、時期が判明するものは７世紀前半までにおさまる。これらは年代の上限を示すものだが、吉備池廃寺の創建もほぼそれに近接すると考えてよいだろう。僧房の柱掘形に含まれる土器も同様の年代を示す。一方、塔心礎抜取穴からは７世紀後半の土器が出土しており、廃絶の時期をうかがわせる。また、回廊の雨落溝や僧房の柱抜取穴には、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が含まれていた。このほか、藤原京期から奈良時代、さらに平安時代以降の土器がある。

創建以前の遺物　吉備池廃寺に先行する遺物としては、サヌカイト製のナイフ形石器や剥片、石核、石鏃のほか、太形蛤刃石斧などが出土している。いずれも遺構にはともなわないが、早くからこの一帯が生活の場となっていたことがうかがえる。また、調査地のほぼ全域にわたって、円筒埴輪33点と家形埴輪・蓋形埴輪計７点が出土した。伽藍北方から南東にのびる小丘陵上に古墳が存在したものと推定される。このほか、僧房周辺から、坩堝やとりべ、鉄滓、焼土、砥石がまとまって出土し、冶金関係の工房が先行して存在したことを示している。

3　吉備池廃寺と百済大寺・高市大寺

吉備池廃寺の寺名　以上のように、吉備池廃寺は、630年から640年代初頭に創建され、やがて別の場所へ移転した寺院と考えられる。発掘調査で明らかになった金堂・塔および伽藍の規模は、同時代の国内寺院をはるかにしのぎ、新羅の皇龍寺や文武朝大官大寺に近い。これらが国家の大寺として建立されたように、吉備池廃寺も天皇（大王）の発願によるものとみてよいだろう。すると、年代とあわせてそれに合致するのは、百済大寺しかない。百済大寺は、『日本書紀』や『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』がともに639年の創建と記す、舒明天皇発願にかかる最初の勅願寺である。着工後ほどなく舒明は死去するが、皇后であった皇極天皇が造営を引き継ぎ、孝徳朝（645～654）にはある程度寺観を整えつつあったらしい。その後も、彼らの子である天智天皇が、のちに大安寺金堂本尊となる乾漆の丈六仏などを施入しており、造営は比較的順調に進展したようである。また、百済大寺は、673年に高市の地へと移されて、高市大

寺となった。この点でも、吉備池廃寺の遺構や遺物が示す状況は、史料とよく符合している。なお、『日本三代実録』から、百済大寺は「十市郡百済川辺」に所在したことが知られるが、吉備池廃寺の南を流れていた現在の米川が、「百済川」に該当することは確実と考える。そのほか、『万葉集』に見える香具山宮から城上殯宮への経路などとあわせて、吉備池廃寺が百済大寺であることは間違いないだろう。

百済大寺の意義　はじめて天皇家の寺として創立された百済大寺は、蘇我氏の氏寺である飛鳥寺に対する対抗意識の産物でもあった。飛鳥寺をはるかに凌駕する九重塔は、その象徴にほかならないであろう。また、そうした建立の背景には、大陸から帰国した留学生や僧侶の存在が関係していた可能性が高い。とりわけ、隣国の新羅で645年に完成を迎える皇龍寺九重塔の情報は、当時の日本にとって、きわめて重大な意味をもっていたはずである。百済大寺の創建が、そうした東アジア世界の情勢とも不可分の関係にあったことは想像に難くない。

高市大寺の所在　百済大寺を「百済の地」から「高市の地」へ移建したのは、天武天皇の宮室であった飛鳥浄御原宮との関わりによるとみられるが、その後、高市大寺は677年に大官大寺へと改称され（天武朝大官大寺）、文武朝（697～707）にはさらに別の大伽藍が造営された（文武朝大官大寺）。高市大寺の正確な所在は未確認だが、『日本三代実録』には「高市大官寺」の旧寺地として高市郡夜部村の田が見え、両者はごく近接した位置関係にあったことがうかがえる。一方、『類聚三代格』には、文武朝大官大寺の西方、飛鳥川との間にも寺地を有していたことを示す史料がある。そこは路東二十八条三里「高市里」にあたり、一帯には、平城京の大安寺と共通する四重弧文軒平瓦など、文武朝大官大寺より古い瓦が分布している。高市大寺は、この「高市里」に所在した可能性が大きい。

4　今後の課題

以上、吉備池廃寺の発掘調査によって明らかになった事実は数多いが、一方で、今後に残された課題も少なくない。

金堂・塔の平面　まず、伽藍中心部でも調査の対象となったのはごく一部に限られており、主要堂塔についても、面的に広くその様相を明らかにするには至らなかった。金堂・塔もトレンチ調査のため、本書で復元案を示した建築平面は推定による部分が多い。礎石に関わる痕跡や足場穴などの確認を含めて、一定の面積を確保した発掘調査により、柱配置その他を解明することが望まれる。また、基壇外装をはじめとする細部の構造についても、遺構に関わる具体的な資料を積み重ね、さらに検討する必要がある。

中　門　本書では、金堂の南で確認した中門の心が、金堂心より西に偏していることなどから、塔の南方にも、それに対応するもう一つの中門の存在を想定した。これらは、南面回廊をほぼ２：３：２に内分する位置に相当し、西側の中門の想定地の大部分は、二つのトレンチにはさまれた未調査地にあたるが、遺構としては検出していない。想定の当否を確認するためにも、今後の発掘調査は不可欠だろう。

講堂と北面回廊　講堂および北面回廊に関しては、今回、遺構として捉えることができなかった。吉備池内をはじめ、すでに削平を受けている地域が大半とみられるが、吉備池の堤防下や

水田など、確認される可能性を残す部分も皆無ではない。かりに、遺構自体は消失したとしても、遺物やその分布状況から得られる情報は伽藍の復元にとって有用であり、実態の把握に向けて調査を継続することが肝要である。とくに、北面回廊の位置と、それが講堂へとりついていたかどうかは、大きな問題となろう。

東面・西面回廊　東面および西面回廊は、それぞれ１ヵ所で検出したにすぎず、しかも片側の雨落溝を確認したにとどまる。推定した回廊規模を含めて、正確な位置や形態を確かめるための調査が必要である。

南門と外郭施設　中門の南方で検出した２条の東西溝は、南門の雨落溝となる可能性も否定できないものの、いくつかの疑問点があり、本書では性格の特定を避けた。寺域の南限にかかわる蓋然性は高いが、この間を道路とみるのも一案であり、遮蔽施設の存在を想定することも不可能ではない。また、中門の位置が、金堂心から西（伽藍全体の中軸線寄り）に偏している点から、南門は中軸線上に存在したと考えることもできるだろう。いずれにしても、寺域を限る外郭施設が何一つ明確になっていない現状では、これ以上の推定を重ねても意味は乏しい。今後、門を含めた外郭施設を確認し、寺域を確定することが急務である。

おわりに　一連の発掘調査の成果をうけて、吉備池廃寺は、2002年３月19日に国の史跡に指定された。今後、上記の課題をはじめとして、さらなる内容解明のための調査研究と、史跡の公有化ならびに整備・活用にむけての計画が進められていくことになるだろう。しかし、一方で、近年の宅地開発の波は遺跡中枢部の間近にまで迫り、僧房や南外周部など、調査後に宅地化されてしまった部分も少なくない。とくに、遺跡への主要なアプローチとなりえた中門南方での住宅建設は、痛恨のきわみである。吉備池廃寺の調査は、いまだその緒に就いたところにすぎない。その意味でも、周辺部の追加指定を含めた遺跡全体に対する厳重な保護と、学術的視点に立った計画的な発掘調査の継続を強く望みたい。

Fig. 120　間近に迫る宅地開発（金堂土壇から南方を見る、2003年１月撮影）

50TH ANNIVERSARY COMMEMORATION
RESEARCH REPORT NO. 68

KIBIIKE ABANDONED TEMPLE EXCAVATION REPORT

INVESTIGATION OF THE SITE OF KUDARA NO ŌDERA

2003

NATIONAL RESEARCH INSTITUTE
FOR CULTURAL PROPERTIES, NARA

KIBIIKE ABANDONED TEMPLE EXCAVATION REPORT

INVESTIGATION OF THE SITE OF KUDARA NO ŌDERA

CONTENTS

Chapter I Introduction 1

1. Circumstances regarding the excavation 1
2. Organization of the excavation 3
3. Publication of this report 4

Chapter II The investigation 6

1. Area of investigation 6
   - A. Location of the site 6
   - B. Previous investigations 9
   - C. Surveying 11
   - D. Division into sectors 12
2. Outline of each excavation 14
   - A. Excavation no. 81-14 (main hall) 14
   - B. Excavation no. 89 (pagoda, cloister southern sector) 15
   - C. Excavation no. 95 (cloister southern and western sectors) 16
   - D. Excavation no. 105 (priests' quarters, cloister eastern sector, main hall) 17
   - E. Excavation no. 111 (middle gate, priests' quarters) 18
   - F. City of Sakurai, Excavation no. 9 (priests' quarters) 19
   - G. City of Sakurai, Excavation no. 11 (northern periphery) 20
   - H. City of Sakurai, Excavation no. 12 (southern periphery) 20
3. Excerpts from excavation logs 21
   - A. Excavation no. 81-14 21
   - B. Excavation no. 89 23
   - C. Excavation no. 95 25
   - D. Excavation no. 105 26
   - E. Excavation no. 111 29
   - F. City of Sakurai, Excavation no. 9 31
   - G. City of Sakurai, Excavation no. 11 32
   - H. City of Sakurai, Excavation no. 12 33

Chapter III Archaeological features 34
1. Location and topography of the site 34
2. Descriptions of separate features 38
A. Main hall SB100 and features in its environs 38
B. Pagoda SB150 and features in its environs 46
C. Middle gate SB320 and features in its environs 51
D. Cloister southern sector SC160 and features in its environs 53
E. Cloister western sector SC200 and features in its environs 57
F. Cloister eastern sector SC300 and features in its environs 61
G. Priests' quarters and features in their environs 62
H. Features in the northern periphery 70
I. Features in the southern periphery 72

Chapter IV Artifacts 76
1. Tiles and bricks 76
A. Eave tiles 76
B. Miscellaneous roof tiles 90
C. Round tiles 93
D. Flat tiles 101
2. Other ceramics 122
A. Pottery 122
B. *Haniwa* 138
3. Stone implements, clay objects, metal implements, etc. 143
A. Stone implements 143
B. Clay objects, etc. 145
C. Metal implements 146
D. Wooden implements 147
E. Plant and animal remains 148

Chapter V Interpretations 149
1. Inference of the temple name and its historical change 149
A. Kibiike abandoned temple and Kudara no ōdera 149
B. Historical changes of Kudara no ōdera and Takechi no ōdera 150
C. Location of Kudara no ōdera 153
D. Location of Takechi no ōdera 155

KIBIIKE ABANDONED TEMPLE EXCAVATION REPORT

INVESTIGATION OF THE SITE OF KUDARA NO ŌDERA

CONTENTS

Chapter I Introduction 1

1. Circumstances regarding the excavation 1
2. Organization of the excavation 3
3. Publication of this report 4

Chapter II The investigation 6

1. Area of investigation 6
   - A. Location of the site 6
   - B. Previous investigations 9
   - C. Surveying 11
   - D. Division into sectors 12
2. Outline of each excavation 14
   - A. Excavation no. 81-14 (main hall) 14
   - B. Excavation no. 89 (pagoda, cloister southern sector) 15
   - C. Excavation no. 95 (cloister southern and western sectors) 16
   - D. Excavation no. 105 (priests' quarters, cloister eastern sector, main hall) 17
   - E. Excavation no. 111 (middle gate, priests' quarters) 18
   - F. City of Sakurai, Excavation no. 9 (priests' quarters) 19
   - G. City of Sakurai, Excavation no. 11 (northern periphery) 20
   - H. City of Sakurai, Excavation no. 12 (southern periphery) 20
3. Excerpts from excavation logs 21
   - A. Excavation no. 81-14 21
   - B. Excavation no. 89 23
   - C. Excavation no. 95 25
   - D. Excavation no. 105 26
   - E. Excavation no. 111 29
   - F. City of Sakurai, Excavation no. 9 31
   - G. City of Sakurai, Excavation no. 11 32
   - H. City of Sakurai, Excavation no. 12 33

Chapter III Archaeological features 34
1. Location and topography of the site 34
2. Descriptions of separate features 38
A. Main hall SB100 and features in its environs 38
B. Pagoda SB150 and features in its environs 46
C. Middle gate SB320 and features in its environs 51
D. Cloister southern sector SC160 and features in its environs 53
E. Cloister western sector SC200 and features in its environs 57
F. Cloister eastern sector SC300 and features in its environs 61
G. Priests' quarters and features in their environs 62
H. Features in the northern periphery 70
I. Features in the southern periphery 72

Chapter IV Artifacts 76
1. Tiles and bricks 76
A. Eave tiles 76
B. Miscellaneous roof tiles 90
C. Round tiles 93
D. Flat tiles 101
2. Other ceramics 122
A. Pottery 122
B. *Haniwa* 138
3. Stone implements, clay objects, metal implements, etc. 143
A. Stone implements 143
B. Clay objects, etc. 145
C. Metal implements 146
D. Wooden implements 147
E. Plant and animal remains 148

Chapter V Interpretations 149
1. Inference of the temple name and its historical change 149
A. Kibiike abandoned temple and Kudara no ōdera 149
B. Historical changes of Kudara no ōdera and Takechi no ōdera 150
C. Location of Kudara no ōdera 153
D. Location of Takechi no ōdera 155

SUMMARY

The Kibiike abandoned temple is located near the southeastern edge of the Nara basin, at Kibi in the city of Sakurai, Nara prefecture. As seen from the Asuka region, where palaces of the seventh century emperors concentrate, it lies to the northwest, on the opposite side of the hilly mass of Mt. Kaguyama.

While it had been previously known that roof tiles from the seventh century were recovered in this area, the view taking it to be the remains of a kiln was formerly dominant. But when an archaeological excavation was conducted in 1997, on the occasion of repair to the dike of the pond, it became clear that these were the remains of a large temple of the seventh century. The attention this received as an important discovery from the perspective of ancient history is still a fresh memory. Since then academic investigations, including the initial discovery, have been conducted over five years up to 2001, yielding many significant results. The current volume is the formal report on those activities.

1. Archaeological features

Main hall. The main hall had an enormous tamped earth podium, about 37 m east-west by 25 m north-south, and with an original height of 2 m or more, built into a depression prepared for it to a depth of approximately 1 m. One portion of the southern side of the podium extends out toward to the south. In addition, the podium's circumference was ringed with a gutter having stones on its bottom, which apparently drained to the west together with water from the interior of the depression made for the podium. Although no pillar base stones survive, nor was it possible to detect traces left by them, from the podium's size and the ratio of its long and short dimensions, a building of seven bays on its main axis and four bays transverse to it may be presumed. A skirting pent roof was possibly added to the outer side of this structure. Although no trace remains of the finished surface, from the condition of the archaeological features a finished surface made of wood is inferred. This is assumed to apply as well for the pagoda, and middle gate and cloister, which are described next. As pebble paving was detected on the podium's eastern side, it is thought that originally this type of pavement was laid down around the podium.

Pagoda. The pagoda located to the west of the main hall has an enormous podium for which no depression was dug in preparation, tamped earth layers being piled directly on

the leveled ground to an original height of 2.8 m, and measuring approximately 32 m on a side. In the central portion of the podium is a large hole left from where the central pillar base stone was removed, and it is thought that this stone was of the above-ground type, with its upper surface protruding up above the podium. Also, on the western side of the podium, a slope for hauling the central pillar base stone up onto the podium was detected within the tamped earth layers. While neither pillar base stones nor traces related to these were left, other than for the central pillar base stone, from the size estimated for the latter it is highly possible that the four pillars forming the inner corners of the pagoda, surrounding the central pillar, were also stood upon the central pillar base stone. The podium exceeds all other temples of the Asuka period (592–694) in scale, and even the seven-storied pagodas of Tōdaiji (in the city of Nara) in the Nara period, and equals the nine-storied pagodas of Daikandaiji (at Koyama, in the village of Asuka, Takaichi county) of Emperor Monmu's reign, and Hwangyongsa temple of Silla. It is reasonable to think that the pagoda of the Kibiike abandoned temple was also nine stories. The pagoda's first story layout is inferred to have been seven bays square, with equally spaced pillars 3.3 m apart.

Middle gate and cloister. The podium of the middle gate had been leveled, but from the encircling rain gutter it is estimated to have been approximately 12.0 m east-west by 9.8 m north-south. It was probably of gabled-roof construction, three bays along the ridge by two bays transverse to it. But the gate's location is off to the west from the main hall's center, from which the possibility is inferred of there being two middle gates, one each corresponding to the main hall and pagoda. Also, regarding the cloister, the southern, eastern, and western sectors have been ascertained, and the podium width can be reconstructed as 5.4 m, with a beam width of 3.3 m. The distance separating the eastern and western sectors of the cloister measures 156.2 m between the outside rows of pillars, and may be regarded as planned at 440 *taishaku* (1 *taishaku* approximately equaling 0.355 m). While the space enclosed by the cloister is thus very wide, the architecture of the middle gate and cloister is on a surprisingly small scale in comparison with the main hall and pagoda. This may be related to the arrangement of two middle gates, as previously surmised.

Priests' quarters. To the north of the main hall, and to the west from that point, three embedded pillar buildings used as living quarters for the priests were ascertained. All were buildings with ridges running east-west and having transverse widths of two bays, and represent the oldest remains of priests' quarters in the country that have been

confirmed through excavation thus far. Of two which line up north and south, building SB 340 has a ridge eleven bays long, and assuming their western ends were aligned, SB 400 is also inferred to have had a long and narrow plan of nine bays in length. They were probably used by laying a low floor and partitioning the interiors. The distance from the northern line of pillars of SB 400 to the outer line on the southern face of the cloister is 440 *taishaku*, the same as the cloister's east-west span. From this planned arrangement, and with regard to the central axes of the main hall and the temple compound as a whole, it may be supposed that a number of such priests' quarters were laid out. While there are a number of points of morphological difference in comparison with eighth century priests' quarters, these finds can be regarded as extremely valuable for ascertaining the development of this type of structure.

Temple precinct and building arrangement. The extent of archaeological features relating to the Kibiike abandoned temple reaches more than 260 m north-south by 180 m east-west. The center of the cloister assumes the so-called Hōryūji style arrangement, with a southern-facing main hall and pagoda lined up east-west, and represents the oldest example of this style. The main buildings were placed along a plan based on multiples of ten *taishaku*, based in principle on the outer line of pillars of the cloister. The centers of the main hall and pagoda are 100 *taishaku* (35.7–36.5 m) from the cloister's eastern and western sectors, respectively, and the main hall's center is located 150 *taishaku* (53.5 m) from the cloister's southern sector. The central area enclosed by the cloister is long in the east-west direction, and its east-west scale greatly exceeds all other domestic temples of the same period, equaling that of Hwangyongsa temple of Silla. Also, the distance of 240 *taishaku* (84.1 m) between the centers of the main hall and pagoda is distinctively large, though this possibly derives from the height of the pagoda. While the lecture hall and the northern sector of the cloister were not detected, from the large scale of the leveled ground and from recoveries of roof tiles, the existence of these structures can be seen as certain. The degree to which the full temple complex was completed may also be regarded as high.

Features postdating abandonment. After the temple at Kibiike was abandoned, the surrounding area was subsumed within the Fujiwara capital (694–710), and a street plan based on a rectangular grid was laid out. In addition to the roadside gutters, perimeter walls and buildings of house lots, partitioning ditches, and so forth were found in the excavations. Subsequently, after the move to the Nara capital (710–784), it is thought that division into agricultural plots under the *jōri* system was undertaken, and the area

converted to paddy. From recovered roof tiles it appears that a small tile-roofed Buddhist building was erected around the first half of the eleventh century.

2. Artifacts

Eave tiles. Four types of round eave tiles (IA, IB, II, III), and three types of flat eave tiles (IA, IB, III) were recovered, but excluding the Heian period type III items (four round and two flat eave tiles), the preponderance are limited to round eave tiles having eight-petal lotus designs with simple petals (43 items of type IA, 23 of type IB, 25 indeterminate items), and flat eave tiles with stamped palmette designs (12 items of type IA, 1 of type IB), all dating from the time of the temple's construction. Tiles used for re-roofing are entirely lacking, so it is almost certain that the temple was moved to another location. The tiles recovered from the Kibiike abandoned temple site are considered to be items discarded on that occasion as incapable of being reused. Round eave tiles of types IA and IB, in terms of style, have elements that slightly precede the tiles used in the construction of the main hall of Yamadadera temple (at Yamada, in the city of Sakurai), begun in 643. In contrast, flat eave tiles of types IA and IB were made with molds of flat eave tile type 213B from Ikarugadera temple (also referred to as Wakakusagaran of Hōryūji, in the town of Ikaruga, Ikoma county), and from the condition of damage on the molds, they were clearly made after those of Ikarugadera. Accordingly the ages of the eave tiles used at the temple's founding may be judged as falling between the 630s and the beginning of the 640s. Additionally, the molds used for flat eave tiles of types IA and IB were afterwards taken to the Kuzuha Hiranoyama tile kiln, and used to produce tiles for Shitennōji temple (in the city of Osaka), and the IB mold was further used to make tiles for the founding of Kaieji temple (in the city of Sennan, Osaka prefecture). It is highly likely that these types of tiles from Shitennōji were related to maintenance work on the complex conducted in conjunction with the construction of Naniwa capital during the reign of Emperor Kōtoku (645–654), which in addition to strengthening the chronological argument given above, is suggestive of the positions held by Shitennōji and the Kibiike abandoned temple during this period.

Round and flat tiles. A total of 2,649.4 kg (576.1 kg of round tiles, 2,073.3 kg of flat tiles) were recovered. More than 99 percent of the round tiles are type 1 round tiles from the temple's founding, being made on a single wooden mold (which served as the core around which a slab of clay was folded) all the way to the lip on their butt ends. The thick-walled type 1 flat tiles from the temple's founding, with which these items were

paired, represent approximately 90 percent of all flat tiles. The remaining flat tiles are nearly all the thin-walled type 2 flat tiles, for which there is no corresponding type of round tile, and it is surmised that tiles from the time of the founding of Abedera temple (at Abe, in the city of Sakurai) were brought from there. Assuming the ratio of type 1 to type 2 flat tiles is 9:1, and dividing the total weights of round and flat tiles by the respective weights taken for a single tile of that type, thereby converting into numbers of complete items, the ratio of round to flat tiles is calculated in the range from 1:2.62 to 1:3.34. These are entirely appropriate figures for the tiles used on a building roofed entirely with tile. Also, the amount of tile recovered at the Kibiike abandoned temple is 68.3 kg/100 m^2 on the whole, with areas reaching several times that level, as seen in the environs of the main hall (282.3 kg). By contrast, for ancient temples in the Asuka and Fujiwara districts, recovered tiles may exceed a metric ton per 100 m^2, whereas conditions close to those of the Kibiike abandoned temple are presented in the central portion of the Fujiwara palace. There the amounts per 100 m^2 are on the 200 kg and 300 kg levels, and it is certain that this shows the results of the greater portion of roof tiles being sent to another location. It is therefore deduced that tile-roofed structures existed at the Kibiike abandoned temple, and were in like manner removed to another location.

Pottery. Although the amount of recovered pottery filled eighty-two wooden boxes used for sorting, small sherds were numerous, and good materials few. Dirt used in leveling the site at the time of the temple's founding included pottery from the first half of the seventh century, and of the pottery recovered from the depression dug in preparation for the main hall podium and from the gutter surrounding the podium, items for which the date can be ascertained fall within the first half of the seventh century. These materials indicate the *terminus ad quem* for these contexts, and it may be thought that the establishment of the Kibiike abandoned temple comes very close to this in time. Pottery included in the postholes of the priests' quarters indicates the same age. By contrast, the hole left by the removal of the central pillar base stone of the pagoda yields pottery from the second half of the seventh century, allowing an inference of the date of the abandonment. In addition, pottery dating from the latter half up to the end of the seventh century is included in the rain gutters of the cloister, and in the holes left from removing the pillars of the priests' quarters.

Artifacts predating the temple's founding. As artifacts preceding the Kibiike abandoned temple in time, in addition to knife-shaped stone tools of sanukite (Paleolithic period) and projectile points (Jōmon), large bifacially beveled stone axes (Yayoi), and

other items were recovered. While none of these accompany archaeological features, they indicate that the area was the site of activities of livelihood from early times. In addition, *haniwa* (funerary ceramics, Kofun period) over nearly the entire area of investigation. It is presumed that mounded tombs are present atop the small hills spreading from the temple complex's north to the southeast. Apart from this, crucibles, spruecups, iron slag, scorched earth, and sharpening stones were recovered in concentrated fashion from the area around the priests' quarters, indicating that workshops related to metal crafts existed at the time of the temple's founding.

3. Kibiike abandoned temple and Kudara no ōdera, Takechi no ōdera

The Kibiike abandoned temple's name. As seen above, the Kibiike abandoned temple is thought to have been founded between 630 and the early 640s, and later moved to a separate location. The scale of the main hall and pagoda, clarified through archaeological excavation, exceeded all other domestic temples of the same period, and came close to that of Hwangyongsa temple of Silla, or Daikandaiji of Emperor Monmu's reign. In the same manner that these were founded on a grand scale as state temples, the Kibiike abandoned temple may also be seen as resulting from the wish of a Japanese monarch (*tennō* or *ōkimi*). In that case, only Kudara no ōdera would match with the date of founding. Both the *Nihon shoki* (720) and the *Daianji garan engi narabi ni ruki shizaichō* (747) record the establishment of this temple by Emperor Jomei in 639, the first to be founded on the wish of a monarch. Jomei died shortly after the start of construction, but his consort and successor Empress Kōgyoku continued its construction, and it appears to have been completed to a certain degree by the reign of Emperor Kōtoku (645–654). Subsequently Emperor Tenji, son of Jomei and Kōgyoku, donated the *jōroku* Buddha, made in the dry lacquer sculpture technique, which later became the principal image in the main hall of Daianji temple, and the completion of the temple appears to have been proceeding in relatively satisfactory fashion. Further, Kudara no ōdera was moved in 673 to Takechi, becoming known as Takechi no ōdera. In this regard as well, the condition of the artifacts and archaeological features of the Kibiike abandoned temple agree well with the historical record. In addition, as it is known from the *Nihon sandai jitsuroku* (901) that Kudara no ōdera stood on the bank of "the Kudara river of Tōchi county," this is thought certain to correspond with the river currently known as Yonegawa, which flows to the south of the Kibiike abandoned tem-

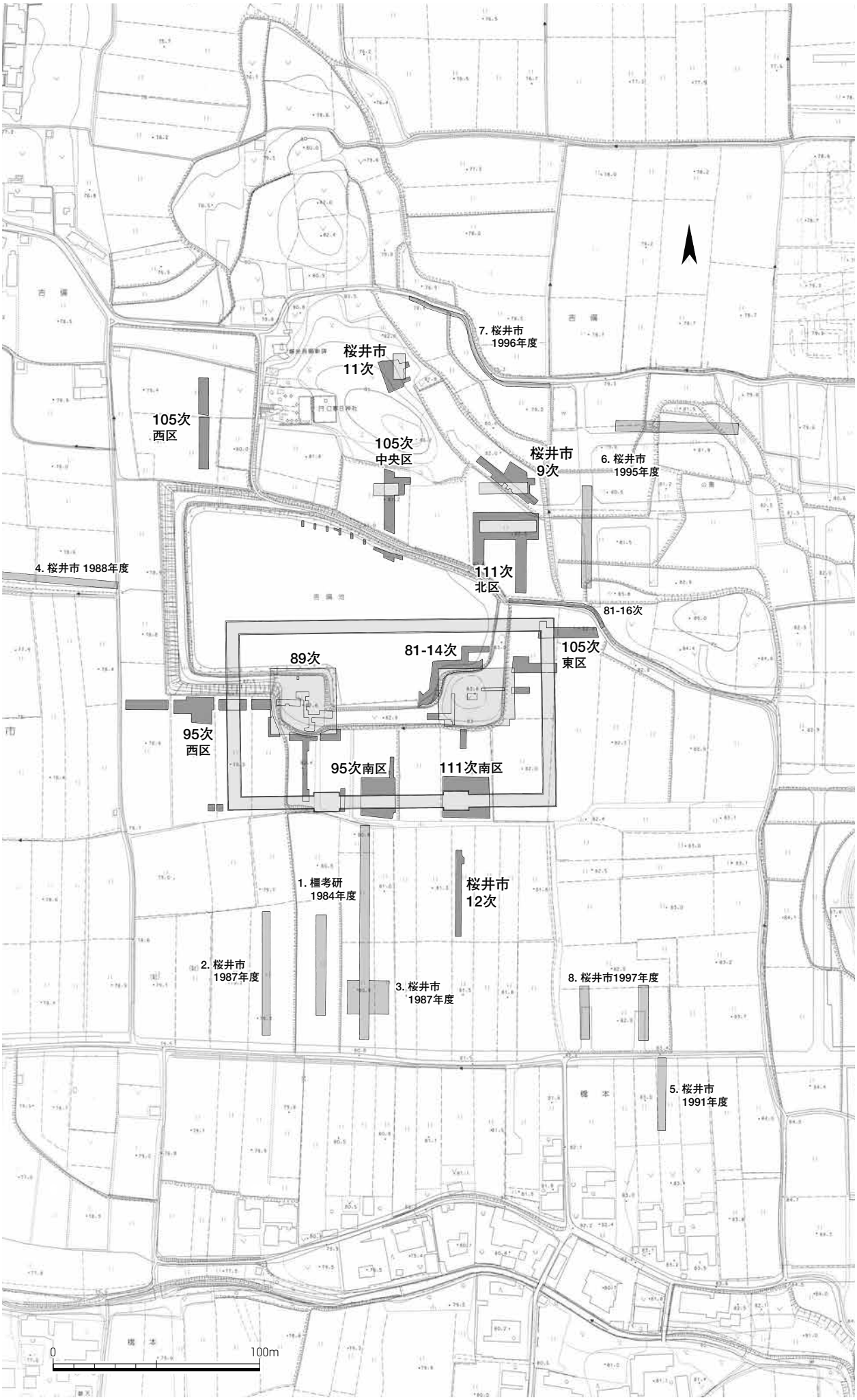
ple. There is almost no doubt that the Kibiike abandoned temple is Kudara no ōdera.

The significance of Kudara no ōdera. Kudara no ōdera, the first temple to be erected by the imperial family, was the product of a sense of rivalry with Asukadera, the clan temple of the Soga line. The nine-storied pagoda which far surpasses that of Asukadera is the very symbol of this. It is also highly possible that the existence of priests, and of others returning after study abroad, from Tang China, and Paekche and Silla on the Korean peninsula, is related as a background factor to its construction. In particular, information about the nine-storied pagoda which saw completion in 645 at Hwangyongsa temple in Silla, was surely of great import for Japan at the time. It is not difficult to imagine that the founding of Kudara no ōdera was inseparable from relations to these conditions in the East Asian world.

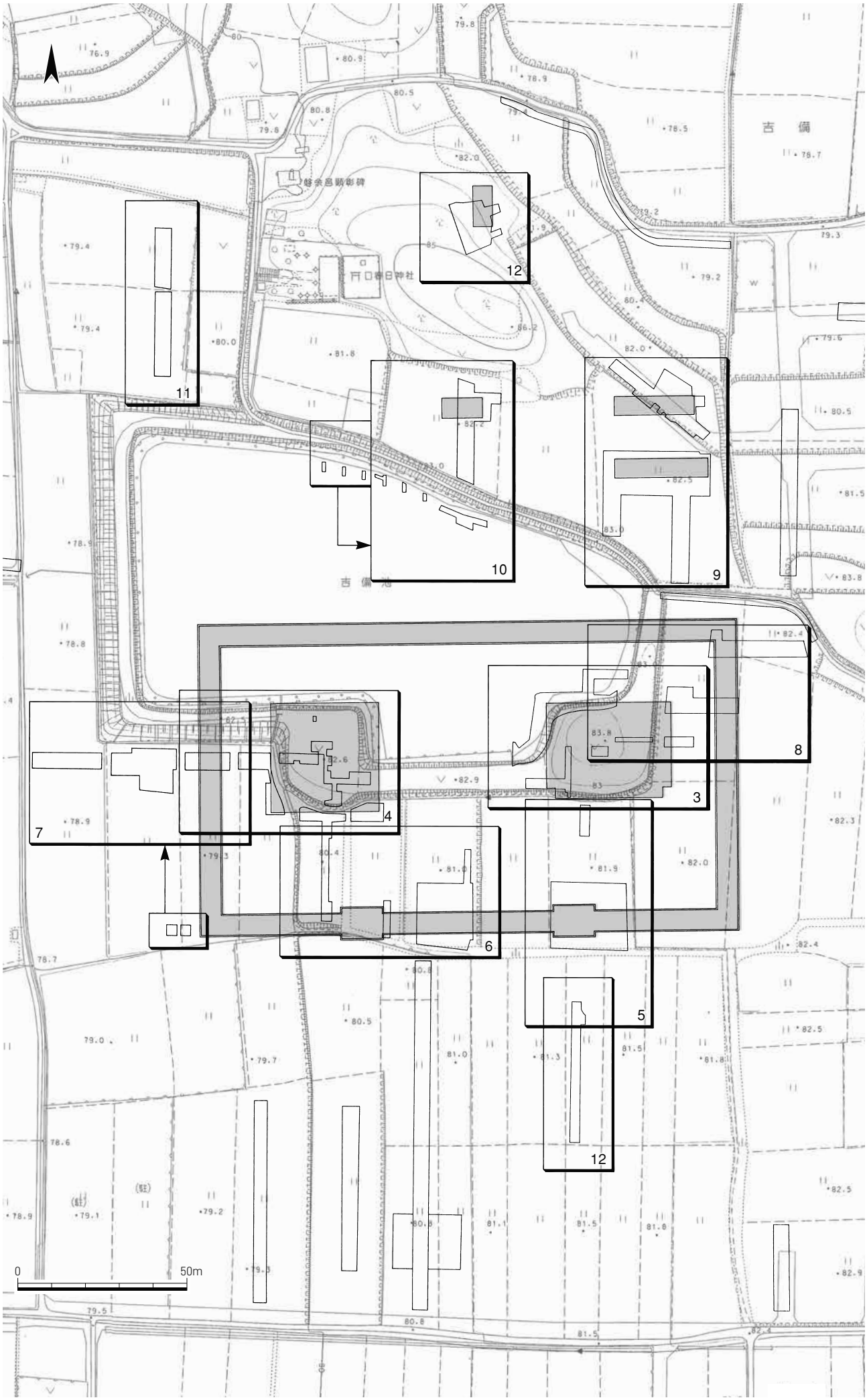
The location of Takechi no ōdera. The move of Kudara no ōdera from "the site of Kudara" to "the site of Takechi" appears to be related to the building of Emperor Tenmu's palace, Asuka Kiyomihara no miya; subsequently Takechi no ōdera was renamed Daikandaiji in 677 (the Daikandaiji of Tenmu's reign), while in the reign of Emperor Monmu (697–707) a separate large temple complex was built (the Daikandaiji of Monmu's reign). The precise location of Takechi no ōdera is still undetermined, but a rice field in Yabe village, Takechi county appears in the *Nihon sandai jitsuroku* as the former temple site of "Takechi Daikanji," and it can be seen to have been in close proximity to the Daikandaiji of Monmu's reign. Meanwhile, a record appears in the *Ruijusandaikyaku* (eleventh century) indicating that between the Daikandaiji of Monmu's reign, and the Asuka river to its west, there lay an additional temple site. That location corresponds to the place named "Takechi no sato," and roof tiles older than the Daikandaiji of Monmu's reign, such as flat eave tiles with concentric arc patterns which are seen in common at Daianji in the Nara capital, are distributed over that area. The possibility that Takechi no ōdera was located in this "Takechi no sato" is great.

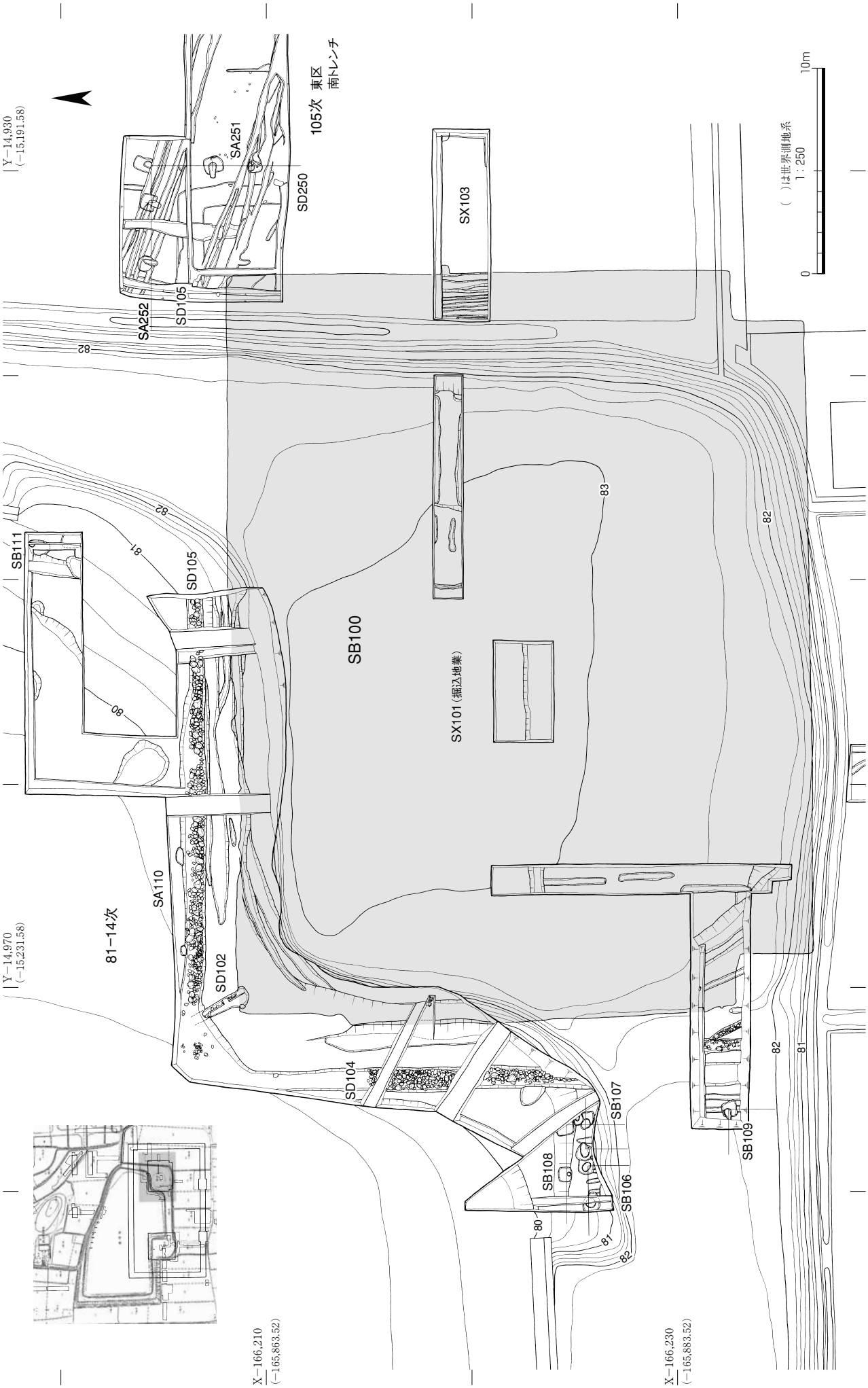
図　　面

PLAN		対応図版
1	吉備池廃寺の地形と伽藍復元	
2	平面図の割り付け	
3	金堂とその周辺	PL. 4 ～ 7
4	塔とその周辺	PL. 8 ～11
5	中門とその周辺	PL. 12～14
6	南面回廊とその周辺	PL. 15～16
7	西面回廊とその周辺	PL. 17～19
8	東面回廊とその周辺	PL. 20～21
9	僧房とその周辺（1）	PL. 22～26
10	僧房とその周辺（2）	PL. 27～29
11	北外周部（1）	PL. 31
12	北外周部（2）・南外周部	PL. 30・32

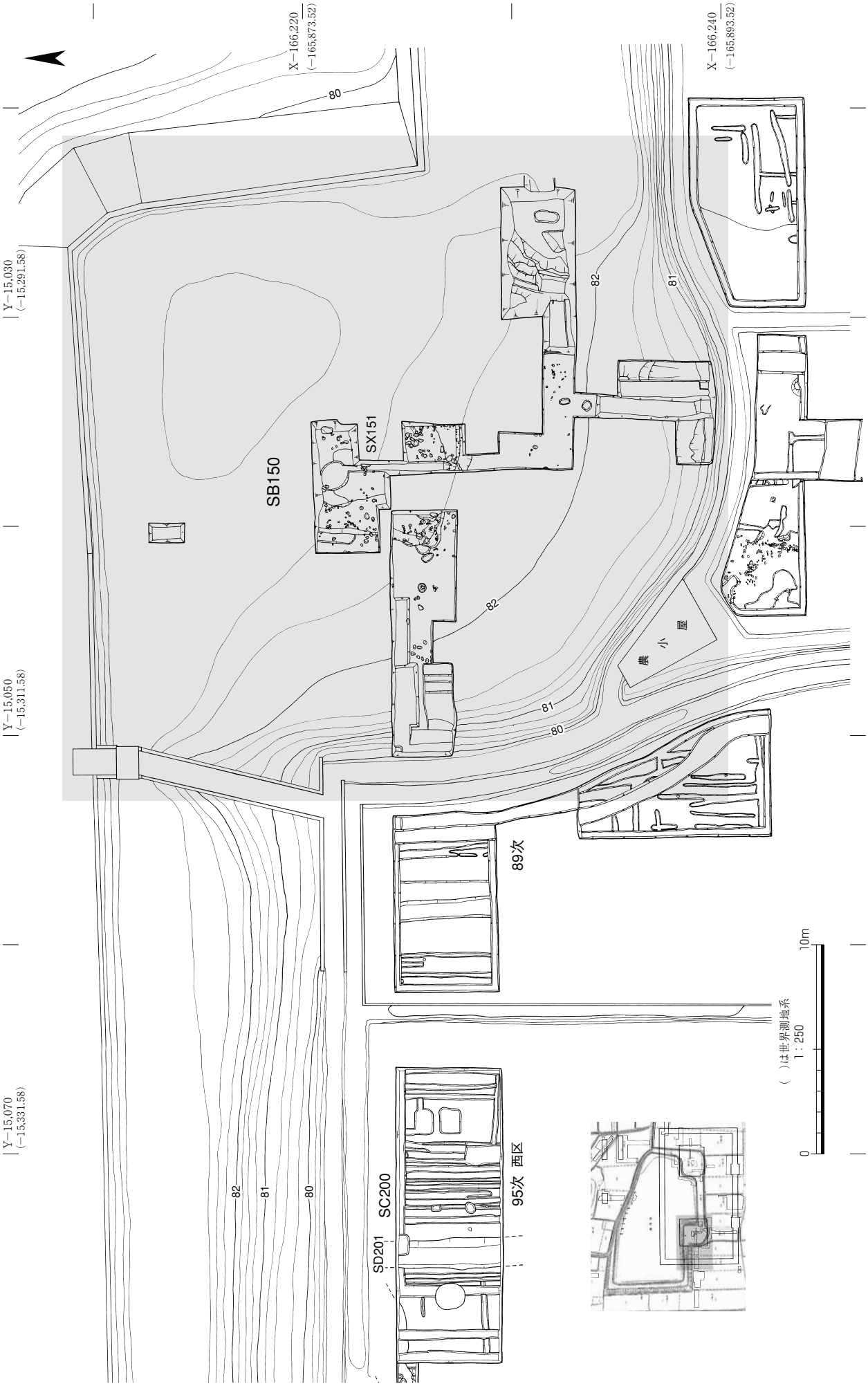

7. 桜井市
1996年度
桜井市
11次
105次
西区
105次
中央区
桜井市
9次
6. 桜井市
1995年度
4. 桜井市 1988年度
111次
北区
81-16次
105次
東区
89次
81-14次
95次
西区
95次南区
111次南区
1. 橿考研
1984年度
桜井市
12次
2. 桜井市
1987年度
3. 桜井市
1987年度
8. 桜井市1997年度
5. 桜井市
1991年度
0
100m

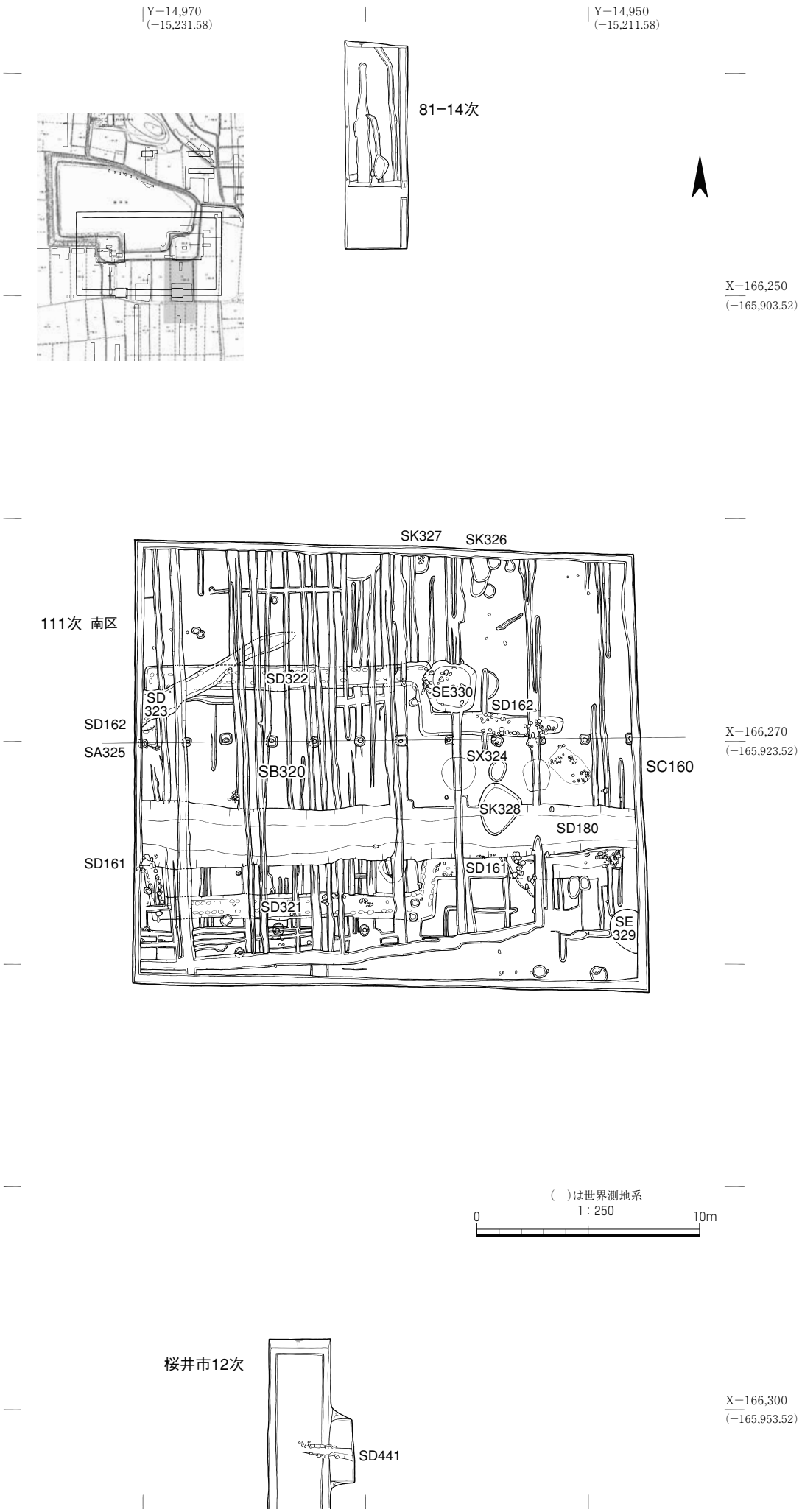
PLAN 2　平面図の割り付け



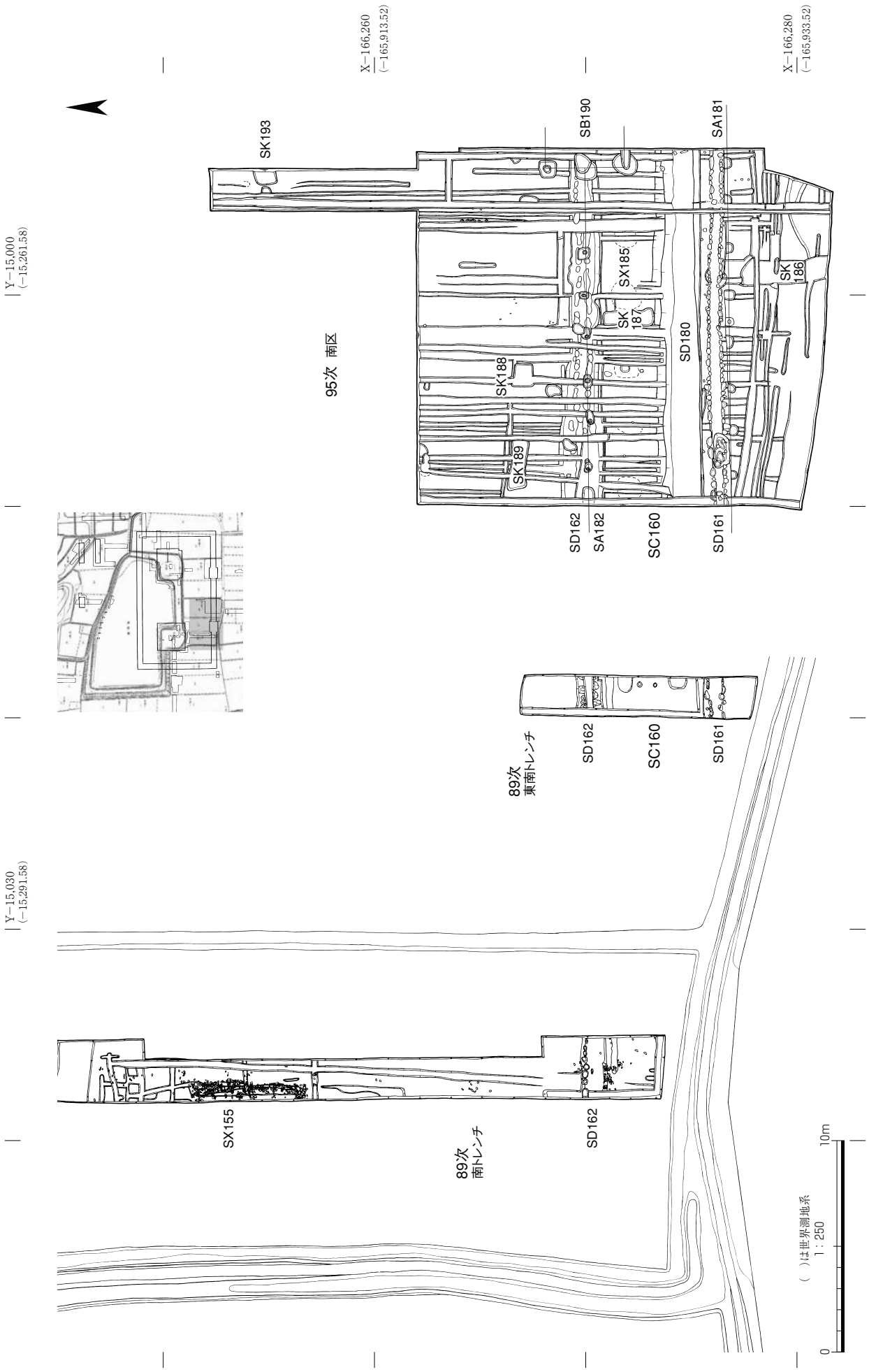

Y−14,930
(−15,191.58)
Y−14,970
(−15,231.58)
X−166,210
(−165,863.52)
X−166,230
(−165,883.52)
105次 東区
南トレンチ
SA251
SD250
SX103
SA252
SD105
SB111
SD105
SB100
SX101（掘込地業）
SA110
81−14次
SD102
SD104
SB107
SB108
SB106
SB109
82
81
80
83
0
10m
1：250
（　）は世界測地系

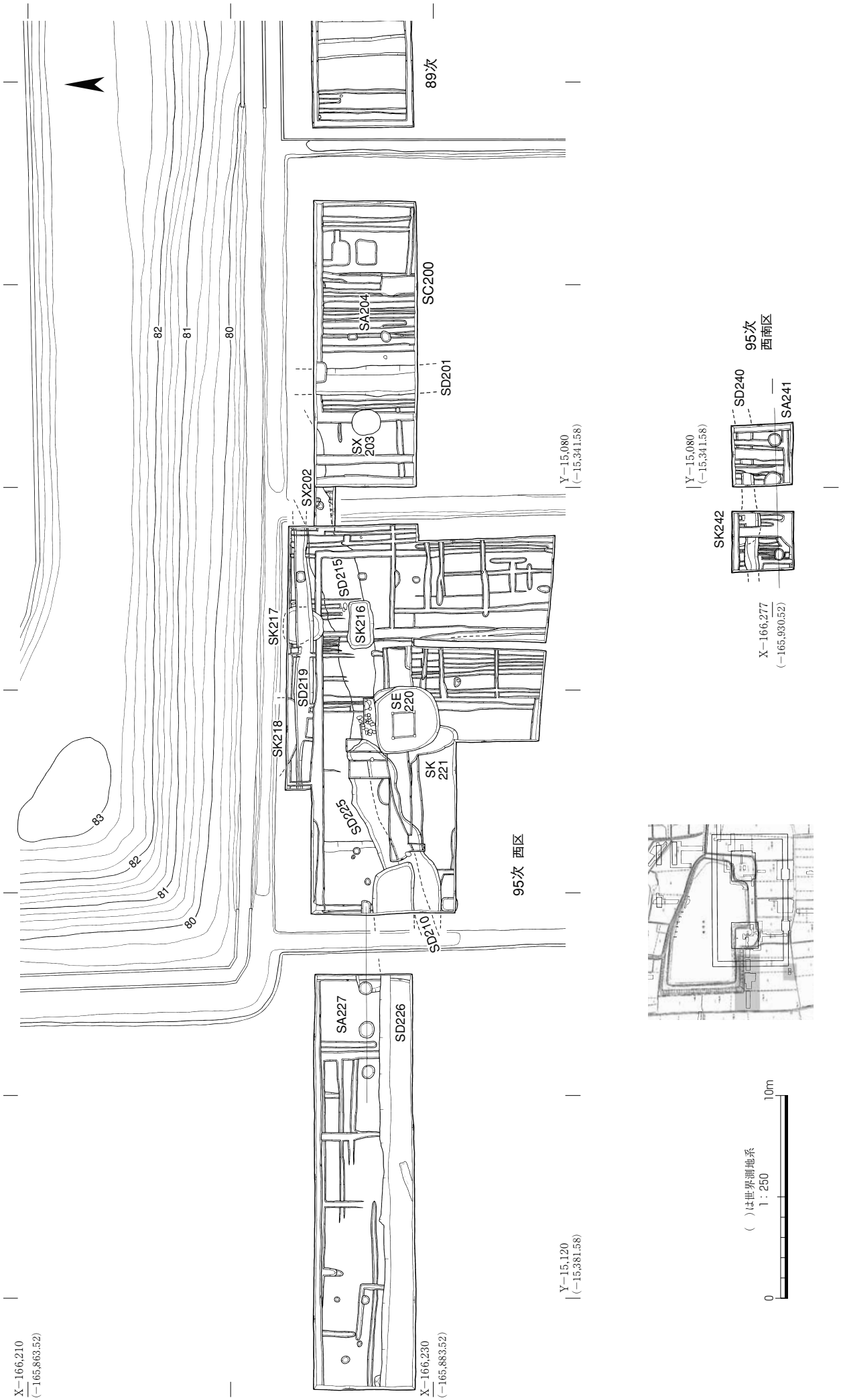
PLAN 4　塔とその周辺　第89次・第95次西区



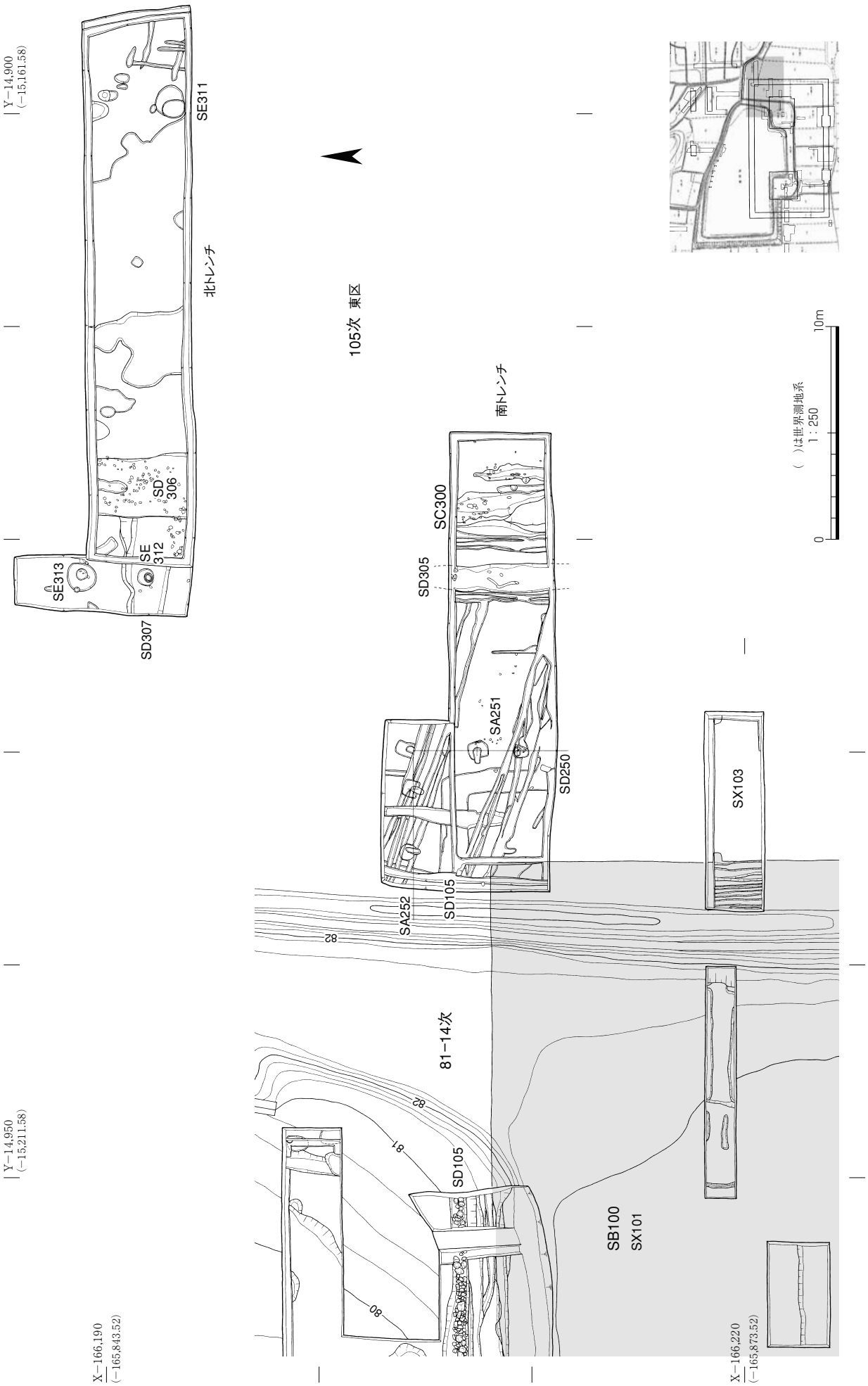

Y−14,970
(−15,231.58)
Y−14,950
(−15,211.58)
81−14次
X−166,250
(−165,903.52)
111次 南区
SK327
SK326
SD322
SE330
SD162
SD
323
SD162
SA325
SX324
SB320
SC160
X−166,270
(−165,923.52)
SK328
SD180
SD161
SD161
SD321
SE
329
(　)は世界測地系
1：250
0
10m
桜井市12次
SD441
X−166,300
(−165,953.52)

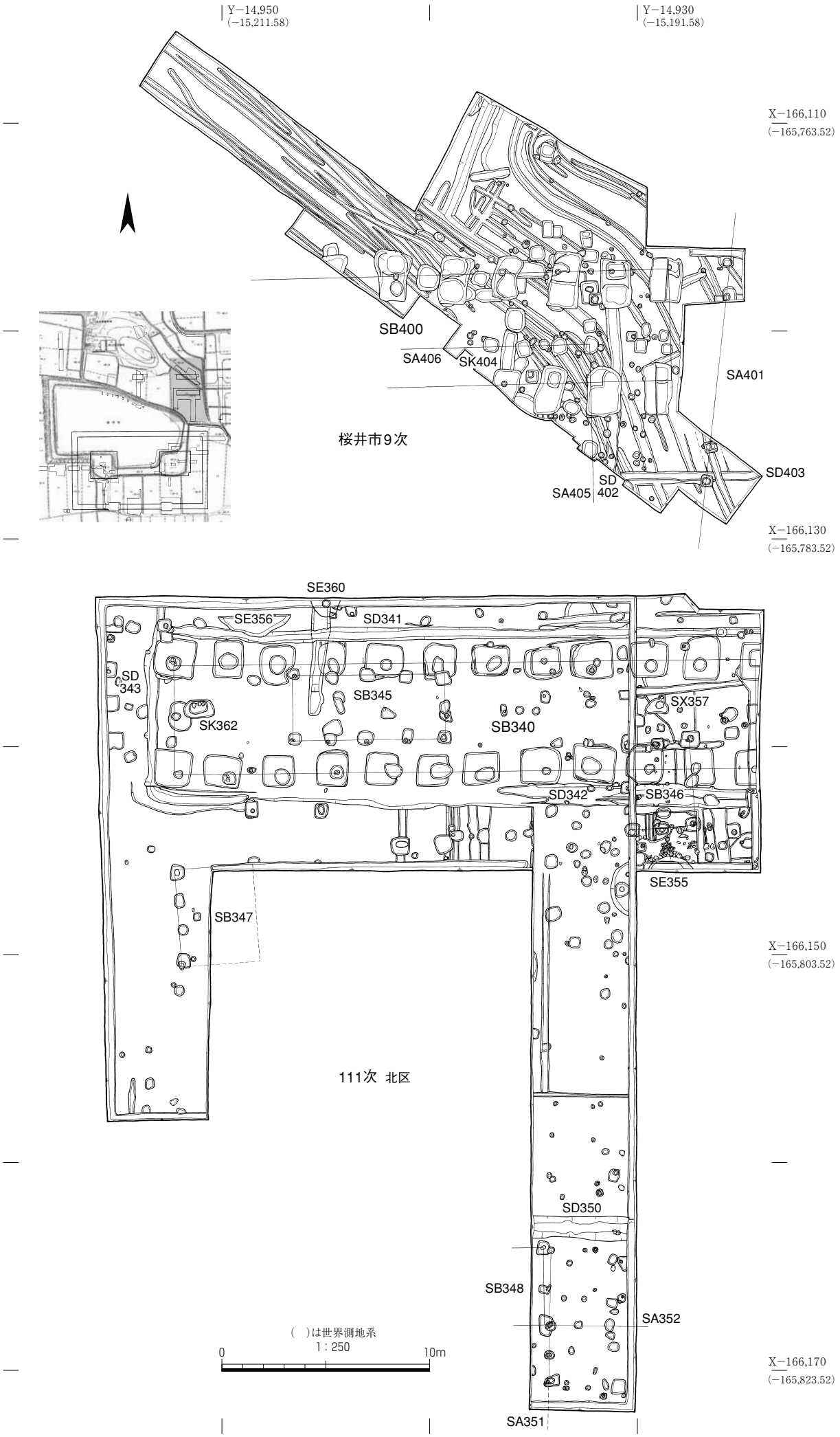
PLAN 6　南面回廊とその周辺　第95次南区・第89次



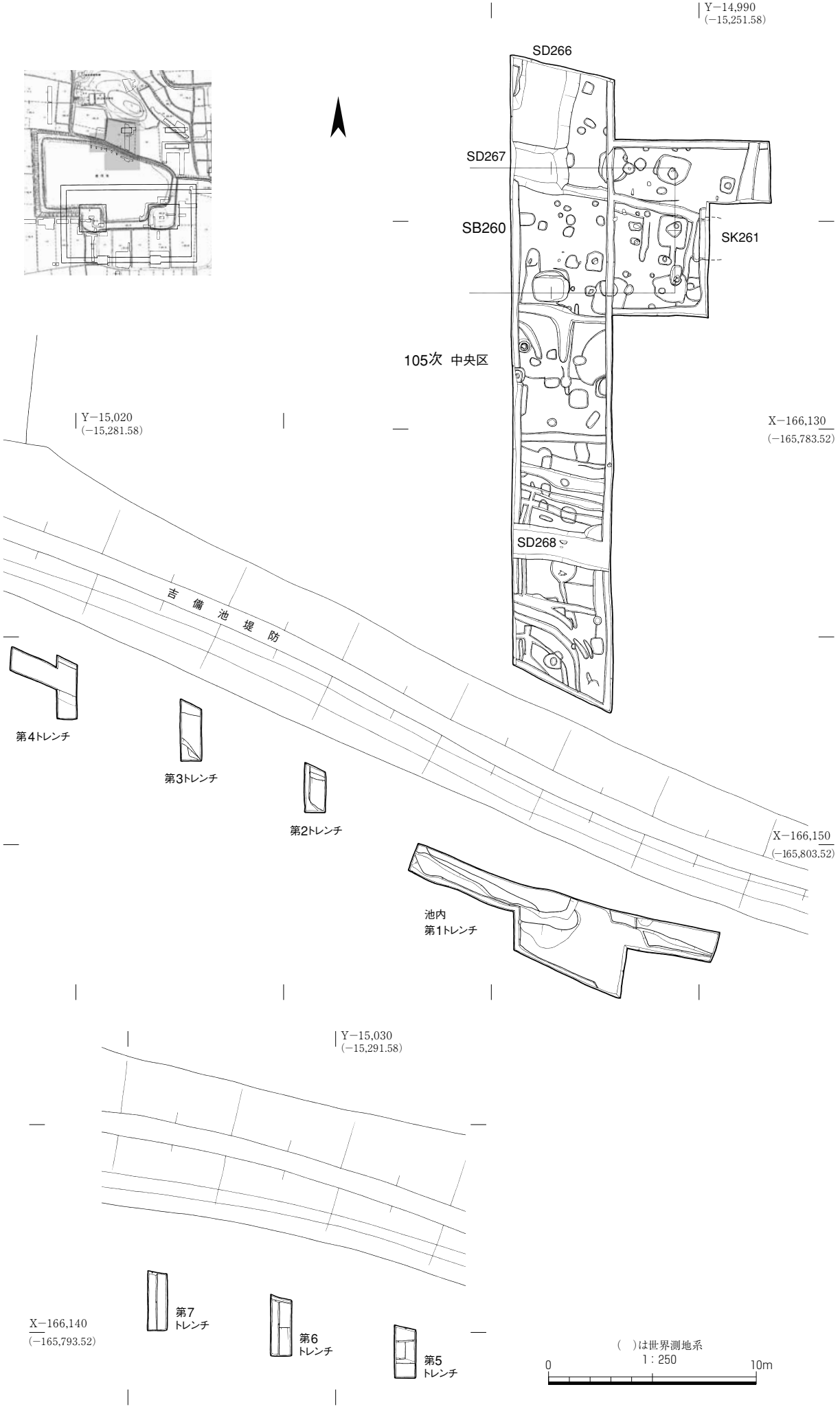

89次
SC200
SA204
SD201
SX 203
SX202
SD215
SK216
SK217
SD219
SK218
SE 220
SK 221
SD225
SD210
95次 西区
SA227
SD226
82
81
80
83
X−166,210
(−165,863.52)
X−166,230
(−165,883.52)
Y−15,120
(−15,381.58)
Y−15,080
(−15,341.58)
95次
西南区
SD240
SA241
SK242
X−166,277
(−165,930.52)
( )は世界測地系
1：250
0
10m

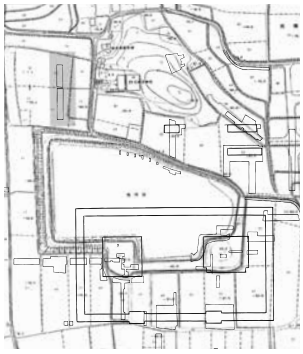
PLAN 8　東面回廊とその周辺　第105次東区・第81−14次

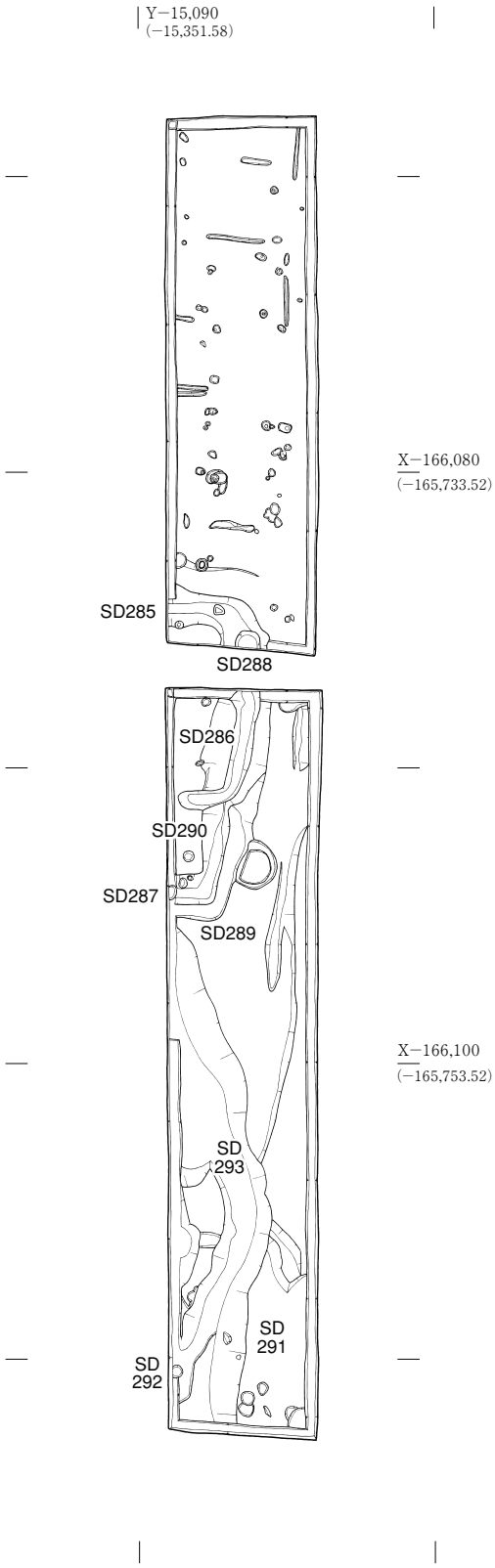



Y−14,950
(−15,211.58)
Y−14,930
(−15,191.58)
X−166,110
(−165,763.52)
X−166,130
(−165,783.52)
X−166,150
(−165,803.52)
X−166,170
(−165,823.52)
SB400
SA406
SK404
SA401
SD403
SD
402
SA405
桜井市9次
SE360
SE356
SD341
SD
343
SB345
SK362
SB340
SX357
SD342
SB346
SE355
SB347
111次 北区
SD350
SB348
SA352
SA351
( )は世界測地系
1：250
0
10m

PLAN 10　僧房とその周辺（2）　第105次中央区・池内調査区







(　)は世界測地系
1：250
0　10m

PLAN 12　北外周部（2）・南外周部　桜井市第11次・同第12次

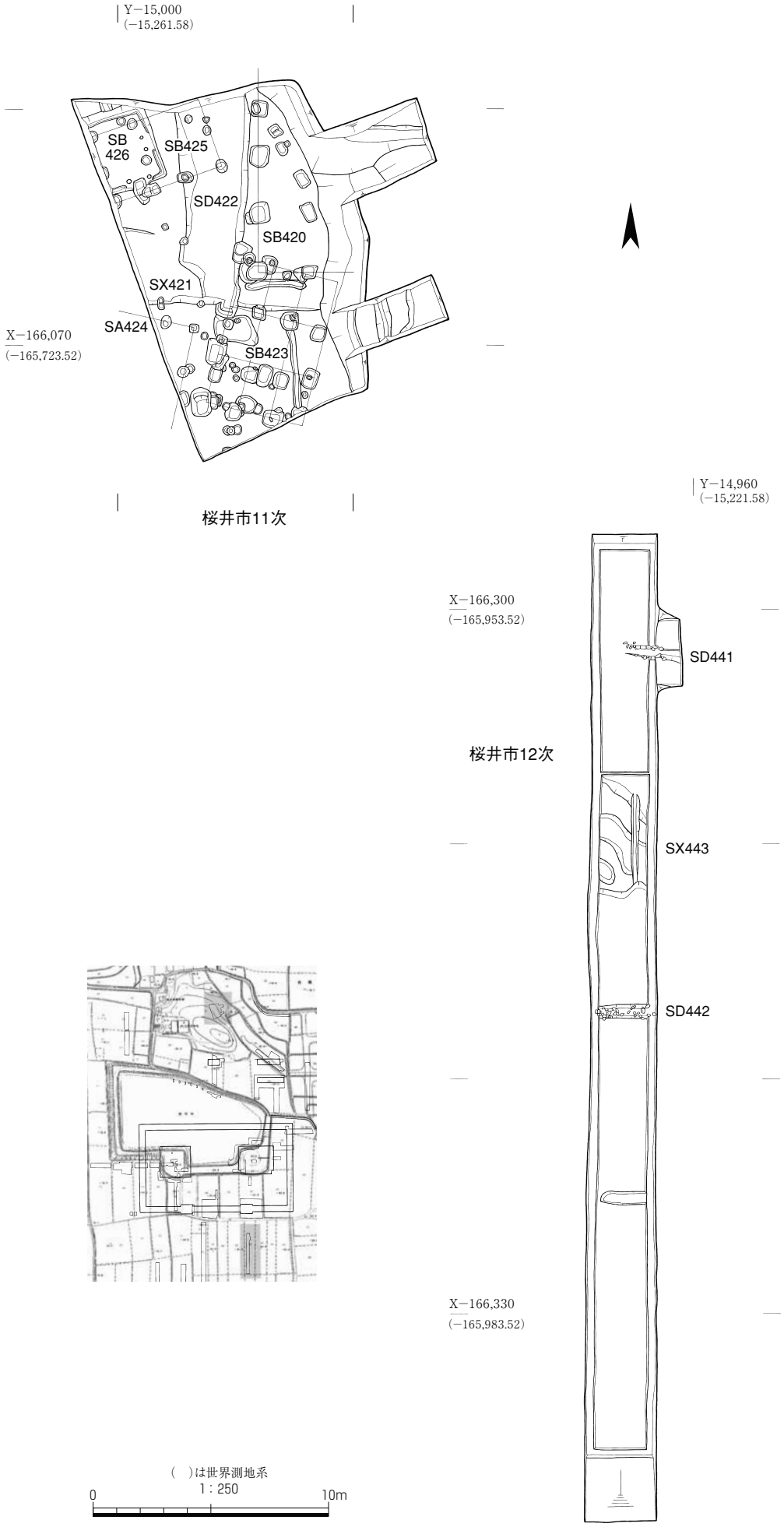


図　　版

PL.		対応図面
1	遺跡の全景と調査区	PLAN 1
2 ～ 3	遺跡の鳥瞰	PLAN 1
4 ～ 7	金堂とその周辺	PLAN 3
8 ～11	塔とその周辺	PLAN 4
12～14	中門とその周辺	PLAN 5
15～16	南面回廊とその周辺	PLAN 6
17～19	西面回廊とその周辺	PLAN 7
20～21	東面回廊とその周辺	PLAN 8
22～29	僧房とその周辺	PLAN 9 ～10
30～31	北外周部	PLAN 11～12
32	南外周部	PLAN 12
33	創建軒瓦	
34～37	軒丸瓦	
38～39	軒平瓦・道具瓦	
40～41	丸　瓦	
42～50	平　瓦	
51～52	土　器	
53	埴　輪	
54	石製品・土製品・金属製品	
55	木製品・動物遺存体	

集成写真（一部画像処理）　上が北

PL. 2　遺跡の鳥瞰（1）

1.　遺跡遠景　北から　　2.　遺跡遠景　南から　　2000年3月撮影

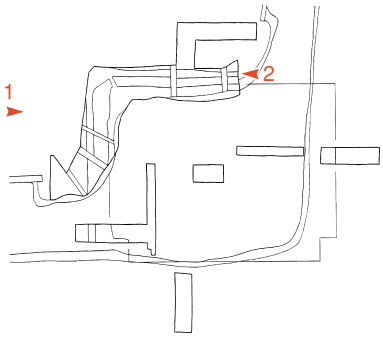
2000年3月撮影

1.　遺跡遠景　東から　　2.　遺跡遠景　西から

PL. 4　金堂とその周辺（1）　第81−14次

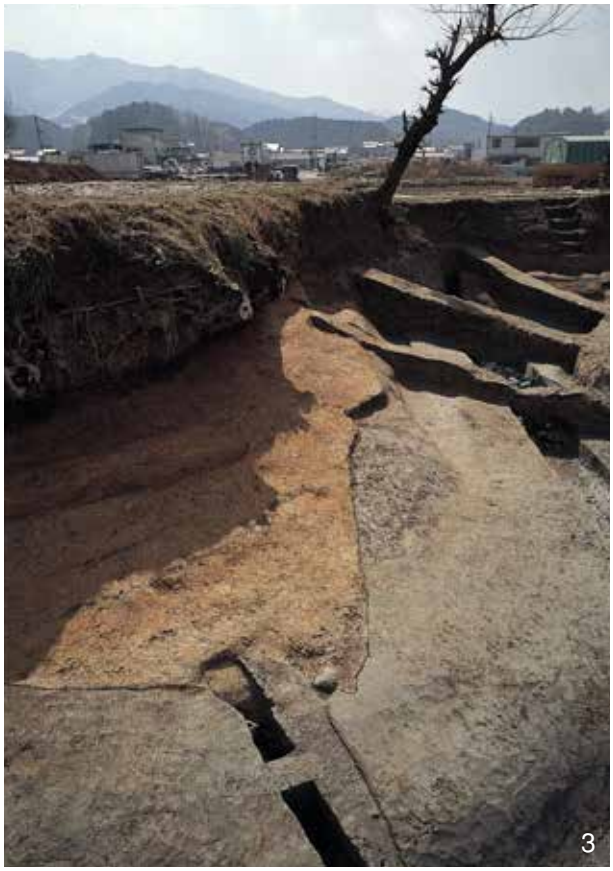
1.　金堂SB100全景　北から　　2.　金堂SB100全景　西から

1.　金堂SB100全景　西から

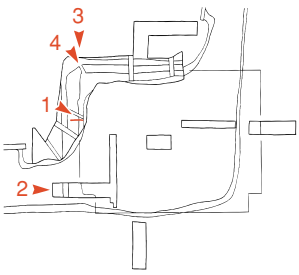


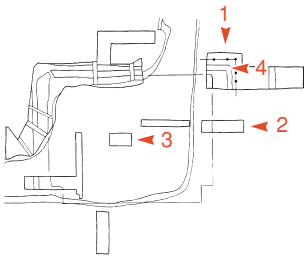
2.　金堂基壇北辺　東から

PL. 6　金堂とその周辺（3）　第81−14次



1.　金堂基壇の断面　北西から
2.　金堂基壇西南隅　西から
3.　金堂基壇西辺　北から
4.　金堂基壇掘込地業の排水溝　北西から



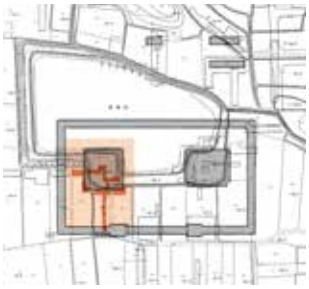


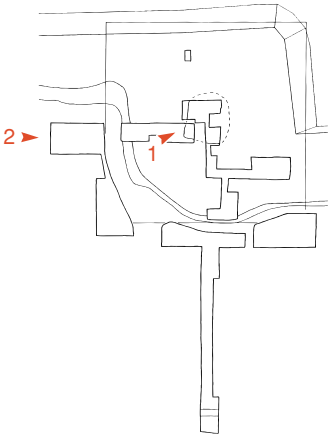
1. 金堂基壇東北隅と基壇外周の溝　北から
2. 金堂基壇東辺と砂利敷（第81−14次）　東から
3. 金堂基壇上面（第81−14次）　東から
4. 金堂基壇外周の溝の断面　東から

PL. 8　塔とその周辺（1）　第89次

1.　塔SB150全景　北から　　2.　塔SB150全景　右が北

1.　塔心礎抜取穴　南西から

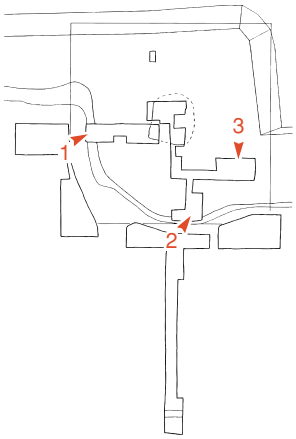




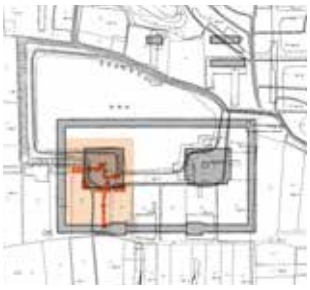
2.　塔基壇西辺　西から

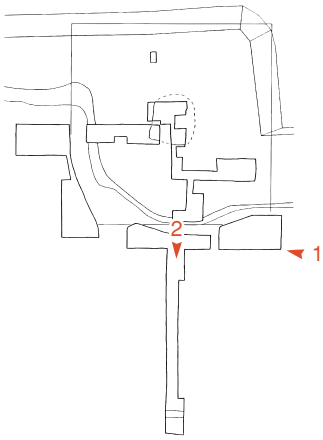
PL. 10　塔とその周辺（3）　第89次

1.　塔基壇西半部の断面　南西から
2.　塔基壇南半部の断面　南西から
3.　塔基壇東半部の断面　北から



1.　塔基壇南辺　東から



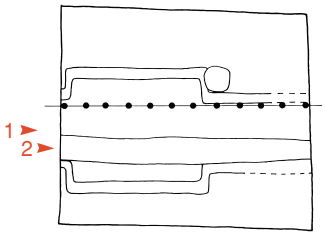


2.　塔基壇南方のトレンチ　北から

PL. 12　中門とその周辺（1）　第111次

1.　調査区全景（手前が中門SB320）南から　　2.　中門SB320全景 上が北

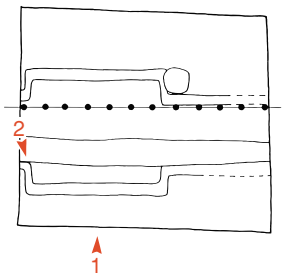
1.　中門SB320全景　西から



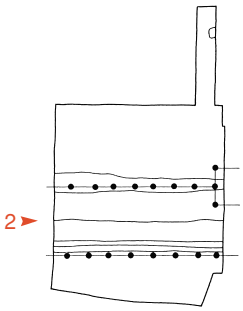
2.　三条大路北側溝SD180　西から

1.　中門SB320全景　南から

2.　中門西辺の雨落溝　北西から

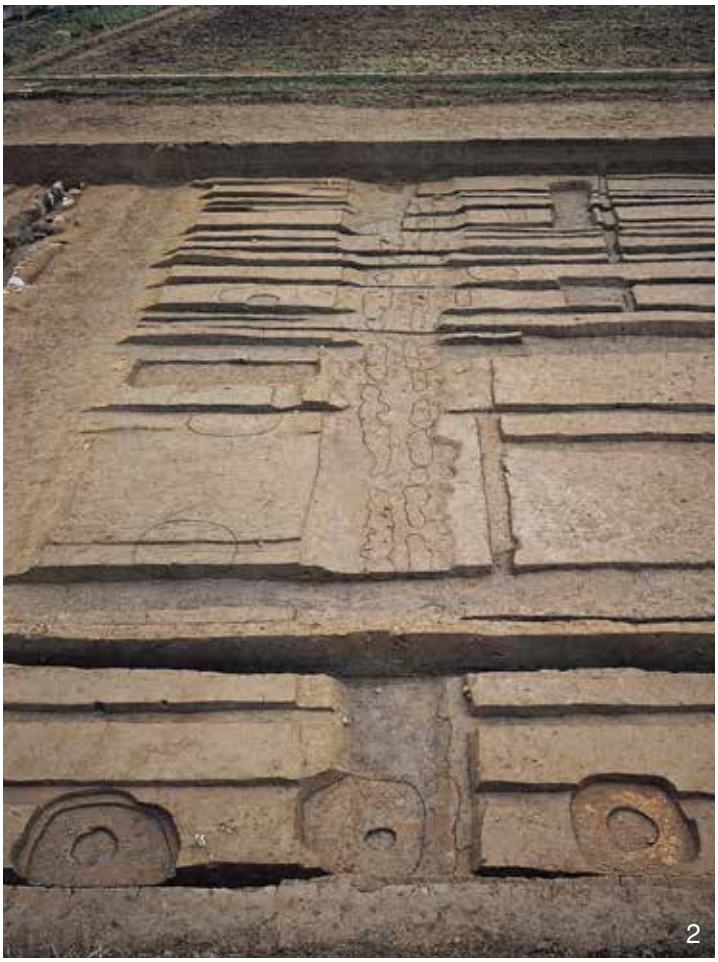


1.　調査区全景　南から

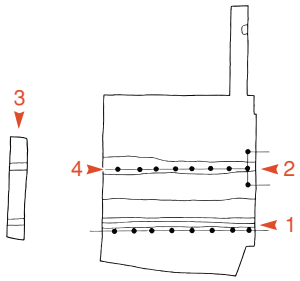


2.　南面回廊SC160　西から

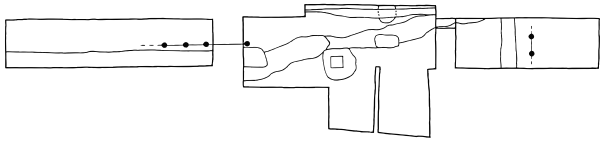
PL. 16　南面回廊とその周辺（2）　第95次・第89次



1.　南面回廊南雨落溝と東西塀SA181　東から
2.　南面回廊北雨落溝と建物SB190　東から
3.　南面回廊SC160（第89次）　北から
4.　南面回廊北雨落溝と東西塀SA182　西から



1.　調査区全景　西から　　2.　西区全景　上が北

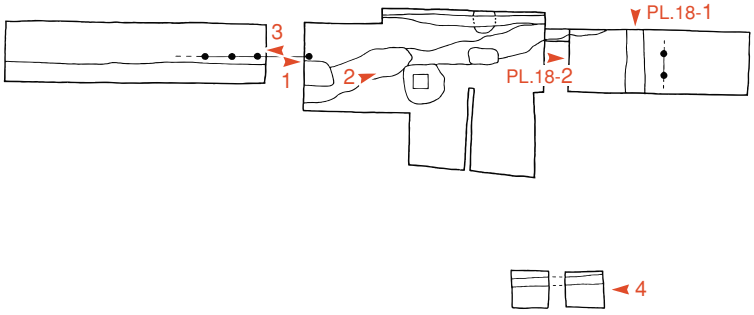


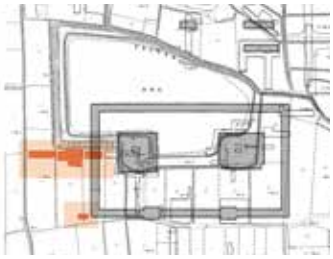
PL. 18　西面回廊とその周辺（2）　第95次

1.　西面回廊 SC200
西雨落溝　北から

2.　西面回廊 SC 200　西から

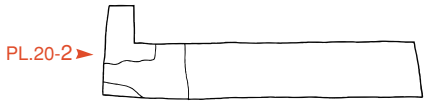
1.　斜行溝SD215　西から
2.　斜行溝SD215　南西から
3.　東西溝SD226と東西塀SA227　東から
4.　西南区全景　東から

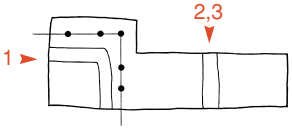


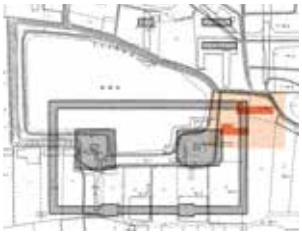


PL. 20　東面回廊とその周辺（1）　第105次

1.　東区全景　東から　　2.　東区北トレンチ全景　西から

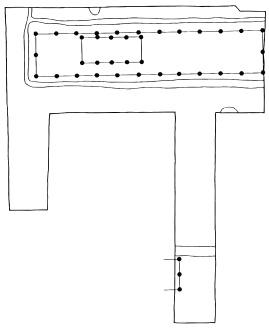






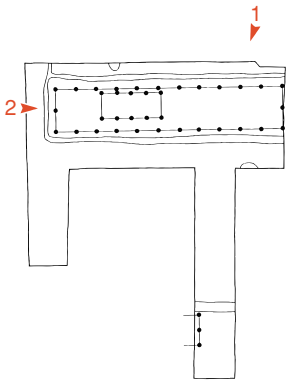
1.　東区南トレンチ全景　西から
2.　東面回廊SC300西雨落溝　北から
3.　東面回廊西雨落溝の瓦出土状況　北から

1. 調査区全景　北から
（手前が僧房SB340）



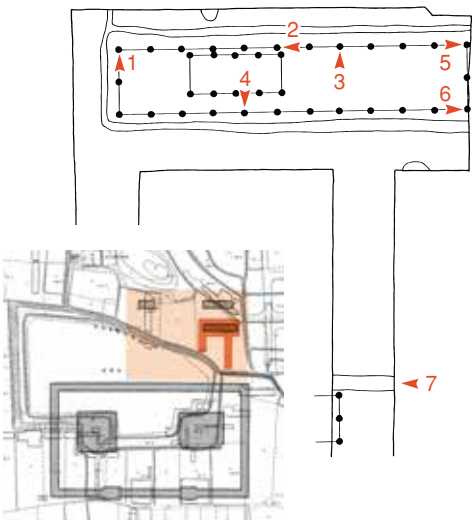
2. 僧房SB340全景　東から

1.　僧房SB340　北東から



2.　僧房SB340　西から

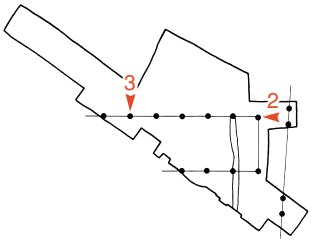
1.　僧房SB340柱穴断面　西北隅柱　南から
2.　僧房SB340柱穴断面　北側柱西から6　東から
3.　僧房SB340柱穴断面　北側柱東から5　南から
4.　僧房SB340柱穴断面　南側柱西から5　北から
5.　僧房SB340柱穴断面　東北隅柱　西から
6.　僧房SB340柱穴断面　東南隅柱　西から
7.　三条条間路南側溝SD350　東から



1.　僧房SB400全景　北から
（一部彩度調整）

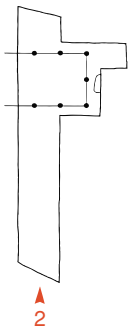
2.　僧房SB400全景　東から
（一部彩度調整）

1.　僧房SB400　北から



2.　僧房SB400柱穴断面　東北隅柱　東から
3.　僧房SB400柱穴と柱根　北側柱東から6　北から

1.　中央区全景　南から
（一部彩度調整）

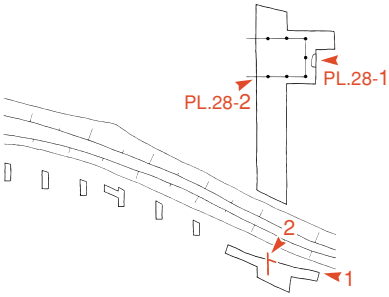


2.　中央区全景　南から

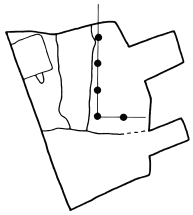
PL. 28　僧房とその周辺（7）　第105次

1.　僧房SB260　東から　　2.　僧房SB260　南西から

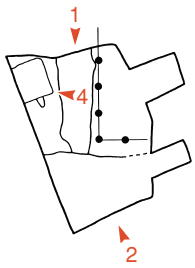
1.　池内調査区
東端トレンチ
東から



2.　池内調査区東端トレンチ断面　北東から

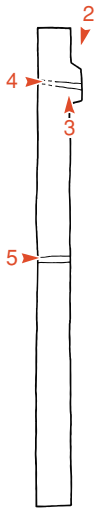


1.　調査区全景　上が北　　2.　調査区全景　北東から



1. 南北溝SD422と切り通しSX421　北から
2. 掘立柱建物SB423　南東から
3. 桜井市第11次調査区全景　上が北西
4. 竪穴住居SB426　東から
5. 第105次調査西区全景　南から

1.　調査区全景　南から
2.　調査区全景　北から
3.　東西溝SD441　南から
4.　東西溝SD441　西から
5.　東西溝SD442　西から



軒丸瓦ＩA
軒平瓦ＩA

軒丸瓦ＩB
軒平瓦ＩB

（軒丸瓦ＩＢと軒平瓦ＩＢ右は木之本廃寺出土）　1：2

PL. 34　軒丸瓦（1）

1.　軒丸瓦ＩＡ。

2.　軒丸瓦ＩＡ。瓦当裏面は回転ナデ調整。

3.　軒丸瓦ＩＢ（木之本廃寺）。

4.　軒丸瓦ＩＢ。

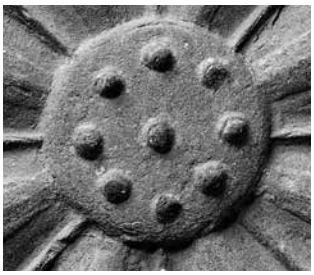
1：3

1.　四天王寺NMⅡa1（吉備池廃寺ⅠA同笵）。

2.　海会寺ⅠA（吉備池廃寺ⅠB同笵）。

3.　四天王寺NMⅡa2（吉備池廃寺ⅠB同笵）。

4.　斑鳩寺213型式B種。型を上下反転して施文。



5.　木之本廃寺ⅠA中房。

6.　木之本廃寺ⅠB中房。

7.　ⅠB同笵例中房（四天王寺）。

8.　ⅠB同笵例中房（海会寺）。

9.　木之本廃寺ⅠA外縁。

10.　木之本廃寺ⅠB外縁。

11.　ⅠB同笵例外縁（四天王寺）。

12.　ⅠB同笵例外縁（海会寺）。

1：3（1～4）

PL. 36　軒丸瓦（2）

1.　笵端の痕跡。軒丸瓦ＩＡ、以下同じ。

2.　外縁部分剥落状況。

3.　丸瓦先端を深く斜めに削って接合。

4.　瓦当裏面上端を斜めに削り落とす。

5.　丸瓦を立てて支持ナデつけ。

6.　支持ナデつけをおこなう薄手品。

7.　裏面はナデ調整（木之本廃寺）。

8.　丸瓦先端タテキザミの転写。

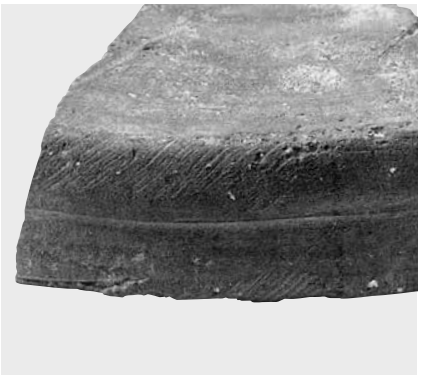
9.　外縁内面をナデつけ。

10.　間弁と圏線の間に笵傷発生（木之本廃寺）。

11.　外縁剥落。軒丸瓦ＩＢ、以下同じ。

12.　丸瓦を立てて支持ナデつけ。

13.　瓦当裏面は回転ナデ調整。



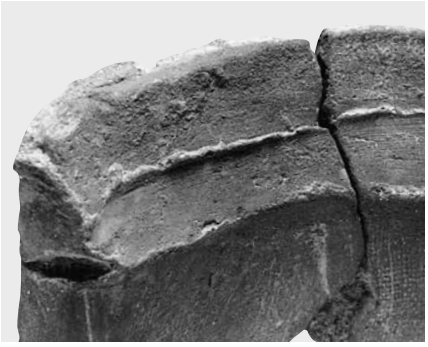
14.　瓦当側面に残る木目圧痕。

15.　瓦笵を二度押しした資料。

1.　丸瓦部凹面。軒丸瓦Ⅰ、以下同じ。

2.　同左。凸面側から釘穴をあける。

3.　釘穴は焼成前にあける。



4.　支持ナデつけがカット面におよぶ。

5.　丸瓦先端にタテキザミ。

6.　丸瓦先端にＸ字状のキザミ。

7.　丸瓦先端にタテ＋斜めキザミ。

8.　丸瓦先端にタテ＋斜めキザミ。

9.　丸瓦先端にＸ字状のキザミ。

10.　軒丸瓦Ⅱ型式。藤原宮6274Ａcと同笵。

11.　同左。凸面は丁寧なタテヘラケズリ。

12.　軒丸瓦Ⅲ型式。

13.　軒丸瓦Ⅲ型式。

14.　瓦当裏面は中くぼみで布圧痕が残る。

1：3（10～14）

PL. 38　軒平瓦（1）

1.　軒平瓦ＩＡ。

2.　軒平瓦ＩＡ。施文前に回転ナデ調整。

3.　軒平瓦ＩＡ。文様左側の表出が浅い。

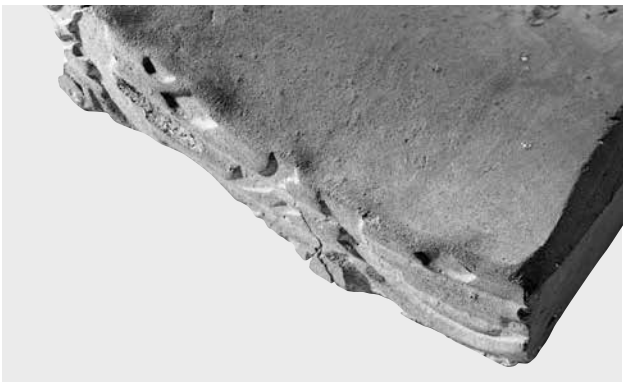
4.　隅軒平瓦。軒平瓦ＩＡを素材とする。

5.　軒平瓦ＩＡ。凸面広端縁を補足叩き。

6.　軒平瓦ＩＢ。

7.　軒平瓦ＩＢ（木之本廃寺）。

8.　軒平瓦ＩＡ。押し型施文時に生じたふくらみ（右京七条一坊）。

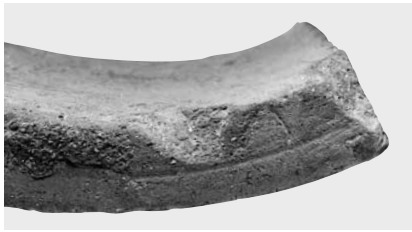


9.　軒平瓦ＩＢ。凹面広端縁を調整した後に施文（木之本廃寺）。

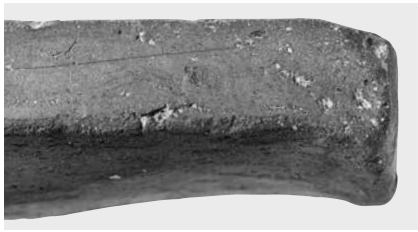
10.　軒平瓦ＩＡ。単位文様の左右両側に押し型が重複（右京七条一坊）。

11.　軒平瓦ＩＢ。重弧文は始点から時計回りに一周（木之本廃寺）。

12.　３の凸面。須恵器高杯が付着。



13.　狭端面にも回転ナデ調整。



14.　狭端部が凸面側に屈曲し変形。

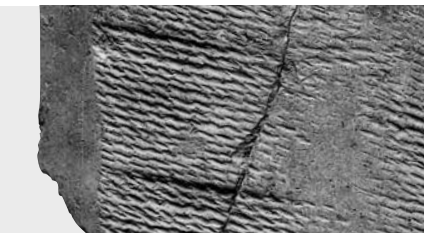
１：３（1～7）

1.　軒平瓦平瓦部の粘土板合わせ目Ｓ型。

2.　軒平瓦平瓦部の粘土板合わせ目Ｚ型の剥離面。

3.　軒平瓦Ⅲ型式。左端の破片。

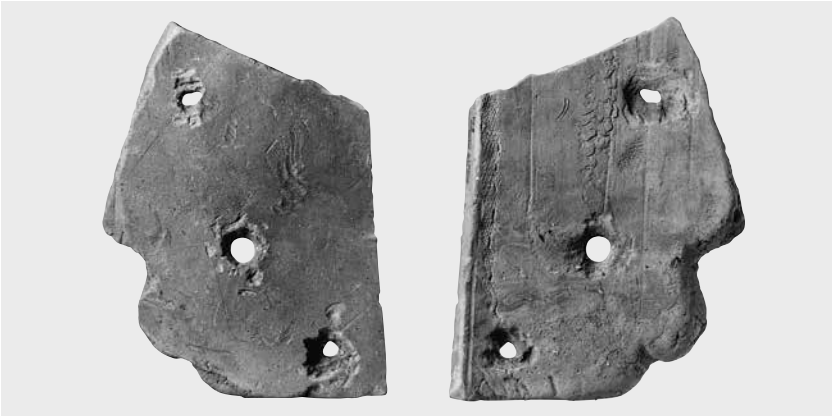
4.　軒平瓦Ⅲ型式。右端の破片。



5.　一枚作り軒平瓦凸面。

6.　面戸瓦。丸瓦１類を素材とする。

7.　鬼瓦。裏面ヘラケズリ調整。



8.　用途不明平瓦。穴は焼成後にあける。

9.　磚。

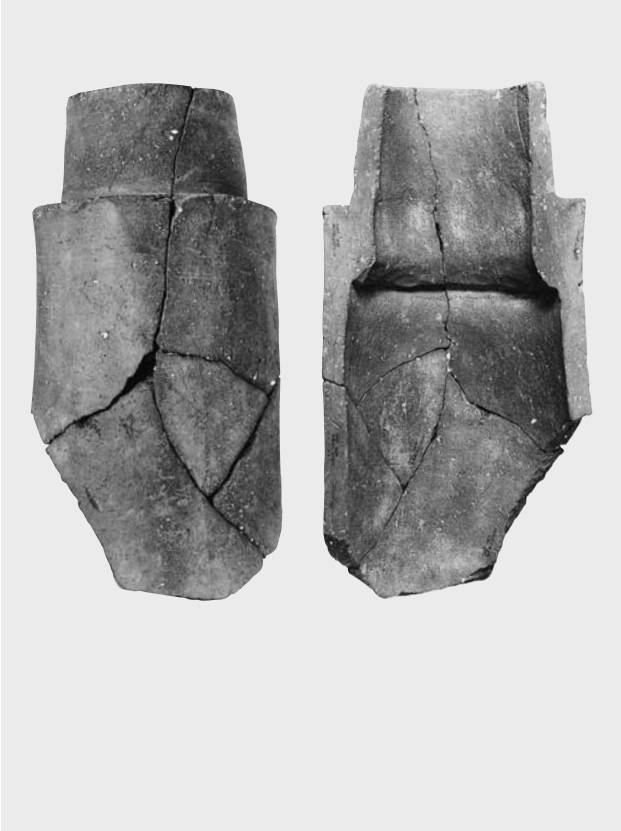
10.　木之本廃寺出土面戸瓦を用いた丸・平瓦の組合せ。

11.　山田寺回廊所用の面戸瓦と丸・平瓦の組合せ。

１：３（1～4・9）　１：４（6～8）

PL. 40　丸　瓦（1）

1.　丸瓦１類Ａ。伽藍規模を物語る大型の丸瓦。唯一の完形品。



2.　丸瓦１類Ａ。段部から玉縁先までが長い。

3.　丸瓦１類Ａ。玉縁部完存資料。粘土板合わせ目S型あり。

4.　丸瓦１類Ａ。玉縁部の調整がやや粗い。

5.　丸瓦１類Ａ。段部剥離。布綴じあり。

6.　丸瓦１類Ｂ。粘土板合わせ目S型と布綴じ合わせ目あり。

1：6

1.　丸瓦１類Ｂ。玉縁部凹面に布じわ。

2.　丸瓦２類Ｂ。凸面に縄叩き目。凹面に粘土紐継ぎ目。

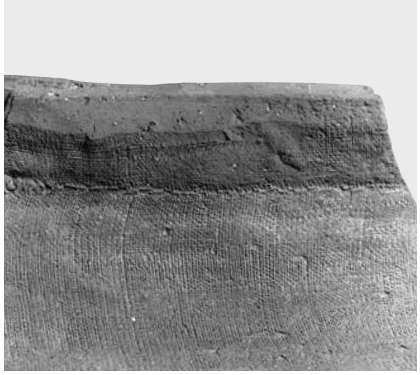
3.　丸瓦１類Ａ。分割界線。

4.　丸瓦１類Ａ。分割截線。

5.　丸瓦１類Ａ。粘土板合わせ目S型。

6.　丸瓦１類Ａ。布綴じと襞縫い。

7.　丸瓦１類。まつり縫いの布綴じ痕跡。



8.　丸瓦１類。ぐし縫いの布綴じ痕跡。

9.　丸瓦１類。凹面の当て具痕跡。

10.　丸瓦１類に付着した須恵器杯Ｇ。

11.　丸瓦２類Ａ。布綴じと凸型台痕跡。

12.　丸瓦２類Ｂ。玉縁部布袋つぎはぎ。

13.　丸瓦２類Ｃ。凸面の縄叩き目。

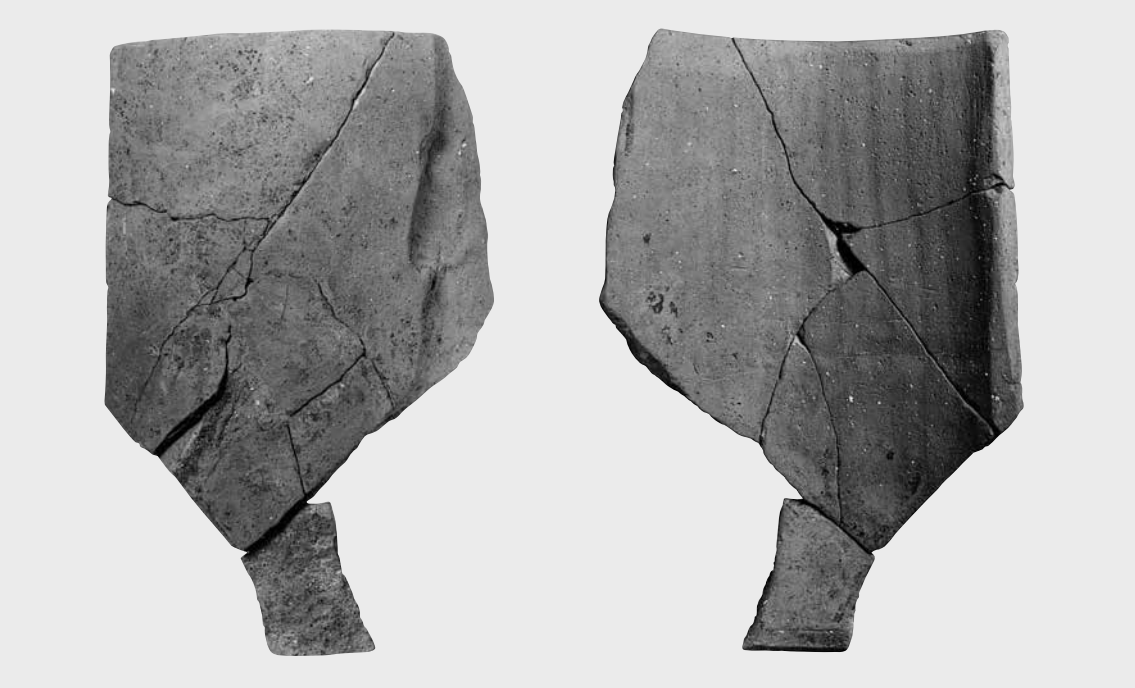
14.　丸瓦３類。布綴じ痕跡。

1：6（1・2）

PL. 42　平　瓦（1）

1.　平瓦１類。凸面タテナデ調整ののち無文叩き。凹面もタテナデ。中央とそのやや下に横方向のくぼみあり。

2.　平瓦１類。凹凸面ともタテ方向の調整。



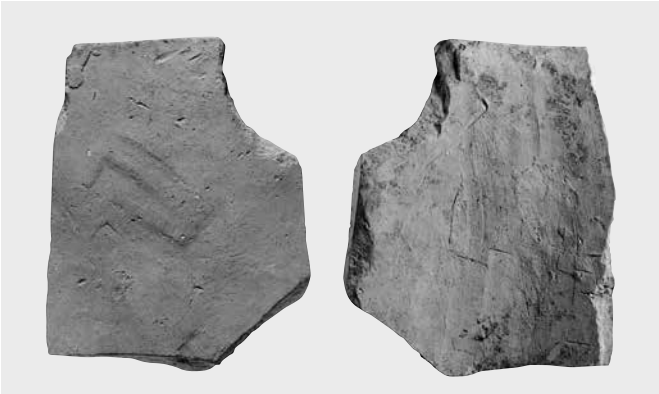
3.　平瓦１類。凸面に粘土板合わせ目Ｚ型剥離面。凹面はタテ方向にヘラナデ調整。中央に横方向のくぼみ。

１：６

1.　平瓦１類。全長のわかる資料。摩滅著しい。

2.　平瓦１類狭端。側面の面取りが幅広。

3.　平瓦１類狭端。凸面に補足叩き。凹面に布圧痕。



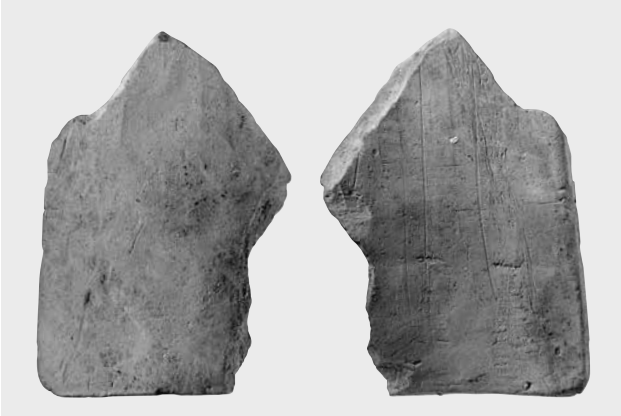
4.　平瓦１類狭端。凸面に補足叩き。

5.　平瓦１類狭端。凸面ヘラナデ、凹面ヘラケズリ調整。

6.　平瓦１類狭端。凸面ヘラナデ調整。

7.　平瓦１類広端。凹面右端に粘土板合わせ目S型。

8.　平瓦１類広端。凸面に補足叩き明瞭。側面調整ｂ手法。



9.　平瓦１類広端。凹面のくぼみにまつり縫いの痕跡あり。

PL. 44　平　瓦（3）

1.　平瓦１類狭端。補足叩き。

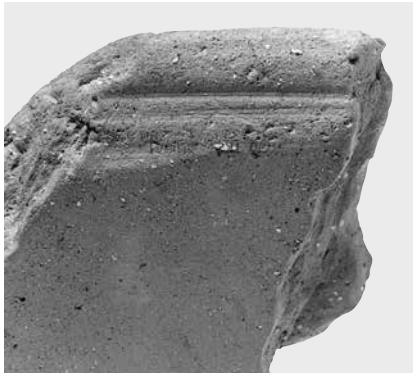
2.　平瓦１類広端。補足叩き。

3.　平瓦１類凸面のヘラケズリ調整。

4.　平瓦１類凹面のヘラケズリ調整。

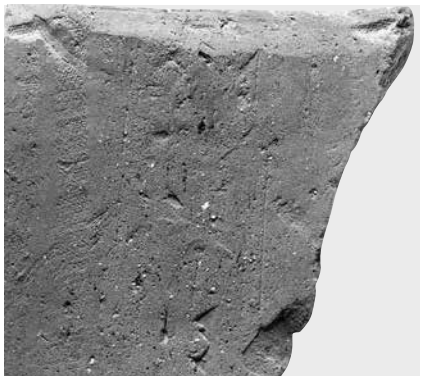
5.　平瓦１類凹面のヘラナデ調整。

6.　平瓦１類凹面のハケメ調整。



7.　平瓦１類。狭端が丸い例。

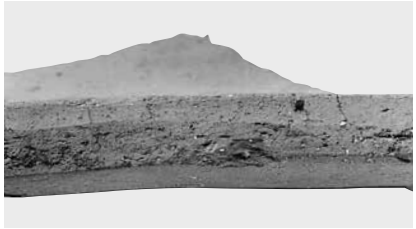
8.　凹面くぼみにまつり縫いの痕跡。



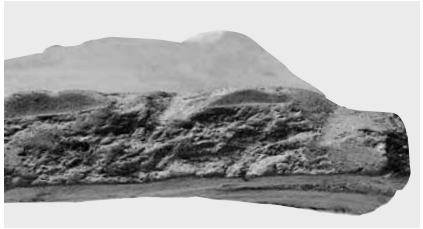
9.　粘土板合わせ目S型の例。

10.　分割界線。

11.　分割截線の入れ損ね。



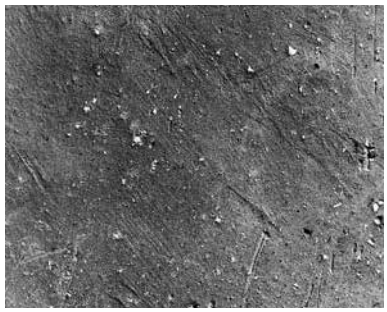
12.　側面調整ｂ手法。



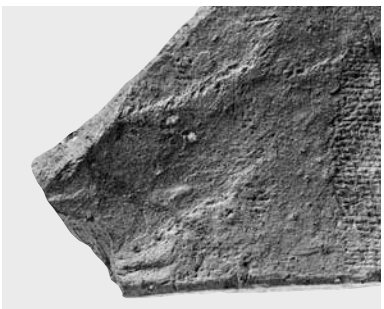
13.　分割截面と分割破面。

14.　変形したり溶着した平瓦１類の破片。

1.　平瓦２類Ａ。凹凸面ともタテヘラケズリ調整。



3.　1の細部。凸面調整後に叩きを加える。



4.　凹面にある当て具の痕跡。

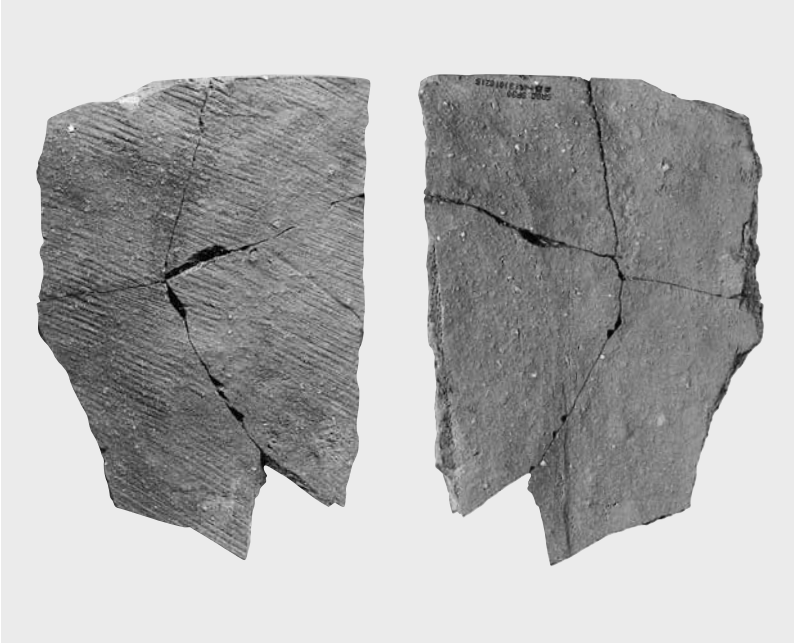
2.　平瓦２類Ａ。凸面ヘラケズリ、凹面ヘラナデ調整。広端部にヨコナデ調整あり。

5.　粘土板合わせ目S型。

6.　側面の分割截面と分割破面。

7.　平瓦２類Ｂ。凹面ナデ調整。

8.　平瓦２類Ｂ。叩き目が重複する。



9.　平瓦２類Ｂ。凸面に平行叩き目、凹面は丁寧に調整する。

1：6（1・2）　2：5（7～9）

PL. 46　平　瓦（5）

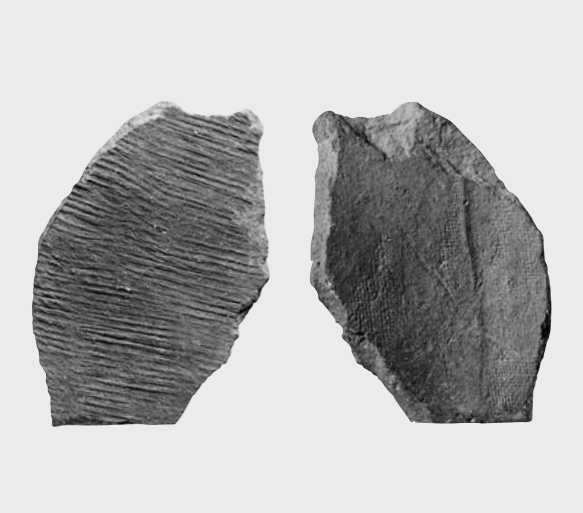
1.　平瓦２類Ｂ。凸面叩きが重複。

2.　平瓦２類Ｂ。ごく細い平行叩き目。

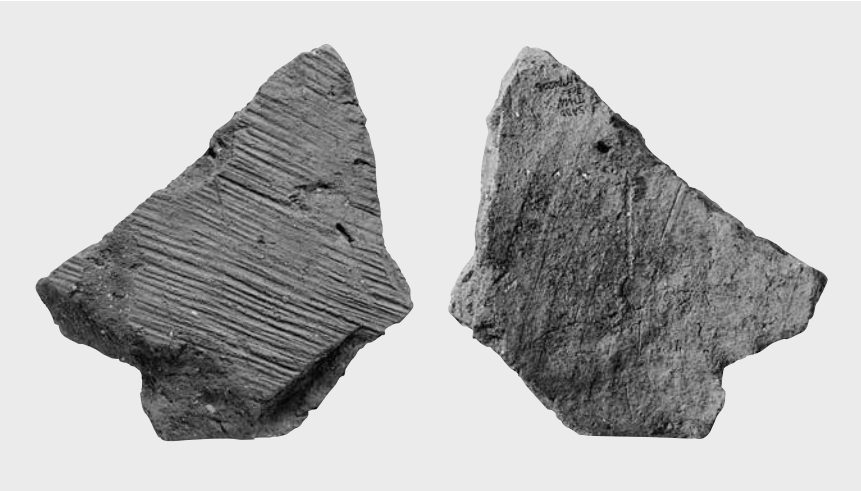
3.　平瓦２類Ｂ広端部。

4.　平瓦２類Ｂ広端部。

5.　平瓦２類Ｂ。叩き板の縁は湾曲する。凹面に当て具痕跡。



6.　平瓦２類Ｂ。凹面に布圧痕あり。



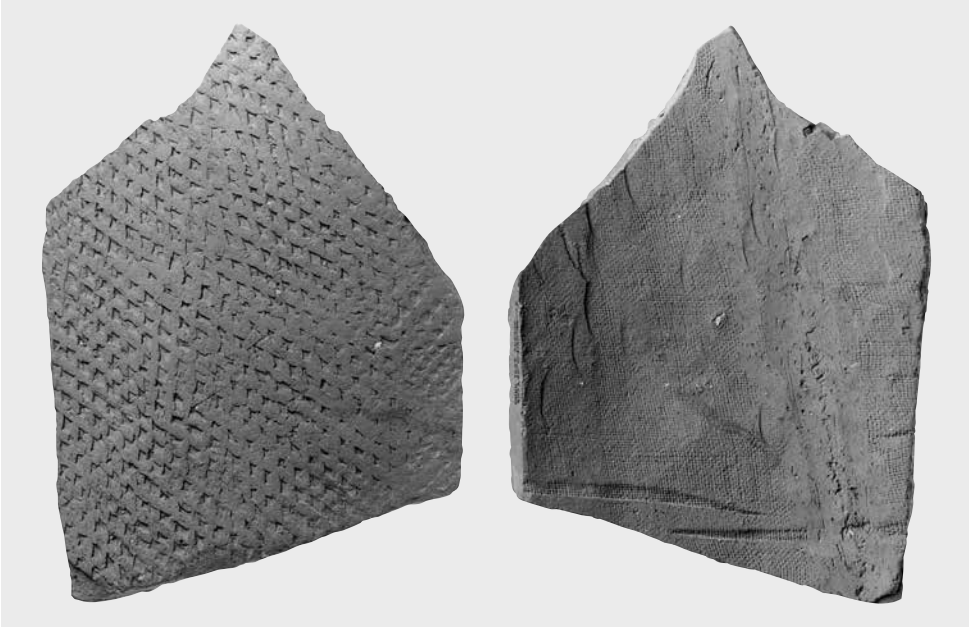
7.　平瓦２類Ｂ広端部。不揃いな平行叩き目。

8.　平瓦２類Ｂ広端部。

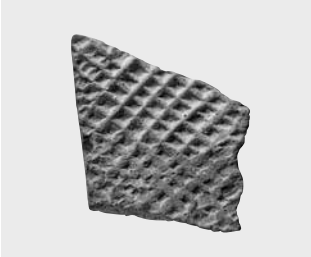
2：5

1.　平瓦２類Ｃ。叩き板イの叩き目。右端に叩き板トが重複。凹面調整せず。

2.　叩き板ホとへが重複。



3.　平瓦２類Ｃ。叩き板ホとイ（右端）が重複。凹面に当て具痕跡。



4.　叩き板ハ。

5.　叩き板ニ。

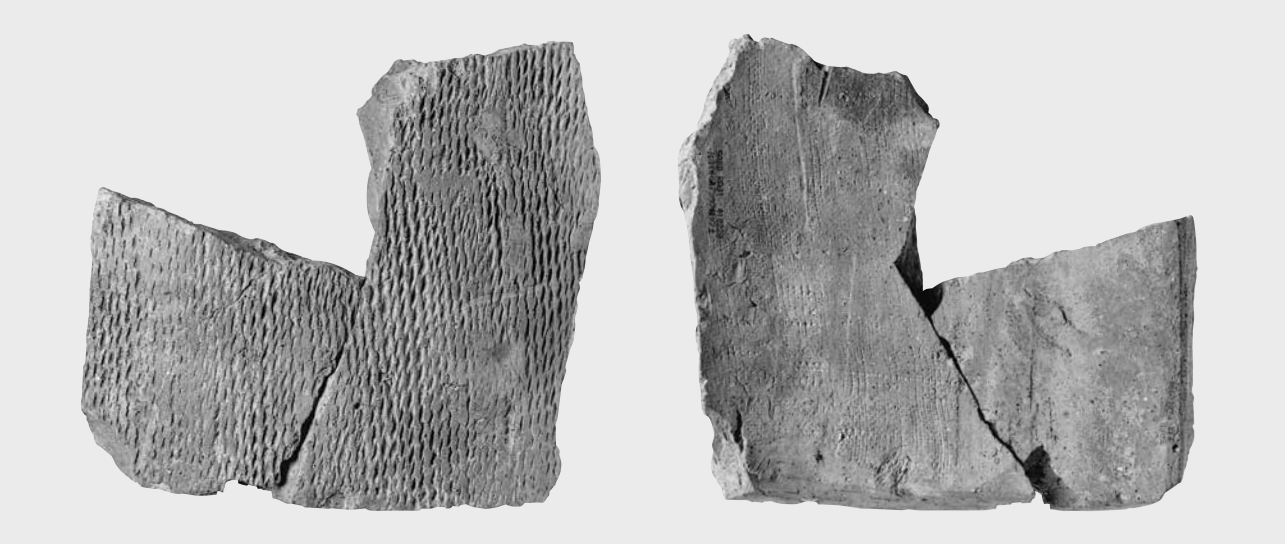
6.　平瓦２類Ｃ。叩き板ホ。凹面にぐし縫いの綴じ合わせ目。布袋は広端に届かず。

7.　叩き板ロ。

8.　平瓦２類Ｃ。叩き板ト。凹面にまつり縫いの綴じ合わせ目。

9.　叩き板へ。

PL. 48　平　瓦（7）



1.　平瓦３類Ａ。凸面の縄叩き目は潰れ気味。凹面の布圧痕も内叩きで潰れる部分あり。

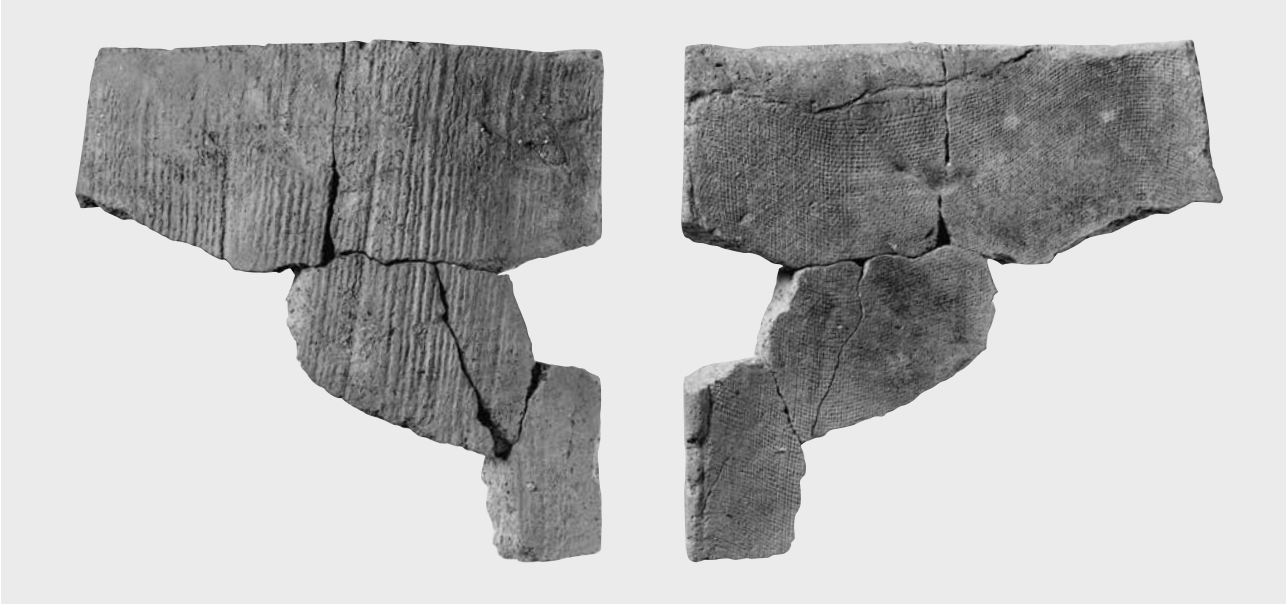
2.　平瓦３類Ａ。縄の条が細い例。凹面には模骨痕が明瞭。

3.　平瓦３類Ａ。凸面ヨコナデ調整。凹面に粘土板合わせ目Z型。

4.　平瓦３類Ｂ。布綴じ合わせ目。

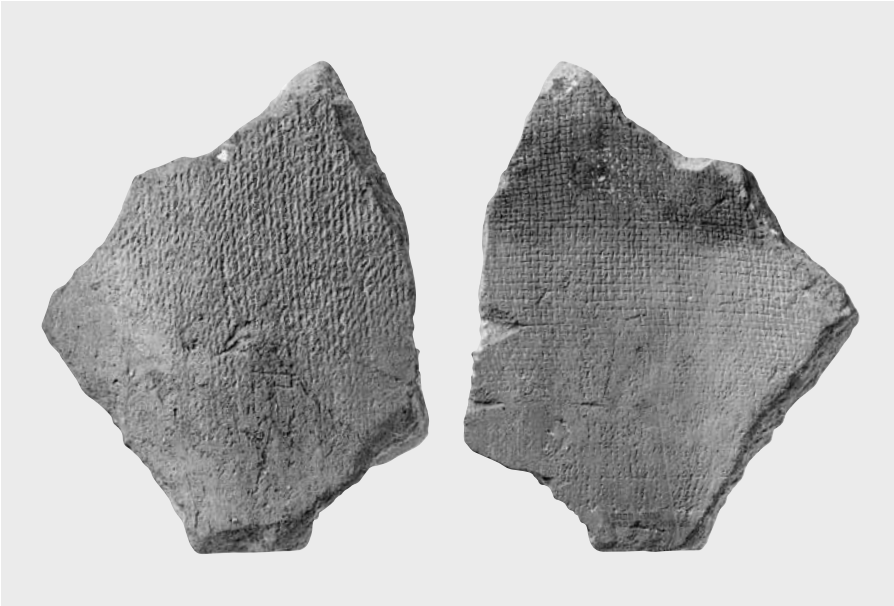
5.　平瓦３類Ｂ。凸面タテ縄叩き目。凹面は模骨痕と粘土紐の継ぎ目が明瞭。

２：５（1～3・5）

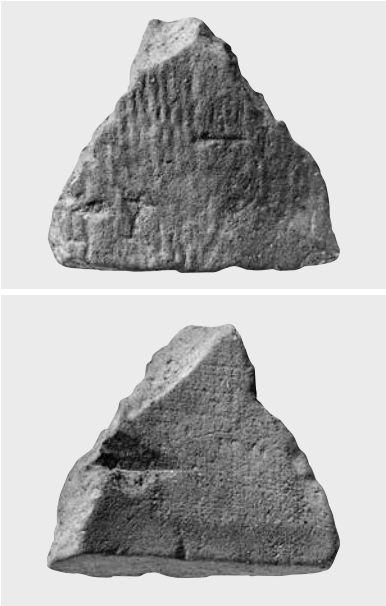


1.　平瓦４類Ａ。凸面の縄叩き目、縄の縒りが不明瞭な例。凹面狭端と側辺に布端の圧痕。

2.　平瓦４類Ａ。凸面の縄叩き目がやや粗い例。凹面に内叩きの痕跡。



3.　平瓦４類 Ａ。凸面の縄叩き目が細い例。



4.　平瓦４類Ｂ。粗い縄叩き目。

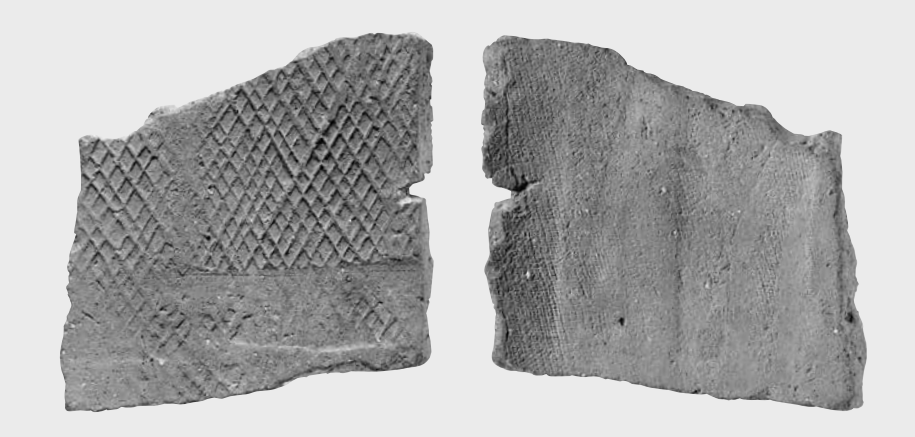
5.　平瓦４類Ｂ。凸面にハナレ砂。

6.　平瓦４類Ｂ。縄叩き目、布圧痕とも粗い。

1：3（1）　2：5（2～6）

PL. 50　平　瓦（9）

1.　平瓦５類狭端部。菱形状の斜格子叩き目。凹面調整なし。

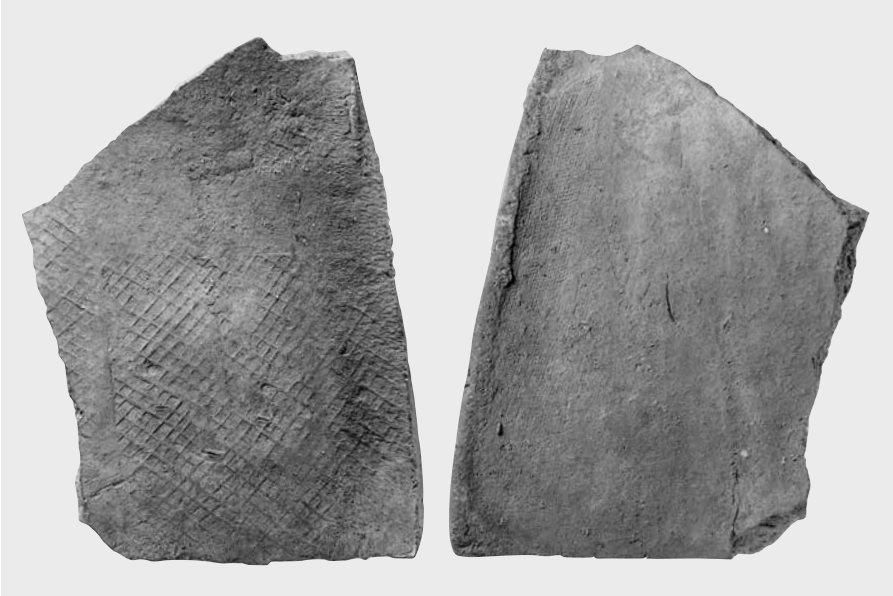


2.　平瓦５類。１と同じ叩き目。凹面に模骨状の段差がある。

3.　平行四辺形の叩き目。

4.　平瓦５類。３と同じ叩き目。叩き目は上下に重複しない。凹面に模骨状の段差。一部ナデ調整。

5.　凹型台を使用し、叩き目潰れる。



6.　平瓦５類。３と同じ叩き目。叩き板はタテに長い。凹面の大半をナデ調整する。

2：5

35

34

24

40

38

41

47

48

42

49

PL. 52　土　器（2）

7

8

50

51

56

10

19

67

67

3

79

81

86

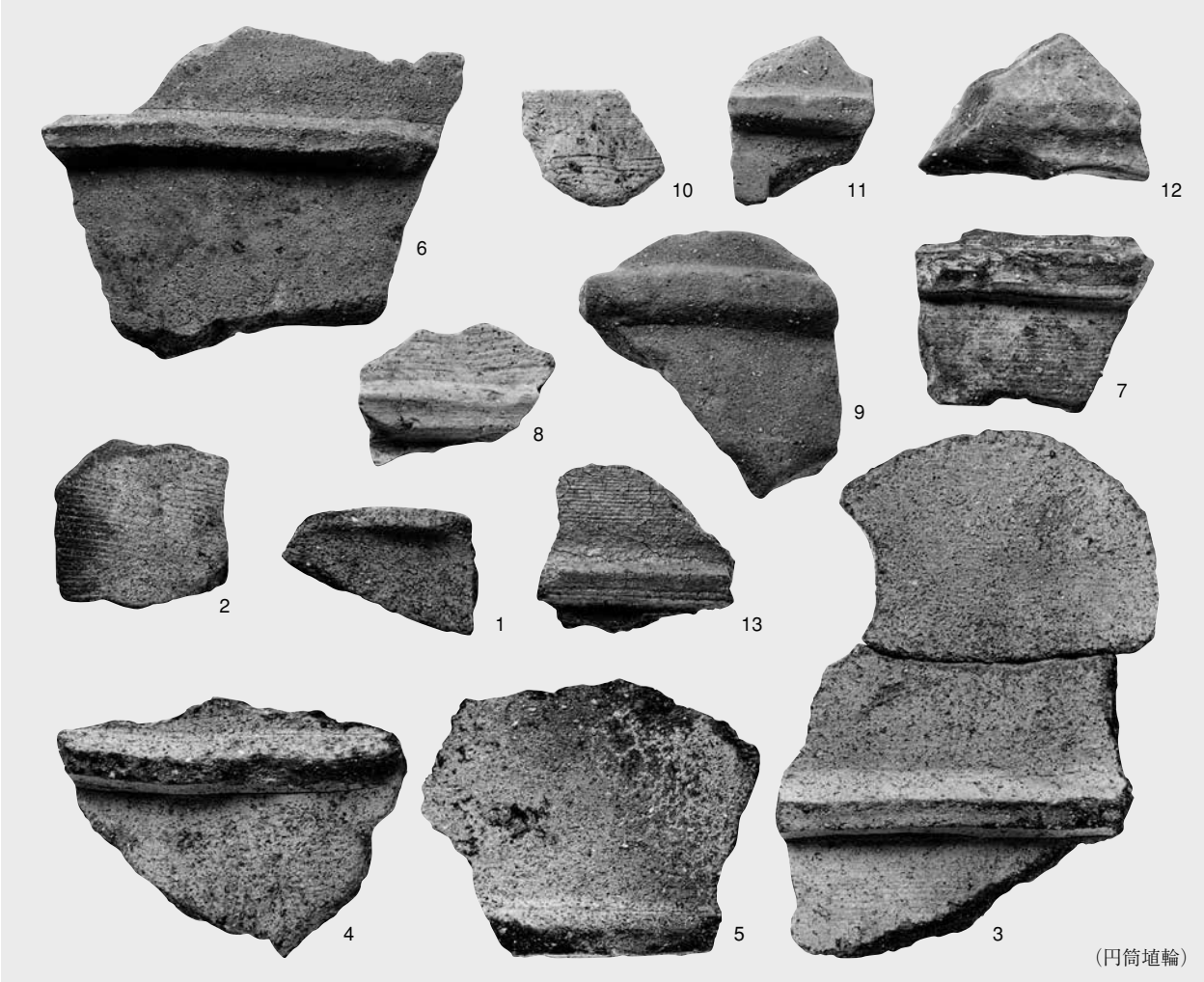
114

1（家形・妻側）

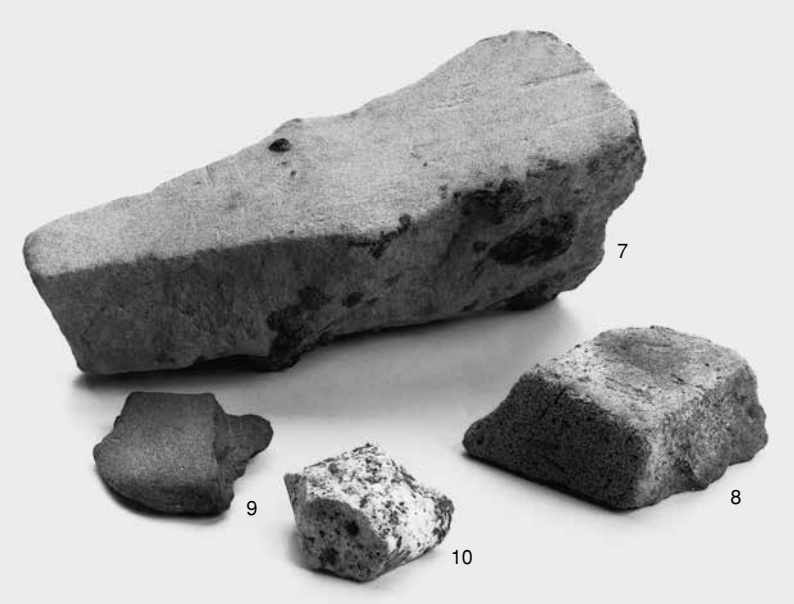
1（家形）

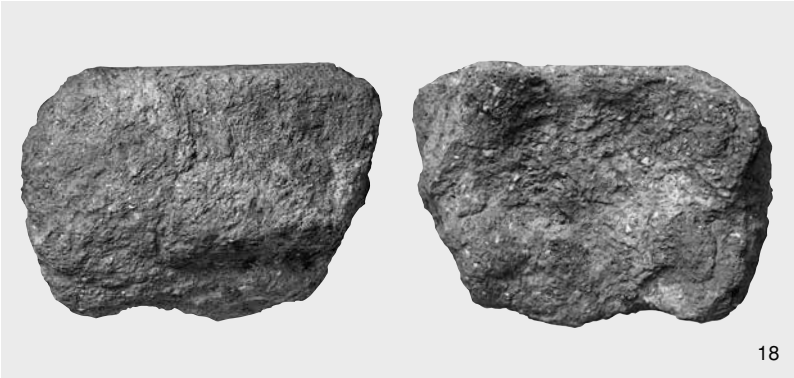
2（家形）

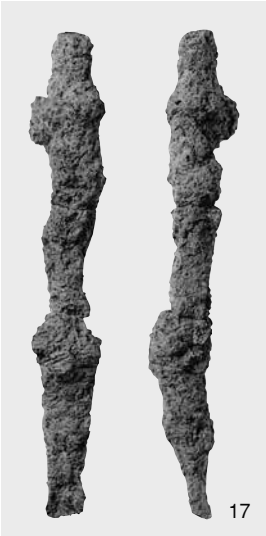
3（蓋形）

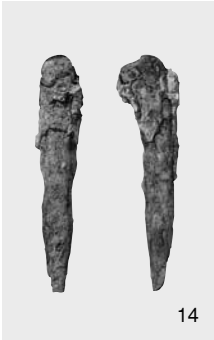


（円筒埴輪）





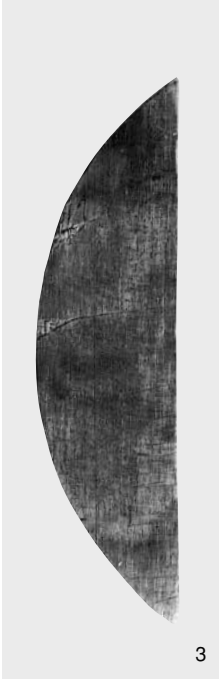




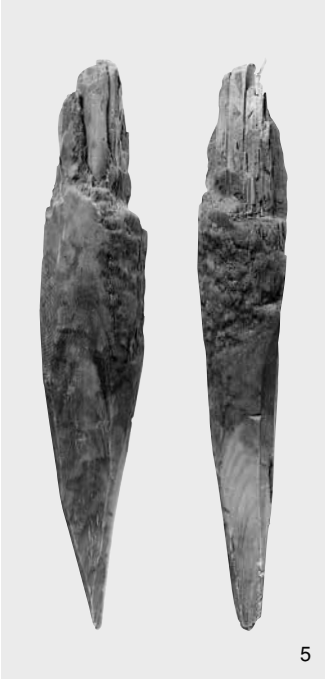
1：1（1～4・11～13・15・20）　2：3（5～10・16）　1：2（14・17～19）

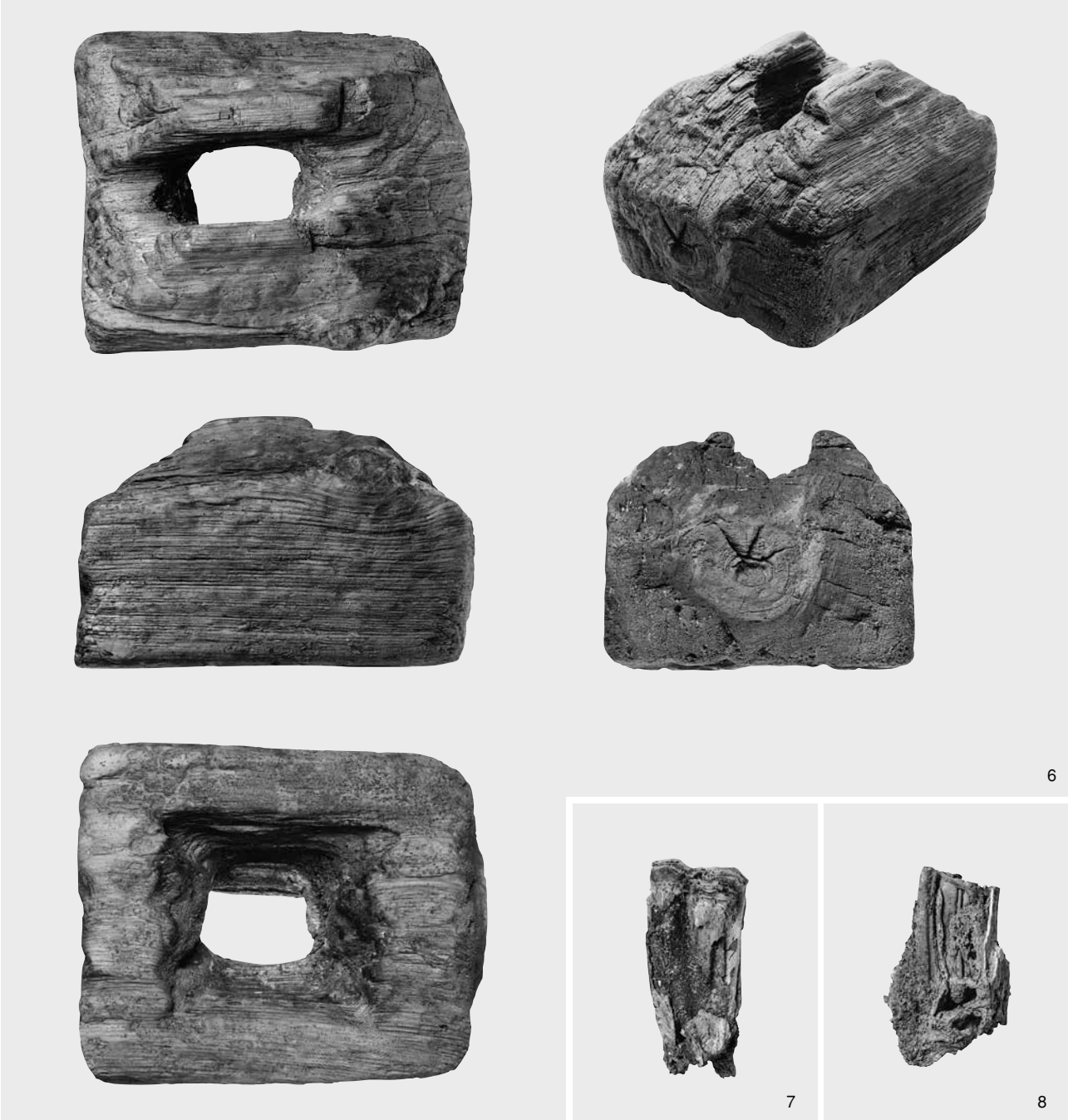
1

2


3

4


5


6

7

8

1：2（1～4）　1：3（5・6）　2：3（7・8）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きびいけはいじはっくつちょうさほうこく
書　　名	吉備池廃寺発掘調査報告
副 書 名	百済大寺跡の調査
巻　　次	
シリーズ名	奈良文化財研究所学報
シリーズ番号	第68冊
編 著 者 名	小澤 毅・箱崎和久・花谷 浩・橋本輝彦・石橋茂登・小池伸彦・西川雄大・前岡孝彰
編 集 機 関	独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
所　在　地	〒630-8577　奈良県奈良市二条町２－９－１　TEL 0742-34-3931
発行年月日	2003年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉備池廃寺（きびいけはいじ）	奈良（なら）県 桜井（さくらい）市 吉備（きび）	292061	14-B-232	34°30′05″ （日本測地系） 34°30′17″ （世界測地系）	135°50′12″ （日本測地系） 135°50′02″ （世界測地系）	1997.1.8 ～ 2001.7.24	3877㎡	学術調査と範囲確認調査ならびに住宅建設にともなう事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉備池廃寺	寺　院	飛鳥時代	金堂，塔，中門，回廊 僧房，掘立柱建物・塀 藤原京の道路側溝など	軒瓦，道具瓦，丸瓦 平瓦，土師器，須恵器 土馬，製塩土器，埴輪 ナイフ形石器，石製品 金属製品，木製品など	金堂と塔を東西に並べた伽藍配置としては最古の例。金堂と塔の基壇規模は同時代では突出しており、639年創建の百済大寺と推定される。

2003年3月20日　印刷
2003年3月28日　発行

吉備池廃寺発掘調査報告

―百済大寺跡の調査―

奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

著作権所有
発　行　者　奈良市二条町2丁目9番1号
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所

印　刷　者　奈良県高市郡高取町車木215
岡村印刷工業株式会社

ISBN 4-902010-06-2